

独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 27 号 (通巻 60 号)

平成 25 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry
—— 2014 ——



「国立精神・神経医療研究センター—精神保健研究所 平成26年3月10日」

巻頭言

平成 25 年度精神保健研究所年報を謹んでここにお届け申し上げます。

読者の皆様におかれましては、昭和 27 年 1 月に設立され還暦を過ぎてもなお意気軒昂な精神保健研究所に、本年報を通じて、触れていただければ幸甚でございます。そして、さらには、精神保健研究所の共同研究のよきパートナーとして、助言者として、引き続き協働していただきますよう、心よりお願い申し上げます。御笑覧いただければ幸いに存じます。

平成 25 年度は、国立精神・神経医療研究センター(以下「NCNP」)として平成 22 年 4 月に独立行政法人化して以来 4 年度目であり、独法移行後の成果が試される年でもありました。そのため、NCNP のブランディング化が喫緊の課題であり、樋口総長のリーダーシップのもと、優れた研究成果の見える化を強力にすすめてまいりました。25 年度は英語版ホームページの充実、「NCNP ANNUAL REPORT」の創刊、市民公開講座の一層の充実、国内外との交流の促進などをすすめてまいりました。そのようななか、独立行政法人評価において、NCNP は精神保健研究所の優れた情報発信力が高く評価され、情報発信面で「S」評価を勝ち取ることができました。ここに謹んでご報告申し上げます。

精神保健研究所としては、25 年度は国際研究協力元年と位置付けて、積極的に内外との交流をいたしました。MOU (覚書) を結ぶメルボルン大学とのシンポジウム開催に始まり、韓国ソウル大学ソウル国立病院、シンガポール国立精神保健研究所、マックス・プランク精神医学研究所、全米トップとされるマクレーン病院などとの関係の一層の強化をはかるとともに、国際機関との共同研究といたしましては、WHO (世界保健機関)本部のサクシナ精神保健・薬物依存部長を精神保健研究所にお招きし、講演や各部との個別意見交換をいたしました。さらには、WHO と共催で世界の自殺対策策定のための専門家会議を東京において開催いたしました。加えて、日本の精神医療政策を語る上で重要な課題である、精神医療の質評価について、OECD (経済協力開発機構) のプロジェクトに協力し、OECD の担当者 4 名にも小平キャンパスにおいでいただきました。

自らを客観視し、政策に寄与する優れた研究を進めるうえでも、精神保健医療研究の拠点として、多施設共同研究、モデル医療構築研究、コホート研究、疫学等の現状解析評価研究を引き続き強化することはもとより、研究所の活動の一層のグローバル化と国際的な認知を高めてまいりたいと考えております。

読者の皆様におかれましては、倍旧の御指導・御鞭撻を賜りますよう重ねてお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成 26 年 3 月吉日

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
所 長 福田 祐典

目 次

I. 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	7
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	9
4. 職員配置	10
5. 精神保健研究所構成員	11
II. 研究活動状況	14
1. 精神保健研究所所長室	14
2. 精神保健計画研究部	16
3. 薬物依存研究部	33
4. 心身医学研究部	57
5. 児童・思春期精神保健研究部	66
6. 成人精神保健研究部	78
7. 精神薬理研究部	96
8. 社会精神保健研究部	106
9. 精神生理研究部	114
10.知的障害研究部	134
11.社会復帰研究部	143
12.司法精神医学研究部	158
13.自殺予防総合対策センター	173
14.災害時こころの情報支援センター	199
III. 研修実績	210
IV. 平成 25 年度精神保健研究所研究報告会抄録	233
V. 平成 25 年度委託および受託研究課題	257

I 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の附属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭

和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部(国府台地区)に研究所の事務部門(主幹、研究所事務係)が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制(精神保健研修室を含む)となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平(武蔵)地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室(精神保健研修室含)となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患，神経疾患，筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり，精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは，自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は，精神保健計画研究部へ名称変更され，統計解析研究室，システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は，ストレス研究室，心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され，精神発達研究室，児童期精神保健研究室，思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は，成人精神保健研究部へ名称変更され，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，犯罪被害者等支援研究室，災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は，精神薬理研究部へ名称変更され，精神薬理研究室，気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は，社会精神保健研究部へ名称変更され，社会福祉研究室，社会文化研究室，家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は，精神生理研究部へ名称変更され，精神生理機能研究室，臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は，知的障害研究部へ名称変更され，診断研究室，治療研究室，発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は，社会復帰研究部へ名称変更され，精神保健相談研究室，援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は，制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室の3室編成。

以上自殺予防総合対策センター及び11部，計33室となった。

また，研究所の事務部門は，主幹が研究所事務室長となり，研究所事務係とともに，研究所の所属となった。

平成23年4月，事務部門の組織変更が行われ，研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により，情報支援研究室の1室が認められた。

以上自殺予防総合対策センター，災害時こころの情報支援センター及び11部，計34室となった。

平成24年1月，千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから，創立60周年を迎え，記念祝賀会を開催し，創立60周年記念誌を発行した。

沿革

事項 年次	所長	組織等経過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過(精神衛生研究所設置の附帯決議採択)
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 (国立国府台 病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に、社会学部を社会精神衛生部に、生理学形態学部を精神身体病理部に、優生学部を優生部に名称変更し、精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室、心理研究室、精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され、医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成(5カ年計画)
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設
49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設

I 精神保健研究所の概要

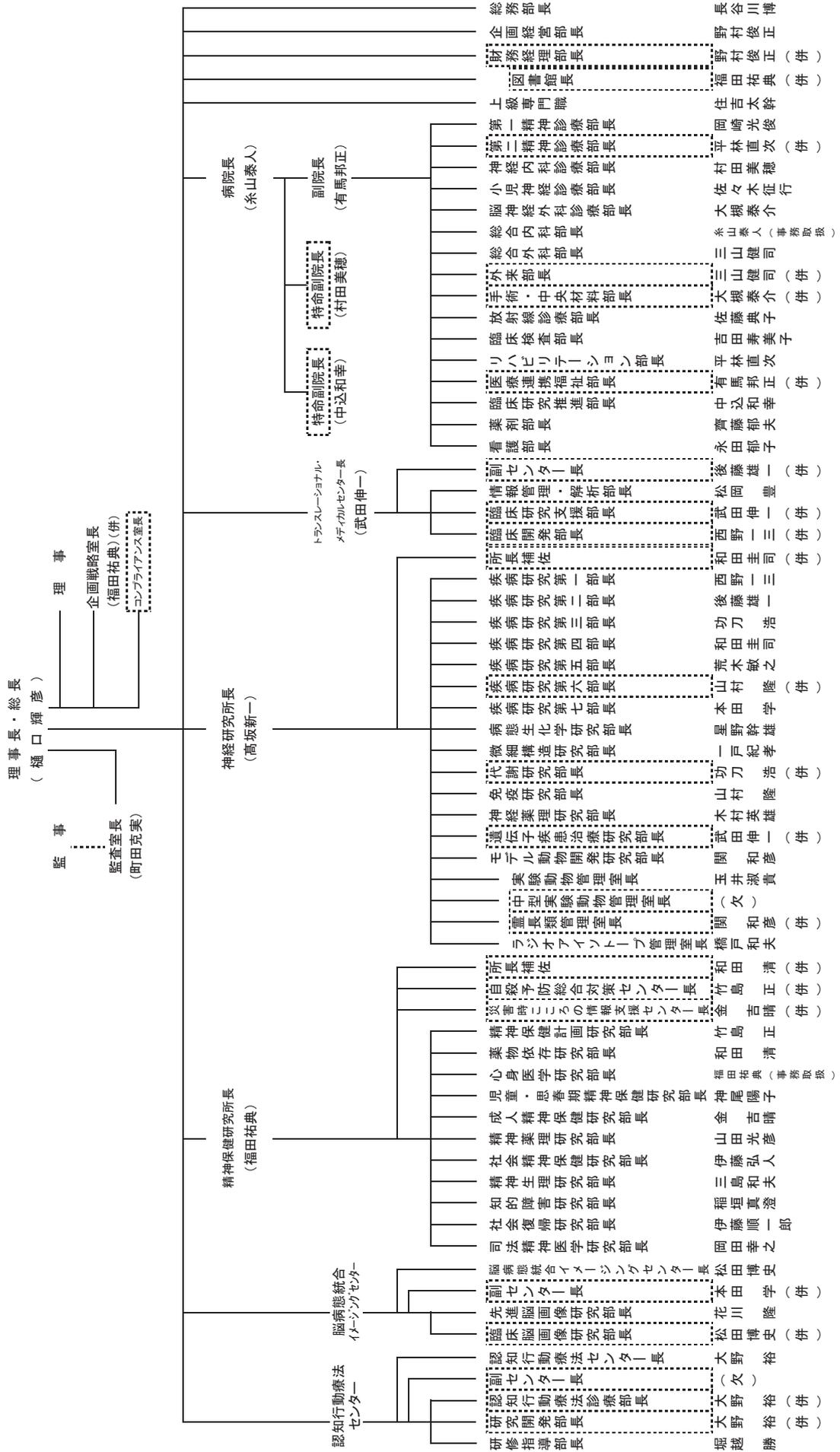
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成(2カ年計画)
54年4月		研修課程の名称を医学課程, 心理学課程, 社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し, 精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成(講義室・図書室・研修生宿舎)
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により, 国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により, 国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして, 国立武蔵療養所, 同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し, 国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組, 精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか, 精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設, 1課9部19室となる
62年4月	島菌 安雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により, 国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し, 2病院, 2研究所となる 庶務課廃止, 研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部(ストレス研究室, 心身症研究室)と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり, 心理社会研究室と依存性薬物研究室となり, 診断治療開発研究室を新設 精神薄弱部を知的障害部に名称変更

13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務 取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設(制度運用研究室, 専門医療・社会復帰研究室, 精神鑑定研究室)
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務 取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市(国府台)から小平市(武蔵地区)に移転
17年8月	北井 曉子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設(自殺実態分析室, 適応障害研究室, 自殺予防対策支援研究室), 成人精神保健部の増設(犯罪被害者等支援研究室, 災害時等支援研究室)
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更(精神保健計画研究部, 児童・思春期精神保健研究部, 成人精神保健研究部, 精神薬理研究部, 社会精神保健研究部, 精神生理研究部, 知的障害研究部, 社会復帰研究部)し, 知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設, 11部33室(室長定数29)となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設(情報支援研究室)
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	

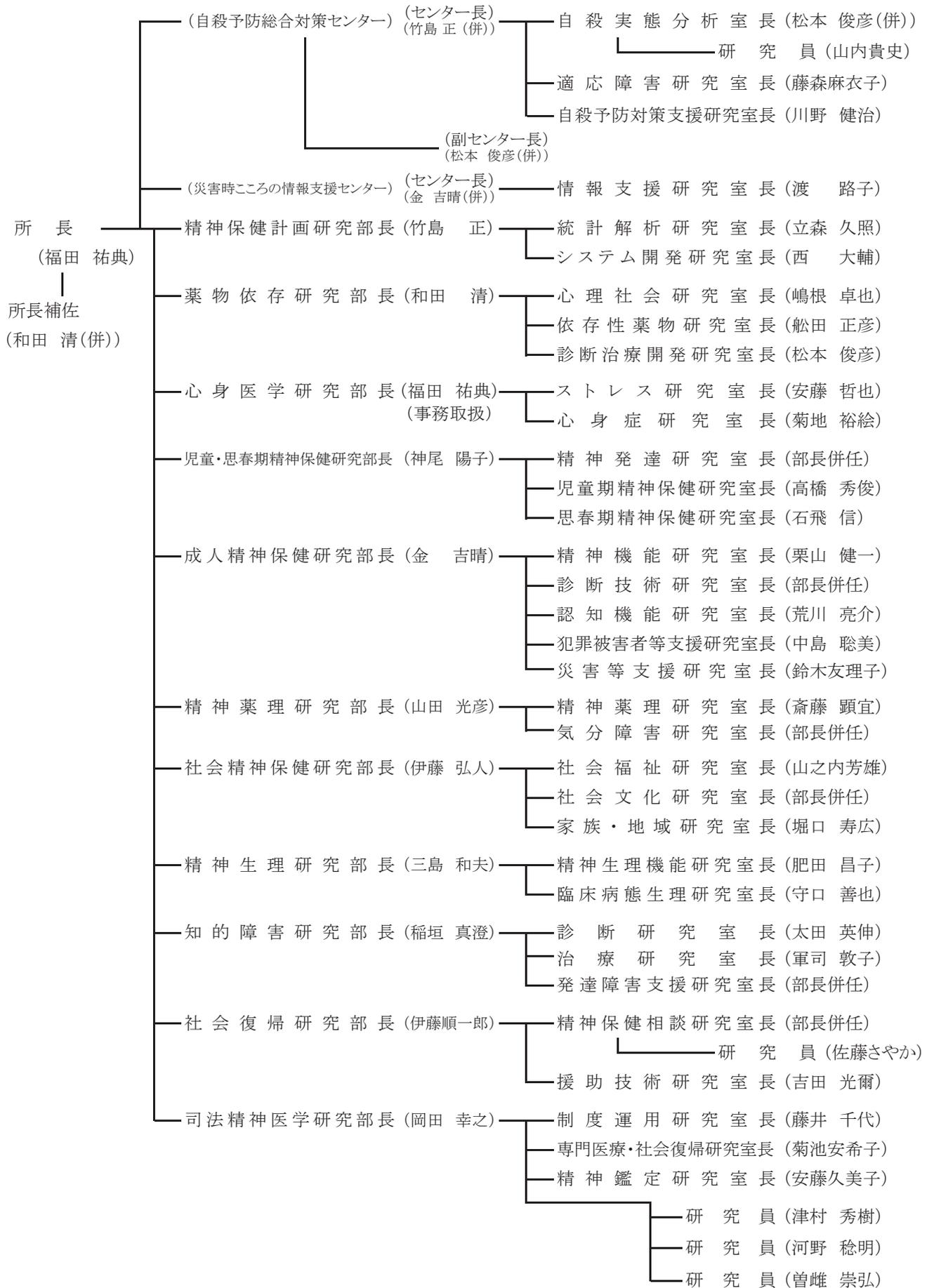
3. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター組織図

(平成26年3月31日現在)

は併任



4. 職員配置 (平成26年3月31日現在)



5. 精神保健研究所構成員(平成25年度)

研究室														
新田 広 (～25.7.11)														
福田 祐典 (25.7.11～)														
笹書室														
笹 和紀														
部名	部長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科研究員	○臨床研究補助員 科研究補助員	○心身研究補助員 心身研究補助員	セブ研究補助員	協力研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究員 ○実習生
自殺予防総合対策センター	松本 敏彦(併) 川野 健治 藤森 麻衣子	山内 真史 (25.6.1～)		大槻 露華 山内 貴史 (～25.5.31) 白神 敬介 小高 真美	小見 めぐみ 大滝 涼子 大沼 麻美	○藤根 由美子 ○菊池 美名子 (25.5.1～) 野添 健太 (25.7.1～)	滝澤 さなえ 望月 園江 (25.5.1～)	中神 里江 (26.1.1～)	龜山 晶子		稲垣 正俊 勝又 陽太郎 岡 檀 廣川 聖子 (26.1.14～)	吉田 航 (25.5.1～)	増田 久重 長島 弥生	高木 幸子 安藤 俊太郎 井上 佳祐 Kulova Nuzgul (25.6.24～) 久永 彩香 (25.9.24～) 岩上 真歩子 (25.9.24～)
夜勤時こころの情報支援センター	渡 啓子 堀川 亮介(併)												緒方 若菜 (～25.9.24) 小菅 清香 根津 安美 (～26.1.31) 石田 牧子 本島 利江 (25.12.1～) 中村 裕美 (25.10.1～)	相馬 和加奈 小菅 清香 根津 安美 (～26.1.31) 石田 牧子 本島 利江 (25.12.1～) 中村 裕美 (25.10.1～)
精神保健計画研究部	立森 久照 西 大輔		白田 謙太郎 後藤 基行 下田 陽樹		赤澤 正人 (～25.5.31)	○西口 直樹 鴨志田 由美子 (25.6.1～)	榑 聡子 吉田 勺美					趙 香花	原 治子	大額 真嗣 的場 由木 森川 すいめい 小野 さや香 楠本 英子 加藤 直広 (25.6.24～)
薬物依存研究部	松田 正彦 松本 俊彦 嶋根 卓也		水野 葉津美 (～25.6.24) 内海 修 (25.7.1～) 邱 冬梅 (25.7.1～)			庄司 淑子 福田 百合子	中野 真紀 小島 恵子 香藤 美穂子		今村 扶美					青尾 直也 高野 歩 池田 用広 引士 絵未 富山 健一
心身医学研究部	安藤 哲也 菊池 裕絵		上野 真弓 大江 悠樹			倉 五月 森 由美子	上村 利恵 (～25.6.30) 神谷 裕子 吉武 美喜 坂本 克子 (25.7.3～)		有賀 元 天野 智文					高橋 晶 金子 賢顕 兼子 唯 奥山 唯菜 倉 五月
児童・思春期精神保健研究部	高橋 秀俊 石飛 信 (25.11.1～)		飯田 悠佳子 小松 佐穂子		中鉢 貴行 遠藤 明代 (～25.6.14) 岡島 純子	増戸 あかね (25.9.1～) 中矢 裕子 (26.1.1～) 鈴木 利佳 (26.3.1～)	加藤 有香子 (25.8.19～9.30) 鈴木 利佳 (25.8.20～26.2.28) 中矢 裕子 (25.11.1～12.31)	小町 恵子 (～25.8.31)						武井 麗子 高橋 英之 平本 絵里子 片桐 正敏 柳原 信子 萩野 和雄 井口 英子 篤森 英史 水島 栄 名雪 圭祐 西海枝 洋子 佐藤 裕 山根 直人 貫井 祐子 森脇 愛子

部名	部長	室長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科研究員	○特別客員研究員 ○特別客員助手	○特別客員研究員 ○特別客員助手	協力研究員	兼任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究生 ○実習生
児童・思春期精神保健 研究部											遠美 義美 (25.12.15～) 箱田 裕司 (25.1.1～)			望月 由紀子 櫻井 由香 (25.5.1～) 神長 伸幸 (25.10.1～) 柴田 奈津美 (25.10.1～) 近藤 綾子 (25.10.1～) 金 龍藤 (25.12.1～) 市川 寛子 (26.1.1～) 佐藤 真由美 (26.1.1～) ○河野 靖世 (25.7.16～)
成人精神保健研究部	金 吉晴	中島 聡美 鈴木 友理子 栗山 健一 荒川 亮介	池田 大樹 伊藤 真利子 林 明明	田附 さより (～25.7.31) 野添 健太 (～25.6.30)	水野 恵子 東 祐子	石丸 隆一郎 井筒 節 白井 明美 堤 敦朗 寺島 暉 成澤 知美 (～25.8.31) 西多 昌樹 正木 智子 松岡 恵子 吉池 卓也	豊	宇野 正威 小西 登志子 加茂 光恵 宮地 伸一 鈴木 徳行 北山 徳行	本間 元康	奥村 和香子 前宮 (～25.9.30)	伊東 史之 伊藤 まよか 浅野 敬子 松田 陽子 中谷 優 相澤 秀子 山下 更良 上田 鼓 河瀬 さやか 中山 未知 (25.5.1～) 大塚 佳代 (25.5.27～) 成澤 知美 (25.9.1～) ○橋口 秀一 (25.7.1～2.31)			
精神薬理研究部	山田 光彦	齋藤 顕直	橋本 富男 (～26.1.31) 杉山 梓	山田 真佐 川島 義高 (～25.8.31)	松谷 真由美 村松 浩美 櫻井 恭子 (～25.7.31)	米本 直裕	岡 淳一郎 長田 賢一 亀井 淳三 白川 修一郎 林 直樹 古川 壽亮 神庭 重信 高原 円	川島 義高 (25.9.1～)			西岡 玄太郎 遠藤 香 中井 亜弓 渡辺 恭江 高橋 弘 濱田 幸恵 神垣 有美 大佛 正敏 塚越 麻衣 ○鈴木 聡史 ○山下 萌 (25.10.7～26.2.28)			
社会精神保健研究部	伊藤 弘人	堀口 寿広 山之内 芳雄 (25.8.1～)	佐藤 真希子 大森 由美	池野 敬 田波 由佳 (～25.10.31) 橋本 皇 (25.7.1～)	江頭 織佳 (～25.6.30) 熊谷 珠樹 (～25.6.30) 村田 江里子 (～25.6.30) 堀内 累美子	桑原 和江	山縣 真美子 (～25.9.30) 中村 聖子 長島 悟子 大川 泰江 田澤 望 原 わかな 江頭 織佳 (25.7.1～) 熊谷 珠樹 (25.7.1～) 村田 江里子 (25.7.1～) 橋本 由紀子 (25.10.1～)	米本 直裕		末安 民生 杉山 直也 平田 豊明 八田 耕太郎 川畑 俊貴 野田 寿恵 小川 朝生 木村 真人 村松 公美子 杉浦 伸一 山之内 芳雄 (～25.7.31) 宮地 元彦 (25.7.1～)			三澤 史弥 石井 美緒 安井 博規 大塚 豪士 松村 隆 奥村 泰之 (25.4.19～) 金森 恭子 (25.10.1～) 石黒 陽子 (25.12.1～) 三宅 美智 (26.1.1～)	

I 精神保健研究所の概要

部名	部長	副部長	研究員	流動研究員	非常勤研究員	科研究員	○科研究員補助員 科研究員補助員	○科研究員補助員 科研究員補助員	協力研究員	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	外来事務助手	研究生 ○実習生
社会精神保健研究部														
精神生理研究部	三島 和夫	肥田 昌子 守口 善也	中崎 恭子 Jakub Spaseth (25.7.1~)	大場 健太郎 (~25.10.18) 金山 裕介 北村 真吾 勝沼 るり 綾部 直子	加藤 美恵 大嶋 美奈子	松本 有希子	柴田 兵藏 (25.10.1~) 中司 明美 (25.12.9~)	田村 美由紀 阿部 又一郎 草薙 宏明 梶 達彦 古田 光	亀井 雄一	渡辺 範雄 海老澤 尚 山寺 亘 上田 泰己 遠藤 拓郎 松浦 雅人 井上 雄一 大川 匡子 兼板 佳孝 内山 真 本多 真 池田 正明 程 肇 樋口 重和 熊野 安昭 岩越 美恵 永島 計 石郷岡 純 高橋 一志 阿部 高志 (25.10.1~)	寺澤 悠理 元村 祐貴 ○小野 浩子		村上 裕樹 若田 忠之 中島 俊 岩垂 喜貴 石井 みのり 塚田 恵理子 樋口 大樹 松田 真由美 片寄 泰子 野崎 健太郎 有竹 清夏 山本 舞 川島 一湖 (25.5.1~) 大場 健太郎 (25.11.1~) 新澤 彩子 (26.2.1~)	
知的障害研究部	稀垣 真澄	大田 英伸 軍司 敦子	李 珩 安村 明 白川 由佳	鈴木 浩太 森山 花鈴	○佐久間 隆介 (~25.8.31) ○藤田 亜矢子 (25.10.1~) 須藤 美衣子 溝田 美帆子	○西部 仁美 大橋 啓子 中村 紀子 吉川 朋子		中川 栄二	井上 祐紀 木美谷 哲史 小池 敏英 小枝 達也 後藤 隆章 杉田 克生 竹市 博臣 田中 敦士 中村 俊 中村 みほ 難波 栄二 林 隆 細川 徹 三砂 ちづる 山崎 広子 加我 牧子 (25.4.22~)	北 洋輔 高橋 純一 ○松島 由紀子 (~26.3.10) ○砂田 陽介 (25.5.14~7.30) ○福地 順子 (25.7.2~26.2.21) ○清水 あき (26.1.14~) ○山森 敏樹 (26.3.12~)			小林 朋佳 中川 真智子 山本 寿子 崎原 ことえ 矢田部 清美 中村 雅子 大坂 武史	
社会復帰研究部	伊藤 順一郎	吉田 光衛	山口 創生 下平 美智代	市川 健 種田 綾乃 古家 美穂	○池田 尚彌 (25.6.1~) 田中 純子 藤田 真純 永松 千恵 (25.12.1~)	檜垣 早苗		坂田 増弘 平林 直次	大嶋 巖 西尾 雅明 瀬戸原 雄太郎 香田 真希子 齋川 信幸 福井 里江 片山 優美子 安西 信雄 原 敬造 (25.12.1~)			久永 文恵 (25.5.1~) 菅 真理子 (25.10.1~)		
司法精神医学研究部	岡田 幸之	菊池 安希子 安藤 久美子 藤井 千代 (26.3.1~)	津村 秀樹 河野 裕明 曾唯 崇弘 (26.1.1~)	○小山 蘭子 ○中澤 佳奈子 (~25.8.31) ○宮澤 絵里 山田 華世	○三輪 靖子 川崎 敦子 (~25.8.8) 長倉 由真子 (25.9.1~12.31)	野田 隆政 朝波 千尋 中澤 佳奈子 (25.9.1~)							浅野 敬子	

Ⅱ 研究活動状況

1. 精神保健研究所所長室

I. 概要

1) 人事

平成 25 年 3 月 31 日付で加我牧子所長が退職、4 月 1 日、後任として平成 24 年 4 月より国立精神・神経医療研究センター企画戦略室長の野田 広が新所長に就任した（企画戦略室長を併任）。

7 月 11 日、野田の退職にともない、福田祐典が所長に就任した（企画戦略室長を併任）。

本年度の精神保健研究所常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4 月 1 日、自殺予防総合対策センター 適応障害研究室長に藤森麻衣子、8 月 1 日、社会精神保健研究部 社会福祉研究室長に山之内芳雄、11 月 1 日、児童・思春期精神保健研究部 思春期精神保健研究室長に石飛 信、平成 26 年 1 月 1 日、司法精神医学研究部研究員に曾雌崇弘が着任した。2 月 1 日、児童・思春期精神保健研究部 児童期精神保健研究室長に高橋秀俊が再任、3 月 1 日、司法精神医学研究部 制度運用研究室長に藤井千代が着任した。このほか流動研究員、科研費研究員、外来研究員等多数の若手研究者を迎えた。

3 月 31 日付退職者は、成人精神保健研究部 認知機能研究室長 荒川亮介、精神生理研究部 臨床病態生理研究室長 守口善也、知的障害研究部 治療研究室長 軍司敦子、社会復帰研究部 援助技術研究室長 吉田光爾、同精神保健相談研究室 研究員 佐藤さやか（平成 26 年度同室長着任予定）であった。

2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を果たす一方で、研究発表分野でも精力的な活動を行っている。

平成 25 年度には英文原著 86 編、和文原著 34 編、英文総説 11 編、和文総説 137 編、英文著書 3 編、和文著書 71 編を報告した（分担執筆含む）。また、学会発表としては国際学会で 104 件、国内学会で 270 件の発表を果たした。

主要学会等では、若手研究者が筆頭著者として優秀賞や奨励賞等を受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。

精神保健研究所は、毎年、専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉、薬物依存、心身医学、自殺対策、司法精神医学、発達障害、精神医療均てん化等）を行っているが、平成 25 年度には 20 課程を実施し合計 1,080 名が受講した。詳細は後述した。

3) 精神保健研究所へのゲスト

平成 25 年 6 月 28 日

NCNP・メルボルン大学精神医学部門合同シンポジウム開催。メルボルン大学から Chee Ng 准教授, Carol Harvey 准教授, Darryl Wade 准教授, Ian Paul Overall 教授, Elizabeth Scarr 准教授が来訪。（NCNP）

平成 25 年 10 月 3 日

韓国国立ナジュ病院の使節団（7 名）が来訪。（NCNP）

平成 25 年 11 月 28 日

韓国ソウル大学ソウル国立病院 Kyooseob HA 博士ら，来訪。（NCNP）

平成 25 年 12 月 16 日

シンガポール国立精神保健研究所所長 Chua Hong Choon 博士，来訪。（NCNP）

平成 25 年 12 月 19 日

WHO 精神保健・薬物依存部長 Shekhar Saxena 博士が来訪。講演を行い，精研各部および CBT センターと活動状況について意見交換した。Saxena 博士は，12/16-18 に行われた WHO 世界自殺レポート会議及び関連行事（主催：NCNP，WHO，WHO 西太平洋事務局）に参加のため来日した。

平成 26 年 1 月 31 日

マックス・プランク精神医学研究所長 Elisabeth Binder 博士が来訪。「gene x environment interactions in psychiatric disorders」と題するセミナーを行った。

平成 26 年 3 月 8 日

マクレーン MGH 病院行動健康プログラム長 Thröstur Björgvinsson 博士，来訪。

平成 26 年 3 月 12 日

OECD より 4 名が調査訪問のため来訪。（NCNP）

2. 精神保健計画研究部

I. 研究部の概要

精神保健計画研究部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和 61 年に設置された。精神保健計画研究部の研究は、①精神保健福祉の現況と施策効果のモニタリングのための技術の開発と実施（モニタリング研究）、②疫学研究及び精神科医療の現場における治療やリハビリテーション技術に関する科学的根拠（evidence）を充実させるための現場との共同実証研究や研究方法論の提供（疫学・臨床研究）、③精神保健福祉施策の重要課題の解決方策を得るための情報収集と分析（政策情報研究）に区分できる。

①に関しては、630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析、医療計画におけるてんかん医療についての記述内容の分析、精神科医療サービス利用の実態を可視化するツールの開発等を行った。

②に関しては、精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究、地域疫学調査によるてんかんの有病割合の推定、妊婦の精神健康に関する研究、産業精神保健に関する研究等を行った。

③に関しては、精神保健啓発の協働モデルの開発に関する予備的調査、精神障害者の重症入院患者の評価方法の開発に関する研究、芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究等を行った。

部長：竹島 正，統計解析研究室長：立森久照，システム開発研究室長：西 大輔，流動研究員（3 名）：臼田謙太郎（4/1 より）、後藤基行（4/1 より）、下田陽樹（4/1 より）、科研費研究員（1 名）：赤澤正人（4/1 より 5/31 まで）、外来研究員（1 名）：趙 香花（4/1 より）、客員研究員（10 名）：伊庭幸人，桑原 寛，須賀万智，助川征雄，高橋祥友，野口正行，橋本康男，渡邊直樹，目黒克己（5/13 より）、赤澤正人（7/8 より）、研究生（6 名）：大類真嗣，小野さや香，楠本英子，的場由木，森川すいめい，加藤直広（6/24 より）、センター研究助手（2 名）：構 聡子，吉田勺美，科研費研究補助員（1 名）：西口直樹（4/1 より）、科研費研究助手（1 名）：鴨志田由美子（6/1 より）、外来事務助手（2 名）：ソウ由香，原 治子。

II. 研究活動

1) 630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課が、都道府県・政令指定都市の精神保健福祉主管部（局）長に文書依頼を行い収集した全国の精神科医療施設などの状況についての資料（精神保健福祉資料）を、同課の許可を得て二次的に分析した。在院期間が一年以内の患者の動態の指標である平均退院率は改革ビジョン前から上昇傾向にあったが、この数年はほとんど変化がみられず停滞状況にある可能性が高い。数値目標とは 2011 年時点でおおよそ 5 ポイントの開きがある。一方、すでに長期在院となった患者の動態の指標である退院率は年ごとの変動はあるが全体としては緩やかな増加傾向にみえ、2008 年以降は 4 年間続けて上昇していた。数値目標の水準からはまだ 4 ポイント強の隔たりがある。（立森，臼田，後藤，下田，西，竹島）

2) 医療計画におけるてんかん医療についての記述内容の分析

平成 24 年度に策定された各都道府県の医療計画におけるてんかん医療に関する記述を収集、分析した。何らかの形でてんかんについて言及した都道府県数は半数を超えたが、てんかん医療についての具体的な言及があったのは 13 箇所であった。その内容を整理すると、①専門性の高い医療を提供できる体制の確保（12/13）、②各診療科および地域の診療所等とてんかん専門医療機関の連携（5/13）であった。策定された各都道府県の医療計画からは、医療計画の検討の過程で、てんかん医療について具体的に論じる機会は少なかったことと推察された。次回の医療計画改訂に向けて、都道府県において、てんかんを含む全般的な医療計画が進むよう情報提供と提言を行っていく必要が

あると考えられた。(竹島, 後藤)

3) 精神科医療サービス利用の実態を可視化するツールの開発

我が国の精神病床を有する病院の悉皆調査データを用いて精神科医療サービスの利用者などの実態を可視化するツールを開発することを目的として、精神保健福祉資料にあるデータの可視化を行い、shiny を用いてそれをウェブブラウザ上に表示するツールを作成した。このツールは OpenShiny.exe を開くことで、対応するデータおよび図を表示するものである。(立森, 加藤)

4) 精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド

2010年代中盤の地域住民における精神障害の頻度と受診行動、それらの関連要因や社会生活、自殺行動への影響を検討することを目的とした、世界精神保健日本調査セカンド (WMHJ2) に参画する。調査は世界保健機関 (World Health Organization: WHO) の主導する国際的な精神・行動障害に関する疫学プロジェクトの一環として実施され、その調査結果は国内の疫学データとして有用なばかりでなく、統一規格に基づく国際比較にも利用可能である。(立森, 下田, 竹島)

5) 地域疫学調査によるてんかんの有病割合の推定

関東の1都6県の20-75歳の地域住民の無作為抽出サンプルを対象にてんかんのスクリーニングを行ったデータを分析し、地域住民におけるてんかんの有病率の推定を試みた。てんかんのスクリーニング項目に対しては514名の有効回答(有効回答回収率29.4%)があった。有効回答回収率が約30%とやや低いことや、調査地域が関東に限定されていること、サンプルサイズが有病率を十分な精度で推定するにはやや不足、てんかんの評価はスクリーニング項目によるものであるため疑陽性の可能性があるなどの限界があるものの、生涯有病率が1.4% (95%CI: 0.55% - 2.8%)、時点有病率が0.19% (95%CI: $4.9 \times 10^{-3}\%$ - 1.1%) と推計された。(立森, 下田)

6) 妊婦の精神健康に関する研究

妊娠中のうつ病は母子の双方に悪影響を及ぼすことが指摘されているが、わが国における頻度や関連因子について、構造化面接を用いて調べた先行研究はほとんどない。また、うつ病になった場合には薬物療法を行いにくいこと、安全で有効な予防法・治療法の実現も求められている。そのため、東京医科大学産科婦人科教室、戸田中央産院と連携し、妊娠中のうつ病の頻度を構造化面接を用いて調べ、その関連因子を明らかにするとともに、妊娠うつ病の治療および産後うつ病の予防としてオメガ3系脂肪酸の安全性・有効性を検討するための研究を開始した。(西, 白田, 立森, 竹島)

7) 日本版 CREW プログラムの開発と職場での適用可能性に関する研究

近年、産業精神保健の領域で注目され、うつ病の予防とも関連する概念にワーク・エンゲイジメント(仕事に対して熱意を持ち、集中して積極的に取り組んでいる状態)があるが、その向上を目的とした介入プログラムの開発、およびその効果評価研究はほとんど実施されていない。そのため、東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野に協力し、ワーク・エンゲイジメントの向上を目的として確立された介入プログラムCREW (Civility, Respect & Engagement at Work) の日本版の開発に関する研究を開始した。(西)

8) 世界精神保健に係る国際連携

WPA (世界精神医学会) 疫学・公衆衛生セクションミーティング (WPASEPH2014) が2014年10月15-18日に奈良で開催されることから、このミーティングに、世界精神保健調査に参加する海外研究者、精神保健疫学に関心をもつ国内研究者等を招へいし、精神疾患の疫学研究に関する国際共同研究およびその行政施策への応用についての国際会議を開催することとして、その具体的な検討を行った。(竹島, 立森, 西, 下田)

9) 精神保健啓発の協働モデルの開発に関する予備的調査

うつ病の予防・治療日本委員会 (JCPTD)、全国精神保健福祉センター長会等と連携し、うつ病および関連する精神疾患についての啓発の協働的な取り組みとその評価を行うことを目指し、予備的調査として精神保健福祉センターを対象にした啓発活動の実態調査を行った。その結果、うつ病

の啓発活動はすでにある程度行われているが、うつ病単独ではなく、自殺対策やこころの健康づくり、および他の精神疾患への取り組みに重ねる形で継続していくことが重要と多くの地域で考えられていることが示唆された。また、認知行動療法と“現代型”うつ病に関するニーズの高さが認識されている一方で、労働者を対象とした啓発活動が多いにもかかわらずハラスメントやラインケアに関してはニーズの高さが認識されていないなど、まだ潜在的なニーズがある可能性も示唆された。（西，竹島，立森）

10) 精神障害者の重症入院患者の評価方法の開発に関する研究

既存調査のデータを用いて、精神病床に1年以上にわたり継続して入院した者の特徴を分析した。この一部が「重度かつ慢性」に相当する者と考えられるので、1年以上継続入院者がどのような特徴を持つ者から構成されているかを示すことは、今後の重度かつ慢性の基準の検討に資する資料となると考えた。BPRS45点以上を基準とした場合に、精神症状が重度であった（=45点以上）者は全体の6割程度であることが分かった。症状のどれかが高度（6点以上）であることも考慮に加えるとともに全体の6%が上乘せされ、全体の約65%が精神症状が重度であったと考えられるだろう。（立森）

11) 芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資材の開発に関する研究

精神疾患当事者の制作した芸術作品を用いた精神保健の啓発教育資材を作成することを目的とした。精神疾患当事者への面接調査をもとに、啓発資材案「やさしさのなかの、たくましい生き方—芸術活動を続けている精神疾患当事者から学ぶこと—」を作成し、2つの大学の学生を対象としたグループディスカッションを含めた講義を行った。質問票調査の結果、啓発資材案を用いた講義の前後で、学生の精神に障害を持つ人に対するイメージはよりポジティブなものへと変容したことがうかがえた。以上の結果から、本研究において作成された啓発資材は一般市民の精神疾患当事者に対する理解・共感を高める可能性があることが示唆された。（竹島，山内（自殺予防総合対策センター），立森）

12) 国立精神・神経医療研究センターの歴史的使命と貢献に関する実証的研究

歴史資料館開設準備会は、当センターのミッションを踏まえ、歴史資料館のあるべき姿を構想・立案することを目的として設置された。その研究活動の一環として、NCNPの活動およびその背景となる政策動向の年表作成、歴代幹部等へのインタビュー、センター所蔵の歴史的資料の燻蒸による保存処置、各種資料のデジタル化、全国精神科病院の保有する歴史資料調査を行った。また、準備会メンバーの他に、外部より研究生を招聘し、傷痍軍人武蔵療養所時代の病床日誌等の分析のための目録作成を開始した。（竹島，後藤）

13) 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究

地域精神保健発展のために既存の情報の活用を進める観点から630調査の電子調査票および同調査の都道府県行政等における活用状況の聞き取り調査を行った。また、地域で気付かれるメンタルヘルスの問題と対応についての意見交換と、地域精神保健医療リーダーシップ育成トレーニングの評価を行った。都道府県における630調査の活用にはさまざまな好事例があり、都道府県が積極的に活用できる方策を講じる必要があると思われた。地域で気付かれるメンタルヘルスの問題と対応についての意見交換からは、警察官通報の増加要因の分析を行う必要性が示唆された。リーダーシップをテーマにして行われた研修のプログラムはおおむね好評であり、それへの現場ニーズがあることが示唆された。（竹島，下田，白田，立森，西）

14) 精神障害に関する研究の方向性

最近の精神障害関連の行政の動向、WHO（世界保健機関）の精神保健関連の動向を踏まえ、障害関連分野における精神障害に関する研究の方向性について検討した。「改革ビジョン」以降、3障害（精神障害，身体障害，知的障害）に共通した問題については、障害の枠を超えた体制整備を行

うという方向の中で研究も進められてきたが、精神障害者は精神疾患の患者（病者）であるとともに生活障害をかかえた障害者でもあるという特性に十分配慮した研究を進める必要があると考えられた。また、障害者総合支援法の対象に発達障害、難病が含まれるようになった今日、「精神保健なくして障害福祉なし」という考え方から、精神保健領域が障害関係分野全般に貢献していく視点と、それに基づく具体的研究が望まれる。（竹島，立森，西）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

竹島 正，立森久照，西 大輔，赤澤正人，趙 香花，臼田謙太郎，後藤基行，下田陽樹は，精神保健計画研究部共通の取り組みとして，ウェブサイト「かえるかわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」を運営し，わが国の精神保健医療福祉の実態等に関する情報を提供した。

竹島 正は，全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した。また，一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会（JCPTD）理事，「支援付き住宅推進会議」委員，NPO 法人「自立支援センターふるさととの会」の苦情解決第三者委員会と倫理審査委員会の委員長，公益社団法人全日本断薬連盟顧問，こころのバリアフリー研究会評議員を務めた。

竹島 正，立森久照はメディアカンファレンス等を通して，メディア関係者への精神保健啓発を行った。

立森久照は，「支援付き住宅推進会議」委員を務めた。

西 大輔は，練馬区，東大和市などの自治体や，公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンターなどの法人が主催する一般市民向けの講演会，および西東京市などにおける職員向けの研修会の講師を務め，市民社会に対する精神保健の啓発に貢献した。

2) 専門教育面における貢献

竹島 正は，全国精神保健福祉相談員会相談役を務めた。また，精神保健対策，自殺対策に関する各種研修への協力を行った。

立森久照は，東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻精神保健学分野の客員研究員として，その機関に所属する研究者，院生と共同研究を実施した。情報・システム研究機構統計数理研究所の客員准教授として，同機関の研究者，大学院生と協同研究を実施した。東京大学および防衛医科大学の医学部学生実習に協力した。東京大学医学部健康科学・看護学科の学生実習に協力し，人材養成に貢献した。日本社会精神医学会の学術委員として第 33 回日本社会精神医学会において，社会精神医学研究ワークショップを企画・開催し，若手研究者の育成に貢献した。立正大学大学院心理学研究科の非常勤講師として臨床心理学研究法特論を受け持ち人材養成に貢献した。

西 大輔は，東京大学および防衛医科大学の医学部学生実習に協力した。また，国立病院機構災害医療センターのがん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会および看護師研修会，東久留米市医師会のうつ診療充実強化研修，茨城県栄養士会の研修で講師を務めた。さらに，TMC 主催の第 3 回臨床研究入門講座ワークショップおよび第 3 回臨床研究実践講座ワークショップでファシリテーターを務めた。このような活動を通し，医学生，看護師，栄養士，若手医師，若手研究者の育成に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

竹島 正は，精神保健計画研究部長として，第 50 回精神保健指導課程研修（2013.6.26-27）の主任を務めた。また，自殺予防総合対策センター長として，第 7 回自殺総合対策企画研修（2013.8.20-22），第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.9.17-18），第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.12.3-4）の主任，第 4 回心理職自殺予防研修（2013.8.6-7），第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2013.11.5-6）の副主任を務めた。

立森久照，西 大輔は，第 50 回精神保健指導課程の副主任を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

竹島 正は，内閣府本府政策参与（非常勤），厚生労働省平成 25 年度自殺防止対策事業評価委員

長，精神保健福祉士試験委員，内閣官房多重債務者対策本部「多重債務問題及び消費者向け金融等に関する懇談会」構成員，人事院事務総局職員福祉局心の健康づくり指導委員会委員，船橋市自殺対策連絡会議委員長，富山県自殺対策推進協議会アドバイザーを務めた。また，国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学の2010年9月から5年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)に基づき，国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学の交流に努めた。

立森久照は，一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構のアドバイザーとして専門知識の提供を行った。

IV. 研究業績 A. 刊行物(1) 原著論文

- 1) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takehima T, Inagaki M, Sudo A: Age-adjusted relative suicide risk by marital and employment status over the past 25 years in Japan. *J Public Health* 35 (1): 49-56, 2013.
- 2) Matsumoto T, Tachimori H, Tanibuchi Y, Takano A, Wada K: Clinical features of patients with designer-drug-related disorder in Japan: a comparison with patients with methamphetamine- and hypnotic/anxiolytic-related disorders. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 68(5): 374-382, 2014.
- 3) Mori Y, Kanemoto K, Onuma T, Tanaka M, Oshima T, Kato H, Tachimori H, Wada K, Kikuchi T, Tomita T, Chen L, Fang L, Yoshida S, Kato M, Kaneko S: Anger is a distinctive feature of epilepsy patients with depression. *Tohoku Journal of Experimental Medicine* 232(2): 123-128, 2014.
- 4) Nishi D, Uehara R, Yoshikawa E, Sato G, Ito M, Matsuoka Y: Culturally sensitive and universal measure of resilience for Japanese populations: Tachikawa Resilience Scale in comparison with Resilience Scale 14-item version. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 67 (3): 174-181, 2013.
- 5) Nishi D, Noguchi H, Yonemoto N, Nakajima S, Kim Y, Matsuoka Y: Incidence and prediction of posttraumatic stress disorder at 6 months after motor vehicle accident in Japan. *Psychosomatics* 54 (3): 263-271, 2013.
- 6) Matsuoka Y, Nishi D, Noguchi H, Kim Y, Hashimoto K: Longitudinal changes in serum brain-derived neurotrophic factor in accident survivors with posttraumatic stress disorder. *Neuropsychobiology* 68 (1): 44-50, 2013.
- 7) Matsuoka Y, Nishi D, Hamazaki K: Serum levels of polyunsaturated fatty acids and the risk of posttraumatic stress disorder. *Psychother Psychosom* 82 (6): 408-410, 2013.
- 8) Noguchi H, Nishi D, Kim Y, Konishi T, Matsuoka Y: Does prior trauma predict negative posttraumatic appraisal in motor vehicle accident survivors?. *J Depress Anxiety* S4 (003): 1-4, 2013.
- 9) Nishi D, Shirakawa MN, Ota E, Hanada N, Mori R: Hypnosis for induction of labour (Protocol). *Cochrane Database of Systematic Reviews* 11, 2013.
- 10) Shigemura J, Tanigawa T, Nishi D, Matsuoka Y, Nomura S, Yoshino A: Associations between disaster exposures, peritraumatic distress, and posttraumatic stress responses in Fukushima Nuclear Plant workers following the 2011 Nuclear Accident: the Fukushima NEWS Project Study. *PLoS ONE* 9 (2): e87516, 2014.
- 11) Setsuko Hanzawa, Jeong-Kyu Bae, Yong Jun Bae, Moon-hyeon Chae, Hideki Tanaka, Hideyuki Nakane, Yasuyuki Ohta, Xianghua Zhao, Hideki Iizuka, Yoshibumi Nakane:

Psychological impact on caregivers traumatized by the violent behavior of a family member with schizophrenia. *Asian Journal of Psychiatry* 6: 46-51, 2013.

- 12) Masato Akazawa, Toshihiko Matsumoto, Naoki Kumagai: Prevalence of problematic drinking among outpatients attending general hospitals in Tokyo. *J. Alcohol & Drug Dependence* 48(5): 300-313, 2013.
- 13) 坂上祐樹, 土屋政雄, 堀口逸子, 岩田 昇, 竹島 正, 川上憲人: 日本の大都市圏におけるこころの健康に関する疫学調査研究—WHO「世界精神保健プロジェクト」—. *順天堂医事雑誌* 59(4): 347-352, 2013.
- 14) 谷渕由布子, 松本俊彦, 立森久照, 高野 歩, 和田 清: 「脱法ドラッグ」乱用・依存患者の臨床的特徴 乱用する製品の形状による比較. *精神科治療学* 29(1): 113-121, 2014.
- 15) 赤澤正人, 竹島 正, 立森久照, 宇田英典, 野口正行, 澁谷いづみ: 保健所における精神保健福祉業務の現状と課題. *日本公衆衛生雑誌* 61(1): 41-51, 2014.
- 16) 亀山晶子, 勝又陽太郎, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 小高真美, 竹島 正: 生前に自殺関連行動のあった事例の生存時間に影響する心理社会的要因. *精神医学* 55(12): 1155-1163, 2013.
- 17) 勝又陽太郎, 赤澤正人, 松本俊彦, 小高真美, 亀山晶子, 白川教人, 五十嵐良雄, 尾崎 茂, 深間内文彦, 榎本 稔, 飯島優子, 竹島 正: 中高年男性うつ病患者における自殺のリスク要因: 心理学的剖検を用いた症例対照研究による予備的検討. *精神医学* 56(3): 199-208, 2014.

(2) 総説

- 1) 稲垣正俊, 竹島 正: 科学的根拠に基づく自殺予防総合対策のための学術団体の連携. *公衆衛生* 77(4): 331-333, 2013.
- 2) 竹島 正: 自殺対策のこれからの10年. *公衆衛生情報* 43(1): 6-7, 2013.
- 3) 竹島 正, 山内貴史: 地域が若年層の自殺とどう向き合うか—地域に求められる取り組みとは—. *月刊地域医学* 27(6): 19-22, 2013.
- 4) 瀧脇 憲, 竹島 正, 立森久照, 岡村 毅, 的場由木: 「単身生活者の実態と支援ニーズを把握するための調査」報告. *貧困研究* 11: 93-106, 2013.
- 5) 竹島 正, 的場由木: メンタルヘルスの問題を抱えた生活困窮者の支援. *公衆衛生情報* 43(6): 26-29, 2013.
- 6) 立森久照, 竹島 正, 栗田主一: わが国の長期在院者の現況と推移. *精神科治療学* 29(1): 13-18, 2014.
- 7) 立森久照: うつ病における身体疾患有病率と死亡率の上昇. *精神科治療学* 29(2): 153-158, 2014.
- 8) 立森久照: これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第3回) 例数設計の手順. *日本社会精神医学会雑誌* 22(2): 200-204, 2013.
- 9) 立森久照: これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第4回) 欠測の扱いかた. *日本社会精神医学会雑誌* 22(3): 404-408, 2013.
- 10) 立森久照: これから論文を書く人のための統計の使い方と報告の仕方 (第5回) 統計相談の際のポイント. *日本社会精神医学会雑誌* 22(4): 590-591, 2013.
- 11) 白杵理人, 西 大輔: せん妄が身体疾患の経過と予後に与える影響. *精神科治療学* 28(8): 1035-1040, 2013.
- 12) 西 大輔, 松岡 豊: うつ病とPTSDに対するオメガ3系脂肪酸のエビデンス. *総合病院精神医学* 25(3): 248-253, 2013.
- 13) 趙 香花, 長沼洋一, 河野稔明, 立森久照, 野口正行, 藤田健三, 太田順一郎, 西 大輔, 竹島 正: 岡山県の医療保護入院患者と保護者に関する実態調査. *日本社会精神医学会雑誌* 22(4): 440-451, 2013.
- 14) 後藤基行, 竹島 正, 永田郁子, 村田美穂, 吉田光爾, 和田圭司, 安西信雄, 有馬邦正: (独)

国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料館開設計画—傷痍軍人武蔵療養所から未来に向けて—。精神医学史研究 17(2) : 81-88, 2013.

- 15) 後藤基行, 安藤道人 : 精神病床入院体系における 3 類型の成立と展開—制度形成と財政的変遷の歴史分析—。Monthly IHEP225 : 21-23, 2013.
- 16) 後藤基行, 竹島 正, 有馬邦正 : 国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料館開設計画について。一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会会報 58 : 8, 2013.
- 17) 下田陽樹, 竹島 正, 立森久照 : 精神保健医療福祉のモニタリングとしての 630 調査の経緯と今後の方向。精神保健研究 60 : 3-9, 2014.
- 18) 松本俊彦, 小高真美, 山内貴史, 川野健治, 藤森麻衣子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 白川教人, 竹島 正 : 心理学的剖検研究と今後の方向。精神保健研究 60 : 89-96, 2014.
- 19) 廣川聖子, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 亀山晶子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正 : 精神科治療を受けていた自殺既遂者の心理社会的特徴 : 心理学的剖検による 76 事例の検討。精神神経学雑誌 115(9) : 923-932, 2013.
- 20) 赤澤正人 : 「精神科治療学」編集委員会 編集、物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック。増刊号。星和書店。(分担執筆 6.民間機関とどのように連携するか? ③断酒会の活動担当) 160-162, 2013.

(3) 著書

- 1) 竹島 正 : 精神保健に関する基本的理解。新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 : 改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第 2 巻 / 精神保健学・精神保健の課題と支援, へるす出版, 東京, pp1-16, 2014.
- 2) 竹島 正 : 地域精神保健施策の概要。新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 : 改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第 2 巻 / 精神保健学・精神保健の課題と支援, へるす出版, 東京, pp229-234, 2014.
- 3) 竹島 正 : 地域保健・地域精神保健に係る関係法規・関係施策。新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編, へるす出版, 東京, pp235-257, 2014.
- 4) 藤森麻衣子, 竹島 正 : 科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム。精神保健福祉白書 2014 年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集 : 中央法規出版, 東京, p32, 2013.
- 5) 山内貴史, 竹島 正 : 自殺総合対策大綱の改正。精神保健福祉白書 2014 年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集 : 中央法規出版, 東京, p22, 2013.
- 6) 立森久照 : 平成 23 年患者調査。精神保健福祉白書 2014 年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集 : 中央法規出版, 東京, p20, 2013.
- 7) 立森久照, 桶谷 肇 : 第 9 章 概況。精神保健福祉白書 2014 年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集 : 中央法規出版, 東京, pp181-183, 2013.
- 8) 立森久照 編 : 第 9 章 第 3 節 統計資料。精神保健福祉白書 2014 年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集 : 中央法規出版, 東京, pp201-229, 2013.
- 9) 赤澤正人 : 第 9 章 「資料」 第 3 節 「統計資料」 表 21~31, 解説 (医療観察法、自殺、地域生活支援、雇用・職業)。精神保健福祉白書 2014 年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集 : 中央法規出版, 東京, pp219-228, 231, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 竹島 正 : 新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「新たな地域精神保

- 健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」総括・分担研究報告書. pp1-6, 2014.
- 2) 竹島 正, 西 大輔, 立森久照, 臼田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 岡村 毅, 金田一正史, 家原敏彰, 大澤日登美, 中村征人, 佐々木英司, 的場由木, 山田全啓: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—地域精神保健医療強化とリーダーシップ育成の検討—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書. pp7-16, 2014.
 - 3) 竹島 正, 立森久照: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—障害福祉計画に係る基本指針における入院中の精神障害者の地域生活への移行の指標の検討—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書. pp17-27, 2014.
 - 4) 竹島 正, 河野稔明, 立森久照, 菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子, 岡田幸之: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—在院機関からみた医療観察法入院処遇と一般精神科入院治療の地域・医療機関特性の関連—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書. pp29-33, 2014.
 - 5) 竹島 正, 後藤基行, 河野稔明, 立森久照, 山田全啓: てんかんの地域医療における保健行政的研究(1)都道府県医療計画におけるてんかん医療の記載に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究 (研究代表者: 大槻泰介)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp17-22, 2014.
 - 6) 竹島 正, 後藤基行, 栗田圭一, 井上有史, 大槻泰介, 亀山 茂, 田所裕二: てんかんの地域医療における保健行政的研究(2)高齢てんかん患者の診療確保の検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究 (研究代表者: 大槻泰介)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp23-28, 2014.
 - 7) 竹島 正, 立森久照, 下田陽樹, 河野稔明, 北村弥生, 田所裕二, 大槻泰介: てんかんの地域医療における保健行政的研究(3)てんかん患者の保健医療福祉等のニーズ調査実施のための検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究 (研究代表者: 大槻泰介)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp29-35, 2014.
 - 8) 竹島 正, 高橋清久, 立森久照, 西 大輔, 山内貴史, 川上憲人: 国際連携. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究: 世界精神保健日本調査セカンド (研究代表者: 研究代表者: 川上憲人)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp68-71, 2014.
 - 9) 竹島 正, 樋口輝彦, 立森久照, 西 大輔: 精神障害分野における英文文献リサーチの概要: ICF 活用の状況. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「障害関係分野における今後の研究の方向性に関する研究 (研究代表者: 岩谷 力)」総括・分担研究報告書. pp9-13, 2013.
 - 10) 島田達洋, 小口芳世, 猪飼紗恵子, 稲垣 中, 椎名明大, 小泉典明, 竹島 正, 小山明日香, 瀬戸秀文: 医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 (その 1) 医療観察法導入後における精神保健福祉法第 24 条に基づく警察官通報ならびに

第 25 条に基づく検察官通報の現状に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究 (研究代表者: 平林直次)」総合研究報告書 (平成 22~24 年). pp57-67, 2013.

- 11) 竹島 正, 趙 香花, 立森久照, 西 大輔, 大塚俊弘, 小野善郎, 二宮貴至, 藤田健三, 三井敏子: 早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究 (研究代表者: 岡崎祐士)」平成24年度総括・分担研究報告書. pp103-124, 2013.
- 12) 竹島 正, 大場義貴, 白神敬介, 三井敏子, 小楠真澄, 立森久照, 趙 香花, 西 大輔, 大塚俊弘, 小野善郎, 二宮貴至, 藤田健三: 早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究 (研究代表者: 岡崎祐士)」平成22年度~24年度総合研究報告書. pp69-71, 2013.
- 13) 竹島 正, 立森久照: 既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「精神障害者の重症度に応じた評価手法の開発に関する研究 (研究代表者: 山内慶太)」平成24年度総括・分担研究報告書. pp29-36, 2013.
- 14) 竹島 正, 川野健治, 藤森麻衣子, 松本俊彦, 山内貴史, 福永龍繁, 鈴木秀人, 引地和歌子, 白川教人, 勝又陽太郎, 小高真美, 大槻露華, 白神敬介, 岩上真歩子, 久永彩香: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究 (研究代表者: 福田祐典)」総括・分担研究報告書. pp7-14, 2014.
- 15) 竹島 正, 久永彩香, 山内貴史, 小高真美, 松本俊彦: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究—諸外国における心理学的剖検の症例対象研究の研究方法の検討—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究 (研究代表者: 福田祐典)」総括・分担研究報告書. pp15-38, 2014.
- 16) 竹島 正, 山内貴史, 奥村泰之: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究—総務省消防庁が保有する自損行為による救急搬送事例の分析に関する研究—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究 (研究代表者: 福田祐典)」総括・分担研究報告書. pp39-43, 2014.
- 17) 藤森麻衣子, 山内貴史, 小高真美, 竹島 正: 国際的自殺対策の実態, および課題把握のための調査研究. 厚生労働科学研究費補助金 (厚生労働科学特別研究事業)「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討 (研究代表者: 椿 広計)」平成 25 年度研究班報告書. pp15-41, 2014.
- 18) 立森久照, 臼田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 西 大輔, 竹島 正: 630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書. pp35-49, 2014.
- 19) 立森久照, 下田陽樹, 川上憲人: 患者調査では把握できないてんかん患者数に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究 (研究代表者: 大槻泰介)」平成25年度総括・分担研究報告書. pp11-16, 2014.
- 20) 立森久照, 竹島 正: 重症入院患者の評価方法の開発と統計処理方法に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究 (研究代表者: 安西信雄)」平成25年度総括・分担研究報告書. pp171-183,

2014.

- 21) 立森久照, 尾崎紀夫, 秋山 剛, 和田 清, 松本俊彦, 鈴木 太, 徳倉達也, 下田陽樹: こころの健康に関する方法論の検討と改善, 統計解析. 厚生労働科学研究費補助金「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究: 世界精神保健日本調査セカンド(研究代表者: 川上憲人)」平成25年度総括・分担研究報告書. pp65-67, 2014.
- 22) 松本俊彦, 小高真美, 立森久照, 山内貴史, 竹島 正, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究—睡眠障害と自殺の関連: 心理学的剖検研究による症例対照研究—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究(研究代表者: 福田祐典)」総括・分担研究報告書. pp45-58, 2014.
- 23) 山田全啓, 本保善樹, 高岡道雄, 宇田英典, 野上耕二郎, 福井貴実子, 辻本哲士, 橋爪聖子, 後藤基行, 大塚俊弘, 加納紅代, 森 隆夫, 山下俊幸, 柿木達也, 鈴木孝太, 竹島 正, 車谷典男, 松尾伸子, 藤原恵美子, 片山聡子: 平成 25 年度 地域保健総合推進事業 全国保健所長会協力事業「精神科医療と地域ケアの連携推進事業(分担事業者: 山田全啓)」報告書. 2014.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) Suka M, Yamauchi T, Tachimori H, Takeshima T: Suicide trends and geographical variations in Japan. Proceedings of Joint Meeting of the IASC Satellite Conference and 8th Conference of the Asian Regional Section of the IASC: 249-255, 2013.
- 2) 竹島 正: 一般社団法人 日本社会精神医学会. 精神医学 55(6): 591, 2013.
- 3) 竹島 正: 精神保健福祉法からの連想-歴史資料館, 芸術活動そしてメンタルヘルスサービスのモデル. 日本社会精神医学会雑誌 22(2): 80-81, 2013.
- 4) 竹島 正: Leadership in Community Mental Health の掲載にあたって. 日本社会精神医学会雑誌 23(1): 58, 2014.
- 5) 香月真理子, 竹島 正, 小林隆児, 清水邦光, 阿久津斎木, 滝川一廣, 愛甲修子, 水田 恵, 佐藤幹夫: 岡江 晃氏を囲んで 精神鑑定と臨床診断. 飢餓陣営 40 (2014 春号): 102-139, 2014.
- 6) 竹島 正: 【岡江 晃先生を悼む】いくつかのお礼を重ねて. 飢餓陣営 40 (2014 春号): 156-158, 2014.
- 7) 小高真美, 山内貴史, 竹島 正: 「WHO 世界自殺レポート会議および関連行事」開催報告: 第 1 回 WHO 世界自殺レポート会議. 公衆衛生情報 43(11): 22-24, 2014.
- 8) 山内貴史, 小高真美, 竹島 正: 「WHO 世界自殺レポート会議および関連行事」開催報告: 第 2 回 関連行事①メディアカンファレンス. 公衆衛生情報 43(12): 28-30, 2014.
- 9) 高岡道雄, 宇田英典, 伊地知昭浩, 山田全啓, 桐生宏司, 山口靖明, 本屋敷美奈, 酒井ルミ, 柿本裕一, 角田正史, 竹島 正: 地域健康安全・危機管理対策総合研究事業—精神保健分野研究—. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究(研究代表者: 多田羅浩三)」報告書. pp277-335, 2013.
- 10) 高岡道雄, 宇田英典, 伊地知昭浩, 山田全啓, 桐生宏司, 山口靖明, 本屋敷美奈, 酒井ルミ, 柿本裕一, 角田正史, 竹島 正: 地域健康安全・危機管理対策総合研究事業—精神保健分野研究—. 平成23~24年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究(研究代表者: 多田羅浩三)」総合報告書. pp27-29, 2013.
- 11) 的場由木, 竹島 正: 困窮者への支援の取り組み. 社会保険旬報 2550: 22-29, 2013.

B. 学会・研究会における発表(1)学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Takeshima T: Japan's suicide prevention strategy-including challenges by the Center for Suicide Prevention-. Joint Symposium convened by NCNP and the University of Melbourne, Tokyo, 2013.6.28.
- 2) Takeshima T: Japan's suicide prevention strategy including challenges by the Center for Suicide Prevention. 2013 Annual Meeting and International Academic Conference, Taiwan, 2013.9.8.
- 3) Takeshima T: Japan's comprehensive suicide prevention policy and international implications. Second Meeting for the WHO World Suicide Report and Related Events, Tokyo, 2013.12.18.
- 4) Tachimori H: Report of my two week research placement in the Psychosocial Research Center, Melbourne. Joint Symposium convened by NCNP and the University of Melbourne, Tokyo, 2013.6.28.
- 5) Nishi D: Brief research placements in Melbourne 13th-23rd April, 2013. Joint Symposium convened by NCNP and the University of Melbourne, Tokyo, 2013.6.28.
- 6) Nishi D, Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids for attenuating posttraumatic stress symptoms after the earthquake: a randomized controlled trial. 22th World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, 2013.9.12-2013.9.14.
- 7) 竹島 正: 大綱見直しの経緯とその内容. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 8) 立森久照: (シンポジウム) 不安障害の疫学—世界精神保健(WMH)調査の成果から—. 第 6 回不安障害学会, 東京, 2014.2.1.
- 9) 立森久照, 山内貴史: 自殺対策のための自殺死亡の地域統計の活用. 統計数理研究所リスク解析戦略研究センター 第 5 回生物統計ネットワークシンポジウム, 東京, 2014.3.18.
- 10) 西 大輔: 日本人に特有のレジリエンスはあるか? シンポジウム「レジリエンスの理解と現場での活用に向けて(オーガナイザー:西 大輔)」。第 12 回日本トラウマティックストレス学会, 東京, 2013.5.11-12.
- 11) 西 大輔, 浜崎 景, 浜崎智仁, 松岡 豊: うつ病と PTSD に対するオメガ 3 系脂肪酸のエビデンス. トピックフォーラム「エビデンスに基づいた行動医学的視点からの精神疾患へのアプローチ(コーディネーター:松岡 豊, 西 大輔)」。第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 12) 西 大輔: 震災後の救援者における魚油の PTSD 症状に対する有効性の検討: ランダム化比較試験. 大塚賞(学術賞)受賞講演. 第 22 回日本脂質栄養学会, 高知, 2013.9.6-7.
- 13) 西 大輔, 松岡 豊: PTSD の予防と緩和における魚油の可能性. シンポジウム「食事介入で不安と抑うつを予防できるか: 栄養精神医学の挑戦(オーガナイザー:松岡 豊, 関口正幸)」。第 6 回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1.
- 14) 赤澤正人: アルコール関連問題と自殺. メインシンポジウム アルコール健康障害対策基本法で何が変わるか?! 第 35 回アルコール関連問題学会, 岐阜, 2013.7.19.

(2)一般演題

- 1) Nishi D, Matsuoka Y: Omega-3 fatty acids for attenuating posttraumatic stress symptoms among rescue workers after the Great East Japan Earthquake: A randomized controlled trial. 1st International Society for Nutritional Psychiatry Research, Tokyo, 2013.6.21.

- 2) Matsuoka Y, Nishi D: Omega-3 fatty acids versus placebo for secondary prevention of PTSD after accidental injury: a randomised controlled trial. 1st International Society for Nutritional Psychiatry Research, Tokyo, 2013.6.21.
- 3) Matsuoka Y, Nishi D, Noguchi H, Yonemoto N, Nakajima S, Kim Y: Incidence and prediction of posttraumatic stress disorder at 6 months after motor vehicle accident in Japan. 22th World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, 2013.9.12-14.
- 4) Noguchi H, Nishi D, Kim Y, Konishi T, Matsuoka Y: Does prior trauma predict negative posttraumatic appraisal in accident survivors?. 22th World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, 2013.9.12 -14.
- 5) Usuki M, Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Matsumura K, Otomo Y, Kim Y, Kanba S: Propofol injection may link to posttraumatic stress disorder after motor vehicle accident: a longitudinal study. 23th World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, 2013.9.12-14.
- 6) Suka M, Yamauchi T, Tachimori H, Takeshima T: Suicide trends and geographical variations in Japan. International Association for Statistical Computing, Asian Regional Section, Seoul, 2013.8.22-23.
- 7) Suka M, Yamauchi T, Tachimori H, Takeshima T: Geographical variations and contextual effects on suicide mortality in Japan. XXVII International Association for Suicide Prevention (IASP) World Congress, Oslo, 2013.9.24-28.
- 8) 稲垣 中, 竹島 正: 非定型抗精神病薬投与下における血糖のモニタリングとリチウム投与下における血中濃度モニタリング. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 9) 小高真美, 渡辺恭江, 引土絵未, 岡田澄恵, 高井美智子, 稲垣正俊, 山田光彦, 竹島 正: 自殺ハイリスク者支援のためのソーシャルワーク実践モデルの構築と同モデルをもとにした自殺予防対策研修開発の試み. 第 37 回日本自殺予防学会, 秋田, 2013.9.13-15.
- 10) 中西三春, 山内貴史, 竹島 正: 日本における自殺対策の検証評価の課題. 第 33 回日本社会精神医学会, 東京, 2014.3.20-21.
- 11) 小高真美, 高井美智子, 引土絵未, 岡田澄恵, 渡辺恭江, 稲垣正俊, 山田光彦, 竹島 正: ソーシャルワーカーを対象とする自殺予防研修の開発と研修の予備的効果検討. 第 33 回日本社会精神医学会, 東京, 2014.3.20-21.
- 12) 臼杵理人, 松岡 豊, 西 大輔, 金 吉晴, 神庭重信: 交通外傷直後のプロポフォル投与が PTSD 症状に与える影響について. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 13) 松岡 豊, 西 大輔, 浜崎 景, 浜崎智仁: 東日本大震災の救援者における PTSD 症状の予測因子に関する縦断研究. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 14) 西 大輔, 松岡 豊: 妊娠うつ病予防に対するオメガ 3 系脂肪酸の可能性. 第 54 回日本心身医学会総会・学術講演会シンポジウム, 神奈川, 2013.6.27.
- 15) 松岡 豊, 西 大輔: PTSD の予防と緩和における魚油の可能性. 第 54 回日本心身医学会総会・学術講演会シンポジウム, 神奈川, 2013.6.27.
- 16) 松岡 豊, 西 大輔, 浜崎 景: 血清多価不飽和脂肪酸と心的外傷後ストレス障害の発症リスク. 第 22 回日本脂質栄養学会, 高知, 2013.9.6-7.
- 17) 松岡 豊, 西 大輔, 浜崎 景: 血清多価不飽和脂肪酸と心的外傷後ストレス障害の発症リスク: 立川交通事故コホート研究. 第 24 回日本疫学会学術総会, 宮城, 2014.1.24-25.
- 18) 野口普子, 西 大輔, 金 吉晴, 松岡 豊: 交通外傷患者の否定的な認知的評価と性格特性との関連についての検討. 第 6 回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1.
- 19) 後藤基行: 救護法による精神病患者収容救護の運用事例とその史的考察. 第 126 回社会政策学会 (2013 年度春季) 大会. 東京, 2013.5.25-26.
- 20) 後藤基行, 竹島 正: 国立精神・神経医療研究センターの歴史資料館開設準備について. 第 17

回日本精神医学史学会学術集会，東京，2013.11.9-10.

- 21) 後藤基行：精神病床入院体系における 3 類型成立の歴史分析．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.21.
- 22) 赤澤正人，松本俊彦，勝又陽太郎，小高真美，川上憲人，江口のぞみ，白川教人，立森久照，竹島 正：自殺企図歴のない成人男性の自殺リスク要因の検討．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 23) 小高真美，松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，立森久照，川上憲人，江口のぞみ，白川教人，竹島 正：睡眠障害と自殺の関連：心理学的剖検による症例対象研究．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 24) 廣川聖子，松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，亀山晶子，小高真美，竹島 正：心理学的剖検を用いた統合失調症自殺既遂者の特徴に関する検討．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 25) 須賀万智，山内貴史，立森久照，竹島 正：自殺死亡と地域特性に関する分析：マルチレベルモデルによる高・低リスク地域の探索．第 24 回日本疫学会学術総会，宮城，2014.1.23.
- 26) 眞崎直子，白神敬介，川野健治，的場由紀，竹島 正：東日本大震災後の岩手県 A 町生活支援相談員との共同による自殺予防の地域診断に関する研究．第 33 回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013.12.6-7.

(3) 研究報告会

- 1) 竹島 正：精神障害に関する研究のあり方の検討．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「障害関係分野における今後の研究の方向性に関する研究（研究代表者：岩谷 力）」第 1 回班会議，東京，2013.7.13.
- 2) 竹島 正，後藤基行：平成 25 年度地域保健総合推進事業（全国保健所長会協力事業）「精神科医療と地域ケアの連携推進事業（分担事業者：山田全啓）」第 1 回班会議，東京，2013.7.15.
- 3) 竹島 正，小高真美，趙 香花，臼田謙太郎，下田陽樹，加藤直広：地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」第 1 回班会議，東京，2013.7.25.
- 4) 竹島 正，小高真美，山内貴史，白神敬介，大槻露華：自殺の要因分析体制の確立に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究（研究代表者：福田祐典）」第 1 回班会議，東京，2013.7.26.
- 5) 竹島 正：重症入院患者の評価方法の開発と統計処理方法に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究（研究代表者：安西信雄）」第 2 回班会議，東京，2013.7.23.
- 6) 竹島 正：国際連携．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド（研究代表者：川上憲人）」第 1 回班会議，東京，2013.8.2.
- 7) 竹島 正：平成 25 年度地域保健総合推進事業「健康危機における保健所調整機能の強化に関する研究（分担事業者：高岡道雄）」精神保健分野 ICS 改定事業班第 1 回班会議，東京，2013.8.25.
- 8) 竹島 正，立森久照：国際連携．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健 日本調査セカンド」班会議，東京，2014.1.9.
- 9) 竹島 正：自殺の要因分析体制の確立に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障

- 害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」第2回班会議, 東京, 2014.1.17.
- 10) 竹島 正: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第2回班会議および研究班内シンポジウム, 東京, 2014.1.23.
 - 11) 竹島 正: 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究. 障害者対策総合研究推進事業精神障害/神経・筋疾患分野「普及啓発事業」研究成果発表会(一般向け), 東京, 2014.2.28.
 - 12) 立森久照, 加藤直広, 伊庭幸人, 臼田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 楠本英子, 竹島 正: ベイジアンモデル選択による時間的に通常と異なるパターンの検出法を用いた精神病床からの退院件数の推移が異なる地域の検討. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第25回研究報告会, 東京, 2014.3.10.
 - 13) 立森久照: こころの健康に関する方法論の検討と改善, 統計解析. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究: 世界精神保健日本調査セカンド(研究代表者: 川上憲人)」第1回班会議, 東京, 2013.8.2.
 - 14) 山内貴史, 立森久照, 竹島 正, 久永彩香: 環太平洋地域における配偶関係と自殺死亡の関連の国際比較. 第3回自殺リスクに関する研究会, 東京, 2013.10.17.
 - 15) 山内貴史, 立森久照, 竹島 正, 久保田貴文, 椿 広計: 人口動態調査を用いた自殺対策のための地域データ基盤の作成とその利活用. International Workshop on Information Systems for Social Innovation, 東京, 2014.2.5.
 - 16) 後藤基行, 竹島 正, 吉田光爾, 有馬邦正: NCNPにおける歴史資料館開設準備計画. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第25回研究報告会, 東京, 2014.3.10.
 - 17) 後藤基行: 戦前期日本における精神病者収容体制とその運用事例. Asian Society for Social History of Medicine, 東京, 2013.4.27.
 - 18) 後藤基行: 精神病床入院体系における3類型の成立と展開—制度形成と財政的変遷の歴史分析—. 医療経済研究機構2012年度研究助成成果発表会, 東京, 2013.11.25.
 - 19) 下田陽樹, 川上憲人, 土屋政雄, 岩田 昇: 被災者におけるK6尺度への回答傾向および得点分布の特徴: 被災地データおよび一般国民データの二次解析による比較. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第25回研究報告会, 東京, 2014.3.10.
 - 20) 小高真美, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 立森久照, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 竹島 正: 睡眠障害と自殺の関連: 心理学的剖検研究による症例対照研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第25回研究報告会. 東京, 2014.3.10.
 - 21) 須賀万智, 山内貴史, 立森久照, 竹島 正: 自殺死亡と地域特性に関する分析: マルチレベルモデルによる高・低リスク地域の探索. 第3回自殺リスクに関する研究会, 東京, 2013.10.17.

(4) その他

- 1) 竹島 正: 被災者の心のケア—精神医療からの取り組みの現状と課題—(2). 宗教者災害支援連絡会 第16回情報交換会, 東京, 2013.8.29.
- 2) 竹島 正: 精神医療・保健福祉システム委員会. 日本精神神経学会, 東京, 2013.9.14.
- 3) 竹島 正, 後藤基行: 地域保健総合推進事業「健康危機における保健所の調整機能の強化に関する研究」第2回班会議, 奈良, 2013.11.23.
- 4) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子, 山内貴史, 小高真美: WHO世界自殺レポート会議, 東京, 2013.12.16-17.

- 5) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子, 山内貴史, 小高真美, 白神敬介, 大槻露華, 岩上真歩子, 久永彩香: WHO 世界自殺レポート会議関連行事, 東京, 2013.12.18.
- 6) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 白神敬介: 若年者の自殺対策のあり方に関するワーキング準備会 (予防・啓発班). 東京, 2014.1.15.
- 7) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 大槻露華: 若年者の自殺対策のあり方に関するワーキング準備会 (危機介入班), 東京, 2014.1.20.
- 8) 竹島 正: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (厚生労働科学特別研究事業) 「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討」第 2 回会議, 東京, 2014.1.26.
- 9) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子: 平成 25-27 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究「自殺の要因分析体制の確立に関する研究」心理学的剖検調査員トレーニング心理学的剖検調査員研修, 東京, 2014.1.29.
- 10) 竹島 正: (コメンテーター) 精神科医療と地域ケアの連携を目指して. 25 年度精神科医療と地域ケアの連携フォーラム, 兵庫, 2014.2.8.
- 11) 竹島 正, 後藤基行: 平成 25 年度地域保健総合推進事業「精神科医療と地域ケアの連携推進事業 (分担事業者: 山田全啓)」第 3 回班会議, 兵庫, 2014.2.8.

C. 講演

- 1) 竹島 正: 生きるということ～今、つながることについて考えたい～自死問題を考える市民のつどい. 千葉市精神保健福祉センター, 千葉, 2013.9.21.
- 2) 竹島 正: こころの健康と地域づくり. 阿品台いきいきプロジェクト 公開講座. 広島, 2013.10.10.
- 3) 竹島 正: 自殺予防・自殺学. 2013 年 26 期生 ボランティア相談員 養成講座カリキュラム, 千葉, 2013.10.19.
- 4) 竹島 正: 自殺予防のめざすもの. 長崎いのちの電話開局 19 周年記念講演会, 長崎, 2013.11.2.
- 5) 竹島 正, 林 康夫, 正岡茂明, 瀬戸屋雄太郎: パネル・ディスカッション「兵庫県における自殺予防の取り組み」. WKC フォーラム: 自殺予防と地域ぐるみのサポート, 兵庫, 2013.12.19.
- 6) 竹島 正: 歴史資料館整備の現在の意味. 近現代精神医療史ワークショップ 4, 愛知, 2013.12.22.
- 7) 竹島 正: お酒の問題と自殺予防. 第 2 回市民公開セミナー, 香川, 2014.2.16.
- 8) 竹島 正: 今後の保健所における精神保健福祉活動について. 平成 25 年度自殺ハイリスク者地域支援事例検討会, 愛知県精神保健福祉センター, 愛知, 2014.3.7.
- 9) 竹島 正: 「精神」はどう変わるか—今後 20 年の予測として—. 土佐病院, 高知, 2014.3.21.
- 10) 西 大輔: うつ病にならない鉄則. 医療・医薬品情報研究会講演, 東京, 2013.6.12.
- 11) 西 大輔: うつ病の予防について. 山梨県北杜市自殺予防対策講演会, 山梨, 2013.8.31.
- 12) 西 大輔: うつ病予防のためのセルフケア. 安房保健所地域・職域連携推進事業 (講演会), 千葉, 2014.1.17.
- 13) 西 大輔: 栄養とメンタルヘルスについて. 茨城県栄養士会事業 (講演会), 茨城, 2014.1.27.
- 14) 西 大輔: うつ病予防のためのセルフケア. 公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンター 2013 年度ストレス科学シンポジウム「うつにならない」, 東京, 2014.3.9.
- 15) 後藤基行: 1954 年・63 年『精神衛生実態調査』の資料的意義と研究可能性について. 近現代精神医療史ワークショップ 4, 愛知, 2013.12.22.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Takeshima T: WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting 会長
- 2) Takeshima T: Asia Australia Mental Health International Advisory Council メンバー
- 3) 竹島 正: 日本社会精神医学会 理事
- 4) 竹島 正: 日本精神衛生学会 理事
- 5) 竹島 正: 日本自殺予防学会 理事
- 6) 竹島 正: 日本精神保健福祉政策学会 理事
- 7) 竹島 正: 日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員
- 8) 竹島 正: 日本精神神経学会「精神医療・保健福祉システム委員会」委員
- 9) 竹島 正: 第 33 回日本社会精神医学会 プログラム委員
- 10) 竹島 正: 第 38 回日本自殺予防学会プログラム委員
- 11) 竹島 正: 第 9 回国際早期精神病学学会 組織委員会委員
- 12) 立森久照: 日本社会精神医学会学術委員
- 13) 立森久照: 日本社会精神医学会総務企画委員
- 14) 西 大輔: 日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員
- 15) 西 大輔: 日本総合病院精神医学会 評議員
- 16) 西 大輔: 日本脂質栄養学会 評議員
- 17) Nishi D: The International Society for Nutritional Psychiatry Research (ISNPR; 国際栄養精神医学会) : Executive committee member

(3) 座長

- 1) 竹島 正: 精神障がいをもつ人が「ホームレス」になる原因とは何か?—ホームレスとハウスレスについて考える—(司会・コーディネーター). 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 2) 竹島 正: 日本精神神経学会が自殺対策に果たすべき役割とは(精神保健に関する委員会)(司会・コーディネーター). 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 3) 竹島 正: (シンポジウム座長) 地域社会・国民の求める精神保健医療. 第 50 回指導課程研修, 東京, 2013.6.26-27.
- 4) 竹島 正: (シンポジウム座長) The many faces of depression. 多様化するうつ病とその治療について考える—うつと医療とアートの世界—, 東京, 2013.7.6-7.
- 5) 竹島 正: (シンポジウム座長) アートでふれる、うつ心と軌跡展. アートでふれる、うつ心と軌跡展, 東京, 2013.7.8-11.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 立森久照: 日本社会精神医学会 編集委員
- 2) 西 大輔: 日本総合病院精神医学会 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) Takeshima T, Tachimori H, Nishi D: Joint Symposium convened by NCNP and the University of Melbourne. Tokyo, 2013.6.28.
- 2) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔: 第 50 回指導課程研修, 東京, 2013.6.26-27.
- 3) 川野健治, 竹島 正, 松本俊彦, 藤森麻衣子: 第 4 回心理職自殺予防研修, 東京, 2013.8.6-7.
- 4) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子: 第 7 回自殺総合対策企画研修, 東京, 2013.8.20-22.

- 5) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子: 第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2013.9.17-18.
- 6) 松本俊彦, 竹島 正, 川野健治, 藤森麻衣子: 第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修, 東京, 2013.11.5-6.
- 7) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子: 第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修, 宮城, 2013.12.3-4.

(2) 研修会講師

- 1) 竹島 正, 山内貴史: 自殺の実態と対策. 第 4 回心理職自殺予防研修, 東京, 2013.8.6-7.
- 2) 竹島 正, 山内貴史: 我が国の自殺及び自殺対策の実態. 第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2013.9.17-18.
- 3) 竹島 正, 山内貴史: 我が国の自殺及び自殺対策. 第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修, 宮城, 2013.12.3-4.
- 4) 竹島 正: 精神保健の現状と課題. 第 18 回精神保健指定医研修会, 東京, 2013.12.11.
- 5) 竹島 正: (助言者) 分科会 1 「どう向き合うか、措置業務 (警察官通報を中心に)」。第 38 回全国精神保健福祉業務研修会 in 横浜, 神奈川, 2014.2.2.
- 6) 立森久照: 疫学・統計から見た日本の精神保健. 第 50 回指導課程研修, 東京, 2013.6.26-27.
- 7) 西 大輔: 看護師のストレスマネジメント. 東京, 2013.6.3.
- 8) 西 大輔: 精神保健における予防. 第 50 回指導課程研修, 東京, 2013.6.26-27.
- 9) 西 大輔: うつ病予防のためにできること. 西東京市ゲートキーパー研修会, 東京, 2013.8.27.
- 10) 西 大輔: うつ病の理解と自殺予防. 練馬区ゲートキーパー養成研修, 東京, 2013.10.22.
- 11) 西 大輔: うつ病・自殺の理解と予防. 東大和市ゲートキーパー研修, 東京, 2013.10.30.
- 12) 西 大輔: うつ病の理解とケア. 東久留米市医師会うつ診療充実強化研修, 東京, 2013.10.30.

F. その他

- 1) Takeshima T: mhGAP ForumWHO, Switzerland, 2013.10.7.
- 2) 竹島 正: ライフエンディング研究会. 2013.4.9.
- 3) 竹島 正: 全国精神保健福祉センター長会常任理事会. 東京, 2013.4.13.
- 4) 竹島 正: アートセラピー勉強会. 東京, 2013.4.17.
- 5) 竹島 正: 被災者支援のための情報収集. 岩手, 2013.4.30-5.1.
- 6) 竹島 正: 平成 25 年度第 1 回自殺対策主管課長等会議. 東京, 2013.5.16.
- 7) 竹島 正: 地域ケア連携を進める会. 東京, 2013.6.22.
- 8) 竹島 正: 第 8 回今後の精神科医療を語る会幹事会. 東京, 2013.7.5.
- 9) 竹島 正: 平成 25 年度第 50 回定期総会・全国精神保健福祉センター長会. 東京, 2013.7.18.
- 10) 竹島 正: アートセラピーワークショップ. 東京, 2013.7.31.
- 11) 竹島 正: 第 49 回全国精神保健福祉センター研究協議会. 三重, 2013.10.22-23.
- 12) 竹島 正: 平成 25 年度第 2 回全国自殺対策主管課長等会議. 東京, 2014.2.27.

3. 薬物依存研究部

I. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」（総務庁，平成 10 年 5 月）により，機能強化が要請され，平成 11 年度より研究室の改組及び 1 研究室の新設がなされ，下記のように 3 研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

しかし，診断治療開発研究室には人員がつかず，2 研究室体制のままであったが，平成 20 年 10 月から人員が付き，3 研究室体制となった。従来同様，平成 25 年度も，官民を問わない各種問い合わせ，講師派遣，調査・研修等各種協力依頼が殺到し，それらは人員的限界を超えるものであったが，最大限の協力を惜しなかつたつもりである。

人員構成は，次のとおりである。部長：和田 清，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：船田正彦，診断治療開発研究室長：松本俊彦，流動研究員：邱 冬梅，内海 修（ともに平成 25 年 7 月より）

II. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 薬物使用に関する全国住民調査（2013 年）

全国の 5,000 人（15～64 歳）に対する医薬品・規制薬物の使用実態と意識に関するわが国唯一最大の調査（層化 2 段無作為抽出，訪問留置法）であり，1995 年より隔年で実施されている。2013 年調査は「脱法ドラッグ」乱用の拡がりに関するわが国初の全国調査となった。生涯経験率は，有機溶剤 1.9%，大麻 1.1%，覚せい剤 0.5%，「脱法ドラッグ」0.4%，何らかの違法性薬物 2.5%であった。現時点で最も乱用されている薬物は大麻であると考えられた。生涯経験者の平均年齢は，「脱法ドラッグ」以外の薬物で 40 歳代であるのに対して，「脱法ドラッグ」生涯経験者のみが 33.8 歳であった。「脱法ドラッグ」乱用に対する啓発・教育活動と大麻乱用対策が今日的急務であると考えられる結果であった。（平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（以下，厚労科学研究）：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。和田 清，邱 冬梅，嶋根卓也）

2) 薬物乱用・依存者における HIV 感染の実態とハイリスク行動についての研究

薬物依存症者における HIV/HCV/HBV 感染の実態とハイリスク行動に関するわが国唯一の継続的定点調査である。全国 5カ所の医療施設調査（全国の精神科病院に入院中の覚せい剤関連精神障害患者の約 11% を捕捉できる）及び 6カ所での非医療施設調査を実施した。HIV 抗体陽性者は 8 名認められたが，感染経路は 7 人で男性同性愛者間での性行為であり，1 名はタイでの CSW からの感染と推定された。覚せい剤関連精神障害患者での HCV 抗体陽性率は 18.2% と高かった。厚労科学研究：エイズ対策研究事業。和田 清)

3) 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査

「脱法ドラッグ」乱用について、「全国精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査 2012」のデータを再分析することによって、「脱法ドラッグ」関連障害 (DDRD) 患者の臨床的特徴を覚せい剤関連障害 (MARD) 患者および睡眠薬・抗不安薬関連障害 (HARD) 患者との比較を通じて明らかにした。その結果、DDRD 患者は MARD 患者および HARD 患者に比べて若年かつ男性に多く、生活背景については HARD 患者と共通している一方で、薬物使用の理由はむしろ MARD 患者と共通していることが示唆された。(厚労科学研究：障害者対策総合研究事業。松本俊彦，嶋根卓也，和田 清)

4) クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究 (2013 年)

医療的に事例化していない「脱法ドラッグ」使用者の実態を把握するために、東京都内で開催されたクラブイベントにて、「脱法ドラッグ」乱用の実態調査を実施し、307 名より有効回答を得た(有効回答率 86.5%)。形状別の生涯経験率(ハーブ系 22.8%，パウダー系 7.2%，リキッド系 3.3%)などを報告した。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。嶋根卓也，和田 清)

5) インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究

男性同性愛者に (MSM) に対する HIV 感染の予防的介入を試みた。啓発コンテンツ(セイフアーセックス編，脱法ドラッグ編，HIV 検査編)を作成し，男性同性愛者向けのアプリケーションソフトウェアにバナー広告を掲載し，啓発コンテンツを閲覧する対象者を募った。計 11,559 名より有効回答が得られ，啓発コンテンツ閲覧前後で，コンドーム使用に対する態度，HIV 予防に対する態度，薬物問題の相談に関する知識，HIV 検査受検に対する態度に大幅な改善がみられた。(厚労科学研究：エイズ対策研究事業。嶋根卓也)

6) 薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究

保険薬局に勤務する薬剤師を情報源として，向精神薬乱用・依存に重点を置いたゲートキーパー研修会を実施し，研修会が薬剤師の知識・自己効力感・行動(患者への声かけなど)に与える影響を検証した。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。嶋根卓也)

B. 臨床研究

1) 薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究

薬物依存症治療プログラム (SMARPP) の実施構造の改訂(回復者をコ・ファシリテーターに迎え入れるとともに，人的交流を通じて，SMARPP 運営スタッフと地域の精神保健福祉センターやダルクとの連携体制を強化)とその効果の検証を行った。その結果，患者 1 人あたりの平均セッション参加回数が増加するなど，治療継続性の向上を示唆する効果が認められた。さらに，家族支援プログラムである CRAFT ワークブックの作成も行い，次年度の施行の準備を整えた。(平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費，松本俊彦。厚労科学研究：障害者対策総合研究事業(精神分野)，松本俊彦)

2) HIV 拠点病院と連携した薬物依存者支援システムの構築と治療プログラムの開発に関する研究

HIV 拠点病院と連携した薬物依存者支援システムの構築と治療プログラムの開発に関する研究を行うために，HIV 拠点病院における HIV 陽性者(患者群)が抱える薬物関連問題を民間回復支援施設 (DARC) の薬物依存者(対照群)と比較することで，物質使用障害を合併した HIV 陽性者の臨床的特徴を明らかにすることを試みた。(平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費。嶋根卓也)

C. 基礎研究

1) カチノン系化合物の精神依存性に関する基盤的研究

「脱法ハーブ」に含まれているカチノン系化合物の精神依存性について，特徴的評価パラメーターの探索を行った。その結果，薬物依存性は条件付け場所嗜好性試験により効率よく評価でき，運動促進作用は「脱法ハーブ」に含まれるカチノン系化合物の混在を確認する上で，特徴的な評価パ

ラメーターになるものと考えられた。(厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。船田正彦)

2) 合成カンナビノイドの細胞毒性評価に関する研究

マウス線条体の初代培養神経細胞を使用して、合成カンナビノイド(XLR-11, 5F-QUPIC)暴露による細胞毒性の評価を行った。薬物添加3時間後に、死細胞由来プロテアーゼ遊離を測定し、細胞毒性の指標とした。本試験により、XLR-11, 5F-QUPIC は細胞毒性を惹起することから、乱用することにより重篤な健康被害の発生が危惧される。培養細胞を利用した細胞毒性の評価は迅速かつ正確な毒性評価法として有用であると考えられる。(厚労科学研究：大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究。船田正彦)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

当研究部は、研究部創設以来、厚生労働省に限らず、薬物乱用・依存対策に関係する各都府・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており、独自に研修会を主催するのみならず、各種研修会への講師派遣、啓発用資料および教材作成、調査等への協力などを行っている(細目は研究業績参照)。

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(Ⅳ. 研究業績 C.講演 参照)
- ・報道：(Ⅳ. 研究業績 F.その他 参照)

2) 専門教育面における貢献

- ・研修会・研究会
 - ・第27回薬物依存臨床医師研修会(主催)、第15回薬物依存臨床看護研修会(主催)、第5回薬物依存症に対する認知行動療法研究会(主催)
 - ・各種研修会等への講師派遣(Ⅳ. 研究業績 C.講演 参照)
- ・大学教育
 - 昭和大学薬学部兼任講師(和田 清)、早稲田大学人間科学学術院非常勤講師(松本俊彦)、星薬科大学非常勤講師(船田正彦)、津田塾大学非常勤講師(嶋根卓也)、国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師(嶋根卓也)。
- ・その他
 - "Addiction" Editorial advisory board (和田 清)、Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer (和田 清, 松本俊彦)。

3) 精研の研修の主催と協力

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・政府委員会
 - 厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員指定薬物部会(和田 清)、厚生労働省医薬品安全局依存性薬物検討会委員(和田 清)、法務省保護局「薬物地域支援研究会」メンバー(和田 清, 松本俊彦)、法務省矯正局「少年矯正の処遇等に関する専門家会議」メンバー(和田 清, 松本俊彦)、文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員(松本俊彦)、内閣府共生社会政策「若年者向け薬物再乱用防止プログラム」企画分析会議委員(松本俊彦)。
- ・その他公的委員会
 - 東京都薬物情報評価委員会委員(和田 清)、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員(和田 清)、大阪府薬物指定審査会委員(和田 清)、東京地方裁判所登録精神保健判定医(松本俊彦)、世田谷区自殺対策連絡協議会会長(松本俊彦)、中央区自殺対策検討委員会委員長(松本俊彦)、横浜市こころの健康相談センター自殺統計分析協力委員(松本俊彦)、両全会覚せい剤事犯社会復帰サポートプロジェクト推進委員会委員(松本俊彦)、神奈川県精神保

健福祉センター主催水と緑のいのちの地域ネットワーク会議アドバイザー（松本俊彦），東京都教育庁「部活動指導の在り方」検討委員会委員（松本俊彦），東京都脱法ドラッグ専門調査委員会専門委員（船田正彦），社団法人全国高等学校PTA連合会薬物乱用防止啓発パンフレット編集委員（嶋根卓也），公益社団法人日本薬剤師会地域保健委員会委員（嶋根卓也），一般社団法人埼玉県薬剤師会理事（嶋根卓也），一般社団法人埼玉県薬剤師会職能対策・学術委員（嶋根卓也），中央区自殺対策協議会「向精神薬の乱用・依存に関するアンケート調査」協力者（嶋根卓也）。

・研究成果の行政貢献

- ・「脱法ドラッグ」「指定薬物」について，依存性・細胞毒性等を評価し，薬物使用の禁止・制限について具体的な提案（依存性薬物の指定）を行った（厚労省医薬食品局）。
- ・「刑の一部執行猶予」制度導入を見越して，薬物依存者に対する「保護観察所における治療プログラムの開発」，ならびに，「地域支援ガイドライン」（案）の策定とそのモデル事業の推進に貢献した（法務省保護局）。
- ・少年院収容者に対する薬物離脱指導プログラム導入に対して，「矯正教育プログラム（薬物非行）」策定とその推進に貢献した（法務省矯正局）。

5) センター内における臨床的活動

毎週木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに，デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している（和田 清，松本俊彦）。また，毎週火曜日に医療観察法病棟（8病棟，9病棟）にて物質使用障害治療プログラムの運営をサポートしている（松本俊彦）。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Matsumoto T, Imamura F, Kobayashi O, Wada K, Ozaki O, Takeuchi Y, Hasegawa M, Imamura Y, Taniya Y, Adachi Y: Evaluation of a relapse prevention program for methamphetamine-dependent inmates using a self-teaching workbook and group therapy. *Psychiatry Clin Neurosci*. 68: 61–69, 2014.
- 2) Matsumoto T, Tachimori H, Tanibuchi Y, Takano A, Wada K: Clinical features of patients with designer drugs-related disorder in Japan : A comparison with patients with methamphetamine- and hypnotic/anxiolytic-related disorders. *Psychiatry Clin Neurosci*. 68: 374–382, 2014.
- 3) Funada M, Aoo N, Wada K: Rewarding effects of N-methyl-1-(4-Methoxyphenyl)-2-aminopropane (PMMA) in mice: role of modifications of dopamine system mediated through its monoamine oxidase inhibition. *J Addict Res Ther* 5:172. 2014. doi: 10.4172/2155-6105.1000172.
- 4) Ando S, Matsumoto T, Kanata S, Hojo A, Yasugi D, Eto N, Kawanishi C, Asukai N, Kasai K: One-year follow up after admission to an emergency department for drug overdose in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*. 67: 441-450, 2013.
- 5) Akazawa M, Matsumoto T, Kumagai N: Prevalence of problematic drinking among outpatients attending general hospitals in Tokyo. *Japanese Journal of Alcohol and Drug Dependence* 48: 300-313, 2013.
- 6) Kodaka M, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Tachimori H, Kawakami N, Eguchi N, Shirakawa N, Takeshima T: Suicide risk among individuals with sleep disturbances in Japan: a case-control psychological autopsy study. *Sleep Medicine* 15(4): 430-435, 2014.

- 7) Tomiyama K, Funada M: Cytotoxicity of synthetic cannabinoids on primary neuronal cells of the forebrain: the involvement of cannabinoid CB1 receptors and apoptotic cell death. *Toxicol Appl Pharmacol* 274(1): 17-23, 2014.
- 8) 松本俊彦, 井出文字, 銘苺美世: 過量服薬は自殺と自傷のいずれなのか: 自殺意図の有無による過量服薬患者の比較. *精神医学* 55(11): 1073-1083, 2013.
- 9) 邱冬梅, 坂本なほ子, 荒田尚子, 大矢幸弘: 低出生体重児の母体要因に関する疫学研究. *厚生生の指標* 61(1): 1-8, 2014.
- 10) 谷渕由布子, 松本俊彦, 小林桜児, 和田清: 薬物依存症専門外来における脱法ハーブ乱用・依存患者の臨床的特徴—覚せい剤乱用・依存患者との比較—. *精神神経学雑誌* 115(5): 463-476, 2013.
- 11) 谷渕由布子, 松本俊彦, 立森久照, 高野 歩, 和田清: 「脱法ドラッグ」乱用・依存患者の臨床的特徴—乱用する製品の形状による比較—. *精神科治療薬* 29(1): 113-124, 2014.
- 12) 三好美浩, 勝野眞吾, 和田清: 全国高校生におけるクラブ活動および運動と喫煙・飲酒・薬物乱用との関連—2004, 2006, 2009年JSPAD調査のボンド・サンプルの結果—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 48(6): 426-444, 2013.
- 13) 山口 豊, 窪田辰政, 松本俊彦, 橋本佐由理, 宗像恒次: 思春期自傷行為と否定的自己イメージの因果モデルに関する研究. *思春期学* 32(2): 227-237, 2013.
- 14) 今村扶美, 松本俊彦, 朝波千尋, 出村綾子, 川地 拓, 山田美沙子, 網干 舞, 平林直次: 医療観察法における「内省プログラム」の開発と効果—待機期間を対照群とした介入前後の効果測定—. *精神科治療学* 28(10): 1368-1378, 2013.
- 15) 亀山晶子, 勝又陽太郎, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 小高真美, 竹島 正: 生前に自殺関連行動のあった事例の生存時間に影響する心理社会的要因. *精神医学* 55(12): 1155-1163, 2013.
- 16) 山口 豊, 中村結美花, 窪田辰政, 松本俊彦, 橋本佐由理, 宗像恒次: 思春期自傷行為と心理特性との関連についての予備的研究. *東京情報大学研究論集* 17(2): 13-20, 2014.
- 17) 高野 歩, 川上憲人, 宮本有紀, 松本俊彦: 物質使用障害患者に対する認知行動療法プログラムを提供する医療従事者の態度の変化. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49(1): 28-38, 2014.
- 18) 池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 山本和弘, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子: 措置入院指定病院の立場における違法物質使用障害者への退院支援策の検討—司法的処遇と薬物採尿検査に着目した4事例から—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49(1): 45-56, 2014.
- 19) 勝又陽太郎, 赤澤正人, 松本俊彦, 小高真美, 亀山晶子, 白川教人, 五十嵐良雄, 尾崎 茂, 深間内文彦, 榎本 稔, 飯島優子, 竹島 正: 中高年男性うつ病患者における自殺のリスク要因: 心理学的剖検を用いた症例対照研究による予備的検討. *精神医学* 56(3): 199-208, 2014.
- 20) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 小高真美, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 立森久照, 竹島 正: 過去に自殺企図歴のない成人男性における自殺のリスク要因の検討. *精神科治療学* 29(4): 519-526, 2014.
- 21) 近藤あゆみ, 井手美保子, 高橋郁絵, 谷合知子, 三浦香澄, 山口亜希子, 四辻直美, 松本俊彦: 精神保健福祉センターにおける薬物依存症再発予防プログラム「TAMARPP」の有効性評価. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 49(2): 119-135, 2014.
- 22) 池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子, 岩波 明: 措置入院指定病院に入院する違法物質使用障害者の実態調査—退院時における逮捕群と非逮捕群との比較から. *日本社会精神医学会雑誌* 23: 112-122, 2014.

(2) 総説

- 1) Wada K, Funada M, Matsumoto T, Shimane T: Current status of substance abuse and HIV infection in Japan. *Journal of Food and Drug Analysis* 21: S33-S36. 2013.

- 2) 和田 清, 船田正彦, 松本俊彦, 嶋根卓也: わが国の薬物乱用・依存の最近の動向—特に「脱法ドラッグ」問題について—. 臨床精神医学 42(9): 1069-1078, 2013.
- 3) 和田 清: 子どもの環境と薬物乱用の現状—16年間にわたる中学生調査からみて—. 小児科臨床 66(11): 2179-2184, 2013.
- 4) 和田 清: 第I部 総論 2. 物質の乱用・依存・中毒とその疾病性について. 精神科治療学 Vol. 28 増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック: 16-21, 2013.
- 5) 松本俊彦: 自傷行為～その理解と援助～. 思春期学 31(1): 37-41, 2013.
- 6) 松本俊彦: 不安障害の薬物療法と新たな治療薬依存. 精神科治療学 28: 463-470, 2013.
- 7) 松本俊彦: 第3章 診断・症状トピックス 43 アルコール依存/44 薬物依存. 精神科臨床サーベイス 13 (特集 精神保健・医療・福祉の今がわかるキーワード 126): 196-197, 2013.
- 8) 松本俊彦: 臨床ゼミ アディクション: ゆるやかな共助のためのエチュード 第1回 アディクション—精神医学の鬼っ子. 臨床心理学 13: 435-443, 2013.
- 9) 松本俊彦: 5. アルコールにまつわる諸問題 2) アルコールと自殺. Progress in Medicine 33: 893-897, 2013.
- 10) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存からみた今日の精神科治療の課題: ベンゾジアゼピンを中心に. 臨床精神薬理 16(6): 803-812, 2013.
- 11) 松本俊彦: 精神科ユーザーの妊娠出産⑤精神作用物質. 精神科治療学 28(5): 579-584, 2013.
- 12) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清: 少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラム: その有効性と利用可能性. 精神神経学雑誌 115(5): 455-462, 2013.
- 13) 松本俊彦: わが国の自殺の現状と自殺予防に期待する薬剤師の役割. 薬学雑誌 133(6): 599-615, 2013.
- 14) 松本俊彦: 現代社会とうつ病: うつ病と自殺予防. 最新医学 68(6): 1150-1153, 2013.
- 15) 松本俊彦: 若者の精神保健② 自傷行為. 公衆衛生 77(6): 430-433, 2013.
- 16) 松本俊彦: 薬物依存患者への疾病教育. 日本精神科病院協会雑誌 32(6): 559-566, 2013.
- 17) 松本俊彦: 薬物依存症臨床における倫理—医療スタッフ向け法的行動指針—. 精神神経学雑誌 115 第108回学術総会特別号: SS1-9, 2013.
- 18) 松本俊彦: 薬物依存と発達障害—薬物依存臨床における注意欠陥・多動性障害傾向をもつ成人の特徴—精神神経学雑誌 115(6): 643-651, 2013.
- 19) 松本俊彦: HIV感染症治療における HAND と精神疾患: 精神疾患と薬物依存. HIV BODY AND MIND 2(1): 41-46, 2013.
- 20) 松本俊彦: 特集 8 精神科救急における物質関連障害の治療的対応: 精神科救急における向精神薬関連障害の治療から危機介入と予防を中心に～. 精神科救急 16: 135-139, 2013.
- 21) 松本俊彦, 松下幸生, 奥平謙一, 成瀬暢也, 長 徹二, 武藤岳夫, 芦沢 健, 小沼杏坪, 森田展彰, 猪野亜朗: 物質使用障害患者における自殺の危険因子とその性差: 年齢, 乱用物質の種類, およびうつ病との関連. 精神神経学雑誌 115(7): 703-710, 2013.
- 22) 松本俊彦: 脱法ドラッグ乱用の実態. 季刊 Be! 112: 42-45, 2013.
- 23) 松本俊彦: 薬物依存症の治療～ワークブックを用いた治療プログラム『スマープ』について～. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2013.2・第89号: 2-7, 2013.
- 24) 松本俊彦: I うつ病にまつわる最新キーワード うつとアルコール. 調剤と情報 臨時増刊号 19: 1314-1315, 2013.
- 25) 松本俊彦: III うつ病患者へのアプローチ アルコールとうつ. 調剤と情報 臨時増刊号 19: 1348-1353, 2013.
- 26) 松本俊彦: 研究会レポート 第5回兵庫不安とうつの臨床研究会 アルコール・薬物乱用と自殺予防. 分子精神医学 13: 324-329, 2013.

- 27) 松本俊彦：自傷という暴力. こころの科学 172：2013年11月号：54-59, 2013.
- 28) 松本俊彦：6. 物質使用障害とアディクションの精神病理学—「自己治療仮説」の観点から—精神科治療学 第28巻増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック：46-51, 2013.
- 29) 松本俊彦：第I部総論 7) 新しい治療モデル—「底つき」モデルを乗り越えて—. 2. 物質使用障害に対するワークブックを用いた治療プログラム. 精神科治療学 第28巻増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック：59-65, 2013.
- 30) 松本俊彦：第III部 薬物使用障害 16. 薬物使用障害臨床における司法的問題への対応. 精神科治療学 第28巻増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック：294-299, 2013.
- 31) 松本俊彦：処方薬乱用にみる精神科医療. こころの科学増刊号 くすりにたよらない精神医学, pp74-80, 2013.
- 32) 松本俊彦：社会の“痛み”を癒す—ケアの心理と病理 Vol. 7 自傷とケア—“故意に自分の健康を害する”症候群. 医学のあゆみ 247(11)：1198-1200, 2013.
- 33) 松本俊彦, 谷渕由布子：脱法ドラッグによる精神障害 vs. 内因性精神病. 精神科 23(6)：644-651, 2013.
- 34) 松本俊彦：処方薬依存. 精神看護 17(1)：12-18, 2014.
- 35) 松本俊彦：違法薬物使用を知った医療者に、通報義務はあるのか. 精神看護 17(1)：29-36, 2014.
- 36) 松本俊彦：自分の体を傷つける—自傷行為. 児童心理 臨時増刊 2014年2月号 No.981「子どもの精神医学」を学ぶ. 75-80, 2014.
- 37) 松本俊彦：脱法ドラッグの現状. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2013.2・第90号：2-5, 2014.
- 38) 松本俊彦：脱法ドラッグの現況. 心と社会 45(1)：120-127, 2014.
- 39) 松本俊彦：職能ワークショップ 3 (保健師)：事例検討 アディクションとしての自傷～「故意に健康を害する」症候群としてのアディクション～. 日本アルコール関連問題学会雑誌 15(2)：113-116, 2013.
- 40) 松本俊彦, 小高真美, 山内貴史, 川野健治, 藤森麻衣子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 白川教人, 竹島 正：心理学的剖検と今後の方向. 精神保健研究 60：89-96, 2014.
- 41) 船田正彦, 富山健一, 和田 清：脱法ハーブ乱用の危険性とその規制. 臨床精神医学 42：1093-1099, 2013.
- 42) 船田正彦：脱法ハーブ乱用の蔓延と乱用防止について. 社会薬学 32：12-17, 2013.
- 43) 嶋根卓也：一般用医薬品のインターネット販売解禁が及ぼす乱用・依存症の危険性. 大阪保険医雑誌 41(567)：13-16, 2013.
- 44) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師. 調剤と情報 19(10)：36-37, 2013.
- 45) 嶋根卓也：薬剤師から見た「処方薬を適切に使えない患者たち」. 調剤と情報 19(10)：126-130, 2013.
- 46) 嶋根卓也, 日高庸晴：薬物使用障害と性的マイノリティ, HIV. 精神科治療学 28 (増刊号)：289-293, 2013.
- 47) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師：医薬品の薬物乱用・依存への対応. YAKUGAKU ZASSHI133(6)：617-630, 2013.
- 48) 嶋根卓也：医薬品乱用・依存のゲートキーパーとしての薬剤師. 薬局 65(3)：149-155, 2014.
- 49) 嶋根卓也：ゲートキーパー研修会の報告. 埼玉県薬剤師会雑誌 40(2)：6-8, 2014.
- 50) 廣川聖子, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 亀山晶子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正：精神科治療を受けていた自殺既遂者の心理社会的特徴：心理学的剖検による 76 事例の検討. 精神神経学雑誌 115(9)：923-932, 2013.

- 51) 今村扶美, 松本俊彦: 論説 ケーススタディーアディクションの症例. 臨床心理学 増刊第5号: 208-211, 2013.
- 52) 池田朋広, 池田朋広, 常岡俊昭, 稲本淳子, 松本俊彦: 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック 第V部 物質使用障害とアディクションをめぐる様々な問題 1)複雑な症例の治療 1.重複診断症例の臨床的特徴と治療 1)—統合失調症—. 精神科治療学 第28巻増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック: 357-363, 2013.
- 53) 山内貴史, 松本俊彦: 自殺と死生観 自殺と文明. 最新精神医学 18(5): 455-460, 2013.
- 54) 山口 豊, 窪田辰政, 須部宗生, 杉山三七男, 下川 学, 横沢民男, 松本俊彦: 自傷行為の実態について. 国士舘大学 21世紀アジア学会 21世紀アジア学研究第11号: 73-83, 2014.
- 55) 竹島 正, 山内貴史, 松本俊彦: わが国における自殺の原因分析と自殺対策の展望. 公衆衛生 78(4): 230-235, 2014.
- 56) 山口 豊, 窪田辰政, 杉山三七男, 橋本佐由理, 松本俊彦, 宗像恒次: 自傷行為研究における課題. 思春期学 32: 197-206, 2014.

(3) 著書

- 1) 和田 清: 11.薬物乱用と健康. 現代高等保健体育 教授用参考資料. 大修館書店, 東京, pp.88-95, 2013.4.1.
- 2) 和田 清: 11.薬物乱用と健康. 最新高等保健体育 教授用参考資料. 大修館書店, 東京, pp.88-95, 2013.4.1.
- 3) 和田 清: 16.環境要因と疾患・中毒 7)麻薬・覚醒剤を含む精神作用物質による依存と中毒. 内科学第10版. 朝倉書店, 東京, pp2392-2395, 2013.6.10.
- 4) 和田 清: 薬物乱用の問題点—医学的視点から—第1回依存形成の恐ろしさ—乱用・依存・中毒の違い. 体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース 縮刷活用版 2013年. 中・高校編. 少年写真新聞社, 東京, pp157-157, 2013.4.30.
- 5) 和田 清: 薬物乱用の問題点—医学的視点から—第2回身体依存と精神依存. 体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース 縮刷活用版 2013年. 中・高校編. 少年写真新聞社, 東京, pp158-158, 2013.4.30.
- 6) 和田 清: 薬物乱用の問題点—医学的視点から—第3回中学生対象の全国調査からわかること. 体と心 保健総合大百科 保健ニュース・心の健康ニュース 縮刷活用版 2013年. 中・高校編. 少年写真新聞社, 東京, pp159-159, 2013.4.30.
- 7) 松本俊彦: §5 摂食障害とアルコール依存. 堀川直史 編集 あらゆる診療科でよくであろう精神疾患を見きわめ、対応する: 適切な診断・治療と患者への説明、専門医との連携のために. pp132-149, 羊土社, 東京, 2013.
- 8) 松本俊彦: 第1章 7. マトリックス・モデルとは何か? 治療プログラムの可能性と限界. 石塚伸一 編著 薬物政策への新たなる挑戦—日本版ドラッグ・コートを越えて. pp80-96, 日本評論社, 東京, 2013.
- 9) 松本俊彦: 第3章 6 自傷行為と自殺企図の基礎知識. 三木とみ子・徳山美智子 編 養護教諭が行う健康相談・健康相談活動の理論と実際. pp57-62, ぎょうせい, 東京, 2013.
- 10) 松本俊彦: 第2部 第3章 アルコール・薬物依存症と衝動的行動: 暴力、自傷・自殺、摂食障害を中心に. 和田 清 編 精神科臨床エキスパート 依存と嗜癖 どう理解し、どう対処するか. pp63-78, 医学書院, 東京, 2013.
- 11) 松本俊彦: 嗜癖と依存. シリーズ生命倫理学編集委員会 編 シリーズ生命倫理学 9 精神科医療 (責任編集 中谷陽二・岡田幸之). pp201-227, 丸善出版, 東京, 2013.
- 12) 松本俊彦: 第2部 III 青壮年 中毒性精神病. 鹿島晴雄, 古城慶子, 古茶大樹, 針間博彦, 前田貴記 編: 妄想の臨床. pp310-322, 新興医学出版社, 東京, 2013.

- 13) 松本俊彦：第Ⅱ部 第3章 素行障害の併存障害 e) 物質乱用. 齊藤万比古編素行障害：診断と治療のガイドライン. 124-133, 金剛出版, 東京, 2013.
- 14) 松本俊彦：8-2-7 パーソナリティ障害. 精神保健福祉白書編集委員会 編 精神保健福祉白書 2014年版 歩み始めた地域総合支援. pp165, 中央法規出版, 東京, 2014.
- 15) 松本俊彦：Ⅵ 生理的障害及び身体的要因に関連した行動症候群. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 改訂 新版精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療. pp119-127, へるす出版, 東京, 2014.
- 16) 松本俊彦：Ⅶ 成人のパーソナリティおよび行動の障害. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 改訂 新版精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療. pp127-140, へるす出版, 東京, 2014.
- 17) 松本俊彦：Ⅲ アルコール関連問題対策. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 改訂 新版精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療. pp107-123, へるす出版, 東京, 2014.
- 18) 松本俊彦：Ⅳ 薬物乱用防止対策. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編 改訂 新版精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療. pp123-142, へるす出版, 東京, 2014.
- 19) 松本俊彦：8. 破壊的行動障害 C. 薬物乱用. 齊藤万比古 総編集 子どもの心の診療シリーズ 子どもの心の処方箋ガイド 診察の仕方／診断評価／治療支援. pp329-331, 中山書店, 東京, 2014.
- 20) 松本俊彦：B. 子どもの心の診療特有の問題. 4 自傷行為. 齊藤万比古・小平雅基 編集 日本精神神経学会小児精神医療委員会監修 臨床医のための小児誠意新医療入門. pp117-121, 医学書院, 東京, 2014.
- 21) 松本俊彦：第4章 治療 衝動・逸脱行動に対する対処. 齋藤利和 編集 最新医学別冊 新しい診断と治療のABC 83 アルコール依存症 精神9. pp143-151, 2014.
- 22) 松本俊彦：子どものこころの発達を知るシリーズ 01 自傷・自殺する子どもたち. 合同出版, 東京, 2014.
- 23) 嶋根卓也：薬剤師からみた くすり漬け問題. 井原 裕, 松本俊彦 編：くすりにたよらない精神医学. 日本評論社, 東京, pp35-39, 2013.
- 24) 嶋根卓也：医薬品の乱用・依存. 中学保健ニュース (1565号). 少年写真新聞社, 東京, pp1, 2013.
- 25) 嶋根卓也：気をつけよう薬のリスク. 中学保健ニュース (1565号). 少年写真新聞社, 東京, pp6-7, 2013.
- 26) 嶋根卓也：医薬品を正しく使えない人たち—ゲートキーパーとしての薬剤師①—. Excellent Pharmacy 5月1日号. メディファーム株式会社, 東京, pp7-9, 2013.
- 27) 嶋根卓也：医薬品を正しく使えない人たち—ゲートキーパーとしての薬剤師②—. Excellent Pharmacy 7月1日号. メディファーム株式会社, 東京, pp11-13, 2013.
- 28) 嶋根卓也, 日高庸晴：性的マイノリティと薬物乱用・依存の関係. 和田 清 編：依存と嗜癖—どう理解し, どう対処するか—. 医学書院, 東京, pp115-126, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 和田 清, 森田展彰, 山田幸子, 他：民間施設における薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (2012年). 平成24年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)「高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向のモニタリングに関する研究 (主任研究者：木原正博)」総括・分担研究報告書. pp259-270, 2013.
- 2) 和田 清：「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」と

- その家族に対する支援に関する研究 (H25-医薬一般-018). 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)総括研究報告書. pp1-16, 2014.
- 3) 和田 清, 邱 冬梅, 嶋根卓也: 飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査 (2013 年). 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究 (H25-医薬一般-018)」研究報告書. pp17-94, 2014.
 - 4) 和田 清, 石橋正彦, 中村亮介, 前岡邦彦, 森田展彰, 他: 薬物乱用・依存者における HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (2013 年). 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)「高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向のモニタリングに関する研究 (主任研究者: 木原正博)」総括・分担研究報告書. pp180-199, 2014.
 - 5) 松本俊彦, 立森久照, 谷渕由布子, 高野 歩, 和田 清: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者 和田 清)」総括・分担研究報告書. pp95-105, 2014.
 - 6) 松本俊彦, 小高真美, 立森久照, 山内貴史, 竹島 正, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究—睡眠障害と自殺の関連: 心理学的剖検研究による症例対照研究—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究 (研究代表者 福田祐典)」総括・分担研究報告書. pp45-58, 2014.
 - 7) 舩田正彦: 25-1 大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究. 平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費による研究報告集 (2 年度班・初年度班). (独) 国立精神・神経医療研究センター. 2014.3.
 - 8) 舩田正彦: 違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者: 舩田正彦) (H24-医薬一般-008). 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 平成 25 年度総括研究報告書. pp1-13, 2014.
 - 9) 舩田正彦: カチノン系化合物の行動薬理学的特性とモノアミントランスポーターの関連性. 違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者: 舩田正彦) (H24-医薬一般-008). 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 研究報告書. pp14-28, 2014.
 - 10) 嶋根卓也, 藤原英憲, 宮野廣美, 西川真司: 薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究 (研究代表者: 和田 清)」平成 25 年度総括分担研究報告書. pp127-140, 2014.
 - 11) 嶋根卓也, 日高庸晴: インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究—REACH Online 2013—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)「HIV 感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究 (研究代表者: 日高庸晴)」平成 25 年度総括分担研究報告書. pp46-77, 2014.
 - 12) 嶋根卓也, 日高庸晴: インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究—REACH Online—. 平成 23~25 年度厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)「HIV

感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究（研究代表者：日高庸晴）」平成 23～25 年度総合研究報告書. pp27-34, 2014.

- 13) 嶋根卓也, 和田 清, 日高庸晴：クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究 (2013). 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」. 平成 25 年度分担研究報告書. pp58-70, 2014.
- 14) 小林桜児, 和田 清, 石橋正彦, 中村亮介, 前岡邦彦：精神科医療施設に於ける薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (2012 年). 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）「高リスク層の HIV 感染監視と予防啓発及び内外の HIV 関連疫学動向のモニタリングに関する研究（主任研究者：木原正博）」総括・分担研究報告書. pp245-258, 2013.
- 15) 竹島 正, 川野健治, 藤森麻衣子, 松本俊彦, 山内貴史, 福永龍繁, 鈴木秀人, 引地和歌子, 白川教人, 勝又陽太郎, 小高真美, 大槻露華, 白神敬介, 岩上真歩子, 久永彩香：自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究（研究代表者：福田祐典）」総括・分担研究報告書, pp7-14, 2014.
- 16) 竹島 正, 久永彩香, 山内貴史, 小高真美, 松本俊彦：自殺の要因分析体制の確立に関する研究—諸外国における心理学的剖検の症例対照研究の研究手法の検討—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究（研究代表者：福田祐典）」総括・分担研究報告書, pp15-38, 2014.

(5) 翻訳

- 1) 松本俊彦 訳：人はなぜ依存症になるのか～自己治療としてのアディクション. 星和書店, 東京, 2013. (Edward J. Khantzian, Mark J. Albanese : Understanding addiction as self-medication : finding hope behind the pain, Rowman & Littlefield Publishers, Ranham, 2008.)
- 2) 松本俊彦, 吉田精次 監訳 渋谷繭子 訳：CRAFT 依存症者や家族のための対応ハンドブック. 金剛出版, 東京, 2013. (Robert J. Meyers, Brenda L. Wolfe : Get Your Loved One Sober. Hazelden Foundation, Center City, 2004.)
- 3) 船田正彦 監訳, 太田英伸, 斎藤顕宣, 嶋根卓也, 富山健一：溺れる脳—人はなぜ依存症になるのか. 東京化学同人, 東京, 2014. (Kuhar M: The addicted brain: why we abuse drugs, alcohol, and nicotine. Pearson Education, New Jersey, 2012.)

(6) その他

- 1) 和田 清：依存症治療最前線「社会モデル」から「医療モデル」への急速な転換. 季刊リカバリーアイランド沖縄 Vol.002 : 7-7, 2013.10.
- 2) 和田 清：私の提言 薬物乱用防止教育の原点の再確認を. 心とからだの健康 Vol.17, No.190. 健学社 9-9, 2013.12.1.
- 3) 和田 清：3 講義 薬物の乱用, 依存, 中毒の違いと「脱法ドラッグ」を理解する. 第 63 回全国学校保健研究大会報告書. 秋田県教育委員会, pp76-77, 2014.
- 4) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち. 東京都こころの健康だより 107 : 6, 2013.
- 5) 嶋根卓也（協力）：薬物等に対する意識等調査報告書. 文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課, 東京, pp1-190, 2013.

- 6) 嶋根卓也：薬剤師は薬物乱用・依存患者をどう支えるか。日本薬学会第133年会開催「薬科学の底力」。月刊薬事 55(5)：88-90, 2013.
- 7) 嶋根卓也：医薬品の乱用・依存に薬剤師はどうかかわれるか。日本薬学会第133年会開催「薬科学の底力」。調剤と情報 19(5)：3-5, 2013.
- 8) 嶋根卓也：過量服薬防止に向けて薬剤師の役割を考える。2013年度第1回社会薬学フォーラム。調剤と情報 19(8)：70-71, 2013.
- 9) 嶋根卓也（監修）：薬物乱用防止はあなたが主役。薬物乱用防止パンフレット。全国高等学校PTA連合会，東京，pp1-15, 2014.
- 10) 嶋根卓也：埼玉県薬剤師会におけるゲートキーパー研修会について。SAITAMA 精神保健福祉だより 82, 9-10, 2014.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Wada K, Funada M, Shimane T: Current status of substance abuse and HIV in Japan. The 2013 International Conference on Global Health: Prevention and Treatment of Substance Use Disorders and HIV, Taiwan, 2013.4.17-19.
- 2) Matsumoto T: Drugs and suicide. Symposium 3 Drugs and mental disorder: Issues for diagnosis and treatment. CINP Special congress on addiction and mental health, Kuala Lumpur, 2013.10.1.
- 3) 和田 清, 船田正彦, 嶋根卓也, 松本俊彦: 脱法ドラッグを含む薬物の乱用・依存・中毒. 第60回北海道薬学大会 北海道薬剤師会学校薬剤師部会, 北海道, 2013.5.19.
- 4) 和田 清, 船田正彦, 嶋根卓也, 松本俊彦: 薬物の乱用・依存・中毒と脱法ドラッグ. 日本法中毒学会第32年会, 千葉, 2013.7.5.
- 5) 和田 清: 最近の薬物乱用状況と青少年の薬物乱用問題—「脱法ドラッグ」を含めて—. 第60回近畿学校保健学会, 兵庫, 2013.7.7.
- 6) 和田 清: 子どもの環境と薬物乱用の現状—若者のたばこ・アルコール・薬物使用の現状と対策. 総合シンポジウム 9 子どもの生活環境を考える. 第116回日本小児科学会学術集会, 広島, 2013.4.19-21.
- 7) 和田 清, 水野奈津美, 嶋根卓也: シンポジウム8「薬物乱用の動向とその防止策」全国の中学生における薬物乱用の実態とその生活背景. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013.10.5.
- 8) 松本俊彦: よくわかる向精神薬乱用・依存の予防. シンポジウム28 薬物依存をめぐる多様な変化と臨床. 第109回日本精神神経学会総会, 福岡, 2013. 5. 24.
- 9) 松本俊彦: 自傷行為を繰り返す人たちとその家族への支援. 第35回日本アルコール関連問題学会 職能分科会①(保健師) 講演, 岐阜, 2013. 7.17.
- 10) 松本俊彦: 物質関連障害～SMARPPワークブックを用いた再乱用防止プログラム. 第13回日本認知行動療法学会 ワークショップ23, 東京, 2013. 8. 24.
- 11) 松本俊彦: わが国の精神科医療機関における脱法ドラッグ関連障害患者の動向と臨床的特徴. 第21回日本精神科救急学会 シンポジウム2 物質依存, 東京, 2013. 10. 4.
- 12) 松本俊彦: 全国精神科医療施設調査から見た最近の薬物関連障害の実態と特徴. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 シンポジウム8 薬物乱用の動向とその防止策, 岡山, 2013. 10. 5.
- 13) 松本俊彦: 依存の臨床から見て～. 日本線維筋痛症学会第5回学術集会 特別プログラム1 エチゾラムの適切な使い方, 神奈川, 2013. 10. 6.
- 14) 松本俊彦: 自傷行為をくりかえす若者の心理をどう理解するか? 第56回日本病院・地域精神医

- 学学会 シンポジウムC 思春期・青年期の危機—自殺に傾く心理の理解とその支援. 北海道, 2013. 10. 13.
- 15) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 第24回日本嗜癮行動学会群馬大会, 教育講演2, 群馬, 2013. 11. 2
 - 16) 松本俊彦: 薬物依存治療のあり方. 日本更生保護学会 第2回大会 シンポジウム 5 更生保護における薬物事犯者処遇について, 東京, 2013. 12. 7.
 - 17) 松本俊彦: リストカットをくりかえす生徒の理解と対応. 第6回日本不安障害学会学術大会 ランチョンセミナー 6, 東京, 2014. 2. 2.
 - 18) 松本俊彦: 薬物関連障害患者の司法的問題とその対応. 第33回日本社会精神医学会 学術委員主催教育・研究入門講座, 東京, 2014. 3. 21.
 - 19) 船田正彦: 「脱法ドラッグ」の依存性・細胞毒性評価と包括指定. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 岡山コンベンションセンター, 岡山, 2013.10.3-5.
 - 20) 嶋根卓也, 日高庸晴, 和田 清, 船田正彦: 「クラブ」における薬物乱用の実態. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会 合同総会, 岡山, 2013.10.3-5.

(2) 一般演題

- 1) Funada M, Tomiyama K, Aoo N, Wada K: Role of dopamine system on the expressing of behavioral and cytotoxicological properties of MDPV in mice. The College on Problems of Drug Dependence 75th Annual Scientific Meeting, San Diego, 2013.6.15-20.
- 2) Shimane T, Hidaka Y, Wada K, Funada M: Patterns and settings of 3, 4-methylenedioxymethamphetamine (MDMA) use at dance parties in Japan, CPDD 75th Annual Scientific Meeting, San Diego, 2013.6.15-20.
- 3) 船田正彦, 富山健一, 内海 修, 和田 清: 脱法ハーブに含まれる合成カンナビノイドの神経細胞毒性 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013.10.3-5.
- 4) 嶋根卓也, 和田 清, 日高庸晴, 船田正彦: 脱法ドラッグ使用による主観的症状と形状の関係—クラブユーザー調査より—. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会 合同総会, 岡山, 2013.10.3-5.
- 5) 嶋根卓也, 宮野廣美, 川崎裕子, 膳亀昭三, 金子伸行: 過量服薬防止に重点をおいたゲートキーパー研修を通じて薬剤師の職能を考える. 第19回埼玉県薬剤師会学術大会, 埼玉, 2013.11.10.
- 6) 嶋根卓也, 日高庸晴: MSM における脱法ドラッグ使用がコンドーム使用に与える影響—インターネット調査より—. 第27回日本エイズ学会学術集会・総会, 熊本, 2013.11.20-22.
- 7) 引土絵未, 谷渕由布子, 今村扶美, 加藤 隆, 川地 拓, 高野 歩, 若林朝子, 松本俊彦, 和田 清: 薬物依存症者に対する認知行動療法プログラム (SMARPP) おける脱法ハーブ乱用・依存患者の臨床的特徴. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013.10.4.
- 8) 三好美浩, 勝野真吾, 和田 清: 高校生の薬物乱用に対する学校クラブ種別による分類の有効性. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013.10.5.
- 9) 引土絵未, 岡崎重人, 山崎明義, 松本俊彦: 治療共同体モデルに関する研究—米国治療共同体 Amity モデルを中心に—. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013. 10. 4.
- 10) 引土絵未, 谷渕由布子, 今村扶美, 加藤 隆, 川地 拓, 高野 歩, 若林朝子, 松本俊彦, 和田 清: 薬物依存症者に対する認知行動療法プログラム (SMARPP) における脱法ハーブ乱用・依存患者の臨床的特徴. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013. 10. 5.
- 11) 近藤千春, 高野 歩, 松本俊彦: SMARPP の実施における課題の明確化のための実施機関での実態調査. 平成25年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2013. 10. 5.

- 12) 三田村俊宏, 嶋根卓也, 阿部真也, 吉町昌子, 後藤輝明, 宮本法子: 薬剤師と自殺予防～“つなぎ”の現状からゲートキーパーとしての薬剤師の役割を考える～. 日本社会薬学会第32年会, 東京, 2013.10.13-14.

(3) 研究報告会

- 1) 和田 清(主催): 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究(H25-医薬一般-018)研究成果報告会, 埼玉, 2014.2.28.
- 2) 和田 清, 邱 冬梅, 嶋根卓也: 薬物使用に関する全国住民調査. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究(H25-医薬一般-018)(研究代表者: 和田 清)平成25年度研究成果報告会, 埼玉, 2014.2.28.
- 3) 船田正彦, 富山健一, 和田 清: 合成カンナビノイド有害作用の評価. 平成25年度精神・神経疾患研究開発費「大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究(25-1)(主任研究者: 船田正彦)」研究成果報告会, 東京, 2013.12.16.
- 4) 嶋根卓也, 藤原英憲, 宮野廣美, 西川真司: 薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究」研究成果報告会, 埼玉, 2014.2.28.
- 5) 嶋根卓也, 和田 清, 日高庸晴, 船田正彦: クラブイベント来場者における形状別にみた脱法ドラッグの使用パターンと使用に伴う主観的症状について. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成25年度研究報告会, 東京, 2014.3.10.

C. 講演

- 1) 和田 清: 若年層における「脱法ドラッグ」乱用について. 東京都薬物乱用防止指導員研修会, 東京, 2013.5.15.
- 2) 和田 清: 薬物の乱用・依存・中毒の理解と全国中学生調査からみえてくるもの. 平成25年度薬物乱用防止教室講習会. 文部科学省・岐阜県教育委員会. 岐阜, 2013.6.28.
- 3) 和田 清: 薬物依存症について. 平成25年度薬物依存対策研修. 法務省保護局, 千葉, 2013.7.9.
- 4) 和田 清: 薬物依存症治療の現状と今後の展開について. 岡山県立精神科医療センター講演会, 岡山, 2013.7.12.
- 5) 和田 清: 薬物依存症を理解する. 専門研修課程矯正教育科第10回(少年施設職員処遇対応力向上Ⅱ), 法務省矯正研修所, 法務省, 東京, 2013.7.24.
- 6) 和田 清: 捕まらない薬物乱用にどう対応していくか～いわゆる脱法ハーブから処方薬まで, 薬物問題の今を考える～. 平成25年度薬物依存症フォーラム, 栃木, 2013.8.7.
- 7) 和田 清: 青少年の薬物乱用の実態と「脱法ドラッグ」の怖さ. 第22回薬物乱用防止教育研修会, 健康行動教育科学研究会, 東京, 2013.8.17.
- 8) 和田 清: わが国における向精神薬の乱用・依存の状況. コンサータ錠適正流通管理委員会, ヤンセンファーマ株式会社, 東京, 2013.8.30.
- 9) 和田 清: 広がる薬物依存. 道民公開講座2013.札幌医科大学医学部神経精神医学教室, 北海道, 2013.9.1.
- 10) 和田 清: 薬物依存症を理解する. 平成25年度薬物再乱用問題支援ネットワーク研修会, 兵庫

- 県精神保健福祉センター，兵庫，2013.9.6.
- 11) 和田 清：平成 25 年度九州・沖縄地区再乱用防止対策講習会．平成 25 年度再乱用防止対策講習会，厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，宮崎，2013.9.18.
 - 12) 和田 清：薬物依存の理解と「脱法ドラッグ」の怖さ．白梅学園大学保健センター主催講演会，東京，2013.9.20.
 - 13) 和田 清：学校薬剤師が知っておくべき薬物乱用の現在．平成 25 年度学校薬剤師研修会，日本薬剤師会学校薬剤師部会，千葉，2013.10.6.
 - 14) 和田 清：平成 25 年度近畿地区再乱用防止対策講習会．平成 25 年度再乱用防止対策講習会，厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，奈良，2013.10.16.
 - 15) 和田 清：学校薬剤師が知っておくべき薬物乱用の現在—全国中学生調査の結果も踏まえて—．平成 25 年度薬物乱用防止に関する研修会，島根県薬剤師会，島根，2013.10.20.
 - 16) 和田 清：平成 25 年度中国四国地区再乱用防止対策講習会．平成 25 年度再乱用防止対策講習会，厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，徳島，2013.11.1.
 - 17) 和田 清：薬物の乱用・依存・中毒の違いと「脱法ドラッグ」を理解する．第 63 回全国学校保健研究大会，秋田県・文部科学省，秋田，2013.11.8.
 - 18) 和田 清：薬物依存の理解と「脱法ドラッグ」の怖さ．平成 25 年度薬物乱用防止教育シンポジウム滋賀大会，文部科学省・滋賀県教育委員会，滋賀，2013.11.15.
 - 19) 和田 清：薬物の乱用・依存・中毒の理解と全国中学生調査から見えてくるもの．平成 25 年度薬物乱用防止教室指導者講習会，文部科学省・宮城県教育委員会，宮城，2013.11.21.
 - 20) 和田 清：覚せい剤依存症と医療．任用研修課程高等科 45 回研修，法務省矯正研修所，東京，2013.12.4.
 - 21) 和田 清：薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性—．第 6 回麻薬取締官中等科研修，厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課，法務総合研究所名古屋支所，愛知，2013.12.19.
 - 22) 和田 清：薬物依存について．第 42 回薬物対策関係取締機関情報交換会，東京，2014.1.7.
 - 23) 和田 清：薬物乱用・依存者への対応の現状と今後の対応．京都府薬物乱用防止指導員研修会，京都，2014.3.18.
 - 24) 松本俊彦：トラウマと「故意に自分の健康を害する」行為．非営利団体 Seeding Hope 主催 Seeding Hope 設立記念講演会，東京，2013. 4.13.
 - 25) 松本俊彦：薬物から自分を守ろう．立教大学全学共通カリキュラム 主題別 B「社会人への階段」，東京，2013.5.6.
 - 26) 松本俊彦：薬物から自分を守ろう．藤田保健衛生大学主催 アセンブリ薬物乱用防止講演会，愛知，2013.5.13.
 - 27) 松本俊彦：アルコール問題とうつ、自殺．NPO 法人愛知県断酒連合会愛西断酒会主催 愛西断酒会結成 25 周年記念大会基調講演，愛知，2013. 5.19.
 - 28) 松本俊彦：こころの健康について～いきる・ささえる相談窓口とは～．独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院看護部主催 看護の日記念講演会，東京，2013.5.20.
 - 29) 松本俊彦：自傷行為と過量服薬の理解と援助．公益社団法人山梨県看護協会主催 平成 25 年度自殺対策人材育成研修会，山梨，2013. 5. 29.
 - 30) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応．静岡県高等学校教育相談研究会主催 記念講演会，静岡，2013. 5. 31.
 - 31) 松本俊彦：自分を傷つけない生き方をするには．日本アノレキシア・プレミア協会主催 第 49 回 NABA ワークショップ，東京，2013.6.1.
 - 32) 松本俊彦：アルコール問題とうつ、自殺．医療法人こひつじ会職員研修，東京，2013.6.2.
 - 33) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．旭川精神医学研究会主催 学術講演会 特別講演，北海道，

2013.6.7.

- 34) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 静岡県臨床心理士会主催 静岡県臨床心理士会第 29 回大会 基調講演, 静岡, 2013.6.9.
- 35) 松本俊彦: わが国の自殺の実態および自殺対策について. 神奈川精神保健福祉センター主催 平成 25 年度自殺対策基礎研修, 神奈川, 2013.6.12.
- 36) 松本俊彦: 若者の薬物乱用防止のために薬剤師にできること. 一般社団法人日本女性薬剤師会主催 2013 年度学術講演会, 東京, 2013.6.16.
- 37) 松本俊彦: 自傷行為から見たパーソナリティ障害. 平成 25 年度明治安田こころの健康財団主催 明治安田精神保健夜間講習, 東京, 2013.6.19.
- 38) 松本俊彦: 青年期における薬物乱用・依存. 地方独立行政法人山梨県立病院機構山梨県立北病院主催 平成 25 年子どもの心の診療支援事業「子どもの心に関する講演会, 山梨, 2013.6.21.
- 39) 松本俊彦: 自殺の実態・地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 平成 25 年度自殺対策基礎研修, 神奈川, 2013.6.25.
- 40) 松本俊彦: 自殺予防のために一人ひとりにできること. 府中市主催 平成 25 年度自殺対策ゲートキーパー研修, 東京, 2013.6.25.
- 41) 松本俊彦: 自殺の現状と地域での支援・対策のあり方を考える. 国立保健医療科学院主催 平成 25 年度専門課程, 埼玉, 2013.6.26.
- 42) 松本俊彦: アディクションの理解. 東京都中部総合精神保健福祉センター主催 平成 25 年度精神保健福祉研修 (前期)「アディクションシリーズ 1 アディクション概論」, 東京, 2013.7.1.
- 43) 松本俊彦: 自殺未遂者の支援について. 山梨県峡東保健福祉事務所主催 平成 25 年度自殺企図者支援関係者研修会, 山梨, 2013.7.3.
- 44) 松本俊彦: 自殺の実態とその予防について. 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設主催 国立のぞみの園医療福祉セミナー2013, 群馬, 2013.7.5.
- 45) 松本俊彦: 向精神薬乱用と過量服薬を防ぐために精神科医にできること. なら精神科診療所懇話会主催 第 71 回なら精神科診療所懇話会学術講演会, 奈良, 2013.7.6.
- 46) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 会津脳疾患研究会主催 第 65 回会津脳疾患研究会学術講演, 福島, 2013.7.9.
- 47) 松本俊彦: 薬物処遇プログラムの集団実施について. 法務省保護局主催 薬物依存対策研修, 千葉, 2013.7.10.
- 48) 松本俊彦: 自殺をめぐる最近の動向と対策. 東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成 25 年自殺対策ゲートキーパー研修, 東京, 2013.7.12.
- 49) 松本俊彦: 青少年の自殺理解と予防: 精神科医の視点から. グリーフ・カウセリング・センター主催 GCC 第四期強化セミナー, 東京, 2013.7.14.
- 50) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する」若者たち～. 民間相談機関連絡協議会主催 民間相談機関連絡協議会 第 17 回定期総会 記念講演, 東京, 2013.7.15.
- 51) 松本俊彦: アディクションへのアプローチ～SMARPP による薬物依存症の理解～その理論と実際. 東京都精神保健福祉センター主催 平成 25 年度精神保健福祉研修 (前期) アディクションシリーズ 2 アディクションへのアプローチ, 東京, 2013.7.17.
- 52) 松本俊彦: アディクション問題の理解と援助. MSD 株式会社主催 自殺関連行動ならびにアディクションからの回復研究会特別講演, 大阪, 2013.7.27.
- 53) 松本俊彦: 自殺のサインに気づくために～自殺予防のために一人一人にできること. 東久留米市主催 平成 25 年度こころの健康づくり講演会, 東京, 2013.7.31.
- 54) 松本俊彦: 「自分を傷つける若者」を知る～思春期・青年期の SOS をキャッチする～. 東京都南多摩保健所主催 平成 25 年度精神保健福祉講演会, 東京, 2013.8.2.
- 55) 松本俊彦: 若者たちが抱える困難の根底にあるもの. 横浜 AIDS 文化フォーラム実行委員会主

- 催 第 20 回横浜 AIDS 文化フォーラム，神奈川，2013.8.3.
- 56) 松本俊彦：自殺予防のために一人ひとりにできること．国分寺市主催 平成 25 年度ゲートキーパー養成講座，東京，2013.8.5.
- 57) 松本俊彦：自殺念慮者と自殺未遂者への対応～自傷行為へのアセスメント．大阪府こころの健康総合センター主催 平成 25 年度自殺予防相談従事者養成研修，大阪，2013.8.9.
- 58) 松本俊彦：自死の視点～未遂者・自傷行為等ハイリスクな人たちへの支援と連携．島根県立心と体の健康センター主催 平成 25 年度自死対策等関係機関研修会，島根，2013. 8.11.
- 59) 松本俊彦：未遂を繰り返す人への対応．公益財団法人東京都福祉保健財団主催 平成 25 年度ゲートキーパー養成研修会，東京，2013.8.14.
- 60) 松本俊彦：若者の自傷行為について．宮城県立精神保健福祉センター主催 平成 25 年度思春期問題研修会，宮城，2013.8.16.
- 61) 松本俊彦：リストカット～故意に自分の健康を害する子ども・若者．ながの不登校を考える県民の会主催 これからの子ども・若者支援のための連続講座第 3 回講演会，長野，2013.8.18.
- 62) 松本俊彦：薬物・アルコール依存の治療プログラム．社会福祉法人桜ヶ丘社会事業協会 桜ヶ丘記念病院主催 薬物・アルコール依存の治療プログラムについてのセミナー，東京，2013.8.30.
- 63) 松本俊彦：アルコール・薬物依存症と自殺対策．北海道立精神保健福祉センター主催 第 8 回北海道自殺対策フォーラム，北海道，2013.9.7.
- 64) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 25 年度アルコール問題の早期発見早期介入実践講座，神奈川，2013.9.13.
- 65) 松本俊彦：わが国における脱法ドラッグ乱用者の臨床的特徴．多摩田園臨床精神医学研究会主催 第 36 回多摩田園臨床精神医学研究会 特別講演，神奈川，2013.9.13.
- 66) 松本俊彦：アルコール問題と自殺予防．東京都福祉保健局主催 平成 25 年度自殺対策東京キャンペーン講演会，東京，2013.9.18.
- 67) 松本俊彦：薬物依存症と自殺対策．福島県精神保健福祉センター主催平成 25 年度薬物関連問題実務担当者研修会／自殺対策関係者研修会開催要領，福島，2013.9.20.
- 68) 松本俊彦：子どもたちが抱える困難の根底にあるもの～気づき・かかわり・つながる大人になるために～．佐賀県伊万里保健福祉事務所主催 思春期保健フォーラム，佐賀，2013.9.23.
- 69) 松本俊彦：矯正施設における自傷・自殺．法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第 45 回研修，東京，2013.9.27.
- 70) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 25 年度東海・北陸地区薬物中毒対策講習会，富山，2013.10.7.
- 71) 松本俊彦：被災地におけるアルコール問題と自殺対策について．新潟県精神保健福祉協会主催 平成 25 年度被災地におけるこころのケア活動従事者研修会，新潟，2013.10.11.
- 72) 松本俊彦：薬物依存とは？ その理解と援助．愛知県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度薬物依存症に関する普及啓発講演会，愛知，2013.10.12.
- 73) 松本俊彦：自殺未遂者調査について．中央区保健所主催 自殺未遂者予備調査報告会，東京，2013.10.15.
- 74) 松本俊彦：自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応．徳島県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度自殺総合対策関係機関職員研修，徳島，2013.10.18.
- 75) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存と過量服薬の理解と援助．BPD 家族会主催 講演会，東京，2013.10.20.
- 76) 松本俊彦：自殺予防のために一人ひとりにできること．岐阜県精神保健福祉協会主催 平成 25 年度岐阜県精神保健福祉センター委託事業こころの見守り推進事業「ゲートキーパー養成講座」，岐阜，2013.10.21.
- 77) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現在．横浜ダルクひまわり家族会主催 家族会講演会，神奈川，

2013.10.23.

- 78) 松本俊彦：脱法ドラッグ乱用・依存の現在．東京精神科医療懇話会主催 第 21 回東京精神科医療懇話会講演会，東京，2013.10.24.
- 79) 松本俊彦：若者と薬物依存．内閣府委託事業 平成 25 年「子ども・若者支援地域ネットワーク形成のための研修会」，東京，2013.10.27.
- 80) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 25 年度関東信越地区薬物中毒対策講習会，東京，2013.10.29.
- 81) 松本俊彦：自殺予防のために一人ひとりにできること．千代田区主催 平成 25 年度自殺対策ゲートキーパー研修会，東京，2013.10.30.
- 82) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所主催 公開講演会，岡山，2013.11.4.
- 83) 松本俊彦：気づき、かかわり、つなぎ～子どもたちの自傷や『死にたい』にどう対応するか．横浜市青少年相談センター主催 平成 25 年度若者相談支援スキルアップ研修 メンタルヘルス特別コース～生きづらい若者への理解と援助，神奈川，2013.11.8.
- 84) 松本俊彦：依存症臨床から学んだこと．神奈川県立精神医療センターせりがや病院主催 神奈川県立精神医療センターせりがや病院開設 50 周年記念講演会，神奈川，2013.11.10.
- 85) 松本俊彦：薬物依存症に対する認知行動療法．沖縄県福祉保健部薬務疾病対策課主催 薬物乱用対策研修会，沖縄，2013.11.15.
- 86) 松本俊彦：薬物依存治療の新たな展開—SMARPP の理念と実際—．琉球精神薬理研究会主催 第 4 回琉球精神薬理研究会，沖縄，2013.11.15.
- 87) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 25 年度北海道・東北地区薬物中毒対策講習会，北海道，2013.11.18.
- 88) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．神奈川県私立中学高等学会保健会主催 講演会，神奈川，2013.11.20.
- 89) 松本俊彦：地域における支援困難家族について．横須賀市こども育成部主催 平成 25 年度保健福祉医療従事者研修会，神奈川，2013.12.2.
- 90) 松本俊彦：いま求められる依存症支援体制について．千葉県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度薬物関連問題講演会，千葉，2013.12.6.
- 91) 松本俊彦：自傷行為について．東京私立学校保健研究会主催 研修会，東京，2013.12.7.
- 92) 松本俊彦：自傷行為と解離．国際トラウマ解離研究学会（ISSTD）日本支部解離研究会主催 2013 年度・年次研究会，東京，2013.12.8.
- 93) 松本俊彦：アディクション総論．独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 平成 25 年度アルコール・薬物関連問題研修会，佐賀，2013.12.11.
- 94) 松本俊彦：自殺の現状と若年者支援．山形県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度「自殺対策心のサポーター（ゲートキーパー）養成ファシリテーター継続研修会」および「自殺対策についての相談機関合同研修会」，山形，2013.12.13.
- 95) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応．NPO 法人仙台グリーンケア研究会主催 医療者のための自死未遂者対応講演会，宮城，2013.12.15.
- 96) 松本俊彦：自殺念慮、過量服薬の理解と対応．NPO 法人仙台グリーンケア研究会主催 医療者のための自死未遂者対応講演会，宮城，2013.12.15.
- 97) 松本俊彦：セクシュアル・マイノリティの自傷および薬物乱用・依存について．セクシュアル・マイノリティ事例研究会主催 アドバンスレクチャー第 1 回，東京，2014.1.12.
- 98) 松本俊彦：物質使用歴のある対象者の処遇．法務省保護局主催 第 3 回中央処遇指針研究会，東京，2014.1.14.
- 99) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応．公益財団法人東京都福祉保健財団主催 平成 25 年度福祉保

- 健局・病院経営本部研修「相談業務等職員Ⅰ心理」，東京，2014.1.17.
- 100) 松本俊彦：自殺関連事象．厚生労働省こころの健康づくり対策事業 思春期精神保健対策医療従事者専門研修，東京，2014.1.21.
- 101) 松本俊彦：ドラッグから自分や仲間と仲間を守ろう．国際基督教大学 学生の健康を考える会 主催 公開講座，東京，2014.1.21.
- 102) 松本俊彦：薬物処遇プログラムについて．法務省保護局主催 薬物支援研究会分科会 第3回薬物処遇プログラムに関する協議会，東京，2014.1.24.
- 103) 松本俊彦：最近の自殺の動向と支援対策について．特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺防止のための電話相談技能研修，東京，2014.1.26.
- 104) 松本俊彦：若者の自殺予防のために大人たちにできること～自傷行為の理解と援助～．大分県・社会福祉法人大分いのちの電話主催 平成25年度 大分県自殺対策講演会，大分，2014.2.1.
- 105) 松本俊彦：アディクション臨床から見えてきた自殺予防のヒント～アルコール問題とうつ、自殺～．日本イーライリリー株式会社主催 横須賀三浦精神科臨床懇話会，神奈川，2014.2.3.
- 106) 松本俊彦：薬物処遇プログラムについて．法務総合研究所主催 第49回保護観察官高等科研修，東京，2014.2.5.
- 107) 松本俊彦：若者の「生きる」を支えるために～自傷行為に向かう若者の心理と対応．中野区保健所主催 ゲートキーパー養成研修，東京，2014.2.5.
- 108) 松本俊彦：アルコール問題とうつ・自殺．千葉県医師会主催 平成25年かかりつけ医うつ病対応力向上研修，千葉，2014.2.6.
- 109) 松本俊彦：自殺ハイリスク者のアセスメントとマネジメント．長野県精神保健福祉センター主催 平成25年度 自殺企図者の支援に係る関係者研修会，長野，2014.2.7.
- 110) 松本俊彦：依存症って何?～どう理解しどう援助するか．府中精神保健福祉協議会主催 市民のためのメンタルヘルス講座「依存症について考える」，東京，2014.2.10.
- 111) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．宮崎県精神保健福祉センター主催 平成25年度自殺対策専門研修会，宮崎，2014.2.14.
- 112) 松本俊彦：自傷行為って何? 日本アノレキシア・プリミア協会・ピアサポ祭り実行委員会主催 第10回ピアサポ祭り，東京，2014.2.16.
- 113) 松本俊彦：脱法ドラッグの現状．株式会社大林組 PFI 事業部主催 播磨社会復帰促進センター 社会復帰促進部教育専門スタッフ研修，兵庫，2014.2.17.
- 114) 松本俊彦：若者の薬物乱用・依存：その理解と援助．東京都薬物乱用防止推進 西東京市地区協議会主催 講演会，東京，2014.2.19.
- 115) 松本俊彦：自傷・自殺の理解と対応．横浜市立大学医学部精神医学教室主催 精神科レジデント講義，神奈川，2014.2.20.
- 116) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～若者の自殺予防のために～．三重県こころの医療センター主催 こころしっとこ学会特別靴講演，三重，2014.2.22.
- 117) 松本俊彦：若者たちが抱える困難の根底にあるもの．岡山 SRH 研究会主催 定期後援会，岡山，2014.2.23.
- 118) 松本俊彦：薬物依存者の回復支援～当事者を理解し回復を支援するために～．広島県主催 平成25年度地域依存症対策推進研修事業，広島，2014.2.24.
- 119) 松本俊彦：薬物依存症認知行動療法プログラムの進め方．広島県主催 平成25年度地域依存症対策推進研修事業，広島，2014.2.24.
- 120) 松本俊彦：薬物依存の現状と対応～脱法ドラッグをふまえて～．城東プシケフォーラム主催 第6回城東プシケフォーラム特別講演，東京，2014.2.25.
- 121) 松本俊彦：覚せい剤事犯者処遇プログラム．法務省法務総合研究所主催 第6回保護観察官専修科研修，千葉，2014.2.26.

- 122) 松本俊彦：故意に自分の健康を害する生徒たち～リストカット等の理解と対応。中京大学隣州心理相談室主催 第 11 回公開講演会，愛知，2014.3.2.
- 123) 松本俊彦：自殺未遂者の理解と援助。大津市保健所主催 大津市自殺未遂者支援研修会，滋賀，2014.3.3.
- 124) 松本俊彦：大津市「いのちをつなぐ相談員」派遣事業の事例についての検討。大津市保健所主催 大津市自殺未遂者支援研修会，滋賀，2014.3.3.
- 125) 松本俊彦：精神鑑定事例。法務省矯正研修所主催 調査鑑別特別科第 7 回研修，東京，2014.3.5.
- 126) 松本俊彦：若者の自殺予防。熊本県臨床心理士会主催 平成 25 年度学校支援公開研修会，熊本，2014.3.9.
- 127) 松本俊彦：自殺相談ダイヤル・スーパーヴィジョン。NPO 法人メンタルケア協議会主催 自殺相談ダイヤル・スーパーヴィジョン，東京，2014.3.16.
- 128) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現在。福岡保護観察所主催 薬物問題講演会，福岡，2014.3.18.
- 129) 松本俊彦：虐待と嗜癖—精神科医療における診断・治療・連携の進め方。特定非営利活動法人子どもの村福岡・福岡県精神科病院協会主催 学術講演会，福岡，2014.3.18.
- 130) 松本俊彦：若者の自殺対策に求められる者～自分の健康を害する若者たちの SOS が聞こえますか?～。福岡県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度自殺予防対策研修会，福岡，2014.3.19.
- 131) 松本俊彦：自殺予防における年齢階層ごとの課題と対応。兵庫県・一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会主催 平成 25 年度自殺予防講演会，兵庫，2014.3.23.
- 132) 松本俊彦：いのちをつなぎ止め、生きることを支援するとは。中央区保健所主催 平成 25 年度中央区ゲートキーパー養成講座，東京，2014.3.26.
- 133) 松本俊彦：アルコール問題と自殺。北里大学精神科学教室主催 教室研究会，東京，2014.3.27.
- 134) 松本俊彦：アルコール問題とうつ、自殺。日野市主催 自殺対策啓発事業，東京，2014.3.28.
- 135) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち。NPO 法人アパリ家族教室，東京，2013.5.20.
- 136) 嶋根卓也：向精神薬過量服薬の現状と課題。日本社会薬学会平成 25 年第 1 回社会薬学フォーラム「過量服薬者のゲートキーパーとなるために」，東京，2013.5.25.
- 137) 嶋根卓也：ゲートキーパーとしての薬剤師について。埼玉県薬剤師会平成 25 年度新人薬剤師研修会，埼玉，2013.5.26.
- 138) 嶋根卓也：向精神薬の過量投与に対して，薬剤師が取り組むべきこと。三郷市薬剤師会学術研修会，埼玉，2013.6.8.
- 139) 嶋根卓也：変わる薬物，変わる治療。川崎ダルク支援会，神奈川，2013.6.14.
- 140) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教室。平成 25 年度石川県薬物乱用防止教室講習会，石川，2013.6.23.
- 141) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」を超えて～薬物乱用防止教室で伝えるべきこと～。平成 25 年度香川県薬物乱用防止教育研修会・薬物乱用防止教室指導者講習会，香川，2013.6.25.
- 142) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち。平成 25 年度東京都精神保健福祉研修（前期），東京，2013.7.1.
- 143) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント。横須賀市立大津中学校薬物乱用防止教室，神奈川，2013.7.10.
- 144) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント。横須賀市立野比中学校薬物乱用防止教室，神奈川，2013.7.10.
- 145) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント。東京都立第五商業高等学校薬物乱用防止教室，東京，2013.7.16.
- 146) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち。埼玉県坂戸保健所平成 25 年度第 2 回薬物乱用防止研修会，埼玉，2013.8.1.
- 147) 嶋根卓也：まちの薬局が取り組む自殺予防—医薬品の乱用・依存—。世田谷保健所こころと命

- を支えるゲートキーパー養成講座，東京，2013.8.9.
- 148) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント．下関市薬物対策協議会「中・高校生のための薬物乱用防止セミナー」，山口，2013.8.20.
- 149) 嶋根卓也：最新の薬物乱用・依存の動向から考えるこれからの薬物乱用防止教育～ダメ，ゼッタイを超えて～．平成 25 年度愛媛県薬物乱用防止教室指導者講習会，愛媛，2013.8.28.
- 150) 嶋根卓也：変わる薬物，変わる治療．相模原市教育研修事業（専門研修 2），神奈川，2013.8.30.
- 151) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち．東京家庭裁判所調査官研修，東京，2013.9.5.
- 152) 嶋根卓也：医薬品が正しく使えない人たち「薬剤師は過量服薬者のゲートキーパー」．岡山県薬剤師会「管理薬剤師セミナー」，岡山，2013.9.8.
- 153) 嶋根卓也：「ダメ。ゼッタイ。」で終わらせない薬物乱用防止教室．平成 25 年度長野県薬物乱用防止教育指導者講習会，長野，2013.9.19.
- 154) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント．第 33 回九州ブロックエイズ拠点病院研修会，福岡，2013.10.11.
- 155) 嶋根卓也：薬物乱用のウソ・ホント．東北エイズ／HIV 薬剤師連絡会議，東北エイズ／HIV 心理・福祉連絡会議，宮城，2013.10.19.
- 156) 嶋根卓也：脱法ドラッグと若者～変わる薬物・変わる治療～．平成 25 年度きょうと薬物乱用防止行動府民会議総会一麻薬・覚せい剤乱用防止運動京都大会一，京都，2013.10.27.
- 157) 嶋根卓也：薬物非行指導．平成 25 年度関東医療少年院研究授業，関東医療少年院，東京，2013.11.7.
- 158) 嶋根卓也：医薬品乱用・依存のゲートキーパーとしての薬剤師．北海道医療大学薬剤師支援センター平成 25 年度将来ビジョン講座，北海道，2013.11.8.
- 159) 嶋根卓也：認知行動療法プログラムの立ち上げ方ー保健機関における実例ー．第 4 回薬物依存症に対する認知行動療法研修，平成 25 年度精神保健に関する技術研修，東京，2013.11.12.
- 160) 嶋根卓也：過量服薬対策と薬剤師．平成 25 年度中央区地区薬剤師研修会，東京，2013.11.16.
- 161) 嶋根卓也：薬剤師は自殺者 3 万人時代を防ぐことができるか．平成 25 年度東京薬科大学卒業教育講座（秋期），東京，2013.11.17.
- 162) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たちー変わる薬物・変わる治療ー．平成 25 年度「若者の薬物問題について考える講演会」，京都，2013.11.28.
- 163) 嶋根卓也：脱法ハーブ，どこまで知っていますか？～若者を守るのは，私たち大人です～．精神保健福祉講演会，東京，2013.12.4.
- 164) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たちー変わる薬物・変わる治療ー．富山県薬物乱用防止セミナー，富山，2013.12.7.
- 165) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち．関東学院大学メンタルヘルス講演会，神奈川，2013.12.9.
- 166) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち．平成 25 年度世田谷区依存症セミナー，東京，2014.1.16.
- 167) 嶋根卓也：脱法ドラッグを使う若者たち．平成 25 年度第 3 回 HIV/AIDS 症例懇話会，東京，2014.1.16.
- 168) 嶋根卓也：薬物乱用に関する子どもの意識と実態について．平成 25 年度横浜市学校保健会鶴見支部保健大会，神奈川，2014.2.6.
- 169) 嶋根卓也：薬物乱用防止教育と薬物乱用ハイリスクな子どもの支援．横浜市青少年相談センター平成 25 年度若者相談支援スキルアップ研修，神奈川，2014.2.12.
- 170) 嶋根卓也：薬局薬剤師の過量服薬防止への取り組みと中央区薬剤師会が実地した調査の報告．平成 25 年度第 2 回中央区自殺対策協議会，東京，2014.2.12.
- 171) 嶋根卓也：自殺予防において薬剤師に期待するゲートキーパーとしての役割．宮崎県薬剤師会

自殺対策ゲートキーパー養成講習会，宮崎，2014.3.9.

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) 和田 清：日本社会精神医学会 副理事長
- 2) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 理事
- 3) 和田 清：日本依存神経精神科学会 理事
- 4) 松本俊彦：日本依存神経精神科学会 評議員
- 5) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会 理事
- 6) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 7) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 8) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 9) 船田正彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
- 10) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 11) 船田正彦：日本薬理学会 評議員
- 12) 嶋根卓也：日本アルコール・薬物医学会 評議員

(2) 座長

- 1) 和田 清，成瀬暢也：シンポジウム 28 薬物依存をめぐる多様な変化と臨床. 第 109 回日本精神神経学会学術総会，福岡，2013.5.24.
- 2) 和田 清，黒木俊秀：シンポジウム 8 薬物乱用の動向とその防止策. 平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2013.10.5.
- 3) 和田 清：教育・研究入門講座「薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応」(松本俊彦). 第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.21.
- 4) 嶋根卓也：一般発表 (口頭). 第 19 回埼玉県薬剤師会学術大会，埼玉，2013.11.10.
- 5) 成瀬暢也，和田 清：一般演題 (口演) 6. 平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2013.10.5.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 和田 清：日本社会精神医学会 学術委員会 委員長，編集委員会委員
- 2) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 庶務委員会委員，編集委員会委員，教育委員会委員
- 3) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 編集委員
- 4) 松本俊彦：星和書店「精神科治療学」編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第15回薬物依存臨床看護等研修会 (2013.9.10-13)
- 2) 第27回薬物依存臨床医師研修会 (2013.9.10-13)

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 和田 清：薬物依存症. 鳥越俊太郎 医療の現場!. BS朝日，2013.6.22.
- 2) 和田 清 (監修)：保健体育DVDシリーズ 薬物乱用と健康. 大修館，2014.2.
- 3) 和田 清：写真提供. 「シンナーを吸いつづけると・・・」. 東京都港区平成25年度 (2013)

- 「子ども健康読本」, pp25, 2013.4.
- 4) 和田 清: 入院・通院原因となった主な乱用薬物の比率 (グラフ提供). 高校保健ニュース. N o.472.少年写真新聞社, 2013.8.8.
 - 5) 和田 清: 薬物依存初犯で断つ 栃木の回復プログラム成果. 毎日新聞, 2013.5.17.
 - 6) 和田 清: 無季言. 薬事日報, 2013.11.13.
 - 7) 和田 清: 学校保健研究大会 違法ドラッグの現状解説 学校教育の充実・強化を. 薬事日報 朝刊3面, 2013.11.18.
 - 8) 和田 清: ニュースQ3 なぜ横須賀に? コカイン120kg漂着のなぞ. 朝日新聞, 2013.11.27.
 - 9) 松本俊彦: 向精神薬で薬物依存症に陥る患者が増加 12年間で割合倍増. 産経新聞, 2013.5.8.
 - 10) 松本俊彦: 子ども期のトラウマケア. 中日新聞, 2013.5.14.
 - 11) 松本俊彦: 子ども期のトラウマケア. 東京新聞, 2013.5.14.
 - 12) 松本俊彦: 依存増加も取り締まり困難. 中日新聞, 2013.5.23.
 - 13) 松本俊彦: 自殺防止へ未遂者ケア. 京都新聞, 2013.6.15.
 - 14) 松本俊彦: 向精神薬依存: 8割、投薬治療中に発症「医師の処方、不適切」--専門機関調査. 毎日新聞, 2013.6.19.
 - 15) 松本俊彦: 三重ダルク 薬物依存、地域で更生支援. 中日新聞, 2013.7.2.
 - 16) 松本俊彦: 孤立させず地域で支援を 依存症と自殺考える 札幌で集い. 北海道新聞, 2013.9.8.
 - 17) 松本俊彦: 増加する若者の自殺. 潮 11月号第657号, 2013.11.1.
 - 18) 松本俊彦: 座談会: うつ病治療における抗不安薬の適正使用. 日経メディカル, 2013.11.1.
 - 19) 松本俊彦: 少年院で脱薬物 集中プログラム4か所で「家族を喜ばせたい」更生誓う 保護者向け教材も. 読売新聞夕刊, 2013.11.2.
 - 20) 松本俊彦: 薬に頼らない軽症うつ治療. 毎日新聞夕刊, 2013.12.5.
 - 21) 松本俊彦: 自殺のサイン見逃さないで 大分で講演会. 大分合同新聞, 2014.2.3.
 - 22) 松本俊彦: 処方薬依存症 深刻さ 医師は自覚を. 朝日新聞朝刊, 2014.2.8.
 - 23) 松本俊彦: 処方薬による薬物依存症問題について. 公明新聞, 2014.2.9.
 - 24) 松本俊彦: 津で精神科医講演 自傷の背景こそ重要. 中日新聞, 2014.2.23.
 - 25) 松本俊彦: 命の大切さ、若者に教えることができるか. yomiDr, 2014.2.26.
 - 26) 松本俊彦: アンジェリーナ・ジョリーの幼い時期のトラウマや自傷行為について. トリハダ(秘) スクープ映像 100科ジテン, テレビ朝日, 2013.7.16.
 - 27) 松本俊彦: 薬物依存の実態. 荻上チキ・Session-22, TBS ラジオ, 2013.7.25.
 - 28) 松本俊彦: 20代の自殺をテーマに、自殺率が減らない現状について、その背景や対策に何が必要か. EテレハートネットTV, NHK, 2014.2.25.
 - 29) 船田正彦: 脱法ハーブ北九州突出. 西日本新聞, 2013.5.22.
 - 30) 船田正彦: 脱法ハーブの危険性、新型麻薬所持で逮捕. 毎日新聞(九州版), 2013.5.24.
 - 31) 船田正彦: 脱法ハーブの危険性「 α -PVP». 愛媛新聞, 2013.6.26.
 - 32) 船田正彦: 脱法ハーブ、強い毒性 マウス実験で細胞数減らす. 朝日新聞, 2014.1.6.
 - 33) 船田正彦: 脱法ハーブ: 吸引原因の事故相次ぐ 追いつかぬ対策. 毎日新聞(西部版), 2014.2.6.
 - 34) 船田正彦: 改正薬事法で取り締まり強化 脱法ハーブ 所持でもダメ!?. 日刊スポーツ, 2014.2.24.
 - 35) 船田正彦: 「脱法ハーブ」乱用の現状について. なるほど!ニッポン情報局!,ニッポン放送, 2013.5.18.
 - 36) 船田正彦: 「脱法ハーブ」乱用の現状について. TBSテレビ Nスタ, 2013.5.8.
 - 37) 船田正彦: 脱法ハーブ乱用の現状. ニュースJAPAN&すぽると!,フジテレビ, 2014.1.7.

- 38) 船田正彦：脱法ハーブ乱用の現状. ビートたけしのTVタックル, テレビ朝日, 2014.3.31.
- 39) 嶋根卓也：風営法, ダンス適用外せぬ理由は 警察庁担当者に聞く. 朝日新聞, 2013.10.17.
- 40) 嶋根卓也：クラブとカラオケ, どう違う? 規制当局の論理は. 朝日新聞, 2013.10.17.
- 41) 嶋根卓也：養護教諭のお仕事. 第14回薬物乱用防止の指導, 日本学校保健会ウェブサイト「学校保健ポータルサイト」, 2013.7.18.
- 42) 嶋根卓也：新聞市販薬のインターネット販売解禁, 乱用・依存深刻化の恐れ, 薬剤師の「声かけ」が抑止力. しんぶん赤旗, 2013.7.6.
- 43) 嶋根卓也：日本薬学会第133年会ハイライト. 薬事日報, 2013.4.1.
- 44) 国立精神・神経医療研究センター調査：脱法ハーブの害 中高校生に知ってほしい. 東京新聞, 2013.4.8.
- 45) 国立精神・神経医療研究センター調査：薬物依存症回復の道(中) ストップ生活保護改悪. しんぶん赤旗, 2013.5.10.
- 46) 国立精神・神経医療研究センター：薬物依存受け皿に課題. 毎日新聞, 2013.6.14.
- 47) 国立精神・神経医療研究センター病院：医療ルネッサンスNo.5643 処方薬への依存 5/5. 読売新聞, 2013.8.26.
- 48) 国立精神・神経医療研究センター：クラブとカラオケ, どう違う? 規制当局の論理は. 朝日新聞デジタル, 2013.10.17.
- 49) 国立精神・神経医療研究センター：風営法, ダンス適用外せぬ理由は 警察庁担当者に聞く. 朝日新聞デジタル, 2013.10.17.
- 50) 国立精神・神経医療研究センター：アロマリキッドって何だ? 女性をエロくさせるはずが死亡 まるで 押尾学事件みたいだが・・・. 日刊ゲンダイ 朝刊 5面, 2013.10.19.

4.心身医学研究部

I. 研究部の概要

心身医学研究部の研究課題は、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocial モデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究すること、効果的な治療法や予防法を開発することである。また、心身症・摂食障害の実態やその背景を調査すること、実証的な診断・治療法を普及していくことである。

臨床面では研究部のスタッフが全員で引き続きセンター病院心療内科外来で診療・研究に携わっている。

人事面では平成25年度の人員構成は次のとおりである。ストレス研究室長：安藤哲也，心身症研究室長：菊地裕絵，流動研究員：上野真弓，大江悠樹，併任研究員：大和 滋，有賀 元，天野智文（センター病院），協力研究員：倉 尚樹，小原千郷，客員研究員：近喰ふじ子（東京家政大学），前田基成（女子美術大学），兒玉直樹（産業医科大学），研究生6名。

II. 研究活動

1) 心身症の発症機序と病態，治療に関する基礎的ならびに臨床的研究

(1) 心身症の病態解明と効果的治療法の開発（精神・神経疾患研究開発費）

機能的消化管障害，肥満症，摂食障害を対象に客観的指標として，①Ecological Momentary Assessment (EMA)法，②機能的MRI，③自律神経系変動指標，④ストレスホルモン，⑤腸内フローラについて研究をすすめた。また，CBTを基盤とした心理療法的介入の開発と有効性の評価を行った。本研究により心身症・摂食障害の多面的な評価法や，神経基盤や腸内因子の解明，治療におけるCBTの適用に関して成果が得られた。（安藤，菊地，大江，倉）。

(2) 機能的消化管障害の臨床評価ならびに CBT 開発研究（精神・神経疾患研究開発費）

機能的消化管疾患（過敏性腸症候群や機能的胃腸症）は代表的な心身症で有病率は非常に高く慢性に経過し QOL 低下や医療資源への負荷が大きい。認知行動療法センター，病院総合内科，東北大学の協力を得て機能的消化管疾患の認知行動療法を開発した。さらにフィージビリティスタディを実施した。中間解析では本プロトコルは実施可能で一定の治療効果を持つと期待されるデータが出ており国内外の学会で報告した（安藤，大江，倉，菊地）。

(3) 摂食障害の家族のケア負担感と精神的健康の研究

摂食障害患者をもつ家族の精神的負担は大きい。効果的な家族への心理的サポートの確立のため，患者家族のケア負担感と精神的健康の実態を明らかにし，それに関連する因子を探ることを目的とする調査を実施している（小原，安藤）。

2) 神経性食欲不振症を対象とした一塩基多型マーカーによるゲノムワイド相関遺伝子解析(日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B))

全国の摂食障害診療施設からなる摂食障害遺伝子解析協力者会議を組織し全摂食障害患者の試料を収集するシステム JGRED を構築した。国際コンソーシアム（Genetic Consortium for Anorexia Nervosa: GCAN）が実施した SNP マーカーを用いた GWAS の再現性試験に JGRED も参加した。その成果は国際誌に発表された。次世代シーケンサーを用いた“Exome sequencing”を応用し，摂食障害の病因に関与する変異を同定する研究を東海大学・総合医学研究所 岡 晃講師と共同で進めている（安藤）。

3) 摂食障害のプロテインアクティブアレイを用いた網羅的自己抗体スクリーニング(日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (C))

摂食障害の病態への自己抗体の関与が示唆されている。産業技術総合研究所 五島直樹チーム長との共同研究でプロテインアクティブアレイを使用して摂食障害と肥満に特異的な自己抗体を探索することを目的とする。これまでに約2万種のヒト蛋白質のアレイを用いてプレスクリーニング

を実施し、摂食障害患者血清中の自己抗体と強く反応する抗原タンパク質を同定した。さらに独立サンプルでの再現性の確認を行った（安藤）。

4) 食行動と生物心理社会的因子の経時的関連に関する包括的モデルの開発（日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究（B））

食行動と生物心理社会的因子の経時的関連の包括的理解を、生態学的妥当性および栄養学的正確性の高いデータに基づき行うことを目指し、ecological momentary assessment（EMA）法および携帯情報端末による食事記録システムを用いて普通体重群および肥満群での調査・解析を進め、食事前の抑うつ気分、ストレス、食事の場所（外食か否か）と摂取エネルギー量の間に有意な関連を示した（菊地）。

5) 自覚症状の記憶特性と評価の妥当性に関する検討の実施

東京大学大学院教育学研究科 山本義春教授との共同研究として、EMA による抑うつ気分の評価と加速度計による身体活動の測定を同時に行うことで、自覚症状の評価法の方法論的検討を行った。EMA により評価された抑うつ気分は、身体活動の局所平均および局所歪度により示される行動の間欠性と有意に関連することを明らかにし、EMA による抑うつ気分評価の妥当性と、客観指標による抑うつ気分評価の可能性を示し、PLOS ONE に発表した。

6) 日常生活下のストレスの多面的評価法の開発（精神・神経疾患研究開発費）

心身症の評価においては心理的ストレスの経時的評価が必須である。生態学的妥当性が高く、時間軸が正確で、ストレスを多面的に評価できる評価法の開発・客観的指標の導入を目指し、日常生活下のストレスの多面的評価法の開発を行った。項目反応理論を利用して項目を選定し、ストレス因子（心理的負担・対人関係ストレス）、ソーシャルサポート、ストレス反応のそれぞれについて個人間比較における信頼性（内部一貫性）と妥当性の一部を確認した（菊地）。また、日常生活下でのストレスの客観的指標の候補として、実験環境下のストレス負荷に伴う生理指標変化の検討から、心拍変動のフラクタル成分の相対的増加（%フラクタルの増加）を同定した（菊地，上野）。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

2) 専門教育面における貢献

東京大学医学部非常勤講師（安藤）、二葉看護学院非常勤講師（安藤，菊地，倉）として医学部学生、看護学生を対象とした心身医学、摂食障害、ストレス関連疾患の専門教育に貢献した。山梨大学大学院客員准教授（安藤）、東京大学大学院教育学研究科客員准教授（菊地）として大学院生の指導を行った。

3) 精研の研修の主催と協力

安藤哲也，菊地裕絵：平成 25 年度第 11 回摂食障害治療研修，精神保健に関する技術研修，精神保健研究所，東京，2013.8.27-30.

安藤哲也，菊地裕絵：平成 25 年度第 10 回摂食障害看護研修 精神保健に関する技術研修，精神保健研究所，東京，2013.11.6-8.

以上、摂食障害治療などについて医療関係者への知識普及及び治療の標準化に貢献した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

5) センター内における臨床的活動

センター病院心療内科併任医師（安藤，菊地）

センター病院心療内科心理士（大江，倉，森）

6) その他

近喰ふじ子：練馬区教育相談員

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ando T, Tamura N, Mera T, Morita C, Takei M, Nakamoto C, Koide M, Hotta M, Naruo T, Kawai K, Nakahara T, Yamaguchi C, Nagata T, Ookuma K, Okamoto Y, Yamanaka T, Kiriiike N, Ichimaru Y, Ishikawa T, Komaki G, The Japanese Genetic Research Group For Eating Disorders. Association of the c.385C>A (p.Pro129Thr) polymorphism of the fatty acid amide hydrolase gene with anorexia nervosa in the Japanese population. *Molecular Genetics & Genomic Medicine*. doi: 10.1002/mgg3.69.
- 2) Boroska V, Franklin CS, Floyd JAB, Thornton LM, Huckins LM, Southam L, Ando T (173人中 42番目). A genome-wide association study of anorexia nervosa. *Mol Psychiatry*. doi:10.1038/mp.2013.187.
- 3) Kim J, Nakamura T, Kikuchi H, Sasaki T, Yamamoto Y: Co-variation of depressive mood and locomotor dynamics evaluated by ecological momentary assessment in healthy humans. *PLOS ONE* 8(9): e74979, 2013.
- 4) Kwak JM, Babygirija R, Gribovskaja-Rupp I, Takahashi T, Yamato S, Ludwig K: Regional difference in colonic motility response to electrical field stimulation in Guinea pig. *J Neurogastroenterol Motil* 19(2): 192-203, 2013.
- 5) Uchida M, Yamato S, Shimizu K, Amano T, Ariga H: Dual role of mosapride citrate hydrate on the gastric emptying evaluated by the breath test in conscious rats. *J Pharmacol Sci* 121(4): 282-287, 2013.
- 6) 小原千郷, 鈴木(堀田)眞理:本邦における摂食障害家族会の実態調査. *心身医学* 54(2):165-173, 2014.
- 7) 富田吉敏, 三田村朋子, 菊地裕絵, 安藤哲也: 様々な治療的関わりで症状と抗体価が改善した疼痛性障害の症例. *日本心療内科学会誌* 18(1): 28-33, 2014.
- 8) 鈴木(堀田)眞理, 小原千郷, 堀川玲子, 小川佳宏: 東京都の高校の養護教諭へのアンケートによる神経性食欲不振症の疫学調査. *日本心療内科学会雑誌* 17(2): 81-87, 2013.
- 9) 近喰ふじ子, 塚本直子, 井上俊哉, 安藤哲也, 高尾龍雄: 「ストレス日誌」からみた夫婦のストレス要因. *東京家政大学研究紀要* 54(1): 79-84, 2014.
- 10) 井上俊哉, 近喰ふじ子, 塚本尚子: 一般社会人における日常ストレス対処行動と首尾一貫感覚の関連. *東京家政大学研究紀要* 54(1): 73-78, 2014.
- 11) 梅原沙衣加, 福井 至, 近喰ふじ子: スピーチ恐怖の自動思考を測定する質問紙 (Speech Automatic Thoughts Questionnaire :SPATQ) の開発. *認知療法研究* 6(2): 161-168, 2013.
- 12) 山内麻衣, 近喰ふじ子: 発達障害児へパペットセラピーを実施することの有効性の検討. *パペットセラピー* 7(1): 37-44, 2013.

(2) 総説

- 1) 安藤哲也: 摂食障害研究の最近の動向. *心身医学* 54(2): 146-153, 2014.
- 2) 安藤哲也: 摂食障害と遺伝子. *臨床精神医学* 42(5): 609-620, 2013.
- 3) 中島 俊, 伊藤正哉, 加藤典子, 堀田 亮, 藤里紘子, 大江悠樹, 宮前光宏, 蟹江絢子, 中川敦夫, 堀越 勝, 大野 裕: 不安障害/うつ病性障害に対する新しい認知行動療法の潮流 診断横断的認知行動療法. *精神医学* 55(12): 1145-1154, 2013.
- 4) 倉 五月, 石川俊男: がんの予防医学—心身医学の側面から—. 特集 *がんの予防医学*. *予防医学* 55: 133-137, 2013.
- 5) 近喰ふじ子: 「遊びの面からパペットの働きの「場」を考える」, *パペットセラピー*. *日本パペットセラピー学会機関誌* 7(1): 4-13, 2013.

- 6) 大和 滋：過敏性腸症候群の病態と有効な治療法. *Current Therapy* 31(12): 49-54, 2013.
- 7) 大和 滋：過敏性腸症候群. *Medicina* 51(1): 30-33, 2014.

(3) 著書

- 1) Ando T: Ghrelin gene variants and eating disorders. In: *Anorexia*, Litwack, G Ed. *Vitamins and Hormones Vol 92*, Burlington: Academic Press, pp107-123, 2013.
- 2) 兼子 唯, 鈴木伸一, 貝谷久宣: 社交不安障害と双極性障害. 貝谷久宣, 佐々木 司, 不安抑うつ臨床研究会 編: 不安障害と双極性障害. 日本評論社, 東京, pp89-122, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 安藤哲也: 精神・神経疾患研究開発費(23-2) 心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究 (主任研究者 安藤哲也). 総括・分担研究報告書 (平成 23~25 年度), 2014.
- 2) 安藤哲也: 精神・神経疾患研究開発費(23-2) 機能的消化管障害の臨床評価ならびに CBT 開発研究. 心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究 (主任研究者 安藤哲也). 総括・分担研究報告書 (平成 23~25 年度), 2014.
- 3) 菊地裕絵: 日常生活下のストレスの多面的評価法の開発. 平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究 (23-2: 主任研究者: 安藤哲也)」. 平成 23~25 年度総括・分担研究報告書. pp23-60, 2014.
- 4) 赤澤 晃, 小田嶋博, 亀田 誠, 高増哲也, 古川真弓, 及川郁子, 益子育代, 奥野由美子, 金子恵美, 金田一賢頭: 気管支喘息・COPD 患者の健康回復に関する調査研究. 気管支喘息患者の効果的な長期管理支援のための患者アセスメント手法の評価に応じた患者教育プログラム アレルギー専門コメディカルによる喘息アレルギー疾患自己管理・長期管理指導の質の向上, 医療の効率化に関する研究. 平成 24-25 年度 独立法人環境再生保全機構 委託業務 研究報告書.
- 5) 近喰ふじ子: 東京家政大学大学院共同研究推進費「日常のストレス対処駆動尺度に関する研究報告書」, 平成 22-25 年度総括報告書.

(5) 翻訳

- 1) 兼子 唯, 鈴木伸一, 貝谷久宣: 双極性障害の併用療法. 貝谷久宣 監訳: 認知行動療法・薬物療法併用ガイドブック エビデンスベースト・アプローチ. 金剛出版, 東京, 2013. (Sudak D: Combining CBT and medication: an evidence-based approach. Wiley, New York, 2011.)
- 2) 兼子 唯・鈴木伸一・貝谷久宣: 不安障害の併用療法. 貝谷久宣 監訳: 認知行動療法・薬物療法併用ガイドブック エビデンスベースト・アプローチ. 金剛出版, 東京, 2013. (Sudak D: Combining CBT and medication: an evidence-based approach. Wiley, New York, 2011.)

(6) その他

- 1) 近喰ふじ子: 第 44 回日本芸術療法学会印象記, 日本芸術療法学会誌 43(1): 72-73, 2013.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kodama N, Moriguchi Y, Maeda M, Ando T, Kikuchi H, Akamatsu N, Tsuji S, Komaki G: Neural correlates of body dissatisfaction: a functional MRI study. The 22nd World Congress on Psychosomatic Medicine, Lisbon, 2013.9.12-14.
- 2) 安藤哲也: 過敏性腸症候群にみられる不安. シンポジウム1: 身体疾患にともなう不安. 第6回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.
- 3) 菊地裕絵: 池見賞受賞記念講演. Diurnal variation of tension-type headache intensity and

exacerbation: an investigation using computerized ecological momentary assessment. 第54回日本心身医学会学術講演会, 神奈川, 2013.6.26-27.

- 4) 小原千郷, 鈴木(堀田) 眞理, 加茂登志子: 摂食障害の家族心理教育. シンポジウム 摂食障害の家族療法をめぐって. 第109回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 5) 兼子 唯, 巢山晴菜, 伊藤理紗, 伊藤大輔, 貝谷久宣, 熊野宏昭, 鈴木伸一: うつ病を対象とした集団認知行動療法実施上の問題点と工夫点(自主企画シンポジウム2 集団認知行動療法を実施するために必要なスキルは何か?). 第39回日本行動療法学会, 東京, 2013.8.23-25.
- 6) 兼子 唯, 伊藤大輔, 巢山晴菜, 伊藤理紗, 貝谷久宣, 熊野宏昭, 鈴木伸一: 心療内科・神経科クリニックで実施するうつ病を対象とした集団認知行動療法の紹介(公募シンポジウム SS-011 うつ病の発症および再発予防への認知行動療法の貢献). 第77回日本心理学会, 北海道, 2013.9.19-21.
- 7) 小原千郷, 鈴木(堀田) 眞理, 加茂登志子: 心理士に何ができるか—社会への適応支援を中心に. パネルディスカッション 心理士に何ができるか(心の成長をどのように支えていくか). 第17回日本摂食障害学会学術総会, 神戸, 2013.11.2-3.
- 8) 天野智文, 有賀 元, 樽松文子, 大和 滋, 森岡 想, 眞坂 彰, 金澤 素, 福土 審: モサプリドクエン酸塩のヒト胃適応性弛緩に対する影響. 第6回J-FD研究会, 東京, 2013.11.9.
- 9) 本間洋州, 森本浩章, 高橋昌稔, 兒玉直樹, 岡田和将, 赤松直樹: うつ病の精査中に骨髄異形成症候群を指摘した一例. 第53回日本心身医学会九州地方会, 大分, 2014.1.25-26.
- 10) 兼子 唯・石井 華・巢山晴菜・小松千賀・野口恭子・貝谷久宣・鈴木伸一: 広場恐怖を対象とした集団認知行動療法の有効性の検討 およびスルピリド服薬による有効性の差の検討. 第6回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.
- 11) 近喰ふじ子: 再婚のプロセスで起こった身体的虐待~家族支援の繋がりからの視点から~. 日本遊戯療法学会第11回全国研修会「遊戯療法と家族」, 東京, 2014.3.9.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y, Ando T: Do psychological factors aggravate and trigger tension-type headache in real life? Society for Ambulatory Assessment 3rd Conference, Amsterdam, 2013.6.20-22.
- 2) Inada S, Yoshiuchi K, Azuma A, Takimoto Y, Iizuka Y, Ohashi K, Kikuchi H, Yoshiharu Y, Kadowaki T, Akabayashi A: Feasibility and acceptability of personal digital assistant (PDA) with self-monitoring system for type-2 diabetes. Society for Ambulatory Assessment 3rd Conference, Amsterdam, 2013.6.20-22.
- 3) Suyama H, Kaiya H, Kaneko Y, Suzuki S: Relationships between rejection sensitivity and depressive symptoms. Asian Cognitive Behavioral Therapy Conference, Tokyo, Japan, 2013.8.23-25.
- 4) Kaneko Y, Suyama H, Ito I, Ito D, Kaiya H, Kumano H, Suzuki S: The effect of cognitive behavior group therapy on return to work. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy Conference, Tokyo, 2013.8.23-24.
- 5) Ito R, Kobayashi N, Yokoyama S, Sato T, Suyama H, Kaneko Y, Suzuki S: Effect of interactions between sensitivity to reward and punishment and cognitive bias on social anxiety. Asian Cognitive Behavioral Therapy Conference, Tokyo, 2013.8.23-25.
- 6) Yada S, Machida Y, Son S, Shimizu K, Kunisato Y, Kaneko Y, Suyama H, Shirai M, Suzuki S: The relationship between periods of sick leave and automatic thoughts among employees with depression. Asian Cognitive Behavioral Therapy Conference, Tokyo, 2013.8.23-25.

- 7) Oe Y, Kura S, Ariga H, Amano T, Yamato S, Horikoshi M, Fukudo S, Kikuchi H, Tomita Y, Ando T: Development of cognitive behavioral therapy - interoceptive exposure for irritable bowel syndrome: a pilot study in Japan. 72nd Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, San Francisco, 2014.3.12-15.
- 8) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Tomita Y, Ando T: Development of a comprehensive stress rating scale for ecological momentary assessment: preliminary analysis by item response theory. 72nd Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, San Francisco, 2014.3.12-15.
- 9) Ando T, Tamura N, Ichimaru Y, Kura N, Konishi M, Tomita Y, Chiba N, Ishikawa T and Komaki G: Plasma amino acid profile in anorexia nervosa and its relation to current food intake. International Conference on Eating Disorders 2014, 開催地, 2014.3.27-29.
- 10) 菊地裕絵, 吉内一浩, 富田吉敏, 安藤哲也: Ecological momentary assessment 用ストレス評価尺度の開発～項目反応理論による項目分析. 第 54 回日本心身医学会学術講演会, 神奈川, 2013.6.26-27.
- 11) 安藤哲也, 田村奈穂, 倉 尚樹, 小西 恵, 富田吉敏, 知場奈津子, 本間洋州, 濱田 孝, 石川俊男, 小牧 元: 神経性食欲不振症の血漿アミノ酸プロファイルの解析. 第 54 回日本心身医学会学術講演会, 神奈川, 2013.6.26-27.
- 12) 鈴木雅子, 近喰ふじ子, 徳永千和, 他: 「TEG」で「どちらでもない」が 11 を超えた人たちの検討. 日本交流分析学会第 38 回学術大会 (共同開催) 2013 ITAA 国際大会 in OSAKA, 大阪, 2013.8.15.
- 13) 大江悠樹, 倉 五月, 菊地裕絵, 堀越 勝, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の開発研究—テストケースを通じたマニュアルの改善と介入状況について—. 第 13 回日本認知療法学会, 東京, 2013.8.23-25.
- 14) 新明一星, 堀越 勝, 大江悠樹, 高岸百合子, 野田隆政, 山田麻紀, 村田美穂, 古澤嘉彦: パーキンソン病患者のうつ, 不安に対する認知行動療法. 第 13 回日本認知療法学会, 東京, 2013.8.23-25.8.
- 15) 鈴木雅子, 近喰ふじ子, 森 由美子, 他: 発達障害・身体障害児・者の現状報告ならびに親の思いと期待. 第 31 回日本小児心身医学会学術集会, 鳥取, 2013.9.14.
- 16) 大江悠樹, 大柄昭子, 熊地美枝, 堀越 勝: 看護師のためのコミュニケーションスキルトレーニングプログラムのパイロットスタディ. 第 2 回日本ポジティブサイコロジー医学会, 福島, 2013.10.18.
- 17) 安藤哲也, 田村奈穂, 米良貴嗣, 河合啓介, 武井美智子, 中本智恵美, 鈴木 (堀田) 眞理, 成尾鉄朗, 石川俊男, 小牧 元: 脂肪酸アミド加水分解酵素 (FAAH) 遺伝子 385C/A 多型と神経性食欲不振症との関連. 第 17 回日本摂食障害学会・学術集会, 兵庫, 2013.11.2-3.
- 18) 安藤哲也, 大江悠樹, 倉 五月, 菊地裕絵, 堀越 勝: 過敏性腸症候群 (IBS) に対する認知行動療法 (CBT) の開発. 第 29 回日本ストレス学会学術総会, 徳島, 2013.11.8-9.
- 19) 大江悠樹, 倉 五月, 富田吉敏, 菊地裕絵, 堀越 勝, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の開発研究—治療プロトコルと介入の実際—. 第 123 回日本心身医学会関東地方会, 東京, 2013.11.16.
- 20) 鈴木雅子, 近喰ふじ子, 森 由美子, 他: 発達障害児へのパペットの介入の試み, 日本パペットセラピー学会第 7 回大会, 東京, 2013.11.17.
- 21) 近喰ふじ子: 遊びの面からのパペットの働きの場を考える. 日本パペットセラピー学会第 7 回大会, 東京, 2013.11.17.
- 22) 近喰ふじ子, 井上俊哉, 塚本尚子, 他: 既婚者のストレス記録表から対処行動質問紙作成の試み. 第 18 回日本心療内科学会総会・学術大会, 愛知, 2013.12.7.

- 23) 安藤哲也, 大江悠樹, 倉 五月, 富田吉敏, 菊地裕絵, 堀越 勝: 過敏性腸症候群 (IBS) の内部感覚曝露を用いた認知行動療法(CBT)の開発. 第18回日本心療内科学会総会・学術大会, 愛知, 2013.12.7-8. (会長賞受賞)
- 24) 菊地裕絵, 吉内一浩, 富田吉敏, 安藤哲也: Ecological momentary assessment 用ストレス評価尺度開発～項目反応理論を用いたストレス反応に関する項目選定. 第18回日本心療内科学会学術大会, 名古屋, 2013.12.7-8. (最優秀ポスター賞受賞)
- 25) 倉 五月, 大江悠樹, 大和 滋, 堀越 勝, 福土 審, 菊地裕絵, 富田吉敏, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の開発—治療者との関係性構築に特徴が見られた男性患者の1例—. 第6回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.

(3) 研究報告会

- 1) 安藤哲也: 心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究. 精神神経疾患研究開発費(23-2) 合同報告会, 東京, 2013.12.17.
- 2) 菊地裕絵, 上野真弓: 日常生活下のストレスの多面的評価法の開発. 精神・神経疾患研究開発費 (23-2) 「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」(主任研究者: 安藤哲也) 合同研究報告会, 東京, 2013.12.17.
- 3) 安藤哲也, 大江悠樹, 倉 五月, 有賀 元, 天野智文, 大和 滋, 堀越 勝, 福土 審, 菊地裕絵, 富田吉敏: 機能的消化管障害の臨床評価ならびに CBT 開発研究. 精神・神経疾患研究開発費 (23-2) 「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」(主任研究者: 安藤哲也) 合同研究報告会, 東京, 2013.12.17.
- 4) 伊藤正哉, 堀越 勝, 加藤典子, 藤里紘子, 大江悠樹, 中島 俊, 奥村泰之, 宮前光宏, 蟹江絢子, 堀田 亮, 中川敦夫, 臼杵理人, 松岡 豊, 大野 裕: 不安障害とうつ病性障害に対する認知行動療法の統一プロトコルの有効性に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 (24-4) 「認知行動療法・補完代替療法の臨床展開に関する基盤研究」(主任研究者: 松岡豊) 合同研究報告会, 東京, 2013.12.17.
- 5) 堀越 勝, 大柄昭子, 熊地美枝, 朝海 撰, 大江悠樹: 看護師を対象とした認知行動モデルに基づくコミュニケーションスキルトレーニングの有効性の検討. 精神・神経疾患研究開発費 (24-4) 「認知行動療法・補完代替療法の臨床展開に関する基盤研究」(主任研究者: 松岡 豊) 合同研究報告会, 東京, 2013.12.17.
- 6) 堀越 勝, 大江悠樹, 新明一星, 熊地美枝: ニーズ立脚型ストレス・マネージメントプログラム開発と教育システム構築の検討. 精神・神経疾患研究開発費 (25-8) 「社会負担軽減に資する大規模臨床研究のための基盤整備と人材育成: マルチセンター・クリニカルトライアル」(主任研究者: 渡辺範雄) 合同研究報告会, 東京, 2013.12.17.

(4) その他

C. 講演

- 1) 大和 滋: 神経難病と消化管障害. 第9回埼玉県難病医療連絡協議会講演会「神経難病の合併症」, 埼玉, 2013.11.19.

D. 学会活動 (学会主催, 学会役員, 座長, 編集委員等)

(1) 学会主催

- 1) 菊地裕絵: 第6回日本不安障害学会学術大会 事務局長, 東京, 2014.2.1-2.
- 2) 近喰ふじ子: 日本パペットセラピー学会第7回大会 会長, 東京, 2013.11.17.

(2) 学会役員

- 1) 安藤哲也：日本心身医学会 代議員
- 2) 安藤哲也：日本心療内科学会 評議員
- 3) 安藤哲也：日本皮膚科心身医学会 評議員
- 4) 安藤哲也：日本ストレス学会 評議員
- 5) 菊地裕絵：日本心身医学会 代議員
- 6) 菊地裕絵：日本女性心身医学会 評議員，幹事
- 7) 菊地裕絵：日本サイコオンコロジー学会 代議員
- 8) 菊地裕絵：日本交流分析学会 評議員
- 9) 菊地裕絵：日本行動医学会 評議員
- 10) 菊地裕絵：日本ストレス学会 評議員
- 11) 近喰ふじ子：日本パペットセラピー学会 理事
- 12) 近喰ふじ子：子ども健康科学会 理事
- 13) 近喰ふじ子：日本心身医学会 代議員
- 14) 近喰ふじ子：日本小児心身医学会 評議員
- 15) 近喰ふじ子：日本民族衛生学会 評議員
- 16) 近喰ふじ子：日本遊戯療法学会 研修委員
- 17) 大和 滋：日本消化器病学会 評議員
- 18) 大和 滋：日本消化器内視鏡学会 評議員

(3) 座長

- 1) 菊地裕絵：一般演題 E 座長，第 42 回日本女性心身医学会学術集会，2013.7.27-28.
- 2) 安藤哲也：教育講演 3「摂食障害の生物学的基礎」座長，第 17 回日本摂食障害学会・学術集会，兵庫，2013.11.2.
- 3) 大和 滋：一般演題座長，第 4 回 Japan Gut Forum，東京，2013.11.23.
- 4) 大和 滋：ワークショップ 4「過敏性腸症候群の診療における現状と問題点」第 21 回日本消化器関連学会週間，東京，2013.11.23.
- 5) 近喰ふじ子：一般演題 1-4 座長，第 5 回日本小児心身医学会関東甲信越地方会，新潟，2014.3.16.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 菊地裕絵：日本女性心身医学会雑誌「女性心身医学」 編集委員
- 2) 菊地裕絵：Editorial board member of WOMAN (Psychosomatic Gynecology and Obstetrics)
- 3) 近喰ふじ子：東京家政大学研究紀要 副編集委員長
- 4) 近喰ふじ子：臨床相談センター紀要 編集委員長

E. 研修**(1) 研修企画**

- 1) 安藤哲也，菊地裕絵：平成 25 年度第 11 回摂食障害治療研修，精神保健に関する技術研修，精神保健研究所，東京，2013.8.27-30.
- 2) 安藤哲也，菊地裕絵：平成 25 年度第 10 回摂食障害看護研修，精神保健に関する技術研修，精神保健研究所，東京，2013.11.6-8.

(2) 研修会講師

- 1) 安藤哲也：摂食障害病態・治療総論．第 10 回摂食障害治療研修，精神保健研究所，東京，

2013.8.27.

- 2) 安藤哲也:摂食障害病態・治療総論. 第9回摂食障害看護研修, 精神保健研究所, 東京, 2013.11.6.
- 3) 大江悠樹:あなたの臨床能力を劇的にアップする患者さんと治療者のよりよい関係作り—すぐに使える認知行動療法—. 第13回国立病院関東信越理学・作業療法士合同研修会, 東京, 2013.9.14.
- 4) 小原千郷:家族療法と心理教育. 第11回摂食障害治療研修, 東京, 2013.8.27-30.
- 5) 小原千郷:ケアとコミュニケーションのスキル. 第10回摂食障害看護研修, 東京, 2013.11.6-8.

F. その他

5. 児童・思春期精神保健研究部

I. 研究部の概要

当部は、児童期に発症する種々の行動および情緒の障害について、地域コホートを確立し長期経過および病態解明を継続的に行っており、その成果をもとに早期診断法開発、予防法および治療法開発研究に取り組んでいる。なかでも、自閉症スペクトラム障害（ASD）は、発達最早期から発症し、すべてのライフステージを通して合併精神障害のリスクが高いため、当部が現在、最も精力的に取り組んでいる研究テーマである。ASDの複雑な病態の解明のために、子どもから成人までを対象として神経生理学的、認知神経科学的、分子遺伝学的など多領域アプローチを用いた研究を内外の共同研究者たちと展開している。

乳幼児期からの横断的および縦断的研究により得られたエビデンスに基づいて、地域・学校ベースの精神保健ケアシステムの提案を発信している。また、発達障害者支援法に基づく知識および支援体制の普及推進の目的で、早期発見・早期介入システムと育児支援のための研修、教育と医療の連携推進、そして一般精神科における成人となった発達障害者への医療に関する研修を含む、多領域の専門家に向けた多様な情報発信および啓発活動にも精力的に取り組んでいる。

児童期における発達障害とその近縁にある種々の発達病理は、児童精神医学の領域を超えて、パーソナリティの形成や成人期における精神病理との連続性を持っており、一般精神医学の諸領域への新しい切り口となる可能性を秘めていると考えている。今後、一般精神医学において発達精神医学的な視点がますます重要となっていくと考えられ、わが国の子どもたちについてのエビデンスの構築に努めている。

人員構成は以下のとおりである。部長：神尾陽子，児童期精神保健研究室長：高橋秀俊，思春期精神保健研究室長：石飛 信（11月～），流動研究員（2名）：飯田悠佳子（～H26.3月），小松佐穂子，科研費研究員（3名）：中鉢貴行，岡島純子，遠藤明代（～6月），客員研究員（17名）：飛松省三，黒田美保，三宅篤子，則内まどか，平岩幹男，長尾圭造，立花良之，米田英嗣（5月～），渥美義賢（12月～），箱田裕司（H26.1月～），大森隆司（～H26.3月），奥寺 崇（～H26.3月），中島洋子（～H26.3月），武田俊信（～H26.3月），菊池吉晃（～H26.3月），土屋賢治（～H26.3月），小石誠二（～H26.3月），協力研究員（1名）：辻井弘美（～H26.3月），研究生（24名）：武井麗子，榊原信子，荻野和雄，名雪圭祐，西海枝洋子，山根直人，貫井祐子，望月由紀子，櫻井由香（5月～），神長伸幸（10月～），柴田奈津美（10月～），近藤綾子（10月～），金 鎮赫（12月～），佐藤真由美（H26.1月～），市川寛子（H26.1月～），森脇愛子（～3月），佐藤 裕（～3月），平本絵里子（～3月），蔦森英史（～3月），蔦森絵美（～3月），高橋英之（～3月），片桐正敏（～3月），井口英子（～3月），水島 栄（～3月）。

II. 研究活動

- 1) 発達障害の疫学研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の変化：地域ベースの横断的および縦断的研究」）

地域の行政および幼稚園・保育所の協力のもと、多摩地域の5歳児を対象とした本研究によって、5歳児における発達障害の実態および合併精神症状、不器用などの運動症状、睡眠問題のニーズが明らかになった。さらに3年間の追跡によって、5歳児の自閉症状・行動特性は7歳でのQOLや併存症を予測し、さらに5歳児の自閉症状・行動特性は1歳6ヵ月健診で把握可能な行動から予測可能であることも明らかになった。これにより、地域でニーズのある子どもすべてにニーズに応じた支援サービスを提供できるためには、地域での支援を実効化、効率化するには一元的窓口を創ると同時に、多領域かつ経時的な情報の統合と連携機能を可能にする体制整備の必要性が示された。（神尾・飯田・小松・遠藤・平本・荻野・中鉢・高橋・三宅）

- 2) 小平コホート研究：精神医学的障害の早期発見と早期介入（精神・神経疾患研究開発費）

青年期あるいは若年成人期で発症する精神疾患の、早期発見・早期介入の根拠となる病態メカニズムを明らかにし、早期介入可能性を検証することを目的に、ハイリスク児のコホートを行動的および神経生理学的にデータ収集しながら追跡した。これにより、自閉症的行動特性は、診断の有無に関わらず安定して継続する特性であることを明らかにした。さらに症状レベルだけではなく、中間表現型に注目し、神経生理学的指標と臨床指標を定量的に解析することによって、従来の診断枠を超えて、聴覚性驚愕反射の制御機構に関する複数の指標を自閉症状や不安症状の中間表現型候補として同定することができた。また、幼児期の自閉症状をターゲットとする非薬物的行動的介入のわが国で実施可能なプログラムの検証、児童期の発達障害児に対して、学校で実施可能な認知行動療法プログラム、およびクリニックで実施可能な親訓練プログラム、また成人の自閉症スペクトラム障害患者の合併症状や不適応を対象とする集団認知行動療法プログラムを開発し、その有用性を示した。(神尾・高橋・岡島・飯田・小松・武井・櫻井・三宅・荻野・黒田)

- 3) 自閉症スペクトラム児における知覚情報処理の発達的变化に関する神経生理学的研究(文部科学省科学研究費)

国立精神・神経医療研究センター 脳病態統合イメージングセンターや九州大学臨床神経生理学教室と共同で、自閉症スペクトラム児や定型発達児などを主な対象に、神経生理学的検査としてミスマッチ・ネガティブティやガンマ・オシレーションなどの脳波事象関連電位・脳磁図検査、およびプレパルス・インヒビションなど聴覚性驚愕反射検査を実施した。これら神経生理学的指標と定量的自閉症特性や情緒と行動の問題などの臨床指標との関連についても調べた。結果、ASDの聴覚処理に関わる神経生理学的指標と自閉症特性や情緒の問題などの臨床指標との関連性が見いだされ、中間表現型を同定する有効な指標であることが示唆された。H26年度以降は、経時的な変化を調べることで発達的变化についても研究していくことを課題とする。(高橋・中鉢・小松・飯田・荻野・望月・飛松・荻原・廣永・神尾)

- 4) 児童の発達障害および精神医学的障害に関する行動評価尺度の標準化(厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業 精神障害分野))

医療や教育、福祉などのさまざまな臨床場面で発達障害の子どもから成人までの症状を評定し、ニーズを検討するために必要な、共通して使用可能な評価尺度はほとんど存在しない。また、エコチル調査のような大規模研究に使用可能な尺度もないのが実情である。このため、全国データをもとに、さらに全国の専門医療研究施設の協力を得て日本で使えるSRS(3歳版、児童版、成人版)、SDQ、SCDC、DCDQ、ADOSなど複数の尺度の妥当性検証を行い、ほぼ完了した。児童用精神医学的半構造化面接KIDDIE-SADS-PLについては多施設の協力を得てデータ収集を円滑に進めた。(森脇・飯田・小松・荻野・武井・石飛・稲田・黒田・高橋・神尾)

- 5) 被災地の子どもの精神医療支援(厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業 精神障害分野)「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」)

被災後の避難所等における子どもの環境改善のために、東日本大震災時の避難所等において子どもを取り巻く生活環境面の問題点や支援ニーズを明らかにするための、質問紙調査および聴き取り調査を福島県避難者において実施した。また、質問紙評価による子どもの精神医学的症状の把握を行った。これらの結果から、被災後の避難所等において子どもの心理社会的支援を行うための国際的ガイドラインの達成状況を整理した。さらに、ガイドライン遵守のためのチェックリストの作成も行った。また、被災地域から遠隔地で生活する子どものメンタルヘルスと東日本大震災のテレビ報道への暴露との関係を調査することを目的に、質問紙調査を実施した。この研究では、震災・津波のテレビ視聴と子どもの発育との関係に加え、発達障害の有無などの児の要因とテレビ視聴時の反応との関連性についても調査し、結果については精研報告会で中間報告を行った。(神尾・金・森脇・大沼)

- 6) 幼児用対人コミュニケーション行動評価尺度 (The Baby and Infant Screen for Children with aUtism Traits (BISCUIT)) 日本語版の信頼性・妥当性の検証 (厚生労働科学研究費補助金事業 (障害者対策総合研究事業)「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実態と評価のあり方に関する研究」)

中核症状・併存症状双方の観点から ASD の早期診断をすすめ、幼児期から個別ニーズに応じた支援体制を確立していくことが今後の重要課題である。このためには、中核症状・併存症双方の観点から子どもを包括的に評価可能で、実臨床にも使用可能な簡便な評価尺度が必要である。本年度は、評価尺度およびそのマニュアルの日本語訳の原著者とのバックトランスレーションの手続きを完了し、国際共同研究プロトコールに準じた研究計画の立案を行った。本研究班の研究代表者を含む複数の分担研究者の所属するすべての機関の倫理委員会の審査を経て、研究協力者のリクルートを開始した。(石飛・荻野・高橋・小原・神尾)

- 7) 成人 ADHD の一般精神科における有病率など疫学研究 (Japan Prevalence Study of Adult ADHD in Patients at Psychiatric Outpatient Care: J-PAAP)

ADHD (注意欠陥・多動性障害) は成人期まで症状が持続することが明らかになり、さらに気分障害、不安障害、物質使用障害などさまざまな併存障害を伴い、精神科的ニーズが高い。一般外来の精神科成人患者の ADHD を適切に診断し、必要な治療や支援の提供を行うことが今後の精神科医療には求められるが、これに関する基礎的データはこれまでほとんど報告がない。ADHD の発症における遺伝的リスクは高いが、その症状に対する認識や医療環境には国や文化において差異があることから、日本の一般精神科外来における成人期 ADHD の有病率や併存障害、患者が抱える困難を明らかにすることを目的として、九州地区の医療機関の協力を得て着手した。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

- 1) 市民社会に対する一般的な貢献

社会全体のニーズの高まりに対応して、全国各地での自治体主催の市民向けの公開講座で精力的に講演を行った他、NCNP の市民公開講座「発達障害の子どもたちのために社会ができること—最新研究からみえてきたもの」を企画し、講演を行った。また HP を通じて研究成果を逐次更新し、発信した。さらに、テレビ、新聞、雑誌等のメディア取材を積極的に受け、発達障害に関する知識の普及啓発活動を行った。

- 2) 専門教育面における貢献

神尾は、山梨大学連携大学院の客員教授として、指導教員としては院生 2 名の指導にあたり、2 名を学位取得に導いた。また 2 名の学生の学位審査の副査を担当した。医学部生 (東京医科歯科大学) の第 4 学年自由選択 (プロジェクト Semester) 学生研修 (H25 年 10 月～H26 年 2 月) を受け入れ、研究活動に参加してもらい、論文指導を行った。神尾はセンター病院への東大、防衛医大の臨床実習生に対する児童精神医学の講義を担当した。対外的には全国の発達障害を診療できる児童精神科医、成人精神科医の人材育成を目的とした事例検討会や研修を担当した。

神尾、高橋は、国や大学、学会、研究会、自治体、そして各地医師会主催の専門家 (精神科医、保健師、福祉士、臨床心理士、言語聴覚士、教員) 向けの研修会講演講師を可能な範囲で精力的に引き受け、人材の育成に携わっている。センター内外を対象とした活動としては、H25 年度は研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス (今年度より「発達障害を考える基礎と臨床の勉強会」に名称を変更) を 3 回開催し、センター外から第一線の臨床家および研究者を講師に招き、内外の若手医師および若手研究者の多数参加を得、啓発と指導に取り組んだ。飯田は、武蔵野大学人間科学部の非常勤講師として (スポーツ医学の講義を行い) 心理職や教職を目指す学部生教育に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援事業の一環として、当部主催で行う研修として、発達障害の早期発見のスキルアップを目的とする第8回「発達障害早期総合支援研修」（自治体の乳幼児健診に携わる医師および保健師対象）および未診断発達障害成人の医療的対応のスキルアップを目的とする第6回「発達障害精神医療研修」（精神科医対象）を企画・実施し、両研修会において神尾が講義も担当した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

政府委員会：神尾は、厚生労働省 発達障害の情報提供等事業に関する運営会議運営委員として出席し、提言を行った。また母子保健施策（健やか親子21）に対して助言をオブザーバーとして会議で助言を行った。

その他公的委員会：神尾は、昨年度に引き続き日本学術会議連携会員としての委員会活動（第22期日本学術会議臨床医学委員会 脳とこころ分科会委員および第22期出生・発達分科会委員）を通して、提言執筆に携わった。脳とこころ分科会では幹事を担当し、編集に携わった。子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）運営委員として事業評価を行い、進行中の研究への助言を行った。また平成23年度に立ちあがった環境省エコチル調査に関しては、環境省エコチル調査精神神経発達部門合同プロジェクト班メンバー、およびメディカルサポートセンター質問票作成WG・詳細調査準備WG委員を兼任し、定例会議に出席、プロトコル作成および独自にデータ収集、解析を行い、エコチルで使用する調査項目の決定に貢献した。また独立行政法人医薬品医療機器総合機構の専門協議委員として会議出席および専門的助言を行った。

その他、日本小児保健協会発達障害への対応委員会委員、小平市の特別支援教育専門家委員として、保健医療、教育、福祉分野の専門家と意見交換し、専門的助言を行った。

高橋は、東京都大島町からの要請により、全島の発達障害の診断・治療・調査・研究を含めた支援体制の構築に向けて月1回赴いている。また、日本総合病院精神医学会の東日本大震災精神科医派遣プロジェクト～第1次計画福島県浜通り地域（沿岸部）支援～松村総合病院（福島県いわき市）へ診療支援として毎月1回派遣されている。

研究成果の行政活用：発達障害の早期発見に関して、当部の研究成果をもとに厚生労働省の発達障害施策の一環として普及に努めているところであるが、全国の市町村からの評価手順に関する問い合わせが年々増えており、H25年度は約20自治体から導入検討の相談があった。また多摩地区では神尾が小平市特別支援教育推進プログラム専門家委員を務め、義務教育期間における特別支援教育を円滑に推進するための「小平市教育委員会の特別支援教育推進の大綱」の評価に携わった。さらに当部として、小平市内で年5回の教師対象研修を行い、特別支援教育の専門的支援を行った。

5) センター内における臨床的活動

研究協力希望者に対する臨床活動および地域コホートの外来診療をセンター病院にて行っている。

6) その他

特になし。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kamio Y, Inada N, Koyama T, Inokuchi E, Tsuchiya K, Kuroda M: Effectiveness of using the Modified Checklist for Toddlers with Autism in two-stage screening of autism spectrum disorder at the 18-month health check-up in Japan. J Aut Dev Disord 44(1): 194-203,

- doi:10.1007/s10803-013-1864-1, 2014.
- 2) Kuroda M, Kawakubo Y, Kuwabara H, Yokoyama K, Kano K, and Kamio Y: A Cognitive-behavioral intervention for emotion regulation in adults with high-functioning autism spectrum disorders: study protocol for a randomized controlled trial. *Trials*, doi:10.1186/1745-6215-14-231, 2013.
 - 3) Watanabe T, Abe O, Kuwabara H, Yahata N, Takano Y, Iwashiro N, Natsubori T, Aoki Y, Takao H, Kawakubo Y, Kamio Y, Kato N, Miyashita Y, Kasai K, Yamasue H: Mitigation of sociocommunicational deficits of autism through oxytocin-induced recovery of medial prefrontal activity: a randomized trial. *JAMA Psychiatry*, doi: 10.1001/jamapsychiatry.2013.3181, published online Dec 18, 2013.
 - 4) Kamio Y, Moriwaki A, Inada N: Utility of teacher-report assessments of autistic severity in Japanese school children. *Autism Research and Treatment*, <http://dx.doi.org/10.1155/2013/373240>, 2013.
 - 5) Inokuchi E, Kamio Y: Qualitative analyses of verbal fluency in adolescents and young adults with high-functioning autism spectrum disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders* 7: 1403-1410, 2013.
 - 6) Moriwaki A, Kamio Y: Normative data and psychometric properties of the Strengths and Difficulties Questionnaire among Japanese school-aged children. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 8:1, doi: 10.1186/1753-2000-8-1, 2014.
 - 7) Nishiyama T, Suzuki M, Adachi K, Sumi S, Okada K, Kishino H, Sakai S, Kamio Y, Kojima M, Suzuki S, Gruber CP, Kanne SM: Comprehensive comparison of self-administered questionnaires for measuring quantitative autistic traits in adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 12/2013; doi:10.1007/s10803-013-2020-7, 2013.
 - 8) Yamasaki T, Ogata K, Maekawa T, Ijichi I, Katagiri M, Mitsudo T, Kamio Y, Tobimatsu S: Rapid maturation of voice and linguistic processing systems in preschool children: a near-infrared spectroscopic study. *Experimental Neurology*, 2013 Dec; 250: 313-20. doi: 10.1016/j.expneurol.2013.10.005. Epub 2013 Oct 8, 2013.
 - 9) Takahashi H, Nakahachi T, Komatsu S, Ogino K, Iida Y, Kamio Y: Hyperreactivity to weak acoustic stimuli and prolonged acoustic startle latency in children with autism spectrum disorders. *Molecular Autism*, 03/2014; 5(1):23. doi:10.1186/2040-2392-5-23, 2014.
 - 10) 神尾陽子, 稲田尚子, 森脇愛子, 井口英子, 小山智典, 武井麗子, 黒田美保, 中鉢貴行, 高橋秀俊: 広汎性発達障害のライフステージに応じた介入と予防に向けて—疫学研究から。精神神経学 114, 第 107 回学術総会特別号: SS441-446, 2013.
 - 11) 神尾陽子, 森脇愛子, 武井麗子, 稲田尚子, 井口英子, 高橋秀俊, 中鉢貴行: 特集 発達障害再考—診断閾値の臨床的意義を問い直す—。未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題。精神神経学 115(6) : SS601-606, 2013.
 - 12) 森脇愛子, 神尾陽子: 我が国の小・中学校通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的行動特性と合併精神症状との関連。自閉症スペクトラム研究 10(1) : 11-17, 2013.
 - 13) 神尾陽子, 森脇愛子, 井口英子, 稲田尚子, 武井麗子, 黒田美保, 中鉢貴行, 高橋秀俊: 小・中学校におけるエビデンスにもとづく学校精神保健の課題。精神神経学 114, 第 107 回学術総会特別号: SS611-617, 2013.
 - 14) 高橋秀俊, 中鉢貴行, 森脇愛子, 武井麗子, 飯田悠佳子, 荻野和雄, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム児の聴覚性驚愕反射に関する神経生理学的検討。特集 発達障害の病態生理解明の最先端。日本生物学的精神医学会誌 24(4) : 229-234, 2013.
 - 15) 黒田美保, 川久保由紀, 桑原 斉, 金生由紀子, 神尾陽子: 特集 発達障害再考—診断閾値の臨

床的意義を問い直す—。自閉症スペクトラム障害成人への小集団認知行動療法の研究過程でみられた関下症例。精神神経学 115(6) : 623-629, 2013.

(2) 総説

- 1) Yamasaki T, Fujita T, Kamio Y, Tobimatsu S: Electrophysiological assessment of visual function in autism spectrum disorders. Neurosci Biomed Engineer1: 5-12, 2013.
- 2) 神尾陽子: 精神医学における発達障害再考—児童期から成人期へのさまざまな発達軌跡。精神神経学 114, 第 107 回学術総会特別号 : 439-440, 2013.
- 3) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の診断の根拠とは何か。教育と医学 61(4) : 4-14, 2013.
- 4) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の早期発見 : ライフステージにわたる支援のために。コミュニケーション障害学 30 : 18-24, 2013.
- 5) 神尾陽子, 荻野和雄, 高橋秀俊: 自閉症スペクトラム障害の疫学研究から。最新医学 68 : 2080-2087, 2013.
- 6) 神尾陽子: 自閉症の限局的反復行動。Decision Making—意思決定・行動選択の神経科学。Clinical Neuroscience32(1) : 101-103, 2014.
- 7) 石飛 信, 荻野和雄, 小坂浩隆, 神尾陽子: ASD と注意機能。精神科 24(2) : 178-181, 2014.
- 8) 高橋秀俊, 神尾陽子: 自閉症のエンドフェノタイプ。精神保健研究 27(60) : 27-33, 2014.

(3) 著書

- 1) Kamio Y, Inada N: Early diagnosis of ASD in toddlers and school children: community studies and national surveys in Japan. The comprehensive guide to autism. Springer, pp2561-2577, 2013.
- 2) Yamazaki T, Maekawa T, Takahashi H, Fujita T, Kamio Y, Tobimatsu S: Electrophysiology of visual and auditory perception in autism spectrum disorders. The comprehensive guide to autism, Springer, pp791-808, 2013.
- 3) 神尾陽子: 自閉症。認知心理学ハンドブック。有斐閣, 東京, pp376-377, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 神尾陽子: 就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の変化 : 地域ベースの横断的および縦断的研究。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の変化 : 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者 : 神尾陽子)」総括・分担研究報告書。pp1-7, 2014.
- 2) 神尾陽子, 飯田悠佳子, 小松佐穂子, 荻野和雄, 遠藤明代, 立森久照, 平本絵里子, 中鉢貴之, 高橋秀俊, 三宅篤子: 幼児期における発達障害の有病率と関連要因に関する研究。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の変化 : 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者 : 神尾陽子)」総括・分担研究報告書。pp11-20, 2014.
- 3) 飯田悠佳子, 森脇愛子, 神尾陽子: 担任評価 (4-5 歳) による対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale : SRS) の標準化の試み (「幼児期における発達障害の有病率と関連要因に関する研究」研究協力報告書)。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の変化 : 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者 : 神尾陽子)」総括・分担研究報告書。pp21-32, 2014.
- 4) 飯田悠佳子, 森脇愛子, 小松佐穂子, 神尾陽子: わが国の就学前幼児 (4-5 歳) における保護者及び担任評定にもとづく Strength and Difficulties Questionnaire の標準化 (「幼児期における発達障害の有病率と関連要因に関する研究」研究協力報告書)。平成 25 年度厚生労働科学

研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書. pp33-41, 2014.

- 5) 河野靖世, 飯田悠佳子, 小松佐穂子, 森脇愛子, 神尾陽子：地域5歳児母集団内の自閉症的行動特性と精神医学的ニーズとの関連性（「幼児期における発達障害の有病率と関連要因に関する研究」研究協力報告書）。平成25年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書. pp42-52, 2014.
- 6) 三島和夫, 北村真吾, 神尾陽子, 飯田悠佳子：発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究。平成25年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書. pp91-105, 2014.
- 7) 小保内俊雅, 遠藤明代, 神尾陽子：地域の発達健診事業のあり方に関する研究：5歳児の行動と発達の問題に対する幼稚園・保育所の担当保育者の認識と対応 ～発達障害が疑われる児の地域支援のあり方を考える～。平成25年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化：地域ベースの横断的および縦断的研究（研究代表者：神尾陽子）」総括・分担研究報告書. pp106-114, 2014.
- 8) 神尾陽子：精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明研究。独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明研究（主任研究者：神尾陽子）」平成23-25年度 総括研究報告書. pp1-10, 2014.
- 9) 神尾陽子, 岡島純子, 三宅篤子, 荻野和雄, 飯田悠佳子, 小松佐穂子, 武井麗子, 櫻井由香, 高橋秀俊：幼児期、児童期から青年期への発達軌跡の多様性と介入可能性。独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明研究（主任研究者：神尾陽子）」平成23-25年度 総括研究報告書. pp13-23, 2014.
- 10) 高橋秀俊, 神尾陽子, 中鉢貴行, 望月由紀子, 荻野和雄, 飯田悠佳子, 小松佐穂子, 飛松省三, 萩原綱一, 廣永成人：聴覚性驚愕反射の制御機能を用いた児童期から青年期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる認知・生理学的病態解明に関する研究。独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明研究（主任研究者：神尾陽子）」平成23-25年度 総括研究報告書. pp24-32, 2014.
- 11) 黒田美保, 神尾陽子, 川久保友紀, 金生由紀子：自閉症スペクトラム障害成人の認知リハビリテーション・プログラムの効果検証研究。独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明研究（主任研究者：神尾陽子）」平成23-25年度 総括研究報告書. pp33-39, 2014.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 神尾陽子：「医療との連携」で支援力アップ，連載1. 子ども一人ひとりを理解するための行動アセスメントの重要性。特別支援教育の実践情報 157, 12/1月号：54-55, 2014.
- 2) 神尾陽子：質疑応答：精神神経科 DSM改訂によるアスペルガー症候群診断の変更点。日本医事新報 4684：100-101, 2014.

- 3) 神尾陽子：「医療との連携」で支援力アップ，連載 2. 教育と医療とで共有できる「子どもを見る目」を育てる．特別支援教育の実践情報 158，2/3 月号：54-55，2014.
- 4) 朝日新聞掲載 第 2 面「アスペルガー分類消える：発達障害の一種、自閉症に一本化」2013.4.3
- 5) 最新 TOPIC 幼児 1300 人の大規模追跡調査でわかったこと．AERA with Baby14，2 月号：p109，朝日新聞出版.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) Takahashi H, Nakahachi T, Moriwaki A, Iida Y, Endo A, Ogino K, Takei R, Inada N, Kamio Y: Source localization analyses of preattentive auditory discrimination processing in children with autism spectrum disorders. Neuro 2013, The 36th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, the 56th Annual Meeting of the Japanese Society for Neurochemistry, the 23rd Annual Conference of the Japanese Neural Network Society, Kyoto, 2013.6.20.
- 2) 神尾陽子, 森脇愛子, 武井麗子, 稲田尚子, 高橋秀俊：(招待講演) 未診断あるいは非罹患者における自閉症スペクトラム特性. 第 6 回うつ病リワーク研究会年次研究会, 東京, 2013.4.27.
- 3) 神尾陽子：(招待講演) 自閉症スペクトラム障害：行動表現型の連続性と診断の重複についての最近の知見. 第 55 回日本小児神経学会総会, 大分, 2013.5.30.
- 4) 神尾陽子：(大会シンポジウム) 発達障害児早期発見・早期支援のための大規模縦断研究からの報告. 第 32 回日本心理臨床学会, 神奈川, 2013.8.25.
- 5) 神尾陽子：(招待講演) 自閉症スペクトラム障害の早期発見と子育て支援の観点に立った M-CHAT 使用の留意点. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
- 6) 神尾陽子：(大会企画シンポジウム) 脳科学と特別支援教育；最新の知見と脳科学迷信～脳科学所見の確かさと教育への応用可能性. 第 22 回日本 LD 学会, 神奈川, 2013.10.12.
- 7) 神尾陽子：(招待講演) 発達障害のある子どもたちのすこやかな成長を育む社会の役割とは. 第 29 回日本ストレス学会学術総会, 徳島県医師会 県民公開講座, 徳島, 2013.11.08.
- 8) 神尾陽子：(特別講演) 自閉症スペクトラム障害の顔認知とその発達過程への理解；なぜ顔なのか。「顔認知」総括シンポジウム 顔認知から顔科学の新展開に向けて。一顔認知の障害に起因する社会性の障害の理解と支援。主催 筑波大学・文科省新学術領域「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」, 協賛 日本認知科学会・日本赤ちゃん学会・日本顔学会, 後援 筑波大学特別支援教育研究センター, 東京, 2013.12.05.

(2) 一般演題

- 1) Takahashi H, Nakahachi T, Moriwaki A, Takei R, Ogino K, Iida Y, Inada N, Kamio Y: Neurophysiological evaluation of acoustic startle response in Japanese children with autism spectrum disorders. International Meeting for Autism Research 2013, San Sebastian, 2013.5.2.
- 2) Takahashi H, Nakahachi T, Moriwaki A, Takei R, Ogino K, Iida Y, Inada N, Kamio Y: Acoustic startle modulation and its relationship to clinical characteristics in Japanese children with autism spectrum disorders. The 11th World Congress of Biological Psychiatry, Kyoto, 2013.6.23.
- 3) Noriuchi M, Kikuchi Y, Kamio Y: White matter fractional anisotropy and social impairments in children and adolescents with autism. International Behavioral Neuroscience Society 22th Meeting, County Dublin, 2013.6.25.
- 4) Takahashi H, Gunji A, Kaneko Y, Nakahachi T, Hironaga N, Hagiwara K, Moriwaki A,

- Inagaki M, Tobimatsu S, Kamio Y: Auditory steady-state gamma responses of MEG in children with autism spectrum disorders: a preliminary study. Neural Oscillation Conference 2013, Aichi, 2013.7.18.
- 5) Takahashi H, Gunji A, Kaneko Y, Nakahachi T, Hironaga N, Hagiwara K, Moriwaki A, Inagaki M, Tobimatsu S, Kamio Y: Steady-state gamma responses of MEG in children with and without autism spectrum disorders: a preliminary study. International Society for the Advancement of Clinical Magnetoencephalography meeting 2013, Hokkaido, 2013.8.27.
 - 6) Kamio Y, Constantino J: Quantitative autistic traits ascertained in a national survey of Japanese school children: comparison of parent and teacher ratings. The 60th American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, Orland, 2013.10.22.
 - 7) Takahashi H, Nakahachi T, Moriwaki A, Iida Y, Endo A, Ogino K, Takei R, Komatsu S, Kamio Y: Acoustic startle modulation and its relationship to quantitative autistic traits in Japanese children with and without autism spectrum disorders. The 43rd annual meeting of society for neuroscience, San Diego, 2013.11.9.
 - 8) Takahashi H, Nakahachi T, Moriwaki A, Iida Y, Endo A, Ogino K, Takei R, Inada N, Kamio Y: Source localization analyses of preattentive auditory discrimination processing in children with autism spectrum disorders. 第 36 回日本神経科学大会・第 56 回日本神経化学会大会・第 23 回日本神経回路学会大会 合同大会, 京都, 2013.6.20-23.
 - 9) 高橋秀俊, 軍司敦子, 金子 裕, 中鉢貴行, 廣永成人, 萩原綱一, 森脇愛子, 稲垣真澄, 飛松省三, 神尾陽子. シンポジウム 7 脳磁図の精神科領域への臨床応用の新展開 自閉症スペクトラムの聴覚誘発脳磁界反応について. 第 28 回日本生体磁気学会, 新潟, 2013.6.7-8.
 - 10) 高橋秀俊: 自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射とその制御機構に関する研究. 第 109 回 日本小児精神神経学会, 埼玉, 2013.6.28-29.
 - 11) 黒田美保, 川久保友紀, 桑原 斉, 金生由紀子, 神尾陽子: 高機能自閉症スペクトラム障害成人への小集団認知行動療法による感情制御促進プログラム. 第 13 回日本外来精神医療学会, 北海道, 2013.7.27.
 - 12) 川俣智路, 田中康雄, 柴田康順, 森脇愛子, 神尾陽子: 就学前後における ADHD の症状変化に関する研究. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
 - 13) 高橋秀俊, 中鉢貴行, 森脇愛子, 荻野和雄, 武井麗子, 遠藤明代, 小松佐穂子, 飯田悠佳子, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射の制御機構と自閉症特性についての研究. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
 - 14) 飯田悠佳子, 森脇愛子, 中井昭夫, 神尾陽子: 児童における自閉症的行動特性と不器用との関連性. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
 - 15) 大西将史, 染木史緒, 石井礼花, 市川宏伸, 内山 敏, 金澤潤一郎, 神尾陽子 他: Conners' Adult ADHD Rating Scale (CAARS) 日本語版の開発(1)~CAARS 自己報告式の信頼性と妥当性の検討~. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
 - 16) 望月直人, 大西将史, 染木史緒, 渡部京太, 松本秀夫, 根来秀樹, 田中康雄, 竹林淳和, 武田俊信, 杉山登志郎, 斉藤卓弥, 齋藤万比古, 川久保友紀, 神尾陽子 他: Conners' Adult ADHD Rating Scale (CAARS) 日本語版の開発(2)~CAARS 観察者評価式の信頼性と妥当性の検討~. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
 - 17) 黒田美保, 川久保友紀, 桑原 斉, 金生由紀子, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害成人の感情制御を目的とした小集団認知行動療法の効果検証. 第 54 回日本児童青年精神医学会総会, 北海道, 2013.10.10.
 - 18) 高橋秀俊, 中鉢貴行, 小松佐穂子, 森脇愛子, 岡島純子, 飯田悠佳子, 荻野和雄, 神尾陽子: 日本人自閉症スペクトラム児における聴覚性驚愕反射の制御機構に関する研究. 第 23 回日本

臨床精神神経薬理学会・第43回日本神経精神薬理学会 合同年会，沖縄，2013.10.24.

- 19) 高橋秀俊，中鉢貴行，小松佐穂子，森脇愛子，岡島純子，飯田悠佳子，荻野和雄，神尾陽子：日本人自閉症スペクトラム児における聴覚性前注意的弁別処理の電位源推定に関する研究．第43回日本臨床神経生理学会学術大会，高知，2013.11.7.

(3) 研究報告会

- 1) 神尾陽子：自閉症入門：今、どのようなパラダイムシフトが起きているのか．第2回 Dystrophinopathy の CNS 障害研究会，Dystrophinopathy の CNS 障害研究会 大阪大学 共催，東京，2014.1.11.
- 2) 神尾陽子：自閉症スペクトラムの言語．第25回東北神経心理懇話会，宮城，2014.2.8.
- 3) 高橋秀俊，軍司敦子，金子 裕，中鉢貴行，小松佐穂子，廣永成人，萩原綱一，稲垣真澄，飛松省三，神尾陽子：自閉症スペクトラムの聴覚誘発定常ガンマ律動に関する予備的検討．第三回 IBIC シンポジウム，東京，2014.1.23.

(4) その他

- 1) 神尾陽子：発達障害の子どもたちのために社会ができること—最新研究からみえてきたもの．NCNP 市民公開講座，東京，2013.11.4.

C. 講演

- 1) 神尾陽子：発達障害のある子どもたちのすこやかな成長を育む社会の役割とは．市民講座 第6回大分うつ病対策講演会，大分，2014.10.5.
- 2) 神尾陽子：発達障害と向き合う地域社会：最近の大規模疫学研究から．NCNP 市民公開講座：発達障害の子どもたちのために社会ができること—最新研究からみえてきたもの，東京，2013.11.4.
- 3) 神尾陽子：M-CHAT を活用した早期発見と支援について．子育て支援セミナーII．香川県保健福祉部，香川，2013.11.7.
- 4) 神尾陽子：大人の発達障害とメンタルヘルスケア～不適応・うつ状態にならないために．メンタルヘルス講座，栃木，2013.11.18.
- 5) 神尾陽子：自閉症をめぐる新しい理解．鹿沼地区幼稚園連合会合同研修会，栃木，2013.11.18.
- 6) 神尾陽子：成人期の自閉症スペクトラム障害をめぐる精神医学的問題．松沢病院 第3回臨床精神医学講座，東京，2013.11.19.
- 7) 神尾陽子：自閉症の診断と評価．平成25年度第三期特別支援教育専門研修．発達障害・情緒障害・言語障害教育コース．独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主催，神奈川，2014.2.21.
- 8) 神尾陽子：OJT 健診 乳幼児健診を活用した「自閉症スペクトラム児」の早期発見・早期支援とその意義～ライフステージの観点から．東京都豊島区池袋保健所健康推進課，東京，2014.2.28.
- 9) 神尾陽子：自閉症症状のディメンジョナル評価尺度の臨床および研究への応用可能性について．発達障害研究会，東京，2014.3.5.
- 10) 神尾陽子：自閉症スペクトラムの早期発見から長期的視点に立った支援へ．京都市児童福祉センター，京都，2014.3.14.
- 11) 高橋秀俊：「災害時の心のケア」から学ぶ 子どもを支える言葉、行動 講義編．大田区教育委員会 リーダー講習会（成人対象）青少年教育指導者セミナーII，東京，2013.10.21.
- 12) 高橋秀俊：「災害時の心のケア」から学ぶ 子どもを支える言葉、行動 実践編．大田区教育委員会 リーダー講習会（成人対象）青少年教育指導者セミナーII，東京，2013.10.28.
- 13) 高橋秀俊：医療面からみて学校教育現場でできること—それぞれの障害に対応する支援の仕方

一. 東京都教育庁大島出張所 平成 25 年度 実践事例研修 (大島町小中学校教育研究会 特別支援教育部会), 東京, 2013.11.27.

D. 学会活動

(1) 学会主催

なし

(2) 学会役員

- 1) 神尾陽子: 日本精神神経学会 精神医学研究推進委員会 委員
- 2) 神尾陽子: 日本生物学的精神医学会 評議員, 将来計画委員会委員, プログラム委員
- 3) 神尾陽子: 日本自閉症スペクトル学会 理事
- 4) 神尾陽子: 日本精神保健・予防学会 評議員
- 5) 高橋秀俊: 日本精神神経学会 小児精神医療委員, 災害支援委員, 災害支援連絡会委員, 編集委員, 国際委員
- 6) 高橋秀俊: 日本総合病院精神医学会 評議員, 児童青年期委員, 編集委員, 診療報酬問題委員, 医療政策委員, 広報委員
- 7) 高橋秀俊: 日本生物学的精神医学会 評議員

(3) 学会誌編集委員等

Review Journal of Autism and Developmental Disorders, Associate editor

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 神尾陽子, 高橋秀俊: 平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 8 回発達障害早期総合支援研修, 東京, 2013.7.4-5.
- 2) 神尾陽子, 高橋秀俊: 平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 6 回発達障害精神医療研修, 東京, 2013.9.25-27.

(2) 研修会講師

- 1) 神尾陽子: 発達障害のアセスメントの最新動向. 臨床発達心理士研修会神奈川支部総会・第 1 回資格更新研修会, 神奈川, 2013.4.20.
- 2) 神尾陽子: 発達障害児の早期発見・早期介入について. 東京都江戸川区発達障害支援会議研修会, 東京, 2014.4.25.
- 3) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム児の早期診断とその意義: ライフステージの観点から. 平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 8 回発達障害早期総合支援研修, 東京, 2013.7.4.
- 4) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム児の早期発見のポイント. 平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 8 回発達障害早期総合支援研修, 東京, 2013.7.5.
- 5) 神尾陽子: 成人発達障害の精神医学的問題について. 平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 6 回発達障害精神医療研修, 東京, 2013.9.25.
- 6) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の認知研究からわかること. 平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 6 回発達障害精神医療研修, 東京, 2013.9.27.
- 7) 神尾陽子, 高橋秀俊: 平成 25 年 第 1 回 小平市立鈴木小学校 特別支援教育校内研修会, 東京, 2013.7.23.
- 8) 神尾陽子, 高橋秀俊: 平成 25 年 第 2 回 小平市立鈴木小学校 特別支援教育校内研修会, 東京, 2013.3.12.

- 9) 高橋秀俊：平成 25 年度 教育と医療との連携のための研修会．東京都大島町役場，東京，2013.6.12-13, 10.16-17, 11.27-28. 2014.2.17-19.

F. その他

- 1) 第 12 回臨床カンファレンス：「乳幼児期の発達障害への気づきと支援—乳幼児健診における発達障害のアセスメントについて—」 2013.4.24.
- 2) 第 13 回臨床カンファレンス：「発達障害とストレス・疲労」 2013.5.20.
- 3) 第 14 回臨床カンファレンス：「自閉症児の言語獲得について」 2013.1.17.

6. 成人精神保健研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題についての研究，対策に取り組むとともに，自然災害，犯罪被害，虐待等における心理的外傷を緩和し，効果的な治療と支援の研究を進め，代表的な病態である PTSD の神経科学的な解明と治療研究を推進している．各種震災，事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに，効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる．また関係諸機関（厚生労働省，警察庁，内閣府等中央省庁，精神保健福祉センター，災害医療センター，保健医療科学院，世界保健機構，兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築，共同研究の推進，教育研修活動も積極的に行っているところである．恐怖記憶の形成と消去に関する実験心理研究を推進している．自然災害，犯罪被害者への対応に関するガイドラインの作成，普及，研修に取り組んでいる．

平成 25 年度の当研究部の構成は以下の通りである．部長：金 吉晴．診断技術研究室長：金 吉晴（併任）．犯罪被害者等支援研究室長：中島聡美．災害等支援研究室長：鈴木友理子．精神機能研究室長：栗山健一．認知機能研究室長：荒川亮介．流動研究員は池田大樹，伊藤真利子，林 明明．併任研究員は松岡 豊．科研費研究員は深澤舞子．外来研究員として本間元康．協力研究員は堤 敦朗，松岡恵子，白井明美，石丸径一郎，寺島 瞳，井筒 節，成澤知美（～8 月），西多昌規，正木智子，吉池卓也．研究生は松田陽子，伊東史エ，伊藤まどか，浅野敬子，中谷 優，相澤秀子，山下吏良，上田 鼓，河瀬さやか，大塚佳代，成澤知美（9 月～）．実習生として橋口秀一．客員研究員として宇野正威，加茂登志子，小西聖子，宮地光恵，鈴木伸一，北山徳行，各氏を迎えている．（順不同）

II. 研究活動

1) PTSDに対する持続エクスポージャー療法に関する指導者育成システムの研究

現在各国のガイドラインでPTSDに対する治療法として最もエビデンスがあるとされている，持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy）の治療者の効果的育成についてのシステム研究を行った．（金）

2) 複雑型PTSDに関する認知行動療法の検討

ICD-11で導入が予定されている複雑型PTSDに対するSTAIR/NST治療を導入し，スーパーバイズ体制を構築し，資料を標準化した．（金）

3) 東日本大震災後の精神健康調査

東日本大震災後の行政職員（県職員，教職員），児童生徒，地域住民の精神健康調査について，各関係機関に専門的技術支援を行い，解析等を担当した．（鈴木，深澤，金）

4) 複雑性悲嘆の認知行動療法の効果に関する研究

米国のShearらによって開発された複雑性悲嘆の認知行動療法の有効性をオープントライアルにて検証を行った．現在目標症例数15例中11例が登録しており，8例（53%）が治療を終了している．現在のところ良好な結果を得ている．また，Wagnerらによって開発されたインターネットを利用した複雑性悲嘆の認知行動療法についてもオープントライアルを行っている．（中島，伊藤，白井，小西，成澤，正木，松田，金）

5) 性暴力被害者向け支援情報の提供のあり方についての研究

性暴力被害者救援センターなどを対象とした被害者向けの支援情報パンフレット「一人じゃないよ」を国内外の文献および専門家の意見を基に作成し，WEB上で入手できるようにした．

（http://www.ncnp.go.jp/nimh/seijin/www/pdf/shiryo_hitorijanaiyo.pdf）（中島，浅野，金）

6) 睡眠剥奪が意図的な恐怖記憶の形成回避に及ぼす影響

睡眠剥奪は恐怖情動記憶の般化を選択的に消去するが、意図的に恐怖記憶の獲得を回避すると、恐怖記憶の般化をかえって促進する事が明らかとなった。これはトラウマ受傷後の睡眠剥奪は PTSD 発症を予防する可能性を示唆する半面、重度のストレス体験に対して防衛機制が働き、記憶獲得能が麻痺した症例においては、かえって PTSD の発症を促進し、重症化・遷延化を促すリスクファクターとなりうる可能性を示唆している。本研究成果は国際科学誌上で報告した (Kuriyama et al., Sci Rep 2013)。(栗山, 本間, 吉池, 小山, 木村)

7) D-サイクロセリン, バルプロ酸による恐怖記憶消去の促進効果の時間生物学的検討

D-サイクロセリン (DCS) は覚醒中の恐怖記憶消去を促進させ、バルプロ酸 (VPA) は睡眠中の恐怖記憶消去を促進させる効果を示すことを明らかにした (Kuriyama et al., Neuropharmacol 2013) が、これらがトラウマ記憶の強化・遷延を基礎病態とする PTSD の治療に応用できる可能性を検討する為に、臨床研究を計画している。(栗山, 本間, 小山, 木村)

8) 神経症性格傾向と不眠症発症危険度および日中覚醒時の認知機能との関連

神経症性格傾向は、不眠症発症のリスクファクターとして働く可能性が示唆されているが、一方で睡眠不足時の高度な認知活動には有利に働く可能性が示唆されている。しかし不眠症者にはしばしば日中の認知能力の低下が指摘されており、これらの機能的関連性は分かっていない。我々は実験的手法でこれらの関連性を検討し、神経症傾向は不眠症促進因子となると同時に覚醒時の認知機能の向上及び脳負荷軽減に寄与することを明らかにした。(Yoshiike et al., Psychophysiol 2014) (栗山, 吉池, 本間, 小山, 木村)

9) 繰り返しの視・触・位置覚統合学習により生じる錯覚効果の特性と睡眠の影響

複数の知覚情報を同時処理し事象を統合的に認知する能力は、幼児期からの学習により獲得されると考えられている。また、長期学習において睡眠が学習効果を高める上で重要な役割を果たしていることが知られている。我々は、視・触・位置覚統合学習効果を錯覚として定量化することができるラバーハンドイリュージョン学習を3日連続で行い、多感覚統合学習における睡眠および覚醒による遅発性学習促進効果の差異を検討し、繰り返し学習により錯覚は保持されるが、睡眠中にこの錯覚効果は減少し、現実適応に有利に働くことを明らかにした。(Honma et al., PLoS ONE 2014) (本間, 栗山, 吉池, 小山, 木村)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

以下の報道を通じて研究成果の社会還元を行った。

- ・ Happy & Healthy Music 443 「認知行動療法」基礎知識 (金)
- ・ 公益社団法人宮城県精神保健福祉協会みやぎ心のケアセンター 平成 24 年度紀要第 1 号 みやぎ心のケアセンターの1年間の活動に思うこと。(金)
- ・ 厚生科学 WEEKLY620 号 巻頭言 災害精神医療の新しい取り組み (DPAT). (金)
- ・ 読売新聞 (2013.4.25 夕刊 8 面) 災害時の精神医療チームを整備へ。(金)
- ・ 女性自身 (5 月 14 日号) 夢で幸せになる♪。(栗山)
- ・ みんなの健康相談室 素晴らしい一日 3 月号【昼間に眠くなる病気：ナルコレプシー】(栗山)
- ・ 日経ヘルス 3 月号【熟眠感がない】女性のお悩み解決手帳 64。(栗山)
- ・ CNS today (18) 2 月号【PTSD と睡眠】(栗山)
- ・ 日本経済新聞 土曜版 NIKKEI プラス 1【熟眠感がない】(栗山)

2) 専門教育面における貢献

- ・ 専門家向け情報の提供 (中島)

国内の悲嘆の研修者とともに災害グリーフサポートプロジェクト (Japan Disaster Grief

Support Project; JDGS project) を設立し Web 等を通して被災者遺族にかかわる専門家への情報提供を行った。

- ・ 専門家向け講演会
全国精神保健福祉センター長会，健康危機管理保健所長等研修，国土交通省幹部職員研修会，行政職員向け研修会等で，災害精神保健に関する最新知見を提供している。（金，鈴木）
 - ・ 客員教授：東京女子医科大学医学部（金），山梨大学医学部（金），武蔵野大学心理臨床センター（中島）。
 - ・ 大学講師：東京大学大学院医学系研究科（金），京都大学医学部（金），東京医科歯科大学医学部（金），学習院大学文学部心理学科（金），福島県立医科大学（鈴木），山形大学医学部（鈴木）
 - ・ 各地の医師会，法務省，警察庁，精神保健福祉センター等の依頼を受け，トラウマ対応，PTSD 治療，犯罪被害者対応，被災者・遺族対応，災害精神保健に関する一連の講演を行った（金，中島，鈴木）。
 - ・ 国際協力（中島）
JICA による四川大地震後のこころのケアプロジェクトに参加し，兵庫県の研修会において被災者の悲嘆についての講演を行った。
 - ・ 国際協力（鈴木）
JICA による被災者学専門家養成プログラムに協力し，講義を行った。
- 3) 精研の研修の主催と協力
- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて第8回犯罪被害者メンタルケア研修を主催した。（中島）
- 4) 保健医療行政・施策に関する研究・調査，委員会等への貢献
- ①政府委員会
- ・ 厚生労働省「原爆体験者等健康意識調査報告書」等に関する検討会 委員（金）
 - ・ 宇宙開発事業団 有人サポート委員会 委員（金）
 - ・ 日本学術会議 連携委員（中島）
 - ・ 内閣府 犯罪被害者等施策推進会議専門委員（中島）
 - ・ 内閣府 犯罪被害者等に対する心理療法の費用の公費負担に関する検討会委員（中島）
 - ・ 内閣府「平成25年度交通事故被害者サポート事業検討会」委員（中島）
 - ・ 国土交通省 平成25年度公共交通事故被害者等支援懇談会 メンバー（中島）
 - ・ 東京都 犯罪被害者等支援を進める会議委員（中島）
 - ・ 福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター 専門委員（鈴木）
 - ・ 仙台市教育局教育委員会 平成25年度仙台市児童生徒の心のケア推進委員（鈴木）
 - ・ 厚生労働省「健康づくりのための睡眠指針2014」に関する検討会 委員（栗山）
- ②その他公的委員会
- ・ 「兵庫県こころのケアセンター」外部アドバイザー（金）
- 5) センター内における臨床的活動
- ・ 病院において PTSD，複雑悲嘆の外来診療，CBT を行っている。（金，中島）
- 6) その他
- ・ 成人部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し，専門家，一般に対し治療や対応についての啓発を行っている。（金，中島）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Reifels L, Pietrantonio L, Prati G, Kim Y, Kilpatrick DG, Dyb G, Halpern J, Olf M, Brewin CR O'Donnell M: Lessons learned about psychosocial responses to disaster and mass trauma: an international perspective. *Eur J Psychotraumatol* 2013. 【on line】
- 2) Fukasawa M, Suzuki Y, Nakajima S, Narisawa T, Kim Y: Similarities and differences of systematic consensus on disaster mental health services between Japanese and European experts. *J Trauma Stress* 26(2): 201-208, 2013.
- 3) Nishi D, Noguchi H, Yonemoto N, Nakajima S, Kim Y, Matsuoka Y: Incidence and prediction of post-traumatic stress disorder at 6 months after motor vehicle accidents in Japan. *Psychosomatics* 54: 263-271, 2013.
- 4) Matsuoka Y, Nishi D, Noguchi H, Kim Y, Hashimoto K: Longitudinal changes in serum brain-derived neurotrophic factor in accident survivors with posttraumatic stress disorder. *Neuropsychobiology* 68: 44-50, 2013.
- 5) Deno M, Miyashita M, Fujisawa D, Nakajima S, Ito M: The influence of alexithymia on psychological distress with regard to the seriousness of complicated grief and the time since bereavement in the Japanese general population. *J Affect Disord* 149(1-3): 202-8, 2013.
- 6) Fujisawa D, Suzuki Y, Kato TA, Hashimoto N, Sato R, Aoyama-Uehara K, Fukasawa M, Tomita M, Watanabe K, Kashima H, Otsuka K: Suicide intervention skills among Japanese medical residents. *Acad Psychiatry* 37(6): 402-407, 2013.
- 7) Suzuki Y, Kato TA, Sato R, Fujisawa D, Aoyama-Uehara K, Hashimoto N, Yonemoto N, Fukasawa M, Otsuka K: Effectiveness of brief suicide management training programme for medical residents in Japan: a cluster randomized controlled trial. *Epidemiol Psychiatr Sci* 23(2): 167-76, 2014.
- 8) Ono Y, Sakai A, Otsuka K, Uda H, Oyama H, Ishizuka N, Awata S, Ishida Y, Iwasa H, Kamei Y, Motohashi Y, Nakamura J, Nishi N, Watanabe N, Yotsumoto T, Nakagawa A, Suzuki Y, Tajima M, Tanaka E, Sakai H, Yonemoto N: Effectiveness of a multimodal community intervention program to prevent suicide and suicide attempts: a quasi-experimental study. *PLoS One* 2013 Oct 9, 8(10): e74902. 【on line】
- 9) Maercker A, Brewin CR, Bryant RA, Cloitre M, van Ommeren M, Jones LM, Humayan A, Kagee A, Llosa AE, Rousseau C, Somasundaram DJ, Souza R, Suzuki Y, Weissbecker I, Wessely SC, First MB, Reed GM: Diagnosis and classification of disorders specifically associated with stress: proposals for ICD-11. *World Psychiatry* 12(3): 198-206, 2013.
- 10) Iwaware Y, Usami M, Suzuki Y, Ushijima H, Tanaka T, Watanabe K, Kodaira M, Saito K: Posttraumatic symptoms in elementary and junior high school children after the 2011 Japan earthquake and tsunami: symptom severity and recovery vary by age and sex. *J Pediatr* 164(4): 917-921, 2014.
- 11) Kuriyama K, Yoshiike T: Multiple causality in the impairment of daytime functioning associated with insomnia: is it time to reconsider insomnia subtypes? *J Sleep Disorders Ther* 2: 116, 2013.
- 12) Kuriyama K, Honma M, Yoshiike T, Kim Y: Memory suppression trades prolonged fear and sleep-dependent fear plasticity for the avoidance of current fear. *Sci Rep* 3: 2227. 2013.
- 13) Honma M, Yoshiike T, Ikeda H, Kim Y, Kuriyama K: Sleep dissolves illusion: sleep withstands learning of visuo-tactile-proprioceptive integration induced by repeated days

- of rubber hand illusion training. PLoS One 9(1): e85734, 2014. 【on line】
- 14) Fukasawa M, Suzuki Y, Obara A, Kim Y: Relationships between mental health distress and work-related factors among prefectural public servants two months after the Great East Japan Earthquake. Int J Behav Med, 2014. 【on line】
 - 15) Yoshiike T, Kuriyama K, Honma M, Ikeda H, Kim Y: Neuroticism relates to daytime wakefulness and sleep devaluation via high neurophysiological efficiency in the bilateral prefrontal cortex: a preliminary study. Psychophysiology 51(4): 396-406, 2014.
 - 16) Honma M: Hyper-volume of eye-contact perception and social anxiety traits. Consciousness and Cognition 22(1): 167-173, 2013.
 - 17) 成澤知美, 鈴木友理子, 深澤舞子, 中島聡美, 金 吉晴: Delphi 法を用いた災害支援者のストレス対応ガイドラインの作成に向けて. トラウマティック・ストレス 10(2):163-173, 2013.
 - 18) 松岡恵子, 山川百合子, 小谷 泉, 金 吉晴: 高次脳機能障害は自らの障害とリハビリテーションをどのように語るか. 認知リハビリテーション 18(1): 38-49, 2013.
 - 19) 木下里美, 藤澤大介, 中島聡美, 伊藤正哉, 宮下光令: 救急外来と ICU で死別を体験した家族の複雑性悲嘆: 一般病棟との比較. 日本集中治療医学会雑誌 21(2): 199-203, 2014.

(2) 総説

- 1) Maercker A, Brewin CR, Bryant RA, Cloitre M, Reed GM, Ommeren MV, Humayun A, Jones LM, Kagee SA, Llosa AE, Rousseau C, Somasundaram DJ, Souza R, Suzuki Y, Weissbecker I, Wessely SC, First MB, Saxena S: Proposals for mental disorders specifically associated with stress in the International Classification of Diseases-11. Lancet 2013 May 11; 381(9878): 1683-5, 2013.
- 2) Suzuki Y, Fukasawa M: Dealing with mental health issues after the Great East Japan Earthquake/Tsunami/Fukushima Nuclear Power Plant Accident. Interdisciplinary Journal of Economics and Business Law 2: 101-117, 2013.
- 3) 金 吉晴: 災害時の不安障害のマネジメント. 保健医療科学 62(2): 144-149, 2013.
- 4) 金 吉晴: 自然災害後の精神医療対応の向上の取り組み. 日本精神科病院協会雑誌 32(10): 19-26, 2013.
- 5) 金 吉晴: 放射線災害への不安と精神科医 (東日本大震災・福島第一原発事故と精神科医の役割 8). 精神医学 55(9): 899-908, 2013.
- 6) 荒川亮介, 金 吉晴: 震災における脳画像研究. 精神保健研究 60: 97-100, 2014.
- 7) 伊藤真利子, 金 吉晴: PTSD の記憶機能と治療的意義. 精神保健研究 60: 35-39, 2014.
- 8) 中島聡美: 喪失と悲嘆のケア—レジリエンスに焦点を当てたケア・介入. 週間医学のあゆみ 247(4): 375-377, 2013.
- 9) 中島聡美: 性暴力被害者への支援と PTSD の治療. Ewha Journal of Gender and Law 5(2): 87-108, 2013.
- 10) 大塚耕太郎, 鈴木友理子, 藤澤大介, 加藤隆弘, 佐藤玲子, 青山久美, 橋本直樹, 鈴木志麻子, 黒澤美枝: Mental Health First Aid-Japan チームの活動について. 精神神経雑誌 115: 792-796, 2013.
- 11) 栗山健一: XII各科領域・疾患における睡眠障害 外傷後ストレス障害. 最新臨床睡眠学—睡眠障害の基礎と臨床—. 日本臨床 71 巻 増刊号 5: 652-658, 2013.
- 12) 本間元康, 太田英伸: 東日本大震災に発症した急性期のめまいと不安症状. 最新精神医学 19(1): 23-29, 2014.
- 13) 吉池卓也, 亀井雄一: 概日リズム睡眠障害—睡眠相後退型 (睡眠相後退障害), 睡眠相前進型 (睡眠相前進障害) —. 日本臨床 71 増刊号 5: 399-404, 2013.

(3) 著書

- 1) 金 吉晴：集团的災害対応精神医療システム．精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年版，中央法規，東京，p38，2013.
- 2) 金 吉晴：21. PTSD. POCKET 精神科改訂 2 版，金芳堂，京都，pp139-144，2014.
- 3) 高橋秀俊，鈴木友理子：第 7 章 子どもと災害．児童心理学の進歩 2013 年版 日本児童研究所 監修，平木典子，稲垣佳世子，河合優年 他 編集，金子書房，東京，2013.
- 4) 中島聡美：プライマリ・ケアにおける「遺族ケア」．堀川直史 編：ジェネラル診療シリーズ あらゆる診療科でよく出会う精神疾患を見極め、対応する．羊土社，東京，pp157-159，2013.
- 5) 中島聡美：犯罪被害者支援とメンタルヘルス．精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年版，中央法規，東京，p49，2013.
- 6) 鈴木友理子，金 吉晴：都道府県での災害時心のケアガイドライン．精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年版，中央法規，東京，p41，2013.
- 7) 荒川亮介：災害精神保健医療情報支援システム (DMHISS)．精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年版．中央法規，東京，p40，2013.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴：大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））総括研究報告書．pp3-13，2014.
- 2) 金 吉晴：大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））平成 23 年度～25 年度）総合研究報告書．pp3-15，2014.
- 3) 金 吉晴：災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」平成 25 年度分担研究報告書．pp17-24，2014.
- 4) 金 吉晴，伊藤真利子，永岑光恵，丹羽まどか，加茂登志子：唾液コルチゾール測定による PTSD 症状評価の利点と注意点：DV 被害母子研究に向けて．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」平成 25 年度分担研究報告書．pp25-31，2014.
- 5) 金 吉晴：被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））総括研究報告書．pp3-14，2014.
- 6) 金 吉晴，河瀬さやか，中山未知，大滝涼子，荒川和歌子：持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy: PE）の普及体制の確立に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」平成 25 年度分担研究報告書．pp17-25，2014.
- 7) 金 吉晴，鈴木 満，井筒 節，堤 敦朗，荒川亮介，大沼麻実，菊池美名子，小見めぐみ，大滝涼子：WHO 版心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：PFA）の普及と研修成果に関する検証．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」平成 25 年度分担研究報告書．pp27-38，2014.

- 8) 金 吉晴, 林 明明, 河瀬さやか, 大滝涼子, 伊藤真利子: 感情の表出に関する尺度の標準化研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」平成 25 年度分担研究報告書. pp39-47, 2014.
- 9) 金 吉晴, 荒川亮介: 災害時の精神保健医療情報の共有の在り方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「健康危機管理・テロリズム対策に資する情報共有基盤の整備に関する研究 (研究代表者: 近藤久禎)」平成 25 年度分担研究報告書. pp135-141, 2014.
- 10) 金 吉晴, 堀江美智子, 加茂登志子, 清水 悟: IPV 被害女性に対する持続エクスポージャー療法における PTSD 症状とうつ症状の関係. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「東日本大震災における精神疾患の実態についての疫学的調査と効果的な介入方法の開発についての研究 (研究代表者: 松岡洋夫)」平成 25 年度分担研究報告書. pp57-68, 2014.
- 11) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法 (Prolonged Exposure Therapy: PE) の普及に向けて. 厚生労働科学研究費補助金 「認知行動療法等の精神療法の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究 (研究代表者: 大野 裕)」平成 25 年度研究報告書. pp77-92, 2014.
- 12) 中島聡美, 加茂登志子, 中澤直子, 小西聖子, 吉田謙一, 辻村貴子, 鈴木友理子, 金 吉晴, 成澤知美, 浅野敬子, 深澤舞子: 犯罪被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究 (研究代表者: 金吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp53-96, 2014.
- 13) 中島聡美, 加茂登志子, 中澤直子, 小西聖子, 吉田謙一, 辻村貴子, 鈴木友理子, 金 吉晴, 成澤知美, 浅野敬子, 深澤舞子: 犯罪被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究 (研究代表者: 金吉晴)」平成 23~25 年度総合研究報告書. pp53-62, 2014.
- 14) 鈴木友理子, 深澤舞子, 小原聡子, 金 吉晴: 東日本大震災後の宮城県職員の精神健康状態と関連要因: ①バーンアウトとその関連要因の検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp97-110, 2014.
- 15) 深澤舞子, 鈴木友理子, 小原聡子, 金 吉晴: 東日本大震災後の宮城県職員の精神健康状態と関連要因: ② 精神健康の推移と被災・業務による影響の検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp111-126, 2014.
- 16) 鈴木友理子, 深澤舞子, 小原聡子, 金 吉晴: 東日本大震災後の宮城県職員の精神健康状態と関連要因. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 23-25 年度総合研究報告書. pp63-68, 2014.
- 17) 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子, 佐藤さやか, 吉田光爾, 永松千恵, 伊藤順一郎: 重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態~相双地域における精神保健福祉手帳所持者に対する調査の実施~. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業) 「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長

期支援に関する研究(研究代表者:樋口輝彦)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp51-65, 2014.

(5) 翻訳

- 1) 中島聡美: 死別. 子安増生, 二宮克美 監訳, 青年期発達百科事典編集委員会 編: 青年期発達百科事典 第3巻 精神病理と非定型プロセス. 丸善出版株式会社, 東京, pp151-158, 2014.
(Melhem NM, and Brent DA: Bereavement. In: Brown BB and Prinstein MJ eds. Encyclopedia of adolescence. Vol.3. Psychopathology and non-normative processes. Elsevier Inc. Amsterdam, pp69-75, 2011.)

(6) その他

- 1) Kuriyama K, Honma M, Yoshiike T, Kim Y: Valproic acid but not d-cycloserine facilitates sleep-dependent offline learning of extinction and habituation of conditioned fear in humans. Psychology Progress : (Key research articles 欄で紹介)
<http://psychologyprogress.com/valproic-acid-but-not-d-cycloserine-facilitates-sleep-dependent-offline-learning-of-extinction-and-habituation-of-conditioned-fear-in-humans/>
- 2) 金 吉晴: 東京内科医会 学術講演会 自然災害とメンタルヘルス対応. 東京内科医会会誌, pp228-238, 2013.
- 3) 金 吉晴: 災害時の精神医療チームを整備へ. 読売新聞 夕刊 8面, 2013.4.25.
- 4) 金 吉晴: 「認知行動療法」基礎知識 (2013.2.24・療育音楽・音楽療法講師勉強会より). Happy & Healthy Music 443, 2013.
- 5) 金 吉晴: みやぎ心のケアセンターの1年間の活動に思うこと. 公益社団法人宮城県精神保健福祉協会のみやぎ心のケアセンター 平成24年度紀要第1号, p153, 2013.
- 6) 金 吉晴: 巻頭言 災害精神医療の新しい取り組み (DPAT). 厚生科学 WEEKLY620号, 2014.1.10.
- 7) 大野 裕, 金 吉晴, 大塚耕太郎, 松本和紀, 田島美幸: 災害後支援. 第12回日本認知療法学会シンポジウム (シンポジスト), 認知療法研究 6(2): 113-123, 2013.
- 8) 荒川亮介, 金 吉晴: 資料: PTSDに対するパロキセチンおよびセルトラリンの臨床試験. トラウマティックストレス 11: 177-180, 2013.
- 9) 栗山健一: (コメント及び原稿確認) 夢で幸せになる♪. 光文社 女性自身 5月14・21合併号: p127, 2013.4.30.
- 10) 栗山健一: 【昼間に眠くなる病気:ナルコレプシー】 みんなの健康相談室. 素晴らしい一日3月号, (株)プレジデント社, p111, 2014.
- 11) 栗山健一: 【熟眠感がない】 女性のお悩み解決手帳 64. 日経ヘルス 3月号, 日経 BP マーケティング, p80-83, 2014.
- 12) 栗山健一: 【PTSD と睡眠】. CNS today (18) 2月号, メディカルトリビューン社 (2月20日発行), p12-18, 2014.
- 13) 栗山健一: 【熟眠感がない】. 「NIKKEI プラス 1」日本経済新聞 土曜版. 2014.3.22.
- 14) 永井聖剛, 本間元康, 熊田孝恒, 長田佳久: 足踏みの自動的同期とコミュニケーションスキル. 信学技報 vol.113(185): pp21-22, 2013.
- 15) 松田昌史, 本間元康: アイコンタクト知覚時の瞳孔径分析. 信学技報 vol.113(426): pp27-30, 2014.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: The psychosocial response to the earthquakes and Tsunami in Japan. Pre-Conference workshops. ISTSS/ ESTSS Symposium: Improving psychosocial responses to disasters and mass trauma: an international perspective. Trauma and its clinical pathways: PTSD and beyond. XIII Congress of the European society for traumatic stress studies. Bologna, 2013.6.6.
- 2) Suzuki Y, Maeda M: Psychological distress of the residents in Fukushima. The 21st World Congress for Social Psychiatry. Symposium: Psychological Burden among the March 11, 2011 Great East Japan Earthquake and Fukushima Daiichi Nuclear Plant Accident Victims. Lisbon, 2013.6.29-7.3.
- 3) 金 吉晴, 中山未知, 小平かやの, 白川美也子: トラウマ治療の包括的ネットワーク—病態に応じた認知行動療法の確立と連携— (シンポジウム). 第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.12.
- 4) 金 吉晴: 効果的な災害時精神医療対応に向けて (メインシンポジウム 2 東日本大震災が精神医療に残したもの—二三年が過ぎた今). 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
- 5) 金 吉晴: DSM-5 改訂による外傷後ストレス障害 (PTSD) の診断の変化 (トピック・フォーラム DSM-5 改訂により不安障害の診断・臨床はどうか—その是非, 注意点を中心に—). 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
- 6) 金 吉晴, 重村 淳: ワークショップ 2 災害精神医療のための必須知識. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
- 7) 金 吉晴, 秋山 剛: シンポジウム 15 福島原発事故を語る. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.24.
- 8) 瀬藤乃理子, 中島聡美, 村上典子, 黒川雅代子: 被災地における支援者のストレス—現地支援者への調査結果から—. 災害とがんにおけるグリーンケア. (シンポジウム), 第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.12.
- 9) Ng C, Harvey C, Wade D, 金 吉晴, 埜 敦朗, 竹島 正: シンポジウム 1 「精神保健の地域社会における役割」. (独) 国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学精神医学部門合同シンポジウム—脳・こころ・社会を結ぶ研究の発展に向けて—, 東京, 2013.6.28.
- 10) 金 吉晴, 齋藤大輔: 災害後の心理支援におけるコラボレーション—検証と課題— (指定討論者). 心理臨床学会支援活動委員会企画シンポジウム, 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, 神奈川, 2013.8.26.
- 11) 金 吉晴: ワークショップ IV ト라우マ論の現在. 第 36 回日本精神病理・精神療学会, 京都, 2013.10.12.
- 12) 本間元康, 吉池卓也, 池田大樹, 金 吉晴, 栗山健一: 繰り返しの視・触・位置覚統合学習により生じる錯覚効果の特性. シンポジウム【多感覚間統合機能の行動神経科学: ヒト適応向上に寄与する脳機能】日本心理学会第 77 回大会, 北海道, 2013.9.21.
- 13) 金 吉晴: 不安障害に対する認知行動療法のエビデンス. 第 6 回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.2.
- 14) 金 吉晴: 21 世紀の災害精神医療の目指すもの. 災害こころの医学講座設立記念シンポジウム, 福島, 2014.2.12.
- 15) 金 吉晴: 福島における復興期のメンタルヘルスケアを考える (シンポジスト). 災害こころの医学講座設立記念シンポジウム, 福島, 2014.2.12.
- 16) 金 吉晴: 特別セッション 6-2 精神医療からみた災害時マニュアルについて. 第 19 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 東京, 2014.2.25.
- 17) 中島聡美, 伊藤正哉, 白井明美, 小西聖子: あいまいな喪失を経験した遺族への複雑性悲嘆療法の適用. 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会シンポジウム (事例研究) SA4, 神奈川, 2013.8.27.

- 18) 鈴木友理子：ICD分類の改定に向けて：ストレス関連障害の動向．第12回日本トラウマティック・ストレス学会，東京，2013.5.11-12.
- 19) 鈴木友理子：東日本大震災被災地での課題：精神保健福祉の視点から．日本家族研究・家族療法学会30回大会学会企画シンポジウム 東日本大震災への家族支援・支援者支援：現状と課題指定討論，東京，2013.6.22.
- 20) 鈴木友理子：原発事故とメンタルヘルス．第72回日本公衆衛生学会 シンポジウム10 原子力災害における公衆衛生の取り組み，三重，2013.10.24.
- 21) 栗山健一：ヒト睡眠中の記憶強化機能と適応．シンポジウム【睡眠中の認知・記憶処理とその適応的意義】，日本睡眠学会第38回定期学術集会，秋田，2013.6.28.
- 22) 池田大樹，栗山健一：自己覚醒を司る睡眠中の認知処理過程および覚醒後の認知への影響．シンポジウム【睡眠中の認知・記憶処理とその適応的意義】，日本睡眠学会第38回定期学術集会，秋田，2013.6.28.
- 23) 栗山健一：ヒトの記憶と睡眠．シンポジウム【睡眠とアンチエイジング】，第13回日本抗加齢医学会総会，神奈川，2013.6.29.
- 24) 林 明明：学習後ストレスによる記憶向上効果．日本心理学会第77回大会，北海道，2013.9.21.
- 25) 本間元康：多感覚間統合機能の行動神経科学：ヒト適応向上に寄与する脳機能．日本心理学会第77回大会シンポジウム（企画：本間元康，栗山健一），北海道，2013.9.21.
- 26) 本間元康：わたしたちが見つめる先：視線認知をめぐる先端研究．日本心理学会第77回大会シンポジウム（企画：友永雅己，松田昌史，中嶋智史），北海道，2013.9.21.
- 27) 成井香苗，有園博子，成澤知美，永野美代子：福島の子遊びと親ミーティング，災害後の心理支援におけるコラボレーション—検証と課題—．第32回日本心理臨床学会，神奈川，2013.8.26.

(2) 一般演題

- 1) Snider L, Van O M, Schafer A, Schouten M, Kim Y: Applications of psychological first aid around the world. Open papers: Response to disasters. Trauma and its clinical pathways: PTSD and beyond. XIII Congress of the European society for traumatic stress studies. Bologna, 2013.6.8.
- 2) Suzuki Y, Fukasawa M, Nakajima S, Narisawa T, Kim Y: Development of disaster mental health guidelines through the Delphi process: focusing on disaster mental health service structure in Japan. The 21st World Congress for Social Psychiatry, Poster session, Lisbon, 2013.6.29-7.3.
- 3) Yoshiike T, Kuriyama K, Honma M, Kim Y: Bright light exposure facilitates extinction learning of conditioned fear extinction in humans. 11th World Congress of Biological Psychiatry (WFSBP), Kyoto, 2013.6.24.
- 4) Kuriyama K, Yoshiike T, Honma M, Kim Y: Suppression of aversive event memory with sleep deprivation enhances delayed recognition of contextual fear. 11th World Congress of Biological Psychiatry (WFSBP), Kyoto, 2013.6.24.
- 5) Kuriyama K, Yoshiike T, Honma M, Ikeda H, Kim Y: COMT VAL158MET polymorphism interacts with sex to influence fear conditioning and extinction in healthy humans. 22nd European Congress of Psychiatry, Munich, 2014.3.2.
- 6) Kuriyama K, Honma M, Yoshiike T: Suppression of aversive event memory interrupts extinction of fear response facilitated by sleep deprivation. APSS 27th Annual Meeting, Baltimore, 2013.6.4.
- 7) Itoh M, Ayabe-Kanamura S: An examination of distinctive processing account on the

- self-choice effect: when similar options are repeated. 11th The Japan Society for Cognitive Psychology. Ibaraki, 2013.6.29-30.
- 8) 臼杵理人, 松岡 豊, 西 大輔, 金 吉晴, 神庭重信: 交通外傷直後のプロポフォル投与が PTSD 症状に与える影響について. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
 - 9) 鈴木大輔, 築田美抄, 上田 稔, 中谷直樹, 金 吉晴, 辻 一郎, 寶澤 篤, 富田博秋: 疫学 1 東日本大震災沿岸部被災者の精神的健康の変遷と現況. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.24.
 - 10) 鈴木大輔, 中谷直樹, 中村智洋, 中島聡美, 金 吉晴, 辻 一郎, 寶澤 篤, 富田博秋: 各種災害関連ストレスが東日本大震災沿岸部被災者の精神的健康に及ぼす影響の検討. 第 33 回日本社会精神医学会 (ポスター), 東京, 2014.3.20.
 - 11) 吉池卓也, 本間元康, 金 吉晴, 栗山健一: 神経症人格特性は両外側前頭前野活動性に基づき日中の認知活動を促進し睡眠満足度を低下させる. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.28.
 - 12) 池田大樹, 吉池卓也, 本間元康, 金 吉晴, 金子雅美, 栗山健一: 嫌悪出来事後の睡眠と夢の質に関するインターネット調査研究. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.28.
 - 13) 本間元康, 吉池卓也, 池田大樹, 金 吉晴, 栗山健一: 睡眠が身体平衡学習に与える効果. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.28.
 - 14) 本間元康, 吉池卓也, 金 吉晴, 栗山健一: 連日の錯覚学習における所有感と位置感覚の異なる変容. 日本認知心理学会第 11 回大会, 茨城, 2013.6.30.
 - 15) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 吉田光爾, 佐藤さやか, 鈴木友理子, 西尾雅明, 大野 裕, 佐竹直子, 田島良昭, 三品桂子, 池淵恵美, 樋口輝彦: 東日本大震災の被災地における外部支援の中・長期的課題—地域精神保健医療福祉従事者に対するインタビュー調査から—. 第 33 回日本社会精神医学会 一般演題 (示説), 東京, 2014.3.20-21.
 - 16) 梅田麻希, 川上憲人, 堀越直子, 菅 知絵美, 矢部博興, 安村誠司, 大津留 晶, 鈴木友理子, 増子博文: 福島県避難区域等住民の健康・生活上の困難: 県民健康管理調査「こころの健康度・生活習慣に関する調査 (面接調査)」の質的分析. 第 33 回日本社会精神医学会 一般演題 (示説), 東京, 2014.3.20-21.
 - 17) 金 禹瓚, 館野 周, 坂寄 健, 荒川亮介, 大久保善朗: モダフィニルの PET 神経画像評価. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.25.
 - 18) 金 禹瓚, 館野 周, 坂寄 健, 荒川亮介, 池田裕美子, 鈴木秀典, 大久保善朗: PET 検査を用いた向知性薬のドーピング効果評価. Neuro2013, 京都, 2013.6.22.
 - 19) 小川耕平, 館野 周, 荒川亮介, 坂寄 健, 池田裕美子, 鈴木秀典, 大久保善朗: [11C]DASB を用いたトラマドールのセロトニントランスポーターの占有率についての陽電子放射断層撮影 (PET) 研究—鎮痛効果の作用機序と抗うつ作用の可能性—. 第 23 回日本臨床精神神経薬理学会・第 43 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 沖縄, 2013.10.25.
 - 20) 伊藤真利子, 綾部早穂: 記憶の自己選択効果に対する示差性処理説の検討 同一カテゴリと基準で繰り返される選択による影響. 日本心理学会第 77 回大会, 北海道, 2013.9.19-21.
 - 21) 成澤知美: 検視 (検死) 及び司法解剖時の被害者遺族に対する警察官の対応及び意識について. 日本被害者学会第 24 回学術大会, 東京, 2013.6.1.
 - 22) 池田大樹, 久保智英, 栗山健一, 高橋正也: 自己覚醒の眠気低減効果に及ぼす恒常性維持と概日機構による影響. 日本時間生物学会 第 20 回学術大会, 大阪, 2013.11.9-10.
 - 23) 吉池卓也, 本間元康, 池田大樹, 金 吉晴, 栗山健一: 高照度光照射による手続き学習の促進効果の検討. 日本時間生物学会 第 20 回学術大会, 大阪, 2013.11.9-10.
 - 24) 伊藤真利子, 相井さやか, 林 明明, 大滝涼子, 金 吉晴: 日本語版 Emotional Expressivity Scale 作成の試み. 第 6 回不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.

- 25) 林 明明, 相井さやか, 大滝涼子, 伊藤真利子, 金 吉晴: 感情表出性尺度 Berkeley Expressivity Questionnaire 日本語版の信頼性および妥当性の検討. 第6回不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.

(3) 研究報告会

- 1) Honma M: Invited talk. Illusory learning and sleep. Northwestern University Cognitive Neuroscience Laboratory, Invited talk. Illinois, 2013.9.
- 2) Honma M: A reactivation cue during slow-wave sleep enriches an illusory learning of self-body perception. Northwestern University Cognitive Neuroscience Laboratory, Invited talk. Illinois, 2014.3.
- 3) 金 吉晴: 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 平成 25 年度障害者対策総合研究成果発表会, 東京, 2014.2.28.
- 4) 中島聡美, 成澤知美, 浅野敬子, 鈴木友理子, 深澤舞子, 金 吉晴: Delphi 法を用いたエキスパートコンセンサスによる犯罪被害者の急性期心理社会支援ガイドラインの開発. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成 25 年度 研究報告会, 東京, 2014.3.10.

(4) その他

- 1) 本間元康, 遠藤信貴, 長田佳久, 金 吉晴, 栗山健一: 日本認知心理学会第 10 回大会 優秀発表賞 (社会的貢献度評価部門). 巨大地震後におこる平衡感覚異常. 茨城, 2013.6.

C. 講演

- 1) Kim Y: Diagnosis and differential diagnosis of depression. Clinical Approach in Neurological Depression and PTSD, Seoul, 2013.11.30.
- 2) Kim Y: Post-traumatic stress disorder (PTSD). Clinical Approach in Neurological Depression and PTSD, Seoul, 2013.11.30.
- 3) 金 吉晴: 心理的応急処置サイコロジカル・ファーストエイド: PFA について. 第 19 回日本赤十字社第 4 ブロック合同救護訓練研修会～災害時のこころのケアについて～, 京都, 2013.4.19.
- 4) 金 吉晴: 震災とこころのケア～これからの課題～. 第 2 回震災後トラウマ対策勉強会, 宮城, 2013.4.23.
- 5) 金 吉晴: 不安への対応と基礎. 黒い雨体験者相談・支援事業従事者向け研修会, 広島, 2013.9.26.
- 6) 金 吉晴: 相談対応の実際 (シナリオに基づくロールプレイ、討議、講評). 黒い雨体験者相談・支援事業従事者向け研修会, 広島, 2013.9.26.
- 7) 金 吉晴: 災害時の精神保健対応の展開と平時の備え. 岡山県精神科医会・岡山県医師会精神部会講演会, 岡山, 2013.10.12.
- 8) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療対応と平時の備え. 第 13 回東海北陸ブロック健康危機管理連絡協議会, 愛知, 2013.11.12.
- 9) 金 吉晴: PTSD と持続性エクスポージャー療法. 第 30 回多摩精神科臨床研究会, 東京, 2013.11.13.
- 10) 金 吉晴: 教育講演 1 災害医療に求められる精神医療対応. 第 19 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 東京, 2014.2.25.
- 11) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療活動について, DPAT の活動について, 日本赤十字社を含む他機関との連携について. 平成 25 年度第 2 回こころのケア指導者養成研修会, 東京, 2014.3.17.

- 12) 中島聡美: 悲嘆と喪失の理解とケア. 高野山大学 東日本大震災復興支援活動から学ぶ連続講座. 和歌山, 2013.6.26.
- 13) 鈴木友理子: 宮城県職員健康調査 第 1・2・3 回調査の結果より. 宮城県支援者支援検討会, 宮城, 2013.9.13.
- 14) 鈴木友理子, 深澤舞子: DV とパワーハラスメントについて. 相馬市男女共同参画プラン推進会議事業講演, 福島, 2013.11.9.
- 15) 鈴木友理子: グリーフの診断学的位置づけ. 第 5 回グリーフ&ビリーブメント カンファレンス 関西学院大学大阪梅田キャンパス, 大阪, 2014.2.8.
- 16) 本間元康: 巨大地震後におこる平衡感覚異常. 第 4 回震災対策技術展 宮城, 宮城, 2013.8.9.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: World Psychiatric Association, Committee of psychopathology.
- 2) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会, 常任理事.
- 3) 金 吉晴: 日本精神神経学会, 災害支援委員会委員, 災害支援連絡会委員.
- 4) 金 吉晴: 自殺予防学会, 理事.
- 5) 金 吉晴: 日本集団災害医学会, マニュアル委員.
- 6) 中島聡美: 日本トラウマティック・ストレス学会理事, 副会長, 犯罪被害者支援委員会委員長, 第 12 回大会企画委員.
- 7) 中島聡美: 日本被害者学会, 理事. 企画委員.
- 8) Suzuki Y: World Health Organization, Working group on the Classification of Stress-Related Disorders. International Advisory Group for the Revision of ICD-10 Mental and Behavioral Disorders.
- 9) 鈴木友理子: 日本精神神経学会, アンチスティグマ委員. 東日本大震災特別委員.
- 10) 鈴木友理子: 日本トラウマティック・ストレス学会, 理事. 国際委員.
- 11) 栗山健一: 日本時間生物学会, 評議員.

(3) 座長

- 1) Kuriyama K: 【FC-02 / Posttraumatic stress, stress and other topics】 Chairperson. 11th World Congress of Biological Psychiatry (WFSBP), Kyoto, 2013.6.24.
- 2) Suzuki Y, Shigemura J: Psychological burden among the March 11, 2011 Great East Japan Earthquake and Fukushima Daiichi Nuclear Plant Accident Victims. Chairperson. The 21st World Congress for Social Psychiatry. Symposium: Lisbon, 2013.6.29- 7.3.
- 3) 金 吉晴: 特別講演「フランス・パリにおける性的虐待の未成年被害者を対象とした 3 年間の司法鑑定研究」(演者: Messerschmitt P, Rey C, Dupont M). 第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.11.
- 4) 金 吉晴: トラウマ治療の包括的ネットワーク—病態に応じた認知行動療法の確立と連携—. (シンポジウム), 第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.12.
- 5) 金 吉晴: 特別講演「フランス・パリにおける性的虐待の未成年被害者を対象とした 3 年間の司法鑑定研究」(演者: Messerschmitt P, Rey C, Dupont M). 第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.11.
- 6) 金 吉晴: トラウマ治療の包括的ネットワーク—病態に応じた認知行動療法の確立と連携—. (シンポジウム). 第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.12.

- 7) 中島聡美, 村上典子: 災害とがんにおけるグリーフケア. (シンポジウム), 第12回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.12.
- 8) 中島聡美: 自主シンポジウム「性暴力被害者支援」の流れ. 日本心理臨床学会第32回秋季大会シンポジウム(事例研究)SA4, 神奈川, 2013.8.25.
- 9) 中根秀之, 中島聡美: 第33回日本社会精神医学会一般演題(口演)災害メンタルヘルス. 東京, 2014.3.21.
- 10) 中島聡美: 警察庁 犯罪被害者の精神的被害の回復に資する施策に関する研究会. 東京, 2014.3.28.
- 11) 栗山健一, 糸 和彦: 【睡眠中の認知・記憶処理とその適応的意義】シンポジウム. 日本睡眠学会第38回定期学術集会, 秋田, 2013.6.28.
- 12) 本間元康, 栗山健一: 【多感覚間統合機能の行動神経科学: ヒト適応向上に寄与する脳機能】シンポジウム, 日本心理学会, 北海道, 2013.9.21.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board.
- 2) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor.
- 3) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会, 編集委員長.
- 4) 金 吉晴: 日本精神神経学会, 編集委員.
- 5) 栗山健一: 日本時間生物学会, 学会誌 編集委員.

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法(PE)の応用セミナー—認知処理と悲嘆・喪失の治療—. 東京, 2013.9.1-2.
- 2) 金 吉晴: 平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD対策専門研修A通常コース, 東京, 2013.11.21-22.
- 3) 金 吉晴: WHO版心理的応急処置(サイコロジカルファーストエイド:PFA)フィールド・ガイド研修会, 東京, 2013.12.9-12.
- 4) 金 吉晴: パブリックシンポジウムプログラム「災害に備えてココロとキモチをケアしあう世界へ: 心理的応急処置(PFA)とは」. 東京, 2013.12.12.
- 5) 金 吉晴: 世界銀行東京開発ラーニングセンター: 精神的ウェルビーイングと開発シリーズ「心理的応急処置(PFA): 危機後の相互支援」. 東京, 2013.12.13.
- 6) 金 吉晴: 平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD対策専門研修B通常コース, 高知, 2013.12.19-20.
- 7) 金 吉晴, 荒川亮介: 災害派遣精神医療チーム(DPAT)研修会, 東京, 2014.1.8.
- 8) 金 吉晴, 荒川亮介: 災害派遣精神医療チーム(DPAT)研修会, 東京, 2014.1.14-16.
- 9) 金 吉晴: 平成25年度PTSD対策専門研修事業E. 大規模災害対策コース(行政職員向け). 東京, 2014.1.27.
- 10) 金 吉晴: 心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド)訓練. 平成25年度健康危機管理研修(高度技術編), 埼玉, 2014.1.31.
- 11) 金 吉晴: 平成25年度PTSD対策専門研修事業D. 大規模災害対策コース(精神医療関係者). 愛知, 2014.2.18.
- 12) 金 吉晴: 平成25年度PTSD対策専門研修事業C. 大規模災害対策コース(一般医療関係者). 東京, 2014.2.23.

(2) 研修会講師

- 1) Suzuki Y: Crisis intervention and psychological first aid: from public mental health perspective. JICA training: development of victim assistance system for victims of war and armed conflicts. Ibaraki, 2013.10.21.
- 2) 金 吉晴: 学生指導のためのメンタルサポート (1 回目). 和洋女子大学, 千葉, 2013.4.16.
- 3) 金 吉晴: PTSD の認知行動療法から見た被害者対応. 関東管区警察学校 被害者カウンセリング技術 (上級) 専科, 東京, 2013.5.16.
- 4) 金 吉晴: 学生指導のためのメンタルサポート (2 回目). 和洋女子大学, 千葉, 2013.5.21.
- 5) 金 吉晴: 保育士のためのメンタルヘルスの知識 (原子力災害による心理的影響とその対応). ふくしま保育元気アップ緊急支援事業相談支援者育成研修会, 福島, 2013.5.28.
- 6) 金 吉晴: 『ボランティア論』における PFA 研修. 学習院大学, 東京, 2013.6.11.
- 7) 金 吉晴: 心理ケア (支援者、受援者). 災害派遣医療チーム (DMAT) 研修, 独立行政法人国立病院機構災害医療センター, 東京, 2013.6.25.
- 8) 金 吉晴: 災害時における心理社会的支援. 第 50 回精神保健指導課程研修 (コミュニティメンタルヘルスのリーダーシップトレーニング), 東京, 2013.6.26.
- 9) 金 吉晴: 災害時の精神保健. 平成 25 年度東大公共健康医学専攻 (SPH), 東京, 2013.7.2.
- 10) 金 吉晴: 心理ケア (支援者、受援者). 平成 25 年度第 3 回災害派遣医療チーム (DMAT) 研修, 東京, 2013.7.9.
- 11) 金 吉晴: トラウマケア～臨床心理士が知っておくべき最新の知識～. (社) 日本臨床心理士会 第 15 回被害者支援研修会, 北海道, 2013.7.14.
- 12) 金 吉晴: PTSD に対する PE の適用と事例検討. 認知行動療法勉強会: 特別研修会, 宮城, 2013.7.19.
- 13) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法研修会, 東京, 2013.7.21.
- 14) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法研修会 (立正大学), 東京, 2013.8.4.
- 15) 金 吉晴: 持続エクスポージャー療法研修会 (立正大学), 東京, 2013.8.7.
- 16) 金 吉晴: 災害時の心のケア活動で必要なこと. 平成 25 年度高知県災害時の心のケア活動研修会, 高知, 2013.8.9.
- 17) 金 吉晴: トラウマ治療の最前線. 第 7 回 Pfizer Medical Depression Seminar, 京都, 2013.8.10.
- 18) 金 吉晴: 災害時初期の心理支援 (サイコロジカルファーストエイド) に関する指導. 陸上自衛隊臨床心理士集合訓練, 東京, 2013.8.29.
- 19) 金 吉晴: 心理ケア (支援者、受信者). 平成 25 年度第 6 回災害派遣医療チーム (DMAT) 研修, 東京, 2013.10.1
- 20) 金 吉晴: 講義 12 災害時のこころのケア・サイコロジカルファーストエイド. 災害医療従事者研修会, 東京, 2013.10.30.
- 21) 金 吉晴: トラウマと PTSD, 診断と治療. 平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会, 東京, 2013.11.21-22.
- 22) 金 吉晴: 長く厳しい就職活動のストレス対策. 和洋女子大学就職活動対策セミナー, 東京, 2013.12.3.
- 23) 金 吉晴, 荒川亮介: 災害とこころのケア. 平成 25 年度災害時におけるこころのケア研修会, 沖縄, 2013.12.5.
- 24) 金 吉晴, 荒川亮介, 大沼麻実, 萩原かおり: サイコロジカルファーストエイド スキルトレーニンング. 平成 25 年度災害時におけるこころのケア研修会, 沖縄, 2013.12.5.
- 25) 金 吉晴: Psychological First Aid —WHO 版 心理的応急処置—. 立正大学心理臨床センター主催 平成 25 年度心理臨床セミナー, 東京, 2013.12.8.

- 26) 金 吉晴：トラウマと PTSD、診断と治療．平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 B 通常コース，高知，2013.12.19-20.
- 27) 金 吉晴，荒川亮介：災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修，東京，2014.1.8.
- 28) 金 吉晴，荒川亮介：災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修，東京，2014.1.14-16.
- 29) 金 吉晴：PTSD の概念と治療．平成 8 回犯罪被害者メンタルケア研修，東京，2014.1.23.
- 30) 金 吉晴：災害時の精神医療対応．平成 25 年度「PTSD 対策専門研修事業 E. 大規模災害対策コース (行政職員向け)」，東京，2014.1.27.
- 31) 金 吉晴：災害時の精神医療対応．平成 25 年度 PTSD 対策専門研修事業 D. 大規模災害対策コース (精神医療関係者)．愛知，2014.2.18.
- 32) 金 吉晴：災害とメンタルヘルス．平成 25 年度 PTSD 対策専門研修事業 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者)．東京，2014.2.23.
- 33) 金 吉晴：PFA セミナー．第 19 回日本集団災害医学会 プレ・ポストコンGRESS，東京，2014.2.24.
- 34) 中島聡美：犯罪被害者および遺族の心理とケア．警察庁平成 25 年度被害者カウンセリング技術 (上級) 専科，東京，2013.5.14.
- 35) 中島聡美：公共交通事故等の被害者および遺族の心理．平成 25 年度 専門課程 公共交通事故被害者等支援研修，東京，2013.5.30.
- 36) 中島聡美：犯罪被害者および遺族の心理ケア．警察庁被害者支援専科，東京，2013.6.14.
- 37) 中島聡美：複雑性悲嘆ワークショップ治療ワークショップ．国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター平成 25 年度認知行動療法に関する研修，東京，2013.6.22-23.
- 38) 中島聡美：トラウマ治療の最新トピックス．岩手県精神保健福祉センター平成 25 年度トラウマケア・フォローアップ研修会，岩手，2013.7.6.
- 39) 中島聡美：災害後のこころ～複雑性悲嘆の理解と私たちにできること．平成 25 年度北海道立精神保健福祉センター教育研修，北海道，2013.8.2.
- 40) 中島聡美：「PTSD の病態と治療について」．いばらき被害者支援センター被害者支援活動員養成講座，茨城，2013.8.9.
- 41) 中島聡美：「被害者等の理解(1) 性暴力被害者」．いばらき被害者支援センター被害者支援活動員養成講座，茨城，2013.8.9.
- 42) 中島聡美：犯罪被害者の心理とケア．にいがた被害者支援センター継続講座，新潟，2013.8.20.
- 43) 中島聡美：災害によるトラウマとそのケア：PTSD と複雑性悲嘆．JDGS プロジェクト・仙台グリーンケア研究会主催第 2 回 悲嘆講座，宮城，2013.8.31.
- 44) 中島聡美：悲嘆の理解とケア—大切な人を亡くした方を支援する人へ—．グリーンサポートプロジェクト岡山主催グリーンケア研修会，岡山，2013.9.15.
- 45) 中島聡美：複雑性悲嘆について．兵庫県こころのケアセンター主催こころのケア研究「悲嘆の理解と遺族への支援」，兵庫，2013.9.18.
- 46) 中島聡美：あいまいな喪失について．JDGS 主催あいまいな喪失 (Ambiguous Loss)：行方不明者家族・故郷を失っている人への支援) 研修会，福島，2013.10.5.
- 47) 中島聡美：公共交通事故等の被害者および遺族の心理．平成 25 年度 専門課程 公共交通事故被害者等支援研修，東京，2013.11.15.
- 48) 中島聡美：交通事故被害者遺族の悲嘆とケア．内閣府交通事故被害者支援事業平成 25 年度自助グループ運営・連絡会議，東京，2013.11.18.
- 49) 中島聡美：トラウマを経験した遺族の悲嘆とケア．厚生労働省委託事業平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会．東京，2013.11.22.
- 50) 中島聡美：犯罪・事故等の被害者および遺族の心理とケア．文部科学省学校事故対応に関する研究会，東京，2013.12.16.

- 51) 中島聡美：トラウマを経験した遺族の悲嘆とケア。厚生労働省委託事業平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会。高知，2013.12.20.
- 52) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイド研修。相馬広域こころのケアセンター ながみ職員研修，福島，2013.5.19.
- 53) 鈴木友理子：原発事故とメンタルヘルス。平成 25 年度第 1 回保健師等支援研修会，福島，2013.7.12.
- 54) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイド・インストラクター養成研修。平成 25 年度ゲートキーパー・スキルアップ指導者養成講習会，島根，2013.11.23-24.
- 55) 鈴木友理子，深澤舞子：平成 25 年度心とからだの健康調査結果について。仙台市教育委員会平成 25 年度第 7 回心のケア研修会，宮城，2013.12.4.
- 56) 鈴木友理子：メンタルヘルス・ファーストエイドの対応法について。相模原市ゲートキーパー研修（窓口編），神奈川，2014.3.17.
- 57) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。第 69 回 DMAT 隊員養成研修，東京，2013.6.4.
- 58) 荒川亮介：心理的応急処置（PFA）ならびに災害時精神保健医療指導者研修について。平成 25 年度健康危機管理研修（実務編第 1 回），埼玉，2013.6.25.
- 59) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。第 72 回 DMAT 隊員養成研修，東京，2013.8.19.
- 60) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。第 73 回 DMAT 隊員養成研修，東京，2013.9.10.
- 61) 荒川亮介：災害時におけるこころのケア支援。災害時こころのケア研修会（長野県精神保健福祉センター主催），長野，2013.10.1.
- 62) 荒川亮介：災害への対応。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 A.通常コース，東京，2013.11.22.
- 63) 荒川亮介：災害時のこころのケア・サイコロジカルファーストエイド。平成 25 年度国立病院機構災害医療従事者研修，東京，2013.12.4.
- 64) 荒川亮介：災害派遣精神医療チーム（DPAT）。平成 25 年度災害時におけるこころのケア研修会，沖縄，2013.12.5.
- 65) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。DMAT 隊員養成研修，東京，2013.12.10.
- 66) 荒川亮介：災害への対応。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 B.通常コース，高知，2013.12.20.
- 67) 荒川亮介：DPAT 体制。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 E.大規模災害対策コース，東京，2014.1.27.
- 68) 荒川亮介：災害時のこころのケア・サイコロジカルファーストエイド。平成 25 年度第 2 回全国災害拠点病院等災害医療従事者研修，東京，2014.2.14.
- 69) 荒川亮介：DPAT 体制。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 D.大規模災害対策コース，名古屋，2014.2.18.
- 70) 荒川亮介：DPAT 体制。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 C.大規模災害対策コース，東京，2014.2.23.
- 71) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。DMAT 隊員養成研修，東京，2014.3.17.

F. その他

- 1) 金 吉晴：総合討論（指定発言）。東日本大震災の精神医療における被災とその対応—宮城県の

直後期から急性期を振り返る— (公開シンポジウム), 宮城, 2013.7.7.

- 2) 金 吉晴: 東日本大震災における精神保健医療に関する対応について. 第1回災害派遣精神医療チーム (DPAT) 活動指針検討会, 東京, 2013.7.31.
- 3) 金 吉晴: 演題1 ドメスティックバイオレンスの中に潜む性暴力のインパクト (追加提言). 第13回トラウマ治療研究会, 東京, 2014.3.7.

7. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、当センター中期目標における位置づけを明確化し研究を進めている。具体的には、わが国において重要な政策課題となっているうつ病と自殺予防に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床疫学研究を実施するとともに、精神神経疾患の診断・評価法、治療介入法の研究開発を行っている。研究成果は、患者、健常成人、実験動物、培養細胞等を対象とした生物学的研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

精神薬理研究部には精神薬理研究室と気分障害研究室の 2 室が所属している。平成 25 年度の常勤研究員は部長の山田光彦と精神薬理研究室長の斎藤顕宜の 2 名であり、気分障害研究室長は山田光彦が兼任した。また、TMC 情報管理・解析部生物統計解析室の米本直裕室長（当部併任）と密接に連携し研究を進めた。流動研究員は、橋本富男、杉山 梓の 2 名、科研費研究員は、山田美佐、外来研究員は、川島義高であった。客員研究員は、岡淳一郎（東京理科大学薬学部薬理学研究室教授）、長田賢一（聖マリアンナ医科大学神経精神科准教授）、亀井淳三（星薬科大学薬物治療学教室教授）、神庭重信（九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授）、白川修一郎（睡眠評価研究機構代表者）、高原 円（福島大学共生システム理工学類准教授）、林 直樹（都立松沢病院精神科部長）、古川壽亮（京都大学大学院医学研究科教授）であった。研究生は、遠藤 香、神垣有美、高橋 弘、中井亜弓、西岡玄太郎、濱田幸恵、渡辺恭江、大橋正誠、塚越麻衣、実習生は、鈴木聡史、山下 萌であった。科研費研究助手は、櫻井恭子、松谷真由美、村松浩美であった。

II. 研究活動

1) 精神薬理研究室による基盤的創薬研究プロジェクト

グルタミン酸仮説、デルタ受容体仮説による病態モデル研究、行動薬理評価のバッテリーの開発と非臨床試験への応用、新規抗うつ薬シーズの探索研究等を実施した。（山田光彦、斎藤顕宜、山田美佐、橋本富男、杉山 梓、大橋正誠、塚越麻衣、鈴木聡史）

2) 気分障害研究室による臨床研究プロジェクト

一般診療科におけるうつ病治療モデルの確立のための研究（山田光彦、斎藤顕宜、米本直裕）、うつ病の最適薬物治療戦略確立のための大型無作為化比較試験（2,000 症例規模の実践的多施設共同無作為化比較試験：SUN©D）（山田光彦、米本直裕）、うつ病の難治化を克服するための研究（山田光彦、斎藤顕宜）等を実施した。

3) J-MISP group による自殺予防研究プロジェクト

複合的自殺対策プログラムの自殺企図予防効果に関する地域介入研究（212 万人規模の多施設共同非無作為化地域介入比較研究：NOCOMIT-J）、自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネジメントの効果（914 名の自殺企図者を対象の多施設共同無作為化比較試験：ACTION-J）等の運営に関与した。

4) JGIDA group によるゲノム医学を活用した精神疾患に対する個別化治療法の開発

薬剤に対する反応性・副作用に関連した遺伝子多型を同定し、精神疾患医療における個別化医療の実現、画期的治療薬開発そして発症脆弱性遺伝子解明を目指す研究をおこなった。

III. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 市民講座、保健所、地方自治体等における講演会、マスメディア等にて普及啓発。

2) 専門教育面における貢献

- ・ 日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医、日本臨床薬理学会認定医として、昭和

- 学, 星薬科大学において精神医学の卒前卒後教育活動を実施。(山田光彦)
- ・ 東京理科大学において精神薬理学の卒前卒後教育活動を実施。(斎藤顕宜)
- 3) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献
- ・ 自殺予防総合対策センターと連携し内閣府及び厚労省の事業に貢献 (山田光彦)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kodaka M, Inagaki M, Yamada M: Factors associated with attitudes toward suicide: among Japanese pharmacists participating in the Board Certified Psychiatric Pharmacy Specialist Seminar. *Crisis* 34(6): 420-427, 2013.
- 2) Inagaki M, Ohtsuki T, Ishikura F, Kodaka M, Watanabe Y, Yamada M: Factors associated with perceived feasibility and willingness of non-psychiatric doctors in Japan to treat depressed patients. *Int J Psychiatry Med* 46(2): 153-167, 2013.
- 3) Saitoh A, Sugiyama A, Yamada M, Inagaki M, Oka J, Nagase H, Yamada M: The novel δ opioid receptor agonist KNT-127 produces distinct anxiolytic-like effects in rats without producing the adverse effects associated with benzodiazepines. *Neuropharmacology* 67: 485-493, 2013.
- 4) Inagaki M, Ohtsuki T, Yonemoto N, Oikawa Y, Kurosawa M, Muramatsu K, Furukawa TA, Yamada M: Prevalence of depression among outpatients visiting a general internal medicine polyclinic in rural Japan. *Gen Hosp Psychiatry* 35(3): 286-290, 2013.
- 5) Yamada M, Makino Y, Hashimoto T, Sugiyama A, Oka J, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A: Induction of galanin after chronic sertraline treatment in mouse ventral dentate gyrus. *Brain Res* 1516: 76-82. 2013.
- 6) Hashimoto T, Yamada M, Iwai T, Saitoh A, Hashimoto E, Ukai W, Saito T, Yamada M: Plasticity-related gene 1 is important for survival of neurons derived from rat neural stem cells. *J Neurosci Res* 91(11): 1402-1407, 2013.
- 7) Takasaki I, Oose K, Otaki Y, Ihara D, Fukuchi M, Tabuchi A, Tsuneki H, Tabuchi Y, Kondo T, Saitoh A, Yamada M, Tsuda M: Type II pyrethroid deltamethrin produces antidepressant-like effects in mice. *Behav Brain Res* 257: 182-188, 2013.
- 8) Inagaki M, Ohtsuki T, Yonemoto N, Kawashima Y, Saitoh A, Oikawa Y, Kurosawa M, Muramatsu K, Furukawa TA, Yamada M: Validity of the Patient Health Questionnaire (PHQ)-9 and PHQ-2 in general internal medicine primary care at a Japanese rural hospital: a cross-sectional study. *Gen Hosp Psychiatry* 35(6): 592-597, 2013.
- 9) Kodaka M, Inagaki M, Poštuvan V, Yamada M: Exploration of factors associated with social worker attitudes toward suicide. *Int J Soc Psychiatry* 59(5): 452-459, 2013.
- 10) Sasaki-Hamada S, Sacai H, Sugiyama A, Iijima T, Saitoh A, Inagaki M, Yamada M, Oka J: Riluzole does not affect hippocampal synaptic plasticity and spatial memory, which are impaired by diazepam in rats. *J Pharmacol Sci* 122(3): 232-236, 2013.
- 11) Fujii H, Hayashida K, Saitoh A, Yokoyama A, Hirayama S, Iwai T, Nakata E, Nemoto T, Sudo Y, Uezono Y, Yamada M, Nagase H: Novel delta opioid receptor agonists with oxazatricyclodecane structure. *ACS Med Chem Lett* 5(4):368-372, 2014.
- 12) Iwai T, Ohnuki T, Sasaki-Hamada S, Saitoh A, Sugiyama A, Oka J: Glucagon-like peptide-2 but not imipramine exhibits antidepressant-like effects in ACTH-treated mice. *Behav Brain Res* 243: 153-157, 2013.

- 13) Inagaki M, Akechi T, Okuyama T, Sugawara Y, Kinoshita H, Shima Y, Terao K, Mitsunaga S, Ochiai A, Uchitomi Y: Associations of interleukin-6 with vegetative but not affective depressive symptoms in terminally ill cancer patients. *Support Care Cancer* 21(8): 2097-2106, 2013.
- 14) Nishizawa D, Fukuda K, Kasai S, Hasegawa J, Aoki Y, Nishi A, Saita N, Koukita Y, Nagashima M, Katoh R, Satoh Y, Tagami M, Higuchi S, Ujike H, Ozaki N, Inada T, Iwata N, Sora I, Iyo M, Kondo N, Won MJ, Naruse N, Uehara-Aoyama K, Itokawa M, Koga M, Arinami T, Kaneko Y, Hayashida M, Ikeda K: Genome-wide association study identifies a potent locus associated with human opioid sensitivity. *Mol Psychiatry* 19(1): 55-62, 2014.
- 15) Ono Y, Sakai A, Otsuka K, Uda H, Oyama H, Ishizuka N, Awata S, Ishida Y, Iwasa H, Kamei Y, Motohashi Y, Nakamura J, Nishi N, Watanabe N, Yotsumoto T, Nakagawa A, Suzuki Y, Tajima M, Tanaka E, Sakai H, Yonemoto N: Effectiveness of a multimodal community intervention program to prevent suicide and suicide attempts: a quasi-experimental study. *PLoS One* 9; 8(10): e74902, 2013.
- 16) Sasaki H, Yonemoto N, Hanada N, Mori R: Methods for administering subcutaneous heparin during pregnancy. *Cochrane Database Syst Rev* 28;3:CD009136, 2013.
- 17) Nishi D, Noguchi H, Yonemoto N, Nakajima S, Kim Y, Matsuoka Y: Incidence and prediction of post-traumatic stress disorder at 6 months after motor vehicle accidents in Japan. *Psychosomatics* 54(3): 263-271, 2013.
- 18) Ishii N, Kono Y, Yonemoto N, Kusuda S, Fujimura M: Neonatal research network, Japan: outcomes of infants born at 22 and 23 weeks' gestation. *Pediatrics* 132(1): 62-71, 2013.
- 19) Yonemoto N, Dowswell T, Nagai S, Mori R: Schedules for home visits in the early postpartum period. *Cochrane Database Syst Rev* 23;7:CD009326, 2013.
- 20) Maruyama H, Nakamura M, Yonemoto N, Kageyama M: Thrombocytopenia at birth is a predictor of cholestasis in infants with small for gestational age. *Acta Med Okayama* 67(4): 219-225, 2013.
- 21) Takeuchi F, Yonemoto N, Nakamura H, Shimizu R, Komaki H, Mori-Yoshimura M, Hayashi YK, Nishino I, Kawai M, Kimura E, Takeda S: Prednisolone improves walking in Japanese Duchenne muscular dystrophy patients. *J Neurol* 260(12): 3023-3029, 2013.
- 22) Akahira-Azuma M, Yonemoto N, Ganzorig B, Mori R, Hosokawa S, Matsushita T, Bavuusuren B, Shonkhuuz E: Validation of a transcutaneous bilirubin meter in Mongolian neonates: comparison with total serum bilirubin. *BMC Pediatr* 13:151, 2013.
- 23) Ueda K, Bailey DB Jr, Yonemoto N, Kajikawa K, Nishigami Y, Narisawa S, Nishiwaki M, Shibata M, Tomiwa K, Matsushita A, Fujie N, Kodama K: Validity and reliability of the Japanese version of the family needs survey. *Res Dev Disabil* 34(10):3596-3606, 2013.
- 24) Suematsu Y, Miura S, Zhang B, Uehara Y, Tokunaga M, Yonemoto N, Nonogi H, Nagao K, Kimura T, Saku K: On behalf of the Japanese Circulation Society Resuscitation Science Study (JCS-Ress) Group: associations between the consumption of different kinds of seafood and out-of-hospital cardiac arrests of cardiac origin in Japan. *IJC Heart&Vessels* 2: 8-14, 2014.

(2) 総説

- 1) 稲垣正俊, 大槻露華, 長 健, 山田光彦: 特集「精神疾患地域連携クリティカルパス」うつ病の発見と治療に必要なかかりつけ病院と院外資源との連携のために. *日本社会精神医学会雑誌* 22(2): 155-162, 2013.

- 2) 山田光彦：自殺総合対策大綱の改訂にみる精神保健の役割について．分子精神医学 13(2)：150-152, 2013.
- 3) 齋藤顕宜, 山田光彦：不安障害に対する新規治療薬開発の現状と課題—グルタミン酸神経調節を標的とした新規治療法開発—. 精神保健研究 60：41-48, 2014.
- 4) 米本直裕：データベースにおける統計解析手法．周産期医学 43(5)：657-660, 2013.

(3) 著書

- 1) 山田光彦 (分担執筆) 上島国利, 上別府圭子, 平島奈津子 編：知っておきたい精神医学の基礎知識 サイコロジストとメディカルスタッフのために 第2版, 誠信書房, 東京, pp358-368, 2013.
- 2) 米本直裕：精神医学における研究倫理. 粟屋 剛 編：精神科医療 シリーズ生命倫理学第9巻, 丸善出版, 東京, pp34-49, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 山田光彦：自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業(精神障害分野))．総括・分担研究報告書．2014.
- 2) 山田光彦：気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究．平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費総括研究報告書．2014.
- 3) 米本直裕：HTLV-1 母子感染予防に関する研究：HTLV-1 抗体陽性妊婦からの出生児のコホート研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業) 「TLV-1 抗体陽性妊婦からの出生児コホート研究における統計学的課題に関する研究 (研究代表者：板橋家頭夫)」平成 25 年度総括・分担研究報告書．pp118-119, 2014.
- 4) 米本直裕：母子保健に関する国際的動向及び情報発信に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業) 「非ランダム化研究に対する系統的レビューの方法論の近年の動向に関する研究 (研究代表者：森 臨太郎)」．平成 25 年度総括・分担研究報告書．pp69-71, 2014.
- 5) 米本直裕：遺伝性神経・筋疾患における患者登録システムの構築と遺伝子診断システムの確立に関する研究．平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費「遺伝性神経・筋疾患における臨床試験の課題と患者登録データベースの活用に関する研究 (主任研究者：木村 円)」総括研究報告書．pp35-36, 2014.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 齋藤顕宜, 山田光彦, 稲垣正俊, 山田美佐, 高橋 弘, 岩井孝志：グルタミン酸神経調節薬による情動調節機序に関わる脳内ネットワークの解明．公益財団法人 精神・神経科学振興財団 Newsletter No12：9, 2013.
- 2) 川島義高, 米本直裕, 河西千秋：第 5 回国際自殺予防学会アジア・太平洋地域会議．自殺予防と危機介入 33(1)：63-64, 2013.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Yamada M, Takahashi K, Saitoh A, Inagaki M, Yamada M, Hashimoto T, Sugiyama A, Ohashi M, Tsukagoshi M: Modulating the glutamate transmission in developing novel antidepressants: beyond the monoamine hypothesis. 11th World Congress of Biological

Psychiatry, Kyoto, 2013.6.22-27.

- 2) 山田光彦：自殺総合対策大綱における自殺未遂者対策の位置づけ，「自殺未遂者支援対策の現状と課題（シンポジウム）」．第109回日本精神神経学会学術総会，福岡，2013.5.23-25.
- 3) 山田光彦：「自殺予防の原則：課題提示，方略開発，そして対策の普及へ」公共政策の中で効果的な自殺未遂者ケアの実現を目指す．第37回日本自殺予防学会総会，秋田，2013.9.13-15.
- 4) 米本直裕：「自殺予防の原則：課題提示，方略開発，そして対策の普及へ」自殺予防，未遂者ケア介入の開発とエビデンス．第37回日本自殺予防学会総会，秋田，2013.9.13-15.
- 5) 木村 円，林由起子，中村治雅，森まどか，竹内芙実，米本直裕，清水玲子，小牧宏文，西野一三，川井 充，武田伸一：希少疾患レジストリー：国際協調と臨床開発における役割－Remudyの現状と目指すもの．第34回日本臨床薬理学会学術総会，東京，2013.12.4-6.

(2) 一般演題

- 1) Yamada M, Akechi T, Simodera S, Watanabe N, Inagaki M, Yonemoto N, Furukawa TA: A pragmatic megatrial to optimise the first-and second-line treatments for patients with major depression: SUN(^_^)D study protocol and initial results. 53rd NCDEU: An Annual Meeting Sponsored by ASCP, Hollywood Florida, 2013.5.28-31.
- 2) Yamada M, Inagaki M, Kawashima Y, Yonemoto N: National policy initiatives for suicide prevention: a comparative study between New Zealand and Japan. The XXVII world Congress of the international association for suicide prevention, Oslo, 2013.9.24-28.
- 3) Yonemoto N, Inagaki M, Kawashima Y, Shiraishi Y, Furuno T, Sugimoto T, Tachikawa H, Ikeshita K, Eto N, Kawanishi C, Yamada M: Effective interventions for suicide attempters after discharge from emergency unit: a systematic review of randomized controlled trials. The XXVII world Congress of the international association for suicide prevention, Oslo, 2013.9.24-28.
- 4) Kawashima Y, Yonemoto N, Inagaki M, Yamada M: Publication bias of studies on suicide attempters requiring admission to emergency department: a systematic review of studies conducted in Japan. The XXVII world Congress of the International Association for Suicide Prevention, Oslo, 2013.9.24-28.
- 5) Kawanishi C, Yonemoto N, Yamada M, Inagaki M, Kawashima Y, Hirayasu Y: ACTION-J: a randomized, controlled, multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan. The XXVII world Congress of the international association for suicide prevention, Oslo, 2013.9.24-28.
- 6) Otsuka K, Ono Y, Sakai A, Inagaki M, Yonemoto N, Yamada M: A community intervention trial of multimodal suicide prevention program: NOCOMIT-J. The XXVII world Congress of the international association for suicide prevention, Oslo, 2013.9.24-28.
- 7) Fujimura M, Kono Y, Yonemoto N, Satoshi K: The larger risk of poor cognitive function than that of CP with smaller gestation of preterm birth <25 weeks. PAS 2013 Pediatric Academic Societies DC Annual Meeting, Washington, 2013.5.4-7.
- 8) Yonemoto N: Trends in improving the perinatal diagnosis at MCMCH. The 5th National congress "IMPROVING PRACTICE BY EXCHANGING-V/2013", Ulaanbaatar Mongolia, 2013.6.14-15.
- 9) Yonemoto N, Kono Y, Kusuda S, Fujimura M: Missing data of composite endpoints with large neonatal follow-up data: a case study of neonatal research network Japan database. 26th Annual Meeting: Society for Pediatric and Perinatal Epidemiologic Research, Boston Massachusetts, 2013.6.17-18.

- 10) Ueda K, Yonemoto N: Assessing family outcomes in early intervention: the case of Japan. 3rd IASIDD Asia-Pacific Regional Conference, Tokyo , 2013. 8.22-24.
- 11) Ueda K, Bailey D, Yonemoto N, Kajikawa K, Nishigami Y, Narisawa S, Nishiwaki M, Shibata M, Tomiwa K, Mathushita A, Fujie N, Kodama K: Validity and reliability of the Family Needs Survey- Japanese version. 3rd IASIDD Asia-Pacific Regional Conference, Tokyo, 2013. 8.22-24.
- 12) Ueda K, Yonemoto N, Kajikawa K, Nishigami Y, Narisawa S, Nishiwaki M, Shibata M, Tomiwa k, Mathushita A, Fujie N, Kodama K: Clarification of answers to an open-ended question: “Please list your five greatest needs as a family” with needs listed on the Family Needs Survey- Japanese Version. 3rd IASIDD Asia-Pacific Regional Conference, Tokyo, 2013. 8.22-24.
- 13) Suematsu Y, Miura S, Uehara Y, Zhang B, Yonemoto N, Nonogi H, Nagao K, Kimura T, Saku K: Dental caries is associated with out-of-hospital cardiac arrest of cardiac origin, but not noncardiac origin: from the All-Japan utstein registry. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 14) Yagi T, Nagao K, Tachibana E, Nishikawa K, Yonemoto N, Shirai S, Takayama M, Nonogi H, Kimura T: The JCS-Ress study group: effect of 1-shock protocol for patients with out-of-hospital cardiac arrest due to ventricular fibrillation. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 15) Tahara Y, Kimura K, Yonemoto N, Nonogi H, Kimura T, Nagao K: The JCS-Ress study group: efficacy of bag-valve-mask ventilation for ventricular fibrillation sudden cardiac arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 16) Nagao K, Tachibana E, Yonemoto N, Takayama M, Furuya S, Nonogi H, Shirai S, Kimura T: The JCS-Ress study group: neurologically intact survival and time interval from collapse to return of spontaneous circulation for patients with out-of-hospital cardiac arrest: a comparison of shockable cardiac arrest and non-shockable cardiac arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 17) Tahara Y, Kimura K, Iwahashi N, Morimura N, Nagao K, Yonemoto N, Yokoyama H, Nonogi H: The J-Pulse-Hypo investigators: relation between echocardiograms after return of spontaneous circulation and neurologic outcomes in patients treated with hypothermia after out-of-hospital ventricular fibrillation cardiac arrest: J-PULSE-Hypo Registry. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 18) Miyauchi H, Uechi T, Tsukada T, Hoshida K, Shibata S, Ohira K, Ikeda T, Yonemoto N, Nonogi H, Kimura T, Nagao K, Matsuda T, Nomura H: The JCS-Ress study group: dispatching emergency life-saving technician improves neurological outcome 1-month after out-of-hospital cardiac arrest independently of their advanced life support procedures. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 19) Nagao K, Tachibana E, Yagi T, Yonemoto N, Takayama M, Nonogi H, Shirai S, Kimura T: The JCS-Ress study group: relation between time interval from collapse to return of spontaneous circulation and neurologically intact survival for out-of-hospital cardiac arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science

- Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 20) Yagi T, Nagao K, Tachibana E, Nishikawa K, Yonemoto N, Shirai S, Takayama M, Nonogi H, Kimura T: The JCS-Ress study group: effect of shock delivery after conversion to shockable arrest from out-of-hospital non-shockable cardiac arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 21) Arimoto H, Rinke H, Nagao K, Yonemoto N, Yokoyama H, Nonogi H: Comparison of therapeutic hypothermia between core-cooling and surface-cooling for out-of-hospital cardiac arrest from a multicenter registry in Japan: J-PULSE-Hypo registry. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 22) Tahara Y, Kimura K, Morimura N, Nagao K, Yonemoto N, Yokoyama H, Nonogi N: The J-Pulse-Hypo investigators: relation between electrocardiographic changes and neurologic outcomes in patients treated with hypothermia after out-of-hospital ventricular fibrillation cardiac arrest: J-PULSE-Hypo registry. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 23) Kuroda Y, Kawakita K, Ken Nagao K, Yonemoto N, Yokoyama H, Nonogi H: The J-Pulse-Hypo investigators: relation between Glasgow Coma Scale motor score immediately After ROSC and neurologic outcomes in patients treated with hypothermia after out-of-hospital cardiac arrest: J-PULSE-Hypo Registry. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 24) Inoue N, Shimizu N, Ohta K, Nitta M, Yonemoto N, Nonogi H, Nagao K, Kimura T: The JCS-Ress study group: prehospital advanced airway management without intravenous access may negatively affect favorable neurological outcome in children with out-of-hospital cardiac arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 25) Nagao K, Kasai A, Tachibana E, Yonemoto N, Takayama M, Nonogi H, Shirai S, Kimura T: The JCS-Ress study group: neurologically intact survival and time interval from collapse to return of spontaneous circulation for out-of-hospital non-shockable cardiac arrest: a comparison of pulseless electrical activity and asystole. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 26) Shimizu N, Ohta K, Nitta M, Inoue N, Yonemoto N, Nonogi H, Nagao K, Kimura T: The JCS-Ress study group: implementation of the combination of CAB algorithm and CC-only CPR does not worsen the outcomes of paediatric out-of-hospital cardiac arrests: nation wide population based study. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 27) Shimotakahara J, Shirai S, Nagao K, Nonogi H, Yokoyama H, Yonemoto N: The J-Pulse-Hypo investigators: impact of high glucose level at admission on thirty days clinical outcomes for the out-of-hospital cardiac arrest patients with acute coronary event undergoing coronary intervention with hypothermia therapy. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
 - 28) Soga T, Nagao K, Yokoyama H, Yonemoto N, Nonogi H: The J-Pulse- hypo investigators: therapeutic hypothermia for patients with post-resuscitation shock after out-of-hospital cardiac Arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.

- 29) Nagao K, Tachibana E, Yagi T, Yonemoto N, Takayama M, Tani S, Nonogi H, Shirai S, Kimura T: The JCS-Ress study group: time interval from collapse to return of spontaneous circulation and neurologically intact survival for out-of-hospital shockable (ventricular fibrillation or pulseless ventricular tachycardia) cardiac arrest. American Heart Association American Stroke Association, Resuscitation Science Symposium, Texas, 2013.11.16-19.
- 30) 山田光彦, 山田美佐, 牧野祐哉, 橋本富男, 杉山 梓, 稲垣正俊, 岡淳一郎, 斎藤顕宜: セルトラリン慢性投与後の海馬歯状回復側部及び背側部の遺伝子発現の変化. Neuro2013, 京都, 2013.6.20-23.
- 31) 橋本富男, 山田美佐, 岩井孝志, 斎藤顕宜, 橋本恵理, 鶴飼 渉, 齋藤利和, 山田光彦: 抗うつ薬関連遺伝子 Prg1 は神経細胞の生存維持に重要な因子である. Neuro2013, 京都, 2013.6.20-23.
- 32) 飯島崇裕, 濱田幸恵, 酒井浩旭, 杉山 梓, 斎藤顕宜, 稲垣正俊, 山田光彦, 岡淳一郎: ジアゼパムで抑制される海馬シナプス可塑性と空間学習に対してリルゾールは影響しない. 第 128 回薬理学会関東部会, 東京, 2013.7.14.
- 33) 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 山田光彦: 日本における救急施設を受診した自殺未遂者に関する研究の系統的レビュー: 再自殺企図を評価した追跡研究の現状と課題. 第 37 回日本自殺予防学会総会, 秋田, 2013.9.13-15.
- 34) 杉山 梓, 長瀬 博, 岡淳一郎, 山田光彦, 斎藤顕宜: δ オピオイド受容体作動薬の抗不安様作用には NTB 感受性の薬理的受容体サブタイプが関与する. 第 23 回日本臨床精神神経薬理学会 第 43 回日本神経精神薬理学会合同年会, 沖縄, 2013.10.24-26.
- 35) 大橋正誠, 斎藤顕宜, 塚越麻衣, 杉山 梓, 山田美佐, 岡淳一郎, 稲垣正俊, 山田光彦: マウス内側前頭前野におけるグルタミン酸神経伝達の亢進は不安様行動を引き起こす. 第 23 回日本臨床精神神経薬理学会 第 43 回日本神経精神薬理学会合同年会, 沖縄, 2013.10.24-26.
- 36) 大橋正誠, 斎藤顕宜, 鈴木聡史, 塚越麻衣, 杉山 梓, 橋本富男, 山田美佐, 岡淳一郎, 稲垣正俊, 山田光彦: マウス内側前頭前野グルタミン酸神経伝達を介した情動調節機序の検討. 第 32 回躁うつ病の薬理・生化学的懇話会, 静岡, 2013.11.22-23.
- 37) 山田光彦, 米本直裕, 下寺信次, 三木和平, 明智龍男, 渡辺範雄, 稲垣正俊, 古川壽亮: 抗うつ薬の最適使用戦略を確立するための実践的多施設共同ランダム化比較試験 SUN-D study: メガトライアル実践のための工夫と挑戦. 第 34 回日本臨床薬理学会学術総会, 東京, 2013.12.4-6.
- 38) 斎藤顕宜, 大橋正誠, 鈴木聡史, 山下 萌, 塚越麻衣, 杉山 梓, 橋本富男, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦: マウス不安様行動発現における内側前頭前野グルタミン酸神経系の関与. 第 24 回マイクロダイアリシス研究会, 東京, 2013.12.14.
- 39) 大橋正誠, 山田美佐, 鈴木聡史, 塚越麻衣, 杉山 梓, 稲垣正俊, 岡淳一郎, 山田光彦, 斎藤顕宜: マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域におけるグルタミン酸神経伝達の亢進は不安様行動を引き起こす. 第 87 回日本薬理学会年会, 宮城, 2014.3.19-21.
- 40) 塚越麻衣, 山田美佐, 橋本富男, 岡淳一郎, 斎藤顕宜, 山田光彦: リゾホスファチジン酸の脳室内投与はマウスで不安様行動を引き起こす. 第 87 回日本薬理学会年会, 宮城, 2014.3.19-21.
- 41) 山田光彦, 稲垣正俊, 米本直裕, 大塚耕太郎, 酒井明夫, 大野 裕, 高橋清久: 自殺対策のための戦略研究: その経緯と背景. 第 33 回日本社会精神医学会, 東京, 2014.3.20-21.
- 42) 大塚耕太郎, 岩佐博人, 本橋 豊, 石田 康, 栗田主一, 中村 純, 亀井雄一, 米本直裕, 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久, 酒井明夫, 大野 裕: NOCOMIT-J の活動: 研究デザインや地域介入プログラムや成果. 第 33 回日本社会精神医学会, 東京, 2014.3.20-21.
- 43) 大野 裕, 大塚耕太郎, 宇田英典, 田島美幸, 米本直裕, 山田光彦, 稲垣正俊, 高橋清久, 酒

- 井明夫：NOCOMIT-J の成果を踏まえて：今後の自殺対策の方向性や被災地の対策など。第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 44) 川島義高，米本直裕，稲垣正俊，山田光彦：日本における救急施設を受診した自殺未遂者の精神疾患：系統的レビューとメタアナリシス。第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 45) 小高真美，高井美智子，引土絵未，岡田澄恵，渡辺恭江，稲垣正俊，山田光彦，竹島 正：ソーシャルワーカーを対象とする自殺予防研修の開発と研修の予備的効果検討。第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 46) 丸山秀彦，米本直裕，河野由美，楠田 聡，藤村正哲：超低出生体重児における NICU 入院中の低い成長速度スコアは，3 歳時予後に対する有意な予測因子である。第 49 回日本周産期・新生児医学会総会および学術集会，神奈川，2013.7.14-16.
- 47) 河野由美，米本直裕：在胎 30 週未満の極低出生体重児の 3 歳時の体格と発達の関連。第 49 回日本周産期・新生児医学会総会および学術集会，神奈川，2013.7.14-16.
- 48) 竹内実実，小牧宏文，木村 円，中村治雅，米本直裕：2 歳未満でデュシェンヌ型ジストロフィーと確定診断された患者の現状—DMD 患者家族のアンケート調査より—。日本人類遺伝学会第 58 回大会，宮城，2013.11.20-23.
- 49) 佐々木八十子，楠田 聡，森臨太郎，米本直裕，内山 温，西田俊彦，三ツ橋偉子：SPRAT（シエフィールド同僚評価表）による新生児科医の診療スキル評価。第 58 回日本未熟児新生児学会・学術集会，石川，2013.11.30-12.2.
- 50) 米本直裕，稲垣正俊，末木 新：日本における若年，中年層インターネットユーザーの自殺サイトへのアクセスの実態。第 24 回日本疫学会学術総会，宮城，2014.1.23-25.

(3) 研究報告会

- 1) 斎藤顕宜，大橋正誠，山田美佐，鈴木聡史，山下 萌，塚越麻衣，橋本富男，杉山 梓，山田大輔，岡淳一郎，関口正幸，山田光彦：情動調節における内側前頭前野グルタミン酸神経伝達系の役割。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会，東京，2014.3.10.
- 2) 塚越麻衣，山田美佐，岡淳一郎，斎藤顕宜，山田光彦：脂質メディエーター リゾホスファチジン酸の情動行動に及ぼす影響：新規抗不安薬ターゲットとしての検討。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会，東京，2014.3.10.
- 3) 川島義高，米本直裕，稲垣正俊，山田光彦：我が国で実施された救急医療機関に搬送された自殺企図者を対象にした研究の特徴と今後の課題：系統的レビュー。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会，東京，2014.3.10.
- 4) 山内貴史，稲垣正俊，米本直裕，岩崎 基，井上真奈美，明智龍男，磯 博康，津金昌一郎：わが国におけるがん診断後の自殺および他の外因死：前向き地域住民コホートをを用いて。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会，東京，2014.3.10.

(4) その他

C. 講演

- 1) 山田光彦：自殺と自殺対策の現状・自殺未遂者ケアと意義。岩手，2013.5.14.
- 2) 山田光彦：自殺の現状とその対策における精神科医療の役割。第 4 回三重県精神科医療懇話会，三重，2013.9.4.
- 3) 山田光彦：抗うつ薬選択に関するエビデンスと今後の課題。第 4 回 Meiji うつ・不安障害治療フォーラム，東京，2013.11.3.
- 4) 米本直裕：観察研究における統計解析の課題と対処：SOS-KANTO 研究を例として。第 64 回

日本救急医学会関東地方会. 第 51 回救急隊員学術研究会, 神奈川, 2014.2.1.

D. 学会活動

(1) 学会役員

山田光彦: 日本薬理学会 評議員

山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 評議員

山田光彦: 日本うつ病学会 評議員

山田光彦: 日本神経精神薬理学会 評議員

山田光彦: Mayo Neuroscience Forum 地区幹事

山田光彦: 躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事

山田光彦: Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse : JGID group 幹事

斎藤顕宜: 日本薬理学会 評議員

斎藤顕宜: 日本神経精神薬理学会 評議員

米本直裕: 日本循環器学会 蘇生科学小委員会 委員

(2) 座長

1) 山田光彦: 世界の臨床家が必要とするエビデンスを日本で創る: 抗うつ薬のメガトライアルにおける工夫と挑戦. 第 34 回日本臨床薬理学会学術総会 座長, 東京, 2013.12.6.

2) 斎藤顕宜: 中枢神経 9 うつ・不安・その他 / CNS9 Depression, Anxiety Disorder & Miscellaneous. 第 87 回日本薬理学会年会, 宮城, 2014.3.19-21.

(3) 学会誌編集委員等

山田光彦: 分子精神医学 編集同人

山田光彦: 日本神経精神薬理学会 広報委員

山田光彦: 日本生物学的精神医学会 広報委員

山田光彦: 日本臨床薬理学会 認定医

山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 認定医

山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 指導医

山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 治験登録医

山田光彦: 日本精神神経学会 専門医

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

F. その他

8. 社会精神保健研究部

I. 研究部の概要

社会精神保健研究部は昭和 27 年の国立精神衛生研究所創立時の 5 部の 1 つとしてスタートし、昭和 61 年の国立精神・神経センター統合の際に 3 研究室を有する社会精神保健部となり、平成 22 年に独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部となった。当研究部では、すべての国民が質の高い精神科医療をどの医療機関でも受けることができるように、医療機関の評価と医療の質の均てん化に関する多施設臨床研究を、高度専門医療センターにおける研究として進めている。具体的には、研究に関心のある臨床家が参画して、保健医療サービス研究の手法を用いて、身体疾患と精神疾患との融合領域研究、管理研究（医療の質に関する研究）および政策研究を実施している。平成 24 年度から国立高度専門医療研究センターとの共同で実施する「身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト」を開始した。社会精神保健研究部の所掌事項は「精神疾患と精神保健に関する社会文化的要因との関係」に関する調査及び研究を行うことである。

当研究部には、社会福祉研究室（山之内芳雄 室長：平成 25 年 8 月着任）、社会文化研究室（伊藤弘人 部長併任）、家族・地域研究室（堀口寿広 室長）がある。また流動研究員（佐藤真希子、大森由実：平成 25 年 4 月着任）および非常勤研究員（池野 敬、田波由佳、橋本 塁：平成 25 年 7 月着任）が当研究部に配属され、研究に従事してきた。なお臨床での問題意識からの多施設臨床研究を実施すべく、精神科・循環器科・内科医療に従事する専門家等が当研究部の研究に参画している（石井美緒、石黒陽子、大塚豪士、小川朝生、奥村泰之、金森恭子、上村智子、川畑俊貴、木村真人、桑原和江、末安民生、杉浦伸一、杉山直也、野田寿恵、八田耕太郎、平田豊明、松村 隆、三澤史斉、三宅美智、宮地元彦、村松公美子、安井博規）。

II. 研究活動

1) 身体疾患と精神疾患に関する研究

- 循環器疾患：国立循環器病研究センター、久留米大学、日本医科大学、名古屋大学、東京女子医科大学、早稲田大学、日本循環器心身医学会の専門家とともに、循環器疾患と精神疾患に関する研究計画の策定及び研究の実施（横山広行、内山直尚、水野杏一、木村宏之、志賀 剛、鈴木 豪、鈴木伸一、笠貫 宏、大森由実、伊藤弘人）
- 糖尿病：国立国際医療研究センター及び広島大学の専門家とともに、糖尿病と精神疾患に関する研究の実施（峯山智佳、野田光彦、大森由実、伊藤弘人）
- 精神科と身体科等との連携マニュアルと地域連携クリティカルパスの開発（三宅康史、小川朝生、木村真人、野田光彦、数井裕光、稲垣正俊、山本賢司、平田健一、熊野宏昭、大森由実、伊藤弘人）
- DPC/PDPS 対象病院における、向精神薬処方・急性医薬品中毒に関する研究（清水沙友里、奥村泰之、伏見清秀、石川光一、松田晋哉、伊藤弘人）

2) 薬剤処方・行動制限の最適化に関する研究（医療の質に関する研究）

- 統合失調症患者における意思決定共有モデルの無作為化比較試験（石井美緒、伊藤弘人）
- 向精神薬の処方パターンの探索的分析（伊藤弘人）
- 抗精神病薬多剤大量処方の安全で効果的な是正の普及（山之内芳雄）

3) 政策研究

- 医療法第 6 次改正を根拠とした医療計画における精神疾患に係る計画策定の状況に関する研究（堀口寿広、山之内芳雄、伊藤弘人）
- 健康日本 21(第 2 次)(こころの健康・休養)の普及に関する研究（山之内芳雄・大森由実・伊藤弘人）

- 精神科重症入院患者のクリニカルパスと地域連携に関する研究（堀口寿広，伊藤弘人）
- 行政主導の自殺未遂者対応の地域づくりに関する研究（山之内芳雄）
- 障害者虐待防止法の施行状況に関する研究（堀口寿広）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 医療計画に関連する資料を厚生労働省からの依頼を受け研究部ホームページを通じて公表
- ・ 愛知県司法書士会主催の自殺未遂者対応講演（開催日：11月16日）（山之内芳雄）
- ・ シンポジウム「千葉の権利擁護と専門職の役割」（開催日：10月5日）を共催し，成年後見制度を活用した地域の権利擁護のネットワークづくりのあり方について先進事例を紹介した。（堀口寿広）
- ・ シンポジウム「共生社会」をめざした地域づくり」（開催日：11月23日）を主催し，研究成果の報告を行うとともに，障害者虐待防止に関する各地の先進的な取り組み事例を紹介した。（堀口寿広）
- ・ 内閣府等の後援により開催されたシンポジウム「障害者差別をなくす法律・条例を考えるフォーラム」（開催日：6月16日）において，障害者条例に関して実施した調査研究が紹介された。（堀口寿広）

2) 専門教育面における貢献

- ・ 韓国，シンガポールの医療関係者への病院紹介と研究プロジェクトに関する意見交換を行った。
- ・ 公益社団法人日本心理学会 心理医学系研究者のためのデータ解析環境Rによる統計学の研究会 第5回研究集会 2012.4.7，第6回研究集会 2012.6.16，第7回研究集会 2012.8.25，第8回研究集会 2012.12.8。（奥村泰之）
- ・ 東京大学医学部，防衛医科大学および慶應大学医学部の学生実習
- ・ 愛知県庁および愛知県下保健所において自殺未遂者対策の地域づくりに関する講演 2013.10.17～2014.2.28。（山之内芳雄）
- ・ 神奈川県 PSW 新人研修神奈川県精神保健福祉士協会

3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 第7回精神科医療評価・均てん化研修（山之内芳雄，伊藤弘人）

4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・ OECDにおける精神科医療の質に関する専門家との意見交換
- ・ 愛知県自殺未遂者支援地域連携事業会議構成員（山之内芳雄）
- ・ 国土交通省 公共交通機関の移動等円滑化整備ガイドライン改定に係る検討委員会 委員（堀口寿広）
- ・ 公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団 公共交通機関の旅客施設に関する移動等円滑化整備ガイドライン小委員会 委員（堀口寿広）
- ・ 公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団 公共交通機関の車両等に関する移動等円滑化整備ガイドライン小委員会 委員（堀口寿広）

5) センター内における臨床的活動

- ・ 身体疾患患者のメンタルケアモデル開発ナショナルプロジェクトの一環で、臨床心理士をセンター病院へ派遣した。
- ・ 身体疾患患者のメンタルケアモデル開発ナショナルプロジェクトの一環で、センター病院内に新設された統合失調症早期診断・治療センターと連動し、患者と医療・地域を繋ぐ連携手帳を作成した。

6) その他

- ・ 身体疾患患者のメンタルケアモデル開発ナショナルプロジェクトの一環で、他の国立高度専門医療研究センターとの合同研修を共同企画・実施
- ・ 医療計画の策定を支援するために、シンポジウムを企画・実施

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Okumura Y, Ito H: Out-of-pocket expenditure burdens in patients with cardiovascular conditions and psychological distress: a nationwide cross-sectional study. *General Hospital Psychiatry* 35(3): 233-238, 2013.
- 2) Noda T, Sugiyama N, Sato M, Ito H, Sailas E, Putkonen H, Kontio R, Joffe G: Influence of patient characteristics on duration of seclusion/restraint in acute psychiatric settings in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 67(6): 405-411, 2013.
- 3) Fujita J, Nishida A, Sakata M, Noda T, Ito H: Excessive dosing and polypharmacy of antipsychotics caused by pro re nata in agitated patients with schizophrenia. *Psychiatry and clinical neurosciences* 67: 345-351, 2013.
- 4) Nagao K, Kishi T, Moriwaki M, Fujita K, Hirano S, Yamanouchi Y, Funahashi T, Iwata N: Comparative clinical profile of mirtazapine and duloxetine in practical clinical settings in Japan: a 4-week open-label, parallel-group study of major depressive disorder. *Neuropsychiatr Dis Treat* 9: 781-6, 2013.
- 5) 西村景子, 岩田洋平, 有馬 豪, 西 和歌子, 山之内芳雄, 鈴木加余子, 黒田 誠, 野島孝之, 松永佳世子: 大腿部の巨大骨外性 Ewing 肉腫と考えられた 1 例. *Skin Cancer* 27(3): 333-338, 2013.

(2) 総説

- 1) Ito H: What should we do to improve patients' adherence? *Journal of Experimental & Clinical Medicine* 5(4): 127-130, 2013.
- 2) Ito H, Frank R, Nakatani Y, Fukuda Y: The regional health care strategic plan: the growing impact of mental disorders in Japan. *Psychiatric Services* 64(7): 617-619, 2013.
- 3) 伊藤弘人: 精神疾患と地域連携. *精神科治療学* 28(8): 1085-1091, 2013.
- 4) 堀口寿広, 伊藤弘人: 精神保健福祉法の改正と保護者制度の国際的動向. *日本精神科病院協会雑誌* 32(12): 30-39, 2013.
- 5) 堀口寿広, 奥村泰之, 伊藤弘人: 国立精神・神経医療研究センターと医療計画. *公衆衛生* 77(3): 249-252, 2013.
- 6) 池野 敬, 伊藤弘人: 服薬アドヒアランス. *精神保健研究*(60): 49-54, 2014.
- 7) 山之内芳雄: うつ病のスクリーニング. *看護技術*(60): 18-20, 2014.

- 8) 堀口寿広：臨床心理士，臨床発達心理士，学校心理士，特別教育支援士，スクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカーなどは，どんな資格で，どのような仕事をしているのですか．小児内科 45 (8) : 1468-1473, 2013.
- 9) 堀口寿広：子どものために SC はいかに他の役割の人々と連携すべきか—医療機関の立場から—．教育と医学 62(2) : 110-118, 2014.

(3) 著書

- 1) 伊藤弘人，樋口輝彦：身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発ナショナルプロジェクト．Depression Frontier. 医薬ジャーナル社，大阪，pp53-58, 2013.
- 2) 伊藤弘人：精神科医療の課題克服への取り組みと将来像．糸川昌成 編：メンタル医療—原因解明と診断，治療の最前線—．シーエムシー出版，東京，pp11-17, 2013.
- 3) 伊藤弘人：精神科医療と国民経済．精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年度．中央法規出版，東京，p158, 2013.
- 4) 伊藤弘人：身体疾患とうつ病．功刀 浩 編：うつ病—治療・研究の最前線．医歯薬出版株式会社，東京，pp87-91, 2014.
- 5) 山之内芳雄，堀口寿広，伊藤弘人：医療計画（精神疾患）の策定状況．精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年度．中央法規出版，東京，p21, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 伊藤弘人：身体疾患を合併する精神疾患患者の診療の質の向上に資する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））平成 25 年度総括・分担研究報告書，2014.
- 2) 伊藤弘人：精神科救急における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）平成 25 年度総括・分担研究報告書，2014.
- 3) 伊藤弘人：精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費（主任研究者：伊藤弘人）平成 23-25 年度総括研究報告書，2014.
- 4) 伊藤弘人：こころの健康・休養に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）「健康日本 21（第二次）の推進に関する研究（研究代表者：辻 一郎）」平成 25 年度総括・分担研究報告書．pp51-55, 2014.
- 5) 伊藤弘人：精神医療の評価に資する標準的な指標の開発に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究（研究代表者：河原和夫）」平成 25 年度総括分担研究報告書．pp17-24, 2014.
- 6) 山之内芳雄：GP 連携体制および医療連携モデルの構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究（研究代表者：河原和夫）」平成 25 年度総括・分担研究報告書．pp93-109, 2014.
- 7) 堀口寿広：障害者への虐待と差別を解消する社会体制の構築に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））．平成 25 年度総括研究報告書，2014.
- 8) 堀口寿広：重症入院患者のクリニカルパスと地域連携に関する研究．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究（研究代表者：安西信雄）」平成 25 年度総括・分担研究報告書．pp137-170, 2014.
- 9) 堀口寿広：「共生社会」を目指した地域づくり—虐待防止の取り組みを素材にした意見交換会—．厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））．開催資料集，2014.

- 10) 佐藤真希子：精神科救急における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神科救急医療における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」平成25年度総括・分担研究報告書。pp145-151, 2014.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) Yokoyama K, Iijima S, Ito H, Kan M: The socio-economic impact of occupational diseases and injuries. *Industrial Health* 51(5): 459-461, 2013.
- 2) 伊藤弘人：精神疾患地域連携クリティカルパス。日本社会精神医学会雑誌 22(2)：106-108, 2013.
- 3) 伊藤弘人：統合失調症を取り巻く現状と課題。 *Progress in Medicine* 33(11):2289-2292, 2013.
- 4) 伊藤弘人, 野田 広, 樋口輝彦：こころの健康・休養分野に新たに盛り込まれた観点。健康づくり 424：11, 2013.
- 5) 伊藤弘人, 小川朝生：第10回日本うつ病学会総会シンポジウム1「身体疾患領域で求められる精神科医療：ナショナルプロジェクトから」。日本サイコオンコロジー学会ニューズレター 74：9-10, 2013.
- 6) 池野 敬, 奥村泰之, 久木山清貴, 伊藤弘人：抗精神病薬の心臓関連有害事象に関する報告の分析—医薬品医療機器総合機構 医薬品副作用データベース (JADER) —。日本神経精神薬理学雑誌 33：179-182, 2013.
- 7) 野田寿恵, 杉山直也, 三宅美智, 末安民生, 伊藤弘人：行動制限の国際比較—日本フィンランド精神科急性期医療における隔離・身体拘束研究から—。精神科治療学 28(10)：1265-1271, 2013.
- 8) 山之内芳雄, 金森恭子：県の施策と連動した自殺対策（愛知県知多・瀬戸地域）。看護技術 60：61-64, 2014.
- 9) 山之内芳雄：Medical experts seek to dial over-prescription for schizophrenia. *The Japan Times NEWS*, 2013.10.11.
- 10) 山之内芳雄：統合失調症，減薬の動き 7→1種類，効き目見極めながら。朝日新聞，2013.10.29.
- 11) 山之内芳雄：抗精神病薬 減薬指針・・・多剤大量処方の改善急務。読売新聞，2013.11.36.
- 12) 山之内芳雄：薬減らして統合失調症を治療へ 副作用のリスク抑え患者と信頼関係作り，主体的治療を支援。日本経済新聞，2013.12.6.
- 13) 山之内芳雄：統合失調症 抗精神病薬の最適処方を目指して。クレデンシャル，2013.12.15.
- 14) 山之内芳雄：統合失調症の処方をシンプルに 入院主体から社会復帰を支える精神医療へ。日経メディカル，2014.3.1.
- 15) 山之内芳雄：薬を減らすガイドラインへの期待—抗精神病薬の減薬ガイドライン・インタビュー。月刊みんなねっと，2014.3.1.
- 16) 山之内芳雄：抗精神病薬の減量支援シートを開発。日刊薬事，2014.3.1.
- 17) 山之内芳雄：統合失調症の薬を安全に減らす 国立精神センターが指針「多剤大量処方」改善へ 確実な普及が課題。熊本日日新聞，2014.3.7.
- 18) 堀口寿広：第13回発達性ディスレクシア研究会。臨床精神医学 42(11)：1437-1438, 2013.
- 19) 堀口寿広, 高梨憲司, 佐藤彰一：医療の提供を業務とする独立行政法人および地方独立行政法人における障害者虐待および障害者差別に係る取り組み状況についての調査 研究報告書—医療機関における合理的配慮—, 2014.

- 20) 佐藤真希子：米国の隔離・身体拘束最小化方策=「コア戦略」とは 第2回セイフティプラン。精神看護 17(2)：65-67, 2014.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

- 1) 伊藤弘人：身体疾患領域で求められる精神科医療：ナショナルプロジェクトから。第10回日本うつ病学会総会，福岡，2013.7.19.
- 2) 伊藤弘人：地域に根差した信州モデル。第32回日本認知症学会学術集会，長野，2013.11.10.
- 3) 伊藤弘人：認知症医療地域連携クリティカルパスと地域包括ケア。第3回アジア慢性期医療学会，東京，2013.11.14.
- 4) 伊藤弘人：退院支援とクリニカルパスの医療経済的効果。第2回日本精神科医学会学術大会，埼玉，2013.11.15.
- 5) 野田寿恵：「精神科救急における利用者参加型医療の実践～患者の健康的側面を活かす医療とは～」利用者視点についての動向・研究。平成25年度日本精神科救急学会教育研修会，福岡，2013.6.15.
- 6) 野田寿恵：「精神科強制医療介入のあり方：急性期精神科医療における行動制限の最小化について」データでみる行動制限と海外の動向。第21回日本精神科救急学会学術集会，東京，2013.10.5.

(2) 一般演題

- 1) 伊藤弘人：高齢者医療とうつ：ナショナルセンターの共同プロジェクト。第28回日本老年学会総会・第55回日本老年医学会学術集会，大阪，2013.6.6.
- 2) 伊藤弘人：身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト概要。第10回日本うつ病学会総会，福岡，2013.7.19.
- 3) 池野 敬，伊藤弘人：情報通信技術（ICT）を活用した新たな服薬支援システムの開発計画—身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト—。第51回日本医療・病院管理学会学術総会，京都，2013.9.28.
- 4) 大森由実，山之内芳雄，伊藤弘人：ICTを活用した新たな地域連携支援システムの開発～身体疾患患者へのメンタルケアモデル開発に関するナショナルプロジェクト～。第53回全国国保地域医療学会，島根，2013.10.4-5.
- 5) 佐藤真希子：米国における行動制限最小化のための取り組み～利用者中心の治療環境の整備～。日本精神保健看護学会，京都，2013.6.16.

(3) 研究報告会

- 1) 伊藤弘人，野田寿恵：行動制限最小化介入研究 ソフトアウトカム分析。厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神科救急医療における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究（研究代表者：伊藤弘人）」平成25年度報告会，東京，2013.12.16.
- 2) 野田寿恵：（特別企画）「行動制限最小化に関する研究」報告会 ソフトアウトカムの紹介。第20回日本精神科看護学術集会専門I，群馬，2013.8.31.
- 3) 佐藤真希子：導入施設からの施行量状況。国立精神・神経医療研究センター（NCNP）共同研究プロジェクト eCODO 全国会議，東京，2013.6.12.
- 4) 佐藤真希子：行動制限最小化のための介入研究。第7回精神科医療評価・均てん化研修，東京，2013.6.13.
- 5) 佐藤真希子：介入研究の概要。第20回日本精神科看護学術集会専門I，群馬，2013.8.31.

- 6) 佐藤真希子：スタッフによる攻撃性観察尺度（SOAS-R）を用いた攻撃的行動の性質および重症度に関する検討。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 25 年度研究報告会，東京，2014.3.10.

(4) その他

- 1) 堀口寿広：共生社会をめざした地域づくりに必要なこと。シンポジウム「共生社会」を目指した地域づくり—虐待防止の取り組みを素材にした意見交換会—，千葉，2013.11.23.

C. 講演

- 1) 伊藤弘人：日本のメンタルヘルスケア今後の方向性と課題。日本医療政策機構 第 22 回 特別朝食会，2013.7.25.
- 2) 伊藤弘人：医療政策から見た精神保健医療福祉の展望。平成 25 年度 NSS（日精診版社会生活支援）サービス研究「全国研修会」，東京，2013.12.1.
- 3) 伊藤弘人：今後の介護保険制度改訂のポイントと地域連携の在り方。地域で支える認知症フォーラム in あらお，熊本，2014.2.9.
- 4) 山之内芳雄：精神疾患の医療計画～自治体，保健所への期待～。名古屋市保健所長会研修会，愛知，2013.8.27.
- 5) 山之内芳雄：精神疾患の病態特性と最新の治療法。精神疾患と看護—こころの障害と向き合うアプローチ，愛知，2013.9.18.
- 6) 山之内芳雄：自殺ハイリスク者を支えるための地域連携～関係機関にどうつなぐ？～。平成 25 年度ゲートキーパーフォローアップ研修，愛知，2013.10.17，2013.11.15，2014.2.13.
- 7) 山之内芳雄：自殺未遂（ハイリスク）者支援対策～相談を点から面に，網に～。平成 25 年度相談窓口ネットワーク会議，愛知，2013.11.1.
- 8) 山之内芳雄：行政系研究の立場から～医療計画・地域連携～。精神科医療連携を考える会。愛知，2013.11.28.
- 9) 山之内芳雄：自殺未遂者支援の取り組みへの第一歩に向けて。平成 25 年度自殺対策人材育成研修及び相談窓口ネットワーク会議，愛知，2013.11.29.
- 10) 山之内芳雄：自殺未遂者等の事例検討について。平成 25 年度うつ自殺対策研修会，愛知，2014.1.16.
- 11) 山之内芳雄：救急病院に搬送された自殺未遂者への支援について。平成 25 年度第 2 回自殺未遂者対応研修，愛知，2014.2.14.
- 12) 山之内芳雄：愛知県をモデルとした精神科・一般科連携の取り組みと問題点。精神科医療地域連携事業，東京，2014.2.20.
- 13) 山之内芳雄：自殺未遂者支援地域連携モデルマニュアルについて。自殺未遂者支援地域連携の進め方説明会，愛知，2014.2.25.
- 14) 山之内芳雄：自殺未遂者の地域支援ネットワークについて。平成 25 年度うつ自殺対策研修会，愛知，2014.2.28.
- 15) 山之内芳雄：身体疾患とうつのこれまでの知見。糖尿病とうつ～メンタルケアモデル開発ナショナルプロジェクト～，東京，2014.3.26.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 伊藤弘人：一般社団法人 日本社会精神医学会理事

- 2) 伊藤弘人：一般社団法人 日本・病院管理学会理事

(3) 座長

- 1) 伊藤弘人：なぜ心臓病とうつ病は関係しているのか？一手がかりを探る－. 第 61 回日本心臓病学会, 熊本, 2013.9.22.
- 2) 伊藤弘人：「循環器疾患患者へのメンタルケア」ジョイントシンポジウム座長, 第 70 回日本循環器心身医学会総会, 2013.11.23.
- 3) 伊藤弘人：「心臓病患者の不安や抑うつ. 国立高度専門医療センターの共同プロジェクトの観点から。」座長, 第 78 回日本循環器学会, 2014.3.20.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 堀口寿広：チャイルド・ヘルス 編集協力員.
- 2) 堀口寿広：日本福祉のまちづくり学会誌 査読者.

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 伊藤弘人：平成 25 年度国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所第 7 回精神科医療評価・均てん化研修, 東京, 2013.6.13-14.
- 2) 伊藤弘人, 山之内芳雄：包括的なうつ管理のための研修プログラム. ステップアップ編平成 25 年度第 1 回研修, 東京, 2013.10.18.
- 3) 伊藤弘人, 山之内芳雄：包括的なうつ管理のための研修プログラム. ステップアップ編平成 25 年度第 2 回研修, 東京, 2014.2.7.
- 4) 野田寿恵：クロザリルの動向, 沼津中央病院の使用経験. 公益財団法人沼津中央病院 研修会, 静岡, 2013.7.11.
- 5) 野田寿恵：海外の行動制限の現状. 平成 25 年度 行動制限最小化看護研修会Ⅱ, 東京, 2013.9.9.

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 伊藤弘人：「平成 24 年度診療報酬改定結果検証に係る調査（平成 25 年度調査）慢性期精神入院医療や地域の精神医療, 若年認知症を含む認知症に係る医療の状況調査」調査検討委員会委員
- 2) 伊藤弘人：精神障害者に対する医療の提供を確保するための指針等に関する検討会 構成員
- 3) 伊藤弘人：日本医療機能評価機構 調査委員

9. 精神生理研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

精神生理研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、認知症、神経症・心身症などの病態と治療法を解明することを目的としている。そのために、精神生理学、時間生物学、分子生物学、神経内分泌学、脳機能画像技術などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長1名、室長2名に加え、流動研究員2名、科研費研究員5名、協力研究員5名が研究に携わった。これら研究員と国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究者の構成

部長：三島和夫。精神機能研究室長：肥田昌子。臨床病態研究室長：守口善也，流動研究員：中崎恭子，Jakub Spaeti。科研費研究員：北村真吾，大場健太郎，金山裕介，勝沼り，綾部直子。協力研究員：阿部又一郎，梶達彦，古田光，草薙宏明，田村美由紀。併任研究員：亀井雄一（センター病院）。客員研究員：樋口重和（九州大学），井上雄一（神経研究所附属睡眠学センター），内山真（日本大学），兼板佳孝（大分大学），遠藤拓郎（スリープクリニック調布），大川匡子（滋賀医科大学），松浦雅人（東京医科歯科大学），海老澤尚（東京警察病院），本多真（東京都医学研究所），上田泰己（理化学研究所），池田正明（埼玉医科大学），程肇（金沢大学），山寺亘（東京慈恵会医科大学），渡辺範雄（名古屋市立大学），熊野宏明（早稲田大学），岩越美恵（神戸常磐大学），永島計（早稲田大学），石郷岡純（東京女子医科大学），高橋一志（東京女子医科大学），阿部高志（宇宙航空研究開発機構），そのほか研究生14名。

II. 研究活動

精神生理研究部では、厚生労働科学研究費、文部科学省科学研究費等の公的研究費を中心とした競争的研究資金をもとに、下記のような研究に取り組んでいる。研究課題は睡眠覚醒障害、気分障害、生体リズム障害の病態生理に関する基盤的研究から、精神疾患に関わる情動・認知障害のメカニズムの脳科学的解明研究とその臨床応用、臨床疫学等をもとにした医療行政研究、新規診断法・新規治療法の開発と医療現場への展開をめざしたトランスレーショナル研究まで幅広い分野にわたり、国立精神・神経医療研究センター内外の共同研究者との連携のもとに長期的展望をもって進めている。研究成果を国内、国際学会に発表し、刊行物として発刊した。以下に主たる研究課題を列記する。

1. 体とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究(脳科学研究戦略推進プログラム・課題E)

生体試料を利用した生物時計機能評価システム(末梢時計診断システム)を睡眠障害患者群へ応用し、その精度向上と臨床応用に取り組んだ。睡眠不足の生体への影響とその効果的な解消の確立を目的として、2日間の8時間睡眠(基準日)、9日間の12時間睡眠(睡眠延長)、1晩の全断眠で構成される充足睡眠シミュレート実験を実施し、一般生活条件下において若年健康成人は潜在的な睡眠負債を抱えていることを明らかにした。睡眠時間の長さや総カロリー摂取量とは独立して通常就寝時刻に近い夜間時間帯にカロリー、特に脂質を摂取することが肥満リスクを増大させると示唆された。(研究分担者：三島和夫)

2. 睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究(精神・神経疾患研究開発費)
睡眠障害の診断・治療・病態生理研究のための信頼性の高いフェノタイピングを可能にする症状評価フォーマットと解析システムを作成し、得られた臨床情報と生体試料を連結可能匿名化

の上で研究リソースとして活用するためのデータバンクシステムを同一プラットフォーム上に構築した。本プラットフォームを活用して、概日リズム睡眠障害などを対象に生体リズム異常の診断法開発、治療最適化、疾患感受性遺伝子検索などの睡眠医療・病態生理研究を多施設共同で推進した。（主任研究者：三島和夫、分担研究者：肥田昌子）

3. 就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））（研究分担者：三島和夫）
地域在住の就学前幼児をもつ保護者を対象として、睡眠習慣調査および睡眠障害スクリーニング調査を就学前後で実施し、同年齢帯における睡眠問題の実態を把握する事業を開始した。就学前幼児期における PDD 児の睡眠障害の特徴を抽出し、縦断追跡が可能な対象児については経年的に発達データを採取し、PDD の臨床経過における睡眠障害の出現時期、障害特性について分析を進めた。
4. 向精神薬の処方実態に関する研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））
大規模診療報酬データから、日本国内における向精神薬の処方実態を明らかにした。安全性に優れた治療ストラテジーや長期処方を回避するための減薬方法を含め、適正使用に関するガイドラインを整備する必要性を示した。（研究分担者：三島和夫）
5. 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））（研究分担者：三島和夫）
災害後に生じる不眠症、気分障害、PTSD 等に共通した病態として、生理的過覚醒（Hyperarousal）の存在が想定される。本研究は、Hyperarousal Scale（Regestein Q et al., 1993, 以下、HAS とする）日本語版を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行った。日本語版作成にあたっては、原著者の許諾を得た上で原版を翻訳し、バイリンガルによるバックトランスレーションを行った。そして、バックトランスレーションを行ったものと原版との比較を原著者に依頼し、等価性についての確認を得た。また、地域住民を対象とした調査で HAS 日本語版は高い信頼性と構成概念妥当性を有していることが確認され、うつ病、不眠症、PTSD の罹患脆弱性のスクリーニング尺度として有用であることが示唆された。
6. 健康日本 21（第 2 次）に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究（厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業））（研究分担者：三島和夫）
本研究では食習慣と睡眠の健康との関連を調査するために、既存のエビデンスを系統的にレビューした。食習慣と睡眠に関連する検索キーワードを用いたところ、985 本の論文がヒットした。一次レビューとして、①食習慣（栄養素、食事量、食事時刻）、②睡眠習慣（睡眠時間、時刻、障害）、③肥満（生活習慣病）が、目的（メインアウトカム、従属変数）もしくは説明要因（介入因子、独立変数、交絡要因）として投入されている研究 138 本を採択した。二次レビューとして、食習慣が睡眠習慣に及ぼす影響（もしくはその逆）に関するエビデンスを知るため、独立／従属変数として {食習慣／睡眠習慣} もしくは {睡眠習慣／食習慣} が設定されている 93 本の論文を抽出した。これらの研究結果から、以下のエビデンスが抽出された。
1. 夜食や朝食欠食が睡眠や眠気に影響を及ぼすことを示唆する小規模の介入研究、横断研究がある。行政施策に反映できるほど十分なエビデンスには至っていない。【推奨レベル C1, Minds】
2. 睡眠状態（主として短時間睡眠）が食行動に影響を与えることを示唆する介入研究、コホート研究、横断研究がある。十分な睡眠時間を保つことが食行動、ひいては肥満・生活習慣病の予防や悪化防止に有用であることを支持する十分なエビデンスがある。
7. 臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究（厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業））（研究分担者：三島和夫）
不眠症の QOL 尺度（QOLI）を作成し、その信頼性、妥当性の検討を行うことを目的とした多施設共同研究を行った。複数の医療施設に通院する原発性不眠症患者 122 名（平均年齢 53.8

±17.1 歳)を対象に QOL, 気分, 睡眠状態を評価する全 16 種類の質問紙調査を行い, 日中の支障度 (SDISS) に関連する 11 項目の QOL 項目を抽出し, 不眠症の QOL 尺度 (QOLI) を作成した. 一般地域住民 262 名 (平均年齢 38.8±10.5 歳) を対象として, 作成した QOLI とその他の調査項目との関連について調査を行ったところ, 一般地域住民においても, 不眠傾向が重症であるほど QOLI が低いことが示された.

8. 生物時計の障害特性に基づく概日リズム睡眠障害の治療最適化とその効果検証(文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B)) (研究代表者: 三島和夫, 研究分担者: 北村真吾)
難治性で慢性経過を辿りやすい概日リズム睡眠障害(circadian rhythm sleep disorder; CRSD)の高精度診断と治療最適化のため, 睡眠リズム調整の二大因子である生物時計の「リズム周期」と「リズム位相」の迅速診断法を確立し, 概日リズム睡眠障害患者の生物時計機能の障害特性を明らかにする. 患者の生物リズム周期は皮膚繊維芽細胞/毛包細胞内の時計遺伝子転写リズムのリアルタイム測定によって, リズム位相は血漿中振動物質群の包括的メタボローム解析によって決定し, シミュレーション試験および患者調査により精度確認を行う. これら 2 つの *in vitro* 診断システムを用いて, 患者固有のリズム障害特性をもとに高照度光及びメラトニン(受容体作動薬)の照射・投薬時刻を最適化したテーラーメイド時間療法プログラムを作成し, その有効性試験を行う. 上記の課題を推進した.
9. アレキシサイミアにおける, 自己意識・メタ認知に関する統合的脳機能画像研究(文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B))
アレキシサイミア(失感情症)において, 自己意識の障害を抽出する課題を開発した. 自己一貫性に関する課題として, ゴムの手の錯覚課題を MRI 中に行うための器具・システムを開発し, 脳活動を fMRI で測定可能な状態にした. データからは, ゴムの手の錯覚が, トップダウンの予期不安によって修飾される様子が明らかになり, 統合失調症などの幻覚の生成機序を明らかにする一端になるものと思われる. (研究代表者: 守口善也)
10. 発達性「読み」障害に関する臨床的, 計算論的, 脳機能研究(文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B))
機能的 MRI (fMRI) を用いて, 漢字黙読課題中の脳賦活部位を fMRI で検討した. 結果, 漢字を構成するの各構成要素によって紡錘状回の活動が部位内で階層的に構築される様子を機能画像でとらえることに成功し, さらにその階層性が, 前頭葉との機能的連関によって構築されていることを突き止めた. 読み書き障害における脳病態を明らかにするための基礎的知見が得られた. (研究分担者: 守口善也)
11. ストレス関連疾患に対する統合医療の有用性と科学的根拠の確立に関する研究(厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業))
機能的 MRI (fMRI) を用いて, 自己の身体に注意を向ける自律訓練法の際の脳活動と心電図を同時に測定するためのシステムを開発した. さらに, 内受容感覚の気づきに必要な島皮質の活動と, 副交感神経活動を司る腹内側帯状皮質の脳活動の機能的連関(functional connectivity)が扁桃体の活動のコントロールに関連することをしめし, 自律訓練法が持つ治療的機序を明らかにした. (研究分担者: 守口善也)
12. 心・脳・身体からみた不安の認知神経機構の解明: 心理学・精神医学・心身医学の融合(文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (B))
機能的 MRI (fMRI) を用いて, 感情の生成に重要な役割を果たしている「内受容感覚」に注目している際の脳活動が, 個人特性としての社会不安などに関わり, さらにこの内受容感覚への注意の際の島皮質の活動が, アレキシサイミア(失感情症)と関連することも示された. さらに, 従来のアレキシサイミアの研究のメタ解析により, こうした内受容感覚をはじめとする「感覚運動レベル」の処理の障害が, アレキシサイミアを形作る重要な要素であることが分かり, 心身症などの病態解明に寄与すると考えられた. (研究分担者: 守口善也)

13. 精神疾患の鑑別診断および転帰の予測における近赤外線スペクトロスコピー（NIRS）の有用性に関する研究（精神・神経疾患研究開発費）（分担研究者：守口善也）
精神科疾患の鑑別に臨床応用される近赤外線スペクトロスコピー（NIRS）の妥当性の検討を行った。機能的磁気共鳴画像（fMRI）と同時測定することによって、脳血流・皮膚血流を同時に測定し、ボクセル毎の多変量解析を用いて、NIRS データを fMRI により高精度で予測するフィッティングモデルを構築することに成功した。その結果、チャンネル毎に大きく皮膚血流・皮質血流が NIRS データに寄与する割合が異なることを明らかにし、今後の NIRS データの解釈に重要な基礎データを得ることができた。
14. 温熱的快適性の形成メカニズムの解析と衣服内環境評価への応用（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B））（研究分担者：守口善也）
15. 心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究（精神・神経疾患研究開発費）（分担研究者：守口善也）
16. 睡眠障害における生体リズム異常の分子メカニズム（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C））
概日リズム睡眠障害は睡眠覚醒リズム異常を主徴とし、気分障害を併発する。そこで、概日リズム睡眠障害を対象として、生物時計と気分調節の両システムに関わるメカニズムを検証する。生体試料由来初代培養細胞に概日リポーター遺伝子を導入し、その培養細胞中の時計遺伝子発現リズム（末梢時計リズム）を測定する *in vitro* 評価法を用いて被験者個人の生物時計機能を評価した結果、概日リズム睡眠障害のサブタイプにより末梢時計リズムの特性が異なることが明らかとなった。（研究代表者：肥田昌子）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。また、東京医科歯科大学、早稲田大学、筑波大学、秋田大学など教育機関の非常勤講師として学生教育の援助を行った。また、日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。国際老年精神医学会、米国睡眠学会、ヨーロッパ睡眠学会、国際時間生物学会等、米国心身医学会、等において講演者、シンポジスト、オーガナイザーとして研究成果を発表し、各国の第一線の研究者達と意見交換を行った。

3) 精研の研修の主催と協力

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

三島和夫は、国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員として、同調査の項目策定と調査実行に関わった。厚労省薬事・食品衛生審議会において専門協議委員、参考人として複数の新薬の審査にたずさわった。JAXA 国際宇宙ステーション「きぼう」利用推進委員会宇宙医学シナリオ WG 委員として宇宙医学研究の指針策定にたずさわった。

5) センター内における臨床的活動

6) その他

研究員は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来を開設し、専門的診療を行った。複数の新規睡眠薬の臨床治験に関わった。複数の企業から要請された治療薬剤および診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Hida A, Kitamura S, Ohsawa Y, Enomoto M, Katayose Y, Motomura Y, Moriguchi Y, Nozaki K, Watanabe M, Aritake S, Higuchi S, Kato M, Kamei Y, Yamazaki S, Goto Y, Ikeda M, Mishima K: In vitro circadian period is associated with circadian/sleep preference. *Sci Rep* 3(2074): 1-7, 2013.
- 2) Hakamata Y, Izawa S, Sato E, Komi S, Murayama N, Moriguchi Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Higher cortisol levels at diurnal trough predict greater attentional bias towards threat in healthy young adults. *J Affect Disord* 151(2): 775-779, 2013.
- 3) Higuchi S, Hida A, Tsujimura S, Mishima K, Yasukouchi A, Lee SI, Kinjyo Y, Miyahira M: Melanopsin gene polymorphism I394T is associated with pupillary light responses in a dose-dependent manner. *PLoS One* 8(3): e60310, 2013.
- 4) Kita Y, Yamamoto H, Oba K, Terasawa Y, Moriguchi Y, Uchiyama H, Seki A, Koeda T, Inagaki M: Altered brain activity for phonological manipulation in dyslexic Japanese children. *Brain* 136(Pt 12): 3696-3708, 2013.
- 5) Lee SI, Hida A, Tsujimura SI, Morita T, Mishima K, Higuchi S: Association between melanopsin gene polymorphism (I394T) and pupillary light reflex is dependent on light wavelength. *J Physiol Anthropol* 32(1): 16, 2013.
- 6) Motomura Y, Kitamura S, Oba K, Terasawa Y, Enomoto M, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K: Sleep debt elicits negative emotional reaction through diminished amygdala-anterior cingulate functional connectivity. *PLoS One* 8(2): e56578, 2013.
- 7) Ohtsu T, Kaneita Y, Aritake S, Mishima K, Uchiyama M, Akashiba T, Uchimura N, Nakaji S, Munezawa T, Kokaze A, Ohida T: A cross-sectional study of the association between working hours and sleep duration among the Japanese working population. *J Occup Health* 55(4): 307-311, 2013.
- 8) 清水邦義, 深川未央, 松原恵理, 松本 清, 山本 篤, 石川洋哉, 北村真吾, 梶 ちか子, 畑山知子, 永野 純, 岡本 剛, 大貫宏一郎: ベチバー根の揮発成分のビジランズ低下抑制効果. *アロマリサーチ* 14(4): 66-75, 2013.
- 9) 鈴木みのり, 田代恭子, 綾部直子, 橋本 塁, 嶋田洋徳: 歯科衛生士の転職・離職行動とストレスコーピングおよび精神的健康との関連. *早稲田大学臨床心理学研究* 13(1): 87-98, 2014. .

(2) 総説

- 1) 三島和夫:【不眠症治療を考える】総論 不眠症治療の今日的課題. *クリニシアン* 60(6): 498-504, 2013.
- 2) 三島和夫:【Depressionの神経学】 睡眠とdepression. *神経内科* 79(1): 92-99, 2013.
- 3) 三島和夫: 認知症の生体リズム異常と睡眠障害. *睡眠医療* 7(3): 325-330, 2013.
- 4) 三島和夫: 睡眠覚醒調節の液性機構 メラトニン. *日本臨床増刊号 最新臨床睡眠学*: 101-119, 2013.
- 5) 三島和夫: 概日リズム睡眠障害—不規則睡眠・覚醒型(不規則睡眠・覚醒リズム)—. *日本臨*

牀増刊号 最新臨床睡眠学：405-411, 2013.

- 6) 三島和夫：認知症で見られる睡眠障害. *Aging&Health* 22(3)：22-24, 2013.
- 7) 三島和夫：Ⅱ. 概日リズムと疾患 睡眠障害. *日本臨床* 71(12)：2103-2108, 2013.
- 8) 三島和夫：睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン. *睡眠医療* 7(4)：514-520, 2013. .
- 9) 三島和夫：加齢による睡眠や生体リズムの変化. *老年医学* 51(11)：1131-1136, 2013.
- 10) 三島和夫：特集：職域における睡眠衛生活動 睡眠と産業精神保健の関わり. *産業精神保健* 22(1)：2-7, 2014.
- 11) 三島和夫：睡眠薬処方現状と今後の適切な使用のあり方. *ねむりと医療* 7(1)：28-32, 2014.
- 12) 三島和夫：睡眠障害. *老年精神医学雑誌* 25 (増刊号-I)：103-110, 2014.
- 13) 三島和夫：睡眠薬の適正な使用と減薬・休薬のための診療ガイドライン. *精神保健研究* 60：55-62, 2014.
- 14) 守口善也, 村上裕樹, 勝沼るり, 寺澤悠理, 大場健太郎, 金山裕介, 三島和夫, 松田博史, 岡孝和：身体感覚への気づきに関わる神経基盤の研究. *心身医学* 53(6)：552, 2013.
- 15) 守口善也：社会神経科学と心身医学. *心身医学* 53(7)：696-697, 2013.
- 16) 肥田昌子, 三島和夫：【体内時計とアンチエイジング】体内時計機能の評価法. *アンチ・エイジング医学* 9(2)：184-190, 2013.
- 17) 肥田昌子, 三島和夫：生物の体内時計に関する最新知見. *ねむりと医療* 6(1)：30-32, 2013.
- 18) 肥田昌子, 三島和夫：睡眠のメカニズムとアレルギー. *Progress in Medicine* 33(12)：2567-2571, 2013.
- 19) 北村真吾, 三島和夫：宇宙環境における睡眠・生体リズム調節とその障害. *神経内科* 79(3)：377-383, 2013.
- 20) 北村真吾, 三島和夫：ブルーライト—体内時計—睡眠障害の関連. *あたらしい眼科* 31(2)：205-212, 2014.
- 21) 元村祐貴, 三島和夫：特集 日常生活の脳科学 睡眠と情動—情動調節における睡眠の役割. *BRAIN and NERVE* 66(1)：15-23, 2014.
- 22) 片寄泰子, 兼板佳孝, 野崎健太郎, 井上雄一, 内村直尚, 山寺 亘, 渡辺範雄, 本多 真, 北村真吾, 肥田昌子, 守口善也, 岡島 義, 中島 俊, 三島和夫：東日本大震災による不眠症頻度およびメンタルヘルスへの影響. *不眠研究* 2013：23-24, 2013.
- 23) 阿部又一郎, Kernier Nathalie, 北村真吾, 遠藤拓郎：不眠 insomnia 概念の多面性 その包括的診療に向けた諸視点. *最新精神医学* 19(1)：63-71, 2014.

(3) 著書

- 1) 三島和夫, 川端裕人：8時間睡眠のウソ。日本人の眠り、8つの新常識. 篠原 匡, 齊藤海仁 編：8時間睡眠のウソ。日本人の眠り、8つの新常識. *日経 BP 社*, 東京, pp1-229, 2014.
- 2) 三島和夫：睡眠薬の適正使用・休薬ガイドライン. 三島和夫 編：睡眠薬の適正使用・休薬ガイドライン. *じほう*, 東京, pp1-200, 2014.
- 3) 北村真吾, 亀井雄一：内的脱同調とは？. 松浦雅人 編：睡眠とその障害のクリニカルクエスチョン 200. *診断と治療社*, 東京, pp179-180, 2013.
- 4) 北村真吾, 亀井雄一：朝型や夜型の体質は変えられる？. 松浦雅人 編：睡眠とその障害のクリニカルクエスチョン 200. *診断と治療社*, 東京, pp180-182, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 三島和夫：睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究. *国立神経・精神医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に*

- 関する研究」平成 23-25 年度 総括研究報告書 分担報告書. pp1-5, 2014.
- 2) 肥田昌子: 同プラットフォームを用いた生体試料を利用した睡眠障害診断システムの検証. 国立神経・精神医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究」平成 23-25 年度 総括研究報告書 分担報告書. pp27-30, 2014.
 - 3) 高橋正也, 元村祐貴, 北村真吾, 綾部直子, 中崎恭子, 片寄泰子, 肥田昌子, 三島和夫: 睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームで活用する交代勤務適応性指標の探索. 国立神経・精神医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究」平成 23-25 年度 総括研究報告書 分担報告書. pp31-33, 2014.
 - 4) 小保内俊雅, 中井昭夫, 川俣智路, 深津玲子, 藤野 博, 三島和夫: 就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究(研究代表者: 神尾陽子)」平成 23-25 年度 総合研究報告書. pp1-10, 2014.
 - 5) 三島和夫, 北村真吾, 神尾陽子, 飯田悠佳子: 発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達的变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究(研究代表者: 神尾陽子)」平成 25 年度 総括・分担研究報告書. pp91-105, 2014.
 - 6) 三島和夫, 綾部直子, 北村真吾: Hyperarousal Scale 日本語版の開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」平成 25 年度 総括・分担研究報告書. pp145-156, 2014.
 - 7) 三島和夫, 北村真吾: 大規模診療報酬データを用いた向精神薬の処方実態に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「向精神薬の処方実態に関する研究」平成 25 年度 総合研究報告書. pp7-14, 2014.
 - 8) 三島和夫, 綾部直子, 亀井雄一, 野崎健太郎: 不眠症の QOL 尺度 (QOLI) の開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究」平成 25 年度 研究報告書. pp6-18, 2014.
 - 9) 守口善也, 村上裕樹, 勝沼るり, 寺澤悠理, 大場健太郎, 元村祐貴, 金山裕介, 三島和夫, 松田博史: 身体への注目、およびメタ認知の脳機能に及ぼす影響: 脳機能画像を用いた研究. 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「ストレス関連患者に対する統合医療の有用性と科学的根拠の確立に関する研究」平成 24-25 年度 総合研究報告書. pp48-65, 2014.
 - 10) 守口善也, 村上裕樹, 勝沼るり, 寺澤悠理, 大場健太郎, 元村祐貴, 金山裕介, 三島和夫, 松田博史: 身体への注目、およびメタ認知の脳機能に及ぼす影響: 脳機能画像を用いた研究. 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「ストレス関連患者に対する統合医療の有用性と科学的根拠の確立に関する研究」平成 25 年度 総括・分担研究報告書. pp27-38, 2014.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 三島和夫: 今夜から眠りたい. AERA, pp33-37, 2013.4.1.
- 2) 三島和夫: 100 万匹の羊たち 睡眠障害の治療(その 1). こころの元気+ 7(4):46-47, 2013.5.15.
- 3) 三島和夫: 防犯と防災のショールーム. プレジデントファミリー, pp68-69, 2013.5.18.

- 4) 三島和夫：睡眠薬適正使用と休薬にガイドライン活用を—NCNP と睡眠学会 WG が策定。yahoo!ニュース（医療介護 CB ニュース），2013.6.13.
- 5) 三島和夫：“眠れない”睡眠薬の依存に注意。NHK News Web，2013.6.13.
- 6) 三島和夫：睡眠薬の正しい服用について初のガイドラインまとまる。NHK ラジオ第一 NHK ジャーナル，2013.6.13.
- 7) 三島和夫：睡眠薬適正使用と休薬にガイドライン活用を。医療介護 CBnews，2013.6.13.
- 8) 三島和夫：睡眠薬の上手な使い方。朝日新聞，2013.6.14.
- 9) 三島和夫：睡眠薬の上手な使い方 40 項目の指針公表。朝日新聞デジタル，2013.6.14.
- 10) 三島和夫：睡眠薬、上手な使い方は？ 厚労省研究班などが指針。朝日新聞デジタル，2013.6.14.
- 11) 三島和夫：100 万匹の羊たち 睡眠障害の治療(その 2)。こころの元気+ 7(6):44-45, 2013.6.15.
- 12) 三島和夫：睡眠薬 適正使用に指針 厚労省研究班 生活習慣指導など。読売新聞夕刊，2013.6.15.
- 13) 三島和夫：大人の 10%が不眠、睡眠薬の適正使用に向け指針発表。メディカルトリビューン，2013.6.17.
- 14) 三島和夫：生きる力はおひさまリズムから。AERA with Baby スペシャル保存版，pp22-29, 2013.6.30.
- 15) 三島和夫：体内時計のリズムを皮膚で測定 国立精神・神経センター。日本経済新聞 Web，2013.7.5.
- 16) 三島和夫：体内時計、皮膚細胞で測定＝睡眠障害診断に応用期待—国立精神センター。Yahoo! ニュース，2013.7.5.
- 17) 三島和夫：体内時計、皮膚細胞で測定＝睡眠障害診断に応用期待—国立精神センター。時事ドットコム，2013.7.5.
- 18) 三島和夫：体内時計、皮膚細胞で測定＝睡眠障害診断に応用期待—国立精神センター。BIGLOBE ニュース，2013.7.5.
- 19) 三島和夫：体内時計、皮膚細胞で測定＝睡眠障害診断に応用期待—国立精神センター。excite ニュース，2013.7.5.
- 20) 三島和夫：体内時計、皮膚細胞で測定＝睡眠障害診断に応用期待—国立精神センター。goo ニュース，2013.7.5.
- 21) 三島和夫：体内時計、皮膚細胞で測定＝睡眠障害診断に応用期待—国立精神センター。goo ビジネス EX，2013.7.5.
- 22) 三島和夫：体内時計リズム測定方法を開発。日本経済新聞，2013.7.6.
- 23) 三島和夫：体内時計の周期を簡単に測定。NHK NEWS WEB，2013.7.8.
- 24) 三島和夫：国立精神・医療センター、皮膚細胞から体内時計リズムを計測。日刊工業新聞 Web，2013.7.8.
- 25) 三島和夫：体内時計リズム 皮膚細胞から計測。日刊工業新聞，2013.7.8.
- 26) 三島和夫：体内時計測定容易に。電気新聞，2013.7.8.
- 27) 三島和夫：皮膚から体内時計測定。日経産業新聞，2013.7.8.
- 28) 三島和夫：個人差のある体内時計の周期 皮膚細胞から遺伝子診断。朝日新聞，2013.7.8.
- 29) 三島和夫：皮膚細胞で体内時計を測定する。QLifePro，2013.7.9.
- 30) 三島和夫：不眠症治療—睡眠薬の使い方と代替薬・療法の意義。Medical Tribune，2013.8.15.
- 31) 三島和夫：連日の猛暑で不眠を訴える人が増えるこの時期に、どうすれば睡眠をとることができるか インタビュー。NHK ラジオ第一 NHK ジャーナル，2013.8.22.
- 32) 三島和夫：睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン—出口を見据えた不眠医療マニュアル—。調剤と情報 19(9)：1185-1191，2013.9.1.
- 33) 三島和夫：つらい不眠が解消できる！今日から始める快眠テクニック。みんなの家庭の医学，

pp20-21, 2013.9.14.

- 34) 三島和夫: 時をはかる 社会的時差ボケを診断します. 朝日新聞グローブ, 2013.9.15.
- 35) 三島和夫: “治療の終結”を見据えた処方を 「睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン」がめざすもの. 週刊医学会新聞, 2013.9.16.
- 36) 三島和夫: 忙しい小学生でも良質の睡眠をキープする技を伝授! 寝不足解消術. *ducare* 17 : pp100-105, 2013.9.18.
- 37) 三島和夫: ふぁ〜極上の熟睡感! グッスリ朝まで眠る術. NHK ためしてガッテン, 2013.9.25.
- 38) 三島和夫: 治療の「出口」見据えた処方て服薬への不安と不眠の慢性化解消を. *CLINIC magazine* 532 : p7, 2013.10.1.
- 39) 三島和夫: 治療の「出口」見据えた処方て服薬への不安と不眠の慢性化解消を. *クリニックマガジン* 40(10) : 7, 2013.10.1
- 40) 三島和夫: 不眠症 (減薬・休薬を考慮した BZ 系睡眠薬の適正使用). *CNS today* 3 : pp15-21, 2013.10.17.
- 41) 三島和夫: 成長ホルモンと「お肌のゴールデンタイム」の常識はウソ. 週刊新潮 2013年10月24日号, p42, 2013.10.17.
- 42) 三島和夫: 医療新世紀 睡眠薬使用 厚労省と学会が指針 併用避け ゆっくり減量を 依存症への不安根強く, 東奥日報 2013.10.28.
- 43) 三島和夫: 睡眠薬 賢く使って 併用避けゆっくり減量. 山口新聞, 2013.10.28.
- 44) 三島和夫: 増える不眠症 治療に道筋 睡眠薬服用 賢く安全に. 神戸新聞, 2013.10.28.
- 45) 三島和夫: 併用避けゆっくり減量を 依存症への不安根強く. 東京日報, 2013.10.28.
- 46) 三島和夫: 秋の夜長に睡眠改善!!. 週刊朝日 2013年11月8日増大号, pp134-136, 2013.10.29.
- 47) 三島和夫: 不眠症でガイドライン 睡眠薬の併用避けて 改善後、ゆっくり減量. 北國新聞, 2013.10.30.
- 48) 三島和夫: 併用避けゆっくり減量 厚労省と学会が指針 治療の出口を明示. 奈良新聞, 2013.10.31.
- 49) 三島和夫: 睡眠薬の適正使用に向け、ガイドラインを策定〜減薬・休薬を見据えた不眠症治療へ〜. *へるすあっぷ* 21, 349 : 26-27, 2013.11.1.
- 50) 三島和夫: 厚労省と睡眠学会がガイドライン 睡眠薬いつやめる?. 信濃毎日新聞, 2013.11.1.
- 51) 三島和夫: 不眠退治にガイドライン 薬で賢く安全に. 夕刊フジ, 2013.11.1.
- 52) 三島和夫: 睡眠薬 賢く安全に使って 厚労省と学会が指針 併用避けゆっくり減量. 徳島新聞, 2013.11.3.
- 53) 三島和夫: 睡眠薬賢く使って 厚労省と学会が指針 併用避けゆっくり減量. 神奈川新聞, 2013.11.3.
- 54) 三島和夫: 睡眠薬で賢く安全に眠る 厚労省と学会、使用の指針作成 改善した時のやめ方も明示. 山梨日日新聞, 2013.11.4.
- 55) 三島和夫: 睡眠薬 賢く安全に 治療の出口を明示 厚労省、学会 ガイドラインを作成. 長崎新聞, 2013.11.4.
- 56) 三島和夫: 睡眠薬 賢く安全に使って 厚労省と学会が指針 併用避けゆっくり減量. 下野新聞, 2013.11.4.
- 57) 三島和夫: 睡眠薬、賢く使って併用避けゆっくり減量厚労省と学会が指針. *医療新世紀 - 47NEWS*, 2013.11.5.
- 58) 三島和夫: 不眠症には効かない 市販睡眠改善薬の落とし穴. 週刊朝日 2013年11月15日号, pp42-44, 2013.11.5.
- 59) 三島和夫: 寝酒が「絶対ダメ」な理由とは?. (週刊朝日) 朝日新聞出版 | dot, 2013.11.5.
- 60) 三島和夫: 睡眠薬、賢く安全に 併用を避けゆっくり減量—厚労省と学会が指針. 静岡新聞,

2013.11.5.

- 61) 三島和夫：睡眠薬、賢く使って併用避けゆっくり減量厚労省と学会が指針。医療新世紀 - 47NEWS, 2013.11.5.
- 62) 三島和夫：睡眠薬を賢く使おう 厚労省と学会 ガイドライン作成 症状改善で服用中止 併用避けゆっくり減量。山陽新聞, 2013.11.5.
- 63) 三島和夫：睡眠薬の指針 併用やめ 時間かけ減量。琉球新報, 2013.11.5.
- 64) 三島和夫：指針なく患者増 処方薬で依存症。北陸中日新聞, 2013.11.5.
- 65) 三島和夫：睡眠薬、賢く使おう 併用避け、徐々に減量。秋田さきがけ新聞, 2013.11.5.
- 66) 三島和夫：睡眠薬、賢く使って 併用避けゆっくり減量 厚労省と学会が指針。埼玉新聞, 2013.11.5.
- 67) 三島和夫：寝酒が「絶対ダメ」な理由とは？。LivedoorNews, 2013.11.5.
- 68) 三島和夫：寝酒が「絶対ダメ」な理由とは？。ExciteNews, 2013.11.5.
- 69) 三島和夫：睡眠悩んだら外来へ 「専門センター」新設増える 内科・精神科…連携し治療。日本経済新聞, 2013.11.7.
- 70) 三島和夫：眠れてますか、夜 成人の10人に1人悩みの種 厚労省と学会 睡眠薬に指針「良い眠り」心得も。西日本新聞夕刊, 2013.11.7.
- 71) 三島和夫：厚労省と学会が指針 睡眠薬賢く使って 併用避け、ゆっくり減量。茨城新聞, 2013.11.7.
- 72) 三島和夫：睡眠薬使用で指針 やめ時など“出口”明示 症状改善後ゆっくり減量 厚労省と学会。四国新聞, 2013.11.8.
- 73) 三島和夫：実は不眠症にはおすすめでできない薬店で買える「睡眠改善薬」。LivedoorNews, 2013.11.8.
- 74) 三島和夫：長期使用で「不眠症」にも 市販「睡眠改善薬」に潜む危険性。〈週刊朝日〉-朝日新聞出版 | dot, 2013.11.11.
- 75) 三島和夫：実は不眠症にはおすすめでできない薬店で買える「睡眠改善薬」。〈週刊朝日〉-朝日新聞出版 | dot, 2013.11.11.
- 76) 三島和夫：睡眠薬 賢く使おう 厚労省と学会が指針作成。福井新聞, 2013.11.12.
- 77) 三島和夫：睡眠薬 指針に「やめ方」明示 厚労省と学会 正しい使用で不眠慢性化防止図る。毎日新聞 大阪 朝刊, 2013.11.14.
- 78) 三島和夫：くらしナビ・医療・健康 睡眠薬、指針に「やめ方」明示 厚労省と学会、正しい使用で不眠慢性化防止図る。毎日新聞 朝刊, 2013.11.14.
- 79) 三島和夫：睡眠薬、賢く使って 併用避けゆっくり減量 厚労省と学会が指針。千葉新聞, 2013.11.15.
- 80) 三島和夫：睡眠薬賢く使おう。秋田さきがけ, 2013.11.15.
- 81) 三島和夫：厚労省などが指針 睡眠薬の使用 適切に 処方率上がり、服用長期化も 医師の指示で減薬、休薬を。東京新聞 朝刊, 2013.11.19.
- 82) 三島和夫：厚労省などが指針 睡眠薬の使用 適切に 処方率上がり、服用長期化も 医師の指示で減薬、休薬を。中日新聞 朝刊, 2013.11.19.
- 83) 三島和夫：睡眠薬服用 賢く安全に 厚労省、学会がガイドライン。京都新聞, 2013.11.19.
- 84) 三島和夫：睡眠薬賢く使って。埼玉新聞, 2013.11.20.
- 85) 三島和夫：睡眠ホルモン。Tarzan, 12月12日号, pp46-51, 2013.11.28.
- 86) 三島和夫：睡眠薬 安全に使って 厚労省と学会が指針ガイドライン 改善後のやめ方明示 併用を避けゆっくり減量。新潟日報, 2013.11.29.
- 87) 三島和夫：睡眠薬 賢く使用を 併用避けゆっくり減量 厚労省と学会が指針。山陽中央新報, 2013.12.10.

- 88) 三島和夫: 厚労省と学会が指針 不眠症治療に道筋、不安解消へ 睡眠薬、賢く安全に使用 併用避け徐々に減量を. 岐阜新聞, 2013.12.16.
- 89) 三島和夫: この時期気になるこの症状 冬季鬱病. 夕刊フジ, 2013.12.19.
- 90) 三島和夫: 睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて. 登米市医師会だより 2014 新年号, p5, 2014.1.1.
- 91) 三島和夫: 【ラジオ出演】生活習慣病と睡眠. ラジオ NIKKEI「ドクターサロン」, 2014.1.14.
- 92) 三島和夫: 寝ぼけて暴れる高齢者、その原因とは?. 日経メディカルオンライン, 2014.1.16.
- 93) 三島和夫: 「深い睡眠」が「よい睡眠」とは限らなかった 睡眠の正しい改善法とは. ナショナル ジオグラフィック (NATIONAL GEOGRAPHIC) 日本版, 2014.1.20.
- 94) 三島和夫: 「深い睡眠」が「よい睡眠」とは限らなかった—睡眠の正しい改善法とは. Yahoo!ニュース, 2014.1.21.
- 95) 三島和夫: 睡眠医療・睡眠研究用プラットフォーム PASM を開発. Care Station Japan, 2014.1.28.
- 96) 三島和夫: 睡眠障害? ウェブでチェック 国立精神・神経医療研究センターなど開設. 朝日新聞 夕刊 2面, 2014.2.1.
- 97) 三島和夫: 睡眠障害を PC やスマホで高い精度で判定 睡眠に悩む人に朗報. 朝日新聞デジタル, 2014.2.3.
- 98) 三島和夫: 睡眠障害を PC やスマホで高い精度で判定 睡眠に悩む人に朗報. Yahoo!ニュース, 2014.2.4.
- 99) 三島和夫: NCNP 睡眠医療・睡眠研究用プラットフォーム・PASM を開発. QLifePro 医療ニュース, 2014.2.5.
- 100) 三島和夫: 睡眠科学の最前線。眠りの新常識! . TBS ラジオ 荻上チキ・Session-22 NEC WISDOM Square, 2014.2.5-26.
- 101) 三島和夫: 睡眠薬は減らせる、休薬できる. 日経メディカル, 2014.2.6.
- 102) 三島和夫: ソチ五輪の深夜ライブ中継を観る睡眠対策は? 睡眠の専門家がアドバイス. Yahoo!ニュース, 2014.2.10.
- 103) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. @niftyニュース, 2014.2.14.
- 104) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. Biglobe ニュース, 2014.2.14.
- 105) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. excite ニュース, 2014.2.14.
- 106) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. goo ニュース, 2014.2.14.
- 107) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. infoseek ニュース, 2014.2.14.
- 108) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. Livedoor ニュース, 2014.2.14.
- 109) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. Yahoo!ニュース, 2014.2.14.
- 110) 三島和夫: 理研など、躁うつ病用気分安定薬のリチウムの作用メカニズムの一部を解明. ジョルダンニュース, 2014.2.14.
- 111) 三島和夫: 睡眠障害の兆候 自分でチェック. 中国新聞. 2014.2.14.
- 112) 三島和夫: ゆったり上質な眠り 分科会・満足できる睡眠のひけつ 健康・医療フォーラム. 朝日新聞. 2014.2.18.

- 113) 三島和夫：「睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン」からわかる 入院患者への適切な睡眠薬の使用. エキスパートナース, pp16-20, 2014.2.20.
- 114) 三島和夫：睡眠指針は、なぜ作られたのか？. J-WAVE 813 FM RADIO JAM THE WORLD, 2014.2.24-28.
- 115) 三島和夫：医療・研究の現場と同じアルゴリズムで本格的な睡眠記録が可能に 活動量計『カラダフィット』と連携して「睡眠」を記録できる新たな専用アプリ登場. MTI プレスリリース, 2014.3.3.
- 116) 三島和夫：厚労省「睡眠指針」11年ぶり改定へ 就寝前ケータイ要注意 寝不足勤労者は昼寝を. 高知新聞, 2014.3.8.
- 117) 三島和夫：厚労省「睡眠指針」改定へ 若者に警鐘「寝る前携帯」 勤労者に昼寝 熟年世代に活動勧める. 信濃毎日新聞, 2014.3.8.
- 118) 三島和夫：就寝前携帯使用に警鐘*厚労省*指針11年ぶり改定へ. 北海道新聞, 2014.3.8.
- 119) 三島和夫：就寝前ケータイ 注意を 厚労省 「睡眠指針」11年ぶり改定へ 勤労者には昼寝推奨. 愛媛新聞, 2014.3.9.
- 120) 三島和夫：寝る前のケータイ要注意 厚労省、睡眠指針改定へ 勤労者は昼寝大切. 京都新聞, 2014.3.9.
- 121) 三島和夫：厚労省 睡眠指針11年ぶり改定へ 就寝前にケータイ「若者夜型化」警鐘 勤労世代には「昼寝」推奨. 山口新聞, 2014.3.9.
- 122) 三島和夫：厚労省 眠りの質向上へ指針改定 就寝前の携帯電話に要注意 勤労世代は昼寝も必要. 山梨日日新聞, 2014.3.9.
- 123) 三島和夫：厚労省 睡眠指針11年ぶり改定へ 寝る前ケータイダメ“寝だめ”より昼寝を推奨. 新潟日報, 2014.3.9.
- 124) 三島和夫：要注意！就寝前のケータイ 睡眠指針11年ぶり改定へ 勤労者 昼寝お勧め 高齢者日中に運動. 北日本新聞, 2014.3.9.
- 125) 三島和夫：お知らせ 新刊じほう「睡眠薬の適正使用・休薬ガイドライン」. 日刊薬業, 2014.3.10.
- 126) 三島和夫：睡眠薬は減らせる、休薬できる 寝ているのに眠れない？「睡眠状態誤認」にご用心. 日経メディカル 2014年3月号, 2014年3月号, 20-21, 2014.3.10.
- 127) 三島和夫：健やかな睡眠のカギを握る「メジャースリープ」とは. ナショナルジオグラフィック (NATIONAL GEOGRAPHIC) 日本版, 2014.3.18.
- 128) 三島和夫：お肌のゴールデンタイムはウソだった！健やかな睡眠のカギを握る「メジャースリープ」とは. Yahoo!ニュース, 2014.3.18.
- 129) 三島和夫：あなたの睡眠大丈夫？ 眠りの悩みを徹底分析. BS日テレ 深層 NEWS, 2014.3.28.
- 130) 肥田昌子：体内時計の周期を簡単に計測する画期的な手法の開発に成功！ 睡眠障害の治療に期待. Yahoo!ニュース, 2013.7.8.
- 131) 肥田昌子：「夜型」体質、皮膚細胞でわかる簡単手法を発見. Yahoo!ニュース, 2013.7.15.
- 132) 肥田昌子：「夜型」体質、皮膚細胞でわかる簡単手法を発見. YOMIURI ONLE, 2013.7.15.
- 133) 肥田昌子：「夜型」皮膚で診断 体内リズム刻む遺伝子着目. 読売新聞, 2013.7.15.
- 134) 肥田昌子：『人間の体内時計を皮膚の細胞で簡単に調べることができる』新聞記事についてインタビュー. 文化放送 くにもるジャパン, 2013.7.16.
- 135) 肥田昌子：「夜型」皮膚で診断 体内リズム刻む遺伝子着目. 読売新聞, 2013.7.16.
- 136) 肥田昌子：皮膚細胞で、夜型判明？国立精神・神経医療研究センターが発見. 医療人材 NET, 2013.7.19.
- 137) 肥田昌子：『体内時計』を正しくすれば、太らない！肌がきれいに！長生きに！. TBS はなまるマーケット, 2013.11.6.
- 138) 肥田昌子：【特集／眠りと美の深い関係】Vol.5 体内時計、正しく動いていますか？！. WACOAL

BODY BOOK, 2013.11.13.

- 139) 肥田昌子: 【特集／眠りと美の深い関係】Vol.6 午前中の光は、生まれ変わる肌にも影響!?. WACOAL BODY BOOK, 2013.11.20.
- 140) 肥田昌子: 【特集／眠りと美の深い関係】Vol.7 睡眠は、脳・心・美容の栄養. WACOAL BODY BOOK, 2013.11.27.
- 141) 北村真吾: 夏の睡眠、夏の入浴 寝苦しい夜を克服する、真夏の熟睡ガイド. Tarzan, pp16-21, 2013.8.22.
- 142) 北村真吾: 朝型か夜型か 自分知り時間生かす 体質・習慣・年齢が影響. 読売新聞夕刊, 2013.10.31.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Mishima K: 【symposium】 Rhythm and blues: mismatch of social and body clocks in depressive people. WFSBP Congress 2013, 11th World Congress of Biological Psychiatry, Kyoto, 2013.6.23-27.
- 2) Moriguchi Y: 【Symposium】 The integration of neuroscience and cognitive behavioral therapy. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference 2013 Tokyo, Tokyo, 2013.8.23-24.
- 3) Hida A: Potential pathogenesis of circadian rhythm sleep disorders. Neuro2013, Kyoto, 2013.6.20.
- 4) 三島和夫: 【講演】 認知症の身体合併症へのアプローチ「睡眠障害」. アルツハイマー研究会 第 14 回学術シンポジウム, 東京, 2013.4.20.
- 5) 三島和夫: 【講演】 病態生理に基づいた不眠症診断と治療戦略. ルネスタ発売 1 周年記念講演 in HOKKAIDO, 北海道, 2013.5.18.
- 6) 三島和夫: 【講演】 睡眠と年齢. 千葉市民文化大学本講座, 千葉, 2013.5.22.
- 7) 三島和夫: 【ワークショップ】 精神科臨床に役立つ睡眠障害の診断と治療. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 8) 三島和夫: 【講演】 不眠の病態と診断・治療 各種薬剤の使い分けについて—今後の睡眠薬に求められること—. 多摩市・稲城市医師会共催講演会, 東京, 2013.5.30.
- 9) 三島和夫: 【講演】 うつ病と慢性不眠、過覚醒の臨床的意義. つくばアカデミー・オブ・サイカイアトリー (TAP) 2013 1st 学術講演会, 東京, 2013.5.31.
- 10) 三島和夫: 【講演】 高齢者の不眠と認知症. 第 6 回宮城老年医療フォーラム, 宮城, 2013.6.1.
- 11) 三島和夫: 【座談会】 オレキシン受容体拮抗剤の可能性について. 不眠症の最新知見に関する座談会, Baltimore, 2013.6.5.
- 12) 三島和夫: 【講演】 不眠の病態と診断・治療—今後の睡眠薬に求められること—. 会津医学会学術講演会, 福島, 2013.6.12.
- 13) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 不眠症治療の Up to date—エビデンスに基づいた患者貢献—. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 14) 三島和夫: 【ランチョンセミナー】 不眠症治療の Up to date. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.28.
- 15) 三島和夫: 【講演】 不眠症のゴールとは何か —今後の睡眠薬に求められること—. 第 100 回大曲仙北医師会学術講演会, 秋田, 2013.6.28.
- 16) 三島和夫: 【シンポジウム】 睡眠と体内時計を測って HRQOL の向上に生かす. 第 13 回日本抗加齢医学会総会, 神奈川, 2013.6.28-30.
- 17) 三島和夫: 【講演】 ラメルテオン (ロゼレム) の作用機序と睡眠医療での位置づけ. スリープ

- フォーラム 2013, 東京, 2013.7.1.
- 18) 三島和夫:【講演】不眠の病態と診断・治療 各薬剤の使い分けについて. 八王子市医師会学術講演会, 東京, 2013.7.3.
 - 19) 三島和夫:【特別講演】認知症と睡眠障害. 福井県内科医会学術講演会, 福井, 2013.7.6.
 - 20) 三島和夫:【講演】不眠症のゴールとは何か —今後の睡眠薬に求められること—. 第 119 回小県医師会講演会, 長野, 2013.7.8.
 - 21) 三島和夫:【講演】不眠症の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン. 不眠症ライブセミナー, 東京, 2013.7.11.
 - 22) 三島和夫:【特別講演】難治性うつ病の作用点としての不眠、過眠、過覚醒. 第 3 回治療抵抗性うつ病研究会, 秋田, 2013.7.12.
 - 23) 三島和夫:【特別講演】不眠症のゴールとは何か —今後の睡眠薬に求められること—. ルネスタ発売 1 周年記念講演会, 大阪, 2013.7.13.
 - 24) 三島和夫:【講演】うつ病と睡眠障害の関連. 第 10 回日本うつ病学会総会, 福岡, 2013.7.19.
 - 25) 三島和夫:【講演】アレルギー性鼻炎に伴う睡眠障害と QOL. 第 18 回那須ティーチン, 東京, 2013.7.27.
 - 26) 三島和夫:【講演】病態から見た不眠症の診立てと睡眠薬の適正使用について. 第 4 回「快眠」を考える会, 東京, 2013.8.5.
 - 27) 三島和夫:【講演】不眠医療・睡眠薬処方で遭遇するよくある疑問とその対応. 千葉県保険医協会・学術研究会, 千葉, 2013.8.8.
 - 28) 三島和夫:【講演】不眠症の治療学 —その診断と治療薬で大丈夫ですか?—. ロゼレム全国 TV/Web 講演会, 東京, 2013.9.6.
 - 29) 三島和夫:【講演】不眠症のゴールとは何か —今後の睡眠薬に求められること—. 登米市医師会学術講演会, 宮城, 2013.9.12.
 - 30) 三島和夫:【講演】夜型社会と心身の健康. 第 13 回抗加齢医学の実際 2013, 東京, 2013.9.16.
 - 31) 三島和夫:【講演】認知症治療で遭遇する睡眠障害とその対応. 第 10 回もの忘れ相談医講習会, 埼玉, 2013.9.18.
 - 32) 三島和夫:【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のためのガイドライン —出口を見据えた不眠症治療に向けて—. 不眠症治療 特別講演会, 熊本, 2013.10.4.
 - 33) 三島和夫:【講演】睡眠医療から認知症を防ぐためにできること. 日本人の認知症を考える～認知症にさせないための日常診療～, 東京, 2013.10.9.
 - 34) 三島和夫:【講演】睡眠障害をめぐる諸問題 —生活習慣との関わりを中心に—. 第 43 回最新臨床医学を学ぶ会, 栃木, 2013.10.10.
 - 35) 三島和夫:【講演】睡眠障害センターにおける睡眠治療について. 小平市医師会学術講演会, 東京, 2013.10.17.
 - 36) 三島和夫:【講演】認知症治療で遭遇する睡眠障害とその対応. 第 116 回福井県神経科精神科医会, 福井, 2013.10.18.
 - 37) 三島和夫:【講演】睡眠障害の診断および睡眠薬の使い方と服薬指導のポイント. 東京都病院薬剤師会城東支部勉強会, 東京, 2013.10.24.
 - 38) 三島和夫:【ランチョンセミナー】エビデンスに基づいた不眠症治療のススメ —その処方、その用量で大丈夫ですか?—. 第 23 回日本臨床精神神経薬理学会/第 43 回日本神経精神薬理学会, 沖縄, 2013.10.26.
 - 39) 三島和夫:【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて. 日生涯教育講座学術講演会, 長野, 2013.10.28.
 - 40) 三島和夫:【講演】生体リズムの調整と睡眠の取り方. アイシン精機 健康的加齢に関する講演, 愛知, 2013.10.31.

- 41) 三島和夫：【特別講演】睡眠・体内時計機能を知り、個の医療につなげる。第20回日本時間生物学会学術大会，大阪，2013.11.9-10.
- 42) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。臨床薬学研究会，東京，2013.11.13.
- 43) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて。第24回兵庫県精神医療学術講演会，兵庫，2013.11.16.
- 44) 三島和夫：【教育研修講師】睡眠医学の基礎。「働く人の睡眠改善プログラム」集合研修，東京，2013.11.22.
- 45) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠症治療に向けて—。ルネスタ発売1周年記念講演会，神奈川，2013.11.27.
- 46) 三島和夫：【ランチョンセミナー】うつ病治療のピットフォール —不眠、過覚醒、生活リズム障害— 不眠症の治療学—その診断と治療法で大丈夫ですか？—。第26回日本総合病院精神医学会総会，京都，2013.11.29-30.
- 47) 三島和夫：【講演】認知症の睡眠・行動障害の診療におけるピットフォール。第3回さくら認知症セミナー，東京，2013.12.5.
- 48) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。実地医科のための睡眠障害セミナー，千葉，2013.12.6.
- 49) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインについて。不眠症治療学術講演会，群馬，2013.12.13.
- 50) 三島和夫：【講演】睡眠のサイエンス。日本抗加齢医学会専門医・指導士認定委員会講習会，東京，2013.12.15.
- 51) 三島和夫：【講演】慢性不眠とうつ病の病態を過覚醒を通して見る。大阪精神科診療所協会 学術研究会，大阪，2014.2.8.
- 52) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。水俣芦北 不眠症治療講演会，熊本，2014.2.13.
- 53) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。北多摩不眠症研究会，東京，2014.2.25.
- 54) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。鳥取県東部不眠症学術講演会，鳥取，2014.2.28.
- 55) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。不眠症を考える会 長岡，新潟，2014.3.5.
- 56) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン。ルネスタ睡眠セミナー2014，岐阜，2014.3.8.
- 57) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン。不眠症勉強会，東京，2014.3.17.
- 58) 三島和夫：【講演】睡眠薬の適切使用と休薬の在り方について。Lilly Psychiatrist Forum in Tokyo，東京，2014.3.18.
- 59) 三島和夫：【講演】循環器専門医が知っておくべき不眠診療 —睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドラインより—。第78回日本循環器学会学術集会，東京，2014.3.21.
- 60) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。第528回甲府市内科医会，山梨，2014.3.25.
- 61) 三島和夫：【特別講演】睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン —出口を見据えた不眠治療に向けて—。北勢地区不眠症学術講演会，三重，2014.3.27.
- 62) 肥田昌子，北村真吾，大澤要介，中崎恭子，元村祐貴，綾部直子，片寄泰子，野崎健太郎，榎本みのり，加藤美恵，小野浩子，亀井雄一，三島和夫：概日リズム睡眠障害患者の体内時計機

- 能障害. 第 128 回日本薬理学会関東部会. 東京, 2013.7.14.
- 63) 肥田昌子: 【シンポジウム】 In vitro リズムアッセイによる体内時計評価法. 第 20 回日本時間生物学会学術大会, 大阪, 2013.11.9-10.
- 64) 肥田昌子: 【シンポジウム】 ヒト概日時計システムの個人特性. 第 91 回日本生理学会大会, 鹿児島, 2014.3.16-18.
- 65) 北村真吾, 三島和夫: 【シンポジウム・演者】 小児不眠症 一疫学調査から一. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 66) 北村真吾: 【講演】 生体リズムとうつ病. 第 6 回精神科臨床睡眠懇話会, 東京, 2013.8.10.
- 67) 北村真吾: 【シンポジウム】 生理学的指標による概日リズム位相評価. 第 20 回日本時間生物学会学術大会, 大阪, 2013.11.9-10.
- 68) 寺澤悠理: 【シンポジウム】 感情認識における島皮質の機能. 第 37 回日本神経心理学会総会, 北海道, 2013.9.12-13.
- 69) 寺澤悠理: 【講演】 感情経験を支える身体内部状態への感受性. 日本心理学会第 77 回大会, 北海道, 2013.9.19-21.
- 70) 粕川雄也, 杉本昌弘, 肥田昌子, 南陽一, 森雅代, 本間さと, 本間研一, 三島和夫, 曾我朋義, 上田泰己: 【シンポジウム】 ヒト血液代謝産物を用いた 2 時点の血液サンプルによる体内時計測定法. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.

(2) 一般演題

- 1) Moriguchi Y, Murakami H, Katsunuma R, Oba K, Terasawa Y, Motomura Y, Kanayama Y, Mishima K, Matsuda H: Neural basis for awareness of body sensation and modulation of autonomic nervous system. The 19th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Seattle, 2013.6.16-20.
- 2) Kitamura S, Hida A, Mishima K: Association between aging and chronotype, sleep properties, and depressive states: a five-year followup study. SLEEP2013, Baltimore, 2013.6.1-5.
- 3) Kitamura S, Hida A, Higuchi S, Aritake S, Enomoto M, Mishima K: Validity of the Japanese version of Munich ChronoType Questionnaire. the XIII Congress of the European Biological Rhythms Society, Munich, 2013.8.18-22.
- 4) Katsunuma R, Oba K, Motomura Y, Terasawa Y, Nakazaki K, Katayose Y, Kitamura S, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K: Neural correlates of sleep deprivation and food intake. The 19th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Seattle, 2013.6.16-20.
- 5) Oba K, Terasawa Y, Motomura Y, Kikuchi Y, Moriguchi Y, Mishima K: An fMRI study of emotional autobiographical memory retrieval and its relation to adaptive coping. The 19th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Seattle, 2013.6.16-20.
- 6) Motomura Y, Kitamura S, Tamura M, Katayose Y, Nozaki K, Enomoto M, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K: Forced desynchronization altered amygdala activation to emotional face stimulus. 11th International Congress of Physiological Anthropology, Alberta, 2013.8.8-10.
- 7) Ayabe N, Morimoto H, Hashimoto R, Mine S, Shimada H, Mishima K: Effects of sociocultural context in cognitive appraisal of coping flexibility and psychological distress. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference 2013 Tokyo, Tokyo, 2013.8.23-24.
- 8) Ayabe N, Morimoto H, Hashimoto R, Mine S, Yamano-Ikeda M, Shimada H: Determinants

- of the evaluation of coping method appropriateness in a sociocultural context. 7th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies. Lima, 2013.7.22 -25.
- 9) Kanayama Y, Moriguchi Y, Oba K, Terasawa Y, Mishima K, Kumano H: Autistic traits affect the ability of visuospatial perspective taking: fMRI study. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference 2013 Tokyo, Tokyo, 2013.8.23-24.
 - 10) Murakami H, Katsunuma R, Oba K, Terasawa Y, Motomura Y, Kanayama Y, Mishima K, Oka T, Moriguchi Y, Matsuda H: The association between neural response and heart rate variability during attending to bodily sensations. Society for Psychophysiological Research 53rd Annual Meeting, Florence, 2013.10.2-6.
 - 11) Terasawa Y, Moriguchi Y, Kanayama Y, Oba K, Motomura Y, Umeda S, Mishima K: Association between emotional awareness and neural correlates of interoception. Society for Psychophysiological Research 53rd Annual Meeting, Florence, 2013.10.2-6.
 - 12) Terasawa Y, Moriguchi Y, Tochizawa S, Sato R, Umeda S: Interoceptive sensibility predicts sensibility to other's emotion. The 6th annual meeting of the Social & Affective Neuroscience Society, San Francisco, 2013.4.12-13.
 - 13) Terasawa Y, Moriguchi Y, Tochizawa S, Sato R, Umeda S: Accurate interoceptive awareness enhances emotional sensibility. The 20th Annual Meeting of the Cognitive Neuroscience Society, San Francisco, 2013.4.12-13.
 - 14) Shibata M, Terasawa Y, Tochizawa S, Yoshimura Y, Otani S, Umeda S: Cardiac parasympathetic control as a predictor of familiarity-based retrieval. Society for Psychophysiological Research 53rd Annual Meeting, Florence, 2013.10.2-6.
 - 15) Shibata M, Terasawa Y, Umeda S: The relationship between the cognitive and affective components involved in humor comprehension and appreciation. The 6th annual meeting of the Social & Affective Neuroscience Society, San Francisco, 2013.4.12-13.
 - 16) Shibata M, Terasawa Y, Umeda S: Neural correlates of humor comprehension and appreciation: a functional MRI study. The 20th Annual Meeting of the Cognitive Neuroscience Society, San Francisco, 2013.4.12-13.
 - 17) 三島和夫: 慢性不眠症の過覚醒状態を生じる脳内基盤. 第6回脳プロ公開シンポジウム「つながりの脳科学」, 東京, 2014.2.1.
 - 18) 守口善也, 村上裕樹, 勝沼り, 寺澤悠理, 大場健太郎, 金山裕介, 三島和夫, 松田博史, 岡孝和: 身体感覚への気づきに関わる神経基盤の研究. 第54回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 神奈川, 2013.6.26-27.
 - 19) 肥田昌子, 北村真吾, 片寄泰子, 中崎恭子, 元村祐貴, 大場健太郎, 野崎健太郎, 加藤美恵, 小野浩子, 松井健太郎, 小林美奈, 碓氷章, 井上雄一, 亀井雄一, 三島和夫: 概日リズム睡眠障害患者の生物時計機能障害. 日本睡眠学会第38回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
 - 20) 元村祐貴, 北村真吾, 大場健太郎, 寺澤悠理, 片寄泰子, 榎本みのり, 肥田昌子, 守口善也, 樋口重和, 三島和夫: 無意識的な情動伝達経路の役割: 強い眠気は意識下で呈示された恐怖表情刺激に対する情動関連脳領域の活動を増強する. 日本生理人類学会第68回大会, 石川, 2013.6.8-9.
 - 21) 元村祐貴, 北村真吾, 田村美由紀, 片寄泰子, 野崎健太郎, 榎本みのり, 有竹清夏, 渡辺真紀子, 肥田昌子, 守口善也, 樋口重和, 三島和夫: 強制脱同調プロトコルは表情刺激呈示時の扁桃体活動を変容させた. Neuro2013, 京都, 2013.6.20-23.
 - 22) 元村祐貴, 大場健太郎, 寺澤悠理, 野崎健太郎, 肥田昌子, 守口善也, 亀井雄一, 樋口重和, 三島和夫: 安静時脳活動の測定による原発性不眠症患者における精神科学的病態の検討. 日本睡眠学会第38回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.

- 23) 中崎恭子, 北村真吾, 片寄泰子, 元村祐貴, 向當さや香, 田口勇次郎, 肥田昌子, 亀井雄一, 三島和夫: 新しい活動量計を用いた睡眠/覚醒判定アルゴリズムの作成. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 24) 中崎恭子, 北村真吾, 元村祐貴, 肥田昌子, 三島和夫: 若年者の睡眠習慣と肥満リスクに関する基礎的研究. 日本生理人類学会第 69 回大会, 京都, 2013.10.26-27. (優秀発表賞受賞)
- 25) 中崎恭子, 北村真吾, 片寄泰子, 元村祐貴, 肥田昌子, 三島和夫: 睡眠習慣と摂食行動および肥満との関連. 第 20 回時間生物学会学術大会, 大阪, 2013.11.9-10.
- 26) 樋口大樹, 守口善也, 村上裕樹, 勝沼るり, 大場健太郎, 寺澤悠理, 金山裕介, 三島和夫, 宇野 彰: 日本語漢字の左後頭側頭領域における階層的な形態処理. 第 31 回日本生理心理学会, 福井, 2013.5.18-19.
- 27) 樋口大樹, 守口善也, 勝沼るり, 大場健太郎, 寺澤悠理, 三島和夫, 宇野 彰: 漢字の各認知要素に対応して左下側頭領域内の活動部位が異なる. Neuro2013, 京都, 2013.6.20-23.
- 28) 樋口大樹, 守口善也, 村上裕樹, 勝沼るり, 大場健太郎, 寺澤悠理, 金山裕介, 三島和夫, 宇野 彰: 日本語漢字および部首の左後頭側頭領域における階層的な形態処理. 第 13 回日本発達性ディスレクシア研究会, 広島, 2013.7.6-7.
- 29) 榎本みのり, 草薙宏明, 北村真吾, 三島和夫: 不眠症とうつ病の合併患者の受療行動. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 30) 李 相逸, 樋口重和, 西 剛史, 肥田昌子, 三島和夫, 辻村誠一, 森田 健, 稲見 香: メラノプシン遺伝子多型 (I394T) と瞳孔の対光反応の関係: 光の強度と色光の影響. 日本生理人類学会第 68 回大会, 石川, 2013.6.8-9.
- 31) 李 相逸, 肥田昌子, 北村真吾, 稲見 香, 三島和夫, 樋口重和: メラノプシン遺伝子多型 (I394T) と睡眠習慣の関係. 日本生理人類学会第 69 回大会, 京都, 2013.10.26-27.
- 32) 鈴木真由美, 山口佳寿博, 大塚邦明, 三島和夫: 「痒みによる不眠に、鎮静作用の強い第一世代抗ヒスタミン薬を用いることは推奨されない」日本睡眠学会睡眠薬適正使用ガイドライン作成 WG 報告. 日本睡眠学会第 38 回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 33) 福島宏器, 寺澤悠理, 魚野翔太, 梅田 聡: 内受容感覚と性格特性, 感情経験および表情認知の関連. 日本心理学会第 77 回大会, 北海道, 2013.9.19-21.
- 34) 森本浩志, 綾部直子, 橋本 塁, 美根早由里, 嶋田洋徳: コーピング選択における社会的文脈の評価と社会的相互作用 一対人ストレス場面における検討一. 日本心理学会第 77 回大会, 北海道, 2013.9.19-21.

(3) 研究報告会

- 1) 三島和夫: 発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者総合対策研究事業 (精神障害分野)) 「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究」. 2013 年度 第 1 回神尾班班会議, 東京, 2013.6.16.
- 2) 三島和夫: 診療情報データを用いた向精神薬処方に関する実態調査研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「向精神薬の処方実態に関する研究」中込班班会議, 東京, 2013.7.4.
- 3) 三島和夫: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究」井上班班会議, 東京, 2013.7.23.
- 4) 三島和夫: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業) 「健康日本 21 (第 2 次) に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究」2013 年度 第 1 回 兼板班班会議, 東京, 2013.9.7.

- 5) 三島和夫：睡眠調整に関わる生物時間及び恒常性維持機構の機能評価スキルの開発とその臨床展開生物時計、睡眠覚醒、気分調節を結ぶ双方向的な機能ネットワークの分子基盤に関する研究. 文部科学省「脳科学研究戦略推進プログラム」平成25年度成果報告会, 東京, 2013.11.4-6.
- 6) 三島和夫：Hyperarousal Scale 日本語版の開発に関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入方法の向上に資する研究」金班班会議, 東京, 2013.11.28.
- 7) 三島和夫：不眠症のQOL尺度（QOLI）の開発に関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究」井上班班会議, 東京, 2013.12.9.
- 8) 三島和夫：診療情報データを用いた向精神薬処方に関する実態調査研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「向精神薬の処方実態に関する研究」中込班班会議, 東京, 2014.1.7.
- 9) 三島和夫：平成25年度厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）「健康日本21（第2次）に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究」2013年度第2回兼板班班会議, 東京, 2014.1.25.
- 10) 守口善也, 中屋敷弘晟, 高田洋平, 野田隆政, 中込和幸, 寺澤悠理, 勝沼り, 大場健太郎, 村上裕樹, 金山裕介, 川島一朔, 元村祐貴, 肥田昌子, 花川 隆, 松田博史, 三島和夫：近赤外線スペクトロスコピー（NIRS）-fMRI同時計測による、NIRSの臨床診断ツールとしての妥当性の検証. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成25年度 研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 11) 勝沼り, 大場健太郎, 元村祐貴, 寺澤悠理, 中崎恭子, 片寄泰子, 北村真吾, 肥田昌子, 守口善也, 三島和夫：日常生活における睡眠負債が肥満に及ぼす神経学的検証. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成25年度 研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 12) 中崎恭子, 北村真吾, 元村祐貴, Spaeti J, 守口善也, 肥田昌子, 三島和夫：どのような睡眠習慣と食習慣が肥満リスクを高めるか. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成25年度 研究報告会, 東京, 2014.3.10.

(4) その他

C. 講演

- 1) 三島和夫：【一般向け講演】快適な睡眠でいきいき健康生活. 中野区 健康に関する講座, 東京, 2013.7.25.
- 2) 三島和夫：【市民公開講座】健康な高齢者の睡眠の特徴 2013年 秋の「すいみんの日」市民公開講座, 東京, 2013.9.8.
- 3) 三島和夫：【市民公開講座】睡眠で心と体に栄養補給. 国分寺市 健康講座「睡眠講座」, 東京, 2013.9.10.
- 4) 三島和夫：【市民公開講座】睡眠とうつの深～い関係. 「うつ病を知る日」市民公開講座, 東京, 2013.10.12.
- 5) 三島和夫：【一般向け講演】良質な睡眠について. 特別養護老人ホーム講演, 青森, 2013.11.1.
- 6) 三島和夫：【市民公開講座】こころスッキリ！快眠術～ぐっすり眠れば健康に. 「うつ病を知る日」市民公開講座, 兵庫, 2013.12.7.
- 7) 三島和夫：【市民・患者様向け講演】こころの健康と睡眠障害～心の健康を保つための睡眠習慣～. こころの健康と睡眠障害に関する研修会, 長野, 2014.1.23.
- 8) 三島和夫：【市民公開講座】満足できる睡眠のひけつ. 朝日 健康・医療フォーラム2014, 東

京, 2014.1.28.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 三島和夫: 日本睡眠学会理事
- 2) 三島和夫: 日本時間生物学会理事
- 3) 三島和夫: 日本生物学的精神医学会評議員
- 4) 三島和夫: 日本公衆衛生学会評議員
- 5) 三島和夫: 脳科学関係学会連合評議員
- 6) 三島和夫: 精神科臨床睡眠懇話会世話人
- 7) 肥田昌子: 日本時間生物学会評議員
- 8) 守口善也: 関東脳核医学研究会世話人

(3) 座長

- 1) 肥田昌子: 【シンポジウムオーガナイザー】概日リズム睡眠障害の神経分子機構. Neuro2013, 京都, 2013.6.20-23.
- 2) 三島和夫: 【シンポジウム・座長】大規模自然災害の被災地における「睡眠障害」の実態とフェーズに配慮した対策 東日本大震災後の日本人の睡眠とメンタルヘルス: ストレス反応とレジリエンス. 日本睡眠学会第38回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 3) 三島和夫: 【シンポジウム・座長】睡眠薬の適正使用ガイドライン — 出口を見据えた不眠治療に向けて —. 日本睡眠学会第38回定期学術集会, 秋田, 2013.6.27-28.
- 4) 三島和夫: 【座長】第6回精神科臨床睡眠懇話会, 東京, 2013.8.10.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 三島和夫: *Frontiers in Sleep and Chronobiology* (Associate editor)
- 2) 三島和夫: *Psychiatry Journal* (Associate editor)
- 3) 三島和夫: *Sleep and Biological Rhythms* (Advisory Board)
- 4) 三島和夫: 睡眠医療 (編集委員)
- 5) 三島和夫: ねむりと医療 (編集委員)
- 6) 守口善也: American Psychosomatic Society Program Committee 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

- 1) 三島和夫: 【教育研修講師】睡眠医学の基礎. 「働く人の睡眠改善プログラム」集合研修, 東京, 2013.12.6.

F. その他

10. 知的障害研究部

I. 研究部の概要

知的障害研究部は診断研究室，治療研究室，発達障害支援研究室（部長併任）の3室体制で，知的障害など発達障害に関する研究を本年度も広範に進めた．すなわち，精神遅滞（知的障害），学習障害，注意欠如・多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラムなどの発達障害とその近縁状態の発生要因解明，診断法開発，治療法策定，予防対策に関する研究をそれぞれ発展させた．

発達障害児・者はその障害の発生時期や原因，年齢，重症度，養育環境によりまったく異なった症状を示し，多彩な課題を抱えている．これらの問題解決のために当研究部では，臨床例の解析に加えて，調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している．部の英語名は独法化後も引き続き **Department of Developmental Disorders** と表記していることから，発達障害全般について，神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの広い守備範囲を研究ターゲットとしている．

平成25年度の常勤研究員は部長（稲垣真澄），診断研究室長（太田英伸），治療研究室長（軍司敦子）の3名であった．稲垣は主として小児神経学，発達障害医学，神経生理学の立場から，太田は新生児医学の立場から，軍司は神経生理学，教育学の立場から研究に加わった．稲垣は発達障害支援研究室長を併任した．そしてセンター病院小児神経診療部併任として発達障害児に対する診療を継続し，病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を展開した．

25年度の流動研究員は白川由佳，安村 明，李 珩であり，併任研究員の中川栄二（センター病院小児神経科医長）とともに研究を進めた．科研費研究員は，鈴木浩太，森山花鈴であった．客員研究員（井上祐紀，木実谷哲史，後藤隆章，小池敏英，小枝達也，杉田克生，竹市博臣，田中敦士，中村 俊，中村みほ，難波栄二，林 隆，細川 徹，三砂ちづる，山崎広子）が研究部員と相互協力して発達障害に関する研究を実施した．5月から加我牧子前所長が知的障害研究部客員研究員に加わった．研究生として小林朋佳，中川真智子に加えて，山本寿子，崎原ことえ，中村雅子，矢田部清美，大城武史が常勤研究者と共に研究を進めた．外来研究員は北 洋輔と高橋純一の2名で，学習障害，ADHDに関する研究をそれぞれ進めた．なお，センター研究助手として大橋啓子，中村紀子，吉川朋子の3名が事務的な補助を行った．科研費研究補助員3名（須藤茉衣子，溝田美帆子，福田亜矢子）とセンター研究補助員1名（刑部仁美）が研究者の研究活動を支えた．外来研究補助員の松島由紀子，福地順子は基盤研究を主に補助した．

II. 研究活動

1) 発達障害児の認知機能評価に基づく認知発達障害の解明と個別支援方法の体系化

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている．特に発達障害児の視・聴覚認知機能に関する研究を推進し，精神遅滞，自閉症，学習障害，ADHDなど発達障害児・者に適用してその有用性を明らかにした．とくに重症度評価の他覚的検査バッテリーの開発につながり，発達障害児の認知機能障害を考慮した指導法開発のための研究として展開している．（稲垣，軍司，矢田部，山崎，小林，安村，高橋，福田．精神・神経疾患研究開発費，厚生労働科学研究，脳科学研究戦略推進プログラム）

2) 発達障害児の行動異常モデルにおける研究

Bronx waltzer (bv) マウスの中枢神経系病態解明はとくにADHD，自閉性障害など発達障害の病態研究，治療研究につながるものと考えている．bvマウスの原因遺伝子が判明したことで，bvにみられる不安様行動との関連や脳内GABA機能の異常を明らかにするべく基盤研究を行った．これらは発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた研究につながっている．（稲垣，太田，刑部，李，福地，松島．厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費）

3) 学習障害に関する研究

発達性読み書き障害・算数障害の診断治療ガイドラインを小児科臨床現場で普及するように、学会発表・誌上発表を通じて広報活動を進めた。読み書き障害における大細胞系機能評価のため、脳波と機能的MRI撮像を同時に行う研究を脳病態統合イメージングセンター（IBIC）と共同で進めて論文発表を行った。また、新たな音韻操作課題を開発し、日本語話者読み書き障害に特有の機能異常を見出しBrainに発表した。（稲垣，北，山本，小林，矢田部，後藤，山崎，細川，小枝，林，杉田，中村みほ。精神・神経疾患研究開発費，厚生労働科学研究）

4) 自閉症の病態に関する研究

自閉症スペクトラム障害児の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため、声認知に関する脳機能評価を健常成人，定型発達小児・学童そして、自閉症スペクトラム児において進めた。ヒト声や環境音を用いた新しい聴力検査法を確立して、健常成人データ収集をスタートした。顔認知に関する神経生理学的研究を進め、健常児と自閉症児の自他識別時における脳血流変化や周波数応答を比較し、トレーニングにより事象関連電位が改善することを見出し、論文や学会で発表した。（稲垣，太田，軍司，北，鈴木，崎原，林，小池。厚生労働科学研究，脳科学研究戦略推進プログラム）

5) ADHDに関する研究

ADHDの実行機能障害，抑制機能障害，ワーキングメモリ機能障害を簡便に評価する他覚的検査バッテリーを開発し，行動学的データを蓄積した。また，実行機能課題時の脳血流変化を近赤外線分光トモグラフィ（NIRS）により検討し，精神・神経疾患研究開発費の研究グループで疾患児童群と定型児童群の多数のデータ収集をスタートした。これらの研究はADHD診断や重症度評価の客観的指標作成につながると考えて継続したい。また注意機能に関する介入法としてニューロフィードバックを導入し，介入研究を開始した。（稲垣，太田，軍司，安村，高橋，福田，北，中川栄二，小池，小枝。厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費）

6) 小児副腎白質ジストロフィー症（ALD）に関する研究

進行性代謝性変性疾患の一つである小児型ALDに対する骨髄移植（造血幹細胞移植）療法時期決定と治療後評価のための研究を継続した。白質変性部位と脳波異常の関連を周波数解析で明らかにするため神経生理学的研究を継続した（稲垣，軍司，崎原，加我，中村雅子。厚生労働科学研究）

7) 発達障害児を持つ家族のレジリエンス向上に関する研究

発達障害とくに自閉症スペクトラム児の母親の支援を進めるために，母親自身のレジリエンスの向上につながる要因を解明する研究を継続し，内外の文献に基づきレジリエンスの枠組みを理論的に構築し学会・論文発表した。さらに医師面談，母親面談によるデータ収集を開始した。（稲垣，鈴木，加我，森山。厚生労働科学研究，精神・神経疾患研究開発費）

8) 人工保育器開発・光環境開発に関する研究

発達障害予防のため，光受容体メラノプシンを制御するフィルターを用いた人工保育器開発や新生児集中治療室における光環境デザインの研究，ならびに人工子宮の開発・妊娠高血圧症病態解明に向けた基盤研究を進めた。また，未熟児出生の幼児における行動量や睡眠パターンの解析を行った。（太田，李，中川真智子，松島，福地。NEDO，文部科学省科学研究費補助金，厚生労働科学研究）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

常勤研究者は各種講演などの場を通じて，研究成果を社会に還元した。常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院において，日常的診療サポートを提供している。

2) 専門教育面における貢献

稲垣，軍司を中心に病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床，研究指導を日常的に行っている。毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い，軍司が主に実習を担当し，稲垣は電気生理学的所見判読のアドバイスをを行った。また講演会や各種セミナー，講義など

により医師，看護師，保健師，福祉関係専門職，言語聴覚士，学校教員の教育に貢献している。稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として，また軍司は二級臨床検査士資格認定試験の試験委員として，神経生理部門について検査技師に対する専門知識の普及・向上に貢献した。稲垣は東京農工大学工学部の学生講義を担当した。軍司は東京農工大学，東京学芸大学，青山学院大学の学生に対して，学習と行動の特別支援，脳生理学をテーマに講義を行った。北は教育アセスメント実践演習，学習障害指導法について東京学芸大学で講義を担当した。鈴木は立正大学で生理心理学講義を担当した。国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは，全国から集まった小児神経科医に対して稲垣が発達障害の診断と治療の講義を行った。

3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため，医学課程研修を年二回企画・実施した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

稲垣は，環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）の評価委員として参加した。厚生労働省平成25年度こころの健康づくり対策事業の中で，思春期精神保健研修事業企画委員会委員として，研修内容に関する企画に携わり，学習障害の講義を担当した。稲垣は日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として，知的障害者の国際スポーツ大会参加という社会活動に貢献している。また，障害者スポーツ医養成研修講師を務めた。併せて稲垣は独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員として，当該研究所の活動に関する指導助言を行った。

5) センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり，知的障害，学習障害，ADHD，自閉症など発達障害の診療に定期的に携わっている。

6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Gunji A, Goto T, Kita Y, Sakuma R, Kokubo N, Koike T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M: Facial identity recognition in children with autism spectrum disorders revealed by P300 analysis: a preliminary study. *Brain Dev* 35: 293-298, 2013.
- 2) Yasumura A, Kokubo N, Yamamoto H, Yasumura Y, Nakagawa E, Kaga M, Inagaki M: Neurobehavioral and hemodynamic evaluation of stroop and reverse stroop interference in children with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Brain Dev* 36(2): 97-106, 2014.
- 3) Yasumura A, Inagaki M, Hiraki K: The relationship between neural activity and executive function: an NIRS study. *ISRN Neuroscience* 2014(734952): 1-5, 2014.
- 4) Yamamoto H, Kita Y, Kobayashi T, Yamazaki H, Kaga M, Hoshino H, Hanakawa T, Yamamoto H, Inagaki M: Deficits in magnocellular pathway in developmental dyslexia: a functional magnetic resonance imaging-electroencephalography study. *Journal of Behavioral and Brain Science* 3: 168-178, 2013. doi:10.4236/jbbs.2013.32017 Published Online May, 2013.
- 5) Kita Y, Yamamoto H, Oba K, Terasawa Y, Moriguchi Y, Uchiyama H, Seki A, Koeda T, Inagaki M: Altered brain activity for phonological manipulation in dyslexic Japanese children. *Brain* 136(12): 3696-3708, 2013.
- 6) Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, Kaga M, Inagaki M: A framework for resilience research in parents of children with developmental disorders. *Asian Journal of Human Services* 5: 104-111, 2013.

- 7) Tajima K, Shimoike M, Li H, Inagaki M, Izumi H, Akiyama M, Matsushima Y, Ohta H: Controllable light filters using an all-solid-state switchable mirror with a Mg-Ir thin film for preterm infant incubators. Appl Phys Lett 102: 161913, 2013.
- 8) Tsujimoto S, Yasumura A, Yamashita Y, Torii M, Kaga M, Inagaki M: Increased prefrontal oxygenation related to distractor-resistant working memory in children with attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD). Child Psychiatry Hum Dev 44(5): 678-88, 2013. doi: 10.1007/s10578-013-0361-2.
- 9) Ishii R, Leonides C, Aoki Y, Ikeda S, Hata M, Takahashi H, Nakahachi T, Gunji A, Iwase M, Takeda M: Frequency diversity of posterior oscillatory activity in human revealed by spatial filtered MEG. Journal of integrative neuroscience 12(3): 343-53, 2013.
- 10) 若宮英司, 竹下 盛, 中西 誠, 水田めくみ, 栗本奈緒子, 奥村智人, 玉井 浩, 小枝達也, 稲垣真澄: 発達性ディスレクシアに対する新規訓練プログラムの開発と短期効果. 脳と発達 45 : 275-280, 2013.

(2) 総説

- 1) Gunji A, Inagaki M: Noninvasive detection of face perception specificities in children with autism spectrum disorders. Japanese Psychological Research 56: 91-102, 2014.
- 2) Watanabe S, Akiyama S, Hanita T, Li H, Nakagawa M, Kaneshi Y, Ohta H, Japan RED filter study group: designing artificial environments for preterm infants based on circadian studies on pregnant uterus. Front Endocrinol 4(113): 1-11, 2013.
- 3) 稲垣真澄, 小林朋佳, 安村 明: ADHD や自閉症の評価方法. 小児科診療 76 : 369-374, 2013.
- 4) 稲垣 真澄, 小林 朋佳, 安村 明: 特集 小児検査法便覧一オーダーの出し方・実際の手技・データの読み方. 診断と治療社, 東京, pp369-374, 2013.
- 5) 田嶋一樹, 李 珩, 太田英伸: 人工保育器向け調光型フィルターの開発. 光アライアンス 11 : 30-34, 2013.
- 6) 北 洋輔, 稲垣真澄: 「読み書きの苦手な子」の実情と理解. 教育と医学 719 : 368-379, 2013.
- 7) 本間元康, 太田英伸: 東日本大震災に発症した急性期のめまいと不安症状. 最新精神医学 19 : 23-29, 2014.

(3) 著書

- 1) 稲垣真澄, 軍司敦子: 自閉症スペクトラム障害の顔認知. 山口真美, 柿木隆介 編: 顔を科学する 適応と障害の脳科学, 東京大学出版会, 東京, pp75-90, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 稲垣真澄: 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者: 稲垣真澄)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp1-6, 2014.
- 2) 稲垣真澄: 発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素に関する質的検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者: 稲垣真澄)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp7-17, 2014.
- 3) 太田英伸: 液晶型光フィルターを用いた早産児の発達障害を予防する次世代人工保育器の開発. 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 平成 25 年度産業技術研究助成事業研究成果報告書, pp1-6, 2013.

- 4) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 中村雅子: 傍シルビウス裂症候群の病態に基づく疾患概念の確立と新しい治療法の開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等克服研究事業)「Landau-Lleffner 症候群にみられる聴覚失認の評価法の検討(研究代表者: 加藤光広)」平成25年度研究報告書. pp36-40, 2014.
- 5) 山本寿子: 平成24年度障害者スポーツ医養成講習会報告「知的障害の病理」. 障害者スポーツ指導者養成講習会・研修会報告書, pp125-137, 2013.

(5) 翻訳

- 1) 太田英伸: 第7章「長期間にわたって脳は変化してしまう」, 第8章「私は薬物依存者になってしまうのだろうか」. M. クーハー著/船田正彦 監訳: 溺れる脳～人はなぜ依存症になるのか?～, 東京化学同人, 東京, pp103-134, 2013.

(6) その他

- 1) Ohta H, Nakagawa M: Book review: Principles and practice of child neurology in infancy. Colin Kennedy (Editor), London: MacKeith Press: 2012. Brain Dev 35: p885, 2013.
- 2) 稲垣真澄, 北 洋輔: 子どもの読み書き障害, 病態解明 大脳活動に異常発見. 琉球新報, 2013.9.19.
- 3) 稲垣真澄, 北 洋輔: 子どもの読み書き障害, 脳の2ヶ所異常. 日本経済新聞 夕刊, 2013.9.19.
- 4) 稲垣真澄, 北 洋輔: 子どもの読み書き障害, 病態解明 大脳活動に異常発見. 河北新報, 2013.9.20.
- 5) 稲垣真澄, 北 洋輔: 子どもの読み書き障害, 病態解明 大脳活動に異常発見. 北海道新聞, 2013.9.20.
- 6) 稲垣真澄, 北 洋輔: 子どもの読み書き障害, 病態解明 大脳活動に異常発見. 共同通信 47NEWS (よんななニュース), 2013.9.20.
- 7) 稲垣真澄, 北 洋輔: 読み書き障害に脳異常. 日経産業新聞, 2013.9.20.
- 8) 稲垣真澄, 北 洋輔: 読み書き障害「努力不足」ではない 精神保健研が発見 大脳2カ所に異常 過剰な働きや活動低下. 福井新聞, 2013.9.20.
- 9) 稲垣真澄, 北 洋輔: 子どもの読み書き障害, 病態解明 大脳活動に異常発見. 西日本新聞, 2013.9.20.
- 10) 稲垣真澄, 北 洋輔: 読み書き障害 脳の2領域異常. 読売新聞, 2013.9.24.
- 11) 稲垣真澄, 北 洋輔: 「発達性読み書き障害」で脳の2領域に異常があることを確認. マイナビニュース, 2013.9.25.
- 12) 稲垣真澄, 北 洋輔: ディスレクシアの神経学的病態を解明, 大脳2領域に異常. <http://www.qlifepro.com/news/20130926/unravel-the-neurological-condition-of-dyslexia-cerebral-2-area-unusual.html> 2013.9.26.
- 13) 稲垣真澄, 北 洋輔: 読み書き障害児の脳活動の異常発見. 週刊科学新聞, 2013.9.27.
- 14) 田嶋一樹, 太田英伸: 早産児の発達 促進～保育器向け光フィルター. 日経産業新聞 朝刊, 2013.4.26.
- 15) 田嶋一樹, 下池美香, 李 コウ, 稲垣真澄, 泉 仁美, 秋山美沙紀, 松島由紀子, 太田英伸: Solid-state controllable light filter may protect preterm infants from disturbing light. Science Daily, 2013.5.6.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Inagaki M: Progress in “Brain & Mind” study of the field of developmental disorder

- research. シンポジウム 2 脳とこころの研究の進歩, (独)国立精神・神経医療研究センター (NCNP)・メルボルン大学精神医学部門合同シンポジウム, 東京, 2013.6.28.
- 2) Gunji A, Takeichi H, Kobayashi T, Suzuki K, Yamamoto H, Yasumura A, Inagaki M: Beta rhythms of electroencephalography during voice perception in persons with/without autism spectrum disorders (Invited poster). 九州大学「文理融合型の知覚・認知研究拠点」2013年忘年ポスター・シンポジウム, 福岡, 2013.12.2.
 - 3) 稲垣真澄: 学習障害: とくに読字障害の診断と治療について. 第107回多摩小児科臨床懇話会特別講演, 東京, 2013.6.21.
 - 4) 稲垣真澄, 北 洋輔, 後藤隆章, 山本寿子, 加我牧子: 発達障害の病態生理: 発達性読み書き障害の音韻操作時脳機能. シンポジウムⅡ (小児の認知・情動発達—発達障害を理解するために—), 第18回認知神経科学会学術集会, 東京, 2013.7.28.
 - 5) 稲垣真澄: ADHD. 日本発達障害学会第48回研究大会教育講演, 東京, 2013.8.25.
 - 6) 太田英伸: 胎児・新生児の神経系の発達とディベロップメンタル・ケア～大脳皮質の発達. 第8回ディベロップメンタルケアセミナー (教育講演), 東京, 2013.8.10.
 - 7) 太田英伸: 発達障害等に対する医学的対応の基礎. 日野市教育委員会特別支援専門研修会 (教育講演), 東京, 2013.8.20.
 - 8) 太田英伸: 妊娠高血圧症候群に対する人工赤血球を用いた治療法の開発. 第20回日本血液代替物学会年次大会 (特別講演), 奈良, 2013.12.7.
 - 9) 軍司敦子: コミュニケーションを支える認知の発達と障害. 大会企画シンポジウムⅡ 発達とその障害の生理心理学), 第31回日本生理心理学会大会, 福井, 2013.5.19.
 - 10) 高橋秀俊, 軍司敦子, 金子 裕, 中鉢貴行, 廣永成人, 萩原綱一, 森脇愛子, 稲垣真澄, 飛松省三, 神尾陽子: 自閉症スペクトラムの聴覚誘発脳磁界反応について (シンポジウム). 第28回日本生体磁気学会, 新潟, 2013.6.7.
- (2) 一般演題
- 1) Inagaki M, Kobayashi T, Gunji A, Takeichi H, Suzuki K, Yamamoto H, Yasumura A: Development of an efficient method to evaluate vocal communication in children with autism spectrum disorders. International Congress of Pediatrics 2013, Melbourne, 2013.8.24-29.
 - 2) Gunji A, Takeichi H, Kobayashi T, Suzuki K, Yamamoto H, Yasumura A, Inagaki M: Beta rhythms of EEG during voice perception in persons with/without autism spectrum disorders. International Congress of Pediatrics 2013, Melbourne, 2013.8.24-29.
 - 3) Gunji A, Kobayashi T, Takeichi H, Suzuki K, Yamamoto H, Yasumura A, Inagaki M: Voice-specific brain responses in persons with/without autism spectrum disorders. Neuro2013, Kyoto, 2013.6.20-23.
 - 4) Yasumura A, Kokubo N, Yamamoto H, Yasumura Y, Moriguchi Y, Nakagawa E, Hiraki K, Inagaki M: Hemodynamic evaluation of cognitive shifting in children with autism spectrum disorder. The 30th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN), Berlin, 2014.3.20.
 - 5) Kaga M, Furushima W, Nakamura M, Gunji A, Sakihara K, Inagaki M: Auditory function in childhood adrenoleukodystrophy (ALD). International Congress of Pediatrics 2013, Melbourne, 2013.8.24-29.
 - 6) 太田英伸, 渡辺真平, 秋山志津子, 埴田卓志, 李 コウ, Japan RED filter study group: ヒト光受容体の発達と早産児の睡眠. 日本睡眠学会第38回定期学術集会, 秋田, 2013.6.28.
 - 7) 太田英伸, 渡辺真平, 秋山志津子, 埴田卓志, 李 コウ, 中川真智子, 兼次洋介, 樋口重和,

- Japan RED filter study group : ヒト光受容体の発達と早産児の睡眠・身体発達を促す光環境の開発. 第 69 回日本生理人類学会大会, 京都, 2013.10.26.
- 8) 太田英伸, 守屋孝洋, 飯郷雅之, Japan RED filter study group : 光フィルターによる早産児の人工保育環境の設計. 第 20 回日本時間生物学会学術大会, 大阪, 2013.11.9.
 - 9) 安村 明, 山本寿子, 小林朋佳, 若宮英司, 稲垣真澄 : 発達性ディスレクシア児に対する平仮名読み訓練プログラムの短期効果. 第 55 回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
 - 10) 安村 明, 高橋純一, 福田亜矢子, 中川栄二, 山下裕史朗, 宮島 祐, 小枝達也, 相原正男, 稲垣真澄 : ADHD 児における干渉抑制能力に関わる脳活動. 日本 ADHD 学会第 5 回総会, 東京, 2014.3.8.
 - 11) 李 コウ, 太田英伸, 泉 仁美, 松田芳樹, 関 美佳, 戸田宜子, 秋山美沙紀, 松島由紀子, 加我牧子, 稲垣真澄 : 不安様行動における CCKA , CCKB 受容体の異なる役割. Neuro2013, 京都, 2013.6.21.
 - 12) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄 : 7 歳 6 ヶ月から 9 歳の子どもの行動特性の発達の变化に母親の療育行動が及ぼす影響. 第 55 回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
 - 13) 山本寿子, 北 洋輔, 小林朋佳, 山崎広子, 加我牧子, 稲垣真澄, 星野英紀, 花川 隆 : 発達性読み書き障害の視覚情報処理機能障害の解明 : 大細胞系刺激による fMRI-脳波同時計測. 第 55 回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
 - 14) 北 洋輔, 山本寿子, 大場健太郎, 寺澤悠里, 守口善也, 内山仁志, 関 あゆみ, 小枝達也, 稲垣真澄 : 発達性ディスレクシア児の音韻操作時における脳機能. 第 13 回発達性ディスレクシア研究会, 広島, 2013.7.6-7.
 - 15) 小林朋佳, 稲垣真澄, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子 : 発達障害診療に必要な保護者支援に関する調査 : 医師と保護者の特性に関する検討. 第 55 回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
 - 16) 仲村貞郎, 斎藤義朗, 石山昭彦, 齋藤貴志, 小牧宏文, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 稲垣真澄 : Tay-Sachs 病における音に対する驚愕反応と脳幹誘発反応の検討. 第 55 回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30-6.1.
 - 17) 仲村貞郎, 中川栄二, 石山明彦, 齋藤貴志, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 安村 明, 稲垣真澄 : 脳波異常を伴った発達障害に対する治療の検討. 第 47 回日本てんかん学会学術集会, 福岡, 2013.10.11-12.
 - 18) 仲村貞郎, 中川栄二, 安村 明, 稲垣真澄 : 脳波異常を伴った発達障害に対する薬物治療の検討. 日本 ADHD 学会第 5 回総会, 東京, 2014.3.8.
 - 19) 守屋孝洋, 中島伸吾, 小野塚 寛, 鈴木登紀子, 齋藤陽平, 小林智徳, 山本文彦, 太田英伸, 程 肇, 大久保恭仁, 中畑則道 : 加齢に伴う肝臓時計同調障害における $\alpha 1$ 受容体シグナル低下の関与. 第 20 回日本時間生物学会学術大会, 大阪, 2013.11.9.

(3) 研究報告会

- 1) 小林朋佳, 鈴木浩太, 森山花鈴, 稲垣真澄 : 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者 : 稲垣真澄)」平成 25 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2013.6.30.
- 2) 鈴木浩太, 小林朋佳, 森山花鈴, 稲垣真澄 : 発達障害児の母親のレジリエンス. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 (研究代表者 : 稲垣真澄)」平成 25 年度第 1 回研究班会議, 東京, 2013.6.30.
- 3) 小林朋佳, 鈴木浩太, 森山花鈴, 稲垣真澄 : 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレ

レジリエンス向上に関する研究. 厚生労働科学研究「発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究（研究代表者：稲垣真澄）」平成 25 年度第 2 回研究班会議，東京，2013.10.27.

- 4) 稲垣真澄，安村 明，高橋純一，福田亜矢子，中川栄二，山下裕史朗，宮島 祐，小枝達也，相原正男：発達障害（ADHD，LD）の診断治療プログラム開発 1. 精神・神経疾患研究開発費「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究（主任研究者：稲垣真澄）」平成 25 年度第 2 回研究班会議，東京，2013.11.23.
- 5) 稲垣真澄，高橋純一，安村 明，中川栄二：発達障害（ADHD，LD）の診断治療プログラム開発 2. 精神・神経疾患研究開発費「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する研究（主任研究者：稲垣真澄）」平成 25 年度第 2 回研究班会議，東京，2013.11.23.
- 6) 中川栄二，小一原玲子，仲村貞郎，安村 明，稲垣真澄：ADHD の抑制機能障害の病態解明. 平成 25 年度第 2 回研究班会議，東京，2013.11.23.
- 7) 稲垣真澄，安村 明，仲村貞郎，中川栄二：てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明. 精神・神経疾患研究開発費「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究（主任研究者：中川栄二）」平成 25 年度第 2 回研究班会議，東京，2013.11.30.
- 8) 稲垣真澄，白川由佳，刑部仁美，中村祥子，井上 健：精神遅滞・難聴をきたすミュータントマウスによる脳機能障害メカニズムの研究. 精神・神経疾患研究開発費「児童・思春期に発症する高次脳機能に障害をきたす脳疾患の生物学的基盤（主任研究者：一戸紀孝）」平成 25 年度研究班会議，東京，2013.12.13.
- 9) 仲村貞郎，斎藤義朗，石山昭彦，齋藤貴志，小牧宏文，中川栄二，須貝研司，佐々木征行，稲垣真澄：Tay-Sachs 病における音に対する驚愕反応と ABR・Blink reflex の検討. 国立精神・神経医療研究センター病院平成 25 年度 病院研究発表会，東京，2013.3.11.

(4) その他

C. 講演

- 1) 軍司敦子：発達障害の脳科学 I. 自閉症スペクトラム. 東京農工大学 H25 年度脳神経科学講義，東京，2013.6.5.
- 2) 稲垣真澄：知的障害の医学（総論）. 国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科，埼玉，2013.6.20.
- 3) 稲垣真澄：発達障害の脳科学 II. ADHD と学習障害. 東京農工大学 H25 年度脳神経科学講義，東京，2013.6.26.
- 4) 稲垣真澄：発達障害の診断と治療の実際. 第 19 回国立精神・神経医療研究センター 小児神経セミナー，東京，2013.7.19.
- 5) 稲垣真澄：読み書き障害の診断と支援. 特別支援教育公開講座，千葉，2013.11.22.
- 6) 軍司敦子：音声コミュニケーションを支える認知の発達と障害. 中央大学文学部山口研究室主催 2013 年度第 3 回多摩知覚研究会，東京，2013.11.30.
- 7) 太田英伸，加我牧子，稲垣真澄，井上祐紀，軍司敦子：行動バイオマーカーによる ADHD 児睡眠障害の評価・治療法の開発. 第 46 回精神神経系薬物治療研究報告会，大阪，2013.12.6.
- 8) 稲垣真澄：発達障害の診断の最新情報について. 平成 25 年度北九州障害者（児）ホームヘルプスキルアップ研修，福岡，2013.12.15.
- 9) 稲垣真澄：小児の高次脳機能評価：非侵襲的アプローチの実際. 第 2 回 Dystrophinopathy の CNS 障害に関する研究会，東京，2014.1.11.
- 10) 稲垣真澄：「学習障害」平成 25 年度厚生労働省こころの健康づくり対策事業 思春期精神保健

対策医療従事者専門研修 (2) , 東京, 2014.2.18.

- 11) 稲垣真澄: 知的障害の病理. 平成 25 年度公益財団法人日本障害者スポーツ協会 障害者スポーツ医養成講習会, 東京, 2014.2.21.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 稲垣真澄: 日本小児神経学会 評議員
- 2) 稲垣真澄: 日本臨床神経生理学会 代議員
- 3) 稲垣真澄: 日本神経精神薬理学会 評議員
- 4) 稲垣真澄: 小児脳機能研究会世話人 事務局
- 5) 稲垣真澄: 日本てんかん学会 てんかん専門医指導医
- 6) 稲垣真澄: 日本発達障害学会 評議員
- 7) 太田英伸: 日本時間生物学会 評議員
- 8) 軍司敦子: 日本臨床神経生理学会 代議員

(3) 座長

- 1) 稲垣真澄: 座長. てんかん・けいれん 4. 第 55 回日本小児神経学会学術集会, 大分, 2013.5.30.
- 2) 稲垣真澄: 座長. Current trend in the treatment of child ADHD. ADHD 学術講演会, 東京, 2013.11.29.
- 3) 稲垣真澄: 座長. パネルディスカッション. ADHD 学術講演会, 東京, 2013.11.29.
- 4) 太田英伸: 座長. NICU の光環境. 第 58 回日本未熟児新生児学会学術集会, 石川, 2013.12.2.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「脳と発達」 編集委員
- 2) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」 編集委員
- 3) 稲垣真澄: 発達障害研究 編集委員
- 4) 太田英伸: 日本時間生物学会会誌 編集委員
- 5) 軍司敦子: 日本臨床検査同学院 試験委員
- 6) 軍司敦子: 日本生理心理学会機関紙「生理心理学と精神生理学」 編集委員
- 7) 軍司敦子: 第 17 回国際心理生理学会議 (IOP2014) 国内組織委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第 15 回発達障害支援のための医学研修 2013.7.3-4.
- 2) 第 16 回発達障害支援のための医学研修 2014.1.29-30.

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 太田英伸, 宮下哲哉, 松田 直, 土屋 滋, 八重樫伸生, 岡村州博: 特許第 5295804 号 (2013.6.21. 登録) 「保育器用フード, 保育器および保育器システム」

11. 社会復帰研究部

I. 研究部の概要

社会復帰研究部は、生物・心理・社会的観点から精神疾患や精神障害を多面的に捉え、施策としても導入可能な精神保健医療福祉のサービスプログラムのモデルを呈示し、その効果に関する実証研究を推進することを、目的の第一としている。

近年の研究活動を具体的に述べると、重症精神障害者の地域生活支援を可能にするための訪問を主体とした包括型地域生活支援プログラム（ACT）のモデル作り及び普及のための臨床研究、精神障害者の一般就労と職場適応を支援するためのモデルプログラム（IPS）の開発普及、センター病院専門疾病センターの「地域精神科モデル医療センター」の運営にコミットし、デイケア・在宅支援室の活動をリフォームする研究などを行っている。

加えて、平成 24 年度からは、東日本大震災の被災地における支援活動の一環として、東北沿岸部の複数地域におけるコンサルティング活動や研修活動、ネットワーク作りのための交流会、ニーズ把握・モニタリングのための調査等の地域精神保健医療福祉システム再構築に向けた活動を継続して実施した。平成 25 年度からは、治療・支援の基礎となる、治療者—利用者の関係性に注目し、とりわけ、精神科医・患者間の共同意思決定（shared decision making）を促進する PC ツールの開発にも力を入れている。

これらの活動は、地域中心の精神保健医療福祉のシステムモデル作りと括ることが出来るが、システムとなるためには、個々の支援技法が統合され、キャッチメントエリア全体の地域精神医療文化が形成されることが必要であろう。地域精神科モデル医療センターとの協働の活動のゴールは、このあたりにおいている。めざすところは、当事者の「人生や生活をとりもどす」（recovery）ことへの支援として、地域精神医療を鍵概念とし、我が国の精神医療のありかたを転換することである。

人員構成は以下のとおりである。部長：伊藤順一郎，援助技術研究室長：吉田光爾，研究員：佐藤さやか，流動研究員：山口創生，下平美智代，科研費研究員：古家美穂，市川 健，種田綾乃，併任研究員：平林直次，坂田増弘，客員研究員：大嶋 巖（日本社会事業大学），安西信雄（帝京平成大学），西尾雅明（東北福祉大学），原 敬造（原クリニック），瀬戸屋雄太郎（世界保健機関），福井里江（東京学芸大学），贅川信幸（日本社会事業大学），香田真希子（目白大学），片山優美子（長野大学），研究生：久永文恵，菅 真理子。

II. 研究活動

1) 「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（伊藤順一郎，吉田光爾，佐藤さやか，山口創生，下平美智代）

厚生労働科学研究費補助金 難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野）「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」にて（独）国立国際医療研究センター国府台病院，東北福祉大学せんだんホスピタル，帝京大学医学部附属病院などと共同で多職種アウトリーチサービスおよび援助付き雇用モデルによる就労支援に関する効果検討研究および医療経済学研究を実施した。また，援助付雇用モデルでも先進的な IPS 型就労支援モデルのフィデリティ評価ツール作成とその信頼性と妥当性の検証を行った。

2) アウトリーチ（訪問支援）に関する研究（伊藤順一郎）

厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業（精神障害分野）『アウトリーチ（訪問支援）に関する研究』にて，厚生労働省事業である精神障害者アウトリーチ推進事業に，各都道府県における事業の評価・モニタリング・アウトカム評価デザインなどについて意見具申・技術提供を行った。

3) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究 (伊藤順一郎, 吉田光爾)

厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業) 東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究の一環として, 東日本大震災の被災地にて地域精神保健医療福祉システム作りに取り組み始めている地域や臨床チームを対象として, 支援・研究活動を実施した. 東北地方沿岸部の計 7 地区 (仙台市宮城野区, 女川町, 石巻市, 福島県全域の精神保健福祉事業所ネットワーク, 相馬市, 宮古市, 盛岡市) において, 現地支援者とコンサルティング担当者 (被災地外部の支援者) および当部の研究員を含めたフォーカスグループによるインタビュー (各地区計 1~2 回実施) を行い, 前年度のインタビュー調査と合わせて被災地のニーズの推移を確認し, コンサルティング活動を通じた成果・課題を明らかにした. また, ①福島県の精神保健医療福祉サービス事業所の利用者, および, ②福島県相双地域の精神保健福祉手帳所持者を対象とした無記名自記式調査を実施し, 精神障害をもつ者の生活実態・ニーズ・社会資源利用状況・精神的健康度と, 震災にともなう影響を明らかにした. さらに, 被災地の現地支援者のニーズにもとづき, 地域におけるコミュニティづくりをテーマにしたワールドカフェ方式による現地支援者の交流会を設定し, 本研究の協力機関である被災地同士のネットワークづくりと今後の中長期支援に向けた情報共有を行った.

4) 精神科医療でのリカバリー志向の共同意思決定を促進する PC ツールの開発と効果検証 (伊藤順一郎・山口創生)

診察場面で, 患者と医師の双方が治療内容の決定について積極的に参加する共同意思決定を促進するために, PC ツールを開発や, 当事者スタッフを含めた実践システムの展開と試作, 効果測定のための試験の準備等を行った.

5) 精神障がい者への就労支援現場で使用可能な評価法の開発と基礎的資料の整備 (佐藤さやか)

精神障害者の就労を支援する上で重要な 1) 社会的スキルと 2) 認知機能を測定できる質問紙の開発をめざし準備を行った. 1) については精神障害者の雇用に精通した企業の人事担当者にインタビューを行い, 職場で必要な対人スキルに関する項目を収集した. 2) は米国で開発された職場における行動で認知機能を測定する質問紙 Vocational Cognitive Rating Scale (VCRS) の翻訳と日本語版作成について原著者と交渉を行った.

6) 専門疾病センター (地域精神科モデル医療センター) (伊藤順一郎・佐藤さやか)

我が国における地域中心の精神科医療のモデル構築を目的として, 多職種アウトリーチサービスや就労支援までを視野にいれた医療型デイケアを中心とした地域支援を実施する. 平成 23 年度は厚生労働科研費「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」班の多施設共同研究の一環として, センター病院在宅支援室を中心とする多職種アウトリーチとデイケアを中心とする認知機能リハビリテーションおよび就労支援に関する対照群を設けた研究活動を開始した.

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・東日本大震災の精神保健福祉に関する支援活動を継続して行った (伊藤)
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した (伊藤・吉田・佐藤)

2) 専門教育面における貢献

- ・各都道府県の精神保健福祉センター，福祉局等で行われる研修事業のうち，包括型地域生活支援プログラム（ACT），心理教育，デイ・ケア，ホームヘルプ，家族支援，解決志向的面接技法等のワークショップ，講演等に可能な限り協力した（伊藤・吉田）
- ・日本社会事業大学「精神保健学」非常勤講師（吉田）
- ・駒沢大学「精神医学（福祉）」非常勤講師（吉田）
- ・日本社会事業大学「精神保健学」非常勤講師（佐藤）
- ・日本社会事業大学専門職大学院「ソーシャルスキルズトレーニング」，「社会福祉特講d」非常勤講師（佐藤）
- ・東洋大学「精神保健福祉論」，「精神保健福祉援助技術」（精神保健福祉士国家試験直前対策講座）非常勤講師（山口）
- ・日本女子大学「人間関係学概論」，「心理学概論」，「人間関係心理学特講・1（家族心理学）」非常勤講師（下平）
- ・神奈川県立保健福祉大学「人間関係とコミュニケーションⅡ」非常勤講師（種田）。

3) 精研の研修の主催と協力

- ・第11回ACT研修の主任・講師，第5回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の主任・講師，第1回精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修の主任・講師（伊藤）
- ・第11回ACT研修の副主任，第4回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の副主任・講師，第1回精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修の副主任（吉田）

4) 保健医療行政・政策に関する研究・調査，委員会等への貢献

- ・独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構の研究評価委員（伊藤）

5) センター内における臨床的活動

- ・地域精神科モデル医療センターの急性期病棟，在宅医療支援室、および精神科デイケアと連携し，センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している（伊藤・佐藤）
- ・国立国際医療研究センター国府台病院精神科で，毎週1～1.5ポイント外来診療に従事している（伊藤）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Matsuda Y, Sato S, Hatsuse N, Watanabe Y, Kishimoto T, Ikebuchi E: Neurocognitive functioning in patients with first-episode schizophrenia 1 year from onset in comparison with patients 5 years from onset. *Int J Psychiatry Clin Pract* 18(1): 63-69, 2014.
- 2) Sato S, Iwata K, Furukawa S, Matsuda Y, Hatsuse N, Ikebuchi E: The effects of the combination of cognitive training and supported employment on improving clinical and working outcomes for people with schizophrenia in Japan. *Clinical Practice & Epidemiology in Mental Health* 10: 18-27, 2014.
- 3) So M, Yamaguchi S, Hashimoto S, Sado M, Furukawa TA, McCrone P: Is computerised CBT really helpful for adult depression? a meta-analytic re-evaluation of CCBT for adult

- depression in terms of clinical implementation and methodological validity. *BMC Psychiatry* 13(1): 113, 2013.5. [doi: 10.1186/1471-244X-13-113]
- 4) Aoki Y, Malcolm E, Yamaguchi S, Thornicroft G, Henderson C: Mental illness among journalists: a systematic review. *International Journal of Social Psychiatry* 59(4): 377-390, 2013.
 - 5) Yamaguchi S, Wu S-I, Biswas M, Yate M, Aoki Y, Barley EA, Thornicroft G: Effects of short-term interventions to reduce mental health-related stigma in university or college students: a systematic review. *Journal of Nervous & Mental Disease* 201(6): 490-503, 2013.
 - 6) Clement S, Lassman F, Barley E, Evans-Lacko S, Williams P, Pagdin R, Yamaguchi S, Slade M, Rüsç N, Thornicroft G: Mass media interventions for reducing mental health-related stigma. *Cochrane Database of Systematic Reviews*, 2013.7. [doi:10.1002/14651858.CD009453.pub2]
 - 7) 吉田光爾, 瀬戸屋雄太郎, 瀬戸屋 希, 高原優美子, 英 一也, 角田 秋, 園 環樹, 萱間真美, 大島 巖, 伊藤順一郎: 重症精神障害者に対する地域精神保健アウトリーチサービスにおける機能分化の検討; Assertive Community Treatment と訪問看護のサービス比較調査 (続報) ~1 年後追跡調査からみる支援内容の変化~. *精神障害とリハビリテーション* 17(1): 39-49, 2013.
 - 8) 片山 (高原) 優美子, 山口創生, 種田綾乃, 吉田光爾: 精神障害者の援助付き雇用および個別職業紹介とサポートに関する効果についての長期的な追跡研究のシステマティック・レビュー. *社会福祉学* 54(1): 28-41, 2013.
 - 9) 山口創生, 吉田光爾, 種田綾乃, 片山優美子, 坂田増弘, 佐竹直子, 佐藤さやか, 西尾雅明, 伊藤順一郎: 重症精神障害者におけるセルフ・スティグマと精神症状や機能との関連の検証: クロス・セクショナル調査. *社会問題研究*63(143): 99-107, 2014.

(2) 総説

- 1) Yamaguchi S, Uddin S, Mino Y, Thornicroft G: Commentary on the paper, 'evaluation of a campaign to improve awareness and attitudes of young people towards mental health issues'. *Education and Health* 31(1): 31-35, 2013.
- 2) Ando S, Yamaguchi S, Aoki Y, Thornicroft G: Review of mental health-related stigma in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 67(7): 471-482, 2013.
- 3) 伊藤順一郎: ACT の経験から診療所に期待すること. *日精診ジャーナル* 39(4): 23-49, 2013.
- 4) 伊藤順一郎, 品川眞佐子, 酒井範子, 武田裕美子, 渡辺由美子: 市川市の精神保健医療福祉のシステムを俯瞰する. 第 4 章 包括的地域ケアの構成要素 (市川モデル): 支援プロセスとしての視点から. *精神科臨床サービス* 13(4): 474-479, 2013.
- 5) 芦田真伍, 吉田光爾, 松尾明子: 市川市における相談支援・ケアマネジメントの展開: システムのつなぎ手として. 第 4 章 包括的地域ケアの構成要素 (市川モデル): 支援プロセスとしての視点から. *精神科臨床サービス* 13(4): 480-484, 2013.
- 6) 遠藤紫乃, 吉田光爾, 品川眞佐子: 訪問による生活訓練のもたらしたもの: 市川市における実践の歩み. 第 4 章 包括的地域ケアの構成要素 (市川モデル): 支援プロセスとしての視点から. *精神科臨床サービス* 13(4): 495-499, 2013.
- 7) 宗 未来, 山口創生: 我が国の精神医療におけるコンプレックス・インターベンションの可能性—複雑な臨床要素を疫学研究に生かす, Shrinking Shrinking “役割を失う精神科医”時代の新たな方法論—. *精神神経学雑誌別冊* SS691-700, 2013. [published online: <https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn108/ss691-700.pdf>]

- 8) 山口創生, 種田綾乃, 下平美智代, 久永文恵, 福井里江, 吉田光爾, 佐藤さやか, 片山優美子, 伊藤順一郎: 精神障害者支援における Shared decision making の実施に向けた課題: 歴史的背景と理論的根拠. 精神障害とリハビリテーション 17(2): 182-192, 2013.
- 9) 大島みどり, 下平美智代: 市川市における就労支援の展開. 第4章 包括的地域ケアの構成要素(市川モデル): 支援プロセスとしての視点から. 精神科臨床サービス 13(4): 490-494, 2013.
- 10) 種田綾乃: 精神障害者による当事者活動の展開と課題—定義、歴史的背景と北海道浦河町における実践の位置づけ. 北海道地域福祉研究 16: 13-25, 2013.

(3) 著書

- 1) 伊藤順一郎, 吉田光爾: 経過と予後. 福田正人, 糸山昌成, 村井俊哉, 笠井清登 編: 統合失調症. 医学書院, 東京, pp128-142, 2013.
- 2) 伊藤順一郎, 福井里江: リカバリー. 福田正人, 糸山昌成, 村井俊哉, 笠井清登 編: 統合失調症. 医学書院, 東京, pp597-604, 2013.
- 3) 伊藤順一郎, 中谷陽二・岡田幸之 責任編集: 第7章 地域精神医療をめぐる倫理的な問題とはなにか. シリーズ生命倫理学第9巻: 精神科医療, 丸善出版, 東京, pp101-114, 2013.
- 4) 伊藤順一郎: 薬物療法に関する対話について—多剤大量処方になることを防ぐために. 統合失調症の人が知っておくべきこと—突然死から自分を守る, NPO 法人コンボ 編, NPO 法人コンボ, 千葉, pp149-166, 2013.
- 5) 伊藤順一郎: 地域精神保健と家族支援. 家族療法テキストブック, 日本家族研究・家族療法学会編, 金剛出版, 東京, pp160-165, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 伊藤順一郎, 安保寛明, 瀬川康平, 平山恵子, 田代大吉, 小成祐介, 吉田直美: 宮古市(岩手-A)における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた支援者支援に関する報告. 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者:樋口輝彦)」平成25年度総括・分担研究報告書. pp103-106, 2014.
- 2) 伊藤順一郎, 安保寛明, 寺井良夫, 金野万里, 佐藤充子: 盛岡市(岩手-B)における地域精神保健医療福祉システムの再構築に向けた支援者支援に関する報告. 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者:樋口輝彦)」平成25年度総括・分担研究報告書. pp107-111, 2014.
- 3) 伊藤順一郎: 「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度総括研究報告書. pp3-29, 2014.
- 4) 伊藤順一郎: 「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))(研究代表者:伊藤順一郎)平成23-25年度総合研究報告書. pp3-35, 2014.
- 5) 吉田光爾, 種田綾乃, 鈴木友理子, 深澤舞子, 永松千恵, 佐藤さやか, 武田牧子: 精神保健福祉サービス事業所利用者の震災後の生活実態に関する調査. 厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究(研究代表者:樋口輝彦)」平成25年度総括・分担研究報告書. pp17-50, 2014.
- 6) 吉田光爾, 片山優美子, 西尾雅明, 坂田増弘, 佐竹直子, 古家美穂, 佐藤さやか, 種田綾乃, 下平美智代, 小川友季, 池田尚彌, 山口創生, 市川 健: 重症精神障害者に対する多職種アウ

- トリーチチームのサービス記述と効果評価研究～報告① 基本プロトコルと対象者の属性について～. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp33-42, 2014.
- 7) 吉田光爾, 片山優美子, 西尾雅明, 坂田増弘, 佐竹直子, 古家美穂, 佐藤さやか, 種田綾乃, 下平美智代, 小川友季, 池田尚彌, 山口創生, 市川 健: 重症精神障害者に対する多職種アウトリーチチームのサービス記述と効果評価研究～報告② 支援プロセスの実態とサービス記述～. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp43-53, 2014.
- 8) 吉田光爾, 片山優美子, 西尾雅明, 坂田増弘, 佐竹直子, 古家美穂, 佐藤さやか, 種田綾乃, 下平美智代, 小川友季, 池田尚彌, 山口創生, 市川 健: 重症精神障害者に対する多職種アウトリーチチームのサービス記述と効果評価研究～報告③ 効果評価 サービスの履行と対象層に着目して～. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp55-69, 2014.
- 9) 吉田光爾, 泉田信行, 山口創生, 西尾雅明, 坂田増弘, 佐竹直子, 古家美穂, 佐藤さやか, 種田綾乃, 下平美智代, 小川友季, 池田尚彌, 市川 健, 片山優美子: 重症精神障害者に対する多職種アウトリーチチームのサービス記述と効果評価研究～報告④ 医療経済評価～. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp71-83, 2014.
- 10) 吉田光爾, 古家美穂, 山口創生, 種田綾乃, 市川 健, 佐藤さやか, 下平美智代, 泉田信行, 伊藤順一郎: 重症精神障害者の社会資源利用状況について—CSRI-J を用いて—. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp85-93, 2014.
- 11) 吉田光爾, 片山優美子, 下平美智代: プログラム評価におけるフィデリティ尺度の開発と妥当性の検証に関する海外文献紹介. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp351-358, 2014.
- 12) 吉田光爾, 下平美智代, 種田綾乃, 片山優美子, 村上 優, 杠 岳文, 檜林理一郎, 吉田和文, 照屋初枝, 岩崎優子, 松下和香, 井野順奈: 多職種アウトリーチ地方モデルに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp219-227, 2014.
- 13) 吉田光爾, 檜林理一郎: 湖南病院・湖南圏域における重症精神障害者への多職種アウトリーチチーム支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp229-236, 2014.
- 14) 吉田光爾, 杠 岳文, 岩永英之, 山崎京子, 岩崎優子, 重常一代, 倉田有紀, 益田陽子, 北島政臣, 濱 恵, 宮田鈴子, 高尾八重子, 川原佐栄子, 宮地暁美: 肥前精神医療センター・神崎市郡周辺地区における重症精神障害者への多職種アウトリーチチーム支援に関する研究. 厚生

- 労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp237-239, 2014.
- 15) 吉田光爾，森根 薫，新垣一美，大城由香，穂田祥子，諸麦由香里，山田 豊，照屋初枝，吉田和史，村上 優：琉球病院・国頭郡周辺地区における重症精神障害者への多職種アウトリーチチーム支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp241-248, 2014.
- 16) 佐竹直子，吉田光爾，古家美穂，山本啓太，佃 弘美，原田郁大，薬師寺あかり，真行寺伸江，堀内亮，長竹教夫，小川友季，池田尚彌，下平美智代，片山優美子，伊藤順一郎：国府台地区（国府台病院・市川市周辺地区）における重症精神障害者への多職種アウトリーチチーム支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp175-184, 2014.
- 17) 佐藤さやか，山口創生，下平美智代，市川 健，種田綾乃：重症精神障害者に対する認知機能リハビリテーションと個別援助付き雇用の複合による就労支援研究：臨床関連アウトカムおよび就労関連アウトカムに関する報告. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp97-125, 2014.
- 18) 佐藤さやか，市川 健，山口創生，下平美智代，種田綾乃，吉田光爾，伊藤順一郎，高井敏子：障害者就業・生活支援センターに対する全国悉皆調査. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp383-405, 2014.
- 19) 佐藤さやか，山口創生，下平美智代，種田綾乃，市川 健，吉田光爾：重症精神障害者に対する認知機能リハビリテーションと個別援助付き雇用の複合による就労支援研究：サービスコード票を用いたプロセス調査. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp127-148, 2014.
- 20) 佐藤さやか，井形るり子，南 悦子，吉住 崇，中島志穂美，山 勝見，荒木由里子：熊本市における重症精神障害者への認知機能リハと個別就労支援の複合による就労支援のモデル体制の整備に関する報告. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp311-314, 2014.
- 21) 佐藤さやか，川上祐佳里，梶谷美和子，木之瀬友紀，作森麻優，田端絵美，樋口 潤，野口真理子，森田健太郎：認知機能リハビリテーションと個別就労付雇用モデル サイト報告 民間企業. 厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する，地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」平成 25 年度研究報告書. pp315-319, 2014.
- 22) 佐藤さやか，臼井卓也，安井智紀，田村真梨，橋本敦史，福田恵美子，堀池研太，内田依子，角谷慶子：長岡病院・長岡京市周辺地区における認知機能リハビリテーションと個別援助付雇

- 用モデルに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp301-306, 2014.
- 23) 佐藤さやか, 石井和子, 肥田裕久, 木村尚美, 佐藤俊之, 岡田未来:ひだクリニック・流山市周辺地区における認知機能リハビリテーションと個別援助付雇用モデルに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp307-310, 2014.
- 24) 泉田信行, 山口創生, 佐藤さやか, 古家美穂, 下平美智代, 吉田光爾:重症精神障害者に対する認知機能リハビリテーションと個別援助付き雇用の複合による就労支援研究:医療経済評価. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp149-165, 2014.
- 25) 坂田増弘, 富沢明美, 伊藤明美, 山口創生, 種田綾乃, 佐藤さやか, 伊藤順一郎:小平地区における重症精神障害者への多職種アウトリーチチーム支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp169-174, 2014.
- 26) 坂田増弘, 大迫充江, 大島真弓, 山口創生, 市川 健, 佐藤さやか, 伊藤順一郎:小平地区における重症精神障害者への認知機能リハビリテーションと個別援助付雇用モデルに関する報告. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp251-256, 2014.
- 27) 佐竹直子, 下平美智代, 梅田典子, 小川友季, 真行寺伸江, 古家美穂, 池田尚彌, 吉田光爾:国立国際医療研究センター国府台病院・市川市周辺地区における重症精神障害者への認知機能リハビリテーションと個別援助付雇用モデルに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp257-267, 2014.
- 28) 下平美智代, 山口創生, 吉田光爾, 佐藤さやか, 市川 健, 古家美穂, 種田綾乃, 片山優美子, 小川友季, 伊藤順一郎:日本版IPS型就労支援のフィデリティ評価ツール開発に係る研究. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp359-381, 2014.
- 29) 贅川信幸, 種田綾乃, 山口創生, 伊藤順一郎:地域精神科医療モデルの実践がスタッフの支援態度に及ぼす影響の検討:2年間フォローアップ調査の結果. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp323-332, 2014.
- 30) 贅川信幸, 種田綾乃, 山口創生, 伊藤順一郎:地域精神科医療モデルの実践がスタッフの支援態度に及ぼす影響の検討:利用者版評価に基づく検討. 厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「地域生活中心」を推進する, 地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)平成25年度研究報告書. pp333-348, 2014.

(5) その他

- 1) 下平美智代: 精神科サバイバーによる独立運営のコミュニティセンターアナザウェイ. メンタルヘルスマガジン こころの元気 plus, 3月号: pp 30-33, 2014. 3.
- 2) 種田綾乃: 海外の精神障害リハビリテーションの紹介. 精神障害とリハビリテーション, 17(2): 215-217, 2013.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 伊藤順一郎: ご家族のための情報提供セミナー. 心理教育・家族教室ネットワーク第 17 回研究集会, セミナー講演, 宮城, 2014.3.7.

(2) 一般演題

- 1) Yoshida K, Ito J, Katayama Y, Satake S, Nishio M, Sakata M, Sato S, Taneda A: Actual condition survey on outreach activity of multiple-disciplinary team in Japan. World Congress of Social Psychiatry, Lisbon, 2013.6.29-7.3.
- 2) Sato S, Iwata K, Furukawa S, Matsuda Y, Hatsuse N, Watanabe Y, Ikebuchi E: The examination on clinical characteristics of schizophrenia that contribute to the effects of cognitive remediation therapy using the “Cogpack” software. American Psychiatric Association 166th Annual Meeting 2013, San Francisco, 2013.5.21.
- 3) 伊藤順一郎: 地域における統合失調症医療の新たな展開. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-24.
- 4) 伊藤順一郎: 家族による家族自身のリカバリー・トーク 私たちは何を体験したか? 心理教育、セルフヘルプを家族(当事者)の側から語る(その 10). 日本精神リハビリテーション学会 第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.30.
- 5) 伊藤順一郎: 精神科多職種アウトリーチチームの効果: サービス内容やサービス量との関連. 第 33 回日本社会精神医学会, 指定演題, 東京, 2014.3.20.
- 6) 吉田光爾: 多職種アウトリーチサービスと医療経済～診療報酬上の課題と今後～. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-24.
- 7) 吉田光爾, 山口創生, 種田綾乃: 重症精神障がい者の生活時間配分の実態—実態報告および症状・機能および主観的 QOL との関連の検討—. 第 61 回 日本社会福祉学会 秋季大会, 北海道, 2013.9.22.
- 8) 松崎明寿, 吉田光爾: グループホーム・ケアホームにおける精神障害者支援の課題(2)～知的障害者支援との比較から 長期利用の見通し・看取りについて～. 日本精神リハビリテーション学会 第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.29.
- 9) 吉田光爾, 松崎明寿: グループホーム・ケアホームにおける精神障害者支援の課題(1)～知的障害者支援との比較から 通所困難者・入院に関する支援～. 日本精神リハビリテーション学会 第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.29.
- 10) 佐藤さやか, 山口創生, 種田綾乃, 市川 健, 下平美智代, 吉田光爾, 伊藤順一郎, 高井敏子: 障害者就業・生活支援センターにおける精神障害者への就労支援に関する全国実態調査～医療機関との連携に焦点をあてて～. 日本精神リハビリテーション学会 第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.29.
- 11) 坂田増弘, 大島真弓, 大迫充江, 富沢明美, 伊藤明美, 佐藤さやか, 伊藤順一郎: (独) 国立精神・神経医療研究センター「地域精神科モデル医療センター」活動報告～ナショナルセンター病院が地域ケアに挑戦した 3 年間で達成した事、難しかった事～. 日本精神リハビリテーシ

- ョン学会 第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.29.
- 12) 大迫充江, 大島真弓, 伊藤孝子, 高島智昭, 西元麻実, 仲島友子, 清澤康伸, 柴田菜生, 朝波千尋, 坂田増弘, 佐藤さやか, 伊藤順一郎: デイケアにおける就労後の継続支援～働きたい希望が実現した後、新たな希望につながるかかわり～. 日本精神リハビリテーション学会 第21回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.30.
 - 13) 山口創生: 大学生における Reported and Intended Behaviour Scale の信頼性と妥当性の検証. 第 2 回精神保健福祉学会, 埼玉, 2013.6.28.
 - 14) 山口創生, 吉田光爾, 種田綾乃: 重症精神障がい者におけるセルフ・スティグマと精神症状や機能との関連の検証—クロス・セクショナル調査—. 第 61 回日本社会福祉学会秋季大会, 北海道, 2013.9.22.
 - 15) 山口創生, 佐藤さやか, 下平美智代, 池淵恵美, 石井和子, 臼井卓也, 坂田増弘, 佐竹直子, 種田綾乃, 西尾雅明, 吉田光爾, 伊藤順一郎: 重症精神障がい者に対する援助付き雇用における利用者の被支援量サービス・コード票を用いたプロセス・データ分析の途中経過報告. 日本精神リハビリテーション学会第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.30.
 - 16) 下平美智代, 山口創生, 片山 (高原) 優美子, 吉田光爾, 佐藤さやか, 伊藤順一郎: 「日本版 IPS 型就労支援スタンダードズ」 (標準モデル) 作成に係る研究. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 21 回沖縄大会. 沖縄, 2013.11.29.
 - 17) 種田綾乃: 地域住民における精神障害者との関係性構築過程に関する研究—当事者団体との継続的な関わりをもつ住民の“充足感”獲得過程に着目して—. 第 61 回日本社会福祉学会秋季大会, 北海道, 2013.9.21.
 - 18) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 吉田光爾, 佐藤さやか, 鈴木友理子, 西尾雅明, 大野 裕, 佐竹直子, 田島良昭, 三品桂子, 池淵恵美, 武田牧子, 高木俊介, 安保寛明, 後藤雅博, 樋口輝彦: 東日本大震災の被災地における精神保健医療福祉に関するニーズの実態～地域精神保健医療福祉従事者に対するインタビュー調査から～. 日本精神リハビリテーション学会第 21 回沖縄大会, 沖縄, 2013.11.29.
 - 19) 湯本幸平, 末原有紀, 古家美穂, 相澤史人: 児童相談所における一時保護児グループの試み(1) —一時保護中の学齢児を対象とした、コラージュによるグループワークの実践報告—. 第 32 回 日本心理臨床学会秋季大会, 東京, 2013.8.27.
 - 20) 佐藤さやか, 市川 健, 山口創生, 下平美智代, 池田尚彌, 小川友季, 古家美穂, 種田綾乃, 中里章子, 吉田光爾, 伊藤順一郎, 高井敏子: 就業・生活支援センター全国調査 中間報告～精神障がい者への支援、特に医療機関との連携に焦点をあてて～. 全国就業支援ネットワーク 第 15 回定例研究・研修会, 沖縄, 2013.11.1.
 - 21) 種田綾乃, 伊藤順一郎, 吉田光爾, 佐藤さやか, 鈴木友理子, 西尾雅明, 大野 裕, 佐竹直子, 田島良昭, 三品桂子, 池淵恵美, 樋口輝彦: 東日本大震災の被災地における外部支援の中・長期的課題—地域精神保健医療福祉従事者に対するインタビュー調査から—. 第 33 回日本社会精神医学会, 東京, 2014.3.20.

(3) 研究報告会

- 1) 伊藤順一郎, 池淵恵美, 鈴木友理子, 種田綾乃, 深澤舞子, 佐藤さやか, 山口創生: 震災後の中長期支援助地域精神保健医療福祉システムの再構築への支援者支援～ワールド・カフェ方式によるコミュニティ再構築に向けての行動指針づくり～. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業) 「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究 (研究代表者: 樋口輝彦)」研究班交流会, 東京, 2014.1.11.

- 2) 佐藤さやか, 山口創生, 下平美智代, 市川 健, 種田綾乃, 古家美穂, 吉田光爾, 伊藤順一郎 : 重い精神障害をもつ者に対する認知機能リハと援助付き雇用の組み合わせによる就労支援. 平成 25 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所報告会. 東京, 2014.3.10.
- 3) 佐藤さやか, 田口雄太, 石黒 亨, 稲垣晃子, 江口のぞみ, 石井和子, 臼井卓也, 山口創生, 市川健, 下平美智代 : 認知機能リハビリテーションと個別型援助付き雇用モデルによる就労支援に関する研究(B 班)中間報告. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」研究報告会, 東京, 2014.3.15.
- 4) 佐藤さやか, 市川 健, 山口創生, 下平美智代, 池田尚彌, 小川友季, 古家美穂, 種田綾乃, 中里章子, 吉田光爾, 伊藤順一郎, 高井敏子 : 障害者就業・生活支援センターにおける精神障害者への就労支援に関する全国実態調査～医療機関との連携に焦点をあてて～. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」研究報告会, 東京, 2014.3.15.
- 5) 山口創生, 下平美智代, 吉田光爾, 佐藤さやか, 市川 健, 種田綾乃, 古家美穂, 片山優美子, 小川友季, 伊藤順一郎 : 日本版 IPS 型就労支援フィデリティ評価尺度: 評価方法と計算方法の説明. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」, IPS フィデリティ調査研究報告会・意見交換会, 東京, 2014.2.28.
- 6) 山口創生, 佐藤さやか, 市川 健, 下平美智代, 吉田光爾, 種田綾乃, 伊藤順一郎 : 認知リハ+援助付き雇用のプロセス調査: サービス・コード分析の結果. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」研究報告会, 東京, 2014.3.15.
- 7) 山口創生, 泉田信行, 佐藤さやか, 市川 健, 下平美智代, 吉田光爾, 種田綾乃, 伊藤順一郎 : 認知リハ+援助付き雇用の医療経済評価: 費用対効果分析の結果. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」研究報告会, 東京, 2014.3.15.
- 8) 下平美智代, 吉田光爾, 種田綾乃, 片山優美子, 村上 優, 杠 岳文, 檜林理一郎, 吉田和文, 照屋初枝, 松下和香, 井野順奈 : 多職種アウトリーチ地方モデルに関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」研究報告会, 東京, 2014.3.15.
- 9) 下平美智代, 山口創生, 吉田光爾, 佐藤さやか, 市川 健, 種田綾乃, 古家美穂, 片山優美子, 小川友季, 伊藤順一郎 : 日本版 IPS 型就労支援フィデリティ評価ツールの開発に係る研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業(精神疾患関係研究分野))「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究(研究代表者:伊藤順一郎)」IPS フィデリティ調査研究報告会・意見交換会, 東京, 2014.2.28.
- 10) 種田綾乃, 鈴木友理子, 伊藤順一郎, 吉田光爾, 佐藤さやか, 深澤舞子 : 福島県における精神障害をもつ者の震災後の生活実態に関する調査について. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福

社システムの再構築に資する中長期支援に関する研究（研究代表者：樋口輝彦）」研究班会議・報告会，東京，2014.1.11.

- 11) 種田綾乃，贅川信幸，山口創生：モデル実施が支援スタッフの意識・態度に及ぼす影響～利用者評価に基づく検討～. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」研究報告会，東京，2014.3.15.
- 12) 贅川信幸，種田綾乃，山口創生，伊藤順一郎：多職種アウトリーチおよび援助付き雇用にかかわるスタッフの態度調査. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（精神疾患関係研究分野））「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）」研究報告会，東京，2014.3.15.

C. 講演

- 1) 伊藤順一郎：日常の臨床場面で活かせる心理教育の姿勢スキル. 第 4 回岡山県北心理教育フォーラム in 津山，岡山，2013.4.19.
- 2) 伊藤順一郎：包括型地域生活支援 ACT について. 第 23 回急性期治療研究会，京都，2013.4.20.
- 3) 伊藤順一郎：明日の地域医療，福祉を語りあう会. 第 7 回神奈川訪問支援研究会，神奈川，2013.5.16.
- 4) 伊藤順一郎：地域に届けるこころの医療. 成田・地域でともに歩む会かたつむり講演会，千葉，2013.5.18.
- 5) 伊藤順一郎：ACT（アウトリーチ）がつくる地域精神医療～精神科病院を出て、町へ～. 汐入地区精神科医療勉強会，神奈川，2013.5.30.
- 6) 伊藤順一郎：自分らしく生きる. 心の健康を考える家族のつどい講演会，香川，2013.6.27.
- 7) 伊藤順一郎：アメリカのACTからの視点. 日本精神神経科診療所協会 平成 25 年度定時総会第 19 回学術研究会，北海道，2013.6.30.
- 8) 伊藤順一郎：精神科病院を出て、町へ 地域精神医療のつくりかた. 相模原市精神障害者家族創立 40 周年記念講演会，神奈川，2013.7.7.
- 9) 伊藤順一郎，福井里江：リカバリーを応援する当事者・医師関係とは？. リカバリー全国フォーラム 2013，東京，2013.8.21.
- 10) 伊藤順一郎：ACT がつくる地域精神医療. NPO 法人 地域への翼・エール設立記念講演会，千葉，2013.8.29.
- 11) 伊藤順一郎：みんなで語ろう！リカバリーwith 伊藤順一郎先生. 摂食障害家族の会ポコ・ア・ポコ講演会，千葉，2013.10.19.
- 12) 伊藤順一郎：家族心理教育. 日本家族研究・家族療法学会地域ワークショップ in 新潟，新潟，2013.10.27.
- 13) 伊藤順一郎：ストレングスモデルに基づくケースマネジメント. シンポジウム『医療と相談と事業所から考えるリカバリー』，沖縄，2013.11.3.
- 14) 伊藤順一郎：「地域精神医療の最前線」市川で何ができるか？. 心の健康を守る会家族会講演，千葉，2013.11.8.
- 15) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ、町へ出よう—アウトリーチで生かせる SST の要素. SST 普及協会第 18 回学術集会 in えひめ，愛媛，2013.12.7.
- 16) 伊藤順一郎：イタリア精神保健改革をもっと深く知りたい！. 「むかし Matto の町があった」自主上映会特別企画講演会，東京，2013.12.10.

- 17) 伊藤順一郎：イタリア精神保健改革をもっと深く知りたい！。「むかし Matto の町があった」自主上映会特別企画講演会，大阪，2013.12.13.
- 18) 伊藤順一郎：「むかし Matto の町があった」上映会前の講演会，埼玉，2013.12.14.
- 19) 伊藤順一郎：「むかし Matto の町があった」上映会前の講演会，千葉，2014.1.15.
- 20) 伊藤順一郎：地域精神保健福祉におけるアウトリーチとリカバリー．こころと福祉の相談会，神奈川，2014.2.15.
- 21) 伊藤順一郎：アウトリーチとこれからの精神科医療の行方．滋賀県精神科医会学術講演会，滋賀，2014.3.22.
- 22) 下平美智代：精神障害をもつ人のための援助付き雇用プログラム『IPS 型就労支援』の紹介．熊本市こころの健康センター講演会，熊本，2013.8.28.
- 23) 種田綾乃：支援を求めない人々をどう支援するか～学校におけるソーシャルワークの実践から～．第3回伊勢原市地域教育機関等連絡協議会，神奈川，2013.11.12.
- 24) 種田綾乃：精神障がい者を地域で支える．人間関係とコミュニケーションⅡ，神奈川県立保健福祉大学，2013.12.20.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会役員

- 1) 伊藤順一郎：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
日本統合失調症学会 評議員
日本家族研究・家族療法学会 評議員

(2) 座長

- 1) 伊藤順一郎：家族心理教育の現在．日本家族研究・家族療法学会 第30回東京大会 座長，東京，2013.6.22.
- 2) 伊藤順一郎：韓国での反スティグマ運動と心理社会的リハビリテーション 座長．日本精神リハビリテーション学会 第21回沖縄大会沖縄，沖縄，2013.11.30.
- 3) 伊藤順一郎：心理教育はどこへいくのか．心理教育・家族教室ネットワーク 第17回研究集会，シンポジウム座長，宮城，2014.3.7.
- 4) 伊藤順一郎：多職種アウトリーチの実践が変える精神保健医療福祉—病院、地域、ケアマインドへのチャレンジャー．第33回日本社会精神医学会，シンポジウム座長，東京，2014.3.20.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 伊藤順一郎：日本家族研究・家族療法学会 編集委員
心理教育・家族教室ネットワーク 運営委員
リハビリテーション研究 編集委員
- 2) 吉田光爾：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
日本社会福祉学会 査読委員
- 3) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 伊藤順一郎，吉田光爾：平成25年度精神保健に関する技術研修．第1回精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修，東京，2013.7.17-19.

- 2) 伊藤順一郎, 吉田光爾:平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 11 回 ACT 研修, 東京・千葉, 2013.9.3-6.
- 3) 伊藤順一郎, 吉田光爾:平成 25 年度精神保健に関する技術研修. 第 5 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修, 東京, 2013.9.3-6.

(2) 研修会講師

- 1) 伊藤順一郎:IPS 型就労支援について. 第 1 回精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修, 東京, 2013.7.17.
- 2) 伊藤順一郎:ストレングスモデルのケアプラン作り. 第 11 回 ACT 研修および第 5 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修, 東京, 2013.9.4.
- 3) 伊藤順一郎:精神障がい者の地域生活を支援する～被災地における地域精神保健福祉活動の進め方. 市町村職員等スキルアップ研修会, 福島, 2013.9.19.
- 4) 伊藤順一郎:リスクマネジメント. ACT 全国研修 浜松大会, 静岡, 2013.11.24.
- 5) 伊藤順一郎:愛知県立城山病院 ACT 研修会, 愛知, 2014.1.17.
- 6) 伊藤順一郎:これからの 10 年で精神科診療所に達成してほしいこと～地域連携を中心に～. 第 14 回日本精神神経科診療所協会 日精診チーム医療・地域リハビリテーション研修会 埼玉大会, 埼玉, 2014.2.9.
- 7) 伊藤順一郎:ストレングスモデルおよびリカバリー. 2013 年度日本財団助成事業 ACT を含むアウトリーチ支援に係るスタッフ研修会, 静岡, 2014.2.11.
- 8) 伊藤順一郎:”Matto の街” から考える～市川・暮らし・医療～. イタリア短期海外研修報告, 千葉, 2014.2.19.
- 9) 伊藤順一郎:司法精神保健福祉① 家族支援の方法. 第 1 回社会復帰調整官専修科研修, 東京, 2014.2.27.
- 10) 吉田光爾:アウトリーチによるケアマネジメント概論. 第 11 回 ACT 研修および第 5 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修, 東京, 2013.9.3.
- 11) 吉田光爾:アウトリーチに必要なプログラムモニタリングとは. 第 11 回 ACT 研修, 千葉, 2013.9.6.
- 12) 佐藤さやか:地域での就労支援に役立つ認知行動療法 (その 1). 障害者就職サポートセンタービルド, 市川, 2013.12.25.
- 13) 佐藤さやか:地域での就労支援に役立つ認知行動療法 (その 2). ユースキャリアセンターフラッグ, 市川, 2014.1.29.
- 14) 佐藤さやか:地域生活支援と認知行動療法 (その 2). 福島こころのネットワーク, 郡山, 2014.3.27.
- 15) 山口創生, 下平美智代:精神障がい者に対する就労支援:エビデンスにみる効果的な就労支援. 訪問看護ステーション QACT, 福岡, 2013.12.18.
- 16) 下平美智代, 山口創生, 梅田典子:IPS 型就労支援におけるケアマネジメントの重要性. 社会生活サポートセンターこみっと勉強会, 東京, 2013.7.30.
- 17) 下平美智代:オープンダイアログとは何か?. オープンダイアログ勉強会, NPO 法人 NECST クラブハウス ForUs, 千葉, 2014.3.28.
- 18) 種田綾乃:スクールソーシャルワークの実際. スクールソーシャルワーク基礎講座, スクールソーシャルワーカー実践研究会, 神奈川, 2013.12.22.
- 19) 種田綾乃:障がい者の地域生活を支える視点としくみ:障害者支援の概要と「援助を求めない対象者」への支援をめぐる. スクールソーシャルワーク基礎講座, スクールソーシャルワーカー実践研究会, 神奈川, 2014.1.19.

F. その他

- 1) 伊藤順一郎：全国版精神障がい親と暮らす子どもの集い・交流会における助言。東京，2013.8.31.
- 2) 伊藤順一郎：統合失調症の患者にとっての、結婚や出産における課題などについて。毎日新聞夕刊「特集ワイド ニュースアップ」電話取材，東京，2013.9.12. (9/26 掲載，岡山)
- 3) 伊藤順一郎：シンポジウム「ひきこもり支援に求められるもの」コメンテーター，宮城，2013.9.18.
- 4) 伊藤順一郎：100人に1人がかかる、「統合失調症」とは？. BLOGOS チャンネル出演，東京，2013.10.4.
- 5) 伊藤順一郎：さいたま市 ACT 推進会議運営委員による事例検討会，埼玉，2013.11.11.
- 6) 伊藤順一郎：特集 2「ストレスが原因の摂食障害」. 「みんなの健康ライブラリー」 2014 年 2 月号掲載 / 「みんなの健康ライブラリー」「Web Magazine へるす UP」・「Web 家庭の医学」サイト監修，保健同人社，東京，2014.2.
- 7) 伊藤順一郎：精神科医療従事者向け情報誌「CONSONANCE」2014 年春号. 記事取材，東京，2014.2.7. (4 月上旬発行予定)

12. 司法精神医学研究部

I. 研究部の概要

司法医学研究部は、平成 15 年 7 月 10 日「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」の成立に伴い、同年 10 月に第 11 番目の研究部として新たに設置された。精神鑑定研究室、専門医療・社会復帰研究室、制度運用研究室の 3 室より構成されている。

（精神鑑定研究室を中心とする研究）

- ・ 刑事、民事、家事等の各種の精神鑑定の全国的な均霑化に関する研究
- ・ 司法精神医療の領域における各種の評価方法（リスクアセスメント）についての研究
- ・ 犯罪捜査支援（プロファイリング）と犯罪解決支援の精神医学的方法の開発研究

（専門医療・社会復帰研究室を中心とする研究）

- ・ 司法精神医療における専門的治療技法の開発
- ・ 司法精神医療の領域における各種の予防策や対処策（リスクマネジメント）についての研究
- ・ 犯罪被害者の心理的影響と支援方法についての研究

（制度運用研究室を中心とする研究）

- ・ 医療観察法の制度運用に関するモニタリング調査研究
- ・ 司法精神医療の領域における各種の情報共有（リスクコミュニケーション）のシステムに関する研究
- ・ 司法精神医療における ICF（国際生活機能分類）の利用に関する研究

平成 25 年度の人員構成は、部長：岡田幸之、精神鑑定研究室長：安藤久美子、専門医療・社会復帰研究室長：菊池安希子、制度運用研究室長：岡田幸之（平成 25 年 1 月 1 日～平成 26 年 2 月 28 日：部長併任）、制度運用研究室長：藤井千代（平成 26 年 3 月 1 日～）、任期付研究員：津村秀樹、河野稔明、曾雌崇弘（平成 26 年 1 月 1 日～）である。併任研究員として独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院医師の野田隆政、同病院臨床心理技術者の朝波千尋、研究生として武蔵野大学大学院人間社会研究科人間社会専攻の浅野敬子、科研費研究補助員として中澤佳奈子（平成 25 年 4 月 1 日～平成 25 年 8 月 31 日）、小山繭子、宮澤絵里、科研費研究助手として山田華世を迎えて研究に臨んだ。

II. 研究活動

1) 心神喪失者等医療観察法制度の指定入院モニタリング調査研究

本研究は、医療観察制度の指定入院医療機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関にフィードバックするものである。データ収集にあたっては、全国の指定入院医療機関の協力により、その臨床情報から、対象者の基礎情報（氏名、住所等の個人を特定する情報を除く）、治療期間や治療内容、退院に際しての住居の確保、社会復帰における連携状況等に関する情報などを収集し、解析した。平成 25 年度は、平成 23 年 7 月 15 日までの医療観察法入院処遇対象者で見える限り、性別、診断、対象行為などの基本プロフィールには著変がない中、入院処遇期間の延長傾向が続いていることに関連している転院について解析を行い、遠隔地からの転院が必ずしも退院の円滑化につながっているとはいえないことを示した。また平成 26 年度に行う全国調査の準備に入った。（岡田、菊池、河野、藤井）

2) 心神喪失者等医療観察法制度の指定通院モニタリング調査研究

本研究は、医療観察制度の指定入院医療機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関にフィードバックするものである。データ収集にあたっては、全国の指定通院医療機関の協力により、その臨床情報から、対象者の基礎情報（氏名、住所等の個人を特定する情報を除く）に加え、通院処遇中の精神保健福祉法による入院や通院処遇中

の問題行動の有無に関しても詳細な情報を収集し、解析した。その結果、通院処遇開始後、初期の段階で自殺や再入院などの問題が発生していることや、通院処遇者の約半数が精神保健福祉法による入院をしていることなどの実態を明らかにすることができた。(岡田, 安藤, 津村, 中澤, 宮澤)

3) 刑事責任能力の評価に関する研究

司法精神鑑定の公平性の実現は長年にわたる懸案事項である。岡田・安藤らは、この刑事責任能力の評価・判定方法について精神医学と法学の両側面から、その標準化をはかるべく研究を行っている。本年度は、裁判員制度における精神鑑定の方法、および鑑定結果の報告の方法について、法実務家、法律学者を交えた検討を行い、次年度にむけた研究体制の拡充をはかった。(岡田, 安藤)

4) 重度精神障害者に対する医療観察法指定入院・通院医療機関において実施する治療プログラムの開発に関する研究

重度精神障害者の再犯防止にむけて、世界17ヶ国の刑務所ならびに司法精神科において、標準的に実施されている Reasoning & Rehabilitation 2 for Youths and Adults with Mental Health Problems の日本版を作成した。平成25年度は、司法精神科のプログラムの効果測定に有用と考えられる犯罪親和性尺度の信頼性・妥当性の検討を行った。(菊池)

5) 生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的アセスメントツールの開発研究

暴力等のリスクアセスメントについては、その評価基準があいまいで、臨床家ごとにリスク判断にもばらつきがみられるといった問題点なども指摘されており、司法精神医学分野では、客観的なアセスメント手法の開発の必要性が以前より求められてきた。本研究では、疫学統計的、および臨床的観点から見たファクターと、生体反応を用いた科学的観点に基づくファクターとを組み合わせ、包括的なアセスメントツールを開発することを最終目的とし、その第一段階として、初年度は「衝動性」を取り上げて、その生理学的反応を鋭敏に反映する実験課題の開発に取り組んだ。平成25年度は視覚的な情動刺激を組み合わせた Go/Nogo 課題を実施し、課題中の ERP 成分の変化について検討した。その結果、negative な刺激画像の場合では P2 および P3 の振幅が有意に大きくなること、Nogo 試行の場合には Go 試行と比較して P3 の振幅が有意に大きくなることわかった。また、P3 の振幅が大きいほど、行動抑制に関係した衝動性尺度とされる BIS 得点が低くなっていたことから、次年度はさらにサンプル数を増やして確認し、衝動性の客観的評価となる生理的指標を抽出する予定である。(安藤, 曾雌, 津村)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

岡田幸之、安藤久美子は、裁判所、検察庁の依頼による刑事司法鑑定および心神喪失者等医療観察法の鑑定を行い、市民社会に貢献した。

安藤久美子は警視庁の依頼により、人質立てこもり事件等における支援活動員を務め、市民社会に貢献した。

2) 専門教育面における貢献

岡田幸之は、科学警察研究所において、捜査担当者を対象とした「犯罪者プロファイリング課程研修講義：精神鑑定・精神医学概論」を担当し、捜査実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は、法務総合研究所において、検察官を対象として「刑事責任能力」に関する講義を担当し、法実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は、司法研修所において、裁判官を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務につく法律家の養成に貢献した。

岡田幸之は、東京医科歯科大学において、非常勤講師を務め、司法精神医療に携わる看護師の養成に貢献した。

菊池安希子は、法務省心神喪失者等医療観察法制度導入研修において、「司法精神科医療におけるリスク管理」についての講義を行い、地域処遇実務につく社会復帰調整官の研修に貢献した。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター病院にて実施されている Social Cognition and Interaction Training (SCIT) の日本版実施についてのスーパービジョンを週 1-2 回実施した。

菊池安希子は、認知行動療法センターの研修指導部教育開発室長を併任して、研修を担うだけでなく、日本認知療法学会の開催に事務局長として関わり、認知行動療法の専門家の育成に協力した。

安藤久美子は、関東管区警察学校において、全国の警察機関に所属する上級カウンセラーを対象に「精神医学的からみた非行少年の特性」について講義を行い、警察所属の少年カウンセラーの養成に貢献した。

安藤久美子は、警察大学校において、全国の警察本部に所属する児童ポルノ担当警察官らを対象に「児童ポルノ被害者の心理」に関する講義を行い、警察官の教育等に貢献した。

安藤久美子は、法務総合研究所において、新任検事を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務につく法実務家の養成に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

岡田幸之、安藤久美子、菊池安希子、津村秀樹、河野稔明は、国立精神・神経医療研究センター平成 25 年度第 8 回司法精神医学研修にて講義を行った。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターの研修において統合失調症の認知行動療法についての講義を行った。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

岡田幸之、安藤久美子、菊池安希子は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究」の運用にあたり有用な基礎的情報をモニタリング研究により収集し、その結果を医療の現場へと提供し、その質の向上に貢献した。

安藤久美子は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」の実施にあたり海外ツールの翻訳をはじめとする有用な基礎的情報の提供に貢献した。

5) センター内における臨床的活動

岡田幸之、安藤久美子は、病院第一病棟部精神科医師を併任し、臨床的活動を行った。

岡田幸之、菊池安希子、藤井千代、河野稔明は、医療観察法病棟（8 病棟、9 病棟）運営会議に出席し、臨床的活動を行った。

岡田幸之、安藤久美子、藤井千代は、医療観察法鑑定入院（5 階北病棟）に、鑑定医、および鑑定助手として協力した。

菊池安希子は、病院臨床心理技術者を併任し、医療観察法病棟及び外来、デイケアにおいて臨床的活動を行った。

安藤久美子は、臨床治験の分担医師として複数の患者を担当し、新薬開発のために貢献した。

津村秀樹、曾雌崇弘は、病院併任研究員として、病院の臨床活動に基づく研究に貢献した。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ando K, Okada T, Hirabayashi N: Current status and challenges on the medical treatment and supervision act. *Journal of Japan Psychiatric Association* 31(7): 36-41, 2013.
- 2) Kanie A, Hagiya K, Ashida S, Kaneko K, Mogami T, Oshima S, Motoya M, Niwa S, Inagaki A, Ikebuchi E, Kikuchi A, Yamasaki S, Iwata K, Roberts DL, Nakagome K: New instrument for measuring multiple domains of social cognition: construct validity of the Social Cognition Screening Questionnaire (Japanese version). *Psychiatry Clin Neurosci*. 2014 Mar 11. doi: 10.1111/pcn.12181. [Epub ahead of print]

- 3) 安藤久美子：裁判員裁判における精神鑑定の役割と実際. 司法精神医学 9(1)：90-94, 2014.
- 4) 趙 香花, 長沼洋一, 河野稔明, 立森久照, 野口正行, 藤田健三, 太田順一郎, 西 大輔, 竹島正：岡山県の医療保護入院患者と保護者に関する実態調査. 日本社会精神医学会雑誌 22：440-451, 2013.

(2) 総説

- 1) 岡田幸之：精神鑑定の実際—鑑定人が直面する難問とその解決のヒント. 日本社会精神医学会雑誌 22(3)：287-293, 2013.
- 2) 岡田幸之：精神鑑定. 物質使用障害とアクティクシオン臨床ハンドブック. 精神科治療学 28 増刊号：380-385, 2013.
- 3) 岡田幸之：責任能力判断の構造と着目点—8 ステップと 7 つの着目点—. 精神経誌 115(10)：1064-1070, 2013.
- 4) 岡田幸之：司法精神医学. これだけは知っておきたい精神科の診かた, 考え方. 各科研修シリーズ, 羊土社, 198-201, 2014.
- 5) 菊池安希子：精神科入院病棟における CBT for Psychosis. 特集 統合失調症の認知行動療法 (CBTp) —わが国での現状と今後の展望—. 精神神経学雑誌 115(4)：385-389, 2013.
- 6) 菊池安希子：社会的認知／メタ認知／認知機能リハビリテーション. 特集 精神保健・医療・福祉の今がわかるキーワード 126. 精神科臨床サービス 13(2)：214-215, 2013.
- 7) 安藤久美子：高機能自閉症スペクトラムの理解—社会との接点を考える—. 郡山精神医療第 27：85-97, 2013.
- 8) 安藤久美子：非行 (窃盗、性非行). 子どもの精神医学を学ぶ. 児童心理臨時増刊 981：39-44, 2014.
- 9) 安藤久美子：法廷で精神障害を説明するという事. 精神科 24(3)：374-377, 2014.
- 10) 河野稔明, 菊池安希子, 安藤久美子, 岡田幸之：医療観察法施行から 8 年間の研究の概観. 精神保健研究 60：81-88, 2014.

(3) 著書

- 1) 中谷陽二, 岡田幸之：精神科医療. シリーズ生命倫理学 9 (責任編集), 丸善出版, 東京, 2013.
- 2) 岡田幸之：第 3 章医療観察法. 教育問題委員会 司法精神医学作業部会 編：臨床医のための司法精神医学入門. 新興医学出版, 東京, pp38-54, 2013.
- 3) 岡田幸之：第 75 章 触法行為と精神鑑定. 日本統合失調症学会 監修：福田真人, 糸川昌成, 村井俊哉, 笠井清澄 編集：統合失調症. 医学書院, 東京, pp717-725, 2013.
- 4) 菊池安希子：ブリーフ的 CBT または CBT 的ブリーフ. 津川秀夫, 大野裕史 編：ブリーフセラピーと認知行動療法の接点, pp90-118, 日本評論社, 東京, 2014.
- 5) 菊池安希子：第 8 章心理療法. 中谷陽二・岡田幸之 編：シリーズ生命倫理学第 9 巻「精神医療」. pp116-130, 丸善出版, 東京, 2013.
- 6) 菊池安希子：Q54 幻覚妄想状態の患者さんへの認知行動療法 (CBT) のポイントは何ですか? Q&A でひもとく高次脳機能障害. pp143-145, 医歯薬出版株式会社, 東京, 2013.
- 7) 安藤久美子：第 7 章 少年事件と鑑定. 教育問題委員会 司法精神医学作業部会 編：臨床医のための司法精神医学入門. 新興医学出版, 東京, pp135-154, 2013.
- 8) 安藤久美子：素行障害. —診断と治療のガイドライン—齊藤万比古 編：金剛出版, 東京, pp23-32, 2013.
- 9) 河野稔明：第 9 章「資料」第 3 節「統計資料」表 12-20, 図 8・9, 解説 (都道府県別, 医療費). 精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014 年版—歩み始めた地域総合支援. 中央法規出版, 東京, pp209-218・230-231, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 岡田幸之, 菊池安希子, 安藤久美子, 河野稔明, 中澤佳奈子, 津村秀樹, 宮澤絵里, 三澤孝夫, 長沼洋一, 長沼葉月, 佐野雅隆, 安藤幸宏, 磯村信治, 今井淳司, 岩間久行, 上馬場伸始, 大鶴卓, 桂木正一, 来住由樹, 下田光太郎, 武井満, 中川伸明, 中嶋正人, 中谷紀子, 中根潤, 長澤淳也, 西岡直也, 野田哲朗, 平林直次, 三澤史斉, 村上直人, 村杉謙次, 村田昌彦, 吉岡眞吾, 山口博之, 山畑良蔵, 山本暢朋: 医療観察法対象者のモニタリング体制の確立に関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」総括・分担研究報告書. pp135-141, 2014.
- 2) 岡田幸之, 菊池安希子, 安藤久美子, 河野稔明, 中澤佳奈子, 津村秀樹, 宮澤絵里, 三澤孝夫, 長沼洋一, 長沼葉月, 佐野雅隆, 安藤幸宏, 磯村信治, 今井淳司, 岩間久行, 上馬場伸始, 大鶴卓, 桂木正一, 来住由樹, 下田光太郎, 武井満, 中川伸明, 中嶋正人, 中谷紀子, 中根潤, 長澤淳也, 西岡直也, 野田哲朗, 平林直次, 三澤史斉, 村上直人, 村杉謙次, 村田昌彦, 吉岡眞吾, 山口博之, 山畑良蔵, 山本暢朋: 医療観察法対象者のモニタリング体制の確立に関する研究. 平成23-25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」総合研究報告書. pp73-83, 2014.
- 3) 菊池安希子, 河野稔明, 岡田幸之, 安藤久美子, 津村秀樹, 長沼洋一, 長沼葉月, 佐野雅隆, 安藤幸宏, 磯村信治, 今井淳司, 岩間久行, 上馬場伸始, 大鶴卓, 桂木正一, 来住由樹, 下田光太郎, 武井満, 中川伸明, 中嶋正人, 中谷紀子, 中根潤, 長澤淳也, 西岡直也, 野田哲朗, 平林直次, 三澤史斉, 村上直人, 村杉謙次, 村田昌彦, 吉岡眞吾, 山口博之, 山畑良蔵, 山本暢朋: 指定入院医療機関モニタリングに関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」総括・分担研究報告書. pp93-106, 2014.
- 4) 菊池安希子, 河野稔明, 岡田幸之, 安藤久美子, 津村秀樹, 長沼洋一, 長沼葉月, 佐野雅隆, 安藤幸宏, 磯村信治, 今井淳司, 岩間久行, 上馬場伸始, 大鶴卓, 桂木正一, 来住由樹, 下田光太郎, 武井満, 中川伸明, 中嶋正人, 中谷紀子, 中根潤, 長澤淳也, 西岡直也, 野田哲朗, 平林直次, 三澤史斉, 村上直人, 村杉謙次, 村田昌彦, 吉岡眞吾, 山口博之, 山畑良蔵, 山本暢朋: 指定入院医療機関モニタリングに関する研究. 平成23-25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」総合研究報告書. pp57-62, 2014.
- 5) 菊池安希子, 佐藤さやか, 吉田統子, 小山繭子, 河野稔明: メタ認知トレーニングの効果に関する予備的研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害対策総合研究事業)「統合失調症のリハビリテーションの開発と効果検証に関する研究(研究代表者:中込和幸)」総括・分担研究報告書. pp41-44, 2014.
- 6) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 宮澤絵里, 津村秀樹, 三澤孝夫, 菊池安希子, 岡田幸之: 指定通院医療機関モニタリング調査研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」総括・分担研究報告書. pp109-131, 2014.
- 7) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 宮澤絵里, 津村秀樹, 三澤孝夫, 菊池安希子, 岡田幸之: 指定通院医療機関モニタリング調査研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」総合研究報告書. pp65-69, 2014.
- 8) 安藤久美子, 今井淳司, 柴野壮一, 中澤佳奈子: 医療観察法対象者/裁判事例についての検討.

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「児童・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究（研究代表者：内山登紀夫）」総括・分担研究報告書. pp59-74, 2014.

- 9) 柘屋二郎, 飯盛眞樹雄, 安藤久美子: 児童・思春期における発達障がいを抱えた触法ケースに対する矯正医療の在り方についての研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「児童・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究（研究代表者：内山登紀夫）」総括・分担研究報告書. pp75-91, 2014.
- 10) 竹島 正, 河野稔明, 立森久照, 菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子, 岡田幸之: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—在院期間からみた医療観察法入院処遇と一般精神科入院治療の地域・医療機関特性の関連. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書. pp29-33, 2014.

(5) 翻訳

- 1) 菊池安希子 監訳, 網本 和, 大嶋伸雄 訳 (Marie Donaghy, Maggie Nicol, Kate Davidson): 臨床が変わる! PT・OT のための認知行動療法入門. 医学書院, 東京, 2014.

(6) その他

- 1) 安藤久美子: 暴力のリスクアセスメント. 定例研修会Ⅲ 第2回 司法・法務・警察領域専門研修会をもとに, 日本臨床心理士会雑誌22(1): 69-70, 2013.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 岡田幸之: シンポジウム 26 「精神鑑定の科学化を目指して」. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.24.
- 2) 岡田幸之: 第 5 回刑事精神鑑定ワークショップ「事例検討」(司会). 第 9 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2013.6.1.
- 3) 岡田幸之: 鑑定ワークショップ(講師). 東京, 2013.12.21-22.
- 4) 岡田幸之: 特別講演「司法精神医学会の新しい認定制度と鑑定書のあり方について」. 平成 25 年度花巻病院司法精神医学シンポジウム, 岩手, 2014.1.18.
- 5) 菊池安希子: リスクアセスメント会議及びワークショップ. エジンバラ, 2013.4.15-19.
- 6) 菊池安希子: 自主シンポジウム 6: 統合失調症の認知行動療法(CBT)—アセスメントからのケースフォーミュレーションへ(指定討論者). アジア認知行動療法会議学術総会 2013, 東京, 2013.8.25.
- 7) 菊池安希子: シンポジウム「うつ病に対するスティグマ的認知の理論的検討—大学生の援助要請を促進するために—」(指定討論者). 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, 神奈川, 2013.8.26.
- 8) 菊池安希子: シンポジウム「メンタルヘルス・サービスに対するスティグマの理論的検討—大学生におけるうつ病・抑うつにおけるサービス・ギャップ改善のために—」(指定討論者). 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, 東京, 2013.8.26.
- 9) 遊佐安一郎, 菊池安希子: ワークショップ: 境界性パーソナリティ障害などで感情調節が困難な方のための支援の工夫: 弁証法的行動療法、スキーマ療法などから学ぶ. 日本ブリーフサイコセラピー学会第 23 回 TOKYO 駒沢大会, 東京, 2013.9.1.
- 10) 菊池安希子: 「司法精神科における認知行動療法」. 日本心理学会公開シンポジウム「医療現場

における心理学—認知行動療法が切り開く地平」(シンポジスト), 東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE レクチャーホール, 東京, 2013.10.20.

- 11) 安藤久美子: シンポジウム 7「裁判員制度と精神鑑定」. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
- 12) 安藤久美子: シンポジスト「裁判員裁判における精神鑑定の役割と実際」. 第 9 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2013.5.31.
- 13) 安藤久美子: シンポジスト「指定医療機関の連携に向けて」. 平成 25 年度花巻病院司法精神医学シンポジウム, 岩手, 2014.1.18.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi A, Naganuma Y, Ando K, Okada T: Characteristics and length of stay of patients admitted to forensic units in Japan. The 13th International Association of Forensic Mental Health Services, MECC, Maastricht, 2013.6.18.
- 2) Kikuchi A, Ozaki S, Kuniyoshi M, Ando K, Okada T: Reliability and validity of the Japanese version of criminal sentiments scale modified. The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy(CBT) Conference, Tokyo, 2013.8.23.
- 3) 菊池安希子, 長沼洋一, 三澤孝夫, 福田 敬, 津村秀樹, 安藤久美子, 岡田幸之: 東京都の常勤精神保健指定医の医療観察法通院医療に関する意識調査. 第 9 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2013.5.31.
- 4) 安藤久美子, 中澤佳奈子, 浅野敬子, 津村秀樹, 岡田幸之: 加害者家族のメンタルヘルス. 日本犯罪学会百年記念大会, 東京, 2013.11.15.
- 5) 安藤久美子, 水藤昌彦, 榎屋次郎, 野沢和弘, 堀江まゆみ: 知的障害をもつ性犯罪加害者への認知行動療法アプローチ: SOTSEC-ID への招待. 日本犯罪学会百年記念大会, 東京, 2013.11.15.
- 6) 津村秀樹, 安藤久美子, 中澤佳奈子, 野田隆政, 岡田幸之: 事象関連電位を用いた衝動性の神経認知的機序に関する研究. 第 33 回日本社会精神医学会, 東京, 2014.3.21.
- 7) 福田 敬, 菊池安希子, 長沼洋一, 三澤孝夫, 安藤久美子, 岡田幸之: 東京都の医療観察法指定通院医療機関における業務量に関する研究. 第 9 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2013.5.31.
- 8) 中澤佳奈子, 安藤久美子, 浅野敬子, 津村秀樹, 岡田幸之: 医療観察法における被害者家族の実態とその支援について. 第 9 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2013.6.1.
- 9) 宮澤絵里, 安藤久美子, 中澤佳奈子, 浅野敬子, 津村秀樹, 長沼洋一, 菊池安希子, 岡田幸之: 医療観察法通院対象者における精神保健福祉法による入院に関する分析. 第 9 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2013.5.31.

(3) 研究報告会

- 1) 岡田幸之, 安藤久美子: 第 8 回 TFPC 研究会, 東京, 2013.4.27.
- 2) 岡田幸之, 安藤久美子: 責任能力・精神鑑定関係共同研究平成 25 年度第 1 回研究会, 東京, 2013.6.4.
- 3) 岡田幸之: 第 9 回 TFPC 研究会, 東京, 2013.7.6.
- 4) 岡田幸之, 菊池安希子, 安藤久美子, 河野稔明: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究(研究代表者:五十嵐禎人)」第 1 回研究班会議, 東京, 2013.7.20.
- 5) 岡田幸之: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「医療観察法による転帰に関する研究(分担研究者:兼行浩史)」第 1 回分担研究班会議, 東京, 2013.7.21.

- 6) 岡田幸之：責任能力・精神鑑定関係共同研究平成 25 年度第 2 回研究会，京都，2013.9.29.
- 7) 岡田幸之：日弁連・司法精神医学会協議会，東京，2013.10.5.
- 8) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，河野稔明：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究（研究代表者：五十嵐禎人）」第 2 回班会議，東京，2013.12.8.
- 9) 岡田幸之，安田拓人，安藤久美子，渡邊和美，菊池安希子：司法精神医療と刑事司法制度における精神医学的アセスメントから意志決定に至るクリティカルパスの開発と普及．平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会，東京，2013.12.16.
- 10) 岡田幸之，安藤久美子：責任能力・精神鑑定関係共同研究平成 25 年度第 3 回研究会，東京，2013.12.17.
- 11) 岡田幸之：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法の向上と関係機関の連携に関する研究（研究代表者：中島豊爾）」第 2 回全体会議，東京，2014.1.11.
- 12) 岡田幸之，河野稔明：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」第 2 回班会議および研究班内シンポジウム，東京，2014.1.23.
- 13) 岡田幸之：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法対象者の円滑な社会復帰促進に関する研究（研究代表者：平林直次）」第 2 回班会議，東京，2014.1.24.
- 14) 岡田幸之，安藤久美子：心神喪失者等医療観察法関係研究協議会，東京，2014.1.31.
- 15) 岡田幸之，安藤久美子：日本司法精神医学会との協議会（第 11 回）日本弁護士連合会共同研究会，東京，2014.2.8.
- 16) 岡田幸之，安藤久美子：第 10 回 TFPC 研究会，東京，2013.3.15.
- 17) 菊池安希子：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発と効果検証に関する研究（研究代表者：中込和幸）」班会議，東京，2013.6.2.
- 18) 菊池安希子：東京都医療観察法地域処遇体制基盤構築事業調査結果の概要．第 87 回 東京医療観察法関係機関連絡協議会，東京，2013.7.4.
- 19) 菊池安希子：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金「医療観察法指定医療機関ネットワークによる共通評価項目の信頼性と妥当性に関する研究（研究代表者：壁屋康洋）」班会議，千葉，2013.9.28.
- 20) 菊池安希子：ブリーフセラピー的認知行動療法入門．駒沢ブリーフサイコセラピー研究会，東京，2013.11.11.
- 21) 菊池安希子，國吉美也子，河野稔明，小山繭子，岡田幸之：医療観察法における各種心理プログラムの現状把握と新たな手法の開発．平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会，東京，2013.12.16.
- 22) 菊池安希子：平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費「統合失調症の診断、治療法の開発に関する研究Ⅱ（主任研究者：中込和幸）」班会議，東京，2014.1.13.
- 23) 菊池安希子：平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発と効果検証に関する研究」（研究代表者：中込和幸）班会議，東京，2014.1.18.
- 24) 菊池安希子：第 5 回 CBTp ネットワーク会議，東京，2014.2.1.
- 25) 菊池安希子：成人用一般用リスクアセスメントツール開発会議第 2 回，東京，2014.2.13.
- 26) 菊池安希子，長沼洋一，三澤孝夫，福田 敬，安藤久美子，岡田幸之：東京都の医療観察法指定通院医療機関の整備に関連する要因の調査．平成 25 年度 国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所 研究報告会, 東京, 2014.3.10.

- 27) 安藤久美子: 知的障害者刑事手続制度提言研究会, 東京, 2013.5.11.
- 28) 安藤久美子: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「青年期・成人期発達障がいへの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」第 1 回内山班会議, 東京, 2013.5.19.
- 29) 安藤久美子: 知的障害者刑事手続き制度提言研究会, 東京, 2013.6.30.
- 30) 安藤久美子: トラブルシューター東京エリアネットワーク研究会 (共生社会を創る愛の基金事業), 東京, 2013.6.7.
- 31) 安藤久美子: 事例検討研究会. 地裁研究会, 東京, 2013.6.24.
- 32) 安藤久美子: 東京都における指定通院医療. 第 87 回【東京】医療観察制度関係連絡協議会, 東京, 2013.7.4.
- 33) 安藤久美子: 障害者に関する刑事司法制度研究会, 東京, 2013.9.8.
- 34) 安藤久美子: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金「青年期・成人期発達障がいの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究 (研究代表者: 内山登紀夫)」第 1 回内山班 (医療チーム) 研究会議, 東京, 2013.10.8.
- 35) 安藤久美子: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金「青年期・成人期発達障がいの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究 (研究代表者: 内山登紀夫)」第 2 回班会議, 東京, 2013.10.19.
- 36) 安藤久美子: 福祉アセスメント法案検討 49 条～. 法曹 panda 研究会, 東京, 2013.11.16.
- 37) 安藤久美子: 第 10 回 TFP 研究会 (東京司法精神医学ガンファレンス), 東京, 2013.11.16.
- 38) 安藤久美子: グループワークを始めるにあたって. 第 1 回 SOTSEC-ID 会議 (講師), 村木厚子共生社会をつくる愛の基金, 東京, 2013.11.1.
- 39) 安藤久美子: 医療観察法の現状と課題. 第 2 回全国医療観察法指定入院医療機関 PSW 連絡協議会, 神奈川, 2013.11.22.
- 40) 安藤久美子: 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金「青年期・成人期発達障がいの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究 (研究代表者: 内山登紀夫)」第 2 回医療班会議, 東京, 2013.12.10.
- 41) 安藤久美子, 津村秀樹, 中澤佳奈子, 野田隆政, 岡田幸之: 生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的リスクアセスメント法の開発. 平成 25 年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患研究班 合同研究報告会, 東京, 2013.12.16.
- 42) 安藤久美子: 少年矯正の処遇等に関する専門家会議, 東京, 2014.2.27.
- 43) 安藤久美子: 発達障害の精神鑑定. 精神科医局勉強会, 秋田, 2014.2.21.
- 44) 安藤久美子: 司法精神医療. 第 9 回秋田県司法精神医学研究会, 秋田, 2014.2.22.
- 45) 安藤久美子: 認知行動療法の基本. 第 3 回 SOTSEC-ID 会議 (講師), 村木厚子共生社会をつくる愛の基金, 東京, 2014.2.28.
- 46) 津村秀樹, 安藤久美子, 中澤佳奈子, 野田隆政, 岡田幸之: Go/Nogo 課題から見た行動抑制系/行動賦活系における事象関連電位の特徴. 平成 25 年度 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 47) 河野稔明, 菊池安希子, 長沼洋一, 岡田幸之: 医療観察法入院処遇期間の経年的変化と転院の影響. 平成 25 年度 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 研究報告会, 東京, 2014.3.10.

(4) その他

- 1) 岡田幸之: 司法精神医学学会プログラム委員会, 東京, 2013.4.11.
- 2) 岡田幸之: 平成 25 年度第 1 回日本司法精神医学研修・教育企画委員会, 東京, 2013.5.11.

- 3) 岡田幸之：日本司法精神医学会第 17 回理事会，東京，2013.5.30.
- 4) 岡田幸之，安藤久美子：日本司法精神医学会評議委員会，東京，2013.5.31.
- 5) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，浅野敬子：日本司法精神医学会編集委員会，東京，2013.6.1.
- 6) 菊池安希子：臨床心理職国家資格推進連絡協議会，東京，2013.4.5
- 7) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会，東京，2013.4.6.
- 8) 菊池安希子：第 8 回日本 EMDR 学会準備委員会，東京，2013.4.7.
- 9) 菊池安希子：平成 24 年度第 5 回（通算第 7 回）日本臨床心理士会司法矯正領域委員会，東京，2013.4.13.
- 10) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会，電話会議，2013.5.14.
- 11) 菊池安希子：日本 EMDR 学会第 8 回学術大会・継続研修会大会長，東京，2013.5.17-19.
- 12) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会，東京，2013.5.18.
- 13) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会，電話会議，東京，2013.7.5.
- 14) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事会，電話会議，東京，2013.7.31.
- 15) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会倫理会則委員会，東京，2013.8.29.
- 16) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会，東京，2013.8.29.
- 17) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会理事会，東京，2013.8.30.
- 18) 菊池安希子：平成 25 年度医療観察法心理士ネットワーク幹事会，千葉，2013.9.27.
- 19) 菊池安希子：日本臨床心理士会司法矯正領域委員会，東京，2013.10.26.
- 20) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会倫理会則委員会，電話会議，2013.12.4-5.
- 21) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事会，東京，2013.12.15.
- 22) 安藤久美子：日本精神神経学会教育問題委員会「司法精神医学作業部会」，東京，2013.4.21.
- 23) 安藤久美子：日本精神神経学会教育研修委員会「精神鑑定部門」，東京，2013.6.2.
- 24) 安藤久美子：日本精神神経学会教育問題委員会「司法精神医学作業部会」，東京，2013.7.21.
- 25) 安藤久美子：日本精神神経学会教育問題委員会「司法精神医学作業部会」第 1 回新部会，東京，2013.9.1.
- 26) 安藤久美子：日本精神神経学会司法精神医学委員会，東京，2013.10.6.
- 27) 安藤久美子：医療観察法の現状と課題。第 2 回全国医療観察法指定入院医療機関 PSW 連絡協議会，神奈川，2013.11.22.
- 28) 安藤久美子：日本精神神経学会司法精神医学委員会，東京，2013.11.17.
- 29) 安藤久美子：日本精神神経学会司法精神医学委員会，東京，2014.1.12.
- 30) 安藤久美子：精神神経学会委員会，東京，2014.2.11.

C. 講演

- 1) 岡田幸之：司法精神医学。慶応義塾大学医学部公衆衛生実習，東京，2012.10.21.
- 2) 岡田幸之：精神保健看護学特論 B-2・司法精神医療の概念(3)「司法精神医学の評価方法・司法精神鑑定と医療観察法鑑定」，東京医科歯科大学，東京，2013.10.22.
- 3) 岡田幸之：「医療観察法に基づく北海道地域社会における処遇に関する運営要領」に基づく北海道運営連絡協議会（講演講師及びシンポジウム助言者），北海道厚生局，札幌，2013.12.20.
- 4) 岡田幸之：クロザピンに関する情報について。平成 25 年度社会復帰調整官中央連絡協議会，東京，2014.1.21.
- 5) 岡田幸之：触法精神障害者の処遇・治療について。平成 25 年度特別研究会（第 5 回，精神障害と社会），司法研修所，東京，2014.2.3.
- 6) 菊池安希子：Reasoning & Rehabilitation 2. 認知行動療法研究会，播磨社会復帰促進センター，兵庫，2013.4.25.

- 7) 菊池安希子：拒食症に対するワークショップ。講演準備，Kate Tchanturia 講演通訳，研究に関する専門知識の提供，千葉大学，千葉，2013.6.29.
- 8) 菊池安希子：Reasoning & Rehabilitation 2. 認知行動療法研究会，播磨社会復帰促進センター，兵庫，2013.7.30.
- 9) 菊池安希子：リスクアセスメントの基本的考え方と START. 東京保護観察所 平成 25 年度処遇指針開発研究会中央処遇指針研究会，東京，2013.9.2.
- 10) 菊池安希子：リスクアセスメント入門。精神科レジデント初期セミナー，国立精神・神経医療研究センター，東京，2013.7.31.
- 11) 菊池安希子：Reasoning & Rehabilitation 2. 認知行動療法研究会，播磨社会復帰促進センター，兵庫，2013.9.6.
- 12) 菊池安希子：処遇調査の充実化に係わる助言・教授。府中刑務所効果検証業務に係わるアドバイザー，府中刑務所，東京，2014.1.21.
- 13) 安藤久美子：医療・心理・福祉から、罪に問われた障害者の支援を考える。トラブル・シューター啓発セミナー～司法と福祉をつなぐ新たな人材育成に向けて～，東京，2013.8.25.
- 14) 安藤久美子：医療観察法における地域処遇の現状から見えてきた課題。神戸保護観察所，神戸，2013.9.25.
- 15) 安藤久美子：少年の精神鑑定。東京弁護士会，東京，2013.9.30.
- 16) 安藤久美子：認知行動療法の基本。第 1 回 SOTSEC-ID 会議，村木厚子共生社会をつくる愛の基金，東京，2013.11.1.
- 17) 安藤久美子：“問題行動”，“触法障害者”の理解。トラブルシューター養成セミナー「基礎コース」，滋賀，2013.11.24.
- 18) 安藤久美子：罪に問われた障害のある人のためのトラブルシューター養成セミナー「実践編」。東京エリア・トラブルシューター・ネットワーク～「共生社会を創る愛の基金」2013 年度助成事業，東京，2013.12.1.
- 19) 安藤久美子：認知行動療法の基本。第 2 回 SOTSEC-ID 会議，村木厚子共生社会をつくる愛の基金，東京，2013.12.20.
- 20) 安藤久美子：被害者少年の心理と特性。専科教育，警察大学校，東京，2014.1.14.
- 21) 安藤久美子：法務省式アセスメントツール維持管理作業に関わる助言・教授，東京，2014.1.23
- 22) 安藤久美子：知的・発達障害のある人の触法の支援—認知行動療法，SOTSEC-ID とは—①。知的障害・発達障害のためのトラブルシューター研修～障害のある人の性支援と SOTSEC-ID. 東京，2014.2.2.
- 23) 安藤久美子：②多摩地区事例の検討。知的障害・発達障害のためのトラブルシューター研修～障害のある人の性支援と SOTSEC-ID，東京，2014.2.2.
- 24) 安藤久美子：医療観察法社会内処遇者におけるリスクアセスメント及びマネジメント。東京少年鑑別所，東京，2014.2.7.
- 25) 安藤久美子：少年矯正の処遇等に関する専門家会議に係わる検討事例等助言。法務省矯正局，東京，2014.2.14.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員）

(1) 学会主催

- 1) 菊池安希子：第 8 回日本 EMDR 学会東京大会 大会長（平成 25 年度 5 月 17-19 日）

(2) 学会役員

- 1) 岡田幸之：日本犯罪学会 理事

- 2) 岡田幸之：日本司法精神医学会 理事
- 3) 岡田幸之：日本社会精神医学会 評議員
- 4) 岡田幸之：日本精神科診断学会 評議員
- 5) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 6) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 副会長
- 7) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 常任理事
- 8) 菊池安希子：日本EMDR学会 副理事長
- 9) 菊池安希子：日本EMDR学会 理事
- 10) 安藤久美子：日本社会精神医学会 評議員
- 11) 安藤久美子：日本司法精神医学会 評議員

(3) 座長

- 1) 岡田幸之：シンポジウム「裁判員制度と精神鑑定—施行後4年を振り返って」座長，第9回日本司法精神医学会大会，東京，2013.5.31.
- 2) 岡田幸之：精神医学・心理学・法学．日本犯罪学会百年記念大会，東京，2013.11.15.
- 3) 岡田幸之：一般演題（口演）9．第33回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 岡田幸之：日本司法精神医学会 編集委員長
- 2) 岡田幸之：日本犯罪学会 編集委員
- 3) 岡田幸之：日本犯罪学会 第49回日本犯罪学会大会 プログラム委員
- 4) 岡田幸之：日本犯罪学会 日本犯罪学会設立百年記念大会 プログラム委員
- 5) 岡田幸之：日本司法精神医学会 研修・教育企画拡大委員
- 6) 岡田幸之：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 7) 岡田幸之：日本司法精神医学会 精神鑑定委員
- 8) 岡田幸之：日本司法精神医学会 第9回日本司法精神医学会大会 プログラム委員
- 9) 岡田幸之：日本社会精神医学会 第31回日本社会精神医学会 プログラム委員
- 10) 岡田幸之：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee
- 11) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 倫理会則委員長
- 12) 菊池安希子：日本EMDR学会 倫理委員長
- 13) 菊池安希子：日本司法精神医学会 編集委員
- 14) 菊池安希子：日本EMDR学会 第8回学術大会準備委員
- 15) 菊池安希子：日本臨床心理士会 司法矯正領域専門委員会 委員
- 16) 菊池安希子：日本認知療法学会 編集委員
- 17) 安藤久美子：日本司法精神医学会 編集委員
- 18) 安藤久美子：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 19) 安藤久美子：日本精神神経学会 卒後研修委員（精神鑑定部門）
- 20) 安藤久美子：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，津村秀樹，河野稔明：平成25年度第8回司法精神医学研修，東京，2013.10.29-30.
- 2) 岡田幸之，菊池安希子，安藤久美子，津村秀樹，河野稔明：平成25年度第1回司法精神医学研究部 one day セミナー円滑な指定通院医療を目指して—アセスメントとマネージメン

ト一，東京，2013.8.17.

(2) 研修会講師

- 1) 岡田幸之：精神鑑定特論．鑑定技術職員現任科第 61 期研修，千葉，2013.6.7.
- 2) 岡田幸之：精神鑑定の基礎知識．第 137 回検事一般研修，東京，2013.7.11.
- 3) 岡田幸之：医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務．平成 25 年度判定医等養成研修会，東京，2013.7.27.
- 4) 岡田幸之：医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務：第 2 回．平成 25 年度判定医等養成研修会，大阪，2013.8.9.
- 5) 岡田幸之：医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務：第 3 回．平成 25 年度判定医等養成研修会，東京，2013.8.30.
- 6) 岡田幸之：司法精神医学③医療観察におけるリスクアセスメント．第 6 回社会復帰調整官初任研修，東京，2013.10.24.
- 7) 岡田幸之：裁判員裁判と臨床心理士．平成 25 年度都道府県司法共生領域担当者研修会，東京，2013.10.27.
- 8) 岡田幸之：司法精神医学概論－歴史，法律，制度．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.29.
- 9) 岡田幸之：刑事責任能力と精神鑑定．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.29.
- 10) 岡田幸之：医療観察法総論．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.29.
- 11) 岡田幸之：司法精神医療におけるリスクアセスメント(1)．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.30.
- 12) 岡田幸之：リスクアセスメント．任用研修課程高等科第 45 回研修，東京，2013.10.31.
- 13) 岡田幸之：精神鑑定の基礎知識．第 138 回検事一般研修，東京，2013.11.14.
- 14) 岡田幸之：精神鑑定．裁判所書記官養成課程第一部第 10 期研修，裁判所書記官養成第二部第 9 期研修，家庭裁判所調査官養成課程第 9 期後期合同研修，埼玉，2013.11.22.
- 15) 岡田幸之：司法精神医学概論．鑑定技術職員現任科第 63 期研修，埼玉，2014.1.29.
- 16) 岡田幸之：リスクアセスメント．専門研修課程調査鑑別特別科第 7 回研修（講師），東京，2014.2.25.
- 17) Kikuchi A, Kono T, Naganuma Y, Ando K, Okada T: Characteristics and length of stay of patients admitted to forensic units in Japan. オランダより来日中の精神科医との共同研修会，東京，2013.6.27.
- 18) 菊池安希子：暴力のリスクアセスメントの基本的考え方．司法精神医学研究部 one day セミナー円滑な指定通院医療を目指して－アセスメントとマネージメント－，東京，2013.8.17.
- 19) 菊池安希子：リスクアセスメントの基本的考え方と START．東京保護観察所 平成 25 年度処遇指針開発研究会中央処遇指針研究会，東京，2013.9.2.
- 20) 菊池安希子：START 中部研修会，愛知，2013.9.20.
- 21) 菊池安希子：START 関東甲信越研修会，東京，2013.10.11.
- 22) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法，東京，2013.10.19.
- 23) 菊池安希子：START 浦安研修会，千葉，2013.10.26.
- 24) 菊池安希子：裁判員裁判と臨床心理士．平成 25 年度都道府県司法共生領域担当者研修会（司会），東京，2013.10.27.
- 25) 菊池安希子, 河野稔明：医療観察法の現状(入院)．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.29.
- 26) 菊池安希子：司法精神医療における心理学的治療アプローチ(1)(2)．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.30.
- 27) 菊池安希子：START 北海道研修会，北海道，2013.11.9.
- 28) 菊池安希子：START 近畿研修会，大阪，2013.11.15.

- 29) 菊池安希子：START 中四国研修会，岡山，2013.11.22.
- 30) 菊池安希子：START 東北研修会，宮城，2013.11.28.
- 31) 菊池安希子：R&R2MHP 模擬トレーニング，東京，2013.12.12-14.
- 32) 菊池安希子：START 九州研修会，福岡，2013.12.20.
- 33) 菊池安希子：司法精神医療② 司法精神医療におけるリスク管理．第 1 回社会フック調整官専修科研修，東京，2014.2.25.
- 34) 安藤久美子：リスクアセスメント概論①②．専門研修課程改善指導科第 22 回（性犯罪再犯防止指導・調査担当者），東京，2013.5.14.
- 35) 安藤久美子：司法システムにおける問題点．トラブルシューター東京エリアネットワークアドバンス研修（共生社会を創る愛の基金事業），東京，2013.6.7.
- 36) 安藤久美子：性非行少年のアセスメントについて．専門研修課程矯正教育科 9 回（少年施設職員処遇対応力向上 I）研修，東京，2013.6.28.
- 37) 安藤久美子：指定通院医療における介入ポイント．司法精神医学研究部 one day セミナー円滑な指定通院医療を目指して—アセスメントとマネージメント—，東京，2013.8.17.
- 38) 安藤久美子：指定通院医療クリニカルパス．司法精神医学研究部 one day セミナー円滑な指定通院医療を目指して—アセスメントとマネージメント—，東京，2013.8.17.
- 39) 安藤久美子：医療観察法の現状（通院）．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.29.
- 40) 安藤久美子：司法精神医療におけるリスクアセスメント(8)．第 8 回司法精神医学研修，東京，2013.10.30.
- 41) 安藤久美子：兵庫県内における地域処遇を考える．兵庫県地域処遇ネットワーク連絡会地域関係機関研修，兵庫，2014.3.5.
- 42) 安藤久美子：非行少年の特性～児童精神医学の視点から．カウンセリング技術（上級）専科教養，東京，2014.3.6.
- 43) 安藤久美子：精神鑑定．平成 25 年度新任検事研修，東京，2014.3.18.

F. その他

- 1) 岡田幸之：日弁連裁判員本部精神鑑定研修プロジェクトチーム第 8 回意見交換会，東京，2013.4.6.
- 2) 岡田幸之：地方厚生局健康福祉部医事課長との意見交換会，東京，2014.1.21.
- 3) 菊池安希子：EMDR スーパービジョン，東京，2013.7.8.
- 4) 菊池安希子：成人用一般リスクアセスメントツール開発会議（第 1 回）（アドバイザー），東京，2013.9.19.
- 5) 菊池安希子：ケースカンファレンス（指定討論）．日本 EMDR 学会東京スタディグループ，東京，2013.12.21.
- 6) 菊池安希子：成人用一般的リスク・アセスメントツールの開発準備等に関わる助言指導（アドバイザー），府中刑務所効果検証専従班，東京，2014.1.21.
- 7) 菊池安希子：府中刑務所効果検証業務に係わるアドバイザー．処遇調査の充実化に係る助言・教授，東京，2014.3.25.
- 8) 菊池安希子：ケースカンファレンス（指定討論）．日本 EMDR 学会東京スタディグループ，東京，2014.3.29.
- 9) 安藤久美子：日弁連裁判員本部精神鑑定研修プロジェクトチーム第 8 回意見交換会，東京，2013.4.6.
- 10) 安藤久美子：ケースカンファレンス（指定討論）．愛光女子学園，東京，2013.4.16.
- 11) 安藤久美子：発達障害児・者への被災地診療支援．福島，2013.4.17.
- 12) 安藤久美子：学生のメンタルヘルス指導．お茶の水女子大，東京，2013.4.25.

- 13) 安藤久美子 : 医療観察法カンファレンス. 東京地方裁判所, 東京, 2013.5.8.
- 14) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.5.14.
- 15) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.5.15.
- 16) 安藤久美子 : 証人尋問. 東京家庭裁判所, 東京, 2013.5.24.
- 17) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2013.5.30.
- 18) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.6.11.
- 19) 安藤久美子 : 第1回カンファレンス. 東京地方裁判所, 東京, 2013.6.18.
- 20) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.6.19.
- 21) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. 国立大学法人お茶の水女子大学, 東京, 2013.6.20.
- 22) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.7.24.
- 23) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2013.7.25.
- 24) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.7.26.
- 25) 安藤久美子 : カンファレンス. 東京地方裁判所, 2015.8.1.
- 26) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.8.7.
- 27) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2013.8.29.
- 28) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.8.21.
- 29) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.9.10.
- 30) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2013.9.26.
- 31) 安藤久美子 : 日本精神神経学会男女共同参画委員会. 東京, 2013.10.4.
- 32) 安藤久美子 : 少年事件証人尋問. さいたま家庭裁判所, 浦和, 2013.10.15.
- 33) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.10.18.
- 34) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2013.10.31.
- 35) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.10.23.
- 36) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.11.13.
- 37) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.11.19.
- 38) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2013.11.28.
- 39) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.12.18.
- 40) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2013.12.25.
- 41) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2013.12.26.
- 42) 安藤久美子 : カンファレンス. 東京地方裁判所, 東京, 2014.1.16.
- 43) 安藤久美子 : 医療観察法審判. 東京地方裁判所, 東京, 2014.1.21.
- 44) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2014.1.22.
- 45) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2014.1.28.
- 46) 安藤久美子 : カンファレンス. 東京地方裁判所立川支部, 東京, 2014.1.29.
- 47) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2014.1.30.
- 48) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2014.2.18.
- 49) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2014.2.19.
- 50) 安藤久美子 : 学生のメンタルヘルス指導. お茶の水女子大学, 東京, 2014.2.28.
- 51) 安藤久美子 : ケースカンファレンス (指定討論). 愛光女子学園, 東京, 2014.3.11.
- 52) 安藤久美子 : 発達障害児・者への被災地診療支援. 福島, 2014.3.12.
- 53) 安藤久美子 : カンファレンス. 東京地方裁判所, 東京, 2013.3.14.

13. 自殺予防総合対策センター

I. 研究部の概要

わが国の2012年中の自殺死亡者数は15年ぶりに3万人を下回り、前年に比べても1割近く減少した。2013年中の自殺死亡者数も引き続き減少しており、自殺対策基本法制定以後の、国を挙げての自殺対策が効果をあげている可能性がある。このため、WHO（世界保健機関）を含めて、海外からもわが国の総合的な自殺対策への関心が高まっている。しかし、若年層の自殺死亡率が高くなる傾向があり、若年層向けの対策や、自殺未遂者向けの対策を一層推進することが必要とされている。また、国、地方公共団体、関係団体及び民間団体等の取組相互の連携・協力をさらに推進することが望まれている。

自殺対策の目的は、自殺を防止し、あわせて自殺者の親族等に対する支援を充実し、もって国民が健康で生きがいを持って暮らすことのできる社会の実現に寄与することである（自殺対策基本法）。自殺予防総合対策センターは、自殺予防に向けての政府の総合的な対策を支援するために平成18年10月1日に国立精神・神経センター精神保健研究所の内部組織として設置された。

自殺予防総合対策センターは、センター長のもとに、自殺実態分析室、自殺予防対策支援研究室、適応障害研究室の3研究室を置き、下記の業務を行っている（自殺予防総合対策センター設置要綱）。

- 1) 自殺予防対策に関する情報の収集及び発信に関すること。
- 2) 自殺予防対策支援ネットワークの構築に関すること。
- 3) 自殺の実態分析等に関すること。
- 4) 自殺の背景となる精神疾患等の調査・研究に関すること。
- 5) 自殺予防対策等の研修に関すること。
- 6) 自殺未遂者のケアの調査・研究に関すること。
- 7) 自殺遺族等のケアの調査・研究に関すること。

センター長：竹島 正（併任）、副センター長：松本俊彦（併任）、自殺実態分析室長：松本俊彦（併任）、自殺予防対策支援研究室長：川野健治、適応障害研究室長：藤森麻衣子、自殺実態分析室研究員：山内貴史（6/1より）、非常勤研究員：大槻露華、小高真美、白神敬介、山内貴史（5/31まで）、客員研究員：稲垣正俊、岡 檀、勝又陽太郎、廣川聖子（1/14より）、協力研究員：亀山晶子、研究生：安藤俊太郎、井上佳祐、岩上真歩子（9/24より）、クーロワ・ナズグリ（6/24より）、高木幸子、久永彩香（9/24より）、センター研究助手：滝澤さなえ、望月園江（5/1より）、研究費雇上：長島弥生、増田久重。

II. 研究活動

1) 自殺の要因分析体制の確立に関する研究

自殺予防総合対策センターと東京都監察医務院による毎月1回の事例検討会・研究打ち合わせ、検案同行等を踏まえて、両者の連携による心理学的剖検の実施体制、手順等を検討した。その結果を踏まえて、（独）国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会に心理学的剖検研究の変更申請を行った。また、心理学的剖検の面接調査に従事する調査員トレーニングを行うとともに、精神保健福祉センターとの調査における連携のあり方を検討した。さらに、MEDLINEを用い、1985年から2013年11月までに公表された心理学的剖検による自殺の症例対照研究論文を検索し、著者、出版年、目的、対象地域、症例・対照の設定、リクルート方法、サンプルサイズ、情報提供者、主要な結果をまとめ、今後の心理学的剖検研究推進の資料とした。（竹島、川野、藤森、松本、山内、勝又、小高、大槻、白神、岩上、久永）

2) 総務省消防庁が保有する自損行為による救急搬送事例の分析に関する研究

総務省消防庁が保有する全国の自損行為による救急搬送データを分析し、わが国における自殺未遂も含めた自損行為の実態把握を行った。2007～2011年の全国の自損行為による搬送事例数およ

び搬送率は、自殺死亡数・死亡率と同様、2009年をピークに緩やかな減少傾向にあった。一方、自殺死亡と異なり、自損行為による救急搬送率は女性、特に18～64歳の女性で高いことが示唆された。また、高齢者では自損事例全体に占める死亡・重傷例の割合が高く、64歳以下では中等症・軽症例の割合が高いこと、特に64歳以下の女性では自損事例の90%以上が企図後生存していることが示唆された。都道府県別では、自損行為による搬送率の高い都道府県と、自殺死亡率の高い都道府県とは必ずしも一致していないことがうかがえた。(山内, 竹島)

3) 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究

自殺の心理学的剖検による症例対照研究を実施し、睡眠障害と自殺との関連および、自殺予防における睡眠障害のスクリーニングの有用性について検討した。本研究の結果、睡眠障害と自殺には有意な関係性があることが明らかとなった。睡眠障害がある人に比べ自殺のリスクが21.6倍も高いことが予測され、そのリスクは気分障害や精神障害で調整後もなお高いことが分かった。睡眠障害と精神障害は自殺の相対リスクは同程度であったが、自殺予防においては、自殺に対する人口寄与危険割合(PARP)のより高い睡眠障害を特定した方が、より有用であり、睡眠障害の予防や治療を効果的に実施するための戦略を立てることが重要であることが示唆された。また、自殺のサインとしての睡眠障害の評価は、既に自殺リスクの高い集団に対して有用であることが推測された。一方、睡眠障害のスクリーニングの有用性は、世代により異なる可能性もあることが分かった。(松本, 小高, 山内, 竹島, 勝又)

4) 遺族支援のための情報提供に関する研究

2000年以降の国内外の文献を検索し、自死遺族支援において提供している情報の種類、具体的な支援方法、他機関との連携について整理した。また、民間の支援団体の代表や国立精神・神経医療研究センター病院の看護師と意見交換を行った。(川野, 岩上)

5) 遺族支援に資する介入法開発に関する研究

遺族ケアを目的とした冊子に含むべき内容について、職業的に遺族と接する機会の多い東京都監察医務院の職員を対象としたグループインタビューを行った。冊子に含むべき内容は、その目的、行う必要のある手続きの情報、必要に応じて求められる手続きの情報、生じるかもしれない心身の変化と対処法、その支援に関する情報であることが示唆された。また遺族ケアとして、一元化された相談窓口の設置が求められていることが示唆された。(藤森, 岩上)

6) 重篤な慢性疾患患者の診療過程における自殺予防に関する研究

国立がん研究センター がん予防・検診研究センター等との共同研究として、前向き一般住民コホートをを用い、がん・循環器疾患罹患患者における自殺および他の外因死のリスクを検討した。解析の結果、がんになっていないグループに対する、がん診断から1年以内のグループにおける自殺および他の外因死のリスクはともに約20倍であった。本研究の結果は、医療従事者や家族など周囲の人々は、特にがん診断後1年以内においては、(1)自殺を含めた様々な外因死のリスクに留意する必要があること、(2)診断による心理的ストレス・抑うつ、がん罹患・治療による認知・身体・社会的機能の低下のアセスメントが重要であることを示唆するものと考えられた。(稲垣, 山内)

7) 空間統計学的手法を用いた自殺死亡の時空間集積性の検討

最新の人口動態調査および国勢調査を用いて小地域別の自殺死亡統計(ベイズ推定値)を更新した。1983年から2012年までの5年ごとの期間別に、全国の二次医療圏および市区町村別の詳細な自殺死亡統計を作成した。2008～2012年の全国における自殺死亡の動向を2003～2007年と比較すると、(1)男性の自殺死亡率は減少傾向がうかがえる、(2)男性では35歳以上の全ての年齢階級で自殺死亡率が減少しており、特に45～64歳で大きく減少している、(3)一方、15～24歳の男性では緩やかながら死亡率が上昇している、(4)女性では中高年男性のような大きな自殺死亡率の変動はみられないが、54歳以下の全ての年齢階級で自殺死亡率が緩やかながら上昇している、といった点が示唆された。(山内)

8) 東日本大震災被災地における自殺予防

岩手県大槌町において、3年計画の住民健康調査を町と協同して実施（2012～）し、QOLについては5つの潜在ランクを見出した精神保健活動を支援した。宮城県気仙沼市本吉地区では、自殺予防研修に基づく情報共有シートを作成・使用し、検証作業を行った。（川野，白神）

9) 児童相談所が自殺対策に果たす機能とそのための支援ネットワーク構築の検討

児童相談所を対象とした保護者のメンタルヘルスの問題と自殺関連行動について、専門家との意見交換に基づき、作成した調査票を用いた予備調査と、それを踏まえた全国の児童相談所を対象とした本調査を実施した。（川野，白神，竹島）

1 0) 都道府県・政令指定都市等における自殺対策の取組状況に関する調査

内閣府自殺対策推進室等との共同調査として、全国の都道府県・政令指定都市及び市区町村の自殺対策の取組状況の分析を行った。分析の結果、地方自治体における自殺対策の今後の課題として、

(1) 選択的・個別的予防介入の充実，(2) 適切な事業評価の実施，(3) 民間団体への補助のための財源を含め、地域自殺対策緊急強化基金以外の財源の確保が重要であると考えられた。（山内，竹島）

1 1) 学校での自殺予防プログラム/研修効果測定とツール開発

自殺総合対策大綱の当面の重点施策 2. (2) 児童生徒の自殺予防に資する教育の実施に即して、児童生徒の自殺予防を目的とした教育の実施のために、学校で教員によって実施されることを目的とした自殺予防教育プログラム GRIP を開発した。静岡県袋井市教育委員会の協力のもと、パイロットスタディを実施した。（川野，白神）

1 2) 自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討

海外での自殺対策の取り組みとその評価の実際を把握し、我が国の新たな自殺対策への示唆を得ることを目的として、WHO World Suicide Report 会議出席者を対象とした自殺対策の取り組み活動と評価に関する活動についての調査を行った。その結果として、自殺対策に取り組む研究者は、過去5年間に3つの「自殺対策の取り組み」に関与していることが示された。一方で、「自殺関連の取り組みに対する評価」への関与は少なく、行っていないという回答が60%を占めた。「自殺対策の取り組み」は、危険因子への対策、効果的な予防戦略への意識の増加、自殺関連死の予防に関するものが多く、その対象は、青年期から老年期、未遂者、遺族まで多岐にわたり、その活動は、政府、公衆衛生、精神保健関係者と研究者との協働により、無作為化比較試験、コホート、症例報告により検討されていることが示された。我が国においては、欧米と比して「効果的な予防戦略への意識の増加」を主題とした取り組み、社会的弱者関連団体、自殺未遂者・家族、NGO・家族会、研究者との協働、システマティックレビューのデザインによる取り組みが少ないことが示唆された。（藤森，小高，山内，竹島）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

自殺予防総合対策センターホームページ「いきる」の運営、メディアカンファレンス等を通して、市民社会への情報発信を行った。自殺対策ネットワークの発展と民間団体の支援をテーマに自殺対策ネットワーク協議会を開催した（2013.7.24）。東日本大震災の被災者支援・復興支援には、社会的取組と精神保健の連携等の自殺対策の枠組みが有効である可能性があることから、それを事例的、定点観測的に行い、検証・発信していく取組を進めた。

竹島 正は、全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した。また、一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会（JCPTD）理事、「支援付き住宅推進会議」委員、NPO 法人「自立支援センターふるさとの会」の苦情解決第三者委員会と倫理審査委員会の委員長、公益社団法人全日本断酒連盟顧問、こころのバリアフリー研究会評議員を務めた。

松本俊彦は、中学校・高校での生徒向け薬物乱用防止講演会、一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた。また、各地で養護教諭を対象にした高校生等の自傷行為の

実態と理解のための講演会の講師を務めた。

川野健治は、一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた。また、自死遺族支援団体やいのちの電話の主催する研修会等で講師を務めた。

藤森麻衣子は、一般市民を対象とする身体疾患を有する患者の自殺に関する講演会の講師を務めた。

2) 専門教育面における貢献

竹島 正は、全国精神保健福祉相談員会相談役を務めた。また、東京多摩いのちの電話の理事、精神保健対策、自殺対策に関する各種研修への協力を行った。

松本俊彦は、厚生労働省管轄、法務省（矯正局・保護局）管轄、地方自治体、教育委員会が主催する各種研修会、東京都学校保健会で講師を務めるとともに、精神保健福祉センター・保健所、養護教諭のグループが主催する事例検討会において助言者を務め、地域における実務家の業務を支援した。また、早稲田大学人間科学学術院非常勤講師として、心理学・福祉領域の専門家養成に貢献した。さらに、自傷行為に関する海外の専門書を翻訳・刊行し、国内の研究者・実務家に有益な海外の研究知見を紹介した。

川野健治は、地方自治体、社会福祉協議会、日本弁護士連合、司法書士会、社会福祉士会等で自殺対策に関連するテーマで講師を務めた。また、地方自治体の自殺対策連絡協議会、事例検討会で助言者を務めた。さらに岩手県大槌町では自殺対策研修を共催し、講師を務めた。

藤森麻衣子は、厚生労働省委託事業がん医療に携わる医師を対象としたコミュニケーション技術研修会、コミュニケーション技術研修ファシリテーター養成講習会、がん医療に携わる医療者を対象としたコミュニケーションに関する勉強会にて講師を務めた。

山内貴史は、地方自治体が主催する自殺対策に関連する研修会で講師および助言者を務め、地域における自殺対策の推進に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

竹島 正は、第 7 回自殺総合対策企画研修（2013.8.20-22）、第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.9.17-18）、第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.12.3-4）の主任、第 4 回心理職自殺予防研修（2013.8.6-7）、第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2013.11.5-6）、の副主任を務めた。また、精神保健計画研究部長として、第 50 回精神保健指導課程研修（2013.6.26-27）の主任を務めた。

松本俊彦は、第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2013.11.5-6）の主任、第 4 回心理職自殺予防研修（2013.8.6-7）、第 7 回自殺総合対策企画研修（2013.8.20-22）、第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.9.17-18）、第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.12.3-4）の副主任を務めた。また、薬物依存臨床医師研修、ならびに摂食障害医師研修の講師を務めた。

川野健治は、第 4 回心理職自殺予防研修（2013.8.6-7）の主任、第 7 回自殺総合対策企画研修（2013.8.20-22）、第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.9.17-18）、第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2013.11.5-6）、第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.12.3-4）の副主任を務め、また各々で講師を担当した。

藤森麻衣子は、第 4 回心理職自殺予防研修（2013.8.6-7）、第 7 回自殺総合対策企画研修（2013.8.20-22）、第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.9.17-18）、第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2013.11.5-6）、第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修（2013.12.3-4）の副主任を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

内閣府自殺対策推進室、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課等と連携して、精神保健的観点からの自殺対策の推進のための提案および協力を行った。平成 25 年版自殺対策白書（内閣府）の作成に協力した。WHO 世界自殺レポート会議及び関連行事（2013.12.16-18）を開

催した。

竹島 正は、内閣府本府政策参与（非常勤）、厚生労働省平成 25 年度自殺防止対策事業評価委員長、精神保健福祉士試験委員、内閣官房多重債務者対策本部「多重債務問題及び消費者向け金融等に関する懇談会」構成員、人事院事務総局職員福祉局心の健康づくり指導委員会委員、船橋市自殺対策連絡会議委員長、富山県自殺対策推進協議会アドバイザーを務めた。また、国立精神・神経医療研究センターとメルボルン大学の 2010 年 9 月から 5 年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)に基づき、国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学の交流に努めた。

松本俊彦は、法務省保護局「薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会」委員、法務省矯正局「少年院における薬物再乱用防止教育に関する検討会」委員、文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員、内閣府共生社会政策「若年者向け薬物再乱用防止プログラム」企画分析会議委員、世田谷区および中央区の自殺対策連絡協議会会長、横浜市こころの健康相談センター 自殺統計分析協力委員、両全会覚せい剤事犯社会復帰サポートプロジェクト推進委員会委員、東京都教育庁「部活動指導の在り方」検討委員会委員を務めた。また、東京地方裁判所登録精神保健判定医として心神喪失者等医療観察法の審判・鑑定に従事した。

川野健治は、宮崎県の市町村自殺対策緊急強化モデル事業意見交換会における助言・指導等を行った。また、神奈川県、川崎市、相模原市、横浜市の精神保健福祉センターと協力し、自死遺族支援事業の評価研究をおこなった。

山内貴史は、内閣府「自殺関連統計マニュアル検討会」の検討委員・座長として専門的見地から意見を述べ、マニュアルの作成に協力した。また、世界保健機関「世界自殺レポート会議」における疫学ワーキンググループのメンバーを務めた。さらには、情報・システム研究機構 新領域融合研究センター 共同研究員、情報・システム研究機構 統計数理研究所 外来研究員を務め、自殺に関する共同研究プロジェクトの推進に貢献した。

5) センター内における臨床的活動

6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ando S, Matsumoto T, Kanata S, Hojo A, Yasugi D, Eto N, Kawanishi C, Asukai N, Kasai K: One-year follow up after admission to an emergency department for drug overdose in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci* 67 (6): 441-450, 2013.
- 2) Akazawa M, Matsumoto T, Kumagai N: Prevalence of problematic drinking among outpatients attending general hospitals in Tokyo. *Japanese Journal of Alcohol and Drug Dependence* 48 (5): 300-313, 2013.
- 3) Matsumoto T, Imamura F, Kobayashi O, Wada K, Ozaki O, Takeuchi Y, Hasegawa M, Imamura Y, Taniya Y, Adachi Y: Evaluation of a relapse prevention program for methamphetamine-dependent inmates using a self-teaching workbook and group therapy. *Psychiatry Clin Neurosci* 68 (1): 61-69, 2014.
- 4) Nixima K, Fujimori M, Okanoya K: An ERP study of autistic traits and emotional recognition in non-clinical adolescence. *Psychology* 4 (6): 515-519, 2013.
- 5) Kondo K, Fujimori M, Shirai Y, Yamada Y, Ogawa A, Hizawa N, and Uchitomi Y: Characteristics associated with empathic behavior in Japanese oncologists. *Patient Education and Counseling* 93 (2): 350-353, 2013.

- 6) Asai M, Akizuki N, Fujimori M, Shimizu K, Ogawa A, Matsui Y, Akechi T, Itoh K, Ikeda M, Hayashi R, Kinoshita T, Ohtsu A, Nagai K, Kinoshita H, Uchitomi Y: Impaired mental health among the bereaved spouses of cancer patients. *Psychooncology* 22 (5): 995-1001, 2013.
- 7) Tang WR, Fang JT, Fang CK, Fujimori M: Truth telling in medical practice: students' opinions versus their observations of attending physicians' clinical practice. *Psychooncology* 22 (7): 1605-1610, 2013.
- 8) Tang WR, Chen KY, Hsu SH, Juang YY, Chiu SC, Hsiao SC, Fujimori M, Fang CK: Effectiveness of Japanese SHARE model in improving Taiwanese healthcare personnel's preference for cancer truth telling. *Psychooncology* 23 (3): 259-265, 2014.
- 9) Yamauchi T, Fujita T, Tachimori H, Takehima T, Inagaki M, Sudo A: Age-adjusted relative suicide risk by marital and employment status over the past 25 years in Japan. *J Public Health* 35 (1): 49-56, 2013.
- 10) Inagaki M, Ohtsuki T, Yonemoto N, Oikawa Y, Kurosawa M, Muramatsu K, Furukawa TA, Yamada M: Prevalence of depression among outpatients visiting a general internal medicine polyclinic in rural Japan. *Gen Hosp Psychiatry* 35 (3): 286-290, 2013.
- 11) Inagaki M, Ohtsuki T, Yonemoto N, Kawashima Y, Saitoh A, Oikawa Y, Kurosawa M, Muramatsu K, Furukawa TA, Yamada M: Validity of the Patient Health Questionnaire (PHQ)-9 and PHQ-2 in general internal medicine primary care at a Japanese rural hospital: a cross-sectional study. *Gen Hosp Psychiatry* 35 (6): 592-597, 2013.
- 12) Inagaki M, Ohtsuki T, Ishikura F, Kodaka M, Watanabe Y, Yamada M: Factors associated with perceived feasibility and willingness of non-psychiatric doctors in Japan to treat depressed patients. *Int J Psychiatry Med* 46 (2): 153-167, 2014.
- 13) Kodaka M, Inagaki M, Postuvan V, Yamada M: Exploration of factors associated with social worker attitudes toward suicide. *International Journal of Social Psychiatry* 59 (5): 452-459, 2013.
- 14) 坂上祐樹, 土屋政雄, 堀口逸子, 岩田 昇, 竹島 正, 川上憲人: 日本の大都市圏におけるこころの健康に関する疫学調査研究—WHO「世界精神保健プロジェクト」—. *順天堂医事雑誌* 59(4): 347-352, 2013.
- 15) 赤澤正人, 竹島 正, 立森久照, 宇田英典, 野口正行, 澁谷いづみ: 保健所における精神保健福祉業務の現状と課題. *日本公衆衛生雑誌* 61(1): 41-51, 2014.
- 16) 松本俊彦, 成瀬暢也, 梅野 充, 青山久美, 小林桜児, 嶋根卓也, 森田展彰, 和田 清: Benzodiazepines 使用障害の臨床的特徴とその発症の契機となった精神科治療の 特徴に関する研究. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 47(6): 317-330, 2013.
- 17) 谷渕由布子, 松本俊彦, 小林桜児, 和田 清: 薬物依存症専門外来における脱法ハーブ乱用・依存患者の臨床的特徴—覚せい剤乱用・依存患者と比較—. *精神神経学雑誌* 115(5): 463-476, 2013.
- 18) 山口 豊, 窪田辰政, 松本俊彦, 橋本佐由理, 宗像恒次: 思春期自傷行為と否定的自己イメージの因果モデルに関する研究. *思春期学* 31(2): 227-237, 2013.
- 19) 今村扶美, 松本俊彦, 朝波千尋, 出村綾子, 川地 拓, 山田美沙子, 網干 舞, 平林直次: 医療観察法における「自省プログラム」の開発と効果—待機期間を対照群とした介入前後の効果測定—. *精神科治療学* 28(10): 1368-1378, 2013.
- 20) 松本俊彦, 井出文子, 銘苺美世: 過量服薬は自殺と自傷のいずれなのか: 自殺意図の有無による過量服薬患者の比較 55(11): 1073-1083, 2013.
- 21) 谷渕由布子, 松本俊彦, 立森久照, 高野 歩, 和田 清: 「脱法ドラッグ」乱用・依存患者の臨

- 床的特徴—乱用する製品の形状による比較—。精神科治療学 29(1) : 113-121, 2014.
- 22) 山口 豊, 中村結美花, 窪田辰政, 松本俊彦, 橋本佐由理, 宗像恒次 : 思春期自傷行為と心理特性との関連についての予備的研究。東京情報大学研究論集 17(2) : 13-20, 2014.
- 23) 勝又陽太郎, 赤澤正人, 松本俊彦, 小高真美, 亀山晶子, 白川教人, 五十嵐良雄, 尾崎 茂, 深間内文彦, 榎本 稔, 飯島優子, 竹島 正 : 中高年男性うつ病患者における自殺のリスク要因 : 心理学的剖検を用いた症例対照研究による予備的検討。精神医学 56(3) : 199-208, 2014.
- 24) 川島大輔, 川野健治, 白神敬介 : 日本語版 Attitudes to Suicide Prevention Scale (ASP-J) の妥当性と信頼性—医療従事者の自殺予防に対する態度測定尺度の開発。精神医学 55(4) : 347-354, 2013.
- 25) 長 健, 大槻露華, 原田千恵美, 畠山みゆき, 三宅潤子, 光成郁子, 五阿弥倫子, 山田光彦, 稲垣正俊 : 一般身体科かかりつけクリニック外来患者全例を対象とした定期的なうつ病スクリーニングの実施可能性—後方視的, 量的および質的検討—。精神科治療学 29(3) : 379-386, 2014.
- 26) 亀山晶子, 勝又陽太郎, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 小高真美, 竹島 正 : 生前に自殺関連行動のあった事例の生存時間に影響する心理社会的要因。精神医学 55(12) : 1155-1163, 2013.

(2) 総説

- 1) Wada K, Funada M, Matsumoto T, Shimane T: Current status of substance abuse and HIV infection in Japan. Journal of Food and Drug Analysis 21 (supplement): S33-S36, 2013.
- 2) 竹島 正, 山内貴史 : 地域が若年層の自殺とどう向き合うか—地域に求められる取り組みとは—。月刊地域医学 27(6) : 19-22, 2013.
- 3) 竹島 正, 的場由木 : メンタルヘルスの問題を抱えた生活困窮者の支援。公衆衛生情報 43 (6) : 26-29, 2013.
- 4) 竹島 正 : 自殺対策のこれからの 10 年。公衆衛生情報 43(1) : 6-7, 2013.
- 5) 稲垣正俊, 竹島 正 : 科学的根拠に基づく自殺予防総合対策のための学術団体の連携。公衆衛生 77(4) : 331-333, 2013.
- 6) 後藤基行, 竹島 正, 永田郁子, 村田美穂, 吉田光爾, 和田圭司, 安西信雄, 有馬邦正 : (独) 国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料館開設計画—傷痕軍人武蔵療養所から未来に向けて—。精神医学史研究 17(2) : 81-88, 2013.
- 7) 後藤基行, 竹島 正, 有馬邦正 : 国立精神・神経医療研究センターにおける歴史資料館開設計画について。一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会会報 58 : 8, 2013.
- 8) 趙 香花, 長沼洋一, 河野稔明, 立森久照, 野口正行, 藤田健三, 太田順一郎, 西 大輔, 竹島 正 : 岡山県の医療保護入院患者と保護者に関する実態調査。日本社会精神医学会雑誌 22(4) : 440-451, 2013.
- 9) 瀧脇 憲, 竹島 正, 立森久照, 岡村 毅, 的場由木 : 「単身生活者の実態と支援ニーズを把握するための調査」報告。貧困研究 11 : 93-106, 2013.
- 10) 立森久照, 竹島 正, 栗田主一 : わが国の長期在院者の現況と推移。精神科治療学 29(1) : 13-18, 2014.
- 11) 下田陽樹, 竹島 正, 立森久照 : 精神保健医療福祉のモニタリングとしての 630 調査の経緯と今後の方向。精神保健研究 60 : 3-9, 2014.
- 12) 廣川聖子, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 亀山晶子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正 : 精神科治療を受けていた自殺既遂者の心理社会的特徴 : 心理学的剖検による 76 事例の検討。精神神経学雑誌 115(9) : 923-932, 2013.
- 13) 松本俊彦 : 不安障害の薬物療法と新たな治療薬依存。精神科治療学 28(4) : 463-471, 2013.
- 14) 松本俊彦 : 第 3 章 診断・症状トピックス 43 アルコール依存 / 44 薬物依存。精神科臨床サービス (特集 精神保健・医療・福祉の今がわかるキーワード 126) 13(2) : 196-197, 2013.

- 15) 松本俊彦:臨床ゼミ アディクション: ゆるやかな共助のためのエチュード 第1回 アディクション—精神医学の鬼っ子. 臨床心理学 13(3): 435-443, 2013.
- 16) 松本俊彦: 5. アルコールにまつわる諸問題 2) アルコールと自殺. Progress in Medicine 33(4): 893-897, 2013.
- 17) 松本俊彦: 処方薬乱用・依存からみた今日の精神科治療の課題: ベンゾジアゼピンを中心に. 臨床精神薬理 16(6): 803-812, 2013.
- 18) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清: 少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラム: その有効性と利用可能性. 精神神経学雑誌 115(5): 455-462, 2013.
- 19) 松本俊彦: わが国の自殺の現状と自殺予防に期待する薬剤師の役割. 薬学雑誌 133(6): 599-615, 2013.
- 20) 松本俊彦: 現代社会とうつ病: うつ病と自殺予防. 最新医学 68(6): 1150-1153, 2013.
- 21) 松本俊彦: 若者の精神保健② 自傷行為. 公衆衛生 77(6): 430-433, 2013.
- 22) 松本俊彦: 薬物依存患者への疾病教育. 日本精神科病院協会雑誌 32(6): 559-566, 2013.
- 23) 松本俊彦: 薬物依存症臨床における倫理—医療スタッフ向け法的行動指針—. 精神神経学雑誌 (第108回学術総会特別号) 115: SS1-9, 2013.
- 24) 松本俊彦: 薬物依存と発達障害—薬物依存臨床における注意欠陥・多動性障害傾向をもつ成人の特徴—. 精神神経学雑誌 115(6): 643-651, 2013.
- 25) 松本俊彦: HIV 感染症治療における HAND と精神疾患: 精神疾患と薬物依存. HIV BODY AND MIND 2(1): 41-46, 2013.
- 26) 松本俊彦: 特集 8 精神科救急における物質関連障害の治療的対応: 精神科救急における向精神薬関連障害の治療から～危機介入と予防を中心に～. 精神科救急 16: 135-139, 2013.
- 27) 松本俊彦, 松下幸生, 奥平謙一, 成瀬暢也, 長 徹二, 武藤岳夫, 芦沢 健, 小沼杏坪, 森田展彰, 猪野亜朗: 物質使用障害患者における自殺の危険因子とその性差: 年齢, 乱用物質の種類, およびうつ病との関連. 精神神経学雑誌 115(7): 703-710, 2013.
- 28) 今村扶美, 松本俊彦: 論説 ケーススタディーアディクションの症例. 臨床心理学 増刊第5号: 208-211, 2013.
- 29) 松本俊彦: 脱法ドラッグ乱用の実態. 季刊 Be! 112: 42-45, 2013.
- 30) 松本俊彦: 薬物依存症の治療～ワークブックを用いた治療プログラム『スマーブ』について～. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2013.2・第89号: 2-7, 2013.
- 31) 和田 清, 船田正彦, 松本俊彦, 嶋根卓也: わが国の薬物乱用・依存の最近の動向—特に「脱法ドラッグ」問題について—. 臨床精神医学 42(9): 1069-1078, 2013.
- 32) 松本俊彦: うつ病にまつわる最新キーワード うつとアルコール. 調剤と情報 臨時増刊号 19: 1314-1315, 2013.
- 33) 松本俊彦: III うつ病患者へのアプローチ アルコールとうつ. 調剤と情報 臨時増刊号 19: 1348-1353, 2013.
- 34) 松本俊彦: 自傷という暴力. こころの科学 172 (2013年11月号): 54-59, 2013.
- 35) 松本俊彦: 6. 物質使用障害とアディクションの精神病理学—「自己治療仮説」の観点から—. 精神科治療学 28 (増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック): 46-51, 2013.
- 36) 松本俊彦: 第I部総論 7) 新しい治療モデル—「底つき」モデルを乗り越えて—. 2. 物質使用障害に対するワークブックを用いた治療プログラム. 精神科治療学 28 (増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック): 59-65, 2013.
- 37) 松本俊彦: 第III部 薬物使用障害 16. 薬物使用障害臨床における司法的問題への対応. 精神科治療学 28 (増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック): 294-299, 2013.
- 38) 池田朋広, 常岡俊昭, 稲本淳子, 松本俊彦: 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック

第Ⅴ部 物質使用障害とアディクションをめぐる様々な問題 1)複雑な症例の治療 1.重複診断症例の臨床的特徴と治療 1)―統合失調症―. 精神科治療学 第28巻増刊号 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック: 357-363, 2013.

- 39) 松本俊彦: 処方薬乱用にみる精神科医療. こころの科学増刊号 くすりにたよらない精神医学: 74-80, 2013.
- 40) 松本俊彦: 社会の "痛み" を癒す―ケアの心理と病理 Vol.7 自傷とケア― "故意に自分の健康を害する" 症候群. 医学のあゆみ 247(11): 1198-1200, 2013.
- 41) 松本俊彦, 谷渕由布子: 脱法ドラッグによる精神障害 vs. 内因性精神病. 精神科 23(6): 644-651, 2013.
- 42) 松本俊彦, 小高真美, 山内貴史, 川野健治, 藤森麻衣子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 白川教人, 竹島 正: 心理学的剖検研究と今後の方向. 精神保健研究 60: 89-96, 2014.
- 43) 松本俊彦: 処方薬依存. 精神看護 17(1): 12-18, 2014.
- 44) 松本俊彦: 違法薬物使用を知った医療者に、通報義務はあるのか. 精神看護 17(1): 29-36, 2014.
- 45) 松本俊彦: 自分の体を傷つける―自傷行為. 児童心理 臨時増刊 2014年2月号 No.981「子どもの精神医学」を学ぶ: 75-80, 2014.
- 46) 松本俊彦: 脱法ドラッグの現況. 心と社会 45(1): 120-127, 2014.
- 47) 山口 豊, 窪田辰政, 杉山三七男, 橋本佐由理, 松本俊彦, 宗像恒次: 自傷行為研究における課題. 思春期学 32: 197-206, 2014.
- 48) 川野健治: 自殺を語る社会―物語論の視点から. アステイオン 079: 151-164, 2013.
- 49) 山内貴史, 松本俊彦: 特集 自殺と死生観 自殺と文明. 最新精神医学 18(5): 455-460, 2013.
- 50) 稲垣正俊, 大槻露華, 長 健, 山田光彦: うつ病の発見と治療に必要な、かかりつけ病院と院外資源との連携のために. 日本社会精神医学会雑誌 22(2): 155-162, 2013.

(3) 著書

- 1) 竹島 正: 精神保健に関する基本的理解. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: 改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第2巻/精神保健学―精神保健の課題と支援. へるす出版, 東京, pp1-16, 2014.
- 2) 竹島 正: 地域精神保健施策の概要. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: 改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第2巻/精神保健学―精神保健の課題と支援. へるす出版, 東京, pp 229-234, 2014.
- 3) 竹島 正: 地域保健・地域精神保健に係る関係法規・関係施策. 新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編: 改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第2巻/精神保健学―精神保健の課題と支援. へるす出版, 東京, pp 235-257, 2014.
- 4) 松本俊彦: 第1章 7. マトリックス・モデルとは何か? 治療プログラムの可能性と限界. 石塚伸一 編著: 薬物政策への新たなる挑戦 日本版ドラッグ・コートを越えて. 日本評論社, 東京, pp80-96, 2013.
- 5) 松本俊彦: 第3章 6 自傷行為と自殺企図の基礎知識. 三木とみ子・徳山美智子 編: 養護教諭が行う健康相談・健康相談活動の理論と実際. ぎょうせい, 東京, pp57-62, 2013.
- 6) 松本俊彦: 第2部 第3章 アルコール・薬物依存症と衝動的行動: 暴力、自傷・自殺、摂食障害を中心に. 和田 清 編: 精神科臨床エキスパート 依存と嗜癖 どう理解し、どう対処するか. 医学書院, 東京, pp63-78, 2013.
- 7) 松本俊彦: 嗜癖と依存. 責任編集 中谷陽二・岡田幸之 編: シリーズ生命倫理学 9 精神科医療. 丸善出版, 東京, pp201-227, 2013.
- 8) 松本俊彦: 第2部 III 青壮年 中毒性精神病. 鹿島晴雄, 古城慶子, 古茶大樹, 針間博彦, 前田貴記 編: 妄想の臨床. 新興医学出版社, 東京, pp310-322, 2013.

- 9) 松本俊彦：第Ⅱ部 第3章 素行障害の併存障害 e) 物質乱用。齊藤万比古 編：素行障害：診断と治療のガイドライン。金剛出版，東京，pp124-133，2013。
- 10) 松本俊彦：連載第9回 大衆音楽を「診る」ための18の断章 「抗うつ薬」としてのクレイジーケンバンド。こころの科学 172，日本評論社，東京，pp118-124，2013。
- 11) 松本俊彦：8-2-7 パーソナリティ障害。精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014年版 歩み始めた地域総合支援。中央法規出版，東京，pp165-165，2013。
- 12) 松本俊彦：Ⅵ 生理的障害及び身体的要因に関連した行動症候群。新版・精神保健福祉士養成セミナー 編集委員会 編：改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療。へるす出版，東京，pp119-127，2013。
- 13) 松本俊彦：Ⅶ 成人のパーソナリティおよび行動の障害。新版・精神保健福祉士養成セミナー 編集委員会 編：改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療。へるす出版，東京，pp127-140，2013。
- 14) 松本俊彦：Ⅲ アルコール関連問題対策。新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編：改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療。へるす出版，東京，pp 107-123，2013。
- 15) 松本俊彦：Ⅳ 薬物乱用防止対策。新版・精神保健福祉士養成セミナー編集委員会 編：改訂 新版・精神保健福祉士養成セミナー第1巻 精神医学—精神疾患とその治療。へるす出版，東京，pp 123-142，2013。
- 16) 松本俊彦：8. 破壊的行動障害 C. 薬物乱用。齊藤万比古 総編集 子どもの心の診療シリーズ 子どもの心の処方箋ガイド 診察の仕方／診断評価／治療支援，pp329-331，中山書店，東京，2014。
- 17) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち（子どものこころの発達を知るシリーズ01）。合同出版，東京，pp1-168，2014。
- 18) 川野健治：生と死／自殺・死別。日本発達心理学会 編：発達心理学事典。丸善出版，東京，2013。
- 19) 川野健治：自死遺族支援。精神保健福祉白書演習委員会 編：精神保健福祉白書 2014。中央法規出版，東京，pp37-37，2013。
- 20) 川野健治：レジリエンス。日本発達心理学会 編：災害・危機と人間。新曜社，東京，pp140-148，2013。
- 21) 藤森麻衣子，竹島 正：科学的根拠に基づく自殺予防総合対策推進コンソーシアム。精神保健福祉白書 2014年版 歩み始めた地域総合支援。精神保健福祉白書編集委員会 編集：中央法規出版，東京，p32，2013。
- 22) 藤森麻衣子：医療者間コミュニケーション。日本緩和医療薬学会 編：緩和医療薬学。南江堂，東京，pp96-98，2013。
- 23) 山内貴史，竹島 正：自殺総合対策大綱の改正。精神保健福祉白書編集委員会 編：精神保健福祉白書 2014年版。中央法規出版，東京，pp22-22，2013。
- 24) 小高真美：ワークショップの効果検討。福島喜代子 編：自殺危機にある人への初期介入の実際。明石書店，東京，pp199-218，2013。

(4) 研究報告書

- 1) 竹島 正，川野健治，藤森麻衣子，松本俊彦，山内貴史，福永龍繁，鈴木秀人，引地和歌子，白川教人，勝又陽太郎，小高真美，大槻露華，白神敬介，岩上真歩子，久永彩香：自殺の要因分析体制の確立に関する研究。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究報告書。pp7-14，2014。

- 2) 竹島 正, 久永彩香, 山内貴史, 小高真美, 松本俊彦: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究: 諸外国における心理学的剖検の症例対照研究の研究手法の検討. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究報告書. pp15-38, 2014.
- 3) 竹島 正, 山内貴史, 奥村泰之: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 総務省消防庁が保有する自損行為による救急搬送事例の分析に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究報告書. pp39-43, 2014.
- 4) 松本俊彦, 小高真美, 立森久照, 山内貴史, 竹島 正, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究: 睡眠障害と自殺の関連: 心理学的剖検研究による症例対照研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究報告書. pp45-58, 2014.
- 5) 島田達洋, 小口芳世, 猪飼紗恵子, 稲垣 中, 椎名明大, 小泉典明, 竹島 正, 小山明日香, 瀬戸秀文: 医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 (その 1) 医療観察法導入後における精神保健福祉法第 24 条に基づく警察官通報ならびに第 25 条に基づく検察官通報の現状に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究 (研究代表者: 平林直次)」総合研究報告書 (平成 22~24 年): pp57-67, 2013.
- 6) 山田全啓, 本保善樹, 高岡道雄, 宇田英典, 野上耕二郎, 福井貴実子, 辻本哲士, 橋爪聖子, 後藤基行, 大塚俊弘, 加納紅代, 森 隆夫, 山下俊幸, 柿木達也, 鈴木孝太, 竹島 正, 車谷典男, 松尾伸子, 藤原恵美子, 片山聡子: 平成 25 年度 地域保健総合推進事業 全国保健所長会協力事業「精神科医療と地域ケアの連携推進事業 (分担事業者: 山田全啓)」報告書. 2014.
- 7) 竹島 正, 大場義貴, 白神敬介, 三井敏子, 小楠真澄, 立森久照, 趙 香花, 西 大輔, 大塚俊弘, 小野善郎, 二宮貴至, 藤田健三: 早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究 (研究代表者: 岡崎祐士) 平成 22-24 年度総合研究報告書. pp69-71, 2013.
- 8) 竹島 正, 趙 香花, 立森久照, 西 大輔, 大塚俊弘, 小野善郎, 二宮貴至, 藤田健三, 三井敏子: 早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究 (研究代表者: 岡崎祐士) 平成 24 年度総括・分担研究報告書. pp103-124, 2013.
- 9) 竹島 正: 新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」総括・分担研究報告書. pp1-6, 2014.
- 10) 竹島 正, 西 大輔, 立森久照, 白田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 岡村 毅, 金田一正史, 家原敏彰, 大澤日登美, 中村征人, 佐々木英司, 的場由木, 山田全啓: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—地域精神保健医療強化とリーダーシップ育成の検討—. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書. pp7-16, 2014.
- 11) 竹島 正, 立森久照: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—障害福祉計画に係る基本指針における入院中の精神障害者の地域生

- 活への移行の指標の検討—平成25年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書. pp17-27, 2014.
- 12) 竹島 正, 河野稔明, 立森久照, 菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子, 岡田幸之: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究—在院機関からみた医療観察法入院処遇と一般精神科入院治療の地域・医療機関特性の関連—. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書. pp29-33, 2014.
 - 13) 立森久照, 臼田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 西 大輔, 竹島 正: 630 調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究. 平成25年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書. pp35-49, 2014.
 - 14) 竹島 正, 後藤基行, 河野稔明, 立森久照, 山田全啓: てんかんの地域医療における保健行政的研究(1)都道府県医療計画におけるてんかん医療の記載に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者：大槻泰介）」平成25年度総括・分担研究報告書. pp17-22, 2014.
 - 15) 竹島 正, 後藤基行, 栗田主一, 井上有史, 大槻泰介, 亀山 茂, 田所裕二: てんかんの地域医療における保健行政的研究(2)高齢てんかん患者の診療確保の検討. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者：大槻泰介）」平成25年度総括・分担研究報告書. pp23-28, 2014.
 - 16) 竹島 正, 立森久照, 下田陽樹, 河野稔明, 北村弥生, 田所裕二, 大槻泰介: てんかんの地域医療における保健行政的研究(3)てんかん患者の保健医療福祉等のニーズ調査実施のための検討. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究（研究代表者：大槻泰介）」平成25年度総括・分担研究報告書. pp29-35, 2014.
 - 17) 竹島 正, 高橋清久, 立森久照, 西 大輔, 山内貴史, 川上憲人: 国際連携. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド（研究代表者：研究代表者：川上憲人）」平成25年度総括・分担研究報告書. pp68-71, 2014.
 - 18) 竹島 正, 樋口輝彦, 立森久照, 西 大輔: 精神障害分野における英文文献リサーチの概要: ICF 活用の状況. 平成24年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「障害関係分野における今後の研究の方向性に関する研究（研究代表者：岩谷 力）」総括・分担研究報告書. pp9-13, 2013.
 - 19) 竹島 正, 立森久照: 既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者の重症度に応じた評価手法の開発に関する研究（研究代表者：山内慶太）」平成24年度総括・分担研究報告書. pp29-36, 2013.
 - 20) 立森久照, 竹島 正: 重症入院患者の評価方法の開発と統計処理方法に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究（研究代表者：安西信雄）」平成25年度総括・分担研究報告書. pp171-183, 2014.
 - 21) 立森久照, 尾崎紀夫, 秋山 剛, 和田 清, 松本俊彦, 鈴木 太, 徳倉達也, 下田陽樹: こころの健康に関する方法論の検討と改善, 統計解析. 厚生労働科学研究費補助金「精神疾患の有病

- 率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド（研究代表者：川上憲人）」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp65-67, 2014.
- 22) 松本俊彦：地域における薬物依存症治療プログラム普及の必要性. 内閣府 平成 24 年度若年層向け薬物再乱用防止プログラム等に関する企画分析報告書. pp55-58, 2013.
- 23) 松本俊彦, 谷渕由布子, 高野 歩, 小林桜児, 和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究（研究代表者：和田 清）」分担研究報告書. pp111-144, 2013.
- 24) 松本俊彦, 谷渕由布子, 今村扶美, 小林桜児：司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「薬物乱用・依存等の実態把握と薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に関する研究（研究代表者：和田 清）」分担研究報告書. pp221-229, 2013.
- 25) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清：「医療観察法」指定入院医療機関への入院患者を対象とした認知行動療法の開発と普及に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究（研究代表者：和田 清）」総括研究報告書・分担研究報告書. pp133-146, 2013.
- 26) 松本俊彦：薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書. pp1-9, 2013.
- 27) 小林桜児, 松本俊彦, 今村扶美, 根岸典子, 若林朝子, 和田 清：専門外来における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書. pp11-20, 2013.
- 28) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田 清：医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書. pp43-54, 2013.
- 29) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清, 尾崎士郎, 今村洋子：司法関連施設における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書. pp55-64, 2013.
- 30) 松本俊彦, 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 栗坪千明, 白川裕一郎, 神田博之：民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書. pp65-72, 2013.
- 31) 川崎二三彦, 松本俊彦, 高橋 温, 上野昌江, 長尾真理子：「親子心中」に関する研究（2）—2000 年代に新聞報道された事例の分析—. 平成 23 年度報告書, 子どもの虹情報センター, 2013.
- 32) 松本俊彦, 立森久照, 谷渕由布子, 高野 歩, 和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）「「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究（研究代表者 和田 清）」総括・分担研究報告書. pp95-105, 2014.

- 33) 藤森麻衣子：遺族支援に資する介入法開発に関する研究。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究報告書。pp83-86, 2014.
- 34) 藤森麻衣子, 山内貴史, 小高真美, 竹島 正：国際的自殺対策の実態，および課題把握のための調査研究。厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業）「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討（研究代表者：椿 広計）」平成 25 年度研究班報告書。pp15-41, 2014.
- 35) 稲垣正俊, 山内貴史, 米本直裕：重篤な慢性疾患患者の診療過程における自殺予防に関する研究。平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究報告書。pp83-86, 2014.

(5) 翻訳

- 1) 松本俊彦（監訳），吉田精次（監訳），渋谷繭子：CRAFT 依存症者家族のための対応ハンドブック。金剛出版，東京，2013。（Meyers RJ, Wolfe BL: Get your loved one sober: alternatives to nagging, pleading, and threatening. Hazelden Publishing, Center city, 2004.）
- 2) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか 自己治療としてのアディクション。星和書店，東京，2013。（E J Khantzian, M J Albanese: Understanding addiction as self medication finding hope behind the pain. Rowman & Littlefield Publishers, Inc., Washington, 2009.）

(6) その他

- 1) Suka M, Yamauchi T, Tachimori H, Takeshima T: Suicide trends and geographical variations in Japan. Proceedings of Joint Meeting of the IASC Satellite Conference and 8th Conference of the Asian Regional Section of the IASC: 249-255, 2013.
- 2) 竹島 正：一般社団法人 日本社会精神医学会。精神医学 55(6)：591, 2013.
- 3) 的場由木, 竹島 正：困窮者への支援の取り組み。社会保険旬報 2550：22-29, 2013.
- 4) 竹島 正：精神保健福祉法からの連想—歴史資料館，芸術活動そしてメンタルヘルスサービスのモデル。日本社会精神医学会雑誌 22(2)：80-81, 2013.
- 5) 竹島 正：Leadership in Community Mental Health の掲載にあたって。日本社会精神医学会雑誌 23(1)：58, 2014.
- 6) 香月真理子, 竹島 正, 小林隆児, 清水邦光, 阿久津斎木, 滝川一廣, 愛甲修子, 水田 恵, 佐藤幹夫：岡江晃氏を囲んで 精神鑑定と臨床診断。飢餓陣営 40(2014 春号)：102-139, 2014.
- 7) 竹島 正：【岡江晃先生を悼む】いくつかのお礼を重ねて。飢餓陣営 40(2014 春号)：156-158, 2014.
- 8) 小高真美, 山内貴史, 竹島 正：「WHO 世界自殺レポート会議および関連行事」開催報告：第 1 回 WHO 世界自殺レポート会議。公衆衛生情報 43(11)：22-24, 2014.
- 9) 山内貴史, 小高真美, 竹島 正：「WHO 世界自殺レポート会議および関連行事」開催報告：第 2 回 関連行事①メディアカンファレンス。公衆衛生情報 43(12)：28-30, 2014.
- 10) 高岡道雄, 宇田英典, 伊地知昭浩, 山田全啓, 桐生宏司, 山口靖明, 本屋敷美奈, 酒井ルミ, 柿本裕一, 角田正史, 竹島 正：地域健康安全・危機管理対策総合研究事業—精神保健分野研究—。平成 24 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」報告書。pp277- 335, 2013.
- 11) 高岡道雄, 宇田英典, 伊地知昭浩, 山田全啓, 桐生宏司, 山口靖明, 本屋敷美奈, 酒井ルミ, 柿本裕一, 角田正史, 竹島 正：地域健康安全・危機管理対策総合研究事業—精神保健分野研究—。平成 23～24 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）

「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究（研究代表者：多田羅浩三）」総合報告書. pp27-29, 2013.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Takeshima T: Japan's suicide prevention strategy including challenges by the center for suicide prevention. Joint Symposium convened by NCNP and the University of Melbourne, Tokyo, 2013.6.28.
- 2) Takeshima T: Japan's suicide prevention strategy including challenges by the Center for Suicide Prevention. 2013 Annual Meeting and International Academic Conference, Taiwan, 2013.9.8.
- 3) Takeshima T: Japan's comprehensive suicide prevention policy and international implications. Second Meeting for the WHO World Suicide Report and Related Events Tokyo, 2013.12.18.
- 4) Matsumoto T: Drugs and suicide. Symposium 3 Drugs and mental disorder: Issues for diagnosis and treatment. CINP Special congress on addiction and mental health, Kuala Lumpur, 2013.10.1.
- 5) Yamauchi T: Activity report on the Media Conferences in Japan, 2011-2012. Second Meeting for the WHO World Suicide Report and Related Events, Tokyo, Japan, 2013.12.18.
- 6) 竹島 正: 大綱見直しの経緯とその内容. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23-25.
- 7) 松本俊彦: よくわかる向精神薬乱用・依存の予防. シンポジウム 28 薬物依存をめぐる多様な変化と臨床第 109 回日本精神神経学会総会, 福岡, 2013.5.24.
- 8) 和田 清, 船田正彦, 嶋根卓也, 松本俊彦: 薬物乱用・依存と脱法ドラッグ. 日本法中毒学会第 32 年会, 千葉, 2013.7.5.
- 9) 松本俊彦: 自傷行為を繰り返す人たちとその家族への支援. 第 35 回日本アルコール関連問題学会 職能分科会① (保健師) 講演, 岐阜, 2013.7.17.
- 10) 松本俊彦: 物質関連障害～SMARPP ワークブックを用いた再乱用防止プログラム. 第 13 回日本認知行動療法学会 ワークショップ 23, 東京, 2013.8.24.
- 11) 松本俊彦: わが国の精神科医療機関における脱法ドラッグ関連障害患者の動向と臨床的特徴. 第 21 回日本精神科救急学会 シンポジウム 2 物質依存, 東京, 2013.10.4.
- 12) 松本俊彦: 全国精神科医療施設調査から見た最近の薬物関連障害の実態と特徴. 平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 シンポジウム 8 薬物乱用の動向とその防止策, 岡山, 2013.10.5.
- 13) 松本俊彦: 依存の臨床から見て～. 日本線維筋痛症学会第 5 回学術集会 特別プログラム 1 エチゾラムの適切な使い方, 神奈川, 2013.10.6.
- 14) 松本俊彦: 自傷行為をくりかえす若者の心理をどう理解するか?. 第 56 回日本病院・地域精神医学学会 シンポジウム C 思春期・青年期の危機—自殺に傾く心理の理解とその支援, 北海道, 2013.10.13.
- 15) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 第 24 回日本嗜癖行動学会群馬大会, 教育講演 2, 群馬, 2013.11.2.
- 16) 松本俊彦: 薬物依存治療のあり方. 日本更生保護学会 第 2 回大会 シンポジウム 5 更生保護における薬物事犯者処遇について, 東京, 2013.12.8.
- 17) 松本俊彦: リストカットをくりかえす生徒の理解と対応. 第 6 回日本不安障害学会学術大会 ランチョンセミナー 6, 東京, 2014.2.2.

- 18) 松本俊彦：薬物関連障害患者の司法的問題とその対応。第 33 回日本社会精神医学会 学術委員主催 教育・研究入門講座，東京，2014.3.21.
- 19) 川野健治，勝又陽太郎，白神敬介：中学校における自殺予防教育プログラム GRIP。第 77 回日本心理学会，北海道，2013.9.19-21.
- 20) 川野健治：社会精神医学と質的心理学の対話。第 32 回日本社会精神医学会，熊本，2013.3.7-8.
- 21) 川野健治：「私」をめぐる物語へのディスコース分析の挑戦。第 77 回日本心理学会，札幌，2013.9.19-21.
- 22) 川野健治：面接調査と研究倫理。第 10 回日本質的心理学会，京都，2013.8.30-9.1.
- 23) 川野健治：「割り切れない心」と「研究の出口」をつなげる：社会精神医学と質的心理学の対話(2)。第 10 回日本質的心理学会，京都，2013.8.30-9.1.
- 24) 立森久照，山内貴史：自殺対策のための自殺死亡の地域統計の活用。統計数理研究所リスク解析戦略研究センター 第 5 回生物統計ネットワークシンポジウム，東京，2014.3.18.
- 25) 山内貴史：自殺対策の現状と今後：研究班以外の立場から。パネル討論会「自殺総合対策に必要な融合的研究：その現状と今後」，東京，2014.3.2.
- 26) 吉野淳一，石井千賀子，辻井弘美，小高真美，木村 睦，久保恭子，鈴木美砂子，大野真実：自死のあと遺された家族のたどるグリーフ・プロセスを理解するための自主シンポジウム。日本家族研究・家族療法学会，東京，2013.6.21-23.

(2) 一般演題

- 1) Suka M，Yamauchi T，Tachimori H，Takeshima T：Suicide trends and geographical variations in Japan. International Association for Statistical Computing, Asian Regional Section. Seoul, 2013.8.22-23.
- 2) Suka M，Yamauchi T，Tachimori H，Takeshima T：Geographical variations and contextual effects on suicide mortality in Japan. XXVII International Association for Suicide Prevention (IASP) World Congress, Oslo, 2013.9.24-28.
- 3) 稲垣 中，竹島 正：非定型抗精神病薬投与下における血糖のモニタリングとリチウム投与下における血中濃度モニタリング。第 109 回日本精神神経学会学術総会，福岡，2013.5.23-25.
- 4) 後藤基行，竹島 正：国立精神・神経医療研究センターの歴史資料館開設準備について。第 17 回日本精神医学史学会学術集会，東京，2013.11.9-10.
- 5) 引土絵未，岡崎重人，山崎明義，松本俊彦：治療共同体モデルに関する研究—米国治療共同体 Amity モデルを中心に—。平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2013.10.4.
- 6) 引土絵未，谷渕由布子，今村扶美，加藤 隆，川地 拓，高野 歩，若林朝子，松本俊彦，和田 清：薬物依存症者に対する認知行動療法プログラム (SMARPP) における脱法ハーブ乱用・依存患者の臨床的特徴。平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2013.10.5.
- 7) 近藤千春，高野 歩，松本俊彦：SMARPP の実施における課題の明確化のための実施機関での実態調査。平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2013.10.5.
- 8) 赤澤正人，松本俊彦，勝又陽太郎，小高真美，川上憲人，江口のぞみ，白川教人，立森久照，竹島 正：自殺企図歴のない成人男性の自殺リスク要因の検討。第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 9) 川野健治：被災地間の対話とインターローカルな知見。第 77 回日本心理学会，札幌，2013.9.19-21.
- 10) 須賀万智，山内貴史，立森久照，竹島 正：自殺死亡と地域特性に関する分析：マルチレベルモデルによる高・低リスク地域の探索。第 24 回日本疫学会学術総会，宮城，2014.1.23.
- 11) 中西三春，山内貴史，竹島 正：日本における自殺対策の検証評価の課題。第 33 回日本社会精

神医学会，東京，2014.3.21-22.

- 12) 眞崎直子，白神敬介，川野健治，的場由木，竹島 正：東日本大震災後の岩手県 A 町生活支援相談員との共同による自殺予防の地域診断に関する研究．第 33 回日本看護科学学会学術集会，大阪，2013.12.6-7.
- 13) 白神敬介：児童相談所における自殺関連問題に関する支援ニーズの検討．日本発達心理学会第 25 回大会，京都，2014.3.21-23.
- 14) 小高真美，渡辺恭江，引土絵未，岡田澄恵，高井美智子，稲垣正俊，山田光彦，竹島 正：自殺ハイリスク者支援のためのソーシャルワーク実践モデルの構築と同モデルをもとにした自殺予防対策研修開発の試み．第 37 回日本自殺予防学会，秋田，2013.9.13-15.
- 15) 小高真美，引土絵未，岡田澄恵，渡辺恭江：ソーシャルワーカーを対象とした自殺予防対策研修—研修開発とその予備的效果検討—．日本社会福祉学会第 61 回大会秋季大会，東京，2013.9.21-22.
- 16) 小高真美，松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，立森久照，川上憲人，江口のぞみ，白川教人，竹島 正：睡眠障害と自殺の関連：心理学的剖検による症例対象研究．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 17) 廣川聖子，松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，亀山晶子，小高真美，竹島 正：心理学的剖検を用いた統合失調症自殺既遂者の特徴に関する検討．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.
- 18) 小高真美，高井美智子，引土絵未，岡田澄恵，渡辺恭江，稲垣正俊，山田光彦，竹島 正：ソーシャルワーカーを対象とする自殺予防研修の開発と研修の予備的效果検討．第 33 回日本社会精神医学会，東京，2014.3.20-21.

(3) 研究報告会

- 1) 竹島 正：精神障害に関する研究のあり方の検討．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「障害関係分野における今後の研究の方向性に関する研究（研究代表者：岩谷 力）」第 1 回班会議，東京，2013.7.13.
- 2) 竹島 正，後藤基行：平成 25 年度 地域保健総合推進事業（全国保健所長会協力事業）「精神科医療と地域ケアの連携推進事業（分担事業者：山田全啓）」第 1 回班会議，東京，2013.7.15.
- 3) 竹島 正，小高真美，趙 香花，臼田謙太郎，下田陽樹，加藤直広：地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究（研究代表者：竹島 正）」第 1 回班会議，東京，2013.7.25.
- 4) 竹島 正，小高真美，山内貴史，白神敬介，大槻露華：自殺の要因分析体制の確立に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究（研究代表者：福田祐典）」第 1 回班会議，東京，2013.7.26.
- 5) 竹島 正：重症入院患者の評価方法の開発と統計処理方法に関する研究．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究（研究代表者：安西信雄）」第 2 回班会議，東京，2013.7.23.
- 6) 竹島 正：国際連携．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド（研究代表者：川上憲人）」第 1 回班会議，東京，2013.8.2.
- 7) 竹島 正：平成 25 年度地域保健総合推進事業「健康危機における保健所調整機能の強化に関する研究（分担事業者：高岡道雄）」精神保健分野 ICS 改定事業班第 1 回班会議，東京，2013.8.25.

- 8) 竹島 正, 立森久照: 国際連携. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究: 世界精神保健 日本調査セカンド」班会議, 東京, 2014.1.9.
- 9) 竹島 正: 自殺の要因分析体制の確立に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」第 2 回班会議, 東京, 2014.1.17.
- 10) 竹島 正: 地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」第 2 回班会議および研究班内シンポジウム, 東京, 2014.1.23.
- 11) 竹島 正: 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究. 障害者対策総合研究推進事業 (精神障害/神経・筋疾患分野)「普及啓発事業」研究成果発表会 (一般向け), 東京, 2014.2.28.
- 12) 立森久照, 加藤直広, 伊庭幸人, 臼田謙太郎, 後藤基行, 下田陽樹, 楠本英子, 竹島 正: ベイジアンモデル選択による時間的に通常と異なるパターンの検出法を用いた精神病床からの退院件数の推移が異なる地域の検討. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第 25 回研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 13) 後藤基行, 竹島 正, 吉田光爾, 有馬邦正: NCNP における歴史資料館開設準備計画. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第 25 回研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 14) 藤森麻衣子: 国際的自殺対策の実態、および課題把握のための調査研究. パネル討論会「自殺総合対策に必要な融合的研究: その現状と今後」, 東京, 2014.3.2.
- 15) 山内貴史, 立森久照, 竹島 正, 久永彩香: 環太平洋地域における配偶関係と自殺死亡の関連の国際比較. 第 3 回 自殺リスクに関する研究会, 東京, 2013.10.17.
- 16) 須賀万智, 山内貴史, 立森久照, 竹島 正: 自殺死亡と地域特性に関する分析: マルチレベルモデルによる高・低リスク地域の探索. 第 3 回 自殺リスクに関する研究会, 東京, 2013.10.17.
- 17) 山内貴史, 立森久照, 竹島 正, 久保田貴文, 椿 広計: 人口動態調査を用いた自殺対策のための地域データ基盤の作成とその利活用. International Workshop on Information Systems for Social Innovation, 東京, 2014.2.5.
- 18) 小高真美, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 立森久照, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 竹島 正: 睡眠障害と自殺の関連: 心理学的剖検研究による症例対照研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所第 25 回研究報告会, 東京, 2014.3.10.

(4) その他

- 1) 竹島 正: 被災者の心のケア—精神医療からの取り組みの現状と課題—(2). 宗教者災害支援連絡会 第 16 回情報交換会, 東京, 2013.8.29.
- 2) 竹島 正: 精神医療・保健福祉システム委員会. 日本精神神経学会, 東京, 2013.9.14.
- 3) 竹島 正, 後藤基行: 地域保健総合推進事業「健康危機における保健所の調整機能の強化に関する研究」第 2 回班会議, 奈良, 2013.11.23.
- 4) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子, 山内貴史, 小高真美: WHO 世界自殺レポート会議. 東京, 2013.12.16-17.
- 5) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子, 山内貴史, 小高真美, 白神敬介, 大槻露華, 岩上真歩子, 久永彩香: WHO 世界自殺レポート会議関連行事. 東京, 2013.12.18.
- 6) 竹島 正: 若年者の自殺対策のあり方に関するワーキング準備会 (予防・啓発班). 東京, 2014.1.15.

- 7) 竹島 正:若年者の自殺対策のあり方に関するワーキング準備会(危機介入班). 東京, 2014.1.20.
- 8) 竹島 正:平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討」第 2 回会議, 東京: 2014.1.26.
- 9) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子:平成 25-27 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合(精神障害分野)研究事業)「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」分担研究「自殺の要因分析体制の確立に関する研究」心理学的剖検調査員トレーニング心理学的剖検調査員研修, 東京, 2014.1.29.
- 10) 竹島 正, 後藤基行:平成 25 年度地域保健総合推進事業「精神科医療と地域ケアの連携推進事業(分担事業者 山田全啓)」第 3 回班会議, 兵庫, 2014.2.8.
- 11) 竹島 正:(コメンテーター)精神科医療と地域ケアの連携を目指して. 25 年度精神科医療と地域ケアの連携フォーラム, 兵庫, 2014.2.8.

C. 講演

- 1) 竹島 正:生きるということ～今、つながることについて考えたい～自死問題を考える市民のつどい. 千葉市精神保健福祉センター, 千葉, 2013.9.21.
- 2) 竹島 正:こころの健康と地域づくり. 阿品台いきいきプロジェクト 公開講座, 広島, 2013.10.10.
- 3) 竹島 正:自殺予防・自殺学. 2013 年 26 期生 ボランティア相談員 養成講座カリキュラム, 千葉, 2013.10.19.
- 4) 竹島 正:自殺予防のめざすもの. 長崎いのちの電話開局 19 周年記念講演会, 長崎, 2013.11.2.
- 5) 竹島 正, 林 康夫, 正岡茂明, 瀬戸屋雄太郎:パネル・ディスカッション「兵庫県における自殺予防の取り組み」. WKC フォーラム:自殺予防と地域ぐるみのサポート, 兵庫, 2013.12.19.
- 6) 竹島 正:歴史資料館整備の現在的意味. 近現代精神医療史ワークショップ 4, 愛知, 2013.12.22.
- 7) 竹島 正:お酒の問題と自殺予防. 第 2 回市民公開セミナー, 香川, 2014.2.16.
- 8) 竹島 正:今後の保健所における精神保健福祉活動について. 平成 25 年度自殺ハイリスク者地域支援事例検討会. 愛知県精神保健福祉センター, 愛知, 2014.3.7.
- 9) 竹島 正:「精神」はどう変わるか～今後 20 年の予測として～. 土佐病院, 高知, 2014.3.21.
- 10) 松本俊彦:トラウマと「故意に自分の健康を害する」行為. 非営利団体 Seeding Hope 主催 Seeding Hope 設立記念講演会, 東京, 2013.4.13.
- 11) 松本俊彦:S-8117(オキシコドン徐放錠). 非がん性疼痛適応拡大世話人会, 東京, 2013.4.21.
- 12) 松本俊彦:薬物から自分を守ろう. 立教大学全学共通カリキュラム 主題別 B「社会人への階段」, 東京, 2013.5.6.
- 13) 松本俊彦:アルコール問題とうつ、自殺. NPO 法人愛知県断酒連合会愛西断酒会主催 愛西断酒会結成 25 周年記念大会基調講演, 愛知, 2013.5.19.
- 14) 松本俊彦:こころの健康について～いきる・ささえる相談窓口とは～. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院看護部主催 看護の日記念講演会, 東京, 2013.5.20.
- 15) 松本俊彦:自分を傷つけない生き方をするには. 日本アノレキシア・プリミア協会主催 第 49 回 NABA ワークショップ, 埼玉, 2013.6.1.
- 16) 松本俊彦:自傷行為の理解と援助. 旭川精神医学研究会主催 学術講演会 特別講演, 北海道, 2013.6.7.
- 17) 松本俊彦:若者の薬物乱用防止のために薬剤師にできること. 一般社団法人日本女性薬剤師会主催 2013 年度学術講演会, 東京, 2013.6.16.
- 18) 松本俊彦:自傷行為から見たパーソナリティ障害. 平成 25 年度明治安田こころの健康財団主催 明治安田精神保健夜間講習, 東京, 2013.6.19.

- 19) 松本俊彦：青年期における薬物乱用・依存。地方独立行政法人山梨県立病院機構山梨県立北病院主催 平成 25 年子どもの心の診療支援事業「子どもの心に関する講演会」, 山梨, 2013.6.21.
- 20) 松本俊彦：自殺の実態とその予防について。独立行政法人国立重度知的障害者総合施設主催 国立のぞみの園医療福祉セミナー2013, 群馬, 2013.7.5.
- 21) 松本俊彦：向精神薬乱用と過量服薬を防ぐために精神科医にできること。なら精神科診療所懇話会主催 第 71 回なら精神科診療所懇話会学術講演会, 奈良, 2013.7.6.
- 22) 松本俊彦：青少年の自殺理解と予防：精神科医の視点から。GCC 認定グリーン・カウンセラー強化セミナー（第 4 回）, 東京, 2013.7.14.
- 23) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～「故意に自分の健康を害する」若者たち～。民間相談機関連絡協議会主催 民間相談機関連絡協議会 第 17 回定期総会 記念講演, 東京, 2013.7.15.
- 24) 松本俊彦：アディクション問題の理解と援助。MSD 株式会社主催 自殺関連行動ならびにアディクションからの回復研究会特別講演, 大阪, 2013.7.27.
- 25) 松本俊彦：自殺のサインに気づくために～自殺予防のために一人一人にできること。東久留米市主催 平成 25 年度こころの健康づくり講演会, 東京, 2013.7.31.
- 26) 松本俊彦：「自分を傷つける若者」を知る～思春期・青年期の SOS をキャッチする～。東京都南多摩保健所主催 平成 25 年度精神保健福祉講演会, 東京, 2013.8.2.
- 27) 松本俊彦：若者たちが抱える困難の根底にあるもの。AISD 文化フォーラム In 横浜組織委員会主催, 神奈川, 2013.8.3.
- 28) 松本俊彦：リストカット～故意に自分の健康を害する子ども・若者。ながの不登校を考える県民の会主催 これからの子ども・若者支援のための連続講座第 3 回講演会, 長野, 2013.8.18.
- 29) 松本俊彦：薬物・アルコール依存の治療プログラム。社会福祉法人桜ヶ丘社会事業協会 桜ヶ丘記念病院主催 薬物・アルコール依存の治療プログラムについてのセミナー, 東京, 2013.8.30.
- 30) 松本俊彦：アルコール・薬物依存症と自殺対策。北海道立精神保健福祉センター主催 第 8 回北海道自殺対策フォーラム, 北海道, 2013.9.7.
- 31) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺。独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 平成 25 年度アルコール問題の早期発見早期介入実践講座, 神奈川, 2013.9.13.
- 32) 松本俊彦：わが国における脱法ドラッグ乱用者の臨床的特徴。多摩田園臨床精神医学研究会主催 第 36 回多摩田園臨床精神医学研究会 特別講演, 神奈川, 2013.9.13.
- 33) 松本俊彦：アルコール問題と自殺予防。東京都福祉保健局主催 平成 25 年度自殺対策東京キャンペーン講演会, 東京, 2013.9.17.
- 34) 松本俊彦：子どもたちが抱える困難の根底にあるもの～気づき・かかわり・つながる大人になるために～。佐賀県伊万里保健福祉事務所主催 思春期保健フォーラム, 佐賀, 2013.9.23.
- 35) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 25 年度東海・北陸地区薬物中毒対策講習会, 富山, 2013.10.7.
- 36) 松本俊彦：薬物依存とは？その理解と援助。愛知県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度薬物依存症に関する普及啓発講演会, 愛知, 2013.10.12.
- 37) 松本俊彦：自殺未遂者調査について。中央区保健所主催 自殺未遂者予備調査報告会, 東京, 2013.10.15.
- 38) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存と過量服薬の理解と援助。BPD 家族会定例会, 東京, 2013.10.20.
- 39) 松本俊彦：薬物乱用・依存の現在。横浜ダルクひまわり家族会主催 家族会講演会, 神奈川, 2013.10.23.
- 40) 松本俊彦：脱法ドラッグ乱用・依存の現在。東京精神科医療懇話会主催 第 21 回東京精神科医療懇話会講演会, 東京, 2013.10.24.
- 41) 松本俊彦：依存症臨床から学んだこと。神奈川県立精神医療センターせりがや病院主催 神奈川県立精神医療センターせりがや病院開設 50 周年記念講演会, 神奈川, 2013.11.10.

- 42) 松本俊彦：薬物依存治療の新たな展開—SMARPP の理念と実際—。琉球精神薬理研究会主催 第4回琉球精神薬理研究会，沖縄，2013.11.15.
- 43) 松本俊彦：いま求められる依存症支援体制について。千葉県精神保健福祉センター主催 平成25年度薬物関連問題講演会，千葉，2013.12.6.
- 44) 松本俊彦：自傷行為について。東京私立学校保健研究会主催 研修会，東京，2013.12.7.
- 45) 松本俊彦：自傷行為と解離。国際トラウマ解離研究学会（ISSTD）日本支部解離研究会主催 2013年度・年次研究会，東京，2013.12.8.
- 46) 松本俊彦：自殺念慮、過量服薬の理解と対応。NPO 法人仙台グリーンケア研究会主催 医療者のための自死未遂者対応講演会，宮城，2013.12.15.
- 47) 松本俊彦：セクシュアル・マイノリティの自傷および薬物乱用・依存について。セクシュアル・マイノリティ事例研究会主催 アドバンスレクチャー第1回，東京，2014.1.12.
- 48) 松本俊彦：物質使用歴のある対象者の処遇。法務省保護局主催 第3回中央処遇指針研究会，東京，2014.1.14.
- 49) 松本俊彦：ドラッグから自分や仲間と仲間を守ろう。国際基督教大学 学生の健康を考える会主催 公開講座，東京，2014.1.21.
- 50) 松本俊彦：薬物処遇プログラムについて。法務省保護局主催 薬物支援研究会分科会 第3回薬物処遇プログラムに関する協議会，東京，2014.1.24.
- 51) 松本俊彦：若者の自殺予防のために大人たちにできること～自傷行為の理解と援助～。大分県・社会福祉法人大分いのちの電話主催 平成25年度 大分県自殺対策講演会，大分，2014.2.1.
- 52) 松本俊彦：アディクション臨床から見えてきた自殺予防のヒント～アルコール問題とうつ、自殺～。日本イヘライリリー株式会社主催 横須賀三浦精神科臨床懇話会，神奈川，2014.2.3.
- 53) 松本俊彦：依存症って何？～どう理解しどう援助するか。府中精神保健福祉協議会主催 市民のためのメンタルヘルス講座「依存症について考える」，東京，2014.2.10.
- 54) 松本俊彦：自傷行為って何？。日本アノレキシア・ブリア協会・ピアサポ祭り実行委員会主催 第10回ピアサポ祭り，東京，2014.2.16.
- 55) 松本俊彦：若者の薬物乱用・依存：その理解と援助。東京都薬物乱用防止推進 西東京市地区協議会主催 講演会，東京，2014.2.19.
- 56) 松本俊彦：自傷・自殺の理解と対応。横浜市立大学医学部精神医学教室主催 精神科レジデント講義，神奈川，2014.2.20.
- 57) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～若者の自殺予防のために～。三重県こころの医療センター主催 こころしっとこ学会特別講演，三重，2014.2.22.
- 58) 松本俊彦：薬物依存の現状と対応～脱法ドラッグをふまえて～。城東プシケフォーラム主催 第6回城東プシケフォーラム特別講演，東京，2014.2.25.
- 59) 松本俊彦：自殺相談ダイヤル・スーパーヴィジョン。NPO 法人メンタルケア協議会主催 自殺相談ダイヤル・スーパーヴィジョン，東京，2014.3.16.
- 60) 松本俊彦：虐待と嗜癖—精神科医療における診断・治療・連携の進め方。特定非営利活動法人子どもの村福岡・福岡県精神科病院協会主催 学術講演会，福岡，2014.3.18.
- 61) 松本俊彦：自殺予防における年齢階層ごとの課題と対応。兵庫県・一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会主催 平成25年度自殺予防講演会，兵庫，2014.3.23.
- 62) 松本俊彦：いのちをつなぎ止め、生きることを支援するとは。中央区保健所主催 平成25年度中央区ゲートキーパー養成講座，東京，2014.3.26.
- 63) 松本俊彦：アルコール問題と自殺。北里大学精神科学教室主催 教室研究会，神奈川，2014.3.27.
- 64) 川野健治：自殺に傾いた人を支えるために。上田保健所，長野，2013.7.25.
- 65) 川野健治：自殺予防の取り組み～教師として大切なこと。札幌市教育センター，北海道，2013.7.29.

- 66) 川野健治：自死遺族の心理と支援・対応。長野県，長野，2013.8.27.
- 67) 川野健治：自殺予防教育について。千葉市教育委員会，千葉，2013.9.4.
- 68) 川野健治：救急隊員・警察官等による自殺の初期介入。新城市消防署，愛知，2013.9.6.
- 69) 川野健治：自治体職員の自殺予防。新城市，愛知，2013.9.6.
- 70) 川野健治：自殺の現状と対策について。上尾市，埼玉，2013.10.2.
- 71) 川野健治：自殺対策専門研修未遂者支援。大分県看護協会，大分，2013.10.06.
- 72) 川野健治：自殺ハイリスクグループに属する人への支援。朝霞保健所，埼玉，2013.10.18.
- 73) 川野健治：自殺未遂者支援・思春期の自殺予防。宮崎市，宮崎，2013.12.13.
- 74) 川野健治：自殺が起こった後の対応。福井県，福井，2014.1.23.
- 75) 川野健治：自殺に傾いた人を支えるために。桶川市，埼玉，2014.1.24.
- 76) 川野健治：若者の自殺対策を考える。全国市町村国際文化研究所，滋賀，2014.2.19.
- 77) 川野健治：認知行動療法と自殺対策。NPO ころのカフェ京都，京都，2014.3.23.
- 78) 川野健治：自殺念慮の患者を抱え込まないために。岡崎市民病院，愛知，2014.3.24.
- 79) 藤森麻衣子：がん診療に携わる医師・コメディカルのためのコミュニケーションスキルアップセミナー。高知赤十字病院，高知，2013.7.20.
- 80) 藤森麻衣子：がん医療における患者—医療者間のコミュニケーション。済生会新潟第二病院緩和ケア講習会，新潟，2013.10.25.
- 81) 藤森麻衣子：悪い情報の伝え方～よりよい在宅看護看取りのためのコミュニケーション～。北九州訪問看護勉強会，福岡，2014.1.25.
- 82) 藤森麻衣子：国際的自殺対策の実態、および課題把握のための調査研究。パネル討論会「自殺総合対策に必要な融合的研究：その現状と今後」，東京，2014.3.2.
- 83) 山内貴史：藤田先生にご指導いただけたからこそ今がある。第2回藤田賞 受賞講演，東京，2014.3.2.
- 84) 小高真美：身近な方々の心の声に耳を傾けよう。ころの健康講座，神奈川，2013.10.8.
- 85) 小高真美：自殺予防～ケアマネジャーひとり一人にできることを考える～。居宅介護支援事業者分科会，東京，2014.1.28.
- 86) 小高真美：ゲートキーパー（ころのサポーター）養成講座，神奈川，2014.2.4.
- 87) 白神敬介：ゲートキーパー養成講座。小平市役所，東京，2013.12.17.
- 88) 白神敬介：自殺に関する基礎知識とゲートキーパーの役割。ふじみ野市保健センター 平成25年度保健推進員定例会，埼玉，2014.2.6.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Takeshima T：WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting 会長
- 2) Takeshima T：Asia Australia Mental Health International Advisory Council メンバー
- 3) 竹島 正：日本社会精神医学会 理事
- 4) 竹島 正：日本精神衛生学会 理事
- 5) 竹島 正：日本自殺予防学会 理事
- 6) 竹島 正：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 7) 竹島 正：日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」 委員
- 8) 竹島 正：日本精神神経学会「精神医療・保健福祉システム委員会」 委員
- 9) 竹島 正：第33回日本社会精神医学会 プログラム委員
- 10) 竹島 正：第38回日本自殺予防学会 プログラム委員

- 11) 竹島 正：第9回国際早期精神病学会 組織委員会委員
- 12) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 13) 松本俊彦：日本依存神経精神科学会 評議員
- 14) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 15) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
- 16) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 17) 川野健治：日本パーソナリティ心理学会 常任理事
- 18) 川野健治：日本社会精神医学会 理事
- 19) 川野健治：日本質的心理学会 理事
- 20) Fujimori M: World Psychooncology Society, Research Committee
- 21) 藤森麻衣子：日本サイコオンコロジー学会 教育委員
- 22) Yamauchi T：WPA Section on Epidemiology and Public Health-2014 Meeting 日本委員会委員

(3) 座長

- 1) 竹島 正：精神障がいをもつ人が「ホームレス」になる原因とは何か？—ホームレスとハウスレスについて考える—（司会・コーディネーター）. 第109回日本精神神経学会学術総会，福岡，2013.5.23-25.
- 2) 竹島 正：日本精神神経学会が自殺対策に果たすべき役割とは（精神保健に関する委員会）（司会・コーディネーター）. 第109回日本精神神経学会学術総会，福岡，2013.5.23-25.
- 3) 竹島 正：（シンポジウム座長）地域社会・国民の求める精神保健医療. 第50回指導課程研修. 東京，2013.6.26-27.
- 4) 竹島 正：（シンポジウム座長）The many faces of depression. 多様化するうつ病とその治療について考える—うつと医療とアートの世界—，東京，2013.7.6-7.
- 5) 竹島 正：（シンポジウム座長）アートでふれる、うつ心と軌跡展. アートでふれる、うつ心と軌跡展，東京，2013.7.8-11.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦：日本思春期精神療法学会編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) Takeshima T, Tachimori H, Nishi D: Joint Symposium convened by NCNP and the University of Melbourne, Tokyo, 2013.6.28.
- 2) 竹島 正, 立森久照, 西 大輔：第50回精神保健指導課程研修. 東京，2012.6.26-27.
- 3) 川野健治, 竹島 正, 松本俊彦, 藤森麻衣子：第4回心理職自殺予防研修. 東京，2013.8.6-7.
- 4) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子：第7回自殺総合対策企画研修. 東京，2013.8.20-22.
- 5) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子：第7回精神科医療従事者自殺予防研修. 東京，2013.9.17-18.
- 6) 松本俊彦, 竹島 正, 川野健治, 藤森麻衣子：第4回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京，2013.11.5-6.
- 7) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 藤森麻衣子：第8回精神科医療従事者自殺予防研修. 宮城，2013.12.3-4.

(2) 研修会講師

- 1) 竹島 正, 山内貴史: 自殺の実態と対策. 第 4 回心理職自殺予防研修, 東京, 2013.8.6-7.
- 2) 竹島 正, 山内貴史: 我が国の自殺及び自殺対策の実態. 第 7 回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2013.9.17-18.
- 3) 竹島 正, 山内貴史: 我が国の自殺及び自殺対策. 第 8 回精神科医療従事者自殺予防研修, 宮城, 2013.12.3-4.
- 4) 竹島 正: 精神保健の現状と課題. 第 18 回精神保健指定医研修会, 東京, 2013.12.11.
- 5) 竹島 正 (助言者): 分科会 1「どう向き合うか、措置業務 (警察官通報を中心に)」。第 38 回全国精神保健福祉業務研修会 in 横浜, 神奈川, 2014.2.2.
- 6) 松本俊彦: 自傷行為と過量服薬の理解と援助. 公益社団法人山梨県看護協会主催 平成 25 年度自殺対策人材育成研修会, 山梨, 2013.5.29.
- 7) 松本俊彦: 自傷行為の理解と対応. 静岡県高等学校教育相談研究会主催 記念講演会, 静岡, 2013.5.31.
- 8) 松本俊彦: わが国の自殺の実態および自殺対策について. 神奈川精神保健福祉センター主催 平成 25 年度自殺対策基礎研修, 神奈川, 2013.6.12.
- 9) 松本俊彦: 自殺の実態・地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 平成 25 年度自殺対策基礎研修, 神奈川, 2013.6.25.
- 10) 松本俊彦: 自殺予防のために一人ひとりにできること. 府中市主催 平成 25 年度自殺対策ゲートキーパー研修, 東京, 2013.6.25.
- 11) 松本俊彦: アディクションの理解. 東京都中部総合精神保健福祉センター主催 平成 25 年度精神保健福祉研修 (前期)「アディクションシリーズ 1 アディクション概論」, 東京, 2013.7.1.
- 12) 松本俊彦: 自殺未遂者の支援について. 山梨県峡東保健福祉事務所主催 平成 25 年度自殺企図者支援関係者研修会, 山梨, 2013.7.3.
- 13) 松本俊彦: 薬物処遇プログラムの集団実施について. 法務省保護局主催 薬物依存対策研修, 千葉, 2013.7.10.
- 14) 松本俊彦: 自殺をめぐる最近の動向と対策. 東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成 25 年自殺対策ゲートキーパー研修, 東京, 2013.7.12.
- 15) 松本俊彦: アディクションへのアプローチ～SMARPP による薬物依存症の理解～その理論と実際. 東京都精神保健福祉センター主催 平成 25 年度精神保健福祉研修 (前期) アディクションシリーズ 2 アディクションへのアプローチ, 東京, 2013.7.17.
- 16) 松本俊彦: 自殺念慮者と自殺未遂者への対応～自傷行為へのアセスメント. 大阪府こころの健康総合センター主催 平成 25 年度自殺予防相談従事者養成研修, 大阪, 2013.8.9.
- 17) 松本俊彦: 自死の視点～未遂者・自傷行為等ハイリスクな人々への支援と連携. 島根県立心と体の健康センター主催 平成 25 年度自死対策等関係機関研修会, 島根, 2013.8.11.
- 18) 松本俊彦: 未遂を繰り返す人への対応. 公益財団法人東京都福祉保健財団主催 平成 25 年度ゲートキーパー養成研修会, 東京, 2013.8.14.
- 19) 松本俊彦: 若者の自傷行為について. 宮城県立精神保健福祉センター主催 平成 25 年度思春期問題研修会, 宮城, 2013.8.16.
- 20) 松本俊彦: 薬物依存症と自殺対策. 福島県精神保健福祉センター主催平成 25 年度薬物関連問題実務担当者研修会/自殺対策関係者研修会開催要領, 福島, 2013.9.20.
- 21) 松本俊彦: 矯正施設における自傷・自殺. 法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第 45 回研修, 東京, 2013.9.27.
- 22) 松本俊彦: 被災地におけるアルコール問題と自殺対策について. 新潟県精神保健福祉協会主催 平成 25 年度被災地におけるこころのケア活動従事者研修会, 新潟, 2013.10.11.
- 23) 松本俊彦: 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応. 徳島県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度自殺総合対策関係機関職員研修, 徳島, 2013.10.18.

- 24) 松本俊彦：若者と薬物依存. 内閣府委託事業 平成 25 年「子ども・若者支援地域ネットワーク形成のための研修会」, 東京, 2013.10.27.
- 25) 松本俊彦：気づき、かかわり、つなぎ～子どもたちの自傷や『死にたい』にどう対応するか. 横浜市青少年相談センター主催 平成 25 年度若者相談支援スキルアップ研修 メンタルヘルス特別コース～生きづらい若者への理解と援助, 神奈川, 2013.11.8.
- 26) 松本俊彦：薬物依存症に対する認知行動療法. 沖縄県福祉保健部薬務疾病対策課主催 薬物乱用対策研修会, 沖縄, 2013.11.15.
- 27) 松本俊彦：地域における支援困難家族について. 横須賀市こども育成部主催 平成 25 年度保健福祉医療従事者研修会, 神奈川, 2013.12.2.
- 28) 松本俊彦：自殺の現状と若年者支援. 山形県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度「自殺対策心のサポーター（ゲートキーパー）養成ファシリテーター継続研修会」および「自殺対策についての相談機関合同研修会」, 山形, 2013.12.13.
- 29) 松本俊彦：自殺関連事象. 厚生労働省こころの健康づくり対策事業 思春期精神保健対策医療従事者専門研修, 千葉, 2014.1.21.
- 30) 松本俊彦：最近の自殺の動向と支援対策について. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺防止のための電話相談技能研修, 東京, 2014.1.26.
- 31) 松本俊彦：若者の「生きる」を支えるために～自傷行為に向かう若者の心理と対応. 中野区保健所主催 ゲートキーパー養成研修, 東京, 2014.2.5.
- 32) 松本俊彦：アルコール問題とうつ・自殺. 千葉県医師会主催 平成 25 年かかりつけ医うつ病対応力向上研修, 千葉, 2014.2.6.
- 33) 松本俊彦：自殺ハイリスク者のアセスメントとマネジメント. 長野県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度 自殺企図者の支援に係る関係者研修会, 長野, 2014.2.7.
- 34) 松本俊彦：脱法ドラッグの現状. 株式会社大林組 PFI 事業部主催 播磨社会復帰促進センター社会復帰促進部教育専門スタッフ研修, 兵庫, 2014.2.17.
- 35) 松本俊彦：薬物依存者の回復支援～当事者を理解し回復を支援するために～. 広島県主催 平成 25 年度地域依存症対策推進研修事業, 広島, 2014.2.24.
- 36) 松本俊彦：薬物依存症認知行動療法プログラムの進め方. 広島県主催 平成 25 年度地域依存症対策推進研修事業, 広島, 2014.2.24.
- 37) 松本俊彦：覚せい剤事犯者処遇プログラム. 法務省法務総合研究所主催 第 6 回保護観察官専修科研修, 東京, 2014.2.26.
- 38) 松本俊彦：自殺未遂者の理解と援助. 大津市保健所主催 大津市自殺未遂者支援研修会, 滋賀, 2014.3.3.
- 39) 松本俊彦：大津市「いのちをつなぐ相談員」派遣事業の事例についての検討. 大津市保健所主催 大津市自殺未遂者支援研修会, 滋賀, 2014.3.3.
- 40) 松本俊彦：精神鑑定事例. 法務省矯正研修所主催 調査鑑別特別科第 7 回研修, 東京, 2014.3.5.
- 41) 松本俊彦：若者の自殺予防. 熊本県臨床心理士会主催 平成 25 年度学校支援公開研修会, 熊本, 2014.3.9.
- 42) 松本俊彦：若者の自殺対策に求められる者～自分の健康を害する若者たちの SOS が聞こえますか？～. 福岡県精神保健福祉センター主催 平成 25 年度自殺予防対策研修会, 福岡, 2014.3.19.
- 43) 川野健治：士業職の方を対象とした自殺予防対策ゲートキーパー研修. 西尾市, 愛知, 2013.9.5.
- 44) 川野健治：民生委員・児童委員ゲートキーパー養成研修. 岡崎市, 愛知, 2013.10.3.
- 45) 山内貴史：自殺対策の実施とその評価. 愛知県 25 年度自殺防止地域力強化事業研修, 愛知, 2013.7.30.
- 46) 山内貴史：自殺予防活動の組立と評価. 滋賀県 25 年度市町等自殺予防対策研修会, 滋賀,

2013.7.5.

- 47) 山内貴史：地方自治体における自殺対策の取組状況と課題。第7回自殺総合対策企画研修，東京，2013.8.20-22.
- 48) 山内貴史：自殺統計の読み方と利用法。第7回自殺総合対策企画研修，東京，2013.8.20-22.
- 49) 山内貴史：自殺対策の実施とその評価(第2回)。愛知県25年度自殺防止地域力強化事業研修，愛知，2013.8.26.
- 50) 福島喜代子，小高真美：自殺危機初期介入スキルリーダー養成研修会，埼玉，2013.6.19.
- 51) 福島喜代子，小高真美：自殺危機初期介入スキルワークショップ。自殺予防研修(市役所職員)，千葉，2013.7.8.
- 52) 小高真美：自殺の実態と予防について～今、私たちにできること～。神奈川県民生委員児童委員協議会西湘ブロック研修会，神奈川，2013.7.16.
- 53) 小高真美：ソーシャルワーク。第4回心理職自殺予防研修，東京，2013.8.7.
- 54) 福島喜代子，小高真美，岡田澄恵：自殺危機初期介入スキルワークショップ，東京，2013.9.2.
- 55) 福島喜代子，小高真美，岡田澄恵：自殺危機初期介入スキルリーダー養成研修会，東京，2013.9.3.
- 56) 勝又陽太郎，白神敬介：学校での自殺予防。第4回心理職自殺予防研修，東京，2013.8.7.
- 57) 白神敬介：ゲートキーパー養成研修。ふじみ野市保健センター，埼玉，2013.11.11.
- 58) 白神敬介：保健師活動と自殺予防対策。宮崎県看護協会主催 平成25年保健師研修会，宮崎，2013.12.7.

F. その他

- 1) Takeshima T: mhGAP ForumWHO, Switzerland, 2013.10.7.
- 2) 竹島 正：ライフエンディング研究会。2013.4.9.
- 3) 竹島 正：全国精神保健福祉センター長会常任理事会。東京，2013.4.13.
- 4) 竹島 正：アートセラピー勉強会。東京，2013.4.17.
- 5) 竹島 正：被災者支援のための情報収集。岩手，2013.4.30-5.1.
- 6) 竹島 正：平成25年度第1回自殺対策主管課長等会議。東京，2013.5.16.
- 7) 竹島 正：地域ケア連携を進める会。東京，2013.6.22.
- 8) 竹島 正：第8回今後の精神科医療を語る会幹事会。東京，2013.7.5.
- 9) 竹島 正：平成25年度第50回定期総会・全国精神保健福祉センター長会。東京，2013.7.18.
- 10) 竹島 正：アートセラピーワークショップ。東京，2013.7.31.
- 11) 竹島 正：第49回全国精神保健福祉センター研究協議会。三重，2013.10.22-23.
- 12) 竹島 正：平成25年度第2回全国自殺対策主管課長等会議。東京，2014.2.27.
- 13) 山内貴史：内閣府 自殺関連統計マニュアル検討会(第1回)検討委員，内閣府，東京，2013.11.20.
- 14) 山内貴史：内閣府 自殺関連統計マニュアル検討会(第2回)検討委員，内閣府，東京，2014.1.24.
- 15) 山内貴史：内閣府 自殺関連統計マニュアル検討会(第3回)検討委員，内閣府，東京，2014.3.3.

14. 災害時こころの情報支援センター

I. 研究部の概要

災害時こころの情報支援センターは、平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置された。当センターの活動は、主に以下の 3 つである。

(1) 大規模災害発生時の全国レベルの支援体制に関する技術的支援

1) 災害派遣精神医療チーム (Disaster Psychiatry Assistance Team; DPAT) の活動手法の開発・検討

- 平成 25 年 4 月 1 日に厚生労働省が「災害派遣精神医療チーム (Disaster Psychiatric Assistance Team: DPAT) 活動要領」を发出されたことを受け (障精発 0401 第 1 号)、有識者による検討会を経て、現場で支援を行うための具体的なマニュアル「DPAT 活動マニュアル」を作成し、全国に周知した。

2) 大規模災害訓練 (DPAT 研修)

- DPAT 活動要領及び DPAT 活動マニュアルに基づく具体的な研修を、平成 26 年 1 月 8, 14, 15, 16 日に、全都道府県等の精神保健福祉センター長、各地域の災害精神医療のリーダーになると想定される医師、事務担当職員を対象として、DPAT 研修を行い、全都道府県等 67 自治体、計 188 名が参加した。

3) 災害精神保健医療情報支援システム (Disaster Mental Health Information Support System: DMHISS) 開発

- 災害時に厚生労働省および都道府県等が行う精神保健医療活動に関して、事前の支援体制の登録、支援のニーズや実績に関する情報共有、活動記録の分析等を目的として、インターネットを介して運用される災害精神保健医療情報支援システム (DMHISS) の開発を平成 24 年度に行い、平成 25 年 3 月から全国での本格稼働を実施していた。今年度の開発、改良にて、自県内災害の登録、活動報告の Web 入力、活動報告のグラフ化、個票・日報の全項目ダウンロード等を可能にした。

(2) データ収集・分析・発信

- 東日本大震災におけるこころのケアチームの活動に関する調査を実施し、支援の全体像の把握を行った。さらに、派遣スタッフ数や支援開始時期、相談活動場所に関して地域毎に差があったことを明らかにした。
- 被災 3 県に設置された心のケアセンターと連携し、共通の活動報告項目によるデータ収集、分析を行った。

(3) 研修会・教育

- 上記の DPAT の大規模災害訓練の他、WHO 版心理的応急処置 (Psychological First Aid: PFA) について、4 日間にわたる指導者研修等により、PFA の周知に努めた。
- 厚生労働省 PTSD 対策専門研修事業の委託を受け、PTSD 治療・支援並びに災害時の精神保健医療対応に関する研修を実施した。

平成 25 年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長：金 吉晴、情報支援研究室長：渡 路子、兼任研究員 (成人精神保健研究部認知機能研究室長)：荒川亮介、科研費研究員：大滝涼子、小見めぐみ、大沼麻実、外来研究員：吉田 航、科研費研究補助員：関根由美子、菊池美名子、科研費研究助手：野添健太、客員研究員：昼田源四郎、前田正治、石峯康浩、望月聡一郎、研究生：相馬和加奈、石田牧子、小菅清香、中村裕美。

II. 研究活動

1) 被災地の心の健康状態や支援内容に関するデータの収集・分析

(1)福島県における心のケアチーム活動実績調査

東日本大震災において、厚生労働省を経由した「こころのケアチーム」の活動実績について、他の被災地と統一した手法に基づいて集計し、被災県における今後の活動の基礎資料とした。今後発生が予想される大規模災害時の精神保健医療体制の在り方を検討する際の基盤とし、DPAT 研修等に反映させた。(渡, 荒川, 小見, 吉田)

(2)3 県心のケアセンター活動報告集計

今年度より岩手県, 宮城県, 福島県の心のケアセンターにて DMHISS で用いられている項目での活動報告を開始したことにより, 県ごとの活動の特色や時系列での変化について統一した報告が出来るようになった。(渡, 荒川, 小見, 吉田)

(3)全都道府県等における災害精神保健医療体制状況調査

平成 25 年度 DPAT 研修に参加した 67 都道府県等, 188 名(精神保健福祉センター長, チームリーダー, 事務担当者)に対し, 平成 24 年度時点の都道府県等における災害時精神保健医療整備状況, 訓練状況についてアンケート調査を行い, 自治体レベルでの体制整備状況を評価し, 今後の対策の基礎資料とした。(渡, 荒川, 小見, 吉田)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1)災害時精神保健医療活動における技術的支援

・岩手県大槌町への精神科医の派遣

岩手県こころのケアセンターの依頼により, 大槌町に定期的に精神科医を派遣し, 大槌町役場の健康相談に応じた。(渡)

・3 県心のケアセンターの活動報告集計に対する技術的指導・助言

心のケアセンターの活動を統一した指標で評価するため, 各センターでの集計方法等に関する指導・助言を電話, メールで継続して行った。(渡, 小見)

・台風第 26 号(東京都大島町)

大島町長の要請により, 平成 25 年 10 月 31 日に臨床心理士を 1 名派遣し, 大島町役場, 島しょ保健所, 子ども家庭支援センターで保健師と情報共有を行い, 遺児の対応について助言を行った。その後も, 定期的な訪問と, 支援活動に必要な情報の提供を行った。(渡, 吉田)

・山梨県豪雪

透析患者が受診困難になっているとの情報から, 精神科病院に関する情報について山梨県の担当課と情報交換を行い, 広域医療災害情報システム等に記載されている精神科病院の状況について情報提供を行った。(渡, 吉田)

2)市民社会に対する一般的な貢献

・当センターの HP (<http://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/>) で, ガイドライン・マニュアル等の資料を, 専門家, 一般向けに公開し, 災害時の対応についての啓発を行った。

3)専門教育面における貢献

・当センターの HP で, 専門家向けに e-learning を用いた災害時の精神保健医療に関する教育プログラムを実施した。(金, 渡, 協力者: 大沼)

・WHO 版 PFA を日本語に翻訳・導入し, 国際連合大学グローバルヘルス研究所の共催で PFA 指導者研修を行った。また, シンガポールにて在留邦人のケア関係者に対する研修を行った。翻訳版を HP に掲載した。(金, 大滝, 協力者: 大沼)

・日本ユニセフ協会と協働で, ユニセフ本部が発行している Child Friendly Space (CFS) のマニュアルをもとに, 国内での緊急時における「子どもにやさしい空間」のガイドラインの作成を行い, ガイドラインのドラフトを HP に掲載した。(金, 森脇)

・各種学術団体で, 心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。(金)

・専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った。(金, 渡)

4) 精研の研修の主催と協力

・大規模災害訓練 (DPAT 研修)

・DPAT 活動要領及び DPAT 活動マニュアルに基づく具体的な研修を, 平成 26 年 1 月 8, 14, 15, 16 日に, 全都道府県等の精神保健福祉センター長, 各地域の災害精神医療のリーダーになると想定される医師, 事務担当職員を対象として, DPAT 研修を行い, 全都道府県等 67 自治体, 計 188 名が参加した。(渡, 荒川, 小見, 吉田)

・国立保健医療科学院が全国の保健所長, 保健師等を対象とした「健康危機管理研修」に講師を派遣した。(渡, 荒川)

5) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

・岩手県, 宮城県, 福島県に設置された心のケアセンター職員, 厚生労働省担当者, および災害時こころの情報支援センター担当者の連絡会議を実施した。(金, 渡, 荒川, 小見, 吉田)

6) センター内における臨床的活動

なし

7) その他

渡 路子: 東京地方裁判所, 精神保健審判員。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Fukasawa M, Suzuki Y, Nakajima S, Narisawa T, Kim Y: Similarities and differences of systematic consensus on disaster mental health services between Japanese and European experts. *J Trauma Stress* 26(2): 201-208, 2013.
- 2) Matsuoka Y, Nishi D, Noguchi H, Kim Y, Hashimoto K: Longitudinal changes in serum brain-derived neurotrophic factor in accident survivors with posttraumatic stress disorder. *Neuropsychobiology* 68(1): 44-50, 2013.
- 3) Reifels L, Pietrantonio L, Prati G, Kim Y, Kilpatrick DG, Dyb G, Halpern J, Olf M, Brewin CR O'Donnell M: Lessons learned about psychosocial responses to disaster and mass trauma: an international perspective. *Eur J Psychotraumatol*, 2013. Published Online, 2013.12.
- 4) 石田 康, 河野次郎, 岩本直安, 渡 路子: うつと自殺の地域比較 東北と南九州との比較 宮崎県の自殺の現状と対策. *日本社会精神医学会雑誌* 22(3): 310-314, 2013.

(2) 総説

- 1) 金 吉晴: 災害時の不安障害のマネジメント. *保健医療科学* 62(2): 144-149, 2013.
- 2) 金 吉晴: 放射線災害への不安と精神科医 (東日本大震災・福島第一原発事故と精神科医の役割 8). *精神医学* 55(9): 899-908, 2013.
- 3) 金 吉晴: 自然災害後の精神医療対応の向上の取り組み. *日本精神科病院協会雑誌* 32(10): 19-26, 2013. .
- 4) 荒川亮介, 金 吉晴: 震災における脳画像研究. *精神保健研究* 27 号: 97-100, 2014.
- 5) 宮地尚子, 菊池美名子: ドメスティックバイオレンス (DV) はなぜ起こるのか—人文社会科学的側面からの考察—. *保健の科学* 56(1): 4-9, 2014.

(3) 著書

- 1) 金 吉晴: 集団的災害対応精神医療システム. 精神保健福祉白書編集委員会 編: 精神保健福

社白書 2014 年版, 中央法規, 東京, p38, 2013.

- 2) 鈴木友理子, 金 吉晴: 都道府県での災害時心のケアガイドライン. 精神保健福祉白書編集委員会 編: 精神保健福祉白書 2014 年版, 中央法規, 東京, p41, 2013.
- 3) 荒川亮介: 災害精神保健医療情報支援システム (DMHISS). 精神保健福祉白書編集委員会 編: 精神保健福祉白書 2014 年版, 中央法規, 東京, p40, 2013.

(4) 研究報告書

- 1) 金 吉晴, 鈴木 満, 井筒 節, 堤 敦朗, 荒川亮介, 大沼麻実, 菊池美名子, 小見めぐみ, 大滝涼子: WHO 版心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド: PFA) の普及と研修成果に関する検証. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp27-38, 2014.
- 2) 金 吉晴, 林 明明, 河瀬さやか, 大滝涼子, 伊藤真利子: 感情の表出に関する尺度の標準化研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp39-47, 2014.
- 3) 金 吉晴, 河瀬さやか, 中山未知, 大滝涼子, 荒川和歌子: 持続エクスポージャー療法 (Prolonged Exposure Therapy: PE) の普及体制の確立に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp17-25, 2014.
- 4) 神尾陽子, 金 吉晴, 大沼麻実: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp175-184, 2014.
- 5) 鈴木 満, 金 吉晴, 阿部又一郎, 荒木 剛, 石田まりこ, 井上孝代, 大川貴子, 大滝涼子, 大沼麻実, 柏原 誠, 久津沢りか, 小林利子, 佐藤麻衣子, 重村 淳, 杉谷麻里, 高山典子, 堤 敦朗, 傳法 清, 仲本光一, 原田奈穂子, 本郷一夫, 松本順子, 山中浩嗣, 吉田常孝: 海外において災害被害や犯罪被害により精神不調をきたした邦人の実態把握と対応ガイドラインの作成. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp55-66, 2014.
- 6) 渡 路子, 荒川亮介, 吉田 航, 小見めぐみ, 中神里江, 小菅清香: 東日本大震災「こころのケアチーム」派遣・実績に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総括・分担研究報告書. pp157-168, 2014.
- 7) 渡 路子, 荒川亮介, 吉田 航, 小見めぐみ, 中神里江, 小菅清香: 災害時における要援護者情報の把握—DPAT 活動と DMHISS の活用について. 厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「大規模災害時に向けた公衆衛生情報基盤の構築に関する研究 (研究代表者: 金谷泰弘)」平成 25 年度分担研究報告書, 2014.
- 8) 渡 路子, 堤 敦朗, 蒔田皓平, 辻 厚史, 重黒木真由美, 河野次郎, 日高真紀, 野上朋子: 口蹄疫被災における畜産農家・地域住民・防疫従事者の継続的健康調査. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「大規模災害時の精神疾患実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究 (研究代表者: 金 吉晴)」平成 25 年度総合分担研究報告書, 2014.

- 9) 昼田源四郎, 前田正治, 植田由紀子, 内山清一, 高橋悦男, 前田聡一郎, 壬生明日香, 落合美香: 被災地における支援活動について—「ふくしまこころのケアセンター」活動分析をもとに—。厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究(研究代表者:金吉晴)」平成25年度総括・分担研究報告書。pp115-126, 2014.

(5) 翻訳

- 1) 渡路子: 第4章 災害時メンタルヘルス活動の訓練。計見一雄, 鈴木満 監訳: 巨大惨禍への精神医学的介入。弘文堂, 東京, pp62-89, 2013. (EC Ritchie, PJ Watson, MJ Friedman: Interventions following mass violence and disasters. The Guilford Press, New York-London, 2006.)

(6) その他

- 1) 金吉晴: 災害時の精神医療チームを整備へ。読売新聞 夕刊 8面, 2013.4.25.
 2) 金吉晴: 巻頭言 災害精神医療の新しい取り組み(DPAT)。厚生科学 WEEKLY620号, 2014.1.
 3) 菊池美名子, 宮地尚子: 想像の繭, 飛べない羽。ユリイカ 2013年8月号, pp181-184, 2013.
 4) 菊池美名子: ト라우マと復興一傷のまわりをなぞりつづけるということ, 「3・11」後の平和学。平和研究 40号: pp109-122, 2013.
 5) 菊池美名子: 第13回ヨーロッパ・トラウマティック・ストレス学会 ト라우マティック・ストレス, 学会便り 11(2): p60, 2013.
 6) 荒川亮介, 金吉晴: 資料 PTSDに対するパロキセチンおよびセルトラリンの臨床試験。トラウマティックストレス 11: pp177-180, 2013.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: The psychosocial response to the earthquakes and Tsunami in Japan. Trauma and its clinical pathways: PTSD and beyond. XIII Congress of the European society for traumatic stress studies. Pre-Conference workshops. ISTSS/ESTSS Symposium: Improving psychosocial responses to disasters and mass trauma: an international perspective. Bologna, 2013.6.6.
 2) 金吉晴, 中山未知, 小平かやの, 白川美也子: ト라우マ治療の包括的ネットワークー病態に応じた認知行動療法の確立と連携—。第12回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2013.5.12.
 3) 金吉晴: 効果的な災害時精神医療対応に向けて(メインシンポジウム2 東日本大震災が精神医療に残したもの—二年が過ぎた今)。第109回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
 4) 金吉晴: DSM-5改訂による外傷後ストレス障害(PTSD)の診断の変化(トピック・フォーラム DSM-5改訂により不安障害の診断・臨床はどうか—その是非, 注意点を中心に—)。第109回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
 5) 金吉晴, 重村 淳: ワークショップ2 災害精神医療のための必須知識。第109回日本精神神経学会学術総会, 第109回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
 6) 金吉晴, 秋山 剛: シンポジウム15 福島原発事故を語る。第109回日本精神神経学会学術総会, 第109回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.23.
 7) 金吉晴: シンポジウム1「精神保健の地域社会における役割」。(独)国立精神・神経医療研究センター・メルボルン大学精神医学部門合同シンポジウム—脳・こころ・社会を結ぶ研究の発展に向けて—, 東京, 2013.6.28.

- 8) 金 吉晴, 齋藤大輔: 災害後の心理支援におけるコラボレーションー検証と課題ー (指定討論者), 心理臨床学会支援活動委員会企画シンポジウム, 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, 神奈川, 2013.8.26.
- 9) 金 吉晴: 21 世紀の災害精神医療の目指すもの. 災害こころの医学講座設立記念シンポジウム, 福島, 2014.2.12.
- 10) 金 吉晴: 福島における復興期のメンタルヘルスケアを考える. 災害こころの医学講座設立記念シンポジウム, 福島, 2014.2.12.
- 11) 金 吉晴: 教育講演 1 災害医療に求められる精神医療対応. 第 19 回日本集団災害医学会総会・学術集会, 東京, 2014.2.25.
- 12) 鈴木 満, 大沼麻美, 佐藤麻衣子: サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) の理論と実践. 東北みらい創りサマースクール, 岩手, 2013.8.10.

(2) 一般演題

- 1) Snider L, Van O M, Schafer A, Schouten M, Kim Y: Applications of psychological first aid around the world. Trauma and its clinical pathways: PTSD and beyond. XIII Congress of the European society for traumatic stress studies. Open papers: Response to disasters. Bologna, 2013.6.8.
- 2) 鈴木大輔, 築田美抄, 上田 稷, 中谷直樹, 金 吉晴, 辻 一郎, 寶澤 篤, 富田博秋: 東日本大震災沿岸部被災者の精神的健康の変遷と現況. 第 109 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2013.5.24.
- 3) 伊藤真利子, 相井さやか, 林 明明, 大滝涼子, 金 吉晴: 日本語版 Emotional Expressivity Scale 作成の試み. 第 6 回不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.
- 4) 林 明明, 相井さやか, 大滝涼子, 伊藤真利子, 金 吉晴: 感情表出性尺度 Berkeley Expressivity Questionnaire 日本語版の信頼性および妥当性の検討. 第 6 回不安障害学会学術大会, 東京, 2014.2.1-2.

(3) 研究報告会

- 1) 金 吉晴: 被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究. 平成 25 年度障害者対策総合研究成果発表会, 東京, 2014.2.28.
- 2) 大沼麻美: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響調査報告. 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (復興枠)) 「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」 班会議, 東京, 2013.11.28.
- 3) 大沼麻美, 神尾陽子, 金 吉晴: 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響調査. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 4) 荒川亮介, 渡 路子, 小見めぐみ, 吉田 航, 金 吉晴: 東日本大震災こころのケアチーム活動の把握ー宮城県, 仙台市, 福島県の個票調査ー. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会, 東京, 2014.3.10.
- 5) 吉田 航, 渡 路子, 荒川亮介, 小見めぐみ, 中神里江, 金 吉晴: 都道府県・政令指定都市の災害精神保健医療体制の整備状況と DPAT が携行する薬剤リストについて. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所平成 25 年度研究報告会, 東京, 2014.3.10.

C. 講演

- 1) 金 吉晴: 心理的応急処置サイコロジカル・ファーストエイド: PFA について. 第 19 回日本

赤十字社第 4 ブロック合同救護訓練研修会～災害時のこころのケアについて～，京都，2013.4.19.

- 2) 金 吉晴：震災とこころのケア～これからの課題～. 第 2 回震災後トラウマ対策勉強会，宮城，2013.4.23.
- 3) 金 吉晴：不安への対応と基礎. 黒い雨体験者相談・支援事業従事者向け研修会，広島，2013.9.26.
- 4) 金 吉晴：相談対応の実際（シナリオに基づくロールプレイ，討議，講評）. 黒い雨体験者相談・支援事業従事者向け研修会，広島，2013.9.26.
- 5) 金 吉晴：災害時の精神保健対応の展開と平時の備え. 岡山県精神科医会・岡山県医師会精神部会講演会，岡山，2013.10.12.
- 6) 金 吉晴：災害時の精神保健医療対応と平時の備え. 第 13 回東海北陸ブロック健康危機管理連絡協議会，愛知，2013.11.12.
- 7) 金 吉晴：災害時の精神保健医療活動について，DPAT の活動について，日本赤十字社を含む他機関との連携について. 平成 25 年度第 2 回こころのケア指導者養成研修会，東京，2014.3.17.
- 8) 大沼麻実：緊急時のこころの応急措置（サイコロジカル・ファースト・エイド（PFA））— その効果と具体的方法—. 静岡市グランシップ，静岡，2014.2.11.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) Kim Y: World Psychiatric Association, Committee of psychopathology.
- 2) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会，常任理事.
- 3) 金 吉晴：日本精神神経学会，ガイドライン委員.
- 4) 金 吉晴：自殺予防学会，理事.
- 5) 渡 路子：日本精神科救急学会，評議員.

(3) 座長

(4) 編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board.
- 2) Kim Y: Psychopathology, editorial board.
- 3) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor.
- 4) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会，編集委員長.
- 5) 金 吉晴：日本精神神経学会，編集委員.

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴：平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 A. 通常コース，東京，2013.11.21-22.
- 2) 金 吉晴：WHO 版心理的応急処置（サイコロジカル・ファーストエイド：（PFA））ワールド・ガイド研修会 東京，2013.12.9-12.
- 3) 金 吉晴：平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 B. 通常コース，高知，2013.12.19-20.
- 4) 金 吉晴，渡 路子，荒川亮介：災害派遣精神医療チーム（DPAT）研修，東京，2014.1.8.
- 5) 金 吉晴，渡 路子，荒川亮介：災害派遣精神医療チーム（DPAT）研修，東京，2014.1.14-16.

- 6) 金 吉晴:平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 E. 大規模災害対策コース (行政職員向け), 東京, 2014.1.27.
- 7) 金 吉晴: DPAT 体制, 平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 D. 大規模災害対策コース (精神医療関係者向け), 名古屋, 2014.2.18.
- 8) 金 吉晴:平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者向け), 東京, 2014.2.23.

(2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴:保育士のためのメンタルヘルスの知識 (原子力災害による心理的影響とその対応). ふくしま保育元気アップ緊急支援事業相談支援者育成研修会, 福島, 2013.5.28.
- 2) 金 吉晴:『ボランティア論』における PFA 研修. 学習院大学, 東京, 2013.6.11.
- 3) 金 吉晴:心理ケア (支援者, 受援者). 災害派遣医療チーム (DMAT) 研修, 東京, 2013.6.25.
- 4) 金 吉晴:災害時における心理社会的支援. 第 50 回精神保健指導課程研修 (コミュニティメンタルヘルスのリーダーシップトレーニング), 東京, 2013.6.26.
- 5) 金 吉晴:災害時の精神保健. 平成 25 年度東大公共健康医学専攻 (SPH), 東京, 2013.7.2.
- 6) 金 吉晴:心理ケア (支援者, 受信者). 平成 25 年度第 6 回災害派遣医療チーム (DMAT) 研修, 東京, 2013.7.9.
- 7) 金 吉晴:トラウマケア～臨床心理士が知っておくべき最新の知識～. (社) 日本臨床心理士会 第 15 回被害者支援研修会, 北海道, 2013.7.14.
- 8) 金 吉晴: PTSD の概念. 持続エクスポージャー療法研修会, 東京, 2013.8.4.
- 9) 金 吉晴: PTSD の概念. 持続エクスポージャー療法研修会, 東京, 2013.8.7.
- 10) 金 吉晴:災害時の心のケア活動で必要なこと. 平成 25 年度高知県災害時の心のケア活動研修会, 高知, 2013.8.9.
- 11) 金 吉晴:トラウマ治療の最前線. 第 7 回 Pfizer Medical Depression Seminar, 京都, 2013.8.10.
- 12) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子, 菊地美名子, 小見めぐみ, 種市康太郎, 宮本有紀, 原田奈穂子, 伊東史エ, 山下吏良, 荻原かおり, 佐藤麻衣子, 寺島 瞳, 木村美也子, 森脇愛子:災害時初期の心理支援 (サイコロジカルファーストエイド) に関する指導. 陸上自衛隊臨床心理士集合訓練, 埼玉, 2013.8.29.
- 13) 金 吉晴:持続エクスポージャー療法 (PE) の応用セミナー - 認知処理と悲嘆・喪失の治療 - (主催). 東京, 2013.9.1-2.
- 14) 金 吉晴: DSM-V の PTSD 基準について. 第 12 回トラウマ治療研究会, 東京, 2013.9.27.
- 15) 金 吉晴:心理ケア (支援者, 受信者). 平成 25 年度第 6 回災害派遣医療チーム (DMAT) 研修, 東京, 2013.10.1.
- 16) 金 吉晴:講義 12 災害時のこころのケア・サイコロジカルファーストエイド. 災害医療従事者研修会, 東京, 2013.10.30.
- 17) 金 吉晴, 大沼麻実, 大滝涼子:サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修. 外務省, 東京, 2013.11.13.
- 18) 金 吉晴, 堀越 勝, 大沼麻実, 大滝涼子:サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修. 外務省, 東京, 2013.11.20.
- 19) 金 吉晴:トラウマと PTSD の診断と治療, 平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 A. 通常コース, 東京, 2013.11.21-22.
- 20) 金 吉晴, 荒川亮介, 大沼麻実, 荻原かおり:災害とこころのケア. 平成 25 年度災害時におけるこころのケア研修会, 沖縄, 2013.12.5.
- 21) 金 吉晴, 荒川亮介, 大沼麻実, 荻原かおり:サイコロジカル・ファーストエイド スキルト

- レーニング。平成 25 年度災害時におけるこころのケア研修会，沖縄，2013.12.5.
- 22) 金 吉晴：Psychological First Aid —WHO 版 心理的応急処置—。立正大学心理臨床センター主催 平成 25 年度心理臨床セミナー，東京，2013.12.8.
- 23) 金 吉晴，レスリー・シュナイダー，井筒 節，堤 敦朗，大滝涼子，大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 指導者育成研修。災害時こころの情報支援センター，東京，2013.12.9-12.
- 24) 金 吉晴：トラウマと PTSD の診断と治療。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 B. 通常コース，高知，2013.12.19-20.
- 25) 金 吉晴：災害時の精神保健医療活動。災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修，東京，2014.1.8.
- 26) 金 吉晴：災害時の精神保健医療活動。災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修，東京，2014.1.14.
- 27) 金 吉晴：災害時の精神医療対応。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 E. 大規模災害対策コース (行政職員向け)，東京，2014.1.27.
- 28) 金 吉晴，大沼麻実，鶴和美穂：サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修。平成 25 年度健康危機管理研修 (高度技術編)，埼玉，2014.1.31.
- 29) 金 吉晴：災害時の精神医療対応。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 D. 大規模災害対策コース (精神医療関係者向け)，名古屋，2014.2.18.
- 30) 金 吉晴：災害とメンタルヘルス。平成 25 年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD 対策専門研修 C. 大規模災害対策コース (一般医療関係者向け)，東京，2014.2.23.
- 31) 金 吉晴，大沼麻実，荻原かおり，清水達也：サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) セミナー。第 19 回日本集団災害医学会 プレ・ポストコンGRESS，東京，2014.2.24.
- 32) 渡 路子：ふくしま心のケアセンター職員研修会。「災害時の情報集約の大切さ～災害精神保健医療情報システムについて～」，福島県精神保健福祉センター，福島，2014.4.2.
- 33) 渡 路子：平成 25 年度狭山保健所健康危機管理研修。狭山保健所，埼玉，2013.8.27.
- 34) 渡 路子：災害時精神保健医療指導者演習ならびに心理的応急処理 (サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) について。平成 25 年度健康危機管理研修，国立保健医療科学院，埼玉，2013.10.18.
- 35) 渡 路子：DPAT の活動について。災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修会，東京，2014.1.8.
- 36) 渡 路子：DPAT の活動について。災害派遣精神医療チーム (DPAT) 研修会，東京，2014.1.14-16.
- 37) 渡 路子：災害時精神保健医療対策について。平成 25 年度愛媛県心のケアに関する研修会，松山市男女共同参画推進センターコムズ，愛媛，2014.3.6.
- 38) 渡 路子：DPAT-災害派遣精神医療チームの概要。第 38 回琉球セミナー，国立病院機構琉球病院，沖縄，2014.3.12.
- 39) 渡 路子：口蹄疫被災における畜産農家，防疫従事者，地域住民の継続的健康調査結果報告。平成 25 年度宮崎県災害関連研修会。宮崎県総合保健センター，宮崎，2014.3.17.
- 40) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。第 69 回 DMAT 隊員養成研修，東京，2013.6.4.
- 41) 荒川亮介：心理的応急処置 (サイコロジカル・ファーストエイド (PFA)) ならびに災害時精神保健医療指導者研修について。平成 25 年度健康危機管理研修 (実務編第 1 回)，埼玉，2013.6.25.
- 42) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。第 72 回 DMAT 隊員養成研修，東京，2013.8.19.
- 43) 荒川亮介：ストレスケア—被災者のケアと隊員のセルフケア—。第 73 回 DMAT 隊員養成研修，東京，2013.9.10.

- 44) 荒川亮介：災害時におけるこころのケア支援．災害時こころのケア研修会（長野県精神保健福祉センター主催），松本，2013.10.1.
- 45) 荒川亮介：災害への対応．平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD対策専門研修 A.通常コース，東京，2013.11.22.
- 46) 荒川亮介：災害時のこころのケア サイコロジカル・ファーストエイド（PFA），平成25年度国立病院機構災害医療従事者研修，東京，2013.12.4.
- 47) 荒川亮介：ストレスケア被災者のケアと隊員のセルフケア．DMAT 隊員養成研修，東京，2013.12.10.
- 48) 荒川亮介：災害への対応．平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD対策専門研修 B.通常コース，高知，2013.12.20.
- 49) 荒川亮介：DMHISSについて．災害派遣精神医療チーム（DPAT）研修会，東京，2014.1.8.
- 50) 荒川亮介：DMHISSについて．災害派遣精神医療チーム（DPAT）研修会，東京，2014.1.14.
- 51) 荒川亮介：DPAT体制．平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会 PTSD対策専門研修 E.大規模災害対策コース，東京，2014.1.27.
- 52) 荒川亮介：災害時のこころのケア サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）．平成25年度第2回全国災害拠点病院等災害医療従事者研修，東京，2014.2.14.
- 53) 荒川亮介：DPAT体制．平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会，PTSD対策専門研修 D.大規模災害対策コース，名古屋，2014.2.18.
- 54) 荒川亮介：DPAT体制．平成25年度「こころの健康づくり対策事業」研修会，PTSD対策専門研修 C.大規模災害対策コース，東京，2014.2.23.
- 55) 大沼麻実，佐藤麻衣子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．タイ日本大使館，タイ，2013.8.25.
- 56) 大沼麻実，森脇愛子，山下吏良：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．徳島県健康増進課感染症・健康危機管理研修会，徳島，2013.9.20.
- 57) 大沼麻実，佐藤麻衣子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．岩手大学，岩手，2013.11.30.
- 58) 大沼麻実，宮本有紀，鈴江 毅，中山照美：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．文部科学省大学間連携共同教育推進事業四国防災・危機管理特別プログラム（香川大学・徳島大学共同開設），香川，2014.1.11.
- 59) 大沼麻実，吉田 桂：災害時こころの対応研修（サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修会）．精神保健福祉研修会第3回専門研修（災害時こころの対応），新潟，2014.3.7.
- 60) 大沼麻実：災害時の心理支援（サイコロジカル・ファーストエイド（PFA））．災害医療コーディネーター研修「基礎コース」，宮城，2014.3.21.
- 61) 大滝涼子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．東京大学大学院医科学研究科健康科学・看護学専攻 成人看護学，東京，2013.5.9-10.
- 62) 大滝涼子：生活支援員対象 ヨガ体験講座．宮城県亘理町サポートセンター，宮城，2013.5.16.
- 63) 大滝涼子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．学習院大学 文学部臨床心理学ボランティア論講座，東京，2013.6.4.
- 64) 大滝涼子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．学習院大学 文学部臨床心理学ボランティア論講座，東京，2013.6.11.
- 65) 大滝涼子：ふくしまサロン及び生活支援員対象ヨガ研修．宮城県亘理町サポートセンター，宮城，2013.7.11.
- 66) 大滝涼子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）に関する演習．東京医科歯科大学 医学部保健衛生学科看護学専攻4年生対象，東京，2013.7.22-23.
- 67) 大滝涼子：ヨガを使ったリラクゼーション指導者研修．みやぎ心のケアセンター職員研修，

宮城, 2013.8.8-9.

- 68) 大滝涼子: サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修. 浜松市精神保健福祉センター, 静岡, 2014.2.6.

F. その他

- 1) 金 吉晴: 東日本大震災における精神保健医療に関する対応について. 第 1 回災害派遣精神医療チーム (DPAT) 活動指針検討会, 東京, 2013.7.31.
- 2) 渡 路子: 東北大の調査で判明 急増! 「地震脳卒中」の恐怖. 小学館 週刊ポスト 9 月 28 日号, p52, 2013.9.10.
- 3) 渡 路子: 3.11【進まぬ復興】現地ルポ. 扶桑社 SPA! 3 月 18・25 合併号, p31, 2014.3.12.
- 4) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) WHO 版の紹介. 第 3 回海外邦人メンタルヘルス連絡協議会, 東京, 2013.7.27.

Ⅲ. 研 修 実 績

平成 25 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。平成 25 年度には、精神科医療評価・均てん化研修、精神保健指導課程研修、発達障害支援医学研修（2 回）、発達障害早期総合支援研修、精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修、心理職自殺予防研修、自殺総合対策企画研修、摂食障害治療研修、アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修、ACT 研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、精神科医療従事者自殺予防研修（2 回）、発達障害精神医療研修、司法精神医学研修、自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修、摂食障害看護研修、薬物依存症に対する認知行動療法研修、犯罪被害者メンタルケア研修、の計 21 回の研修を合計 1,080 名に対して実施した。

《精神科医療評価・均てん化研修》

平成 25 年 6 月 13 日から 6 月 14 日まで、第 7 回精神科医療評価・均てん化研修を実施し、「精神疾患治療を担う精神科救急・急性期医療施設をとりまく現状を理解し、精神科医療の質を高めるための専門的知識および技能を修得すること」を主題に、精神科救急・急性期医療施設において精神科診療に従事している専門医および専門職 35 名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤 弘人

6 月 13 日 (木)

精神保健医療福祉の動向	友利 久哉
国立精神・神経医療研究センターでの取り組み	伊藤 弘人
＜基調講演＞	
「精神科救急の今後の展望」学会提言と研究成果	平田 豊明
＜精神科救急の最新トピックス＞	司会：杉山 直也
精神科プレホスピタル・ケア（受診前相談）	
精神科救急ダイヤルの運営と電話対応技術研修プログラムの開発	西村 由紀・塚本 哲司
PEEC:一般救急における精神科評価研修コースの開発	三宅 康史
＜シンポジウム＞	司会：岩間 久行・野田 寿恵
臨床指標の国際動向	伊藤 弘人
eCODO システム/PQR モジュール	杉山 直也

患者基本記録 (Basic Documentation BADO) の実践

一均てん化と棲み分けに向けて	岩井 一正
行動制限最小化のための介入研究	佐藤 真希子
行動制限に関する質的研究	
一精神科病棟における隔離・身体拘束最小化のための看護介入内容一	川内 健三

6月14日 (金)

<薬剤処方：支払データ分析に関する全国の動向>	司会： 中込 和幸・伊藤 弘人
国立病院機構 (NHO) における医療の質の取り組み	伏見 清秀
国立病院機構 (NHO) における精神科医療の質の評価と課題	黒木 俊秀
DPC 研究の全体像	石川 ベンジャミン 光一
向精神薬に関する DPC 分析の現在	清水 沙友里
ナショナルデータベースにおける向精神薬処方に関する分析状況	奥村 泰之
<質の高い電気けいれん療法とは何か>	
国立精神・神経医療研究センター病院での臨床から考える	野田 隆政・有馬 邦正
<薬剤処方の最適化>	司会： 齊藤 郁夫・伊藤 弘人
抗精神病薬副作用	池野 敬
研究成果	八田 耕太郎
抗精神病薬多剤大量処方減量のエビデンスの実践	山之内 芳雄
治療抵抗性統合失調症へのクロザピン治療	三澤 史斉

講師名簿

伊藤 弘人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部部長
野田 寿恵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部
佐藤 真希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部
池野 敬	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部
友利 久哉	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健福祉課課長補佐
平田 豊明	千葉県精神科医療センター院長
杉山 直也	復康会沼津中央病院院長
西村 由紀	特定非営利活動法人メンタルケア協議会理事
塚本 哲司	埼玉県立精神保健福祉センター精神科救急情報部精神科救急情報担当主幹
三宅 康史	昭和大学病院救命救急センター長・昭和大学医学部救急医学講座教授
岩間 久行	神奈川県立精神医療センター芹香病院院長
岩井 一正	神奈川県立精神医療センター芹香病院院長補佐 (診療教育担当副院長)
川内 健三	国立精神・神経医療研究センター病院副看護師長
中込 和幸	国立精神・神経医療研究センター臨床研究支援部長
伏見 清秀	東京医科歯科大学教授
黒木 俊秀	九州大学大学院人間環境学研究院教授

	国立病院機構肥前精神医療センター臨床研究部顧問
石川 ハジメ 光一	国立がん研究センターがん対策情報センターがん統計研究部室長
清水 沙友里	医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構主任研究員
奥村 泰之	医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構研究員
有馬 邦正	国立精神・神経医療研究センター病院副院長
野田 隆政	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部第二精神科医長
齊藤 郁夫	国立精神・神経医療研究センター病院第一精神診療部薬剤部薬剤部長
八田 耕太郎	順天堂大学医学部附属練馬病院先任准教授
山之内 芳雄	藤田保健衛生大学医学部病院臨床研究センター副センター長
三澤 史斉	山梨県立病院機構山梨県立北病院医長

《精神保健指導課程研修》

平成25年6月26日から6月27日まで、第50回精神保健指導課程研修を実施し、「精神保健医療福祉の改革、自殺対策、地域精神保健福祉活動（コミュニティメンタルヘルス）の推進等、精神保健福祉行政の重要課題についての情報を提供するとともに、受講者間の情報交換を行う」を主題に、都道府県（指定都市）等において精神保健福祉計画の企画立案の指導的立場または中心的役割を担う者、公的機関または民間団体において地域精神保健医療福祉（コミュニティメンタルヘルス）の実践の指導的立場または中心的役割を担う者52名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 立森 久照・西 大輔

6月26日（水）

地域精神保健の歴史を振り返り、今後を考える	吉川 武彦
精神保健福祉行政	江副 聡
コミュニティメンタルヘルスにおけるリーダーシップ	チー アン
コミュニティメンタルヘルスの研究	キャロル ハーベイ
疫学・統計から見た日本の精神保健	立森 久照
精神保健における予防	西 大輔
有事における心理社会的支援	金 吉晴

6月27日（木）

<シンポジウム>

地域社会・国民の求める精神保健医療

座 長： 竹島 正

シンポジスト： 西脇 健三郎・水田 恵・籠本 孝雄・小泉 典章

指定発言者： 河崎 建人・原 敬造

<グループディスカッション>

WHOの示した精神保健のプライマリケアへの統合のピラミッドモデルの、日本における活用可

能性の検討

ファシリテーター： チー アン・キャロル ハーベイ・伊藤 弘人，他

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部部長
立森 久照	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
西 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
吉川 武彦	清泉女学院大学・清泉女学院短期大学学長
江副 聡	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
チー アン	メルボルン大学精神医学部
キャロル ハーベイ	メルボルン大学精神医学部
金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター災害時こころの情報支援センターセンター長
西脇 健三郎	医療法人志仁会西脇病院理事長
水田 恵	NPO 自立支援センターふるさとの会理事
籠本 孝雄	大阪府立病院機構大阪府立精神医療センター院長
小泉 典章	長野県精神保健福祉センターセンター長
河崎 建人	医療法人河崎会水間病院院長
原 敬造	原クリニック院長
伊藤 弘人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部部長

《発達障害支援医学研修》

平成 25 年 7 月 3 日から 7 月 4 日まで，第 15 回発達障害支援医学研修を実施し，「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に，病院，保健所，発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師，特に指導について責任的立場にある者 28 名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 太田 英伸・軍司 敦子

7月3日(水)

強迫性障害－不安障害の認知行動療法	堀越 勝
発達障害支援の考え方	小平 雅基
発達障害児を持つ保護者支援	林 隆
ADHD 診療の実際	井上 祐紀

7月4日(木)

ADHD/PDD における薬物療法	安原 昭博
読み書き障害の診断と支援	小枝 達也
厚生労働省における発達障害施策の紹介	日詰 正文
コメディカルと協同する発達障害児支援	氏家 武

大人の発達障害：支援ニーズに応じたサービス提供

近藤 直司

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部长
太田 英伸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
軍司 敦子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
堀越 勝	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター部長
小平 雅基	愛育病院小児精神保健科医師
林 隆	西川医院発達診療部部长
井上 祐紀	島田療育センターはちおうじ科長
安原 昭博	安原こどもクリニック院長
小枝 達也	鳥取大学地域学部教授
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部発達障害対策専門官
氏家 武	北海道こども心療内科氏家医院理事長
近藤 直司	都立小児総合医療センター児童・思春期精神科部長

《発達障害早期総合支援研修》

平成25年7月4日から7月5日まで、第8回発達障害早期総合支援研修を実施し、「発達障害支援における早期発見の意義とその方法、地域における早期からの発達発見・支援の実際」を主題に、各自治体において、乳幼児健診に携わる医師および保健師で、発達障害支援について責任的立場にある者68名に対して研修を行った。

課程主任 神尾 陽子 課程副主任 高橋 秀俊

7月4日(木)

発達障害者支援事業について	日詰 正文
発達障害の早期発見と早期支援の意義：ライフステージの観点から	神尾 陽子
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメントについて	立花 良之
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習	稲田 尚子
地域における発達障害の早期診断・早期療育と連携のあり方	高橋 脩

7月5日(金)

自治体における乳幼児健診を活用した早期発見・早期支援システムづくり	瀬野 勝久
自治体における経験から	内藤 恵美
自閉症スペクトラム障害の早期発見のポイント	神尾 陽子
ペアレント・トレーニングの実際Ⅰ・Ⅱ	井上 雅彦

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
高橋 秀俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課発達障害対策専門官
立花 良之	国立成育医療研究センターこころの診療部育児心理科医長
稲田 尚子	東京大学医学部附属病院こころの発達診療部臨床心理士
高橋 脩	豊田市こども発達センターセンター長
瀬野 勝久	舞鶴市保健福祉部こども支援課主任
井上 雅彦	鳥取大学医学部大学院医学系研究科教授
内藤 恵美	舞鶴市役所保健福祉部健康増進課主任

《精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修》

平成 25 年 7 月 17 日から 7 月 19 日まで、第 1 回精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修を実施し、「個別職場定着とサポート（IPS : Individual Placement and Support）の就労支援の原則を学び、そこから精神科デイケアを中心とした、個別就労支援のありかたや、医療機関が周囲の就労支援機関と組む場合のありかたについて検討する」を主題に、精神科医療機関で臨床に従事しており、利用者の就労支援に関心を持つ者、および医療機関と密接な関係をもちながら精神障害者の就労支援に従事している者 34 名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤 順一郎 課程副主任 吉田 光爾

7月17日（水）

IPS 型就労支援について	伊藤 順一郎
ワールドカフェ	ファシリテーター：伊藤 順一郎
精神障害者の就労支援—制度と現状—	相澤 欽一
就労支援利用者の講演	講師：センターデイケア利用者 2 名
家族の講演	講師：センターデイケア利用者家族

7月18日（木）

デイケアでの就労支援	大島 真弓・清澤 康伸
個別ニーズベースの就労支援	大島 みどり
就労移行支援事業と医療との連携	横田 隆行
重度精神障害をもつ人のための就労支援	池田 克之
ライブトーク 就労準備性とは何か	ファシリテーター：佐藤 さやか

7月19日（金）

就労支援への精神科医の関わり	西尾 雅明
パネルディスカッション「就労支援員に期待すること」	

ハローワークから	清澤 康伸・鈴木 翼
企業から	柴田 泰臣・緑川 徹
個人事業主から	池田 真砂子・小林 千恵子
グループディスカッション+全体シェア	

講師名簿

伊藤 順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部长
吉田 光爾	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
下平 美智代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
相澤 欽一	福島障害者職業センター所長
大島 真弓	国立精神・神経医療研究センター病院デイケア
清澤 康伸	国立精神・神経医療研究センター病院デイケア
大島 みどり	特定非営利活動法人 NECST ユースキャリアセンターフラッグ施設長
横田 隆行	特定非営利活動法人大阪精神障害者就労支援ネットワーク JSN 茨木副所長
池田 克之	特定非営利活動法人京都メンタルケア・アクション ACT-K 就労支援センターそらいろ所長
西尾 雅明	東北福祉大学総合福祉学部社会福祉科教授
鈴木 翼	ハローワーク品川雇用支援コーナー支援担当
柴田 泰臣	特定非営利活動法人 NECST ユースキャリアセンターフラッグ
緑川 徹	株式会社コスモネット業務管理統括本部業務支援チーム課長
池田 真砂子	特定非営利活動法人ゆるら社会生活サポートセンターこみっと
小林 千恵子	特定非営利活動法人高齢者の食と職を考えるチャンプルーの会デイサービスサラ

《心理職自殺予防研修》

平成25年8月6日から8月7日まで、第4回心理職自殺予防研修を実施し、「自殺のアセスメントと基本的対応、関連する精神科診断、薬物療法の知識、ソーシャルワーク等の基礎知識の習得」を主題に、医療現場、学校、NPO、民間団体等で対人支援に携わる現場心理職の方、73名に対して研修を行った。

課程主任 川野 健治 課程副主任 竹島 正・松本 俊彦・藤森麻衣子

8月6日(火)

自殺の実態と対策	竹島 正・山内 貴史
自殺のハイリスク者への対応	松本 俊彦
自殺と精神疾患	稲垣 正俊
心理職の役割について(小集団討議)	藤森 麻衣子・矢永 由里子・大槻 露華
学校での自殺予防	勝又 陽太郎・白神 敬介

8月7日(水)

パーソナリティ障害	遊佐 安一郎
ソーシャルワーク	小高 真美
事後対応	川野 健治

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森 麻衣子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
小高 真美	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
白神 敬介	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
大槻 露華	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員

稲垣 正俊	岡山大学病院精神科神経科講師
矢永 由里子	慶應義塾大学医学部感染制御センター特任講師
勝又 陽太郎	新潟県立大学人間生活学部子ども学科講師
遊佐 安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所 所長

《自殺総合対策企画研修》

平成25年8月20日から8月22日まで、第7回自殺総合対策企画研修を実施し、「地方自治体における自殺対策の計画づくりの企画立案能力の向上」を主題に、都道府県（政令指定都市）等において、自殺対策の企画立案の指導的立場または中心的な役割を担う者103名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 松本 俊彦・川野 健治・藤森 麻衣子

8月20日(火)

自殺問題の捉え方	竹島 正
自殺対策の基本的な考え方	高橋 祥友
わが国の自殺対策（1）	岡田 誠
わが国の自殺対策（2）	竹口 英伸
地方自治体における自殺対策の取組状況と課題	山内 貴史
自殺統計の読み方と利用法	山内 貴史

8月21日(水)

世代別の自殺の特徴と自殺対策の方向	藤森 麻衣子
ハイリスク者支援	松本 俊彦

遺族支援 川野 健治
自治体の取組事例紹介と意見交換（1） 田中 俊行・渡辺 一博・奈良部 晴美・橋本 康男

8月22日（木）

自治体の取組事例紹介と意見交換（2） 味戸 智子・木口 富士枝・竹島 正・奈良部 晴美
自殺予防活動の組立と評価 稲垣 正俊
自殺対策の企画立案（グループディスカッション） 森川 将行

講師名簿

竹島 正 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森 麻衣子 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員

高橋 祥友 筑波大学医学医療系教授
岡田 誠 内閣府自殺対策推進室参事官補佐
竹口 英伸 厚生労働省精神・障害保健課長補佐
田中 俊行 大阪府健康医療部保健医療室地域保健感染症課精神保健グループ主査
渡辺 一博 鳴沢村役場福祉保健課長
奈良部 晴美 内閣府自殺対策推進室専門官
橋本 康男 広島県地域保健医療推進機構地域医療推進部長
味戸 智子 福島県保健福祉部障がい福祉課主任保健技師
木口 富士枝 長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター精神保健福祉課精神保健福祉班専門幹
稲垣 正俊 岡山大学病院精神科神経科講師
森川 将行 堺市精神保健福祉センター所長

《摂食障害治療研修》

平成25年8月27日から8月30日まで、第11回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者31名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也 課程副主任 菊地 裕絵

8月27日（火）

摂食障害病態・治療概論 安藤 哲也
自傷行為と摂食障害 松本 俊彦
セルフヘルプ 武田 綾

8月28日(水)

小児の摂食障害	宇佐美 政英
身体的合併症・身体的管理	鈴木(堀田) 眞理
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木 健二

8月29日(木)

症例検討	田村 奈穂
心理教育	馬場 安希
精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	永田 利彦
家族の心理教育	小原 千郷

8月30日(金)

入院治療	河合 啓介
認知行動療法	切池 信夫

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
菊地 裕絵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
武田 綾	NPO 法人のびの会相談室心理療法士
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科医師
鈴木 眞理	政策研究大学院大学教授
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長
田村 奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師
馬場 安希	国立国際医療研究センター国府台病院心理療法士
永田 利彦	なんばながたメンタルクリニック院長
小原 千郷	東京女子医科大学大病院臨床心理士
河合 啓介	九州大学病院心療内科医師
切池 信夫	浜寺病院名誉院長

《アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修》

平成25年9月3日から9月6日まで、第5回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修を実施し、「アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練のスキル向上プログラム」を主題に、障害者自立支援法における社会福祉サービスの事業者、医療機関、市町村等に属する医療・社会福祉従事者35名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤 順一郎 課程副主任 吉田 光爾

9月3日(火)

アウトリーチによるケアマネジメント概論	吉田 光爾
障害を持つ人のリカバリーとは	久永 文恵
当事者の声から リカバリーとは何か	若林 みどり・鈴木 司
ワールドカフェ (グループワーク)	

9月4日(水)

ストレングスモデルのケアプラン作り	伊藤 順一郎
アウトリーチと家族支援	上久保 真理子

9月5日(木)

市川市における取り組み	松尾 明子
生活訓練の実際	遠藤 紫乃
相談支援と生活訓練による支援事例の検討	松尾 明子・遠藤 紫乃
生活訓練を利用している当事者の声から	山中 直

9月6日(金)

訪問による生活訓練事業の運営の実際	松尾 明子・佐原 和紀
—ピアによる支援の可能性—	櫻田 なつみ

講師名簿

伊藤 順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
吉田 光爾	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
久永 文恵	特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構コンボ
若林 みどり	WRAP アドバンスド・ファシリテーター
鈴木 司	東北福祉大学せんだんホスピタルケースマネジャー
上久保 真理子	びあクリニック精神保健福祉士
松尾 明子	特定非営利活動法人ほっとハート相談支援事業所リンク相談支援専門員
遠藤 紫乃	特定非営利活動法人ほっとハートほっとハートらいふ管理者
山中 直	特定非営利活動法人ほっとハートほっとハートらいふ生活支援員
佐原 和紀	特定非営利活動法人やすらぎの会相談支援専門員
櫻田 なつみ	株式会社 MARS 多機能型事業所マーレ生活支援員

《ACT研修》

平成25年9月3日から9月6日まで、第11回ACT研修を実施し、「包括型地域生活支援プログラム(ACT)の定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、社会復帰施設等に勤務する従事者28名に対して研修を行った。

課程主任 伊藤 順一郎 課程副主任 吉田 光爾

9月3日(火)

アウトリーチによるケアマネジメント概論 吉田 光爾
 障害を持つ人のリカバリーとは 久永 文恵
 当事者の声から リカバリーとは何か 若林 みどり・鈴木 司
 ワールドカフェ (グループワーク)

9月4日(水)

ストレングスモデルのケアプラン作り 伊藤 順一郎
 アウトリーチと家族支援 上久保 真理子

9月5日(木)

ACT 支援の実際 樺島 沙織・足立 千啓・小河原 麻衣
 精神科医の役割 吉田 衣美
 危機介入と倫理 西尾 雅明

9月6日(金)

医療型アウトリーチチームの未来 (シンポジウム) 座長：三品 桂子
 アウトリーチに必要なプログラムモニタリングとは 吉田 光爾
 アウトリーチ推進事業に求められるものと今後 萱間 真美
 アウトリーチ推進事業の運営 林 恵介

講師名簿

伊藤 順一郎 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
 吉田 光爾 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
 久永 文恵 特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構コンボ
 若林 みどり WRAP アドバンスド・ファシリテーター
 鈴木 司 東北福祉大学せんだんホスピタルケースマネジャー
 上久保 真理子 びあクリニック精神保健福祉士
 樺島 沙織 特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS
 足立 千啓 特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS
 小河原 麻衣 特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS
 吉田 衣美 国立国際医療研究センター国府台病院
 西尾 雅明 東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科
 三品 桂子 花園大学社会福祉学部臨床心理学科
 萱間 真美 聖路加看護大学看護学部
 林 恵介 医療法人常清会尾辻病院

《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

平成25年9月10日から9月13日まで、第27回薬物依存臨床医師研修ならびに第15回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師16名、看護師等35名に対して研修を行った。

課程主任 和田 清 課程副主任 松本 俊彦・船田 正彦

9月10日(火)

「薬物依存に関する基礎知識」と「わが国の薬物乱用・依存の現状と課題」	和田 清
行動薬理学からみた薬物依存(精神依存, 身体依存)	船田 正彦
有機溶剤乱用・依存の現状と臨床	和田 清

9月11日(水)

ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健
薬物依存症者に対する心理療法	森田 展彰
薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応	松本 俊彦
覚せい剤依存・精神病の臨床	小林 桜児

9月12日(木)

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	谷合 知子
【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学	
病棟見学と医療施設における薬物依存の治療(医師)	成瀬 暢也
病棟見学と医療施設における薬物依存の治療(看護等)	青柳 歌織

9月13日(金)

地域における薬物依存症の治療: ダルクと治療共同体について	和田 清
薬物依存からの回復者による自助活動・ダルクの取り組み	栗坪 千明・柄原 晋太郎
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

講師名簿

和田 清	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
稲田 健	東京女子医科大学医学部精神医学講座講師
森田 展彰	筑波大学医学医療系准教授
小林 桜児	神奈川県立精神医療センターせりがや病院医師
谷合 知子	多摩総合精神保健福祉センター広報援助課相談係長

成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
青柳 歌織	埼玉県立精神医療センター第2病棟（依存症病棟）主任
栗坪 千明	栃木ダルク代表
栃原 晋太郎	栃木ダルクスタッフ
三島 健一	福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室准教授
曾良 一郎	神戸大学大学院医学系研究科精神医学分野教授

《精神科医療従事者自殺予防研修》

平成25年9月17日から9月18日まで、第7回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師、看護師、精神保健福祉士等の精神科医療従事者75名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 松本 俊彦・川野 健治・藤森 麻衣子

9月17日（火）

自殺と精神疾患	稲垣 正俊
我が国の自殺及び自殺対策の実態	竹島 正・山内 貴史
アルコール依存症の自殺予防	松本 俊彦
自傷行為・過量服薬を繰り返す患者への対応	松本 俊彦

9月18日（水）

精神科病院における自殺のリスクとその予防	森 隆夫
自殺が生じた後の対応	川野 健治
事例から学ぶこと	坂本 岳之
精神科医療における自殺とその予防（スモールグループディスカッション）	坂本 岳之・竹島 正・松本 俊彦・川野 健治・藤森 麻衣子

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
藤森 麻衣子	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
山内 貴史	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員
稲垣 正俊	岡山大学病院精神科神経科講師
森 隆夫	医療法人愛精会あいせい紀年病院理事長
坂本 岳之	国立精神・神経医療研究センター病院5南病棟看護師

《発達障害精神医療研修》

平成25年9月25日から9月27日まで、第6回発達障害精神医療研修を実施し、「未診断の発達障害を抱える青年・成人患者の鑑別診断と処遇法に関する幅広い臨床ニーズに対応する最新の知見」を主題に、各自治体において精神医療の中核となる機関に勤務する精神科医等35名に対して研修を行った。

課程主任 神尾 陽子 課程副主任 高橋 秀俊

9月25日(水)

成人発達障害の精神医学的問題について	神尾 陽子
自閉症スペクトラム障害成人の脳画像研究からわかること	山末 英典
ADHD成人の脳画像研究からわかること	中村 和彦

9月26日(木)

発達障害を有する成人女性の臨床的諸問題	笠原 麻里
発達障害児・成人の診断と治療の実際について	飯田 順三
ひきこもり事例にみられる高機能広汎性発達障害の特徴	近藤 直司
発達障害成人のデイケアの実際	横井 英樹

9月27日(金)

自閉症スペクトラム障害の認知研究からわかること	神尾 陽子
成人期の自閉症スペクトラム障害の就労支援	梅永 雄二

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
高橋 秀俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部室長
山末 英典	東京大学脳神経医学専攻臨床神経精神医学講座准教授
中村 和彦	弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座教授
笠原 麻里	駒木野病院児童精神科診療部長
飯田 順三	奈良県立医科大学精神医学講座教授
近藤 直司	東京都立小児総合医療センター児童・思春期精神科部長
横井 英樹	昭和大学医学部附属烏山病院
梅永 雄二	宇都宮大学教育学部教授

《司法精神医学研修》

平成25年10月29日から10月30日まで、第8回司法精神医学研修を実施し、「重大な他害行為を行った精神障害者に対して評価と介入を提供するために必要となる基本的な知識と技能の習得、およびその一般精神医療への応用」を主題に、指定医療機関や行刑施設、地域(保健所等)において

精神医療に従事している医師，臨床心理技術者，看護師，精神保健福祉士等 34 名に対して研修を行った。

課程主任 岡田 幸之 課程副主任 菊池 安希子・安藤 久美子

10月29日(火)

司法精神医学概論—歴史，法律，制度	岡田 幸之
刑事責任能力と精神鑑定	岡田 幸之
医療観察法総論	岡田 幸之
医療観察法の現状（入院）	菊池 安希子・河野 稔明
医療観察法の現状（通院）	安藤 久美子

10月30日(水)

司法精神医療におけるリスク・アセスメント（1）	安藤 久美子・岡田 幸之
司法精神医療におけるリスク・アセスメント（2）	安藤 久美子・岡田 幸之
司法精神医療における心理学的治療アプローチ（1）	菊池 安希子・小山 繭子
司法精神医療における心理学的治療アプローチ（2）	菊池 安希子・小山 繭子

講師名簿

岡田 幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
安藤 久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
河野 稔明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部
小山 繭子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部

《自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修》

平成 25 年 11 月 5 日から 11 月 6 日まで，第 4 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修を実施し，「自傷を繰り返す者，あるいは，パーソナリティ障害を抱える者が自殺リスクの高い一群であることを理解し，適切に治療・対応できるようになること」を主題に，医療機関，自治体等における相談業務従事者等 113 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 竹島 正・川野 健治・藤森 麻衣子

11月5日(火)

自殺予防のためのパーソナリティ障害の理解と対応	林 直樹
自傷行為・過量服薬の理解と対応	松本 俊彦
摂食障害を伴う境界性パーソナリティ障害に対する地域支援	武田 綾
トラウマを抱えた境界性パーソナリティ障害の地域支援	大嶋 栄子
若者の自傷予防プログラム（DVD 視聴）	松本 俊彦

11月6日(水)

境界性パーソナリティ障害に対する弁証法的行動療法	遊佐 安一郎
アディクションを抱えた境界性パーソナリティ障害の地域支援	上岡 陽江
家族の立場から	奥野 栄子
総合討議	松本 俊彦

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
林 直樹	帝京大学医学部附属病院メンタルヘルス科教授
武田 綾	NPO 法人のびの会
大嶋 栄子	NPO 法人リカバリー代表
遊佐 安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所所長
上岡 陽江	ダルク女性ハウス代表
奥野 栄子	BPD 家族会代表

《摂食障害看護研修》

平成25年11月6日から11月8日まで、第10回摂食障害看護研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、精神科、心療内科、小児科、精神保健福祉センター等に勤務する看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士等36名に対して研修を行った。

課程主任 安藤 哲也 課程副主任 菊地 裕絵

11月6日(水)

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤 哲也
精神障害、パーソナリティ障害を合併する摂食障害	西園 マーハ 文
摂食障害治療の基本	河合 啓介
栄養リハビリテーション	河野 公子

11月7日(木)

摂食障害の身体的合併症の管理	鈴木(堀田) 眞理
心療内科病棟における看護	金居 久美子・小松崎 恵
心理教育的アプローチ	武田 綾

11月8日(金)

重症の神経性無食欲症の入院治療と看護	石川 美雪
ケアとコミュニケーションのスキル	小原 千郷

小児科病棟における治療と看護

高宮 静男・佐野 智子

講師名簿

安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
菊地 裕絵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
西園 マーハ 文	白梅学園大学子ども学部発達臨床学科教授
河合 啓介	国立大学法人九州大学病院心療内科講師
河野 公子	国立国際医療研究センター国府台病院栄養管理室室長
鈴木（堀田） 眞理	政策研究大学院大学保健管理センター教授
金居 久美子	国立国際医療研究センター国府台病院 3 南病棟看護師長
小松崎 恵	国立国際医療研究センター国府台病院 3 南病棟副看護師長
武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
石川 美雪	北里大学東病院精神科 N 1 病棟病棟単位責任者
小原 千郷	東京女子医科大学病院臨床心理士
高宮 静男	西神戸医療センター精神科部長
佐野 智子	西神戸医療センター小児病棟看護師

《薬物依存症に対する認知行動療法研修》

平成 25 年 11 月 12 日から 11 月 13 日まで、第 5 回薬物依存症に対する認知行動療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、ビデオ学習やデモセッションの見学を通じて、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶ」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 77 名に対して研修を行った。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 和田 清

11月12日（火）

SMARPP の意義と実際	松本 俊彦
TAMARP～精神保健福祉センターでの試み	近藤 あゆみ
認知行動療法プログラムの立ち上げ方～保健機関における実例	嶋根 卓也
医療観察法物質使用障害治療プログラム	今村 扶美

11月13日（水）

SMARPP ビデオ学習	松本 俊彦
デモセッション	松本 俊彦・今村 扶美
グループワーク	松本 俊彦・今村 扶美
SMARPP ワークブックを用いた外来個人療法	若林 朝子
プログラムの効果とディスカッション	松本 俊彦

講師名簿

和田 清 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
 松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
 嶋根 卓也 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長

近藤 あゆみ 新潟医療福祉大学社会福祉学部社会福祉学科准教授
 今村 扶美 国立精神・神経医療研究センター病院主任心理療法士
 若林 朝子 国立精神・神経医療研究センター病院心理療法士

《精神科医療従事者自殺予防研修》

平成25年12月3日から12月4日まで、第8回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師、看護師、精神保健福祉士等の精神科医療従事者82名に対して研修を行った。

課程主任 竹島 正 課程副主任 松本 俊彦・川野 健治・藤森 麻衣子

12月3日(火)

我が国の自殺及び自殺対策 竹島 正・山内 貴史
 自殺と精神疾患 稲垣 正俊
 自傷行為・過量服薬を繰り返す患者への対応 松本 俊彦
 自殺が生じたあとの対応 川野 健治

12月4日(水)

アルコール依存症の自殺予防 奥平 富貴子
 精神科病院における自殺のリスクとその予防 永嶋 弘道
 事例から学ぶこと 福地 成
 精神科医療・被災地における自殺予防 小原 聡子・大類 真嗣・藤森 麻衣子

講師名簿

竹島 正 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センターセンター長
 松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター副センター長
 川野 健治 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
 藤森 麻衣子 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター室長
 山内 貴史 国立精神・神経医療研究センター自殺予防総合対策センター研究員

稲垣 正俊 岡山大学病院精神科神経科講師
 奥平 富貴子 医療法人東北会東北会病院病棟医長
 永嶋 弘道 一般財団法人東北精神保健会青葉病院副院長

福地 成 みやぎ心のケアセンター地域支援部長
 小原 聡子 宮城県精神保健福祉センター技術次長
 大類 真嗣 仙台市精神保健福祉総合センター主幹

《犯罪被害者メンタルケア研修》

平成 26 年 1 月 20 日から 1 月 22 日まで、第 8 回犯罪被害者メンタルケア研修を実施し、「犯罪被害者・遺族の心理についての基本的な知識、および臨床現場での適切な治療対応」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、犯罪被害者支援関連機関に勤務する医療・臨床心理、福祉業務従事者等 48 名に対して研修を行った。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 中島 聡美

1月20日(月)

犯罪被害者等基本法および犯罪被害者等基本計画における精神医療の役割	池田 暁子
警察による犯罪被害者支援	滝澤 依子
犯罪被害者と刑事司法	柑本 美和
犯罪被害者の心理と治療・支援	中島 聡美

1月21日(火)

犯罪被害者の声：犯罪被害者そして精神科医として	高橋 幸夫
犯罪被害者遺族の心理	白井 明美
DV 被害者への対応	中島 聡美

1月22日(水)

PTSD の概念と治療	金 吉晴
犯罪被害者への治療対応	小西 聖子
犯罪被害者の事例提示	小西 聖子・中島 聡美
犯罪被害者治療の実際	小西 聖子・中島 聡美

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部部長
中島 聡美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室長

池田 暁子	内閣府犯罪被害者等施策推進室参事官
滝澤 依子	警察庁長官官房給与厚生課犯罪被害者支援室長
柑本 美和	東海大学大学院実務法学研究科准教授
高橋 幸夫	医療法人東浩会石川病院精神科医局部長
白井 明美	国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科准教授
小西 聖子	武蔵野大学人間科学部教授

《発達障害支援医学研修》

平成26年1月29日から1月30日まで、第16回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と心理社会的支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者42名に対して研修を行った。

課程主任 稲垣 真澄 課程副主任 太田 英伸・軍司 敦子

1月29日(水)

厚生労働省の発達障害支援施策	日詰 正文
書字指導の実際	河野 俊寛
発達障害の2次障害の理解と対応	原田 謙
虐待から子どもを守る司法面接技法	仲 真紀子

1月30日(木)

自閉症治療薬の現状と治験最新情報	中川 栄二
思春期の発達障害の支援	小野 和哉
神経心理検査シリーズ：DN-CASの概要と実習	岡崎 慎治
DSM-5からみた発達障害の位置づけ	齊藤 万比古

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部长
太田 英伸	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
軍司 敦子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部発達障害対策専門官
河野 俊寛	東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野特任研究員
原田 謙	信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部准教授
仲 真紀子	北海道大学大学院文学研究科教授
中川 栄二	国立精神・神経医療研究センター病院医長
小野 和哉	東京慈恵会医科大学精神医学講座診療医長
岡崎 慎治	筑波大学人間系(障害科学域)准教授
齊藤 万比古	愛育病院小児精神保健科部長

研修の推移

国立精神衛生研究所			
36年6月～		54年度～	
研 修 課 程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修
			・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修

国立精神・神経センター精神保健研究所					
61年度		62年度～		20年度	
研 修 課 程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイケア課程研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科デイケア課程研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修
			・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修		

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所					
22年度		23年度		25年度	
研 修 課 程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	→	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修
			・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修		

平成25年度精神保健に関する技術研修課程実施計画表

研修日程	課程名	応募方法	願書締切日		受講料	会場	定員	主任		自殺予防総合対策センターの担当する研修
			願書作成(WEB登録)期間					副主任		
平成25年 6月13日(木)～14日(金)	(第7回) 精神科医療評価・均てん化研修	WEBのみ	4月18日(木)	3/28(木)～4/18(木)	¥15,000	小平市	40	伊藤 弘人 奥村 泰之		
平成25年 6月26日(水)～27日(木)	(第50回) 精神保健指導課程研修	WEBのみ	5月17日(金)	4/22(月)～5/17(金)	¥20,000	中央区	80	竹島 正 立森 久照 西 大輔		
平成25年 7月3日(水)～4日(木)	(第15回) 発達障害支援医学研修	WEB登録後 郵送	5月1日(水)	4/8(月)～4/29(月)	無料	小平市	60	稲垣 真澄 太田 英伸 軍司 敦子		
平成25年 7月4日(木)～5日(金)	(第8回) 発達障害早期総合支援研修	WEB登録後 郵送	5月1日(水)	4/8(月)～4/29(月)	無料	千代田区	50	神尾 陽子 高橋 秀俊		
平成25年 7月17日(水)～19日(金)	(第1回) 精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	WEB登録後 郵送	5月16日(木)	4/22(月)～5/13(月)	¥20,000	小平市	30	伊藤 順一郎 吉田 光爾		
平成25年 8月6日(火)～7日(水)	(第4回) 心理職自殺予防研修	WEBのみ	6月13日(木)	5/23(木)～6/13(木)	無料	府中市	80	川野 健治 竹島 正 松本 俊彦 藤森 麻衣子	○	
平成25年 8月20日(火)～22日(木)	(第7回) 自殺総合対策企画研修	WEBのみ	6月27日(木)	6/6(木)～6/27(木)	¥15,000	府中市	100	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 藤森 麻衣子	○	
平成25年 8月27日(火)～30日(金)	(第11回) 摂食障害治療研修	WEB登録後 郵送	6月27日(木)	6/3(月)～6/24(月)	¥24,000	小平市	40	安藤 哲也 菊地 裕絵		
平成25年 9月3日(火)～6日(金)	(第5回) アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修	WEB登録後 郵送	7月4日(木)	6/10(月)～7/1(月)	¥20,000	小平市	30	伊藤 順一郎 吉田 光爾		
平成25年 9月3日(火)～6日(金)	(第11回) ACT研修	WEB登録後 郵送	7月4日(木)	6/10(月)～7/1(月)	¥20,000	小平市 川崎市	30	伊藤 順一郎 吉田 光爾		
平成25年 9月10日(火)～13日(金)	(第27回) 薬物依存臨床医師研修	WEB登録後 郵送	7月11日(木)	6/17(月)～7/8(月)	¥24,000	小平市	20	和田 清 松本 俊彦 松本 正彦		
平成25年 9月10日(火)～13日(金)	(第15回) 薬物依存臨床看護等研修	WEB登録後 郵送	7月11日(木)	6/17(月)～7/8(月)	¥24,000	小平市	30	和田 清 松本 俊彦 松本 正彦		
平成25年 9月17日(火)～18日(水)	(第7回) 精神科医療従事者自殺予防研修	WEBのみ	7月25日(木)	7/4(木)～7/25(木)	無料	府中市	80	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 藤森 麻衣子	○	
平成25年 9月25日(水)～27日(金)	(第6回) 発達障害精神医療研修	WEBのみ	8月1日(木)	7/11(木)～8/1(木)	無料	千代田区	50	神尾 陽子 高橋 秀俊		
平成25年 10月29日(火)～30日(水)	(第8回) 司法精神医学研修	WEB登録後 郵送	8月29日(木)	8/5(月)～8/26(月)	¥12,000	小平市	70	岡田 幸之 菊池 安希子 安藤 久美子		
平成25年 11月5日(火)～6日(水)	(第4回) 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修	WEBのみ	9月12日(木)	8/22(木)～9/12(木)	無料	府中市	100	松本 俊彦 竹島 正 川野 健治 藤森 麻衣子	○	
平成25年 11月6日(水)～8日(金)	(第10回) 摂食障害看護研修	WEB登録後 郵送	9月5日(木)	8/12(月)～9/2(月)	¥18,000	小平市	40	安藤 哲也 菊地 裕絵		
平成25年 11月12日(火)～13日(水)	(第5回) 薬物依存症に対する認知行動療法研修	WEB登録後 郵送	9月12日(木)	8/19(月)～9/9(月)	¥15,000	小平市	60	松本 俊彦 和田 清		
平成25年 12月3日(火)～4日(水)	(第8回) 精神科医療従事者自殺予防研修	WEBのみ	10月10日(木)	9/19(木)～10/10(木)	無料	宮城県	80	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 藤森 麻衣子	○	
平成26年 1月20日(月)～22日(水)	(第8回) 犯罪被害者メンタルケア研修	WEBのみ	11月28日(木)	11/7(木)～11/28(木)	¥15,000	小平市	40	金 吉晴 中島 聡美		
平成26年 1月29日(水)～30日(木)	(第16回) 発達障害支援医学研修	WEB登録後 郵送	11月28日(木)	11/4(月)～11/25(月)	無料	小平市	60	稲垣 真澄 太田 英伸 軍司 敦子		

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

平成 25 年度 研究報告会

(第 25 回)

プログラム・抄録集

平成24年度精神保健研究所報告会 受賞者名	
最優秀青年賞	
● 松田正彦 (薬物依存研究部)	「脱法ハーブ流通規制対策に関する研究：合成カンナビノイドの簡易検出法の確立」
青年賞	
● 軍司敦子 (知的障害研究部)	「非侵襲的脳機能計測による声特異反応の検出」
● 守口善也 (精神生理研究部)	「リアルタイムfMRIを用いたストレス関連疾患の治療法の開発」
奨励賞	
● 嶋根卓也 (薬物依存研究部)	「クラブイベント来場者におけるMDMAをはじめとするクラブドラッグの使用パターンについて」
● 富山健一 (薬物依存研究部)	「カチン誘導体MDPVの薬物依存性および細胞毒性の評価」
● 野崎健太郎 (災害時こころの情報支援センター)	「東日本大震災が睡眠、QOLおよびメンタルヘルスに及ぼした影響」
● 中嶋恭子 (精神生理研究部)	「新しい活動量計における睡眠/覚醒判定アルゴリズムの検討」
● 安村 明 (知的障害研究部)	「注意欠陥/多動性障害における干渉抑制に関わる神経基盤の解明」

平成 26 年 3 月 10 日(月)

国立精神・神経医療研究センター

研究所 3 号館 セミナー室

平成 25 年度 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所研究報告会

会期:平成 26年 3 月 10 日(月)

会場:国立精神・神経医療研究センター 研究所 3 号館セミナー室

日程:

【セッションⅠ】	9:00 ~ 9:10	開会の辞	ご挨拶
	9:10 ~ 9:40	演題 1	自殺予防総合対策センター
	9:40 ~ 10:10	演題 2	知的障害研究部
	10:10 ~ 10:40	演題 3	心身医学研究部
※休憩※	10:40 ~ 10:55		
【セッションⅡ】	10:55 ~ 11:25	演題 4	司法精神医学研究部
	11:25 ~ 11:55	演題 5	社会復帰研究部
	11:55 ~ 12:25	演題 6	成人精神保健研究部
	12:25 ~ 12:40		写真撮影・連絡 昼食
	12:40 ~ 13:40		
【セッションⅢ】	13:40 ~ 14:10	演題 7	薬物依存研究部
	14:10 ~ 14:40	演題 8	精神保健計画研究部
	14:40 ~ 15:10	演題 9	社会精神保健研究部
	15:10 ~ 15:40	演題 10	精神薬理研究部
※休憩※	15:40 ~ 15:55		
【セッションⅣ】	15:55 ~ 16:25	演題 11	児童・思春期精神保健研究部
	16:25 ~ 16:55	演題 12	精神生理研究部
	16:55 ~ 17:25	演題 13	災害時こころの情報支援センター
	17:25 ~ 17:35		閉会の辞

< 後片付け・評価検討 >

19:00 ~ 20:00 懇親会・表彰式 (コスモホール)
(18:30 開場)

平成 25 年度 精神保健研究所リサーチ委員会
金 吉晴 安藤久美子 安藤哲也 川野健治 齋藤顕宜 佐藤さやか

平成 25 年度 精神保健研究所 研究報告会
プログラム

9:00-9:10 開会の辞
ご挨拶

精神保健研究所 所長 福田 祐典
企画戦略室長 福田 祐典

<< 発表 >>

9:10-9:40 自殺予防総合対策センター

座長 竹島 正

1: 中学校での自殺予防プログラム GRIP の構成

○川野健治¹⁾、白神敬介¹⁾、川島大輔²⁾、荘島幸子³⁾、勝又陽太郎⁴⁾

1) 自殺予防総合対策センター

2) 北海道教育大学

3) 帝京平成大学

4) 新潟県立大学

2: わが国におけるがん診断後の自殺および他の外因死: 前向き地域住民コホートを
を用いて

○山内貴史¹⁾、稲垣正俊²⁾、米本直裕³⁾、岩崎基⁴⁾、井上真奈美⁴⁾、明智龍男⁵⁾、
磯博康⁶⁾、津金昌一郎⁴⁾

1) 自殺予防総合対策センター

2) 岡山大学病院

3) トランスレーションショナル・メディカルセンター

4) 国立がん研究センターがん予防・検診研究センター

5) 名古屋市立大学大学院医学研究科

6) 大阪大学大学院医学系研究科

3: 睡眠障害と自殺の関連: 心理学的剖検研究による症例対照研究

○小高真美¹⁾、松本俊彦¹⁾、勝又陽太郎²⁾、赤澤正人³⁾、立森久照¹⁾、川上憲人⁴⁾、
江口のぞみ⁴⁾、白川教人⁵⁾、竹島正¹⁾

1) 自殺予防総合対策センター

2) 新潟県立大学

3) 兵庫県こころのケアセンター

4) 東京大学大学院

5) 横浜市こころの健康相談センター

9:40-10:10 知的障害研究部

座長 稲垣真澄

1: 脳磁図と脳波による声特異反応の検出

○軍司敦子¹⁾、竹市博臣^{1,2)}、小林朋佳¹⁾、鈴木浩太¹⁾、山本寿子^{1,3)}、安村明¹⁾、
北洋輔^{1,4)}、中川栄二⁵⁾、稲垣真澄¹⁾

1) 知的障害研究部

2) 理化学研究所仁科加速器研究センター

- 3) 聖マリアンナ医科大学
 4) 日本学術振興会特別研究員
 5) センター病院
- 2: ADHD 児を対象としたニューロフィードバック訓練の効果
 ○高橋純一¹⁾、安村明¹⁾、中川栄二²⁾、稲垣真澄¹⁾
 1) 知的障害研究部
 2) 病院小児神経科
- 3: GABAergic interneuron の発達における Strm4 遺伝子機能解析
 ○白川由佳¹⁾、刑部仁美¹⁾、稲垣真澄¹⁾、中村祥子²⁾、井上健²⁾、後藤雄一²⁾
 1) 知的障害研究部
 2) 神経研究所疾病研究第二部
- 10: 10-10: 40 心身医学研究部
 座長 安藤哲也
 1: 神経性食欲不振症患者の血漿アミノ酸プロファイルの解析
 ○安藤哲也¹⁾、田村奈穂²⁾、市丸雄平³⁾、倉尚樹^{1,4)}、石川俊男²⁾
 1) 心身医学研究部
 2) 国立国際医療研究センター国府台病院心療内科
 3) 東京家政大学
 4) 神奈川県予防医学協会
- 2: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の効果および実施可能性に関する研究
 ○大江悠樹^{1,2)}、倉五月¹⁾、有賀元³⁾、天野智文³⁾、大和滋³⁾、堀越勝²⁾、福土審⁴⁾、菊地裕絵¹⁾、富田吉敏⁵⁾、安藤哲也¹⁾
 1) 心身医学研究部
 2) 認知行動療法センター
 3) センター病院消化器科
 4) 東北大学大学院医学系研究科行動医学
 5) センター病院心療内科
- 3: 怒りを中心としたネガティブ気分に伴う生理指標の同定と生理指標を利用した対処方略の検討
 ○上野真弓¹⁾、菊地裕絵¹⁾、前田基成²⁾、安藤哲也¹⁾
 1) 心身医学研究部
 2) 女子美術大学芸術学部
- 10: 55-11: 25 司法精神医学研究部
 座長 岡田幸之
 1: 東京都の医療観察法指定通院医療機関の整備に関連する要因の調査
 ○菊池安希子¹⁾、長沼洋一²⁾、三澤孝夫³⁾、福田敬⁴⁾、安藤久美子¹⁾、岡田幸之¹⁾
- 1) 司法精神医学研究部
 2) 東海大学健康科学部福祉学科
 3) センター病院
 4) 国立保健医療科学院研究情報支援研究センター
- 2: 医療観察法入院処遇期間の経年的変化と転院の影響
 ○河野聡明¹⁾、菊池安希子¹⁾、長沼洋一²⁾、岡田幸之¹⁾
 1) 司法精神医学研究部
 2) 東海大学健康科学部福祉学科
- 3: Go/NoGo 課題から見た行動抑制系/行動賦活系における事象関連電位の特徴
 ○津村秀樹¹⁾、安藤久美子¹⁾、中澤佳奈子¹⁾、野田隆政²⁾、岡田幸之¹⁾
 1) 司法精神医学研究部
 2) センター病院
- 11: 25-11: 55 社会復帰研究部
 座長 伊藤順一郎
 1: 精神障害者に対するアウトリーチサービスに関するプログラム評価研究
 ○吉田光爾
 社会復帰研究部
- 2: 重い精神障害をもつ者に対する認知機能リハと援助付き雇用の組み合わせによる就労支援
 ○佐藤さやか、山口創生、下平美智代、市川健、種田綾乃、古家美穂、吉田光爾、伊藤順一郎
 社会復帰研究部
- 3: 精神障害者に対する援助付き雇用における利用者の被支援量: サービス・コード票分析の途中経過報告
 ○山口創生¹⁾、佐藤さやか¹⁾、下平美智代¹⁾、市川健¹⁾、種田綾乃¹⁾、吉田光爾¹⁾、坂田増弘²⁾、伊藤順一郎¹⁾
 1) 社会復帰研究部
 2) センター病院
- 11: 55-12: 25 成人精神保健研究部
 座長 金 吉晴
 1: Delphi 法を用いたエキスパートコンセンサスによる犯罪被害者の急性期心理社会支援ガイドラインの開発
 ○中島聡美¹⁾、鈴木友理子¹⁾、成澤知美^{1,2,3)}、浅野敬子^{1,4)}、深澤舞子¹⁾、金吉晴¹⁾
 1) 成人精神保健研究部
 2) 大阪大学大学院人間科学研究科
 3) トランスレナショナル・メディアイカセルセンター

4) 武蔵野大学大学院人間社会研究科

2:被災地の県職員の精神的不調と業務との関連—東日本大震災から2か月後に行

われた健康調査の結果より—

○深澤舞子¹⁾、鈴木友理子¹⁾、小原聡子²⁾、金吉晴¹⁾

- 1) 成人精神保健研究部
- 2) 宮城県精神保健福祉センター

3: 身体部位の自己所有感覚におけるCOMIT遺伝子多型の影響

○池田大樹、本間元康、栗山健一、吉池卓也、金吉晴

成人精神保健研究部

13: 40-14: 10 薬物依存研究部

座長 和田 清

1: 精神科病医療機関における脱法ドラッグ関連患者の臨床的特徴

○松本俊彦¹⁾、立森久照²⁾、谷渕由布子³⁾、高野歩^{1,4)}、和田清¹⁾

- 1) 薬物依存研究部
- 2) 精神保健計画研究部
- 3) 千葉病院
- 4) 東京大学大学院医学系研究科精神看護学専攻

2: クラブイベント来場者における形状別にみた脱法ドラッグの使用パターンと使用に伴う主観的症状について

○嶋根卓也¹⁾、和田清¹⁾、日高庸晴²⁾、松田正彦¹⁾

- 1) 薬物依存研究部
- 2) 宝塚大学看護学部

3: 薬物依存症者に対する認知行動療法プログラムにおける脱法薬物患者の臨床的特徴

○引土絵未、松本俊彦、和田清、今村扶美、谷渕由布子、高野歩

薬物依存研究部

14: 10-14: 40 精神保健計画研究部

座長 竹島 正

1: ベイジアンモデル選択による時間的に通常と異なるパターンの検出法を用いた精神病床からの退院件数の推移が異なる地域の検討

○立森久照¹⁾、加藤直広^{1,2)}、伊庭幸人^{1,3)}、白田謙太郎¹⁾、後藤基行¹⁾、下田陽樹¹⁾、橋本英子^{1,4)}、竹島正¹⁾

- 1) 精神保健計画研究部
- 2) 電気通信大学産官連携センター
- 3) 統計数理研究所モデリング研究系
- 4) 総合研究大学院大学複合科学研究科

2: 被災者におけるK6尺度への回答傾向および得点分布の特徴:被災地データおよび一般国民データの二次解析による比較

○下田陽樹^{1,2)}、川上憲人²⁾、土屋政雄³⁾、岩田昇⁴⁾

- 1) 精神保健計画研究部
- 2) 東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野
- 3) 独立行政法人労働安全衛生総合研究所作業条件適応研究グループ
- 4) 広島国際大学心理学部臨床心理学科

3: NCNPにおける歴史資料館開設準備計画

○後藤基行¹⁾、竹島正¹⁾、吉田光爾²⁾、有馬邦正³⁾

- 1) 精神保健計画研究部
- 2) 社会復帰研究部
- 3) センター病院

14: 40-15: 10 社会精神保健研究部

座長 伊藤弘人

1: 精神科救急病棟における医療の質に関する予備的検討

○山之内芳雄¹⁾、佐藤真希子¹⁾、平田豊明²⁾、伊藤弘人¹⁾

- 1) 社会精神保健研究部
- 2) 千葉県精神科医療センター

2: スタッフによる攻撃性観察尺度(SOAS-R)を用いた攻撃的行動の性質および重症度に関する検討

○佐藤真希子¹⁾、野田寿恵^{1,2)}、杉山直也²⁾、吉浜文洋³⁾、伊藤弘人¹⁾

- 1) 社会精神保健研究部
- 2) 公益財団法人復康会沼津中央病院
- 3) 日本精神科看護技術協会

3: 統合失調症患者における抗精神病薬の潜在的な心血管リスクに関する解析

○池野敬¹⁾、久木山清貴²⁾、伊藤弘人¹⁾

- 1) 社会精神保健研究部
- 2) 山梨大学大学院医学工学総合教育部 内科学講座第2

15: 10-15: 40 精神薬理研究部

座長 山田光彦

1: 情動調節における内側前頭前野グルタミン酸神経伝達系の役割

○斎藤顕直¹⁾、大橋正誠^{1,3)}、山田美佐¹⁾、鈴木聡史^{1,3)}、山下萌^{1,4)}、塚越麻衣^{1,3)}、橋本富男¹⁾、杉山梓^{1,3)}、山田大輔²⁾、岡淳一郎³⁾、関口正幸²⁾、山田光彦¹⁾

- 1) 精神薬理研究部
- 2) 疾病研究第4部
- 3) 東京理科大学薬学部薬理学教室
- 4) 東京医科歯科大学医学部

2 : どのような睡眠習慣と食習慣が肥満リスクを高めるか
 ○中崎恭子、北村真吾、元村祐貴、Jakub Spaeti、守口善也、肥田昌子、三島和夫
 精神生理研究部

3 : 日常生活における睡眠負債が肥満に及ぼす神経学的検証
 ○勝沼るり、大場健太郎、元村裕貴、寺澤悠里、中崎恭子、片寄泰子、北村真吾、肥田昌子、守口善也、三島和夫
 精神生理研究部

16 : 55-17 : 25 災害時こころの情報支援センター

座長 金 吉晴

1 : 東日本大震災のメディア報道による子どもたちのメンタルヘルスへの影響調査
 ○大沼麻実¹⁾、神尾陽子²⁾、金吉晴¹⁾
 1) 災害時こころの情報支援センター
 2) 児童・思春期精神保健研究部

2 : 東日本大震災こころのケアチーム活動の把握—宮城県、仙台市、福島県の個票調査—

○荒川亮介、渡路子、小見めぐみ、吉田航、金吉晴
 災害時こころの情報支援センター

3 : 都道府県・政令指定都市の災害精神保健医療体制の整備状況と DPAT が携行する薬剤リストについて

○吉田航、渡路子、荒川亮介、小見めぐみ、中神里江、金吉晴
 災害時こころの情報支援センター

17 : 25-17 : 35 閉会の辞 精神保健研究所 所長 福田 祐典

19 : 00-20 : 00 懇親会・表彰式 (コスモホール)

2 : 脂質メディエーター リゾホスファチジン酸の情動行動に及ぼす影響：新規抗不安薬ターゲットとしての検討
 ○塚越麻衣^{1,2)}、山田佐¹⁾、岡淳一郎^{1,2)}、斎藤直¹⁾、山田光彦¹⁾

1) 精神薬理研究部
 2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室

3 : 我が国で実施された救急医療機関に搬送された自殺企図者を対象にした研究の特徴と今後の課題：系統的レビュー

○川島義高¹⁾、米本直裕²⁾、稲垣正俊³⁾、山田光彦¹⁾
 1) 精神薬理研究部
 2) トランスレーションショナル・メディカルセンター情報管理・解析部
 3) 岡山大学病院精神科神経科

15 : 55-16 : 25 児童・思春期精神保健研究部

座長 神尾陽子

1 : 自閉症スペクトラム児における聴覚性前注意的弁別処理の電位源推定に関する研究

○高橋秀俊、中鉢貴行、小松佐穂子、岡島純子、飯田悠佳子、荻野和雄、神尾陽子
 児童・思春期精神保健研究部

2 : 自閉症スペクトラム障害における表情及び人物認知メカニズムの発達の變化に関する研究：中間報告

○小松佐穂子¹⁾、高橋秀俊¹⁾、神長伸幸²⁾、岡島純子¹⁾、荻野和雄¹⁾、中鉢貴行¹⁾、飯田悠佳子¹⁾、近藤綾子²⁾、柴田奈津美²⁾、馬塚れい子²⁾、神尾陽子¹⁾
 1) 児童・思春期精神保健研究部
 2) 理化学研究所

3 : 就学前幼児における自閉症的行動特性と不器用との関連性

○飯田悠佳子¹⁾、中井昭夫²⁾、三宅篤子¹⁾、荻野和雄¹⁾、神尾陽子¹⁾
 1) 児童・思春期精神保健研究部
 2) 福井大学

16 : 25-16 : 55 精神生理研究部

座長 三島和夫

1 : 情動の認知と制御、及び社会性に関する脳画像研究

○守口善也^{1,2)}、寺澤悠理¹⁾、勝沼るり¹⁾、大場健太郎¹⁾、村上裕樹²⁾、金山祐介¹⁾、川島一朗¹⁾、元村祐貴¹⁾、肥田昌子¹⁾、花川隆²⁾、松田博史²⁾、三島和夫¹⁾

1) 精神生理研究部
 2) 脳病態統合イメージングセンター 先進脳画像研究部

中学校での自殺予防プログラム GRIP の構成

○川野健治¹⁾、白神敬介¹⁾、川島大輔²⁾、荘島幸子³⁾、勝又陽太郎^{1,4)}

1) 自殺予防総合対策センター2) 北海道教育大学 3) 帝京平成大学 4) 新潟県立大学

【背景】自殺予防プログラム GRIP では、国内外の同種のプログラムの異なるロジックモデルを構成した。若年層の自殺への介入の場として学校を考える場合、1. 生徒は相談相手になる生徒を選ぶ、2. 教員は生徒を区別しない全体的予防介入法を求めている、という2つの特徴を生かすことができる。そこで GRIP は、生徒同士の相談行動の質を高めるとともに教員側の準備を整えることで、(自殺を含む)深刻な問題では生徒同士の相談を信頼できる大人に「ひらく」ことを想定した。そのため生徒向けプログラムは、感情のコントロール、他者とのコミュニケーション、対処行動のメタ認知を順に体験的に学習して、最終的に適切な相談の仕方が理解できるよう、4つの課題から構成されている。同時に、学習の過程では感情と行動の関係を変え、学級への所属感を高めることで、ストレス時の(自傷を含む)破壊的表出を防ぐことも想定している。つまり GRIP では生徒の自殺予防について、相談による支援の成立(活動)と衝動的な破壊的表出の抑制(認知)という二つの側面からの効果を期待する。

【目的】GRIP 生徒向けプログラムの学習内容(以下、GRIP スキル)の構成概念妥当性を、上述の視点から検討する。すなわち、感情のコントロール、他者とのコミュニケーション、対処行動のメタ認知が、適切な相談行動と連続的な概念となっていることを確認する(支援の成立)。また、GRIP スキルの破壊的表出への影響力を確認する(破壊的表出の抑制)。

【方法】GRIP を実施した A 中学の 2 年生 202 名を対象として、最終授業(第 5 回目)が終了した約 2 週間後に、学級活動の時間を使ってアンケート調査を行った。友人関係スケッチシート、学業ストレスサー、破壊的表出、状態自尊感情、GRIP スキルについての尺度を含んでいて、支援の成立の確認のために GRIP スキルの内的一貫性と潜在ランク分析、また破壊的表出の抑制のために、破壊的表出を従属変数として、友人関係もしくは学業ストレスサー、GRIP スキル、交互作用項を順次投入する階層的重回帰分析を実施した。

【結果】4つの課題について各 4 項目で概念化された GRIP スキルは、1 項目を除き 15 項目で $\alpha = 0.81$ とまずまずの内的一貫性を示した。また、重回帰分析の結果は、GRIP スキルが破壊的表出を弱めること、また友人関係ストレスサーの影響を媒介して弱めることが確認された。

【考察】GRIP スキルが上述のロジックモデルに即して概念化された。同時に、その測定尺度の妥当性が確認されたことから、今後はこれを用いて効果測定研究に取り組む。

わが国におけるがん診断後の自殺および他の外因死：

前向き地域住民コホートをを用いて

○山内貴史¹⁾、稲垣正俊²⁾、米本直裕³⁾、岩崎基⁴⁾、井上真奈美⁴⁾
明智龍男⁵⁾、磯博康⁶⁾、津金昌一郎⁴⁾

1) 自殺予防総合対策センター2) 岡山大学病院 3) TMC 4) 国立がん研究センターがん予防・検診研究センター5) 名古屋市立大学大学院医学研究科
6) 大阪大学大学院医学系研究科

【背景】先行研究ではがんの診断後に自殺のリスクが高まることが指摘されているが、がん診断後の自殺および他の外因死の双方のリスクを診断からの期間別に明らかにするために、前向き研究は行われていない。本研究では、わが国における前向き地域住民コホートをを用いて、がん診断後の自殺および他の外因死のリスクを診断からの期間別に検討した。

【方法】「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」(主任研究者：津金昌一郎 国立がん研究センターがん予防・検診研究センター長) のデータを用い分析を実施した。分析対象者はコホート対象地域に居住し、ベースライン調査に回答してがんの既往が確認されなかった 40~69 歳の住民 101,914 人であった。追跡期間は 1990 年または 1993 年 1 月から 2010 年 12 月までとした。ポアソン回帰モデルにより、自殺、他の外因死の各々について、がん診断なし群に対するがん診断群の相対リスクおよびその 95% 信頼区間を算出した。また、交絡の影響を検討するため、がん診断後の自殺および他の外因死事例を用いたケース・クロスオーバー分析を行った。

【結果】追跡期間中に新たにがんに罹患した者において 34 例の自殺と 47 例の外因死が、がん未罹患者では 522 例の自殺と 693 例の外因死が確認された。ポアソン回帰モデルの結果、がん未罹患者に対する、がん診断から 1 年以内の者における自殺および他の外因死の相対リスクはともに約 20 倍であるとともに、診断から 1 年以上になると顕著に低下した。ケース・クロスオーバー分析の結果もポアソン回帰モデルの結果と整合的であった。

【考察】がん診断から 1 年以内における自殺および他の外因死のリスクが高いこと、背景には、がんの診断直後の心理的ストレスとともに、がん罹患および他の外因死のリスクが高いこと、身体的機能や社会的機能の低下があると考えられた。特にがん診断後 1 年以内においては自殺を含めた様々な外因死のリスクに留意する必要があることが示唆された。

睡眠障害と自殺の関連： 心理学的剖検研究による症例対照研究

○小高真美¹⁾、松本俊彦¹⁾、勝又陽太郎²⁾、赤澤正人³⁾、立森久照¹⁾、
川上憲人⁴⁾、江口のぞみ⁴⁾、白川教人⁵⁾、竹島正¹⁾

- 1) 自殺予防総合対策センター2) 新潟県立大学3) 兵庫県こころのケアセンター
4) 東京大学大学院5) 横浜市こころの健康相談センター

【背景】睡眠障害は、自殺の危険因子の一つとして、その早期発見・早期治療が自殺予防に大きく貢献する可能性があることが指摘されている。しかし、この領域においてわが国に研究は非常に限られている。本研究では、自殺の心理学的剖検による症例対照研究を実施し、睡眠障害と自殺との関連および、自殺予防における睡眠障害のスクリーニングの有用性について検討することを目的とした。

【方法】心理学的剖検の手法を用いて情報収集がなされた自殺死亡事例（以下、事例群）49例に対して、性別・年齢・居住地域をマッチさせた対照群145例（一般住民生存者）に調査を実施し、収集されたデータを事例群と比較した。調査では、同居者に対して半構造化面接を実施した。本研究においては、属性等の基本的情報、睡眠障害および精神疾患に関する調査項目について検討した。事例群・対照群間の睡眠障害の出現頻度の比較には、条件つきロジスティック回帰分析を用いた。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会および東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】睡眠障害の有病率が、事例群（75.5%）は対照群（11.0%）と比べて有意に高かった。睡眠障害と自殺の関係は、精神疾患を調整してもなお有意であった。睡眠障害と精神疾患による自殺の人口希与危険割合（PARP）は、睡眠障害では56.4%、精神疾患では35.3%であった。いずれの性別・世代別においても、睡眠障害の有病率は、事例群は対照群と比べて有意に高く、精神疾患を調整してもなお有意であった。

【考察】本研究から、睡眠障害は精神疾患とは独立して、自殺の重要なリスク因子であることが明らかになった。睡眠障害と精神疾患は自殺の相対リスクは同程度であったが、自殺予防においては、自殺に対するPARPのより高い睡眠障害を特定した方がより有用であり、睡眠障害の予防や治療を効果的に実施するための戦略を立てることが重要であることが示唆された。また、自殺のサインとしての睡眠障害の評価は、既に自殺リスクの高い集団に対してより有用であることが推測された。一方、睡眠障害のスクリーニングの有用性は、世代により異なる可能性があることに留意が必要である。

脳磁図と脳波による声特異反応の検出

○軍司敦子¹⁾、竹市博臣^{1,2)}、小林朋佳¹⁾、鈴木浩太¹⁾、
山本寿子^{1,3)}、安村明¹⁾、北洋輔^{1,4)}、中川栄二⁵⁾、稲垣真澄¹⁾

- 1) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部
2) 理化学研究所仁科加速器研究センター3) 聖マリアンナ医科大学
4) 日本学術振興会特別研究員5) 国立精神・神経医療研究センター病院

【背景と目的】

顔やバイオロジカルモーションなどの‘社会性認知’にかかわる障害は、行動観察に加えて神経生理学的基盤の解明まで精力的に進められている。一方、‘発話にもなる社会性認知’については、発達や障害の客観的定量評価法が依然として確立していない（Gunji et al., 2006; Russo et al., 2008; Tamura et al., 2012）。そこで私たちは、脳磁図検査と脳波検査により発話に関連する脳活動を可視化するというエビデンスの集積を図り、子ども達のコミュニケーションにかかわる障害の病態解明、治療的介入や支援における評価指標としての活用を視野に、研究を進めてきたので紹介したい。

【方法と結果】

①fMRI研究より報告されたヒト声に特異的な脳活動（Belin et al., 2000）について、健康成人（右利き、男性、20-35歳）と定型発達児（TD）（右利き、男児、8-12歳）から得られた脳波を解析したところ（Polymate, TEAC）、側頭領域におけるβ帯域の事象関連脱同期反応（Event-Related Desynchronization: ERD）がヒト声聴取に有意な増強を示した。

②自閉症スペクトラム（ASD）児（男児、8-12歳）におけるヒト声に特異的なβ帯域のERDは、TD群に比べて有意に減衰した。

③同課題中の脳磁場反応について健康成人（右利き、男性、20-35歳）を対象に脳筋態統合イメージングセンターの支援（Neuromag, Elekta）を受けて検討したところ、一次運動野および体性感覚野、聴覚野、聴覚連合野付近に発生源が推定された。

【結論】

脳磁図の解析から、声の聴取が、聴覚情報処理に加えて運動調節にかかると脳領域を賦活することを指摘した。この結果は、聴取や発話想起による一次運動野や体性感覚野の活動を報告した先行研究に一致する（Nishitani and Hari, 2002; Gunji et al., 2007; Tamura et al., 2012）。したがって、同課題中に見られた脳波も上記の複数の脳領域が関与すると考えられ、とりわけβ帯域の活動が顕著であることから、ヒト声認知への体性感覚野の貢献が示唆される。すなわち、この活動が減衰するASD児では、声に特異的な聴覚情報処理のみならず（Boddaert et al., 2003, 2004）、発話運動のフィード・フォワード処理にも脆弱性があることを見出したといえる。

音声コミュニケーションにおける聞こえと運動調節、それにもなる社会性認知の神経基盤の検討に際し、体動アーチファクトが懸念される発話課題に代わるものとして、声聴取課題の活用を今後、展開していきたいと考ええる。

ADHD 児を対象としたニューロフィードバック訓練の効果

○高橋純一¹⁾、安村明¹⁾、中川栄二²⁾、稲垣真澄¹⁾

1) 知的障害研究部 2) 病院小児神経科

【背景】 ADHD 児に対する新たな介入法として、ニューロフィードバック (NF) 技術を用いた訓練が報告され始めている。NF 訓練とは、自身の脳活動をリアルタイムでモニタリングしながら、注意に関する脳活動のセルフコントロールを促進させる訓練の1つである。海外ではその有用性が示唆されているが、わが国で学術的な実用で成功した事例は知られていない。本研究では、NF 訓練の有用性を確認するため、脳波の振幅に注目して NF 訓練中の脳波の変化過程を検討した。

【方法】 NCNP 小児神経科通院中の ADHD 児 10 名 (男 7 / 女 3 ; 訓練開始時平均年齢 12 歳 6 月、7 例が薬物療法中) が 2013 年 7 月から約 3 ヶ月間 NF 訓練 (20 セッション、1 セッションは約 10 分) に参加した (2 名は 16、17 セッションで終了)。NF 訓練は neuroConn 社 NeuroPrax®を用いて、negative 条件 (脳活動の集中) と positive 条件 (脳活動の沈静化) を施行した。なお、本研究の実施は当センター倫理委員会の承認を得た (A2013-012)。

NF 訓練中の脳波の変化過程は、各セッションにおける negative 条件と positive 条件の振幅を算出することで解析した。また、NF 訓練の効果は、訓練開始前・後 (pre・post) における注意課題 (モグラーズ; Inoue et al., 2010) 中の脳波を測定することで検討された。目標刺激 (S1) が提示された時点 onset とし、比較刺激 (S2) が提示されるまでの脳波を 100 ms ごとに区切り分析区間とし随伴陰性変動 (Contingent Negative Variation, CNV) に注目した。

【結果】 NF 訓練中における脳波の変化について、16 セッション中における negative 条件と positive 条件の振幅の変化を解析した。その結果、negative 条件では 11 と 12 セッションで陰性方向の振幅が上昇した。一方、positive 条件では 9 と 13 セッションで陽性方向の振幅が上昇した。また、NF 訓練の効果を検討するため、訓練開始前・後におけるモグラーズ課題中の CNV の振幅を解析した。その結果、S1 提示後 700-800 ms で、振幅の有意な上昇が見られた。

【考察】 NF 訓練における negative 条件は脳活動の集中 (脳波の陰性方向へのシフト) を目指し、positive 条件は脳活動の沈静化 (脳波の陽性方向へのシフト) を目指すものである。したがって、対象児は、NF 訓練を通して脳波の陰性・陽性方向への明確なシフトを学ぶことになる。本研究の結果から、NF 訓練の効果は、両条件ともに 10 セッション前後で見られることが明らかとなった。また、その変化過程は非線形的である可能性が示唆された。さらに、注意課題中の脳波の結果から、CNV の振幅に NF 訓練による変化が見られた。CNV 振幅の有意な上昇は注意の持続を反映すると考えられるため、NF 訓練により対象児の注意持続機能が改善された可能性が考えられる。今後は、NF 介入無しの対照 ADHD 群を設定した上で再検討し、NF 訓練の有効性を実証していく予定である。

GABAergic interneuron の発達における Srrm4 遺伝子機能解析

○白川由佳¹⁾、刑部仁美¹⁾、稲垣真澄¹⁾、中村祥子²⁾、井上健²⁾、後藤雄一²⁾

1) 知的障害研究部 2) 神経研究所疾病研究第二部

【背景】 Bronx Walizer(bv)マウスは自然発生型の劣性遺伝性難聴モデルであり、生後早期に内耳コルチ器の内毛細胞の選択的変性・細胞死をきたす。2012 年 bv マウスの原因遺伝子として選択的スプライシングに關与する *Srrm4* が同定され、内耳におけるスプライシング調節、異常の結果、変性・細胞死を生じることが判明した。我々は bv マウスが不安様行動を示し、生後 6 週齢の大脳皮質、特に帯状回皮質、体性感覚皮質においてバルブアルブミン(PV)陽性 GABAergic interneuron (G-IN) の発現が顕著に低下していることを見出している。今回、中枢神経系の *Srrm4* mRNA 発現の定型発達パターンを検討し、大脳皮質における G-IN 異常が発達のどの段階で生じるのかを明らかにすることで、*Srrm4* の IN 発達への関与を検討した。

【方法】 研究 I. 生後 1 日齢、7 日齢、21 日齢の対照マウス (C57BL/6J) の *Srrm4* mRNA 発現を *in situ* hybridization により観察した。

研究 II. 生後 1 日齢、7 日齢、21~30 日齢の C57BL/6J および bv ホモ接合体マウスの GAD67、PV タンパクについて免疫蛍光染色を行った。

【結果】 研究 I. 全日齢を通して、特に海馬、小脳の顆粒細胞層、嗅球の mitral cell layer に *Srrm4* mRNA の強い発現が確認された。また、皮質領域においては全体的に広く *Srrm4* mRNA の発現が見られる中で発達が進むにつれて比較的強い発現が見られる層が移動していきることが明らかになった。

研究 II. 生後 1 日齢、7 日齢の皮質においては、PV 陽性 G-IN の発現は WT、bv ともに認められなかった。GAD67 陽性細胞においても 2 群間の差は認められなかった。生後 21~30 日齢条件において、bv マウス帯状回皮質の PV 陽性 interneuron の有意な減少が認められた ($p=0.05$ 、各群 $N=5$)。また、帯状回皮質、聴覚皮質、視覚皮質において有意な差は認められなかったが、bv マウス群での PV 陽性 IN の減少傾向が確認されている。

【考察】 *Srrm4* タンパク質は中枢神経系において、ニューロンに発現することが明らかになっており、研究 I の結果から *Srrm4* mRNA はむしろ興奮性ニューロンにおける発現が予測された。また、研究 II から生後 21~30 日齢の時点で既に皮質領域における PV 陽性 IN の減少が確認されたことから、生後 7 日齢以降の IN 成熟段階において異常が生じていることが考えられる。以上のことから、bv マウスの原因遺伝子である *Srrm4* の異常は、PV 陽性 GABAergic interneuron の成熟に間接的に關与していることが予想され、今後詳細なメカニズムを検討する必要がある。

神経性食欲不振症患者の血漿アミノ酸プロファイルの解析

○安藤哲也¹⁾、田村奈穂²⁾、市丸雄平³⁾、倉 尚樹^{1,4)}、石川俊男²⁾

1) 心身医学研究部 2) 国立国際医療研究センター 国府台病院心療内科

3) 東京家政大学 4) 神奈川県予防医学協会

【背景】神経性食欲不振症 (AN) では極端な食事制限や偏食によって著しいやせと栄養障害を来すため、アミノ酸代謝が影響されることが予想される。AN 患者では食事摂取量を正確に報告しないことが少なくない。また、むちや喰いや嘔吐などの排出行動を伴う場合も多い。従って、食事の摂取状況や栄養状態の把握には客観的な栄養マーカーが必要である。

【目的】AN の血漿中アミノ酸濃度プロファイルの特徴を明らかにし食事摂取や栄養状態の評価に役立つ。

【方法】AN 群および対照群で横断的に空腹時の血漿中の各種アミノ酸濃度を測定し比較した。さらに食事摂取状況との関連を調べた。

【結果】女性の AN 患者 22 例 (制限型 9 例、むちや喰い/排出型 13 例、平均年齢 30.9 ± 11.7 才、平均 BMI $13.8 \pm 2.0 \text{ kg/m}^2$) と健康若年女性 293 名 (20.9 ± 1.3 才、 $20.2 \pm 2.3 \text{ kg/m}^2$) のアミノ酸測定を実施し、約 24 種のアミノ酸濃度を比較した。AN 群全体では対照群に比較してグリシン、オルニチン、3-メチルヒスチジンの濃度が有意に高く、ロイシン、フェニールアラニン、チロシンの濃度が低かった ($P < 0.0020$)。AN 群のうち入院中の 19 例で採血前 1~2 週間の食事摂取状況が確認できた。食事摂取が不十分な AN 群 ($n=10$) ではグリシン、シトルリンの上昇と分枝鎖アミノ酸 (バリン、イソロイシン、ロイシン)、フェニールアラニン、チロシンの有意な低下がみられた ($P < 0.0020$)。食事摂取が良好な AN 群 ($n=11$) では、オルニチンの濃度が高いのみであった ($P < 0.0020$)。摂取不良群と良好群を比較すると個々のアミノ酸地に有意な差は認められなかったが、良好群ではグリシン/バリン比が有意に公知であった。またグリシン/バリン比は摂取カロリー推定値と負の相関を示した。

【結論】食事摂取不良の AN 患者に特徴的な血漿アミノ酸プロファイルの変化としてグリシン/バリン比の上昇が示され、カロリー摂取量の指標になりうる可能性が示された。さらに臨床的特徴とアミノ酸プロファイルとの関連の解析や既存の栄養マーカーとの比較を行うべく予定である。

過敏性腸症候群に対する認知行動療法の効果および実施可能性に関する研究

○大江悠樹^{1,2)}、倉 五月¹⁾、有賀 元³⁾、天野智文³⁾、大和 滋³⁾
堀越 勝²⁾、福土 審⁴⁾、菊地裕絵¹⁾、富田吉敏⁶⁾、安藤 哲也¹⁾

1) 心身医学研究部 2) 認知行動療法センター 3) センター病院消化器科

4) 東北大学大学院医学系研究科行動医 5) センター病院心療内科

【背景】過敏性腸症候群 (irritable bowel syndrome: IBS) は、代表的な機能性消化管障害で腹痛とそれに関連した便秘や下痢 (便秘や下痢) で特徴づけられる。ストレスや情動で症状が悪化しやすい典型的な心身症である。一般成人の IBS 有病率は 6~14% と高い。IBS は QOL や生活機能を著しく低下させ、経済的損失や医療資源へ負荷が大きさい。中枢神経系と消化管の異常 (腸管運動、内臓知覚過敏、粘膜炎症、腸内細菌など) とが機能的に連関する脳-腸相関の概念で説明されている。

IBS に対する認知行動療法 (CBT) の有効性が海外で報告されているが、わが国では IBS に対する、マニュアルに基づく構造化された CBT の有効性の報告はほとんどない。

【目的】本研究の目的は、Craske ら(2011)の開発した IBS に対する CBT (CBT - interoceptive exposure, CBT-IE) の日本語版を作成し、その実施可能性や安全性、有効性を検証することである。CBT-IE は、腹部症状に対する不安が IBS 症状の重症度や QOL に大きく影響するという知見に基づいて考案された全 10 回の治療プログラムで、通常の現実曝露に加え、腹部症状に対する不安を標的とした内部感覚曝露や注意訓練などの介入を特徴とする。

【方法】対象はセンター病院消化器内科または心療内科を受診した Rome III の診断基準を満たす IBS 患者で、スクリーニング時の重症度は中等症以上、年齢 16 歳以上である。デザインは単群の前後比較である。主要評価項目として IBS 症状の重症度の指標 IBSSI と、胃腸に特異的な不安を測定する VSI を、副次評価項目として全般的改善度 (CGI-S)、IBS 疾患特異的 QOL (IBS-QOL)、健康関連 QOL (SF36, EQ5D)、抑うつ (BDI、ODSIS)、不安 (STAI、OASIS) を介入前、中、後、3 か月後、6 か月後に測定した。

本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の審査と承認を受け、対象者からインフォームドコンセントを得たのち実施された。

【結果】これまでに 7 例をエントリーし 3 例で介入後評価までの手続きを完了した。いずれの症例でも IBSSI で評価した重症度は介入後に軽症以下に改善し、胃腸に対する不安や、IBS 特異的 QOL も介入前に比較して改善した。その他胃腸に限定されない不安や抑うつ症状も維持しない改善を認めた。全般的改善度についても 3 例とも「非常に良くなった」と回答した。

【結論】現在までのところ、完遂例ではいずれも症状の軽減と QOL の改善が認められた。また、実施期間中を通して有害な事象はみられなかった。本プロトコルはわが国でも安全に実施可能でかつ、一定の治療効果を持つと期待される結果が示された。

怒りを中心としたネガティブ気分に伴う生理指標の同定と生理指標を利用した対処方略の検討

○上野真弓¹⁾、菊地裕絵¹⁾、前田基成²⁾、安藤哲也¹⁾

1) 心身医学研究部 2) 女子美術大学 芸術学部

【目的】 ネガティブな気分から素早く回復することは、心身の健康を保つために重要である。本研究ではネガティブ気分の中でも特に、対人関係のストレスや循環器疾患等と関連の深い怒り・イライラ感を取り上げ、それらの気分の変化に伴う身体の変化に着目した。先行研究では怒り・イライラに伴って変化する生理指標として、心拍、血圧が多く用いられているが (e.g., Radstaak, et al., 2011), それらの気分の変化を最も反映する指標がどれか、明確な結論が出ていない。また、ネガティブ気分からの回復に効果的な方略として気晴らし、非効果的な方略としてルミネーションが挙げられている。これらのことから怒り・イライラに伴う変化に有効な生理指標の同定と、これらの気分から回復する際の方略の違いがどのような影響を及ぼすかについて、生理指標と心理指標の両方を用いて検討することを目的とした。

【方法】 実験参加者：青年期の男女6名（男性1名、女性5名、20から25歳）を対象とした。全参加者より紙面によるインフォームドコンセントを得た。手続き：安静状態の生理指標を測定した(ベースライン)後、難解な迷路を用いた鏡映描写テストを実施し、実験参加者はネガティブな気分が誘導された(気分誘導フェーズ)。続いて気分誘導フェーズで経験した出来事について考え続ける条件(ルミネーション条件)か、自分の通う大学の紹介スピーチを作成する条件(気晴らし条件)のどちらかをランダムで経験させた(リカバリーフェーズ)後、再度安静時の生理指標を測定した(安静フェーズ)。測定指標と解析：実験実施中は継続して心電図(測定後RR間隔データに変換)、連続血圧、皮膚電気抵抗の値を測定した。さらに自己記入式尺度として、各フェーズの終了時に怒り・イライラ感、抑うつ気分・不安(Depression and Anxiety Mood Scaleによる)の評価を行った。各気分得点および生理指標のフェーズによる変化およびそれらのリカバリー条件による違いを検討した。

【結果と考察】 RR間隔(フェーズ毎の平均値)、抑うつ得点、不安得点、怒り得点の各フェーズによる変化を確認したところ、ほぼ全ての参加者においてRR間隔は気分誘導フェーズで減少、リカバリーフェーズで増加し、抑うつ・怒り得点はその逆のパターンを示した。従って、RR間隔は怒り・イライラ感の同定に有効である可能性が考えられた。今後は心拍変動解析や血圧値・皮膚電気抵抗の解析、リカバリー条件による比較を行い、検討を進める予定である。

東京都の医療観察法指定通院医療機関の整備に関連する要因の調査

○菊池安希子¹⁾、長沼洋一²⁾、三澤孝夫³⁾、福田敬⁴⁾、
安藤久美子¹⁾ 岡田幸之¹⁾

1) 司法精神医学研究部 2) 東海大学健康科学部社会福祉学科 3) 国立精神・神経医療研究センター 4) 国立保健医療科学院研究情報支援研究センター

【目的】 医療観察法は対象者の社会復帰を目的とした制度であり、地域処遇中の医療を提供する指定通院医療機関(以下、指定通院機関)の整備は重要課題である。東京都においては指定通院機関の数の少なさ、及び、地域偏在が課題となっている。医療機関が指定通院機関の指定を受けると考えられるため、その実態把握を目的としたアンケート調査を実施した。

【方法】 対象：東京都の指定通院機関(平成24年7月1日現在19ヶ所)及び、人員配置の観点から、今後、指定通院機関の候補となりうる非指定通院機関(都立病院、東京都の指定病院、スーパー救急病棟を持つ病院、精神科二次救急指定医療機関)の常勤精神保健指定医を対象とした。**調査手続き**：対象となる指定通院機関(19機関)及び非指定通院機関(26機関)の計45機関のうち、病院長より同意の得られた機関の常勤精神保健指定医に対し、無記名自記式質問紙調査を実施した。調査は医療観察法地域処遇体制整備構築事業の一部として、国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会の承認を得て実施された。

【結果と考察】33機関より調査の同意が得られ、調査票の回収率は77.9%であった。指定が増えない要因としては、「周辺地域住民の理解が得られない」「バックベットの決まらない(そのため診療所が指定を受けられない)」に賛成する者が多かった。指定通院機関、非指定通院機関の比較では、「診療報酬の低さ」「書類作成に時間がかかる」等が共通認識である一方、非指定通院機関の方が「対象者のリスクマネジメントの必要性」を強く意識し、指定通院機関では、「院内の多職種連携が活発になる」「地域他機関と連携して手厚い医療が出来る」ことをメリットとして捉えていた。

バックベットの整備等への取り組みだけでなく、「診療報酬の低さ」や「対象者の他害リスク」など、デメリットの過大評価が示唆される内容については、実態を関係機関に周知することが、指定通院機関のさらなる整備の一助となると考えられた。

医療観察法入院処遇期間の経年的変化と転院の影響

○河野稔明¹⁾、菊池安希子¹⁾、長沼洋一²⁾、岡田幸之¹⁾

1) 司法精神医学研究部 2) 東海大学 健康科学部 社会福祉学科

【目的】医療観察法の施行から 8 年半が経過し、指定入院医療機関は 30 病院 768 床まで整備が進んだ。病床不足などに伴う当初の混乱は影を潜めたものの、通院先確保の難渋や長期在院患者の蓄積が問題となってきている。また、病床整備が進んだ時期は多数の転院が発生したが、転院した対象者では通算の在院期間が延長することが指摘されている。本研究では、在院期間の経年的変化と、それに対する転院の影響を検討した。

【方法】2011～2012 年に全国の指定入院医療機関 26 病院（当時の全数）を訪問し、調査時点までに入院した全対象者のデータを、個人情報削除した上で収集した。転院した対象者については名寄せした上でデータベース化した。以下、法施行月日を期首とする集計年度を、X 年度=X 年 7 月 15 日～(X+1) 年 7 月 14 日と定義する。分析対象は、2005～2009 年度に入院した対象者のうち、入院の翌年度末までに死亡、抗告、別件逮捕などで退院した者を除く 1,067 名とした。まず、入院年度を因子（5 水準）として、 Kaplan-Meier 生存分析により在院期間の差異を分析した。次に、転院歴の有無を因子（2 水準）として同様に分析した。最後に、入院年度を因子、転院歴をストロークタとして同様に分析した。年度間で条件を揃えるため、退院および転院の発生については各年度とも翌年度末で観察を打ち切った。入院年度別の対象者数に占める、翌年度末までに転院した者の割合は、順に、12%（17/143）、28%（64/227）、26%（67/254）、14%（31/228）、20%（43/215）であった。

【結果】入院年度別の在院期間は、2005 年度から順に推定平均値で 496 日、591 日、601 日、615 日、678 日となり、ログランク検定では 5%水準で 2005 年度＜2006～2008 年度＜2009 年度と経年的に有意に長期化した。転院歴の有無別の在院期間は、同じく有りが 671 日、無しが 592 日となり、転院歴があると在院期間が有意に長かった。転院歴の有無ごとに入院年度別の在院期間をみると、有り群では入院年度順に 585 日、659 日、651 日、662 日、708 日となり、年度間での有意差はなかった。無し群では入院年度順に 480 日、564 日、584 日、606 日、669 日となり、2006～2007、2007～2008 を除く全ての年度間で有意差があった。

【考察】本研究では退院および転院の観察期間が最短 1 年、最長 2 年と短く、生存分析で観察開始後に発生する転院を説明変数としているため、結果は慎重に解釈しなければならない。しかし、医療観察法入院処遇対象者の在院期間は確かに経年的に長期化しており、また転院歴を有する場合は長くなることが再確認された。これまで、在院期間の経年的な長期化は転院の多さに伴うものである可能性も考え得たが、転院歴を有する割合は在院期間とは異なる経年的変化をし、また在院期間の経年的な長期化は転院歴を有しない対象者でのみ観察されたことから、在院期間の経年的変化には転院以外の要因が関係していることが示唆される。対象者の早期社会復帰と医療資源の効率的運用には、十分な治療を確保した上での在院期間短縮が望ましく、在院期間が長くなってきている要因を探索することが今後の課題である。

Go/Nogo 課題から見た行動抑制系/行動賦活系における事象関連電位の特徴

○津村秀樹¹⁾、安藤久美子¹⁾、中澤佳奈子¹⁾、野田隆政²⁾、岡田幸之¹⁾

1) 司法精神医学研究部 2) 国立精神・神経医療研究センター病院

【背景】衝動的行動は情動を喚起する状況で生じられやすいことから、Brown ら(2012)は情動刺激を組み合わせた Go/Nogo 課題遂行時の脳活動を fMRI を用いて検討した。しかし、fMRI では時間分解能に限界があるため、衝動的行動を構成するコンフリクトモニタリングから反応抑制に至るまでの過程を個別に評価することは難しいことが指摘されていた。そこで本研究では、より時間分解能の高い事象関連電位 (ERP) を用いることにより、衝動的行動の成分を経時的に分析するとともに自己評価尺度による衝動性との関連についても検討した。

【方法】実験参加者 17 名（男性 6 名、女性 11 名、平均年齢 38.5、SD = 3.5）。

測定測定 BIS/BAS（行動抑制系/行動賦活系）尺度日本語版（高橋ら、2007）

ERP 記録 国際 10-20%法に基づき、頭皮上 11 箇所から記録した。

実験課題 Go/Nogo 課題の Go/Nogo 信号の提示時に、視覚的背景刺激としてネガティブ、またはニューラルな画像 (International Affective Picture System (IAPS)、Lang et al. (2008)) を対提示した。全試行数を 300 試行とし、Go 試行と Nogo 試行の試行数の比率は 7:3 とした。倫理的配慮 本研究は、当センターにおける倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】Go/Nogo 課題における P2、N2、P3 振幅 ネガティブな刺激を提示した場合に、ニューラルな刺激と比較して、P2、N2、P3 振幅値が大きかった (P2: $F(1,16) = 55.12, p < .01$ 、N2: $F(1,16) = 6.26, p < .05$ 、P3: $F(1,16) = 6.92, p < .05$)。また、Nogo 試行では、Go 試行と比較して、P3 振幅値が大きかった ($F(1,16) = 14.49, p < .01$)。

BIS/BAS と P2、N2、P3 振幅の関連 BIS 尺度得点とニューラル刺激の提示時の P2、およびネガティブ刺激の提示時の Nogo 試行における P3 振幅値の間に有意な負の相関が見られた (P2: $r = -0.52, p < .05$ 、P3: $r = -0.49, p < .05$)。BAS 尺度得点とニューラル刺激の提示時の N2 振幅値の間に有意な正の相関が見られた ($r = 0.49, p < .05$)。

【考察】罰に対する行動抑制を示すとされる BIS 尺度得点が高いほど、ニューラル刺激時の P2 振幅、ネガティブ刺激時の P3 振幅が大きかったことから、刺激に対して過度な不安を抑制できないことや、ネガティブ刺激に影響されて広く注意を向けられないことが、罰を回避して合理的な対処行動を選択することを困難にしている可能性が示唆された。一方、報酬に対する接近行動を示す BAS 尺度得点が高いほど、ニューラル刺激提示時の N2 振幅が大きかったことから、報酬を目的にした際に非合理的な手段を抑制できなくなることが、絡的な行動につながる一因である可能性が示唆された。

重い精神障害をもつ者に対する

認知機能リハと援助付き雇用の組み合わせによる就労支援

○佐藤さやか¹⁾、山口創生、下平美智代、市川健、
種田綾乃、古家美徳、吉田光爾、伊藤順一郎

【背景】

本研究の目的は認知機能リハビリテーションと「日本版援助付き雇用モデル」による就労支援を包括的な1つの支援技法ととらえ、これと従来行われている仲介型就労支援との比較を行うことであった。

【方法】

- 1) 対象者と研究デザイン：①外来通院中、②主診断が統合失調症、双極性障害、大うつ病、③年齢が20-45歳、④研究開始時に就労を希望、⑤一定の認知機能障害有りの条件を満たすものを対象とし、RCTデザインで介入群と対照群を比較
- 2) 介入内容：①介入群：認知機能リハおよび援助付き雇用モデルによる就労支援を実施、②対照群：仲介型就労支援のみを実施
- 3) 評価：①症状・機能評価：PANSS、GAF、LASMI、BACS-J、ワークサンプル幕張版「数値チェック」「ナブキン折り」等、②自記式調査：生活時間の構成（国民生活基礎調査をもとに質問紙を構成した）、就労に対する動機付け尺度等、③就労アウトカム：就労支援開始後1年間の就労率および就労日数

【結果】

認知機能リハ前後の群間比較では精神症状や全般的機能について交互作用はなかったが、認知機能については思考の柔軟性を評価する流暢性課題、作業記憶や処理速度の複合的な能力を評価する符号課題、全般的な認知機能を示す総合得点において交互作用に有意差があった。さらに作業能力を評価する課題である、ワークサンプル幕張版「ナブキン折り」課題の正答数についても両群間の交互作用に有意差があった。また就労支援開始後1年間の就労率について χ^2 検定を実施した結果、介入群は対照群と比べて就労したものの数が有意に多かった（介入群：57.4%、対照群が23.4%、 $\chi^2=11.308$ 、 $p<0.01$ ）。

【考察】

本研究によって認知機能リハと援助付き雇用モデルの組み合わせによる支援が認知機能、作業課題、就労アウトカムに良い影響を及ぼし、就労を見すえた支援法として有望であることが示唆された。今後は包括的な支援のどの部分がより就労に影響を与えたのかを検討することが課題である。

精神障害者に対する援助付き雇用における利用者の被支援量：

サービスマ・コード票分析の途中経過報告

○山口創生¹⁾、佐藤さやか¹⁾、下平美智代¹⁾、市川健¹⁾、種田綾乃¹⁾、
吉田光爾¹⁾、坂田増弘²⁾、伊藤順一郎¹⁾

1) 社会復帰部 2) 国立精神・神経医療研究センター病院

【背景】精神障害者に対する効果的な就労支援の技法として、援助付き雇用が国際的な関心を集めている。本研究はサービスマ・コード票を用いて、援助付き雇用を利用する参加者の就労前の被支援内容を分析し、就労に関係する状態や支援内容を把握することを目的とした。

【方法】本研究の分析対象は、認知機能リハビリテーションと援助付き雇用の効果測定を目的としたRCTの参加者のうち、12カ月の追跡が可能であった26名であった（脱落率：18.8%）。国内6サイトで認知リハと援助付き雇用を実施し、各サイトのスタッフが研究参加者に対して行った支援について、サービスマ・コード票に記録した。サービスマ・コード票の支援内容は、①「個別就労支援関連」、②「個別生活支援関連」、③「プログラム」などの約20項目を設けた。各参加者の被支援時間は、スタッフ1人が参加者1人に費やした時間を把握するために、「1対1換算の被支援提供時間（＝実支援提供時間÷利用者人数×スタッフ人数）」を算出した。各参加者が研究期間における最初の就職前に受けた1対1換算の被支援時間を、就職までに要した月数で割り、1ヵ月あたりの被支援時間を算出した。12ヵ月間で就職した人（就労群）と就職していない人（未就労群）の1ヵ月あたりの被支援時間を比較し、さらにロバスト・ロジスティック回帰分析を実施し、関係する要因や支援を模索した。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を受けている（No.A2011-024）。

【結果】12ヵ月間に未就労群（ $n=9$ ）と比較し、就労群（ $n=17$ ）は、①「個別就労支援関連」（就職群：中央値=392分、未就職群：69分、 $p<0.001$ ）、②「個別生活支援関連」（就職群：99分、未就職群：8分、 $p=0.043$ ）における1ヵ月あたりの1対1換算の被支援時間が有意に多く、③「プログラム」（就職群：20分、未就職群：5分）には大きな差がなかった。ロジスティック回帰分析の結果から、就労と関係していたのは、個別就労支援関連における長い被支援時間（ $OR=1.06$ 、 $p<0.001$ ）と、GAFが高いこと（ $OR=1.15$ 、 $p=0.002$ ）であった。

【考察】本研究における、精神障害者に対する就労支援における就職前の被支援量の目安は、1対1換算の支援提供時間で1ヵ月あたり個別就労関連が6.5時間（392分）、生活支援は1.5時間（99分）であった。個別就労支援と機能の低い利用者への支援を充実させる必要があると示唆された。

Delphi 法を用いたエキスパートコンセンサスによる 犯罪被害者の急性期心理社会支援ガイドラインの開発

○中島聡美¹⁾、鈴木友理子¹⁾、成澤知美^{1,2,3)}、
浅野敬子^{1,4)}、深澤舞子¹⁾、金吉晴¹⁾

1) 成人精神保健研究部 2) 大阪大学大学院人間科学研究科 3) トランスレーション・メ
ディカルセンター 4) 武蔵野大学大学院人間社会研究科

【背景】 犯罪被害者では、PTSD などの精神障害の有病率が高いことが報告されており、被害直後からの予防的・治療的介入が期待されている。しかしこのような急性期での介入の効果についての十分なエビデンスは乏しいため、急性期の被害者支援について明確な指針はない。近年、災害など集団的被害の急性期支援については TENTS guideline(Bisson et al., 2010)、災害時精神保健医療ガイドライン(案)(Suzuki et al., 2011)などの系統的意見集約法として Delphi 法を用いたエキスパートコンセンサスによるガイドラインが開発されている。Delphi 法は、十分なエビデンスを得ることが困難な領域において経験的知識を反映させる上で有用な方法と考えられていることから、この手法を用いて犯罪被害者への急性期心理社会支援ガイドラインの開発を行い、更に災害時の急性期介入との同異を明らかにするため、TENTS guideline 及び災害時精神保健医療ガイドライン(案)との比較を行った。

【方法】 既存の研究・資料の分析および被害者支援に精通した専門家等のフォーカスグループによって 124 項目のガイドライン案を作成した。民間被害者支援団体支援員、精神保健専門家、当事者等 89 名を対象に Web 上で 3 回の意見集約を行った。第 1 ラウンドでは、各項目の適切性について 9 段階 (1: 非常に不適切-9: 非常に適切) で回答を求めた。平均点が 7 点以上かつ 7 点以上とした回答者の割合が 70%以上であった項目を肯定的合意が得られたと見なし、7 点以上の回答者が 30%未満かつ平均得点が 4 点未満のものを否定的合意が得られたとした。第 2、3 ラウンドでは、合意が得られなかった項目および自由記述を考慮して修正を行った項目について再度回答を求めた。

【結果】 86 人から回答があった (応答率 96.6%)。追加 4 項目を含む 128 項目のうち 120 項目 (92.2%) で合意が得られた。被害者に安心感を与えること、付添や情報提供など被害者の具体的なニーズに即した支援の提供について肯定的合意が得られた。「心理的デブリーフィング」については否定的合意が得られた。これらの結果は、既存の実証研究や災害時のガイドラインと一致していた。一方、「支援者が広く問題に対応する」(非合意)、「包括的アセスメントの実施」(合意)、「被害者への感情表出の支援」(合意)の 3 項目については、災害時精神保健医療ガイドライン(案)と異なる結果が得られた。

【考察】 急性期の被害者支援について、系統的手法により日本の犯罪被害者支援の現場に即したエキスパートコンセンサスが得られたと考えられる。非侵襲的かつ具体的ニーズに即した支援が重要であることは、災害時ガイドラインと共通しているが、犯罪被害者の支援では、精神的混乱の著しい被害者に対しての対応や、刑事司法についての情報提供等より専門性の高い支援も急性期に必要であることが示唆された。

参考：犯罪被害者に対する急性期心理社会支援ガイドライン <http://cocorocare.jp/c/guide/line/>

被災地の県職員の精神的不調と業務との関連

一 東日本大震災から 2 か月後に行われた健康調査の結果より一

○深澤舞子¹⁾、鈴木友理子¹⁾、小原聡子²⁾、金吉晴¹⁾
1) 成人精神保健研究部 2) 宮城県精神保健福祉センター

【背景】 大規模な災害が発生した場合、被災地の公務員は自ら被災者となるとともに、災害対応のために急増する業務、不慣れた業務を担うこととなり、このような多大な負荷は精神的な不調にもつながりうるかと考えられる。平成 23 年に発生した東日本大震災の被災地である宮城県の県職員の健康調査の結果を分析することで、被災後の業務の状況が精神健康に与える影響について検討し、職員の精神健康を守るうえで役立つ可能性のある組織的な対応について示唆を得ることを目的とした。

【方法】 東日本大震災の発生から 2 か月後に、宮城県において全職員を対象とした自記式の健康調査が実施され、4,331 (82.8%) 名から回答が得られた。精神健康の指標として K6 が用いられ、業務の状況として、災害関連業務への従事(有無、種類)、過重労働(長時間労働、休日の有無)、職場の環境(コミュニケーションがとれているか)などについて尋ねられた。被災規模(家の被害、家族の死亡・行方不明、避難所生活)にて層化し、性別、年齢、勤務地(沿岸部、内陸部)を調整したうえで、精神的な不調(K6≥13)と業務の状況との関連を検討した。

【結果】 精神的な不調の割合は、被災規模が大きかった職員で 5.9%、小さかった職員で 3.0%であった。被災規模が大きかった職員においては、月 100 時間を超える時間外労働(adjusted odds ratio [OR]: 2.06, 95% confidence interval [CI]: 1.11-3.82)と、職場内のコミュニケーションの不良(adjusted OR: 10.96, 95% CI: 6.63-18.09)が、精神的な不調のリスクを高めていた。被災規模が大きかった職員では、被災者の苦情処理への従事(adjusted OR: 4.79, 95% CI: 1.55-14.82)と職場内のコミュニケーションの不良(adjusted OR: 9.14, 95% CI: 3.34-24.97)が精神的な不調のリスクを高めていた一方で、災害関連業務への従事は、精神健康に対して保護的に働いていた(adjusted OR: 0.39, 95% CI: 0.18-0.86)。

【考察】 あまり被災の大きくなかった職員については、時間外労働を減らすような労務上の調整が、被災の大きかった職員については、災害関連業務に従事しつつ住民との接触は避けることのできるような調整が、職員の精神健康を守るうえで有効ではないかと考えられた。また、職場内のコミュニケーションを良好にしておくことは、被災規模に関わらず、重要であると考えられた。

身体部位の自己所有感覚における COMT 遺伝子多型の影響

○池田大樹、本間元康、栗山健一、吉池卓也、金吉晴

【背景・目的】身体部位の自己所有感覚は幼少期からの繰り返しの学習により成熟し、かつ成熟後も道具使用技能の獲得等の可塑性を伴うことで、環境適応能力の一端を担っている。こうした神経可塑性の背景にはドパミン神経系が関与しており、中脳辺縁系や前頭葉を中心とするドパミン神経系の障害であると推測される統合失調症では、身体部位の自己所有感覚の異常が指摘されている。Catechol-O-methyltransferase (COMT)はドパミン等のカテコロールアミン神経伝達物質の分解酵素であり、COMT 遺伝子 158 番アミノ酸配列の置換(rs4680)によるハプロタイプ[Val(Val)型-メチオオニン(Met)型-Vai/Met-ヘテロ型]は神経伝達物質の不活化速度に影響を与え、統合失調症患者の認知機能はこの COMT 遺伝子多型の影響を受け、精神症状の多様性への影響が推測されている。身体部位の自己所有感覚は統合失調症における自我障害の病理への関与が推測されるが、COMT 遺伝子多型と自己所有感覚との関係は明らかにされていない。本研究は、自己所有感覚の可塑性の定量調査手法であるラバーハンディリュージュオン (RHI) パラダイムを用い検討した。

【方法】健康成人 76 名 (平均年齢 21.0 ± 1.32 歳, 女性 32 名) が研究に参加した。COMT (Val158Met) 遺伝子多型分析の為に、全参加者より唾液サンプルを採取した。机の上に置いた参加者の左手 (Own Hand: OH) の上から蔽いを被せ、参加者から見えないうちに、OH から右方 30 cm 離れた位置に右手型のゴム製の手 (Rubber Hand: RH) を置き、OH と RH の中間よりやや参加者寄りの位置に鏡を設置した。これにより、参加者は本来の OH より約 10cm 自身寄りの位置にある鏡に映った RH のみが視認できる状態を作った。参加者が鏡に映った RH を注視する間、OH と RH の両方同時に触覚刺激を、5 分間平均 2000 ms 間隔で繰り返した。刺激を 5 分間与える前後に、蔽いで隠された OH の各指的位置と、RH に対する主観的自己所有感覚を測定した。OH の第三指の位置を机の裏から示すことで位置覚を定量測定し、Visual Analog Scale を用いて自己所有感覚を定量測定した。刺激提示前後の差分(後-前)を RHI の変化量として算出した。

【結果】 Real-time QP-PCR 法を用い唾液サンプルより COMT 遺伝子多型を分析し、Val/Met 型 (40 名, 女性 15 名)、Val/Met 型 (26 名, 女性 13 名)、Met/Met 型 (10 名, 女性 4 名) を抽出した。全参加者における位置覚と自己所有感覚の変化量に有意な相関関係が認められた ($r = 0.539, p < 0.001$)。一要因分散分析の結果、COMT 遺伝子多型の主効果は位置覚の変化量 ($F_{2,75} = 5.21, p = 0.008$) および自己所有感覚の変化量 ($F_{2,75} = 6.74, p = 0.002$) で認められた。下位検定の結果、位置覚と自己所有感覚はともに、Val/Met 型の COMT 遺伝子多型を示す参加者が Met/Met 型および Val/Met 型を示す参加者よりも有意に大きな変化量を示した ($all p < 0.05$)。

【考察】 Val ホモ型遺伝子保有者は他の Met ホモ・ヘテロ型遺伝子保有者よりも、自己所有感覚における高い可塑性を示した。Val ホモ型遺伝子保有者は短空間位置情報の矛盾する仮想現実環境に適合する能力に長けており、手術支援ロボット(ダビンチ)の操縦等の習得に必要な特性がより優れていると考えられる一方、統合失調症患者で分布率が一般人口よりも高いことが報告されており、自己所有感覚の可塑性が統合失調症のリスク要因、もしくは修飾要因となる可能性が示唆される。

精神科病医療機関における脱法ドラッグ関連患者の臨床的特徴

○松本俊彦¹⁾、立森久照²⁾、谷淵由布子³⁾、高野歩^{1,4)}、和田清¹⁾

1) 薬物依存研究部 2) 精神保健計画研究部 3) 千葉病院
4) 東京大学大学院医学系研究科精神看護学専攻

【目的・背景】脱法ドラッグ関連障害 (designers drugs-related disorder; DDRD) 患者の臨床的特徴を、覚せい剤関連障害 (methamphetamine-related disorder; MARD) 患者および睡眠薬・抗不安薬関連障害 (hypnotics/anxiolytics-related disorder; HARD) 患者との比較を通じて明らかにすること、ならびに、脱法ドラッグの製品形状による患者の臨床的特徴の違いを明らかにすることである。

【方法】2012 年「全国精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」のデータベースから、DDRDR 患者 126 例、MARD 患者 138 例、HARD 患者 87 例の情報を抽出し、DDRDR 患者の臨床的特徴を、MARD 患者と HARD 患者と比較した。主たる薬物が「脱法ドラッグ」である者(「脱法ドラッグ」関連障害症例) 138 例を抽出した。さらに、DDRDR 患者を、「脱法ドラッグ」の乱用様態が「主として『脱法ハーブ』を乱用」(ハーブ群)、「主として粉末状ないしは液体状製品を乱用」(非ハーブ群)、「いずれも乱用」(混合群)に分類し、その精神症状と使用動機を比較した。

【結果】多変量解析の結果、MARD 群と DDRDR 群との弁別に有意に影響する独立変数は、年齢 ($P < 0.001$): 1.17 [1.11-1.22]、性別 ($P < 0.001$): 0.08 [0.03-0.23]、学歴 ($P = 0.001$): 3.66 [1.71-7.85]、暴力団との関係 ($P < 0.001$): 10.22 [3.88-26.95]、Fix.1 有害な使用 ($P = 0.004$): 0.11 [0.02-0.48]、Fix.5 精神病性障害 ($P = 0.044$): 0.44 [0.20-0.98] であった。一方、HARD 群と DDRDR 群との弁別に有意に影響する独立変数は、年齢 ($P < 0.001$): 1.15 [1.08-1.22]、性別 ($P < 0.001$): 0.05 [0.02-0.17]、薬物使用の理由/誘われて・断り切れずに ($P = 0.044$): 0.04 [0.00-0.92]、薬物使用の理由/刺激を求めて ($P = 0.001$): 0.07 [0.02-0.37]、薬物使用の理由/不安の軽減 ($P = 0.013$): 3.86 [1.32-11.28]、薬物使用の理由/不眠の軽減 ($P = 0.013$): 11.20 [2.53-49.58]、Fix.5 精神病性障害 ($P = 0.001$): 0.05 [0.01-0.27] であった。また、ハーブ群、非ハーブ群、混合群のあいだで年齢と性別に差が認められず、また、F1 診断下位分類にも差が認められなかった。しかしその一方で、使用動機に関して、非ハーブ群、混合群で「覚醒効果を求めて」($P = 0.018$)、「性感を高めるために」($P = 0.032$)、また、混合群で「刺激を求めて・好奇心から」($P = 0.016$) という理由が多く認められた。

【結論】DDRDR 患者は MARD 患者および HARD 患者に比べて若年かつ男性に多く、生活背景については HARD 患者との共通していた一方で、薬物使用の理由はむしろ MARD 患者との共通していた。また、DDRDR 患者は、MARD 患者よりも ICD-10 F1 診断における精神病性障害と有害な使用に該当する者が多く、脱法ドラッグの強力な精神病惹起危険性および有害性が推測された。なお、脱法ドラッグの製品形状による精神症状には差が認められなかった。しかし、使用動機に違いはどうかの相違が認められたことから、乱用者が使用に際して期待する効果に違いがあり、薬理効果の違いを反映している可能性が示唆された。

クラブイベント来場者における形状別にみた 脱法ドラッグの使用パターンと使用に伴う主観的症狀について

○嶋根卓也¹⁾、和田清¹⁾、日高庸晴²⁾、船田正彦¹⁾

1) 薬物依存研究部 2) 宝塚大学看護学部

【背景・目的】脱法ドラッグ関連問題に関する知見は、精神科臨床や救急救命からの報告が蓄積されつつある一方で、未だ医務的に事例化していない地域に若者における脱法ドラッグの乱用状況については、十分な知見が得られていない。クラブとは音楽に合わせて客にダンスをさせ、飲食物を提供する店舗であり、多くの若者が集まる繁華街のスポットとして、各地で様々な音楽ジャンルのイベントが連日連夜開催されている。クラブ利用者層におけるMDMA等の薬物使用率は、一般人口に比べてはるかに高く、多剤乱用による健康被害が多いことが報告されていることから(Shimane T et al, 2013)、クラブ利用者層は未だ医療につなげていない脱法ドラッグ使用者を数多く含む可能性がある。そこで本研究では、クラブイベント来場者の脱法ドラッグの使用パターンおよび使用に伴う主観的症狀を脱法ドラッグの形状別に検討することを目的とした。

【方法】東京都内で開催された計4回のイベントで、質問票をインストールしたノート型パソコンを用いた自記式調査を実施し、307名(平均年齢31歳、女性44%)より有効回答を得た(回収率52.3%)。脱法ドラッグは形状別(ハーブ系、パウダー系、リキッド系)の写真をモニターに表示させ、それぞれの使用履歴や使用パターンについて尋ねた。また、使用に伴う主観的症狀については、合成カンナビノイドに関する先行研究(Vandrey R et al, 2012)で用いられた症状(17項目)を専門家の監督下で日本語化し、経験した症状の有無を尋ねた。本調査は無記名であり、個人が特定される質問項目は含まれない。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た。

【結果】脱法ドラッグの生涯経験率は、ハーブ系22.8%、パウダー系7.2%、リキッド系3.3%であった。リキッド系使用群は非使用群に比べ、「恋人・パートナーと2人で使った」という回答が有意に高いが($p=0.048$)、ハーブ系使用群($p=0.586$)や、パウダー系使用群($p=0.163$)では有意差は認められなかった。また、リキッド系使用群は非使用群に比べ、「ホテル・ラブホテル($P=0.001$)」、「車内($p=0.002$)」で使用している割合が有意に高く、パウダー系でも同様の傾向が認められた。一方、脱法ドラッグ使用に伴う主観的症狀は、リキッド系使用群において、「活動的、興奮的($p=0.002$)」、「口渇($p=0.041$)」、「心拍数増加($p=0.003$)」、「神経過敏($p=0.003$)」、「妄想やこだわり($p=0.005$)」といった症状が有意に高く報告されたが、パウダー系使用群やハーブ系使用群では群間に有意な差が認められなかった。

【考察】リキッド系使用群の使用パターンを踏まえると、性交時の快感を高めるための、いわゆる「セックスドラッグ」として使用されていることが示唆される。先行研究では、脱法ドラッグ使用者はコンドーム使用率が低く、無防備なセックスにつながるやすいという指摘もあることから、HIV感染をはじめとする性感染症のリスクが高まる可能性がある。また、リキッド系使用群において中枢神経刺激作用を疑わせる主観的症狀が顕著にみられることから、リキッド系脱法ドラッグにはカチナノン系化合物等の興奮物質が含まれていた可能性がある。

薬物依存症者に対する認知行動療法プログラムの における脱法薬物患者の臨床的特徴

○引土絵未、松本俊彦、和田清、今村扶美、谷渕由布子、高野歩

【背景】近年、いわゆる「脱法薬物」の乱用が拡大しているが、脱法薬物乱用者の心理社会的・精神医学的特徴については不明な点が多いままである。これまでに、我々は薬物依存症外来を初診した脱法薬物乱用・依存症者を対象とし、脱法薬物患者の臨床的特徴について覚せい剤患者との比較を通じて明らかにしてきた。本研究の目的は、脱法薬物患者の臨床的特徴として、当院で実施する薬物依存症者に対する認知行動療法プログラム(SMARPP)への参加を通じた変化について明らかにすることにある。

【方法】対象者は、2012年5月から2013年5月の期間に当院SMARPPに参加し、最も主要な乱用物質が脱法ドラッグである者(「脱法薬物群」とし、対照群として、上記期間内に当院SMARPPに参加し、最も主要な乱用物質が覚せい剤である者とした(「覚せい剤群」))。効果測定にあたっては、プログラム導入時点と終了直後の2つの時点で自記式評価尺度を実施し、プログラム前後の変化について2群間比較をおこなった。

【結果】プログラムを通して、「具体的な場面で薬物を使用しない自信」を高めたことが認められたが、脱法ドラッグ群より覚せい剤群の方がより有効であることが示唆された。また、「治療への動機付け」については、プログラム前後で覚せい剤群が上昇したのに対し脱法ドラッグ群はやや下降していたことが示された。

【考察】参加率や自己申告薬物使用・飲酒頻度については2群間に差異は見られず、治療反応性に目立った差異は認められなかったが、「治療への動機付け」については脱法ドラッグ乱用者に有効に機能していないことが示唆された。

これらを受け、今後、脱法ドラッグに焦点をあてたプログラム導入を検討すると同時に、更なるデータの蓄積による検証を実施していく。脱法ドラッグ群と覚せい剤群の比較として、自己効力感や動機付けの変化をアウトカムとしたが、非薬物使用頻度や非飲酒頻度の推移をアウトカムとした検証により2群間比較を実施することが求められる。さらに、脱法ドラッグ群には最頻使用薬物が覚せい剤から脱法ドラッグへと移行した者も含まれており、これらが結果へと影響を与えている点も考慮し、移行群、脱法ドラッグ群、覚せい剤群と対象を設定し検証することが必要となる。

ベイジアンモデル選択による時間的による通常と異なるパターンの検出
法を用いた精神病床からの退院件数の推移が異なる地域の検討

○立森久照¹⁾、加藤直広^{1,2)}、伊庭幸人^{1,3)}、白田謙太郎¹⁾、後藤基行¹⁾
下田陽樹¹⁾、楠本英子^{1,4)}、竹正正¹⁾

- 1) 精神保健計画研究部 2) 電気通信大学産官連携センター 3) 統計数理研究所モデリング研究系
- 4) 総合研究大学院大学複合科学研究科

小地域データの時空間モデリングにおいて、時間的に通常（他の地域）と異なるパターン（unusual temporal patterns）の地域を検出することに関心がある場合がある。例えば政策評価の領域では、ある施策によって現状を特定の方向に変化させることを目的とした場合に、全体として意図した方向に変化しているかだけではなく、小地域でそうした変化が起こっていない地域を特定したいことがよくある。そうした場合に適用可能な方法の一つに Liら（2011）の提案した BaySTDetect がある。これはベイジアンモデル選択による時間的に通常とは異なるパターンの検出法である。観測データがカウンタデータかつ関心の事象の発生が希である場合に、通常ポアソン分布によるモデルを仮定することが多い。つまり、地域 i の時間 t における観測数を $y_{i,t}$ 、相対リスクを $\mu_{i,t}$ とした場合に

$$y_{i,t} \sim \text{Poisson}(\mu_{i,t} \times E_{i,t}) \text{ with } i = 1, \dots, N \text{ and } t = 1, \dots, T$$

とするモデルを考える。更に時間的に全体のトレンドと異なる地域を検出するために、相対リスク $\mu_{i,t}$ について次の二つの異なるモデルを提案する。

$$\text{モデル 1: } \log(\mu_{i,t}^{(c)}) = \alpha_0 + \eta_i + \gamma_t, \text{ モデル 2: } \log(\mu_{i,t}^{(AS)}) = u_i + \xi_{i,t}$$

モデル 1 の η_i は空間成分、 γ_t は時間成分で、 γ の添え字に i が無いので時間的なトレンドは全体で等しい。一方モデル 2 の u_i は地域固有の切片、 $\xi_{i,t}$ は地域固有のトレンドを示す。モデル 2 は時間的なトレンドが地域で異なるモデルである。その上で 0 と 1 の二値変数 z_i を導入し、

$$\mu_{i,t} = z_i \times \mu_{i,t}^{(c)} + (1 - z_i) \times \mu_{i,t}^{(AS)}$$

とする。モデル 1 が選ばれる事後確率 $P(z_i = 1 | \text{data})$ が小さい場合は、地域は全体のトレンド γ に従っている可能性が低いとみなせる。我々は BaySTDetect を応用して、精神病床から発生する退院件数の推移が他の県と異なる県の検出を試みた。使用したデータは精神保健福祉資料による県ごとの 6 月中の退院の発生件数である。解析には R 3.0.2 と WinBUGS 1.4.3 を用いた。その結果、ほとんどの県の z_i の事後確率は十分に大きな値を示した。現在は施策として退院を促進しており、全国の退院件数の推移は増加傾向を示している。本結果から各県で退院促進が進んでいることが示された。

被災者における K6 尺度への回答傾向および得点分布の特徴：
被災地データおよび一般国民データの二次解析による比較

○下田陽樹^{1,2)}、川上憲人²⁾、土屋政雄³⁾、岩田昇⁴⁾
1) 精神保健計画研究部 2) 東京大学大学院医学系研究科精神保健科学分野
3) 独立行政法人労働安全衛生総合研究所作業条件適応研究グループ
4) 広島国際大学心理学部臨床心理学科

【背景】自然災害時における心理的ストレス反応の測定は、その多くが自己記入式調査票によって実施されており、東日本大震災に際しても精神疾患のスクリーニング尺度である K6 を用いた測定が実施された。しかしながら自然災害時の非日常的状況では、尺度における対象者の回答パターンが平常時と異なっている可能性がある。

【方法】東日本大震災に被災した岩手県住民の調査データと、「健康と暮らし向き」についての調査データおよび平成 22 年国民生活基礎調査データの 2 つの全国調査データを利用して項目応答理論 (IRT) による解析を行い、K6 による心理的ストレスの評価が被災者と地域住民とで同等に行えるかどうかを検証した。岩手県被災者健診データ以外の 3 つのデータについては、性別（男女）、年齢層（20 代、30 代、40 代、50 代、60 代以上）の合計 10 の層ごとに、岩手県被災者健診データと性別、年齢層の構成比率が一致するように対象者を無作為に抽出し、解用データセットを作成した。

【結果】岩手県被災者健康診断を受診した住民においては、平成 22 年国民生活基礎調査の岩手県データ (9,446 名) および全国データ (374,673 名)、および健康と暮らし向きについての調査データ (1,211 名) と比較して、K6 の合計得点および各基準点および高得点者の割合が有意に高かった ($p < 0.01$)。位置パラメータについての IRT 分析の結果では、岩手県被災者データでは、いずれの項目についても「少しだけ」の回答が、潜在特性が低い段階から選択確率が増加する傾向が見られた。識別力パラメータは、質問 4 以外の項目で、岩手県被災者データにおいて低い傾向にあった。また岩手県震災後データでは、質問 4 を除いて情報関数の値が低かった。

【考察】岩手県における東日本大震災被災者における K6 の心理測定的特性が、一般住民のそれと異なっている可能性が示された。特に被災者では、「少しだけ」の回答選択肢に対応する軽度の症状の回答の増加が K6 の尺度得点を増加させ、また測定における精度を低下させている可能性が示された。

NCNP における歴史資料館開設準備計画

○後藤基行¹⁾、竹島正¹⁾、吉田光爾²⁾、有馬邦正³⁾

1) 精神保健計画研究部 2) 社会復帰研究部 3) センター病院

【背景】現在 NCNP では、精神・神経・筋疾患・発達障害患者のよりよい処遇と権利擁護、治療・研究の発展に資するため、歴史を振り返るとともに未来のあるべき姿を考える素材を提供することを目的として歴史資料館の開設準備が進められている。その中心である歴史資料館開設準備会(以下:準備会)は 2012 年 1 月に設置され、そのプロジェクトの一環として「センターの歴史的使命と貢献に関する実証的研究」を行っている。

【方法】NCNP に保管されている傷痍軍人武蔵療養所時代の診療録、精神衛生実態調査の原票等について、精神保健計画に関する研究の観点から、その史的意義を検討した。

【結果】現在の NCNP の敷地の起源は、1940 年に開設された傷痍軍人武蔵療養所である。傷痍軍人武蔵療養所は国府台病院等の軍病院では治癒せず症状の慢性化した傷痍軍人の受け入れ先であった。そして 1945 年の軍隊解体の後は、国立武蔵療養所としての医療活動を開始し、国立精神療養所として先駆的な役割を担ってきた。準備会の活動により、NCNP には傷痍軍人武蔵療養所時代の診療録の多くが今も保管されていることが確認された。

戦後わが国では、全国レベルのものとして、11 回の精神保健に関する実態調査が行われているが、このうち、1954 年と 1963 年に行われた精神衛生実態調査、56 年の在院精神障害者実態調査、ならびに 70 年代の精神病院実態調査の一部は、その原票が精神保健研究所に保管されていることを確認した。

このほか、準備会は NCNP の歴史年表をまとめているほか、NCNP の歴史に深くかかわった方々のインタビューを行っている。また、わが国の精神科医療がどのように発展してきたのかを示す歴史資料の保存実態を詳らかにし、資料保存の機運が高まることと目的として、全国の精神科病院を対象に歴史的資料・物品の保存実態に関する調査を行っている。

【考察】傷痍軍人武蔵療養所から国立武蔵療養所に至る歴史とそこに展開される医療活動は、戦後の国立精神療養所に限らず、全国の病院精神医療全体に与えた影響という観点からも研究される必要があるだろう。

また、戦後間もない時期に行われた各種の実態調査の中でも、精神衛生関連の調査はその回数や規模・内容において特筆すべきものである。これら実態調査は戦後の精神医療政策推進の実証的基盤であり、きわめて史料的高いものである。

今後 NCNP に保管されている各種史料を利用することで、戦時精神医療体制や武蔵療養所の実像、あるいは戦後の全国レベルでの実態調査の史的的研究が深まることが期待される。

精神科救急病棟における医療の質に関する予備的検討

○山之内芳雄¹⁾、佐藤真希子¹⁾、平田豊明²⁾、伊藤弘人¹⁾

1) 社会精神保健研究部 2) 千葉県精神科医療センター

【背景と目的】医療機関が一層の医療の質的向上を続けることに資するために、当研究部では精神科医療の質の相互評価を我が国において広げる活動をしている。相互評価に用いるクオリティインディケータータラ指標の有用性を確認する研究活動の一環として、精神科救急病棟を有する病院 12 病棟の 2013 年 5 月の在棟患者 515 例を対象に、基本属性(性・年齢)、入棟・退棟時の入院形態および GAF 得点・診断、在棟日数、非定型抗精神病薬 2 種以下の割合、隔離・拘束の有無、退棟・3ヶ月後の患者所在(入院・外来)を 2013 年 9 月に調査し、退棟 3ヶ月後の予後を予測する因子を、「外来かどうか」で 2 項ロジスティック解析した。

【方法と結果】データ欠損のある 91 例を除き、最終的に 424 例を解析した。R²=0.132、p value of Hosmer/Lemeshow =0.05 で、GAF の変化=1.0、拘束=2.2、措置入院=0.042、入院形態の開放化の 4 つが、3ヶ月後の予後に関連し、66%が予測可能であった。すなわち、GAF が大きく改善し、拘束をせず、はじめの入院形態が開放的で入院中に開放的にしたほど、3ヶ月後の予後は外来を維持できていると予測された。さらに、統合失調症患者のみで解析したところ、214 例で、R²=0.187、p value of Hosmer/Lemeshow =0.05 で、入棟時入院形態=0.13、GAF の変化=1.0、抗精神病薬 2 種以下=0.53、拘束=2.3 の 4 つが、3ヶ月後の予後に関連し、69.2%が予測可能であった。すなわち、はじめの入院形態が開放的で、GAF が大きく改善し、薬が少なく、拘束をしないほど、3ヶ月後の予後は外来を維持できていると予測された。

【考察】拘束に至らず、入院合意が容易な患者は、ともすると軽症な患者とも言えうだが、この解析の中で、隔離・初期の重症度・入院中の入院形態の開放的な変更・基本属性は、3ヶ月予後の予測因子には選択されなかった。初期の重症度に関わらず、入院合意を粘り強く説明し、拘束を最小化し、薬剤を整理した入院環境は、よりよい患者予後につながる可能性を見いだした。異なる対象での追試を行うことで、結果がより堅強なものになりうると考える。

スタッフによる攻撃性観察尺度 (SOAS-R) を用いた 攻撃的行動の性質および重症度に関する検討

○佐藤真希子¹⁾、野田寿恵^{1,2)}、杉山直也²⁾、吉浜文洋³⁾、伊藤弘人¹⁾

1) 社会精神保健研究部 2) 公益財団法人復康会招津中央病院

3) 日本精神科看護技術協会

【背景と目的】 隔離・身体拘束は患者の病態やその他の要因から患者・スタッフの安全を保全するために実施されることがある。当研究部では2006年より隔離・身体的拘束等の行動制限や精神科救急病棟における医療の質指標を測定し、グラフとして閲覧可能としたeCODOシステムを開発した。2013年10月からは、施設ごとに集計した隔離・身体拘束の施行状況を各施設と全施設との施行状況を比較検討することが可能となった。

行動制限最適化のためには、施行状況を可視化するシステム開発とともに、その隔離・身体拘束の施行要因を検討する必要がある。中でも精神科医療では患者による攻撃性インシデントの影響が先行研究において指摘されている。諸外国では、Brosset Violence Checklist (BVC) やスタッフの攻撃性観察尺度 (Staff Observation Aggression Scale-Revised, SOAS-R) を用いて精神科患者の攻撃性インシデントを評価する研究がなされている。特にSOAS-Rは客観的にインシデント状況を捉えることができ、かつその後の状況分析を行うことができる。患者の攻撃性は、スタッフの身体的・精神的側面に影響し、患者ケアなど医療の質に影響する可能性がある。そこでSOAS-Rを用いた患者の攻撃的行動の特性およびスタッフの攻撃的行動への把握し、重症度との関連について検討する。

【方法】 2012年8月～2013年1月を調査期間とし、参加協力のでられた22施設35精神科病棟において、入院患者の攻撃的行動を目標した看護師がSOAS-Rを記録し、加えて攻撃的行動の重症度を測る Visual Analogue Scale (VAS) を用いてそのインシデントの重症度を評価した。SOAS-Rは、攻撃的行動に関連する5つの列 (誘因、患者の用いた手段、攻撃対象、被害状況、攻撃的行動の制止法) で構成され0-22点で採点、点数が高いほど患者の攻撃性が高い。また重症度は0 (全・重症ではない) -100 mm (極めて重症である) で評価した。SOAS-R得点および重症度について、患者特性と報告した看護師の特性、および攻撃的行動の傾向を調べた。本調査は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会および各施設の倫理委員会の承認を経て実施した。

【結果】 回収されたSOAS-R調査票523件のうち、欠損値を除く481件を分析対象とした。攻撃性インシデントの発生率は1,000のべ病床あたり1.47件 (0.54/bed/year) であった。攻撃的行動を起こした入院患者の特性は、男性が60.3%、平均年齢は50.3才 (SD = 18.2)、ICD-10に基づく主診断ではF2 (統合失調症) が58.3%と最も多かった。調査票を記入した看護師の特性は、男性が50.7%、平均年齢は37.1才 (SD = 8.8)、精神科看護平均年齢は8.5年 (SD = 7.5) であった。SOAS-Rの平均総得点は11.3点 (SD = 4.6)、重症度は53.2 mm (SD = 7.6) であった。攻撃的行動の傾向として、了解できる誘因がない (インシデントの25.2%)、叩く、殴るなど手を用いた手段 (46.8%)、スタッフ (65.1%) が攻撃対象として最も多く、49.5%が「脅威を感じた」としており、「患者に話しかける」(64.1%) の制止法が最も多く、続いて「隔離」(18.1%) であった。

【考察】 本調査によるわが国の攻撃性インシデントの頻度は100床あたり年間54件であることが明らかとなった。一般に諸外国では、4.8-22.4/bed/yearで攻撃性インシデントが起きていることが指摘されている。本研究におけるインシデント数は諸外国の報告より少なかったが、一定の頻度で起きていることが示唆された。攻撃的行動の傾向において、諸外国の先行研究と同様に本調査においてもスタッフへの攻撃が最も多く見られた。患者による身体的、言語的攻撃性は患者自身のみならずスタッフにとって心的外傷体験となりかねないため、組織全体による患者の攻撃的行動に関するスタッフ研修や教育の充実が求められる。

統合失調症患者における抗精神病薬の潜在的な心血管リスク に関する解析

○池野敬¹⁾、久木山清貴²⁾、伊藤弘人¹⁾

1) 社会精神保健研究部 2) 山梨大学大学院医学工学総合教育部 内科学講座第二

【背景と目的】 抗精神病薬の多くはQTc延長に関与することが知られている¹⁾。精神科医療においては、複数の抗精神病薬が同時に処方されることが多くあり、薬物動態的相互作用や薬力学的相互作用によって心血管系の副作用のリスクが高まる可能性がある^{2,3,4)}。一般に、薬物相互作用の一部には薬物代謝酵素 (CYP) の関与が知られている。特に抗精神病薬の多くは、CYP1A2、2D6、3A4による代謝が指摘されている⁵⁾。さらに、CYPの基質薬物とCYPを阻害もしくは誘導する薬物との相互作用が報告されている。しかしながら、同一の代謝経路を惹起する抗精神病の併用によるQTc延長の影響は明らかになっていない。そこで本研究は統合失調症患者の全国的な大規模調査データを用いて、CYPを考慮に入れたQTc延長に関する抗精神病薬の影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】 本研究では、日本精神科病院協会医療経済委員会が実施した多施設共同研究での調査データを用いた。本データベースは、2004年4月から2005年3月の間で退院した統合失調症入院患者であり、系統抽出法により抽出した4176名の情報が収録されている。まず、本データベースに掲載されている抗精神病薬を代謝するCYPとQTc延長に関するレビュエのため、医薬品医療機器総合機構のホームページより添付文書の調査ならびにMEDLINEによる文献の調査を実施した。次に、本データベースより研究対象者を抽出するために算入基準として年齢・性別・入院中のQTc値・抗精神病薬の処方情報が記載されている症例とした。本研究におけるQTc延長の定義として、先行研究を参考にQTc間隔が440ミリ秒より大きい場合にQTc延長が起きているとした。抗精神病薬の投与量の定義として、CPZ値として1-299mgを低用量群、300-999mgを中用量群、1000mg以上を高用量群とした。統計解析は、一元配置分散分析、多重ロジスティック回帰分析を実施した。なお本研究は、国立精神・神経医療研究センターの倫理委員会の承認を得た。また、本研究で用いたデータベースはUMIN Clinical Trials Registry (UMIN000010473) にプロトコルを登録している。

【結果】 対象者1578名の平均QTc値は414.5ミリ秒であった。性別を見ると、女性の平均QTc値は419.3ミリ秒と男性の410.1ミリ秒と比べて有意に延長していた。年齢・CPZ・抗精神病薬の処方パターンにおいてはQTc値の有意な延長は見られなかった。ロジスティック回帰分析によるQTc延長のリスクファクターに関する分析では、女性は男性と比べて1.82倍高いことが明らかとなった。一方で薬物代謝酵素に着目すると、CYP3A4で代謝される抗精神病薬の処方方は1.4倍高く、CYP1A2で代謝される抗精神病薬の処方方は0.69倍低くなるということが明らかとなった。

【考察】 CYP3A4で代謝される抗精神病薬の併用は、QTc延長の危険因子であることが示唆された。抗精神病薬の併用は、抗精神病薬の血漿中濃度を高くする可能性がある。これは、併用薬がCYP3A4の阻害作用を起こした可能性があると考えられる。一方で、CYP1A2で代謝される抗精神病薬は、QTc延長の可能性が低いことが示唆された。一般に、統合失調症患者の喫煙率は高いことが知られている。喫煙は、CYP1A2の誘導やQTcの短縮に関与することが指摘されており、喫煙状態と関連する可能性が考えられた。このようなことより、QTc延長は日常的な心電図測定や薬物の血漿中濃度の測定を行うことで、臨床的に重要な薬物相互作用の予測が可能であると考えられた。

¹⁾ Haddad PM et al, 2002; ²⁾ Ito H et al, 2012; ³⁾ Lelliott P et al, 2002; ⁴⁾ Sim K et al, 2009; ⁵⁾ Revyn D et al, 2013

情動調節における内側前頭前野グルタミン酸神経伝達系の役割

- 斎藤顕宜¹⁾、大橋正誠^{1,3)}、山田美佐¹⁾、鈴木聡史^{1,3)}、山下萌^{1,4)}
塚越麻衣^{1,3)}、橋本富男¹⁾、杉山梓^{1,3)}、山田大輔²⁾
岡淳一郎³⁾、関口正幸²⁾、山田光彦¹⁾

- 1) 精神薬理研究部 2) 疾病研究第 4 部
3) 東京理科大学薬学部薬理学教室 4) 東京医科歯科大学医学部

【背景・目的】 近年、内側前頭前野 (mPFC) におけるグルタミン酸神経伝達が情動行動の調節に重要な役割を果たしていることが示唆されている。しかし、その機能や分子メカニズムについては十分に検討されていない。最近我々は、mPFC の細胞外グルタミン酸濃度と無麻酔下における情動行動を同時に測定できる評価法を構築した。本研究では、情動調節における mPFC グルタミン酸神経伝達を介した機序を明らかにするために、電位依存性 Na⁺チャネル作動薬ベラトリンを用いて、mPFC を薬理的に興奮させた時のマウス情動行動へ及ぼす影響を検討した。

【方法】 実験には、C57BL6/N 雄性マウス 6-7 週齢を用いた。マイクロダイアリシ法により、mPFC の細胞外グルタミン酸濃度を定量化した。グルタミン酸濃度は、電気化学検出器付高速液体クロマトグラフィーにより測定した。マウス mPFC に透析プローブを留置し透析液を灌流させ、透析開始から 2 時間後に被験薬物を含んだ透析液を 30 分間灌流させた。情動行動の評価にはオープンフィールド (OF) 試験を用い、薬物灌流開始 20 分後から 10 分間の OF 中心部への滞在時間率及び移動距離率について透析液を回収しながら同時に測定した。

【結果・考察】 mPFC にベラトリンを灌流したマウスは、透析液のみを灌流した対照群マウスに比べ、細胞外グルタミン酸濃度の有意な増加が認められた。この時、OF 試験において中心部滞在時間率及び移動距離率を、対照群マウスに比べ有意に減少させ、不安様行動を生じた。また、mPFC に電位依存性 Na⁺チャネル遮断薬ラモトリジンを用いるとベラトリンのこれら作用は完全に抑制され、電位依存性 Na⁺チャネルの開与が確認できた。さらに、ベラトリンの不安惹起作用は、グルタミン酸非 NMDA 型 (AMPA/kainate) 受容体拮抗薬 CNQX の併用とは異なり、グルタミン酸 NMDA 型受容体拮抗薬 MK-801 の併用において有意に抑制された。以上の検討より、mPFC の NMDA 受容体を介したグルタミン酸神経伝達系が、情動調節に重要な役割を果たしていることが示唆された。現在、情動調節に関わる mPFC のグルタミン酸神経伝達系を介した神経回路特性を明らかにするために、本脳領域に光開口性 Na⁺チャネルを発現させたマウスを作成し解析を進めている。

脂質メディエーター リゾホスファチジン酸の情動行動に及ぼす影響：新規抗不安薬ターゲットとしての検討

- 塚越麻衣^{1,2)}、山田美佐¹⁾、岡淳一郎^{1,2)}、斎藤顕宜¹⁾、山田光彦¹⁾
1) 精神薬理研究部 2) 東京理科大学薬学部薬理学研究室

【背景・目的】 現在、不安障害の薬物治療には、選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) やベンゾジアゼピン (BZD) 系薬物が主に用いられている。しかし、SSRI には効果発現までに数週間を要すること、BZD 系薬物には鎮静や常用量依存等の問題があり、いずれも理想的な抗不安薬とは言い難い。これまで当研究部では、SSRI を 4 週間投与したマウス脳内において発現変化する遺伝子を探索した結果、脂質メディエーターであるリゾホスファチジン酸 (LPA) シグナル伝達系に関連する複数の遺伝子を得た。LPA は多彩な生物活性を有する脂質メディエーターであるが、最近、中枢神経系においても機能を有する可能性が推測されている。そこで本研究では、LPA シグナル伝達系が不安等の情動行動に関するとの仮説を検証するため、マウス脳内に LPA を投与し、種々の評価系を用いて情動行動の変化を検討した。

【方法】 実験には、雄性 C57BL6/N マウス (6-7 週齢) を用いた。試験開始前に一定時間、試験環境下で馴化した後、LPA を脳室内投与し 30 分後に行動薬理試験を実施した。また、LPA 受容体 (LPA₁) 拮抗薬である Brp-LPA の併用により、観察された行動変化が LPA 受容体を介するか否かの検討を行った。脳室内投与の挿入部位の確認は、試験終了後に針挿入位置からヘマトキシリンを注入し、側脳室と腹側第三脳室が染色されているかにより確認した。情動行動の評価は、自発運動量試験、ホールボード試験、高架式十字迷路試験を用いて検討した。

【結果】 自発運動量試験では、LPA を投与したマウスと薬物未処置群との間に、総移動距離に有意な差は見られなかった。ホールボード試験では、LPA を投与したマウスは、穴覗き回数を有意に増加させ、穴を覗くまでの潜伏時間を有意に減少させた。高架式十字迷路試験においては、LPA を投与したマウスは、オープンアーム滞在時間を有意に減少させた。また、これらの情動行動は LPA の濃度依存的にかつ時間依存的に変化していた。さらに LPA による情動行動の変化は、Brp-LPA 併用により消失した。

【結論・考察】 本研究により、LPA を脳室内投与するとマウスの情動行動は変化し、不安様行動が惹起されることが明らかとなった。さらにその変化は LPA 受容体を介して引き起こされていることも明らかとなった。以上のことから、LPA シグナル伝達系が不安等の情動行動に関与することが明らかとなった。また、LPA-LPA₁ シグナル伝達系を調節する化合物が、新規抗不安薬のシードとなる可能性が示唆された。

我が国で実施された救急医療機関に搬送された自殺企図者を対象にした研究の特徴と今後の課題：系統的レビュー

○川島義高¹⁾、米本直裕²⁾、稲垣正俊³⁾、山田光彦¹⁾

1) 精神薬理研究部 2) TMC 情報管理・解析部 3) 岡山大学病院精神科神経科

【背景・目的】 我が国では、自殺総合対策大綱において救急医療機関 (ED) での自殺未遂者ケアの必要性が掲げられており、自殺対策の1つとして注目されている。また、EDに搬送された自殺企図者を対象にした研究が数多く行われてきているが、こうした研究の詳細を系統的に示した報告はない。そこで本研究では、我が国で実施されたこれらの研究の特徴や傾向を詳細に検討することで、今後実施しなければならぬ自殺対策研究について明らかにすることを目的とした。

【方法】 系統的レビュー：これまでに我が国で実施されたEDに搬送された自殺企図者を対象にした研究を網羅的に探索するため、自殺関連語と救急をキーワードとした検索式を作成し、文献データベース (医中誌、Cinii、PubMed、PsycINFO、CINAHL) を用いて検索を行った。さらに、適格基準を満たした研究の引用文献からハンドサーチにより研究を抽出した。本研究の適格基準は、1) 自殺企図後にEDへ搬送となった者を対象とした研究、2) 日本で行われた研究、3) 原著論文、とした。なお、本研究における自殺企図者とは自殺未遂者、自傷行為者 (明確な自殺の意志を伴わない自己破壊的行動による搬送者)、そして自殺既遂者とした。適格基準を満たした研究のうち、研究方法、対象者背景 (精神科診断基準等)、アウトカム等に関する情報を抽出し集計を行った。

【結果】 医中誌およびCinii から3130件、PubMed、PsycINFO、CINAHL から204件、そしてハンドサーチから4件の合計3338件の研究を抽出した。このうち適格基準を満たした研究は合計206件であり、研究方法は、症例集積研究が116件 (56%)、横断研究が80件 (39%)、追跡研究が9件 (4%)、ランダム化比較試験のプロトコルが1件 (1%)であった。症例集積研究と横断研究の多くは単施設からの報告であった。研究対象者は、自殺未遂者あるいは自傷行為者を対象にした研究が111件 (54%)、自殺既遂者は2件 (1%)、両者を混合している研究が93件 (45%)であった。ICDあるいはDSMを用いた精神科診断名が記載された研究は89件 (43%)であった。追跡研究のうち、自殺あるいは自傷行為の再発を評価した研究は6/9件 (67%)であったが、対象者の属性、追跡方法、追跡期間が大きく異なっていた。英語で発表されたものは、206件のうち32件 (16%)であり、残りは日本語で報告されていた。

【考察・結論】 本研究により、我が国では自殺企図者の実態に関するデータ (症例集積研究や横断研究) が既に蓄積されていることが示された。一方、追跡研究や介入研究は少なく、さらに各々の研究方法が異なっていることから、我が国では自殺企図者の予後についてのデータが乏しい現状にあるといえる。今後は、蓄積された観察研究のデータを統合するメタアナリシス研究、標準化された研究方法による追跡研究や介入研究を考案・実施する必要がある。

自閉症スペクトラム児における聴覚性前注意的弁別処理の電位源推定に関する研究

○高橋秀俊、中鉢貴行、小松佐穂子、岡島純子
飯田悠佳子、荻野和雄、神尾陽子

【目的】 自閉症スペクトラム障害 (Autism spectrum disorder: ASD) では、高次の対人認知や言語機能の非定型性のみならず、より低次の知覚処理機能の非定型性についても指摘されており、低次の知覚処理機能の障害と高次の社会的障害との関連、およびその発達的変化を明らかにすることが、病態形成メカニズムを理解する手がかりになると考えられる。聴覚性oddball課題は、児童や動物でも実施可能な単純な知覚情報処理に関する課題で、この課題実施中の前注意的弁別処理に関わる脳波事象関連電位 (MMN) やP3aは、近年精神医学領域のトランスレーショナル・リサーチにおいて、精神疾患のエンドフェノタイプの有力な候補として、国内外で注目されている。欧米を中心にMMNの振幅や潜時をASDと定型発達 (Typical development: TD) とで比較した報告はいくつかあるが、一貫した結果は得られていない。これは、ASDのheterogeneityやASD特性が一般集団の中で連続的に分布すること (Kamio et al., 2013) が影響していると考えられる。また、ASDにおいてMMNやP3aの発生源が非定型かどうかについても、よく知られてはいない。そこで本研究では、ASD児とTD児のMMNやP3aの電位源を評価し、定量評価された自閉症特性との関連について検討した。

【方法】 対象は、知的障害を有さない日本人のASD児8名 (男・女 5.3, 9.7±2.0歳) ならびにTD児26名 (男・女 15.11, 12.0±2.7歳) である。聴覚性 multi-feature oddball 課題として、標準音 (70%) に対して duration・pitch・omission の3種類 (各10%ずつ) の偏奇音を二ホンサンテック社のMaP1155SSS システムを用いて提示し、課題実施中の脳波をBiosemi 64 チャネル脳波計を用いて測定した。各偏奇音に対する加算平均誘発波形から標準音に対する加算平均誘発波形を減算した後、MMN (潜時: 135-205 msec) ならびにP3a (潜時: 250-300 msec) を評価し、eLORETA法を用いて電位源を推定した。さらに、全被験者を対象に、これらの電位源と、日本語版対人応答性尺度 (Social Responsive Scale: SRS) を用いて定量的に評価された自閉症特性ならびにその下位項目との関連を検討した。なお、本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得、全被験者とその保護者に研究の目的と内容を書面及び口頭で説明し同意を得て行われた。

【結果】 ASD児ならびにTD児において、durationおよびpitch oddballに対するMMNとP3aの電位源は、側頭・前頭・頭頂領域など幅広く分布した。Non-parametric voxel-by-voxel regression analysis after logarithmic transformation を実施したところ、SRS total scoreは、右上前頭回におけるduration-oddball MMNの電位源と負の相関を認めた。また、SRS social cognition subscaleは、右下・中・上前頭回におけるduration-oddball P3aの電位源と負の相関を認めた。

【まとめ】 聴覚性oddball課題という単純な聴覚課題で評価された聴覚性前注意的弁別処理に関連する事象関連電位の発生源が、ASD児の脳活動の非定型性と関連する可能性が示唆された。今後は、さらに被験者を増やすと同時に経時的変化についても調べることで、発達的変化や遺伝子との関連などについても検討する予定である。

自閉症スペクトラム障害における表情及び人物認知メカニズムの 発達の変化に関する研究：中間報告

○小松佐穂子¹⁾、高橋秀俊¹⁾、神長伸幸²⁾、岡島純子¹⁾
 荻野和雄¹⁾、中鉢貴行¹⁾、飯田悠佳子¹⁾、近藤綾子²⁾
 柴田奈津美²⁾、馬塚れい子²⁾、神尾陽子¹⁾

1) 児童・思春期精神保健研究部 2) 理化学研究所

【背景と目的】 発達障害の中で特に、自閉症スペクトラム障害 (ASD: Autism Spectrum Disorder) では、顔認知や表情認知の特異性があることが示されている。ASD における表情認知および人物認知の特異性については、これまでそれぞれ個別に検討されており、すでに多くの知見が得られている。近年、健康成人の研究から表情と人物認知間の関係性が明らかになっているが、児童ではそれぞれの認知がどのように影響し合っているのか、そして ASD の顔認知の問題は表情認知が先なのか、人物認知が先なのか、あるいは独立しているのか、といった問いについては答えられていない。そこで本研究は、表情認知と人物認知間の相互関係に焦点を当てて、第 1 に定型発達成人での知見が定型発達児童でも同様にみられるか、あるいは発達の違いがあるのか、第 2 に定型発達児童と比べて ASD 児童での両認知の関係性はどのように異なるのか、そして ASD 児童での非定型性は自閉症症状のどの側面と関連するのかを明らかにすることを目的とした。本報告は、その中間報告である。

【方法】 研究協力者は、ASD 児群 4 名 (すべて男性、9.8±2.2 歳)、ならびに定型発達児群 7 名 (うち女性 2 名、12.6±2.7 歳) であった。刺激画像は、日本人男性 2 名×2 表情 (喜び・怒り) ×2 パターン (口の開閉) の 8 枚の顔画像であった。条件は、判断 (表情・人物) × ブロック (統制・変化) の 4 条件であった。呈示された顔画像について、表情判断では喜びか怒りかを判断し、一方人物判断ではあらかじめ真顔で覚えた 2 名の男性のうち、どちらの人物かを判断した。また統制ブロックでは、ブロック内で呈示される顔画像間で、判断に無関係な情報 (表情判断の場合は人物情報、人物判断の場合は表情情報) が統制されており、変化ブロックでは、その情報がランダムに変化した。実験手続きは、参加者が注視点を 500ms 注視し続けたその 500ms 後に顔画像が呈示され、参加者は顔画像に対して表情もしくは人物を、キーを押すことにより回答した。キーを押すと画像の呈示が終了し、次の試行へと移行した。判断にかかった時間 (反応時間) と回答が記録され、同時に判断時の視線についても計測された。

【結果と考察】 正答時の反応時間について、研究協力者群 (2: ASD 児・定型発達児) × 判断 (2: 表情・人物) × ブロック (2: 統制・変化) の 3 要因分散分析を行った結果、参加者群×判断の交互作用 ($p=0.056$)、判断×ブロック ($p=0.056$) の交互作用が、いずれも有意傾向であった。特に、人物判断において定型発達児よりも ASD 児童の方が違い傾向が見られた。今後、実験を継続し、さらに参加者数を増やしていく。最終的には、ASD の表情と人物認知の関係における発達メカニズムの非定型性を明らかにし、対人コミュニケーションに関わる教育や治療の手がかりを見つめることを目指す。

就学前幼児における自閉症的行動特性と不器用との関連性

○飯田悠佳子¹⁾、中井昭夫²⁾、三宅篤子¹⁾、荻野和雄¹⁾、神尾陽子¹⁾

1) 児童思春期精神保健研究部 2) 福井大学

【緒言】 自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: ASD) の非中核症状として、パレンスや協調運動の悪さなど、不器用と称されるような運動面の問題を併せ持つ症例が多いことが知られている (Kimberly et al. 2010; Jansiewicz et al. 2006)。こうした“不器用”は ASD 児の日常生活行動 (Jasmine et al. 2009) や情緒・行動 (Papadopoulos et al. 2012) にも影響することが報告されており、有効な支援を講ずる上でその実態を明らかにする必要がある。我々は、これまでに、学齢期の一般児童集団 (24,596 名) を対象に質問紙による調査を行い、自閉症的行動特性を多く持つ子どもでは協調運動の困難さ (不器用さ) を持つ割合も高いことを明らかにし、報告してきた。そこで今回は、不器用さに焦点を当てて、① 就学前の幼児においても自閉症的行動特性と不器用さに関連がみられるのか、ディメンジョナルなアプローチで検討するとともに、② 同集団から抽出した幼児を対象に包括的評価面接を実施し、ASD と診断された幼児の不器用さの有無を臨床神経学的に確認することを目的とした。

【方法】 ①：東京都 K 市及び N 市内の保育所・幼稚園に通う 2953 名を対象に、保護者回答による質問紙調査を行った。自閉症的行動特性は、対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale: SRS) 日本語版 (Kamio et al. 2013) を、不器用さについては、発達性協調運動障害質問紙 (Little Developmental Coordination Disorder Questionnaire: Little-DCDQ) 日本語版 (中井らにより現在標準化を行っている) を用い評価を行った。②：①の質問紙調査への回答及び継続協力を同意のあった 463 名から、自閉症的行動特性の程度に選択的に抽出した 72 名を対象とした。精神医学的半構造化面接 (生育歴や家族歴)、知能検査、自閉症診断面接 (Autism Diagnosis Interview-Revised: ADI-R, Autism Diagnostic Observation Scale: ADOS)、身体計測 (身長・体重) を実施した。同時に、微細神経学的徴候について先行研究 (Touwen et al. 1979; 前川, 2007; 柏木ら, 2009; 関ら, 2009) を参照し、直線歩行・片足立ち・上肢内回外・手指連続タッピング・閉眼姿勢保持の 5 項目を選択肢、評価した。

【結果のまとめ】 ①：質問紙の有効回答 841 名 (28.4%) について解析を行った結果、SRS 得点と Little-DCDQ 得点の間には有意な負の相関がみられた ($r = -.49, p < .001$)。すなわち、就学前幼児においても、学童同様、自閉症的行動特性の程度と不器用の程度は中程度に関連していることが示された。②：分析対象の 65 名 (IQ < 70 や先天性神経疾患を有する者は除外) のうち、ASD 群 (7 名: 70.4±3.2 ヶ月, 112.0±7.3cm, 19.3kg) と非 ASD 群 (58 名: 72.7±4.5 ヶ月, 113.0±5.2cm, 19.9kg) における微細神経学的徴候の有無には有意な差はなかった。現段階までの分析結果からは、自閉症的行動特性を多く持つ就学前児ほど、日常生活場面での協調運動の困難さを感じていた。しかし、極端に高い自閉症的行動特性を有する (ASD) 幼児が、微細神経学的徴候をより多く有しているわけではない可能性が示唆された。今後、観察された微細神経学的徴候についてさらに詳しく分析し、その他の臨床症状等との関連性などについてさらに検討を加えて発表する予定である。

どのような睡眠習慣と食習慣が肥満リスクを高めるか

○中崎恭子、北村真吾、元村祐貴、Jakub Spaeti

守口善也、肥田昌子、三島和夫

【背景】

睡眠不足は、眠気や作業ミスを引き起こすだけでなく、摂食関連ホルモンであるレプチンやグレリンの分泌動態や食行動の変化を引き起こし、肥満や代謝異常のリスク要因となることが明らかになっている。また、主要な時計タンパク質の一つであるBMAL1は脂肪代謝の調整因子であるが、夜間に蛋白量が增加するため摂取カロリリーが同じでも夜食はより肥満を招きやすいとされている。ただしこれらの主張の多くは基礎実験や疫学調査に基づいている。睡眠時間と帯（生体リズム位相）や食事時刻には個人差が大きく、“夜食”を実時刻で定義するのは無意味である。そこで、本研究では、成人男性の睡眠習慣および食習慣を詳細にモニタリングし、運動量や摂取栄養素などの交絡要因を十分に調整した上で睡眠および食習慣とBMIとの関係について検討した。

【方法】

調査対象は、成人男性52名（平均年齢33.4±13.1歳）である。被験者は、導入時にMEQやPSQIなど各種質問紙への回答および身長・体重の測定後、2週間におわりに在宅で、睡眠習慣と食事内容を記録した。睡眠記録はオンライン睡眠調査、睡眠表、アクチグラフにより、食事記録は全飲食物の写真撮影による毎日の記録と栄養素調査票（DHQ）により行った。また、ライフコーダーを用いて一日毎の運動量（消費カロリリー）を記録した。在宅調査後、呼吸ガス分析による基礎代謝量の測定と脂質・糖代謝検査のための採血を行った。調査期間における一日あたりの平均運動量、入眠時刻、覚醒時刻、睡眠時間、総摂取カロリリー量、各栄養素摂取量、入眠前3時間ごとのカロリリー摂取量および各栄養素摂取量を算出した。

【結果】

BMIを従属変数に、年齢、基礎代謝量、運動量を調整因子に加え重回帰分析を行った結果、就寝前6時間以内でのカロリリー摂取量（ $\beta=0.356$, $p=0.005$ ）に有意な相関が認められた。一方、入眠時刻、覚醒時刻、睡眠時間など睡眠に関連する項目や総カロリリー摂取量とは有意な相関が認められなかった。

【考察】

本研究の結果、就寝前6時間以内にカロリリーを多く摂取することが、睡眠時間や総カロリリー摂取量と独立して、肥満リスクを増大させることが示唆された。今後はより幅広い年齢層・体重層の被験者を対象として再解析を進めるとともに、血液学的な肥満リスク指標との関連についても検討していく予定である。

日常生活における睡眠負債が肥満に及ぼす神経学的検証

○勝沼るり、大場健太郎、元村裕貴、寺澤悠里、中崎恭子、片寄泰子
北村真吾、肥田昌子、守口善也、三島和夫

【背景】 24時間稼働の現代社会の中で、日常生活における睡眠時間の短縮と、それに伴う肥満へのリスクの関与が数多くの疫学的知見から示唆されており、睡眠負債実験を用いた研究からも立証されている。しかしながら、従来の研究では、恣意的な睡眠時間の短縮や睡眠剥夺といった不自然な介入による検討によるもので、疫学研究によって示されている日常生活における睡眠の負債やそれに伴う肥満へのリスクは示されていない。本研究では、一般的な日常生活を送り、睡眠不足の自覚がない健康者を対象に、日頃の睡眠状態がどのように肥満のリスクへとつながり得るのかを脳機能画像を用いて検証した。

【方法】 15人（年齢20-27歳、 $M\pm SD=22.6\pm 25$ 歳）の右利き男性の健康被験者をリクルートした。まず、2週間の日常生活で、睡眠を通常通りとつってらった後に研究室に来所してもらい、食事画像刺激に対する脳活動を機能的磁気共鳴画像（fMRI）にて測定した（BASE条件）。その後、睡眠実験室において9日間の12時間睡眠条件のシミュレート実験を実施し（SS9条件）、睡眠が充足された状態で同様のfMRI撮像を行った。その後、一晚の全断眠を施行し（TSD条件）、3度目のfMRI撮像を行った。3つの睡眠条件下での食事画像刺激に対する脳活動を比較した。【結果】 まず、食事画像刺激に対して、扁桃体及び前部島皮質の活動を確認した。両領域の活動は、SS9と比べBASEで有意に高くなることを認められ（ $T(14)=4.7$, $p=.001$ ）、BASE状態ですでに食事画像に対する反応が亢進していることが示された。TSDとSS9との比較では、前部島皮質の活動はTSDによって再度高くなっていった（ $T(14)=-3.47$, $p=.003$ ）。しかし一方で、先行研究においてTSDによって活動が高くなると報告されている扁桃体の活動は、SS9との有意差は見られず（ $T(14)=-1.09$, $p=.29$ ）、TSD後でも低値のままBASEの状態に戻らなかった。

【考察】 扁桃体は食事の報酬予測に関与しているとされており、充足睡眠が食事画像に対する欲求を低下させたことを示唆している。また、前部島皮質においては、食事刺激などによる内臓感覚に関与していることから、充足睡眠により内臓感覚の過活動を抑制したと考えられる。さらに扁桃体においては、日常生活から睡眠充足に移行した際に抑制された活動が、一晚の睡眠剥夺でも抑制されたまま元に戻らなかった。つまり被験者の日常睡眠は、一晚の全断眠よりも、食事に対する脳内の報酬予測機能をすでに高めていた。現代人では、実験的・操作的に急性の睡眠負債を負荷せずとも、日常的な睡眠習慣においてすでに睡眠負債が蓄積しており、充足時と比較して食事刺激に対する反応が亢進していた。この結果は、自覚していないレベルの睡眠負債が、食物摂取の過多や肥満のリスクを高める可能性を示唆する。

東日本大震災のメディア報道による 子どもたちのメンタルヘルスへの影響調査

○大沼麻実¹⁾、神尾陽子²⁾、金吉晴¹⁾

1) 災害時こころの情報支援センター2) 児童・思春期精神保健研究部

【背景】 N911テロの後では、テレビでのビル爆破映像を視聴した児童がPTSDになったという研究結果が出ているが、他方、今般改正されたDSM-5では特殊な場合を除き、テレビ視聴によるPTSD発症は認められていない。今般の311震災においても津波映像の視聴が児童に心理的悪影響を与えるのではないかと懸念が、一部の専門家によって指摘されているが、日本での調査報告はない。

【方法】 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部に研究協力者として登録された、多摩地区の6歳児、426名の保護者に対し、2013年2月6日から2013年3月9日にかけて質問紙による郵送調査を行った。質問項目はdemographic feature、震災時とその後の生活状況、子どもによる津波被害の報道映像の視聴内容、その際の子どものよび保護者のストレス反応とその持続時間、映像の視聴に対する親の認識、視聴を挟む震災前後(2010年3月～2012年12月)の子どもの発育・通園状況、震災の1年および2年後のStrength and Difficulties Questionnaire、Social Responsiveness Scale、親の現在の精神状態等である。

【結果】 192名の保護者から回答を得た。震災時に福島県にいた1名を解析から除外した。53.4%が男児、回答保護者の96.8%が母親であった。子どもの90.5%が津波の、77.5%が地震の、52.1%が倒壊家屋の報道映像を視聴していた。視聴直後には20の症状項目のうち、親への過剰な甘え、災害関連の遊び、家族の怪我や死亡への不安、過敏などが30-43.6%に認められた。他に震災映像の忌避、睡眠障害、震災映像の視聴欲求、軽躁なども認められたが、23.1%にはまったく症状がなく、過半数は2項目以下の症状であった。10項目以上が存在した子どもは1.9%であった。保護者では、不測の事態への不安、子どもと離れることへの不安、動揺、過敏などが55-78%に認められた。症状のない者は6.0%、2項目以下の者は21.9%であった。震災動画の視聴数と子どもの反応とのあいだには弱い相関(<0.05)が認められた。現在のSDQに与える影響は、視聴した映像の量ではなく、視聴後の反応であった。

【考察】 ほとんどの子どもが津波、地震、倒壊家屋等の報道映像を目撃していたが、精神、行動面での反応は子どもよりも保護者に多かった。過半数の子どもにはほとんど反応が生じていなかったが、一部に強い反応を示す子どもが存在しており、また震災後の精神健康には視聴の回数よりも、直後の反応が関係していたことから、こうした映像刺激に対して敏感な子どもの一群が存在することが疑われた。

東日本大震災こころのケアチーム活動の把握 —一宮城県、仙台市、福島県の個票調査—

○荒川亮介、渡路子、小見めぐみ、吉田航、金吉晴

【背景】 東日本大震災においては、全国から「こころのケアチーム」が派遣されたが、派遣されたチームによって報告様式が異なり、その活動を全国レベルで評価することが困難であった。本研究ではこころのケアチームの活動実績を統一した項目に基づいて集計し、被災県における今後の活動の基礎資料とし、さらに、今後発生が予想される大規模災害時の精神保健医療体制の在り方を検討する際の基盤とすることを目的とした。

【方法】 宮城県、仙台市、福島県におけるこころのケアチームが行った相談・診療の個人ごとの記録(個票)より、性別、年齢、症状、相談場所の集計を行った。さらに時系列での変化や地域ごとの特性について検討した。

【結果】 宮城県では5664件、仙台市では1673件、福島県では4021件の個票を集計した。性別については、いずれの地域も震災発生から時期による変動は小さく、女性約6割、男性約4割であった。年齢についても、時期による変動は小さく、思春期から成人(16-64歳)と高齢(65歳以上)は約半数程度で、小児(15歳以下)が1割弱であった。症状については、時期による変動は明確でなく、不安症状が約1割、その他の精神症状が約2-3割、身体症状が約1-2割を占めた。不眠は震災発生後は比較的多く認められたが、その後時間経過とともに減少する傾向があった。どの時期も、症状なしが2-3割を占めていた。相談場所については、宮城県全体を見ると、震災発生直後は9割が避難所での対応であり、その後徐々に減少し、仮設住宅、自宅が大半を占めるようになっていた。地域ごとで見ると、仙台市は避難所から3か月後に急激に仮設住宅に移行するのに対し、気仙沼市ではこの経過が緩やかで、3か月以上経過しても避難所が約半数を占めていた。また、福島県では、相双地区を除き、3か月で支援が終了しており、その場所についてはほぼ避難所が占めていた。

【考察】 相談者の性別、年齢、症状については、地域、時期別の明確な差は認められなかったが、相談場所については、地域ごとに差が認められた。今後、このようなデータが被災地での支援活動中にリアルタイムで活用できるようにすれば、避難所活動からアウトリーチ活動へ活動内容のシフトなど、被災地のニーズに合った支援体制を迅速に構築できる可能性があると考えられた。

都道府県・政令指定都市の災害精神保健医療体制の整備状況と DPAT が携行する薬剤リストについて

○吉田航、渡路子、荒川亮介、小見めぐみ、中神里江、金吉晴

【背景】 平成23年3月に起きた東日本大震災では、精神科病院が多く被災する等、既存の精神医療システムは機能不全に陥った。特に、発災後数日の間に、被災した精神科病院の入院患者の移送が必要になる等、精神保健医療に関する対応が必要となったが、全国から派遣された「こころのケアチーム」の支援活動の開始時期は、早くとも発災から1週間後であった。このような「こころのケアチーム」の活動実態を踏まえ、平成25年4月1日に厚生労働省より「災害派遣精神医療チーム（以下：DPAT）活動要領」が发出され（障精発0401第1号）、DPATの運用について都道府県・政令指定都市（以下：都道府県等）の地域防災計画に記載するよう通知がされている。発災後初期から効率的に対応するためには、DPATの運用も含め、災害時の精神保健医療体制を平時より整備する必要があると考えられるが、整備に関しては各都道府県等に任されている部分が多く、全国規模での把握ができていない。そこで、当センターでは全都道府県等に対し、災害時精神保健医療体制に関する整備状況についてアンケート調査を行った（研究Ⅰ）。また当センターでは、準備する資機材等も含めたDPAT活動マニュアルを作成したが、被災地において精神医療を行うために必要な薬剤のリストは、過去には作成されていない。そこで、精神科医を対象に、DPATが被災地で活動する際に必要な薬剤についてアンケート調査を行った（研究Ⅱ）。

【方法】 研究Ⅰ. (1)平成24年度の体制整備状況について：全都道府県等の精神保健担当者を対象にアンケート調査を行った。調査項目は平成24年度のa.災害精神保健医療体制（こころのケアチーム等の災害精神保健医療の派遣と受入れについて）b.災害精神保健医療関連研修の開催状況 c. 平時の準備状況（薬剤・医療機材、標準ロジスティクス関連機材、個人装備）とした。(2)今後の災害精神保健医療体制整備について：平成25年度DPAT研修の参加者188名に対してアンケート調査を行った。調査項目はa. 各都道府県等の災害精神医療に関する訓練体制（局所災害、広域災害）b. 今後の災害精神保健医療体制整備にあたっての災害時こころの情報支援センターへの要望とした。

研究Ⅱ. 平成25年度DPAT研修に参加した精神科医97名を対象にアンケート調査を行った。厚生労働省が作成した「使用薬剤の薬価（薬価基準）」に記載されている医薬品について（平成25年12月13日現在）から、催眠鎮静剤・抗不安剤、抗てんかん剤、精神神経用剤の3群を抽出したもの（成分名と主な商品名）計121種類について、薬剤ごとにDPATが携行する必要性の有無を求めた。

【結果】 研究Ⅰ及び研究Ⅱの回収率は100%であった。現在集計及び分析を行っているところである。

V 平成25年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精 研 所 長 室	福田祐典	研究代表者	自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
精 神 保 健 計 画 研 究 部	竹島 正	研究代表者	「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」内「地域精神保健医療の社会サービスへの統合とその評価・リーダーとなる人材育成に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究」内「自殺の要因分析体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果確認に関する臨床研究」内「早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「精神障害者の重症度に応じた評価手法の開発に関する研究」内「既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究」内「てんかんの地域医療における保健行政的研究、国外調査及び提言（地域保健領域）」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「障害関係分野における今後の研究の方向性に関する研究」内「精神障害に関する研究のあり方の検討」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド」内「国際連携」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究代表者	芸術活動を続けている精神疾患当事者の作品の分析に基づく啓発資料の開発に関する研究	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
	竹島 正	研究分担者	「国立精神・神経医療研究センターの歴史的使命と貢献に関する実証的研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	竹島 正	開催責任者	NCNP・メルボルン大学合同シンポジウム	精神・神経疾患研究開発費 国際研究集会助成	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
竹島 正	代表	第50回精神保健指導課程研修	研究集会助成	公益財団法人 精神・神経科学振興財団	

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	立森久照	研究分担者	「新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究」内「630調査等による精神保健医療福祉のマクロ動向の分析に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「てんかんの有病率等に関する疫学研究及び診療実態の分析と治療体制の整備に関する研究」内「患者調査では把握できないてんかん患者数に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド」内「こころの健康に関する方法論の検討と改善、統計解析」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	研究分担者	「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究」内「重症入院患者の評価方法の開発と統計処理方法に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	西 大輔	研究代表者	「妊婦における心身の健康増進に向けたオメガ3系脂肪酸による無作為化比較試験」	文部科学省科学研究費補助金(若手研究A)	文部科学省
	趙 香花	研究分担者	「精神障害者のホームレス化の予防とホームレスからの脱却に向けた支援システムの開発」	日本学術振興会科学研究費助成事業(科学研究費補助金)外国人特別研究員奨励費	独立行政法人 日本学術振興会
薬物 依存 研究部	和田 清	研究代表者	「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	和田 清	研究分担者	飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査(2013)通称：薬物使用に関する全国住民調査(2013年)	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	和田 清	研究分担者	「高リスク層のHIV感染監視と予防啓発及び内外のHIV関連疫学動向のモニタリングに関する研究」内「薬物乱用・依存者のHIV感染と行動のモニタリングに関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	主任研究者	物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究代表者	いわゆる「脱法ハーブ」乱用者の実態、心理的社会的・精神医学的特徴、ならびにその治療法に関する包括的研究	一般研究助成	社会安全研究財団
	松本俊彦	研究分担者	自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法等に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「脱法ドラッグ」を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の「回復」とその家族に対する支援に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	松本俊彦	研究分担者	様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	SMARPPの実践における課題の明確化に基づく実践ガイドの画策に向けて	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	船田正彦	主任研究者	大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究分担者	「大麻関連化合物を中心とした脱法ドラッグにおける精神薬理作用発現の機序解明に関する研究」内「違法ドラッグの有効性及び有害性の評価」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究代表者	違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究」内「カチノン系化合物の行動薬理学的特性」	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「物質依存症に対する医療システムの構築と包括的治療プログラムの開発に関する研究」内「HIV拠点病院と連携した薬物依存者支援システムの構築と治療プログラムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	嶋根卓也	研究分担者	「違法ドラッグの構造類似性に基づく有害性評価法の確立と乱用実態把握に関する研究」内「クラブイベント来場者における違法ドラッグの乱用実態把握に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「『脱法ドラッグ』を含む薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の『回復』とその家族に対する支援に関する研究」内「薬局を情報源とする処方薬乱用・依存の実態把握に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究」内「インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究」	厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)	厚生労働省
心身医学 研究部	安藤哲也	主任研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	安藤哲也	分担研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」内「機能性消化管障害の臨床評価ならびにCBT開発研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	安藤哲也	研究代表者	「摂食障害のプロテインアクティブアレイを用いた網羅的自己抗体スクリーニング」	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	分担研究者	神経性食欲不振症を対象とした一塩基多型マーカーによるゲノムワイド関連遺伝子解析」	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	菊地裕絵	研究代表者	EMAによる日常生活下での多面的調査を用いた肥満成人における食行動関連要因の同定	日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	菊地裕絵	分担研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」内「日常生活下のストレスの多面的評価法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
児童・思春期精神保健研究部	神尾陽子	研究代表者	就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の变化：地域ベースの横断的および縦断的研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究代表者	日本人における非精神病性的一般精神科外来受診成人患者における注意欠如・多動性障害ADHDの有病率推定のための多施設共同横断研究：J-PAAP研究	受託・共同研究費	日本イーライリリー(株)
	神尾陽子	主任研究者	精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	神尾陽子	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「被災地の子どもの精神医療支援」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実施と評価」内「幼児用対人コミュニケーション行動評価尺度(The Baby and Infant Screen for Children with aUtism Traits (BISCUIT))日本語版の信頼性・妥当性の検証」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	研究分担者	「発達中の脳における麻酔薬の神経毒性に関する包括的研究」内「疫学的研究」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
	高橋秀俊	研究代表者	自閉症スペクトラムの児童における知覚情報処理の発達の变化に関する神経生理学的研究	学術研究助成基金助成金 (基盤研究C)	文部科学省
	高橋秀俊	分担研究者	「精神医学的障害の早期発見と早期介入：児童期から成人期への連続性・不連続性の解明」内「聴覚性驚愕反射の制御機構を用いた児童期から成人期における精神医学的障害の早期発見と早期介入に関わる認知・生理学的病態解明に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	石飛 信	研究代表者	広汎性発達障害の二次障害に対するアリピプラゾールの効果：実行機能の観点からの検討	若手研究B(基金)	文部科学省
	中鉢貴行	研究代表者	自閉症スペクトラム障害児童の限局的反復的行動に関連するバイオマーカーの探索	若手研究B(基金)	文部科学省
	飯田悠佳子	研究代表者	身体活動による子どもの「睡眠の質」改善効果の検討	若手研究B(基金)	文部科学省
成人精神 保健研究部	金 吉晴	研究代表者	大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「災害時地域精神保健医療活動ガイドライン改訂に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「唾液コルチゾール測定によるPTSD症状評価の利点と注意点」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「DV被害親子に対するこころのケアハンドブック開発に関する研究その2 専門的治療に関する専門職トレーニングのストラテジーについて」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「持続エクスポージャー療法(Prolonged Exposure Therapy:PE)の普及体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA)の普及と研修成果に関する検証」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「感情の表出に関する尺度の標準化研究」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究(精神障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	金 吉晴	研究分担者	「東日本大震災における精神疾患の実態についての疫学的調査と効果的な介入方法の開発についての研究」内「IPV被害女性に対する持続エクスポージャー療法におけるPTSD症状とうつ症状の関係」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究 (精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「健康危機管理・テロリズム対策に資する情報共有基盤の整備に関する研究」内「災害時の精神保健医療情報の共有の在り方に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「認知行動療法等の精神療法の科学的エビデンスに基づいた標準治療の開発と普及に関する研究」内「持続エクスポージャー療法 (Prolonged Exposure Therapy: PE) の普及に向けて」	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業)	厚生労働省
	中島聡美	研究代表者	複雑性悲嘆治療の無作為化比較試験による効果の検証およびその治療メカニズムの解明	日本学術振興会科学研究費補助金 【一部基金】(基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	中島聡美	研究分担者	東日本大震災における遺族への心理社会的支援プログラムの開発と検証に関する研究	日本学術振興会科学研究費補助金及び学術研究助成基金(基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	中島聡美	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「犯罪被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	鈴木友理子	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「東日本大震災後の宮城県職員の精神健康状態と関連要因」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	鈴木友理子	分担研究者	「東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究の前向き追及および今後の支援整備に関する研究」内「東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究(小学生を中心に)」	平成25年度国際医療研究開発事業 (疾病研究分野)	独立行政法人 国立国際医療 研究センター
	鈴木友理子	研究分担者	「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」内「重い精神障害をもつ者における震災後の生活実態～相双地域における精神保健福祉手帳所持者に対する調査の実施～」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究 事業)	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	D-サイクロセリンによる睡眠中の恐怖記憶消去学習強化への影響の検討	2010年度医学系研究奨励金 (精神疾患・脳疾患)	公益財団法人 武田科学振興 財団
	栗山健一	研究代表者	恐怖記憶の抑制が睡眠中の記憶強化処理に及ぼす影響の検討	睡眠健康推進機構学術研究 助成	公益財団法人 精神・神経科 学振興財団

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	栗山健一	研究代表者	恐怖記憶の抑制が睡眠中の記憶の強化処理に与える影響	日本学術振興会科学研究費補助金 【基金】(挑戦的萌芽研究)	独立行政法人 日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	脳機能画像を用いた複雑性悲嘆の病態生理の検討	公益財団法人先進医薬研究振興財団平成25年度(第46回)薬療分野一般研究助成	公益財団法人 先進医薬研究 振興財団
	栗山健一	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの作成・評価に関する研究」内「PTSD補助療法としての高照度光照射の有効性の検討」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	本間元康	研究代表者	睡眠が感覚統合学習に与える影響	日本学術振興会学術研究助成基金 (挑戦的萌芽研究)	独立行政法人 日本学術振興会
	本間元康	研究分担者	認知的負荷が多属性意思決定に及ぼす影響の解明:生体信号・生理指標に基づく分析	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
精神薬理研究部	山田光彦	研究代表者	自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	山田光彦	主任研究者	気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究分担者	「転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prg1を介したうつ病治癒メカニズムの解明」内「遺伝子発現定量、神経伝達物質定量解析」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	山田光彦	分担研究者	情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の創製	委託研究開発費	独立行政法人 科学技術振興機構
	斎藤顕宜	分担研究者	「気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究」内「δオピオイド受容体を介した新規うつ病治療法開発のための基盤的創薬研究:情動神経回路に注目した行動薬理学アプローチ」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	斎藤顕宜	研究分担者	「転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prg1を介したうつ病治癒メカニズムの解明」内「行動薬理的解析、神経伝達物質定量解析」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	斎藤顕宜	分担研究者	情動系を調節するオピオイドδ受容体作動薬の創製	委託研究開発費	独立行政法人 科学技術振興機構
	米本直裕	研究分担者	「自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究」内「多施設共同研究における研究計画及び解析計画の立案と解析」	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	米本直裕	研究分担者	「HTLV-I母子感染予防に関する研究：HTLV-I抗体陽性妊婦からの出生児のコホート研究」内「研究デザイン、統計解析計画の作成」	厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成 基盤研究事業)	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「母子保健に関する国際的動向及び情報発信に関する研究」内「メタ解析等科学的根拠集積に関する統計手法」	厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成 基盤研究事業)	厚生労働省
	米本直裕	研究分担者	「周産期医療の質と安全の向上のための研究」内「統計解析計画の作成と実施」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究 事業)	厚生労働省
	米本直裕	分担研究者	「遺伝性神経・筋疾患における患者登録システムの構築と遺伝子診断システムの確立に関する研究」内「遺伝性神経・筋疾患患者情報データベースの効果的活用のための臨床疫学・統計的手法論に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	米本直裕	分担研究者	「モンゴル新生児における経皮ビリルビン濃度の経時的標準曲線の開発と黄疸検査実施法のシステム構築の研究」内「モンゴル新生児における経皮ビリルビン濃度の経時的標準曲線と黄疸検査実施法のシステム開発における方法論的課題に関する研究」	国際医療研究開発費	独立行政法人 国立国際医療 研究センター
	米本直裕	研究代表者	自殺予防介入の評価指標と研究ガイドランスの開発	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究C)	文部科学省
	米本直裕	研究分担者	「療育の評価法の実態把握及び家族アウトカム質問票を用いた療育効果の評価に関する研究」内「調査デザイン統括」	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究C)	文部科学省
	米本直裕	研究分担者	「モンゴル出生コホート研究：グローバルの母子保健課題解明に向けて」内「データ収集、解析手法に関する検討」	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究B)	文部科学省
	米本直裕	研究分担者	「健康関連認知行動の変容を促すモバイルヘルスプログラムの開発と実証研究」内「臨床試験の計画・分析」	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究B)	文部科学省
	山田美佐	研究代表者	転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prg1を介したうつ病治療メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究C)	文部科学省
	山田美佐	研究分担者	「脳を育てるうつ病治療：中枢-末梢両面からの脳神経回路網修復促進機構の解明」内「関連遺伝子発現検討」	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究C)	文部科学省
	橋本富男	研究代表者	ROCK阻害による開口放出機構の調節を介した不安惹起メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助 金 (若手研究B)	文部科学省
	橋本富男	研究分担者	「転写因子MATH2およびその下流遺伝子Prg1を介したうつ病治療メカニズムの解明」内「神経可塑的変化解析」	文部科学省科学研究費補助 金 (基盤研究C)	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
社会精神 保健研究 部	伊藤弘人	研究代表者	身体疾患を合併する精神疾患患者の診療の質の向上に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究代表者	精神科救急医療における適切な治療法とその有効性等の評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	主任研究者	精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	伊藤弘人	主任研究者	精神科医療の質の評価と均てん化に関する研究	共同研究費	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	伊藤弘人	実務担当	メンタルケアモデルの開発に関する研究	臨床研究推進事業	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	伊藤弘人	研究分担者	「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究」内「精神医療の評価に資する標準的な指標の開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「健康日本21（第二次）の推進に関する研究」内「こころの健康・休養に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「向精神薬の処方実態に関する研究」内「ナショナルデータベース調査の解析、薬物相互作用」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	「医療計画を踏まえた医療の連携体制構築に関する評価に関する研究」内「データ解析、指標作成、評価手法の検討」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)	厚生労働省
	山之内芳雄	研究分担者	「精神疾患の医療計画と効果的な医療連携体制構築の推進に関する研究」内「GP連携体制および医療連携モデルの構築に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山之内芳雄	研究担当	平成25年度自殺ハイリスク者対策推進事業（自殺未遂者地域支援体制推進事業）	委託事業	愛知県
	堀口寿広	研究代表者	障害者への虐待と差別を解消する社会体制の構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	堀口寿広	研究代表者	「共生社会」をめざした地域づくり-虐待防止の取り組みを素材にした意見交換会	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野) 一般向け研究成果発表会開催事業)	公益財団法人 日本障害者リ ハビリテー ション協会
堀口寿広	研究分担者	「精神障害者の重症度判定及び重症患者の治療体制等に関する研究」内「重症入院患者のクリニカルパスと地域連携に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省	

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精神生理 研究部	三島和夫	研究分担者	「生涯に亘って心身の健康を支える脳の分子基盤、環境要因、その失調の解明（体[睡眠・リズム]とところの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究）」内「ヒト睡眠・生物時計機能の迅速評価システムの確立と社会還元に関する研究」「生物時計、睡眠覚醒、気分調節を結ぶ双方向的な機能ネットワークの分子基盤に関する研究」	脳科学研究戦略推進プログラム	文部科学省
	三島和夫	主任研究者	睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	三島和夫	研究分担者	「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の变化：地域ベースの横断的および縦断的研究」内「発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入手法の向上に資する研究」内「災害前定点調査計画立案」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「健康日本21（第2次）に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究」内「睡眠指針改定案の作成に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「臨床評価指標を踏まえた睡眠障害の治療ガイドライン作成及び難治性の睡眠障害の治療法開発に関する研究」内「QOL障害の脳病態に関わる機能的MRI研究と睡眠恒常性異常に関わる研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	「向精神薬の処方実態に関する研究」内「レセプト調査、20歳未満データ、薬物相互作用」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	生物時計の障害特性に基づく概日リズム睡眠障害の治療最適化とその効果検証	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
	守口善也	研究分担者	「ストレス関連疾患に対する統合医療の有用性と科学的根拠の確立に関する研究」内「脳機能画像研究、ガイドライン作成」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)	厚生労働省
	守口善也	研究代表者	アレキシサイミアにおける、自己意識・メタ認知に関する統合的脳機能画像研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
守口善也	研究分担者	「発達性「読み」障害に関する臨床的、計算論的、脳機能研究」内「脳科学的研究の統括、特に機能的MRIを用いての文字処理に関連のある脳部分の同定研究に関する統括」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省	

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	守口善也	研究分担者	「心・脳・身体からみた不安の認知神経機構の解明:心理学・精神医学・心身医学の融合」内「内受容感覚が感情に与える影響と不安の形成期所に関わる脳機能画像研究」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
	守口善也	研究分担者	「温熱的快適性の形成メカニズムの解析と衣服内環境評価への応用」内「NIRSやMRIを用いた予備実験」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
	守口善也	分担研究者	「心身症の病態解明ならびに効果的治療法の開発研究」内「脳機能画像研究を用いた心身症の脳内病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	守口善也	分担研究者	「精神疾患の鑑別診断および転帰の予測における近赤外線スペクトロスコピー (NIRS)の有効性に関する研究」内「機能的磁気共鳴画像同時計測による近赤外線スペクトロスコピー (NIRS) 信号のバイオマーカーとしての有用性の検討」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	肥田昌子	分担研究者	「睡眠医療及び睡眠研究用プラットフォームの構築に関する研究」内「同プラットフォームを用いた生体試料を利用した睡眠障害診断システムの検証」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	肥田昌子	研究代表者	睡眠障害における生体リズム異常の分子メカニズム	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	北村真吾	研究分担者	「生物時計の障害特性に基づく概日リズム睡眠障害の治療最適化とその効果検証」内「研究の実施および解析」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
知的 障害 研究 部	稲垣真澄	主任研究者	発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する臨床研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	分担研究者	「てんかんの成立機序の解明と診断・治療法開発のための基礎・臨床の融合的研究」内「てんかんの神経生理学的マーカーの開発と病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	分担研究者	「高次脳機能障害の生物学的基盤」内「精神遅滞・難聴をきたすミュータントマウスによる脳機能障害メカニズムの研究」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	研究代表者	発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)	厚生労働省
	稲垣真澄	研究分担者	生涯に亘って心身の健康を支える脳の分子基盤・環境要因、その失調の解明」内「発達障害児社会認知に関する臨床研究」	脳科学研究戦略推進プログラム	文部科学省
	稲垣真澄	研究代表者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	科学研究費助成事業 基盤研究C	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	太田英伸	研究代表者	液晶型光フィルターを用いた早産児の発達障害を予防する次世代人工保育器の開発.	NEDO科学研究費補助金 (産業技術研究助成事業)	新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)
	太田英伸	研究代表者	光受容体メラノプシンを基礎とした視覚発達メカニズムの解明と光環境設計	文科省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
	太田英伸	研究代表者	メラノプシンを制御する光フィルターを用いた早産児発達障害を予防する次世代人工保育器の開発	光科学技術財団 研究助成金	光科学技術財団
	太田英伸	研究代表者	行動バイオマーカーによるADHD児睡眠障害の評価・治療法の開発	先進医薬研究振興財団 研究助成金	先進医薬研究振興財団
	太田英伸	研究代表者	眼球光受容体「メラノプシン」を基礎とした視覚発達理論の再構築および新生児の発達を促進する照明機器の開発	武田科学振興財団 研究助成金	武田科学振興財団
	太田英伸	研究分担者	「人工血液カクテルによる胎児慢性低酸素症の治療法開発」内「人工血液カクテルの作製」	文科省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	太田英伸	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	文科省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	太田英伸	研究分担者	「光透過性を可変できる保育器応用に資する調光デバイスの開発」内「調光デバイスの作製」	A-STEP フィージビリティスタディステージ 探索タイプ	科学技術振興機構 (JST)
	太田英伸	研究分担者	「調光フィルターを用いた新生児医療への応用」内「調光型光フィルターの作製」	産業技術総合研究所 ナノテク研究助成金	産業技術総合研究所
	軍司敦子	研究分担者	m系列変調法の高度化	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	軍司敦子	研究代表者	コミュニケーション障害の支援に向けた脳オシレーション解析による評価法の提案	科学研究費助成事業 若手研究A	日本学術振興会
	軍司敦子	研究分担者	「発達障害の包括的診断・治療プログラム開発に関する臨床研究」内「ADHDの注意障害の病態生理」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	軍司敦子	研究代表者	脳磁図と脳波を用いた音声コミュニケーションのヒト脳機能研究	生体磁気計測装置共同利用 実験	生理学研究所
	安村 明	研究代表者	ADHD児の病態解明及び検査システムの開発	精神・神経疾患研究開発費 (若手研究グループ)	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	李 珩	研究代表者	人工血液カクテルによる胎児慢性低酸素症の治療法開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
	李 珩	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	文科省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	刑部仁美	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	文科省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	加我牧子	研究分担者	不安行動惹起遺伝子の特定と治療法開発	文科省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	崎原ことえ	研究代表者	ヒトの適応的歩行に関わる神経基盤の解明	学術研究助成基金助成金 (基盤研究C)	文部科学省
	北 洋輔	研究代表者	日常的空間における個体間同期作用の解明と社会性連関モデルの教育支援への展開	日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)	独立行政法人 日本学術振興会
	矢田部清美	研究代表者	異学習環境下での数学的处理の神経基盤とその可塑性機序の解明	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
社会 復 帰 研 究 部	伊藤順一郎	研究代表者	「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業 (精神疾患関係研究分野))	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	「アウトリーチ（訪問支援）に関する研究」内「チーム機能のモニタリング」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」内「総括、対象地区コンサルタンタ取りまとめ」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	「難病のある人の福祉サービス活用による就労支援についての研究」内「事業所及び就農する障害者の職務・課題分析」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)	厚生労働省
	伊藤順一郎	センター長	地域精神科モデル医療センター	精神・神経疾患研究開発費 (専門疾病センター事業費)	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	伊藤順一郎	研究代表者	精神科医療でのリハビリ志向の共同意思決定を促進するPCツールの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	伊藤順一郎	研究分担者	精神障害者への多職種アウトリーチ支援の質的評価用フィデリティ尺度の開発と標準化	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (挑戦的萌芽研究)	独立行政法人 日本学術振興会
	吉田光爾	研究分担者	「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」内「多職種アウトリーチチームの効果評価研究」	厚生労働科学研究費補助金 (難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業 (精神疾患関係研究分野))	厚生労働省
	吉田光爾	研究分担者	「東日本大震災の被災地における地域精神保健医療福祉システムの再構築に資する中長期支援に関する研究」内「総括、活動の概要の記述、成果の取りまとめ」	厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)	厚生労働省
	吉田光爾	研究分担者	「包括型地域生活支援プログラムの効果促進の研究」内「ACTにおけるフィデリティ評価に関する研究」	科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) (基盤B)	独立行政法人 日本学術振興会
	吉田光爾	研究分担者	「精神障害者への多職種アウトリーチ支援の質的評価用フィデリティ尺度の開発と標準化」内「フィデリティ尺度案の作成」	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (挑戦的萌芽研究)	独立行政法人 日本学術振興会

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	佐藤さやか	研究代表者	精神障がい者への就労支援現場で使用可能な評価法の開発と基礎的資料の整備	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (若手研究(B))	独立行政法人 日本学術振興 会
	佐藤さやか	研究分担者	「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」内「認知機能リハビリテーションを用いた就労支援の効果評価」	厚生労働科学研究費補助金 (難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業 (精神疾患関係研究分野))	厚生労働省
	下平美智代	研究分担者	「「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」内「個別就労支援実施機関の実態調査とフィデリティ尺度の開発研究」	厚生労働科学研究費補助金 (難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業 (精神疾患関係研究分野))	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	精神科医療でのリカバリー志向の共同意思決定を促進するPCツールの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興 会
司法精神医学研究部	岡田幸之	主任研究者	司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	岡田幸之	研究分担者	「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」内「医療観察法対象者のモニタリング体制の確立に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	岡田幸之	研究分担者	「刑事責任能力の具体的診断枠組みと精神鑑定のあり方に関する学際的研究」内「責任能力の判断枠組みならびに精神鑑定のあり方に関する司法精神医学の立場からの理論的検討」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興 会
	菊池安希子	研究代表者	幻聴に対する認知行動療法ワークブックの開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興 会
	菊池安希子	研究分担者	「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」内「指定入院医療機関モニタリング調査研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	菊池安希子	分担研究者	「司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究」内「医療観察法制度における各種心理プログラムの現状把握と新たな手法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神 経医療研究セ ンター
	菊池安希子	研究分担者	統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発と効果検証に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	安藤久美子	研究分担者	「医療観察法制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」内「指定通院医療機関モニタリング調査研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	安藤久美子	研究分担者	「刑事責任能力の具体的診断枠組みと精神鑑定のあるり方に関する学際的研究」内「責任無能力とされた後の司法精神医療に関する制度・実情が石器人能力判断に与える影響に関する司法精神医学の立場からの理論的検討」	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤久美子	分担研究者	「司法精神医療の均てん化の促進に資する診断、アセスメント、治療の開発と普及に関する研究」内「生物・心理・社会的諸要因からの多面的な司法精神医学的リスクアセスメント法の開発」	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	安藤久美子	研究分担者	「青年期・成人期発達がいの対応困難ケースへの危機介入と治療・支援に関する研究」内「医療観察法の対象者・裁判事例についての検討」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
自殺予 防総合 対策セン ター	竹島 正		(精神保健計画研究部に記載)		
	松本俊彦		(薬物依存研究部に記載)		
	川野健治	研究代表者	被災地間の対話に関する研究－生活支援員への支援とインターローカルな知見	第2回東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究(2012年度)	公益社団法人 日本心理学会
	川野健治	研究代表者	中学校における自殺予防プログラム“GRIP”の開発	第43回(平成24年度)社会福祉事業並びに研究助成	公益財団法人 三菱財団
	川野健治	研究代表者	自殺と死のイメージスキーマに関する心理学的検討	人文科学, 社会科学に関する学際的グループ研究助成	公益財団法人 サントリー文化財団
	川野健治	研究代表者	自殺への許容性についての心理学的検討と予防的介入	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
	川野健治	研究分担者	「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法に関する研究」内「遺族支援のための情報提供に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	藤森麻衣子	研究分担者	「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための国際的・学際的検討」内「国際的自殺対策の実態、および課題把握のための調査研究」	厚生労働科学研究補助金 (厚生労働科学特別研究事業)	厚生労働省
	藤森麻衣子	研究分担者	「自殺総合対策大綱に関する自殺の要因分析や支援方法に関する研究」内「遺族支援に資する介入法開発に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山内貴史	研究代表者	わが国の大都市部における自殺未遂者の特性	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
小高真美	研究代表者	自殺の危機にあるクライアントの支援に備えたソーシャルワーク教育プログラム開発研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省	
白神敬介	研究代表者	児童相談所が自殺対策に果たす機能とそのため支援ネットワーク構築の検討	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省	

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
災害時 こころの 情報 支援セ ンター	金 吉晴		(成人精神保健研究部に記載)		
	渡 路子	研究分担者	「被災地における精神障害等の 情報把握と介入効果の検証及び 介入手法の向上に資する研究」 内「東日本大震災「こころのケ アチーム」派遣・実績に関する 研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	渡 路子	研究分担者	「大規模災害や犯罪被害者等に よる精神疾患の実態把握と対応 ガイドラインの作成・評価に関 する研究」内「口蹄疫被災にお ける畜産農家・防疫従事者・地 域住民の継続的健康調査」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	渡 路子	研究分担者	「大規模災害時に向けた公衆衛 生情報基盤の構築に関する研 究」内「災害時における要援護 者情報の把握(精神)」	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総 合)研究事業	厚生労働省

精神保健研究所年報 No.27 (通号 No.60) 2014

平成 26 年 8 月 31 日発行

編集責任者
編集委員

福田 祐典
神尾 陽子
藤森 麻衣子
堀口 寿広

発行所

独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町 4-1-1

(非売品)

電話 042 (341) 2711

印刷：株式会社 タマタイプ
